

# 仮面ライダー NEXTジェネレーションズ

大島海峡

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——最新対最古

つかんだ未来に、希望はあったか？

ロイミュードが撲滅されて二十年後の未来。

そこには破滅をまぬがれた平和な未来があった。

仮面ライダードライブこと泊進ノ介の子、泊英志（エイジ）は、自分のやりたいことを見出せずにいた。

そんなある日、チエイス復活用のボディが盗難される。その事件に巻き込まれたエイジは、偶然見つけたシフトカーで変身する。

仮面ライダーダークドライブ。

すでに存在しないはずの仮面ライダーは、二〇三五年の世界で新生した。

同時期、街を騒がす怪人が義賊として称賛を浴びていた。

『黄金仮面』と呼ばれるその怪盗こそがボディを盗んだと考え追うエイジに、彼は傲然と名乗り、仮面ライダーに変身する。

「我が名はギルガメッシュ。この俺こそが、人類最古の英雄だ」

はたして、ギルガメッシュの目的と、その誕生の秘密とは……？

ドライブ、アクセル、そしてゴースト。

次世代の仮面ライダーたちは、最古の英雄に挑む。

※オールライダー物です。

※設定や世界観は原作準拠ではありませんが、エイジの性格ふくめて

本編で語られなかった部分や矛盾点は妄想で補完しています

※本作投稿後に発表された設定についてはパラレルとなっています。

※ほか、オリジナルライダー、怪人が多数登場します

## 目次

プロローグ：二〇三四年 冬

第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(1)	3
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(2)	7
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(3)	10
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(4)	13
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(5)	18
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(6)	21
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(7)	25
第一話：僕の時間はなぜ進んだのか	(8)	28
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(1)	31
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(2)	36
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(3)	40
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(4)	43
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(5)	47
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(6)	52
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(7)	54
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(8)	58
第二話：Gは止まらない／黄金狂時代	(9)	61
間章：暗斗！ 仮面ライダーは何度死ぬ??		65
第三話：疾走の絆	(1)	68
第三話：疾走の絆	(2)	71
第三話：疾走の絆	(3)	75
第三話：疾走の絆	(4)	78
第三話：疾走の絆	(5)	84

第三話：疾走の絆 (6)	88
第三話：疾走の絆 (7)	91
第三話：疾走の絆 (8)	94
第三話：疾走の絆 (9)	100
第三話：疾走の絆 (10)	104
第三話：疾走の絆 (11)	107
第三話：疾走の絆 (12)	112
第三話：疾走の絆 (13)	117
第三話：疾走の絆 (14)	120
第三話：疾走の絆 (15)	126
第三話：疾走の絆 (16)	130
第三話：疾走の絆 (17)	135
第三話：疾走の絆 (18)	138
第三話：疾走の絆 (19)	142
第三話：疾走の絆 (20)	145
第三話までの主要ライダーと時系列	148
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	154
n G (1)	
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	161
n G (2)	
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	164
n G (3)	
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	169
n G (4)	
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	

n G (5) ————— 174

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (6) ————— 180

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (7) ————— 185

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (8) ————— 190

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (9) ————— 194

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (10) ————— 199

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (11) ————— 204

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (12) ————— 208

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (13) ————— 214

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (14) ————— 217

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (15) ————— 222

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (16) ————— 226

第四話：オレがお前で、お前がオレで！ Double Actio

n G (17) ————— 229

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	n G (18)	233
第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Actio	n G (19)	240
間章：金・王・入・都 (1)	間章：金・王・入・都 (1)	250
間章：金・王・入・都 (2)	間章：金・王・入・都 (2)	255
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	258
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	261
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	266
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	270
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	273
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	277
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	281
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	285
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	287
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	292
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	298
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	301
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	304
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	311
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	316
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	320
第五話：夏の終わりのJoker game!?	第五話：夏の終わりのJoker game!?	324

第七話：Next (6)	第七話：Next (5)	第七話：Next (4)	第七話：Next (3)	第七話：Next (2)	第七話：Next (1)	第六話：Dark Night (12)	第六話：Dark Night (11)	第六話：Dark Night (10)	第六話：Dark Night (9)	第六話：Dark Night (8)	第六話：Dark Night (7)	第六話：Dark Night (6)	第六話：Dark Night (5)	第六話：Dark Night (4)	第六話：Dark Night (3)	第六話：Dark Night (2)	第六話：Dark Night (1)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (24)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (23)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (22)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (21)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (20)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (19)	第五話：夏の終わりのJoker game!? (18)
442	437	432	427	422	419	414	407	401	396	390	386	380	375	372	368	363	360	357	351	347	343	339	334	328



第七話：Next (7)	447
第七話：Next (8)	453
第七話：Next (9)	457
第七話：Next (10)	465
第七話：Next (11)	470
第七話：Next (12)	475
第七話：Next (13)	479
間章：フューチャー&パスト (1)	481
間章：フューチャー&パスト (2)	489
第八話：スタートミッション2035 (1)	494
第八話：スタートミッション2035 (2)	498
第八話：スタートミッション2035 (3)	504
第八話：スタートミッション2035 (4)	509
第八話：スタートミッション2035 (5)	513
第八話：スタートミッション2035 (6)	519
第八話：スタートミッション2035 (7)	524
第八話：スタートミッション2035 (8)	530
第八話：スタートミッション2035 (9)	539
第八話：スタートミッション2035 (10)	545
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (1)	549
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (2)	555
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (3)	561
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (4)	566
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (5)	571
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (6)	575

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (7)	580
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (8)	587
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (9)	592
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (10)	598
スピンオフ三部作情報公開！	603
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (11)	606
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (12)	612
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (13)	619
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (14)	628
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (15)	632
最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか (16)	638
エピソード：re   r a y (1)	648
エピソード：re   r a y (2)	652
エピソード：re   r a y (3)	658
エピソード：re   r a y (4)	666
エピソード：re   r a y (5)	671
エピソード：re   r a y (6)	676
エピソード：re   r a y (7)	682
エピソード：re   r a y (終)	691
後日談	695
あとがき	701

## プロローグ：二〇三四年 冬

その年のはじめは、記録的な豪雪だった。

何もかもを埋め尽くし、変化させてしまうような吹雪のなか、一台のジープが一本の山道を進んでいた。

その頭上には、一軒の洋館が建っている。

大きくはあるが、派手ではない。白い屋根が特徴的だった。

その門扉は車の到着に合わせ、自動的にその口を開けた。

軋みをあげてふたたび閉じる門を背に、ジープは停車した。

運転席と助手席から現れた男たちは、荷台のロープを解き、荷物を覆っていたケープを取り払った。

瘦身とやや肥満がちの、好対照の二人組だったが、両人の顔は抱え上げた荷物の重量と、その希少価値による緊張とで紅潮していた。

長持のような形状な鉄箱を、おそろおそろの中に運び入れる。

中は外の極寒の風景とは違い、暖房がきいていた。

そして玄関では、二人の老人が立っていた。

「ついにきたか」

興奮を隠しきれない様子で、片方の老人は言った。

杖をつき、僧侶の紫衣にも似た、派手な衣装を身にまとっている。

そして、彼よりかはいくばくかは若い、頭に丸眼鏡を置いた軍服姿の老人が、作業員たちに荷を開けるように指示する。

リモコン操作で開錠されたそれが時間を立てて開かれ、中身があらわになった。

「O・H！」と、のぞきこんだ年上の老人のほうに奇声じみた感嘆をもらす。

「まるで、眠っているようですね」

と、丁寧ながらも熱に浮かされたように、初老の男が応じた。

「これならば、きつと上手くいく。今度こそ……！ このボディと、この眼鏡アイコンドライバーがあれば……グレートアイにふたたびアクセスすることも夢ではないっ」

震える枯れ手が手にしていたのは、巨大な眼球を模した、黄金の装

置だった。

それを、鉄箱の中で眠る肉体の腹に置く。

その両端から生成されたベルトが腰の裏まで回り込み、その鋼鉄のボディが浮き上がる。

〈ゼンカイガン！ ……………！〉

そのベルトから発せられた音声と共に、全身から青白い雷光が漏れ出た。

やがてそれは、その場にいた誰も彼もを飲み込んだ。

二〇三四年の一月は、例年でもまれにみる記録的な豪雪だった。

そして、ごく局地的な轟雷が落ちた日でもあった。

この落雷により一軒の山家が焼失した。

後日、三人の遺体が発見され、一人が行方不明となった。

さらにその半年後、この事件を追っていたある男が行方不明になる。

そして翌年二〇三五年。三人の仮面ライダーが生まれ、この惨劇を端緒とした事件をめぐって争うことになるうとは、誰も予期しえないことだった。

それこそ、宇宙の神様でさえ。

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（1）

西暦二〇三五年。

飛行機を飛んでいた時空には道路が張り巡り、高層ビルが立ち並ぶ時代。

「こんばんわーみなさん、草吹果子くさぶきかこです！ 二〇三五年八月五日二〇時をお知らせしまーす」

光沢感に満ちた先進的な衣装をまとったアイドルが、各方向から照射される3Dプロジェクターで表示され、ありとあらゆる角度から人々の目を楽しませる。

かつて人々が夢や絵空事と思っていた光景が、先進の技術、まばゆいばかりの夜景として実現していた。

……だが一方で、光が天高くきらめくほどに、下に沈む闇は濃いものである。

進歩した文明にあずかり、豊かに生活をする人々がいる。

逆にそれを犯罪に利用して人々の幸福をおびやかす者たちも、存在していた。

暗黒のるつぼの中、今日もまた、悪の集団がうごめいている。

うばった金品を身に着けながら、路地裏をひた走る。

そんな彼らを見失ったパトカーは、物陰にひそむ彼らを発見することもできず、むなしく通り過ぎていった。

本来はそのパトカーとて、高感度の音波探知、サーモグラフィなどを標準的に搭載していたが、それをジャミングする技術もまた、犯罪者と、そうした需要によって利益を得る技術者たちとの間で、飛躍的な進歩を遂げていた。

……何より。

彼らが持つある超常的なアイテム。

そのうちの一つがもたらす『機械を自在にあやつることのできる能力』によって、彼ら警官隊は翻弄されていた。

「ちよろいもんだぜ」

と、少年とも言って良い若さの男が嗤う。

同調して、その連れの青年たちも、追跡者たちの無能ぶりを嘲った。  
……だが、そこに、三筋の光が矢のように飛来し、虚空に放物線をえがいて青年たちをけん制し、その進路をさえぎった。

紫、赤、緑。

それぞれの輝きの中核となっていたのは、ミニカーのようなガジェットだった。

トラック、パトカー、あるいは重機。

様々な形態を持ったそれらは、特徴的なクラクションを、威嚇するように鳴らした。

「な、なんだこいつら!」

と、乱暴に手で追い払おうとする彼らだったが、羽虫のように自由自在に飛び回るそれらを、たたきつぶすどころか触れることさえもできずにいた。

どこかで指が、鳴らされた。

その音に反応するかのようには、三台の車は一直線に、音をさせた『それ』に向かっていった。

一台の車が、停まっていた。

黒い車体に薄青のラインのコントラストが美しい、流線型の車体。時折思い出したかのように、その表面には緑色の閃光がほとばしる。

だが、彼らが目を剥いたのはその車の近代的なデザインのためではなかった。

車は、あろうことか彼らの頭上に、壁に、垂直に停止していた。

白煙を吐きながらひとりでに運転席のドアが開く。そのドアの裏側を足場に、中から、ひとつの人影が現れた。

ウサギか鬼のように二本に伸びた角。青く鋭くとがった目。

3Dのテクスチャをそのまま分厚い装甲にしたような胸部には、黄色いラインがほどこされたタイヤが斜めがけになっている。

全身の要所には車と同様に青色のラインがかけめぐり、その中心には赤いベルトと、『N』とディスプレイに表示された装置があった。

そのベルトの脇のスロットに、先ほどの三台がみずから収まり、それとはまた別の、黒と黄と青とでカラーリングされた小型車のガジェットが、左手首のブレスレットに固定されていた。

男たちは、頭上から見下ろすこの乱入者が、決して自分たちの味方ではないことを、本能で悟った。

〈SPIDER!〉

〈BAT!〉

〈COBRA!〉

前時代のUSBメモリと背骨をかけ合わせたような、短冊状の装置。それを、彼ら自身の頸部や頭部に叩き込む。

そこから流れ出る毒素のようなものが、男たちを怪物へと変化させた。

巨大な赤蜘蛛をかぶったようなモノ。灰色がかった蝙蝠の顔を持つモノ。紺色のコブラの頭に、両手が蛇尾のようなムチに変化したモノ。

それぞれの音声ウイスパーに応じた、異形の姿に変えた彼らに怖じることなく

〈T1、それも初期のガイアメモリか。そんな骨董品、今時ジャンク屋でも買い取ってもらえないよ〉

と頭上の男は笑った。

そしてドアから地上へと降り立ったその仮面の騎士は、流ちょうな発音で、

〈START OUR MISSION〉

と、つぶやいた。

「やれっ！」

先手をとるべく、コブラの両腕が伸びてしなる。

だが、彼が捕らえようとした胸部のタイヤは、発光して武器を精製した。

銃のグリップと剣先が合体したかのようなその刃が、ムチを斬りは

らう。

その勢いで突貫した彼は、その大本たるコブラの怪人に力任せに剣を連続してたたきつけた。

火花を散らしてもんどりうつ仲間を飛び越え、蝙蝠が飛びかかる。剣を逆手に持ち直し、グリップ部分でくりだしたパンチが、それを迎撃した。

流れるようなモーションでそのまま格闘戦へと持ち込んで、黒い戦士は単純な力量のみで怪人たちを押しまくった。

やってられるか。

そう毒づいて蜘蛛が手から糸を吐き出した。それを頼みに空中へ逃れようとする。

戦士のモニターは、闇夜のなかでもそれを逃さなかった。グリップに護られた引き金を動かすと、先端から光の弾丸が射出され、それを撃墜した。

「なんだ……なんなんだよ、お前は!」

悲鳴まじりのくぐもった声でそう問う彼らをまるで気にせず、慣れた手つきで、腰のイグニッションキーをひねり、ブレスレットのボタンを押した。

〈NEXT!〉

腰のベルトから、機械的な男の低音が響く。

仮面の戦士自身が応えたのは、ただの一語。

〈仮面ライダー〉

という、名乗りだけだった。

そして輝度を最高潮まで高めた剣光が、空間を一閃した。



## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（2）

最初、それはその概念さえ存在しなかった。必要がなかったからだ。

だが、物をやりとりするという文明が生まれてからは欲望が生まれ、欲望が盗難といった犯罪を呼び、いつしか人は大切なものを守るために、扉を作り、カンヌキを作り、小さな鉄片を差し込んで開閉を許すカラクリを作った。

それだけでは犯罪は防ぎきれず、やがて小さな鉄片はカードやナンバーや記号に置き換わり、その家主自身が持つ指紋や音声、網膜へ。気密性と利便性は、着実に進化している。

それは、東京の郊外の、『泊』<sup>とまり</sup>という表札をかかげた一戸建ての家でも同じことだった。

三十五年のローンを組んで新築として購入されたこの家は、主人の昇進に合わせる形で、指紋認証システムを玄関に採用することになった。

「まったく、警察官の家に入る泥棒なんているかよ？」

と最後まで渋っていた父を、

「ガレージの車、持っていかれてもしりませんよ。というか、だいぶ前に仕事場でも盗まれましたよね、ミニカーとかキャンディとか」

と母が冗談めかしく説得し、動揺させた。この場合、肝が太いのはどちらなのか。

時折思い出したように、母は父に敬語を使う。

その子たる青年は、その時にはどちらかと言えば取り入れ賛成寄りだったのだが、今この時ばかりは、後悔していた。

時刻は深夜。星と、天を突くほどのビル群の明りが、小ぶりな一軒家に降り注ぐ。

その下で、彼は認証システムに、端正に類するその顔をのぞかせた。  
へ泊英志様、お帰りなさいませへ

普段は気にしない人工音声の出迎えも、夜の静寂も相まって大きく聞こえる。

あわててその声が出る口を押さえ、足音を忍ばせながら玄関に侵入。

革靴を脱いで、揃えてから二階の自分の部屋にもどろうとする。

だが、その手首に、輪のようなものが、ガシヤリという音とともにかけられた。

「へっ?」

呆気にとられるうちに周囲の電気がつけられて、眉間にシワ寄せした女性の顔が、現れた。

「確保」

と、表情を変えずに彼女は、母は言った。

青年……泊エイジの手首を拘束していたものは、母の霧子きりこがつかんだ手錠だった。

「うわっ! ちよつとやめてよ! っていうか、ホンモノじゃんこれ!?!」

「こんな時間までほつつき歩いて!」

エイジの抗弁を無視して、霧子は怒号を響かせた。

声量はそれほどでもないが、有無を言わせない威圧感と目力が、彼女にはあった。

「お父さんが帰ってきたらちゃんと叱ってもらいますから、覚悟しなさい」

「やだよッ、僕もうガキじゃないんだしき。大学生だよ!」

「だったら、それらしいふるまいをしなさいッ、私が貴方ぐらいの歳にはね」

などとぶつくさ言いながらも、旧式の金属の鍵で手錠を外してくれ

る。階段をのぼりながら逃げようとしながら、手首に跡が残ってないかを確かめた。

「さんざん聞いたよ。ロリ少女?」

「ロイミュード」

「そう、それぞれ。その悪のロボット相手に、父さんたちや叔父さんたちと戦ってたんだろ? さんざん聞かされたよ」

「それに、ロイミュードが悪なんじゃなくて」

その続きも聞かされた。

悪の心は、その危うさは、常に人間の側にあると。

聞き流していた言葉だったが、今となっては身をもってわかる。

「で、結局なにしてたの？」

逃げようとするのを一度やめて、子は母に、手短に答えたのだった。

「ドライブだよ」

最低限の家具や勉強道具しかない、自分の部屋。

幼いころは父にならってミニカーがひしめいていた。高校のころはギターなどが飾られていたが、どれも成長とともに遠のいていった。

今、十九歳の青年となったその部屋の主には、ただ一組のベルトとガジェットがあればよかった。それで充実していた。

鞆に押し隠したそれを、手に取って見下ろす。

「わかってるさ。僕だって、今は父さんたちと同じ仮面ライダーだ」

こぼした小さなつぶやきは、誰に聞かれることもなかった。

ただ、そのことに対する寂しさは、ほんの少しだけあった。

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（3）

——三ヶ月前。

久留間ドライビングスクール。ロビー。

改名と改築をしてしばらく経過したこの施設では、洗練された設備と、徹底したカリキュラム、一流の教習車の恩恵にあずかり、日夜多くの運転手を輩出していた。

その日も、知識、運転技術、そしてメンタル面でのテストを無事にパスし、一人の若きドライバーが、誕生した。

「僕は今、免許を持っている」

〈なんだそりや〉

端末越しに、声を低めておどけると、叔父の呆れたような声が聞こえてきた。

だが、いつもの底抜けに明るい調子に戻って、

〈その口ぶりだと、無事合格したみてーだな。おめでとさん〉

と労ってきくれた。

〈さっすが、進兄さんの息子。……そっかあ、あのひとも、我が子の助手席に乗るときが来たのかア〉

という感慨深げなセリフは、どうにも気に入らなかったが。

「父さんは関係ないから。っていうか僕、自動操縦オートに全部任せるつもりだし。今時手で運転してるのなんて、旧車くるまオタクの父さんぐらいなもんでしょ」

進歩したAIの普及により、自動運転機能を取り付けられて十年以上が経つ。二〇一七年の夏に公道における試運転が成功し、そこから爆発的に普及していった。

その間にも人工知能は進化を続け、今や自分でハンドルを握って運転するよりも、車自体の判断に任せるとするのが大半だ。

オートの導入前後と比べても、事故率は劇的に減少していた。

自律した機械生命体ロイミュードと戦っていた父たちにとっては皮肉なことだろうが、これも時代の流れというものだろう。

〈冷めてるねえ。反抗期ってヤツ？〉

と、叔父は微妙な距離感となった親子関係に容赦なく突っ込んでくる。だが、そこに刺々しさはない。

それを言えば、「これも人徳」などと叔父……詩島剛しじまごうその人は返すだろうが。

ふだん警察の仕事で家にいない父より、よほど接しやすい相手ではあった。

へまあ何はともあれ、これでお前も大人の仲間入りつてワケだな」

「うん。ありがとう、叔父さん。今度車買ったらさ、家まで遊びに行くよ。令子れいこ叔母さんにもよろしくね」

そう締めくくって、通話を切る。

そして、真新しい免許証を、ガラスの壁越しに太陽にかざしてみせた。

微妙にひきつった顔写真が、自分自身を見返していた。

あらゆるものがデータ化され、記録され、認証も即座にできるようになって久しい。そんな現在においても、みずからの身分を証明できるものは、こうして形に残しておくものらしい。

もちろん、「大人の仲間入り」と言われて悪い気はしない。

(でも、その大人つてのになつてやりたいことが、僕にはないんだよなあ……)

かつて世界を静止の危機から救った英雄、泊進しんのすけノ介。

その父自身が祖父英介えいすけにあこがれて警察官になったように、自分もその道に進むだろう、と周囲には目されているようだった。

だが、そういう予想、あるいは期待が逆に、エイジを反発させ、そういう意欲から遠のかせていた。

なりたくないわけでもない。父や父の家業を否定したいわけでもない。ただ、漠然と流されるのがいやだった。

そう言っても、直接拒絶を口にしたわけでもない。突っぱねてまでやりたいことが、見つからなかった。

「脳細胞が、アイドリング中、つてか」

ため息をこぼして、免許証を上着のポケットへとしまいこもうとする。

だが、その脇を、一陣の風がすり抜けていった。

それはエイジの手から免許証をかすめ取っていった。

「ッ!?!」

自分の手の仲の感触がなくなっただけに驚いたエイジは、あわててその行方をさぐった。

そして、目の前に浮かんでいたものに対して目を疑った。

自分から免許を奪った存在。それは、一台のミニカーだった。

黒と黄の、独特なツートーンのカラーリングで、当たり前のように、免許証とともに虚空に浮き上がっている。

呆氣にとられていたエイジだったが、それが遠のいていくのを見て、あわてて後を追った。

その姿が、周囲の人間に奇異な目で見られている。ただそれはエイジ本人に向けられたもので、その車自体は高速で、かつ変則的な軌道をえがいて人々をかいくぐっているせいだ、視認されてはいない様子だった。

自分がマヌケな姿をさらしているという羞恥心もあいまって、エイジもまた、それに追いついてきつきと取り上げようとする。その足は、小走りから疾走へと変わっていった。

その車……シフトネクストスペシャルは、まるで彼を誘うかのように、光の放物線をえがいて闇の通路へと向かっていった。

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（4）

「このー」

精一杯手を伸ばす。感じるふた通りの、たしかな手ごたえ。

手の中に収まった車型のガジェットは、今までの暴走が嘘のように、ピタリと大人しくなった。

と同時に、エイジ自身もまた、奇妙なフィット感を覚えていた。

その形状が、かつて父たちが『変身』に使っていたシフトカーという存在は知っている。何度も、おとぎ話のようになり返し聞かされた。そして自分でも、目を輝かせて当時の記事を見聞きした。

だが、今手の中にある、そのシフトカーと酷似したものはそういうレベルのようなものではなかった。

まるで細胞のひとつひとつが吸い付くように、なじんでいる。磁力のように、強烈に惹かれ合っている。

……あるいは、おたがいに運命を感じ取ったかのように。

（それはそれとして）

周囲を見回せば、そこは教習や試験に使われていそうな場所ではなかった。

冷静さを欠いて無我夢中の追走劇のなか、いくつか立ち入り禁止の札や、通ってはいけないエリアを、通過、したような……

その事実を思い返し、気まずさが胸に去来する。

警備員の制止とか、電子的な施錠はされていなかったように思えるが。

埃の積もった場所は、まるで宇宙ステーションのように円形にかたどられた一室だった。

用途不明の機材や設備が並び立ち、前輪と銃、あるいは車のドアやハンドルが剣や銃に合体したようなものなど、これまた製作者のセンスを疑いたくなるようなメカが机の上に置かれている。

どうやらここは、運転試験場を隠れ蓑にした、誰かの実験場、研究所、工房といったところか。そんな発明品の中でも一際目を惹く存在があった。

『それ』には手があり、足があった。

目があり、鼻があり、口がついていた。

だが、全身を覆う鋼の皮膚と胸に取りつけられた空白のナンバープレートらしきものが、そこから一気に人間らしさを失わせていた。

腰には赤いベルトと銀色のコンソールが、左手首には奇妙な形のプレスレットがあった。

「ロイミュードのボディ……スタインベルト式のドライバーとシフトプレス……？」

自分とも決して無関係ではないものが、どうしてか、この久留間の運転試験場に集結していた。

戸惑う彼の脇を、浮遊物が通過していった。

シフトカーではなかった。それはまるで、眼球のような不気味なガジェットだった。

「うわあっ!？」

おどろきのけぞる彼を嘲るように周囲を飛び回ったそれは、銀色の機械の肉体へと向かっていく。

ナンバープレートをまるで入り口にするかのように、飲み込まれていく。

その異様な光景に啞然とするエイジの前で、何も書かれていなかったナンバープレートに、釘で刻んだような不気味な字体で、

「1002」

……という、番号ナンバーが浮かび上がり、その両目が青白い光を放ち、そして、動き出した。

「なっ!？」

ゆっくりと歩き始め、自分につながれていたコードや機材を強引に引き剥がす。断続的に鳴り響くアラームが、これが異常な事態であると饒舌に知らせてくる。

異音をあげてぎこちなく動いた右手が、腰のベルトをいじる。

だが、その動作にベルトのシステムは反応しない。

「……むむ」

とわずかにうなったそれは、今度はエイジへと視線を向けた。正し



くは、エイジの手にしたシフトカーに。

「悪いが、それを渡してもらおう」

人間の言葉で、はつきりと伝えるロボット。その腹から、ベルトが弾け飛んだ。

だが、その裏側には見たことのない、まったく別の意匠のドライブバーが存在していた。

スタインベルト式の機械的な外見とは対照的に、青白い、目玉の妖怪を想わせる不気味な中心核。そのフタを前後に押し開ける。

先ほど自身の機体に入っていたはずの、黒い目玉がその手に収まっていた。横合いのスイッチを押し、ドライバーに挿入する。

「アーイー・バッチリミナー！ バッチリミナー！」

まるで歌うようなシークエンス音の中、ドライバーから現れた黒いパーカーのようなものが踊るように飛び回り、エイジを突き飛ばし、そしてロボットのシフトブレスを弾き飛ばした。

ロイミュード……いやそこに憑依した何者かは、右腕を斜めがけに突き出した。そこから大きく時計回りに旋回させると、逆の手でレバーを左右させた。

「変身！」

「ヘカイガンー」という甲高い音声とともに、浮遊霊のように漂っていたパーカーが両腕を天へと突き出したロボットに覆い被さる。

まばゆい光が明滅したあと、その姿は大きく変化していた。

胸には1002のナンバープレートに代わり、赤紫の目玉模様が描かれている。そこから骨のようなシンボルが、黒ずんだ肉体へと伸びている。

白い顔には、炎のような輪郭の黒いアイ。平面的なそのマスクを、彼の指が大見得を切るようにツルリと撫でる。

両指を絡ませるような仕草のあとパーカーを取り外すと、鬼にも似た一本角があらわになった。

「仮面、ライダー……!?!」

エイジの口からこぼれたのは、伝説の仮面のヒーローたちの総称だった。

だが目の前の禍々しい姿は、どう見ても正義の味方のもではない。まして、自分の父たちが生命を賭けて封じようとした技術を、奪おうとしている。

…  
そしてこの怪人を自分がここまで呼び寄せてしまったのだったら

彼の周囲には、ベルトとシフトブレスが散らばっている。

その手の中には、シフトカーがある。

それらの視覚情報をつなげれば、自分の使命は本能で理解できた。そう自覚した瞬間、エイジの頭と心臓が火を入れられたように熱くなった。今までに感じなかった興奮をおぼえる。

腕を伸ばして自分からシフトカーを奪おうとする怪人から、転がって避ける。

逃げた先にあつたシフトブレスを手に取り、腕に装着してから弾き飛ばされたベルトへと行き着いた。

手順は、ニユースのアーカイブで見た若き父の姿を見て知っていた。

掴んだドライバーを、勢いをつけて腰に回す。

ドライバーウェビングと呼ばれる繊維部分が、エイジの体格に合わせて調整される。

アドバンスイグニッションをひねると、内部のエンジンは正常に起動した。

シークエンス音とともに、セントラルフェイスというディスプレイに、リングのようなマークが表示された。

シフトブレスに、シフトカーをセットする。

その直前、今からひとつ走り付き合ってもらう『相棒』に、低い声で語りかけた。

「START OUR MISSION」

シフトランディングパネルが乗せられた車の情報を読み取る。

「変身……」

〈DRIVE! TYPE……NEXT!〉

転送されたライダーのデータが物質化し、両腕をT字に出したエイ

ジを包み込む。上空に空間が揺らぎ、タイヤが斜めがけにはまり込む。

雷光にも似たきらめきとともに現れたのは、敵と同じく、闇夜に身を包んだかのような、黒い仮面ライダーだった。

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（5）

警報鳴り響き、赤いランプが点滅する中で、二体の黒いライダーが対峙する。

相手の面越しに映り込む異形の姿となった自身を、エイジは、

「……ドライブ……」

と呼称する。

「やむをえまい。渡さんというのであれば、少々、痛い目を見てもらうぞ」

しがわれ声で幽鬼ゴーストは言った。

その手には、どこから呼び出したものか、大剣が握られていた。それを大きく振りかぶってきたので、エイジはとっさに身構えた。

だが、彼の危機を察してか、彼の装着した装甲のタイヤから、似たようなカラーリングの武器が形となって右手に転送される。

銃とガントレットと短剣が融合したような武器。カラーリングは、自身の今の姿に合わせられている。

とっさに逆手でつかんでしまったので、そのまま剣にグリップ部分をぶつけて受け止める。

受け流した初太刀が、床の鉄板を切り裂いた。

前のめりになった相手の胸の紋章めがけて、今度はエイジのほうから一斬を見舞った。

「ぐっ!?!」

火花を飛び散らせたゴーストに追い打ちをかけるも、それは防がれた。

反撃を食らい、エイジは間合いをとって後退した。

それからは、剣撃による応酬がつづいた。

基本的なスペックはこちらが上のようなだったが、相手にはおのれの装備に対する慣れと、ある程度の戦闘経験を感じさせた。

子どもの頃、父や叔父とたわむれついでに習っていた格闘術とはモノが違う。

それらの要素を差し引きすれば、手数でもパワーでも、五分と五分

の戦いだっただ。

だがお互いに共通して言えることは、こんな障害物だらけの狭い場所では、十分に力を出せないということ。

やがてこの場に駆けつけるであろう誰かに、自身の姿をさらしたくないということ。

その結論には、ほぼ同時にたどり着いたらしい。

刃をまじえて競っていたが、反発する磁力のように、お互いに退く。

ドライブは、イグニッションキーをひねる。

ゴーストは、剣の付け根の目玉に、ドライバーの目玉を読み取らせる。

〈ダイカイガン、ガンガンミナー！ オメガブレイク！〉

〈NEXT！〉

ゴーストの背の空間に、目玉の紋章が大きく浮かび上がる。

ドライブの握る刃に、電光がほとぼしる。

それぞれのエネルギーをそれぞれの刃に、局所的に集中させた必殺の一撃を繰り出す。交錯し、お互いを相殺しながら閃光を飛散させた。

その光が収まった後に残されたのは、

「……消えた……」

とつぶやくエイジと、散乱した機材やガジェットのみだった。

その時、背後から女性の悲鳴が聞こえてきた。

「ダ、ダークドライブ!?!」

と声を張り上げた白衣の彼女の顔が見覚えがあるものだったので、エイジの対応はワntenポ遅れることになった。

その間に、彼女は床に散らばっていた銃型のガジェットの銃口を向けた。

エイジはあわてて両手を挙げた。

「ちよっ、待ってよ!?! 僕だよ僕!」

腕からシフトカーを引き抜き、変身を解く。

だが、彼女にとっても見知った顔が露わとなっても、彼女は警戒心は薄れない。

やがてそのまま見つめ合っていたが、ややあって、

「ひよっとして……ホンモノの、エイジ君？」

奇妙な問い方をする年上の女性に、泊英志は重々しくうなずき、逆に質問を返したのだった。

「りんなさんこそ、どうしてここに？」

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（6）

エイジの父、泊進ノ介は仮面ライダーである。

いや、正確には仮面ライダーだった男だ。

さまざまな媒体でもって、千差万別の姿に変身して悪と戦う異形のヒーロー。それが仮面ライダーだが、その多くは「Friend of a Friend」……人づてに聞いた都市伝説の一種として語られており、その存在や正体は闇の中である。

だが、進ノ介の変身していた仮面ライダードライブは、その中でも公的にその存在が肯定され、正体も世間に公表されている異例のケースと言えるだろう。

2015年、人類に宣戦布告した機械生命体ロイミュードに対抗するべく、父たちは立ち上がった。

仮面ライダードライブ

仮面ライダーマツハ

仮面ライダーチェイサー

三人の仮面ライダーたちはロイミュードとの激闘を制し、その裏で暗躍していた悪の科学者、蛮野天十郎の野望を打ち砕いた。

彼らをサポートしていたのが、警視庁に設置され特殊状況下事件捜査課、通称『特状課』である。

その中で技術面、開発面で一役を担っていたのが、この追田……旧姓沢神りんだった。

「でも驚いたよ。まさかノーベル物理学者が、こんな場所にラボを構えてるなんて」

「驚いたのはこっちよ。警報に気付いて来てみれば、研究所はこの有様だし、サイバロイドボディの試作はないし、ダークドライブはいるしさあ」

ガレキの山と化した研究所内。

一応人除けはされているのか、これ以上の外部からの侵入はなさそうだった。

被害をまぬがれた電気ケトルで淹れたコーヒーをなみなみと注い

だマグカップを、エイジはりんなから受け取った。

四十オーバーになった今でも十分に美人と呼べる顔立ちだが、白衣の下のサイケデリックな柄のシャツといい、爆発したような髪型といい、そのセンスはかなり独特だ。机に置かれた『ドア銃』だとか『ハンドル剣』だとかいう装備の造形も、納得がいくというものだ。

……もつとも、そのまんまな呼び名は父の命名だったが。

「で」とりんなは自分のカップを手に取りながら、すすけたイスに腰かけた。

「何から話したらいいかな」

「じゃあ……この場所って、なに？」

「そうねえ、まずはそこからかしら」

おたがいにまず一口、コーヒーをすすする。

「だって、コア・ドライビア関連の技術は事件以降すべて凍結されてるはずでしょ。それが、こんなに……」

エイジはそう言うってから、周囲を見渡した。

先ほどの戦闘で散乱こそしているものの、間違いなくあの眼玉が憑依したのは、本来データであるロイミュードが現実世界で活動するのに必要な素体。ここにある装備だって、かつては進ノ介や叔父の剛が使っていたものだ。

プロトゼロをふくむロイミュード全一〇九体がすべて消滅した後、特状課もその役目を終えて解散した。

クリム・スタインベルトもまた、自身の意識を転送した変身ベルトごと、悪用をおそれて地下深くに封印した。

いつか、人々の幸福のために、そのテクノロジーが活用されることを願いつつ。

ロイミュードと人間が、和解して友人となれる日を想って。

そして相棒である泊進ノ介との再会を約束して。

「これは、その約束を果たすための施設。昔のツテで、新設した久留間運転試験場の近くに、かつてのドライブピットと似たようなスペースを作ってもらったの」



「なんで？ りんなさんなら、もつと良いところで大々的にできたでしよ」

「そうねー、まああの後も色々起こったからねえ」

ロイミュードや蛮野が滅んだ後も、その残滓を悪用しようとする存在によって、事件は続いていた。

時空のゆがみ、あるいはバタフライエフェクトによるロイミュードの復活。

コア集積装置による上級ロイミュード、ハート、ブレン、メディックのコアの一時的な復活と融合。

バグデータの集合体、通称ナンバー5886の出現。

幾度となくよみがえったナンバー005による、連続殺人事件。

「……まだロイミュードの恐怖がぬぐいきれない中、立て続けに事件があつたからね。まだ、ロイミュードや重加速の復活には、今でも疑問視する声強いだよ」

「だから、こんなところでこっそりとやってる？」

「進めとけるだけは、進めとかないと。チェイスが復活したときに、剛くんがヨボヨボのおじいちゃんやんで誰だかわからなくなつてたら困るでしょ？」

そのチェイスというのも、父や叔父の昔話でよく聞く名だ。

人間を守るために作られたロイミュード。それがプロトゼロことチェイスだ。

一時期は魔進チェイサーという名でロイミュード側に操られていたが、その洗脳が解けたあとは頼もしい味方として……危機に陥った剛を守って、自爆した。

今でも叔父たちはそのことを気に病んでいて、良識的なロイミュードの復活第一号として、彼のコアの再現を目指している。

「人工AIヒュプノスと剛くんとか求きゆうちゃんのおかげでだいたい終わってるのよ。あとは、お偉いさんの認可と、細かい調整だけ。これ以上ないカンペキなボディを用意し……たはずなんだけどオ……」

りんなは傍らの機材の断片……チェイス復活のためのボディが取り付けられていたはずの枠組みにすがって、水泡と化した自分の努力

に泣いた。

「ごめん」と消え入るように謝ったあと、ごまかすように話題をかえた。

「それじゃ次の質問。このベルトとシフトカー。これもりんなさんが作ったものなの？」

りんなは顔を上げて、小じわの寄った目でそれら装備と……エイジ自身をきびしく見た。

理由は分からないがとりあえず委縮する彼の前で、

「……ベルトとシフトブレスに関しては、そう。と言ってもそれ、正しくはコアを集積するためのものなんだけど。まあハートも変身できてたし、基本はデータを移し替えた後のクリムのと構造と同じだから……そっか、だからそのシフトカーも読み取れるか」

一人合点したようにうなずく女科学者に「どういうこと？」と説明をもとめる。

言いにくそうに口元をゆがませた後、彼女はまず端的に、その出所を説明した。

「それはネクストスペシャル。こことは別の、二〇三五年のシフトカーよ」

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（7）

二〇三五年は、本来であれば破滅の世界だったという。

人為的に仕組まれていたプログラムによって、二〇一五年の八月、ドライブが暴走。

その結果、ロイミュードが勝利していて人類を駆逐。支配した未来が待っていた。

「ウソでしょ？」

とエイジはぬるくなったコーヒーカップを握りしめたまま、半笑いを引きつらせた。

だが、いつもはノリの軽いりんなが苦い顔をしていたので、素直に笑い飛ばすことができずにいた。

「……ま、あいつの言ったことがどこまで真実だったかは、わからずじまいだったけど。でも、あの事件で破壊されたドライバーを調べたら、たしかに、異様なプログラムが組み込まれていた形跡があったの。たぶん、クリームが蛮野と004に捕まったときに、書き加えられていたんでしょね」

だが、その地獄のような未来から、野心を持って一体のロイミュードが時間を遡行して、その『運命の日』にやってきた。

ロイミュード108。固有名はパラドックス。

未来で目覚めたそいつは、二〇三五年で『当時のドライブの装着者』を倒して擬態。ベルトとネクストライドロンを強奪し、仮面ライダーダークドライブとしてタイムワープした。過去に眠っていた自分をよみがえらせて融合するために。

……自分主導の、永遠のグローバルフリーズを引き起こすために。ひどく言いにくそうにしていたのは、そういった込み入った事情を語るむずかしさからなのか。

なぜだかエイジには、もつと重要なことをはぐらかされている気がした。

それを追及する前に、あるいは追及されることを恐れてか。りんなは立ち上がって、明るい笑いにもどった。

「でも、あなたのお父さんが歴史よりも早く108を倒してくれたおかげで、未来はこうして平和になった」

一時は108の擬態に欺かれ、クリムの意識ごとベルトを破壊してしまった進ノ介だったが、108の放棄した未来のベルトにそのバックアップを移し替えてドライブとして復活。激戦のすえ、過去と未来の力を合わせ、撃破したという。

「コア集積装置は、そうやって生まれ変わったドライバーの複製。でもそのシフトカーは違う。真正正銘のオリジナル、みたいね」

「でも、シフトカーや装備は残らず封印したって」

「そう……でも、未来のトライドロンだけはあの事件のあとどこかに姿を消してしまったの。そのシフトカーだって、地下に封印した後、存在が確認できなくなってた」

当時、クリムたちもその行方を捜していたが、ついに見つからなかった。

やむを得ず、「未来が改変されたことにより、改変前に開発されるはずだった技術は消滅した」という答えで妥協することにしたのだ。た。

確かに、現在の二〇三五年には、時間移動はおろか重加速の再利用さえできていない。

もし今の話が本当なら、ロイミュードやドライブ関連のシステムを封印した現在と、それらをフル稼働してロイミュード側に対抗しなければならなかった別の二〇三五年とでは、技術的に大きな開きがある。つじつまは合っている。

「アタシが知ってるのは、そんなところかな。さて問題は、あのボディを誰が盗んだか。モノがモノだけに、盗難届出そうものなら……ああ！ またグチグチグチ言われそうッ！」

頭をかかえて掻き筆るりんなに「あのさ」とエイジは切り出した。「それについて、ちょっと、僕に考えがあるんだけど」

「おっ、さっすが進ノ介君の息子！ なになに聞かせてよー」

背後に回って肩をつかむりんなに、エイジはあいまいに笑って見せた。泊進ノ介の息子、という肩書は、聞き流すことにした。

「僕が変身する」

え？ と表情を固まらせた科学者に、エイジはもう一度だけハツキリと、自分の意志をつたえた。

「僕が、そのダークドライブに変身にすれば良いんだ」

## 第一話：僕の時間はなぜ進んだのか（8）

……それから、エイジは戸惑うりんなに説明をし、説得をした。

「あの目玉は、このシフトカーを要求してきた。たぶん、本命はこっちか、もしくは両方だったんだ。だったら、僕がダークドライブに変身して、囿になつてもう一度あいつをおびき寄せれば良い。そこを捕まえてやる」

もちろん、反対はされた。

だが、警備システムが作動する前にあのゴーストは侵入した。ましてや半壊した研究所では、とうてい守り切ることもできないだろう。それに今回の騒動が公になれば、さらにチエイスイヤクリムと復活は遠のくことになるだろう。

そもその原因は、ネクストスペシャルを追いかけた自分にありそうだ。

そのせいで叔父や父母の嘆く姿は、見たくなかった。

熱意ある説得に根負けしたのか、

「まあ、確かに今変身できる仮面ライダーは、君しかないものね」と、最終的にりんなは折れた。

「……ただ、その後がキツかったなあ……」

三か月後の現在。いつものように自警団としてのパトロールの最中にビルの屋上に腰かけながら、ダークドライブに変身したエイジはそのことを回想する。

泊エイジは、運転免許を取得したその次の日から、また『教習』を受けるはめになった。

ドライブとしての運転や操縦技術、りんなによって開発されたネクストシフトカー三種の説明や、コア・ドライビア以外の超技術への専門知識や対処法、彼女の組んだ濃密なカリキュラムによるトレーニング。

まるで身体と頭をそっくり改造するかのようなトレーニングをこなし、ようやく外で『試運転』できるようになったのは、半月前だ。

例の『サイバロイドボディ泥棒』をおびき寄せるためのエサとして、ダークドライブの姿で警察でも根絶しきれない悪や怪人を退治し、そのウワサを広めさせる。

もちろんこれは警官である父や、その関係者にも聞こえるデメリツトもあるが、手っ取り早い。

それに、手がかりがないわけでもなかった。

エイジがダークドライブに初変身した直後から、奇妙な存在がニュースにも取り上げられて世の中を騒がせていた。

「エイジ君、休憩中ごめんね」

ダークドライブのシステムに取りつけられた通信機から、りんなの声が聞こえてきた。

「例の『黄金仮面』が現れたわ。そこから南東二キロ先、貴金属店から金品を強奪。グライダーのようなものに乗って上空から逃走中」

「了解」

「へしっこいようだけど」

任務中のりんなは、いつになく真剣だった。

仲間である進ノ介や霧子にも伏せて、彼らの息子に危険なことをさせている。その負い目が、彼女におふぎけを禁じ、慎重にさせるのだろう。

「チューニングとスキャンはしたとは言え、ダークドライブは未知の領域の多いシステムよ。……扱いは十分に気を付けて」

元特状課とは仲間という枠組みを超えて、泊親子を中心とした大きな家族の輪でもあった。

彼らに余計な手間や迷惑をこうむらせないためにも、この事件は早急に片をつけなければいけない。

「——それに、ヒマな大学生をやってるよりこっちの方がワクワクする。」

過酷な訓練の最中であつたとしても、命を的にした活動であつたとしても、エイジにとっては間違ひなく今までの人生で一番充実していた三ヶ月間だつた。

「わかつてるさ。悪魔と相乗りする勇氣は、ある」

やや芝居がかったセリフとともに、彼は空中に身を投げ出した。

エイジがダークドライブになることを決意した直後と同様、どこからともなく時空のトンネルを現れたネクストライドロンが、空に青い軌道を描いて、運転手を拾い上げた。

闇になじむかのように、二代目のドライブは夜空を走り抜けていった。



## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（1）

『黄金仮面』というのが、黒い正義のヒーローとまるで競うように現れた、闇の風雲児だ。

シユメール人の彫刻物のような黄金のマスクをかぶり、黒コートをまとった、骨格からは男と推定されている。

手すりのついたグライダーに乗って夜空を駆け抜け、私腹を肥やす政治家、黒い疑惑のある富豪の私邸や経営する会社を襲って金品を強奪。

まるで雷鳴のような高笑いを轟かせながら金をばらまき、機密文書や資料を動画やリークサイトにアップロードする。

よく言えば義賊。法にもとづいて言うなれば、連続強盗犯だ。

（紙や金属で売り買いするのも珍しくなっただっていうのに、そんな旧時代的な）

とエイジは呆れていたが、大衆受けはダークドライブよりもはるかに良いようで、特に若者層からの支持が強い。

往年のように不死のテロリストが町のシンボルをハイジャックしたり、宇宙からロボット軍団や隕石がやってきたりなどなく、ただ平穏で、退屈で、そして腐敗は確実に進みつつある、閉塞した現代。

そんな時代に現れて風穴を開ける彼の姿は、鬱屈してはいるもの自分では具体的に行動できない人々にとっては、希望の流星といったところなのだろう。

その手口と人気から、大昔に世間を騒がした大怪盗『アルティメツトルパン』の再来とさえ言われている。

自分だって、ダークドライブを手に入れていなかったら、彼のことを慕っていたのかもしれない。

だが、実際にはエイジはもうひとりの仮面のヒーローとなって、その義賊を追っている。

というのも、『黄金仮面』には奇妙な風聞もついて回っていたからだ。

——いわく「彼は、窮地に陥ると目玉のようなものを使って別の姿

に変身した」という。

その情報を得たときにエイジの脳裏に浮かんだのは、警報ランプの下の、黒い幽霊。

あの眼球型のガジェットは『眼魂』と呼ばれるもので、父があつた事件の押収品にも、似た代物があつたらしい。

(というこ)とは、ぜったいにボディ泥棒か、でなければ関係者だ)

ネクストライドロンに搭載されている高感度モニターが、上空からターゲットを補足した。

車体の下で滑空するグライダーに、少しずつ高度を落とす。さすがに覆いかぶさる影に、怪盗は気づいたようだった。スピードを速めていく近未来的なグライダーに合わせ、ネクストライドロンの速度を上げ、野太いクラクションを鳴らした。

速度を保ったまま、車のドアを開けた。都心一帯さえ見渡せるような高度の夜景が、そこにはあつた。

元々この並行世界のスペシャルカーはオート操縦で動かしている。ハンドルを手に取ることは不要だった。

ただ、そこから飛び降りるだけど勇氣が、要るだけだ。

ダークドライブは、車から飛び降りた。

グライダーの上の男をつかんで引きずり下ろし、自分もろとも、高層ビルの屋上へと落とし込んだ。

彼が奪ったとされる宝石類が、夜に燦然と輝く文明の光に溶け込んでいく。

さすがに生身の肉体の『黄金仮面』を硬いアスファルトに墜落させるわけにはいかないから、自然自身を下に、ダークドライブの装甲で衝撃を吸収する体勢になった。

派手な衝撃音のあと、もつれ合いながら足場を転がり、悪趣味な仮面を引つpegす。

次の瞬間、足払いを食らった。バランスを崩した後に拘束からすり抜けた。

中腰になって距離をとった男の顔は、意外にも若く、少年という年頃に近かった。

鼻筋の通った、日本人離れした顔立ち。いや、あまりに整いすぎた美貌で、神の寵愛さえもそこには感じさせた。

その白皙に見合うだけの、極上の絹糸のような金髪。それを右半分だけ伸ばし片目を覆い隠していた。

「やるじゃないか」

と、男はまず相手を褒めた。

だが、次の瞬間あらぬ方向へ、青い目をやり虚空に向けて語りかけた。

「……ん？ いやあ、べつに問題ない。ただちよいと、厄介なのに絡まれてさ」

最初は通信機で仲間に話しているものだと思った。

だが、それらしき端末は、彼の身体にはどこにも見当たらなかったし、モニター越しにサーチをかけても見当たらない。

〈お前に、少し聞きたいことがある〉

展開した武器……ブレイドガンナーを手に、エコーをかけた音声でエイジは問う。

「こちらにはないね。お前のことはお前以上に知っているから……」

泊英志」

〈なっ……!?!〉

本名を即座に言い当てられ、エイジは動揺した。

その隙が、『黄金仮面』が右手に隠していたものに気付かせるのに、一瞬遅れさせるはめになった。

それは、鈍く光る数枚の銀貨だった。

エビやサソリやライオンの絵柄が彫られたそれを手の中で割り砕いて、地面へと放り投げた。

すると、それら一片一片から包帯と毒々しい色合いの煙が噴き出てきた。やがてそれは人型の肉体と姿を変えた。

ミイラ男のような造形。のっぺらぼうのように顔のパーツが抜け落ちていて、ゾンビのようになめきながら、不気味にうごめく。

そんな怪人がうつろに腕を伸ばしながら、物量に物を言わせてエイジを押しつぶそうとしてきた。

「悪いが今はお前に構ってやってるヒマないんだ。クスヤミーと遊んでくれ」

化け物たちの垣根の向こう側で、金髪の魔少年は不敵に嗤う。

そして屋上から飛び降りて、姿を消した。

「待てッ！」

とエイジは呼ばわったが、声で犯人が止まるようなら刑事は要らない。

代わり、その声に反応するかのようにメダルの破片から生まれた怪物たちが、ダークドライブに群がった。

青い刃をふるって叩き付ける。

だが意外に肉厚な彼らは、斬りつけるたびにのけぞるが、破壊にはいたらない。その動きはゆっくりだが、着実にエイジに迫っていた。「だったらー！」

意志に応えるように、一台のシフトカーが飛来し、エイジの手におさまった。

シフトブレスのネクストスペシャルを引き抜いて交換する形でそのシフトカーを挿入する。

クリムを再現した音声が決定的に、パトカーを模したそのシフトカーの情報を読み上げる。

〈NEXT HUNTER!〉

上空をただようネクストライドロンから、赤いラインが入ったタイヤが射出され、ヤミーを吹き飛ばした。

バウンドしてからダークドライブの肩にはまり込む。

ネクストハンター。

父が使っていたシフトカー、ジャスティスハンターの後継機だ。

新たにダークドライブの伴となったシフトカー三種は、元々はロイミュード108が使っていたものがモデルらしい。それらには未来型ロイミュードのデータがインプットされていて、性質的にはバイラルコアに近かったらしいが、こちらは正当進化したシフトカーだった。

タイヤがボディに定着して間もなく、牢屋の格子を切り取ったよう

な六角形のボードが、タイヤから生成される。

それをフリスビーの要領で水平に投げると、おおきく旋回しながら、敵の群体に雷撃を放射しながら、彼らを蹴散らしていく。

彼はイグニツションキーを回し、シフトブレスのボタンを押した。

〈HUNTER!〉

と甲高い男の声とともに、空中でボードは分解した。それから上空でヤミーたちを囲むと、レーザーを照射した。地面に向けて注がれる熱光線は、徐々にその範囲を狭めていって行動を制限していく。

やがて完全な牢獄と化したそれを、呼吸を整え、ダークドライブは握りしめたブレイドガンナーで殴りつけた。

さながら音波のようにエネルギーの波動が内側でひしめくヤミーの全身に染み渡っていく。

そして牢獄もろともに、くぐもった断末魔を発しながらヤミーたちは爆発した。

焼け焦げたメダルの破片が、金音を立てながら散らばった。

完勝と言って良かったが、変身を解いたエイジの顔は晴れてはいなかった。

捕まえられたはずの犯人、もしくは手がかりは彼の手から逃れ、明らかになるはずの謎は、ますます深まるばかりだったのだから。

「……なんなんだ、あいつはいったい?」

ひとつだけ分かったことと言えば、『黄金仮面』と仮面ライダーダークドライブは、決して相容れない存在同士ということだけだった。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（2）

次の日には、『黄金仮面』の事件はすでに報道されていた。

昨日の晩に襲った店も、実は裏で海外の窃盗グループとつながりがあつたようだった。その証拠とされるデータや金品受け取りの動画が、そこかしこにアップロードされていた。

報道機関のコメンテーターやキャスターたちは、彼を愉快犯と非難しつつも、「被害者にも責任があるのではないか」と被害者の側にも辛口だった。

一方でSNSなどでは、彼のふるまいを公然と称賛し、

『黄金仮面』は、この腐った世界に風穴を作る、新時代のヒーローだ！」

などと、快哉の声をあげる者さえいた。

では、仮面ライダーダークドライブ、泊英志にとってはどうなのか？

「まっ………たく面白くない」

と、大学の講義を終えたエイジは、タブレットでそのニュースに触れたとき。そうつぶやいた。

何しろ思わせぶりの態度で引っかけまわしてくれた相手が、世間ではもう片方のニューヒーローよりも知名度と人気を上げている。楽しかろうはづがなかった。

「ダークドライブのほうがよくばどヒーローしてるっての」

そう愚痴をこぼしながら、彼は徒歩で駅まで向かっていた。

さすがにネクストライドロンで通学するわけにもいかず、かといって車を購入する金銭的余裕もない。

「……りんなさん、バイト代出してくれないかなあ………くれないよねえ」

とぼやきつつ、下校の途につく。

その道中、まだ自然の残る県境の河川敷に、異様なまでの人ばかり

ができていた。

人垣の間から垣間見えるのは、敷かれたブルーシートや黄色いテープ。そこに何かしらの事件性を感じたエイジは、歩道から下りてその群れのなかに混じった。

「なにかあつたんですか？」

うまいこと最前列に潜り込んで誰にともなく尋ねると、

「ああ、なんか死体が出たらしい」

と、そのうちの誰かが軽い感じで答えた。

群衆のなかには、写真を撮って自分のネットコミュニティにリアルタイムでアップしている人間もいた。心底どうかしているとは思ったが、それだけ、人は変化や刺激を求めているのだろう。

「おつ、なんだ。エイジじゃねえか」

現場の検分を終えたらしい刑事のひとりだが、エイジに声をかけた。そろそろ白髪の混ざり始めた、見るからに昔気質の頑固おやじ。無骨な顔つきは、よく見知っている。

「現さん」

と、彼も父たちにならって愛称で呼んで、頭を下げた。

追田現げんぼちろう八郎。

父進ノ介と同じく刑事。捜査一課の課長で、特状課の元関係者でもあり……何より信じられないことにりんなの夫でもある。

美女と野獣とはまさにこのことか。あの才媛が一体この男のどこに惚れたのかは知らないが、婚約時は悶着があつたらしいものの、今でも夫婦仲は良好だった。

「なんか、死体出たって聞いたけど」

「あ、ああ。まあ、そうなんだがよ」

短く刈り上げた頭の後ろをバリバリを指でかき鳴らし、巖のような顔をさらに陰しくさせている。

だが、その口調はいまいち煮え切らない。

「捜査一課が出張ってるってことは、ひよっとして殺人？」

「デカの仕事に、ガキが口はさむなっ！」

と、うかつなことを尋ねると、頭の上に鉄拳が飛んでくる。

「いつてー」とその理不尽さを責めるも、当の本人は聞き分けのない子どもに大人としてケジメを果たしたとでも思っているのだろう。悪びれる様子もない。

これだから、このオールドタイプの刑事は苦手なのだ。

自分の我やポリシーは押し通すくせに、こちらに対する理解や尊重はぜったいにしない。おまけにすぐに拳やボディラングージで訴えてくる。

それこそ子どもの時分には、めいっばい泣かされたものだ。

ただ、この時のゲンコツや怒号には、反省の色こそないもの、ごまかしのようなものを感じさせた。

やがて、自分の感情を隠すことに我慢できなくなったのだろう。バツが悪そうに、口をもごもごと動かした。

「つか、わかんねえ」

「わかんねえ……って、どういうこと？ 現さんなら、身元や死因ぐらい見れば」

「だから、こつちが現場入りする前に、持ってかれちゃったんだよ！

あの嬢ちゃんに！」

と、太い指が現場の方向を突き出した。

まるでその訴えを遮るかのようには、黄色いテープで封鎖されている。

さらにその前に、すらりとした影が立ちはだかった。

二十そこそこ、さほどエイジとも年頃の変わらない女性だった。

ワインレッドのロングジャケット。濃紺のブラウス。スリムタイプのパンツに、華奢なシルエットがよく似合う。胸や腰のベルトの金具は炎やハートがあしらわれていて、同じブランドで統一されていた。

顔つきはやや濃いめだが、凜とした表情とマッチしていて、十分に美人と言えた。

さすがの鬼刑事も、女性相手には恫喝や暴力は向けられないのだろう。



言いたいことを必死にこらえる感じが、逆に妙に情けなかった。

「なあ、……えーとセンターボーイの」

「インターポールです」

「福井さん、だったか？」

「照井です」

わざとやってるんじゃないか、と疑いたくなるほどの記憶違いを、女性は抑揚なくひとつずつ訂正していく。

それから人生で一度も笑ったことがないような仏頂面で、淡々と説明した。

「この男の遺体は、インターポールで引き取らせてもらう。一年前から我々がずっと目をつけていた人物なので。警視庁へはいずれこちらより説明を。それまでは、介入はどうか無用に願います」

と、本当に最低限だけの情報を与えるだけ与えて、答えは待たずにきびすを返す。

その一瞬、刺すような視線がエイジを捉えた。彼自身には、そんな風を感じた。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（3）

泊家の夕食は、久々に三人そろつての食事となった。

というのも刑事として今も最前線で戦う父が、時間どおりに食事をとることが難しいからだ。

エイジ自身にしても大学の付き合い……とりわけ最近では仮面ライダーとしての活動も加わり、帰りが遅くなるが多かった。

母の作ってくれた食事を慢性的に口に運びながら、父は今追っているらしいヤマの資料を端末で漁っていた。

一年前、ある友人が行方不明になったらしく、捜索願とは別に彼個人もお願ひされているらしい。

霧子がわざとらしく咳払いした。

父は妻の不機嫌に気づいてあわてて端末を切ったが、その拍子にテーブルの下に落としてしまつて、拾いなおした。

そのまた瞬間にテーブルの角に頭をぶつけ、食卓全体がおおきく揺れた。

「つてー！」

と痛がる父に、母は露骨にため息をつき、その息子は彼に見えないように笑つた。

微妙な距離感には違いないが、それでもたしかに感じる、ありふれた幸福の姿だった。

「そう言えばエイジ」

と、机から顔を出した父は端末をスーツのポケットにしまい込んで言った。

「現さんから聞いたんだけど、お前今日現場に来たんだってな」

「ん？ うん、まあ通りがかりで」

「そうか」

父は詮索しなかった。代わりに、

「最近、帰りが遅いみたいだが。いったい何やってるんだ？」

などと、まるでホームドラマのようなセリフをそれとなく、と言つた感じでさし挟んでくる。

「べつに。友達の付き合いとか」

「この間はドライブだったか？」

「そう、ドライブ」

「車は？」

「えっ」

「車はどうしてる？ お前、持ってないだろ」

まるで取り調べみたいだ。そう一笑に付そうとしたが、父の表情を見たエイジはその笑みを引きつらせた。

父は……刑事、泊進ノ介の眼光は、するどく対象を観察していた。

(これがあるから、うかつなことが言えないんだ)

ふだんは呑気者でおちよこちよいで気取り屋の父だが、一度でも不審な点を見つけると、彼いわく『ギアが入る』。

一転して鋭い頭の冴えや観察力、情報整理能力を發揮して真実へとたどりつくのだ。

今でこそダークドライブのことは秘密だが、もちろん事態に收拾がついて実績を重ねていったあと、きちんと報告するつもりでいる。

(だけど、今はだめだ)

全容をつかむどころか、事態はより複雑に、より大きくなっている。そんな予感がある。

ただでさえ難事件を抱えている父にその責任を押し付けたり、母に心配をかけたくない。

「レンタカー。借りたんだよ。あとは友達のとか……じゃあ今度さ、父さんの、一台貸してよ」

「やだね！ お前みたいなのよつこに、誰が貸すかつ」  
(子どもか)

と、相も変わらぬ車への執着に、エイジと霧子は呆れた。

だが、そこを刺激することでお茶を濁すことには成功した。

それにレンタカーうんぬんは、言い方を変えただけでウソではない。

ネクストドライブシステムは、『父の』友人であるりんな、ロイミュード108……元をたどれば擬態された本来の持ち主からの借

り物だ。

八対二と割合で虚実をまぜること。それがウソを信じさせるコツだ。

(確かに今は借り物の力だけど、いずれは乗りこなしてみせるさ)

何度となく誓ってきた決意。だがそのたびに、エイジの頭にふと疑問がよぎる。

(ダークドライブの元の装着者って……いったい誰なんだ?)

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（4）

『黄金仮面』との最初の邂逅から、一週間が経過したころだった。エイジの通う城南大学久留間キャンパスでは、ある講演会がおこなわれていた。

単位とも関係がないうえに講座名からしても『現在の若者の取り巻く問題と憂慮すべき社会問題』などという、その字面を追っただけでも眠くなるようなものだが、エイジはあえてそこに応募していた。

というのも、そのあからさまにつまらない講演会をもうけた人物こそが問題だったからだ。

郷原源太。  
（ごうはらげんた）

汚職、収賄など何かと黒い疑惑の絶えない国会議員だった。その疑いが向けられるたびに秘書や同僚が逮捕されているが、本人の手に手錠ワッパが下りたことは一度もなく、老獪に切り抜けている。

そして今、『黄金仮面』に狙われている人物。

というのも、彼が関連している施設がこの三日間に立て続けに襲撃のターゲットにされており、あげくの果てに本人宛に襲撃予告状が届いたとニュースで取り上げられていた。

「……となると、やっぱりあのウワサはマジだったってことだよな」「いい気味だ」

という声も、参加しようとホールに集まった学生たちの間でささやかれている。

彼らの大半は、講座そのものではなく『黄金仮面』にお目にかかれるかもしれない、という興味本位から来ているのだろう。

（まあ、ヤツを捕まえるために参加してる僕も、ひとのことは言えないけどさ）

今回の演説も、つい先日の贈収賄疑惑と、『黄金仮面』の襲撃騒動による悪評を払しょくするために設けられた対策、というのが一般的な見解だった。

（ただ、なんかこの状態、しつくりこないんだよなあ……）

議員や『黄金仮面』への好悪ではない。もっと全体的な違和感が、工

イジの周辺をつつんでいると感じた。

ただそれが一体何によるものなのかは、エイジ自身、具体的には説明できないでいた。

(父さんなら、『モヤモヤする』とか『どんより』なんて言葉を使うだろうけど)

「くどい！ 警察にもインターポールにも、護衛なんぞ頼んではおらん！」

怒号が聞こえたのは、そんな時だった。

件の郷原議員が、正面玄関から堂々と、ホール入りを果たしたのだった。

ただしその周囲には警官と、それとはまた別のグループが彼の肥満体を取り巻いていた。

警察側には、現八郎や進ノ介といった顔見知りはいなかったが、それ以外の取り巻きの中に、見た横顔を発見した。

先日の死体発見現場で、現八郎とやり合っていたインターポールの女性だ。

「私は潔白だ！ 例のマスクマンは悪人ばかりを狙うのだろうに、なぜ私が襲われることがある!？」

「しかし、予告状が送られてきたのは事実です」

と食い下がろうする彼女をにらみつけツバを飛ばして怒鳴りつけた。

「むしろ君たちがそうやって張りつくと、かえって痛くない腹を探られることにもなるだろうが！ さあ、とつとと帰れ！ ここは神聖な学堂だぞ、飼いだが入っていい場所ではない！」

と言って、自身は控室にさっさと

護衛など不要、といったわりに、子飼いのSPはしっかりと伴って。女性は露骨に舌打ちした。

きびすを返したところで、それとなく様子をうかがっていたエイジの視線がかち合った。

「……君は」

と訝しむ彼女に会釈し、足早に離れようとする。

ところが、彼女は

「泊英志くん、だなぁ？」

とフルネームで彼の名を呼んだ。

反射的に足を止めてしまったエイジとの距離を詰めながら、女捜査官は手のひらサイズの端末をいじりながら近寄ってきた。

「二〇一六年に父、泊進ノ介と母霧子の長男として生まれる。今はこの学生。三か月ほど前、自動車運転免許を取得か」

「……すごいですね。インターポールって、犯罪歴のない相手の個人情報まで簡単に検索かけられるんですか？」

「私に質問するな」

つめたい形相でそう言われてしまえば、「アツハイ」としか返せなくなる。

そのくせ自分は、

「君に確認しておきたいことがあった」

と詰め寄ってきた。

「君が免許を取得した日、その久留間ドライビングスクールでボヤ騒ぎがあった。だが実際には教習所内の施設に被害はなく、鳴らされたサイレンは誤報もしくはイタズラとして処理された……君もそれを聞いていたか？」

「……いえ」

「そうか。だが妙な話だ。君がその直前にロビーにいたことは、大勢の目撃情報かとれている。そして周辺にいた全員が、サイレンの音を聞いている。なのに君は、それを聞いていないと？ そう言えば目撃者が言うには君は走ってどこかへ向かっていたらしいが？」

彼女の詰問は、父の『取り調べ』よりも辛辣で、悪辣だった。

まず言い逃れができないほどの言質をとってから、矛盾点を突きつけてくる。

さすがは世界の警察といったところか。

(このひと、何を知ってる？ 何を探ってる?)

一施設の誤報を鳴らした犯人を、わざわざインターポールの捜査官が捜索しているはずもない。

となれば、

「たしか君のお父上は仮面ライダーだったな？」

「そう、ですけど」

「実はここ最近、黒いライダーが目撃され、『黄金仮面』もどうやら変身するガジェットを有しているらしい」

「ああ。ネットとかで有名ですよ」

「君が免許をとった後に、二種類のライダーが現れた……これは偶然か？」

彼女の目的は、そこへの追及ということになる。

「……あの、もう行っていいですか？ 講演がはじまっちゃうので。

それじゃ、福井さん」

と、エイジはそれ以上突っ込まれるのを恐れてお茶に濁してその場を去ろうとした。

その背に向けて、

「照井」

声が、冷たくぶつけられた。

なんのことかと振り返ったエイジに、短く切った言葉で、女捜査官は答えた。

「照井春奈<sup>はるな</sup>。それが私の名前だ」



## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（5）

講演会の演目は、予想通りというかなんとか、浅くて薄くて旧時代的な内容だった。

昨今の政治情勢からはじまり、それを回りくどくだらだと三十分近く話したあと、自分をねらう『黄金仮面』なる愉快犯や、それに同調するメディア、若者やネットの批判にはじまり、ようやくそれが終わった後には、中盤に差し掛かったあたりから野党に対する不平不満がぶつけられた。

だが、その長話の最中にも奇妙なまでの落ち着きのなさを周囲から感じていた。

もちろん、警官やインターポールの先ほどの女性が壁際に張りついていたりと、物々しい雰囲気があったから、というだけではない。

そこかしこで、学生たちはカメラを準備したり、ささやき合ったり、演説中の郷原議員にあからさまに嘲笑を向けたりしていた。

不満げな様子であった郷原氏だったが、それを怒鳴りつけるほど分別のない人間ではなかったようだ。

ライトの熱で汗を額に浮かばせながら、彼なりに懸命に弁舌をふるっていた。

そのこと自体には、末席のエイジは哀れに思った。

と同時に、自分が抱えていた違和感の正体に、ようやく気が付いた。

（これじゃまるで、世の中の悪を『黄金仮面』が裁くんじゃなくて、ヤツが裁く人間が悪だとみなされているみたいじゃないか）

納得のいかない感情が芽生えつつある矢先、ホールのガラス張りの天井に、影が差し込んだ。

次の瞬間、その影によってガラスは踏み砕かれて、破片のシャワーが降り注いだ。

光を浴びながらの、黒コートと金仮面の男の乱入は、会場内に興奮と狂乱をもたらした。

壇上に降り立った彼の前に、警棒をたずさえたSPたちが立ちふさがった。

だが、警告も威嚇もなしに男たちが振りかざした凶器は、その乱入者……『黄金仮面』の身に届くことはなかった。

彼はあざやかな身のさばき方でそれらをかわすと、脚技によって体を崩させ、くり出した拳によって急所をえぐり、自分の背丈より一回り大きな連中を一撃で昏倒させた。

「ひっ」

と情けない声をあげて逃げ出そうとする郷原を、『黄金仮面』は首根をつかまえ自身の前に立たせた。

弛緩と嘲笑に満ちた場は一転して狂乱の場となった。

悲鳴をあげて逃げ惑う学生たち、なおもカメラで一部始終を撮ろうとする者、それを強制的に退避させようとする警官たち。

だが、そんな人の乱流のなかをかくぐり、その場にとどまる人間もいた。

座席の裏に隠れてやり過ぎす泊英志と、もうひとりの女性。

彼女は、インターポールの捜査官照井春奈は、奇妙な銃を構えて立っていた。

機械的なパーツが装甲のようにまとわりついた白銀の拳銃。

引き金のあたりから突き出るようにスロットが取り付けられている。た。

左手が銃から離れ、腰から提げたチェーン状のホルスターからあるものを引き抜いた。

それは前時代的な、USBメモリのような、青くクリアな外装に覆われた媒体。

そのディスプレイにはアルファベットの「T」か、それこそ拳銃のようなシンボルが表示されていた。

(ガイアメモリ!?)

下から伸びた赤い端子を、照井春奈はさながら弾倉のように銃のスロットへと差し込む。

〈TRIGGER〉

野太い男の音声がホール内に反響し、それが止むよりも速く、彼女は銃を『黄金仮面』へと突きつけていた。

『黄金仮面』、お前には各国における窃盗、破壊活動への関与が疑われている。よって、インターポールが身柄を拘束する」

この異常な状況にもかかわらず、表情はクールビューティーを保つたままで、定めた銃口にはわずかな揺らぎもなかった。

ただ、『トリガー』が引かれる気配はない。

『黄金仮面』が、彼女の射線の上に郷原の肥満体を置いて盾にしていたからだ。

氷のような春奈の貌にも、徐々に焦りと苛立ちが混ざりはじめていた。

(どうする?)

物陰に隠れたまま、エイジは思案する。

ダークドライブに変身すれば事態は打開できるかもしれないが、ここで変身すれば一層エイジ自身を疑われる可能性が高かった。

(でも同時に、これはチャンスでもある)

要は、仮面ライダーダークドライブが泊英志ではないと彼女に確信させれば良いのだ。

彼女には見えない角度で、エイジはカバンからタブレットを取り出した。

時代の流れによって紙ほどに薄型になったそれを操作し、『命令』<sup>コマンド</sup>を打ち込む。

「人質をはなせ」

エイジの作業に気付いた様子はなく、銃を構えたままに『黄金仮面』にじりじりと迫っていく。郷原に当たらない射角をねらって、彼らの外周を迂回していた。

それに合わせて微妙に角度を変えながら仮面の奥で少年の笑い声が聞こえた。

「いいとも」

返ってきたのは、意外な答えだった。

「どうせ、この男の政治生命はもう終わりさ。ためしに適当な動画サイトやSNSを開いてみる。贈り物の銀の壺を抱えて狂喜しているこの豚の醜態がさらされているはずだ」

「なっ!?!」

呆氣にとられる郷原の足が次の瞬間、浮き上がった。

尋常ではない腕力で、軽く見積もっても八十キロはあるだろう脂肪の塊が持ち上げられて、天高く放り投げられた。

一度は天井すれすれまで高度をあげた彼が、引力にしたがつて落下してくる。

骨折どころかそれこそ本当に命の危機だが、それを受け止めるだけの腕力は、居残った誰にもない。

だが次の瞬間、飛び込んできた黒い影が空中で難なく、その重みをキャッチした。

「……仮面ライダー」

退去をうながされながら、見物人のひとりがつぶやいた。

どこからともなく現れた仮面ライダーダークドライブが、郷原議員の命を救っていた。

春奈はそこでようやく、エイジの姿を振り返った。

そこにはカバンを抱えて退出しようとする彼の姿があり、おそらくエイジこそがダークドライブと目していただろう彼女は、『同一人物』が同時に存在している自体に少し動揺を見せていた。

このカラクリ自体は、いたってシンプルだ。

ベルトの制御AIによる、自動操縦。

端末を通じてある程度の指示をプログラムすれば、あとは状況に応じて分析や判断をしてある程度は戦ってくれる。

(……ま、ひとつ問題があるとすれば)

ダークドライブは、守るべき対象の安全が確保されると判断するや、ぞんざいにその肉体を投げ捨てた。

ぎゃっ、と悲鳴をあげる彼に目もくれず、この隙に裏口から逃走した『黄金仮面』を追って、最短ルートで突き進む。壁をブレイドガンナーで切り裂き、破壊しながら消えていく。

条件を事細かに設定しなければ、手段を選ばないし、その動作には精密性を欠く。

だから、最終的にはエイジ自身が装着して戦わなければいけないの

だ。

ともあれ、これで照井春奈の内からはダークドライブとエイジとをつないでいた等号は消えたはずだ。

彼女を残して、エイジは混乱にまぎれて警官たちの目を盗んで、ルートを迂回しながら『黄金仮面』の後を追った。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（6）

エイジは端末のナビゲーションシステムを通じて、ダークドライブの座標が停止したことを知った。

それは今、彼の目の前であり、大学キャンパス内の中庭で、『黄金仮面』はブレイドガンナーを交差した腕で受け止めていた。

その全身にノイズがはしり、一瞬鋼鉄の身体へと変貌した。

「やっぱりその身体……ッ!? いや、違う!?!」

たしかにロイミュードのボディには違いないが、微妙にその色や風貌は異なっていた。

エリのついたマントを羽織った素体には、黄金のパーツが取り付けられている。

ステンドグラスや宝石のような頭の飾りも、そこから伸びた牛のような巨大な二本角も、あの日奪われたサイバロイドボディには存在していないものだ。

だが、その特徴を確認するよりも早く、『黄金仮面』は元の姿にもどって、ダークドライブを押し返して距離をとっていた。

「やっときたか。せっかく遊びに来てやったのに、いつまでお人形の相手をさせるつもりだ?」

そして、仮面をみずから取り外すと、美少年の姿をした怪盗は不敵に笑った。

「……ふざけるな。目的は郷原議員だろ」

「いや、そっちはもののついでさ。本命は、お前だ」  
「僕?」

「このへドが出るほどつまらん時代に並び立った、英雄同士だろう。せめてちゃんと顔見せぐらいはしてやろうと思ったのさ」

エイジはカバンをベンチに置いた。取り出したスピアのシフトブレスを手首に取り付けて、ダークドライブと並び立った。

「ニューヒーロー気取りか」

「ニューヒーロー?」

ギルガメッシュは笑いをさらに深めて歪め、肩をすくめて聞き返し

た。

虚空にかざした手のひらから、眼のガジェットが生み出される。それも、ダークゴーストの眼魂とは違う。金色の外装に、碧の瞳。まくりあげた袖から、金色のブレスレットがあらわになった。

「俺は、最古の英雄だ」

眼魂横のスイッチを押すとディスプレイが『GL』と変化する。それをユニットへとセットする。

〈YES SIR!〉

腕のユニット起こして、横のボタンを押すと、

〈LOADING!〉

という音声とともに飛び出た金色のライオンをあしらったパーカーが、その奥の闇で閃く眼光とともに、エイジをにらんで飛翔する。「変身」

どこか小馬鹿にしたような口調でつぶやくと、装置の上のボタンを押した。

〈TENGAN! GILGAMESH! MEGAUROUD  
……KING OF URUK!〉

液体が眼魂の上に落ち、彼の全身を黒いスーツが包み込む。その上に金色のパーカーが覆いかぶさった。

「我が名はギルガメッシュ。それとも当代風にこう名乗ろうか。仮面ライダー……ギルガメッシュ!」

胸の刻印から生み出された大斧を手に、もうひとりの仮面ライダーは、最古の英雄譚に出てくるその名を高らかに宣言した。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（7）

ギルガメツシュ。

その名は、大学の講義のなかでわずかに触れたことがあった。

紀元前三千年の昔、ティグリス・ユーフラテス両川流域にあった、シュメール人の都ウルク。

そこを治めていたのが、半人半神の王ギルガメツシュだ。

おのれのため、友のため、永遠の生命をもとめる冒険譚。それこそが、世界最古の叙事詩『ギルガメツシュ』だ。

つまり、彼の名を自称するこの仮面ライダーの言う通りに、ギルガメツシュはこの世でもっとも最初に生まれた『英雄』だ。

だが、その名を聞いただけで怖じるわけでもない。

車も仮面ライダーのスーツもひとりで動く時代に最古だの神だの、それこそナンセンスで、眉唾物だ。

「START OUR MISSION」

声紋認証によってドライブの手首から転送されたネクストスペシャルシフトカーを、自身のブレスにセットする。

「変身」

「OK……DRIVE！ TYPE NEXT！」

隣に立っていたダークドライブの装甲が一度データ化して分散される、エイジの全身を鎧う。

それを余裕たつぷりに見届けてから、斧を肩にかついでギルガメツシュは手招きした。

「来いよ、遊びたかったんだろ？ この俺と」

「ふざけるなッ」

とことんおちよくられたことによる怒り。その激情のおもむくまま、ダークドライブに変身したエイジはブレイドガンナーの引き金をしばった。

発射された光弾をもともせず、ギルガメツシュは前進する。軽々とふるう大斧が、風切り音をうならせてダークドライブのアーマーへ叩き付けられた。



今まで味わったことのない衝撃に、マスクの奥でエイジはうめいた。

まるで重量なんてもものを感じさせない動きで、縦横無尽に斧は振られる。

重い斬撃をかわしながら、リーチ差を埋めるべく、エイジは後退した。

勢いを増して追撃してくるギルガメツシュを、顔面めがけての連射によってけん制する。

ダメージは通らないが、目くらましにはなる。

手入れの行き届いた花壇を挟んで、ふたりの仮面ライダーは並走した。

その間にも、ブレイドガンナーを引き絞りながら、銃撃をやめることはなかった。

それを弾き飛ばしながら、ギルガメツシュの斧の刃先が輝きを増していく。くり出された横薙ぎの一閃とともに、地面をえぐりながら衝撃波がエイジを襲った。

避けることはできない。やむを得ず、彼は真正面からそれを受け止めた。

しかし、圧迫感に耐えきれずに力負けし、背にある支柱まで吹き飛んで激突した。

すぐさま起き上がろうとした。

だがその時には距離を詰めたギルガメツシュの刃先が、その喉元に突きつけられていた。

「なんだ、この程度か。実につまらない」

そう言つて、黄金のライダーは無機質な仮面の奥でせせら笑う。

彼の慢心の間を突いて、エイジはそれとなくベルトから一台のシフトカーを手元へ呼び寄せた。

「おっと」

だが、ギルガメツシュの足が、その右手を踏みつけた。

激痛が、エイジにくぐもった声をあげさせた。

「小賢しいマネはやめてもらおうか。……まったく、こんなのが英雄

を騙ろうだなんてな」

「そういう、お前はどうかなんだ？ 法律に背いてまで……あんな私刑をくり返すことが、正義だつていうのか？」

「お前がそれを言うのか？ 仮面ライダーダークドライブ。お前だつて所詮は自警団まがいのグレーゾーンじゃないか。それに俺は正義で動いてるんじゃない。ただスリルと愉しみと金を求めてのことだ」  
手首にかかる圧迫は、弱まることなく、むしろ一層強くなっていく。  
苦悶の声をあげるエイジを見下しながら、人類最古の英雄はつぶけた。

「だが俺は俺のルールでこのゲームを楽しんでいる。俺の信念のために惜しみなく与え、俺の目的のために容赦なく奪う。誰かの決めた倫理や法にただ従うお前やお前の親父たちとは違う」

「父さんを……みんなを、悪く、言うな……っ！」

握りしめた拳が、圧迫によって次第に力を弱めていく。

だが、それは感じている痛みゆえに、ではなかった。

「ああ、そうだな。所詮お前から凡人と、俺とでは理解し合えない」

それについては同意する。この短いやりとりの中、エイジもまたこの男に同様の印象を持った。

この男、ギルガメッシュとは相容れない。

(そして何より、こんなヤツに仮面ライダーを名乗る資格なんてない)  
だが通じているものがないわけでもない。

——それは、勝利を確信して、お互いマスクの裏側でほくそ笑んでいるということだ。

手のひらからこぼれ落ちた、黒い車体に紫のラインを持つシフトカー。

ネクストデコトラベラー。

主人の危機を感じ取り、彼はサイケデリックな光を放射し、渋い演歌を奏で始めた。

「なんだ、このやたら目と耳に障るのは!？」

戸惑うギルガメツシユに、ようやく隙ができた。

踏まれていた腕をすばやく振り払い、ブレイドガンナーのエネルギー弾が斧を持つ手を撃ち抜き、得物をはじき飛ばした。

しかしギルガメツシユもまた、ガンナーを蹴り飛ばし、地面へと滑らせた。

おたがいに武器を拾っている余裕はない。次の一手で決着をつけるべく、ダークドライブはイグニッションキーを回す。

〈NEXT!〉

ぎちぎちと、黒いライダーが顔の横で音が鳴るほどに握り固めた右拳に、青い炎のように力が絡みつく。

エイジはそのまま地面を足でたたいた。

腰をひくめてひねってくりだしたパンチが、ギルガメツシユの胸についた目玉の刻印を叩き込まれた。

それを中心として広がった爆炎が、エイジの視界を白く塗りつぶした。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（8）

爆発がある程度おさまり、ようやくダークドライブのモニターも正常に機能しはじめた。

だが立っているのは自分ひとりで、足下にはロイミュードのボディらしきメカと腕のガジェットの残骸が転がるばかりだった。

周囲の惨状は……あえて語るまでもない。

息をついてシフトブレスに手をかけた彼だったが、かすかに物音が聞こえてきた。

身構えて音源を探るエイジの目の前を、ガレキの山からちいさな、見覚えのあるものが通りすぎていった。

「ギルガメツシュの、眼魂……！」

金色の眼球はややおぼつかない様子で空中をただよい、対向の校舎へと飛来していった。

そして、その屋上に立つ人影の手へと自ら入り込んでいった。

絹糸のような質を持つ金色の髪、常人ばなれした白皙の美貌。

……つい今しがた、撃破したはずの男が、そこには立っていた。

冷たく光る碧眼でその眼魂を見下ろすと、

「ふざけ過ぎだぞ、ゼロゼロナイ009」

と、雷鳴のようによく通る声で眼魂を叱りつけた。

啞然とするエイジだったが、それでも、この異常な事態に対している程度の憶測はついた。

「……僕が倒したのは、偽物だったのか」

ちいさなつぶやきだったのだが、耳ざとく美少年は

ゾクリとするような妖しげな笑みを浮かべ「いや？」と首を振った。

「それは少し、違うな」

言葉の意味がつかめずいぶかしむエイジを、さらに混乱に叩き落す事態が、目の前で起こった。

建物の中やモニュメント、植樹の影から、さらに七人、姿を見せた。

まったく同じ顔と背丈を持つ、七人のギルガメツシュが。

ただし、黒いコートに張り付いたベルトは、自分が追いかけていた

ギルガメツシユにはなかったものだ。

「W」という文字にも似た、赤いもの。

三つの黒いメダルが挿入された、斜め掛けのもの。

二つのスイツチが入った、折れた翼のようなもの。

凶悪げな黒獅子の顔面が門のような装飾にはめ込まれたもの。

茶褐色の果実の形を成した錠前を据えた、チューブにつながれたもの。

旧世代のゲームのコンソールのような、極彩色のもの。

……そして、自分と同じドライブドライバー。

彼らの中心に立つ最初の一人は、誇るかのように大きく両腕を広げた。

自分が見たものよりも一回り巨大にして豪華な、黄金の眼魂……あえて呼称するなら眼魂ドライバーともいうべきベルトを巻き付けていた。

「我らギルガメツシユ」

「俺たちは同じ人格」

「そして同じ記憶を共有するもの」

「しかし本気でなかったとは言え009を倒すとは、ちと見くびっていたな」

「ネクストドライブシステムか、興味深い」

「俺の計画に、使えるかもしれない」

口々に、しかしまったく同じ声と語調で彼らは言った。

もはや開いた口がふさがらないエイジの頭上を、巨大な何かが旋回していた。

翼の生えた、巨大な黒獅子。

いくつもの動物の顔を身体中のそこかしこに張りつけたそれは、大きく羽を打ちながら咆哮し、彼らのいる校舎へと舞い降りた。

黒コートをその暴風のなかではためかせながら、八人のギルガメツシユたちはその怪獣の背に飛び乗った。

その刹那、そのうちのひとりが振り返って、にやりと不敵に笑った。  
「またな」

声にせず、口の形だけでそう告げると、彼らを乗せた獣は上空を旋回しながら飛翔していく。

そして、その余波でエイジが吹き飛ばされ、体勢を立て直した時にはもう、彼らのいた痕跡はなにもなくなっていた。足下のクズ鉄さえも。

「おい、たしかこっちに行つたぞ!？」

警官か、野次馬か。

数人の足音と怒鳴り声が聞こえてきた瞬間、ダークドライブの中でエイジは我に返つた。

呆気にとられている場合ではない。今はこの場所を離脱しなければいけない。

エイジは根元からねじ曲がつた手すりに手をかけ、五階建ての校舎から飛び降りた。

## 第二話：Gは止まらない／黄金狂時代（9）

パトカーが、解放された校門から敷地内へとなだれ込んでいく。それと入れ違いになる形で、ダークドライブは空から離脱した。

ネットワークの発達と整備によって、通報や応援要請からの警官の対応は格段に迅速になったといえるだろう。

だがそれでも、ダークドライブも、ギルガメッシュもそこにはすでにいない。

空飛ぶ猛獣の相手がつとまるのは、同じく飛行できるネクストライドロンでしかない。

ともすれば自意識過剰ともとれる確信を、ダークドライブ、泊英志は抱いていた。

とは言え、今はあの巨体は影も形も消えてしまっている。

逆にこうして追跡しているトライドロンこそ、人々の目に触れやすいだろう。

彼はそれ以上ギルガメッシュを追うことをあきらめて、車から飛び降りた。

用事を終えたネクストライドロンは、そのまま虚空に生じた時空のトンネルをくぐっていった。

学校から数キロはなれた先の湾岸部の埠頭へと着地したエイジは、モニター越しに人気のないことを慎重に確認し、それから変身を解いた。

もしこのコア集積装置に本物のクリムの意志が宿っていれば『Nice Drive!』などと……は言わないだろう。自分でもわかっているぐらい、あまりスマートとは呼べない顛末だ。

「……いよいよ、状況がわかなくなってきたな」

眼魂がらみの事件かと思えば、ギルガメッシュらはセルメダルや様々なドライバーを手にして現れ、そして真実を伝ええないままに煙に巻いて去っていく。そのくり返しだった。しかも九人同じ顔の相手がいる。

彼らがロイミュードのボディを使っている以上、本体の人格や容姿

をコピーできるのは当たり前だろう。

だが少年たちは、自分たちは「意思も記憶もまったく同じ」と言った。

「それにあのボディも相当特殊なタイプだ。……りんなさんに戦闘データを解析してもらって」

ひとりごとを口にして頭を整理するエイジは、潮騒のなかに奇妙な駆動音が混じっているのを感じ、

やがてそれは波の音よりも大きくなっていった、一台のバイクが、目の前を遮った。

ただそのバイクには、ライダーがいなかった。

外見も、並のバイクのものとは一線を画して違っている。

銀と濃い緑を基調としたデザインのそれは、まるで人とバイクとが融合したかのような、尋常でない造形をしていた。

赤いヘッドライトが、まるで威嚇する野獣の眼光のようでもあった。

(まさか、人がバイクに変形しているんじゃない)

とさえ想像する彼の背後で、

「そうか、やはり君か」

と声がかかった。

聞き覚えのある、まるで氷柱を突き立てるような鋭さと冷たさを帯びた女の声。

「照井、さん」

ベルトとブレスをしたままの言い逃れのできない姿で、エイジは女の名を呼び、恐る恐る首を後ろへ傾けた。

「自動制御と追尾機能が君だけのものとも思ったか？」

そううそぶく氷の女、アイスガール照井春奈は、ギルガメッシュに向けていたあの銃を構えていた。そうやって変身や逃走をけん制したまま、空いた片手で小型端末を操作した。

電子音とともに、エイジの前方のバイクが、光とともに消滅する。

自分のダークドライブの操作と酷似していた。

加えて彼女が言った「君だけのもの」というキーワード。



父譲りの明敏さを持つがゆえに、それらの情報がエイジの中でつながった。

正体の露見以上に最悪の事態が待っていることに、気づいてしまった。

「そう、最新の仮面ライダーは、ふたりじゃない。私は……」

逃げるのも忘れ、完全にエイジは背後へと身体を向けた。

照井春奈は端末を上着のポケットに納めた。代わりに裏側から取り出したのは、純正化されたガイアメモリ。

ダークグリーンと銀のツートーンの外装に、赤い端子。表示されているのは、バイクのメーターを模したAの頭文字<sup>イニシャル</sup>。

その下にあるボタンを鳴らせば、

〈ACCCEL〉

と電子声が埠頭に反響し、くびれのわかるほっそりとした腰に、バイクのスピードメーターのようなバツクルが輝きとともに出現した。アナログなタコメーターのような円形のものに、デジタル表示形式のメーターを模したものが融合している。

その中間にあるスロットに、ガイアメモリを挿入した。

「変……身ッ」

低くつぶやいた彼女の声に、タコメーターの針が反応した。

一気にその振れ幅を増し、虚空にメモリのイニシャルと同じヴィジョンが浮かび上がる。

白い光が彼女を包み込む。それを突き抜け現れたのは、

『仮面ライダー』あるいは『鋼鉄の英雄』<sup>メタルヒーロー</sup>と、呼ぶしかない代物だった。バイクやメモリと同じく、銀を基調にした全身に、ダークグリーン<sup>ダークグリーン</sup>の装甲が要所を護る。

剣先のように鋭く伸びた一本角を、二本に分かれた付け根が支えている。あたかも兜の前立てか、でなければ「A」の文字だ。

その下で、ルビーをはめ込んだような真紅の両目が燦然と閃いている。

「仮面ライダー………T3 アクセル！」  
タイプスリー

さながら断罪者の告発のような重みを言葉に乗せて、照井春奈は戦士としての名乗りをあげた。

間章：暗斗！ 仮面ライダーは何度死ぬ??

遠くない未来、二〇三四年夏。どこかの国……

極東部に位置するある岩山で、二人の異形の戦士たちが戦っていた。

異形にして、二人の姿は同じ形状だった。

同じ面<sup>マスク</sup>で顔を隠し、同じ黄金の眼球のバツクルを胸に巻く。

そんな彼らがお互いに拳を振るい、蹴撃を打ち合う。

決着がつかないままに、お互いに雷雲たちこめる断崖を駆け抜けていった。

ただそれでも、両者の間には決定的な相違点もあった。

ひとつには、色。

黒を基調としつつも、バリエーション豊かで、カラフルな顔の刻印が彼にはあった。もうひとつの彼は対照的に、金色をベースに同一の獅子の刻印が、要所で牙を剥いている。

ひとつには、力と、技。

金色の戦士には、他を圧する絶対的な力があった。それをもって、老練な戦闘技術でもって致命傷をいなしつづける『黒』を、呼吸を整える間もなく強引に押しつづけていった。

やがて、『黒』の鉄壁の守備にも、蓄積した疲労によつて乱れが生じていた。

彼の肉体がもう十年若ければ、あるいは猛攻をいなし続けて、逆に相手の疲れと焦りを誘い、隙を作れたのかもしれない。

だが、すでに全盛を過ぎた彼の肉体は、技量だけではスペック差をカバーしきれなかった。

それでも、彼は自分が衰えたことを恥じてはいない。悔いもない。一度ならず何度とも死んだ彼にとっては、そうした衰えもまた、生きていく証だった。

金色の覇王の、強弓のようなストレートパンチが、そんな『黒』の胸に叩き込まれた。

「ぐあっ！」

肉体的な限界を感じ取ったドライバーから、変身解除の光が広がり、痛みと衝撃で地を転がる男の全身を包んだ。着物や作務衣のような、特徴的な衣服が野草の切れ端や土で汚れ、一体化していた十五個の眼魂が方々に散乱した。

「まだ、だ……い」

ドライバーを腰から外した彼は、代わりに∞の装飾が頭についた、白銀の眼魂を取り出した。

だが彼が恐れていたとおおり、力を取り戻し切れていない彼がボタンを押したところで、反応らしい反応はない。ただ、淡く光を放つだけだった。

「不完全とはいええ、起動されればその相手はさすがに手間だな」

その両者の間に、一本の手が伸びた。

空中に浮き上がって飛び回る眼魂のひとつをつかみ取ると、もがいて逃れようとする水色のそれを、ツタンカーメンの眼魂をきつく握りかためる。

悲鳴にも似た軋みが、∞の眼魂を下に置くよう指図するもう片方の手が、男の手を止めさせた。

いつの間にか彼らの周囲には、眼魂を手にした者をふくめ、合わせて八人の同じ顔の美少年が取り巻いている。

それらをにらみながら、男は歯を噛みしめた。

「英雄の魂を、なんだと思ってるんだ……い」

義憤にうめく男に、彼らを束ねる金色の怪人は、腕を鋭く伸ばし、彼の喉輪を締め上げた。

「お前こそ、俺たち英雄をなんだと心得る？ 対等の友達気取りとは身の程を知れ」

怒りと絶対的な矜持をはらんだ声を発する怪人の傍らで、水色の眼魂をつかんだ少年は、その手に電流のようなものをほとばしらせた。

今まで暴れていた眼魂は抵抗をやめ、少年は手首に装着した腕輪のデバイス……メガウルオウダーに金色の眼魂をセットした。獅子のパーカーをかぶった怪人へと変身し、不敵に笑う。

召喚した大斧の、刃の付け根にあるユニットに、手にしたツタン

カーメン眼魂をはめ込み、柄のトリガーを引いた。

〈DAIKAI GAN! OMEGACRASH!〉

天へとくり出した斧の一斬が、虚空に三角形の亀裂を作り出す。その中に広がるのは、星の瞬きさえもない、暗黒の亜空間。

その中に、魔人は男の生身を放り投げた。

「お前は、何度も生き返ってるらしいな。……だったら、生きてるか死んでるか分からない状態に置かれれば、どうなる?」

無明の闇が、男と逃げ惑う眼魂のいくつかを吸い上げていく。

悲痛な絶叫が、山を揺るがす。

だが、それは一瞬だった。

その声ごと空間の口は遮断され、声はパタリと途絶える。

辺りにはすぐに静寂が戻った。

後に残されたのは、九人の男たちの、勝利の哄笑だけだった。

### 第三話：疾走の絆（1）

今日の天気予報によれば、八月の暑さは例年よりは和らぐはずだという。

都内のビルにあるこの貸しオフィスは、一切の家具や事務用品はなく、あるのはテーブルと古いパイプ椅子だけだから、風通しもいいし空調設備は作動していた。

西日はすでに落ちて、外から見えるビジネス街では、ぽつぽつと夜の明りがつきはじめていた。

何より、目の前にいるのは氷の女だ。

それと静寂の時を過ごしていれば、暑さを感じるはずがない。

にも関わらず、エイジの額からは汗が噴き出て止まらなかつた。

机をはさんで向かい側にいる女、照井春奈は、一瞬たりとも視線をそらすことなく、品よくアイスコーヒーをストローで飲んでいた。

そうやって液体を吸う音と、空調の動く音と、パトカーのサイレンの音が外から漏れ聞こえるだけだった。会話らしい会話は、かれこれ半時間もない。

仮面ライダーT3アクセル、照井春奈。

そう名乗った彼女は、変身する間もエイジに与えずベルトやシフトカー、それらを自動操作できるタブレットや電話機といった電子機器一切をふくめた私物を没収した。

そうしてあれよあれよと言う間に連行されてきたのが、この貸しオフィスだった。

元々、一時的に『こういう目的』のために借りているスペースなのだろう。

いくら美人だとは言え、いや春奈が美人だからこそ、長時間睨まれていることは堪えた。

沈黙に耐えきれずに、エイジはおそるおそる口を開いた。

「だから、最初から事情は説明したじゃんかっ！」

「聞いている。今まで収集した情報との矛盾点も見当たらない」

「だったら帰してよ！」

「事情は事情。拘束は、拘束」

まるでロボットのような口ぶりですう言った。

「君は偶然手に入れたイレギュラーな力を、非合法に行使している。拘束の理由はそれだ。君を尋問するためじゃない」

「……僕は『黄金仮面』とおなじ犯罪者、つてことか」  
「そうだ」

いささかの逡巡もなく、春奈は言い切った。

「君の処分を、今外出中の上司が検討中だ。沙汰があるまで待機するように」

そうかここは事務所でも取調室でもなく、お白洲だったか。

皮肉な気分を胸に押し隠し、妙に芝居がかった女の声にうなずいた。

それから十五分ほど後に、その上司はコンビニの袋を提げて現れた。

照井よりも一回りほど年上のようにだったが、ハンサムな日本人のようだった。

上等な黒でかためたスーツに、ネクタイに、シャツ。革のグローブ。暑苦しい恰好なのだが、それでも季節外れな印象がないのは、涼やかな目元のせいだろう。

だが、その双眸には独特の眼力があり、ドアを開閉させる動作にも無駄と隙がなかった。

シャープな印象を持つ男は、威圧感たっぷりにふたりを見比べた。春奈は浅く会釈した。

唇を引き結んだまま、上司はつかつかとエイジへと近づいていった。

委縮する青年の前に、男はビニール袋を置いて言った。

「腹は、減ってるか？」

「……は？」

聞き返したのは、なぜか照井春奈の方だった。

そんな彼女の前にも、彼は袋から取り出したおにぎりを置いた。

「すまなかつたな。こんなところに連れてきてしまって」

「……いえ」

「春奈、手荒なマネはしてないだろうな？」

「していませんよ。むろん、抵抗してきた場合はそういった手段も考慮に入れていますが」

「そうか、と男はうなずいた。

声にも独特のハリというか、力強さがある。

「歳も近いことだし、仲良くしておけよ。なにしろ、これから一緒に行動するんだからな」

「は？ と春奈は再び聞き返した。

彼女にも知らされていなかったことなのだろう。氷の女の冷たい表情に、ようやく人間らしい当惑がにじみ出てきた。

と同時に、エイジにとつても男の言葉の意図はつかめなかった。

そんな両人の顔を真顔で見比べながら、彼はさらりと、とんでもないことを口にした。

「照井春奈。お前には『黄金仮面』の身柄の確保と、それに合わせて泊英志君の保護と監視の辞令がくだった」

「……私、聞いてない」

照井春奈は、渋面をつくってボソリと不服そうにぼやき、上司はそんな彼女に、心なしか、意地悪げな目をしてみせた気がした。



### 第三話：疾走の絆（2）

いくら母や父とケンカした直後でも、ここまで気まずい食事にはならないだろう。

食事自体もコンビニ飯の粗末なものだし、ひとりはこつちをにらみ続けたまま食事をしていたし、もうひとりとは反目する二人の若者の様子にはお構いなしといった具合に、ハンバーガーを食べていた。

そんな苦痛の時間の中で、誰よりも先に食べ終えた男が「さて」と切り出した。

「君から何か聞きたいことはあるか？」

先輩。とがめるような声が、横から飛ぶ。春奈を見返してその上司は論じた。

「彼が仮面ライダーとして活躍しはじめたあたりから、『黄金仮面』もこの日本にやってきた。おそらく、彼も無関係というわけじゃないはずだ。今後どう行動していくにせよ、せめて自分が置かれた立場と周囲の状況ぐらいは、把握させてやってもいいんじゃないか？」

男はちぎってなげるような口調で言った。

照井の上司というのと、初対面の時の隙のなさからもつと恐ろしい人物かと身構えていたが、こちらは部下とちがって話のわかる人間らしい。

意図的に、恐る恐る、といった感じでエイジは質問をした。

「じゃあまず、あなたたちについて。本当に、インターポールなのかとか。照井さんが変身した仮面ライダーとか」

「そうだな。まずはそのあたりからか」

男は自分の周辺のゴミをひとつにまとめてから、空いたスペースに組んだ手とヒジを置く。

「俺たちは、間違いなくインターポールの捜査官だ。『Forestal』<sup>フォレストワルン</sup>。日本を中心に頻発する超自然的な犯罪を、国境間を超えて取り締まるために設立された実働部隊。春奈も俺も、そのメンバーだ」

おおまかに言ってしまうえば、特状課のワールドワイド版と言ったと

ころか。

エイジはそう理解し、先を促した。

「元々俺たちは、財団Xという組織を追っていた」

「聞いたことがあります」

死人を蘇生させる技術、NEVER。

地球の記憶で人間を変身させるガイアメモリ。

人間の欲望を利用して莫大なエネルギーを発揮するコアメダルやセルメダル。

コズミックエナジーによって押しつけた者を、星座になぞらえた怪人へとマテリアライズさせるゾディアーツスイッチ。

そういった超常的なものの研究開発に対する資金援助し、見返りとしてそれらを武器や兵器として売りさばく、いわゆる死の商人だ。

エイジがこの半月で倒した怪人たちの中にも、そこから流出した経緯を持つ者たちがいた。

「度重なる大規模な計画の破綻と離反者の続出によって一度は衰退していたが、ここのところ勢力が息を吹き返してな。その調査をしていたところに、あの『黄金仮面』……ギルガメッシュたちに行き着いた。同じ顔を持ったあいつらの協力によって、財団は既存の技術のグレードアップ、眼魂やロイミュードのボディの増産、それを使ったマーケットの拡大をしていたようだ」

「この国じゃヒーロー扱いですけど、奴らそんなえげつないことやってたわけですか」

エイジの脳裏に、あの金髪の少年の言葉がよみがえった。

「俺の信念のために惜しみなく与え、俺の目的のために容赦なく奪う」

これも、その理念の一環だとも言うのか。

「じゃあギルガメッシュは、財団が開発したサイボーグか何か、でしようか」

「いや、肯定はしがたいな。言っただろ、奴らは衰退していた。単独で一からあんな化け物どもを生み出せるだけの余力があったとも、思えないが」

自分の中でも結論は出ていないのだろう。思案する様子で、男は口

元に手をやった。

あたりは、再び静寂に包まれた。

居心地が悪くなったエイジの向かい側で、ガタリと物音がした。春奈が立ち上がった音だった。

テーブルのゴミをひとつにまとめた彼女は、それを手に部屋から出ていこうとしていた。

「おい」と男がそれをとがめた。

「捨てにいくだけです。ご心配なく。命令であればその少年の監視はしますので」

上司に対しても阿る様子はみじんも感じられず、彼女はドアの向こう側へと行ってしまった。

階段を下りる音とともに気配が消えたのを見計らって、「たく」と男は毒づいた。

彼女自身には聞きづらかったことを、エイジはあらためて男に尋ねることにした。

「彼女、なんなんですか？」

「照井春奈。十八歳の時、飛び級で風都工科大学ふうとを主席で卒業した天才児。身体能力、頭脳ともにすぐれていたから、我々がヘッドハンティングした。何より彼女には、ある適性があった」

「適性？」

「T3ガイアメモリへの適性だ」

人とメモリは惹かれ合う。

そんな言葉を、エイジ自身も何度となく聞いた気がする。

ガイアメモリは多種多様な形態や能力を使えるが、一方でそれぞれの体質に適合しなければ、万全の力を引き出しきれないのだ。

特にその傾向が強いのが、かつて財団Xが開発していたT2ガイアメモリだ。

メモリを体内に取り込むための生体コネクタの処置を必要とせず、通常の攻撃では破壊ブレイクされない。

その代わり、まるで意思があるかのように、メモリが人を選ぶのだという。

その中心たるエターナルメモリは、プロトタイプのT1の時点さえ問題が多かったようだ。

結局T2の現物は粉碎されたが、残されたデータをもとにForest1で開発されたのがT3だという。

ユーザーの肉体は変化させず、純粋なエネルギーを抽出して物質化させる。

だからT1、T2のようなバリエーションは持たないが、中毒症状などのデメリットはない。

「まあ、それでも適性という厄介な性質が残ってしまった。だが春奈は開発されたメモリすべてに平均的以上の適性を示し、特にスターティングシステムであるアクセルメモリとの適合率は常に100%だった。くわえて敵の精神干渉系にも耐性があった。つまり、洗脳によつてシステムを悪用したり、こちらの情報を敵に漏らしたりする可能性が低い。だから彼女は選ばれた……内面はともかくな」

なるほど、とエイジは相槌を打った。

だが、男の説明を完全に理解したわけではない。把握した情報は半分にも満たないだろう。

青年にあったのは、理解ではなく納得だった。

自分を確保する直前、仮面ライダー姿の照井春奈がつぶやいた言葉。

「仮面ライダーは、素人が道楽気分で名乗っていい名前じゃない」

あの時は反感を覚えた。だが反論もできなかった。

そして今、彼女のことを知って、ますますぐうの音も出なくなった。

国際的な組織に公認された、世界の秩序を護るために選ばれた戦士、それが仮面ライダーT3アクセルだ。

その自負と責任が、彼女にああいう言葉を言わせたのだろう。

そして自分の動機もきっかけも、決して純粋なものとは言えなかったのだから。

### 第三話：疾走の絆（3）

「それで、僕はどうなるんですか？」

エイジは改めて、男に尋ねた。

「どうもしない。君はこれまでどおりにやれば良い。どうせ止めたつて聞くつもりもないだろう」

ダークドライブの意義を否定もせず肯定もせず、男は言った。

「それに俺たちには逮捕の権限もないしな。むしろ、こういう拘束自体が本来なら問題なんだけどな。君を逮捕するのは、日本の警察の仕事だ」

ベルトをふくめたエイジの私物を机の上に置き、男はぞつとしない言葉を言い残した。

「仮面ライダー 逮捕」の文言とともに映し出されるダークドライブの映像。男性Aという伏せ字ともに公開される顔写真と年齢。

そして何より自分に手錠をかける相手は自分の父や現八郎といった身内で……

そこまで想像して、エイジは怖気を振り払った。

私生活で使用している携帯端末をカバンから取り出し、再起動させると「うわっ」と声を漏らしてしまった。

母からの不在着信は、じつに二十五件。彼女の不安と焦りが、その表示からつたわってくるようだった。

男は、無言の手のしぐさで「かけてもいいぞ」と告げた。

どのみちここで起こったことは、話すに話せない。

エイジは音を最小に設定しなおした。なるべく耳から離してリダイヤルをかけた。

「もしも……」

〈今どこ!?〉

そしてこの判断は正しかったと、霧子の怒号を聞いて思った。

〈何度も連絡したのよ！ 今まで何してたの!?!〉

「いや、ちよつと知り合いに誘われて外食に」

〈それならそうと前もって連絡入れなさいッ、ご飯冷めちやつたじや

ない！」

ウソは言っていない、とエイジは自分に言い聞かせた。

この男とは今日からの付き合いとはいえ知り合いには違いなく、こんなビルの一室で、コンビニ飯ということに目を瞑ればこれの立派な外食だ。

「ごめん、朝には帰って食べるから！ それじゃ！」

まだ説教が飛びそうな気配を察したエイジは、有無を言わせず予定を伝え、それから通話を切った。

わずか数秒間のことだったが、この目まぐるしい一日の中でも最大級の疲労感が、エイジを包んでいた。

重い吐息を漏らす若者を、男はじつと見つめていた。

そして生真面目そのものといった表情は変えないままに、

「君は、ご両親に自分が仮面ライダーだと告げていないのか？」

「かんとんに言えるわけないでしょ」

「知人にも？」

エイジは首を振った。

厳密に言えば当然りんなは知っているが、そこまで踏み入った事情を話すまでもないだろう。

そうか、と男は肩をすくめた。

思わせぶりな態度に、エイジはつられて

「……なにか問題でも？」

と尋ねた。

「べつに。こちらとしては君のプライベートにまで干渉する気はない」

と男はすんなりと答えた。ただし、

「だが気を付けることだ。秘密っていうのは、それが大きいほどに、隠せば隠すほどに、『まさか』という最悪のタイミングでバレるからな」

そんな忠告を、言い添えた。

「……それ、説教ですか？」

『秘密のスパイさん』にどうこう言われる義理はない。そう思って反発してみせた若者に、男ははじめて表情をくずしてみせた。

学生の頃は相当な美少年だったであろう面影を残すその目を細め、ほろ苦く笑った。

「いいや？ 俺の過ちからの経験論さ。それも今となっては、かけがえない友人達<sup>ダチ</sup>ができた、大事な思い出<sup>オモイデ</sup>だけだな」

### 第三話：疾走の絆（4）

翌朝の休日、無事家に帰ることができたエイジが目を覚ましてリビングに行く、朝食が並んでいた。

温め直したトンカツに、千切りのキャベツ。

そのはす向かいで、母はフレンチトーストに冷たいミルクにトマトサラダといったベストな献立を、黙々と食べていた。

「……え、いや。朝からこれは重」

母にギロリと、睨まれた。猛々しくエンジンがうなる音を、母の背後から聞いた気がした。

そこでエイジは、自分が昨晚「残した夕飯は朝飯として食べる」という、電話越しに口約束したのを思い出した。

「……いただきます」

泊家の支配者の冷視にさらされながら、手を合わせて箸をとったエイジは、心で泣いた。

味はともかくとして、疲れの残る朝に、ズシンとくる脂っこさはこたえた。それでも、文句を言わずに完食した。

一種の達成感と引き換えに、軽い頭痛とひどい吐き気がやってくる。

「うう……」

小休憩をとったあと具合の悪さはなかなか消えてくれなかった。

少しでも胃を軽くしようと、エイジは散歩に出ることにした。

着ているのは通気性の良い薄手のパーカーに、シャツ程度。スニーカーに履き替えて、玄関のドアを開けた。

照井春奈が、立っていた。

エイジはドアを閉めた。

最初は、ただの見間違いだと思った。

目をこすったり開閉を繰り返したりしてから、ふたたびドアを明けた。



照井春奈が立っていた。

エイジはドアを閉めた。

次に彼は、これは疲れによって見た幻覚だと思った。

腰に手を当て、深呼吸をくり返し、動悸を鎮める。

それから浅く呼吸をくり返してから、ドアを開け放った。

照井春奈が、にらんで立っていた。

エイジはドアを閉めた。

これは夢だと思った。今これを見ている現実こそが、悪夢なのだと。

あらためて深呼吸を繰り返し、目をつぶって玄関に腰を下ろし、頭を抱える。

それにたっぷり十数秒使ってから、覚悟を決めたエイジは思い切りドアを明けた。

やはり照井春奈はそこにいた。

こうなれば、百回似たようなことをくり返しても、彼女はそこに仁王立ちしていることだろう。

エイジは目の前の存在が現実のものだと理解した。

そして、即座に閉めようとした。

だが彼の手よりも早く、彼女の爪先がドア先に差し込まれた。

そして抵抗する間もなく腕をつかまれ、外の世界へと引きずり出されたのだった。

「ギルガメッシュの件で聞き込みに出る。ちよつと付き合え」

と、相変わらず可愛げのない調子で言い放ち、まるで連行のように、色気のない体勢のまま手を引かれてた。そして、近所に停めてあったレンタルらしきハイブリッドカーに、拉致同然で助手席に押し込まれる。

こうした態度からもわかるように、これはデートでもなければ、相棒と認めて事件への協力を申し出たわけでもなかった。

春奈いわく、

「君への監視も私の任務とはいえ、本命はギルガメッシュの搜索だ。となれば、私の都合に君が合わせてもらうしかない」

という、理不尽極まる理由だった。

しばらくは、無言のドライブがつづいていた。

特に目的地やゴールを定めていないような走りは、ただでさえ考えられていることが読めないのに、一層に不安をかき立てられた。

さらに彼女はフリーハンドで取り付けた携帯端末越しに、奇妙な『儀式』をはじめたのだった。

〈検索をはじめよう〉

通話に出たのは甲高くて少年めいた声だった。

それでいて幼さは感じられず、むしろ知性や沈着さを持っている。相手の映像は伏せてあっても、エイジはそういう印象を受けた。

〈キーワードは、『ギルガメッシュ』、『黄金仮面』、『財団X』……ここまでは、君が先日依頼したように検索済みだ。だが、どうにもルートが絞りきれない。そもそも、ギルガメッシュ本人自体が神話と伝説と謎に満ちた英雄だ。むしろぼくは、個人的に彼のことを調べてみたいよ。いやじつに興味深い〉

「……それは後にしてください。それより、奴らを何者が、いつ、どういった目的のもとに生み出したのか。なにも分からないということですか」

〈そうなんだ。財団との繋がり、国内外での犯罪までは閲覧できる。だが、それ以上が不明瞭で遡れない〉

運転は自動操縦に任せたまま、春奈は口元に指をやって思案した。そしてポツリと、

「……地球の全ての事象を記録している『本棚』で検索できない。ということは、そもそも地球にその記憶がない」

とつぶやいた。

自身の言葉に、彼女はハッと息を呑んだ。だが顔を上げたときには、冷徹な女捜査官に戻っていた。

「キーワードを変更。『財団X』を除外。代わりに追加。……『眼魂』、そして『イダルマ』」

呪文のような言葉の中に、最近よく耳にする単語と、逆にまったく聞き覚えのないワードが入り混じる。だが、他人が介在する余地のないふたりの会話を折ることはためらわれた。

「……なるほど、そういうことか！」

多少興奮入り混じった声で、少年が言った。

へたしかに、異世界の代物ともウワサされる眼魂に端を発するというのであれば、地球の本棚で調べきれないのも納得がいく。いや、さすがだハルちゃん。まさか答えそのものへ行き着こうというのではなく、消去法の手段として本棚を使うとは。お母さんゆずりの豪快さと、父親ゆずりの頭の冴えだ」

「両親は関係ありません。あと、ハルちゃんはやめてください……」  
エイジのほうをそれとなく気にしながら、照井春奈は顔をしかめた。

電話の相手はどうやら豊富な知識量を持つらしいが、反面人の機微にはうといようだ。た。

春奈の不機嫌さをさらりと流すようにして、電話の魔少年は少し時間置いてつぶやいた。

「君の言った条件で、あくまで地球上で起こった事象に絞り込んだうえで、眼魂がらみの事件を何度も解決していた民間の集団がある。そして彼らの中核ともいえる人物がふたり、ギルガメッシュの登場と前後して立て続けに失踪している。うち一名には、その『イダルマ』という男との接触が確認できた」

「その、組織の名は？」

食い入るようにその端末をにらむ春奈とエイジ。だがその答えは、電話の向こうの荒々しい扉の開閉音によってかき消された。

へなんだ。いたのかい」

へおい、ハルって……まさか、今それ春奈とつながってんのか!?」

聞こえてきたのは、べつの男の声だった。

少年とは真反対に、どうにも言葉に感情が出やすいタイプらしい。そしてこの男も、言葉から推量すると春奈とは知らない仲ではないらしい。

だが彼女はというと、男の声が聞こえた直後、その横顔から感情の色が消えていた。

へああ、彼女の依頼を受けて調べものを……って、ちよつと？」

へいいから、ちよつと貸せ！」

電話を『相方』から奪い取ったらしいその男は、

へうおいゴラ春奈ア！」

という大喝から始まり、早口でまくし立てた。

へお前日本に帰ってきてんならなんで風都に帰ってこねえ!? この親不孝モンの不良娘が！ こっちは色々心配してやってんだぞ、せめて連絡ぐらい」

春奈は真顔で、かつ無言で、スピーディーによどみない動作で、通信終了のボタンをタップした。

「……今の、なに？」

「私に質問するな」

そう言うがはやいか、彼女は車が赤信号で停車したのを見計らって、自動運転から手動へと切り替えた。

ふたたび青になると同時にギアを切り替え、角度を攻めてUターンした。

大きく揺さぶられ、エイジは窓ガラスに頭をぶつけた。

その痛みをこらえながら、

「今ので何かわかったの!？」

と、重ねて質問をする。

二度目の『私に質問するな』は、なかった。

「聞いているとおりだ。余計な茶々が入ったが、あそこまで分かればあとはForest1のデータベースで照会できる」

ハンドルを握りしめながら、通話を切ったその手で今度は端末でべつの操作しはじめた。

ディスプレイに表示された文言に目を通した彼女は「やはりな」とちいさく独り言を漏らした。

「その民間組織の名は、『不可思議現象研究所』。場所は陸堂市瞳ヶ丘五丁目。……大天空寺だいてんくうじという寺だ」

### 第三話：疾走の絆（5）

そこはまるで、時代の流れに取り残されて、ぽつりとたたずんでい  
るような、そんな構えの寺だった。

山を背に負い、前方にそびえ立つのは、無骨なつくりの門。その中  
から、さながら武家屋敷のような、荘厳なたたずまいの境内がのぞい  
ている。

柱に取り付けられた板札には、『大天空寺』の四文字。

……そしてその傍にある、まるで宴会芸の演目のような、手作り感  
あふれる『不可思議現象研究所』の看板のうさんくささと古臭さが、寺  
の神秘性を台無しにしていた。

停車した車の中から、山門の奥の様子をうかがおうとする照井の横  
顔を、助手席からエイジもうかがっていた。

「さっきの話にも出てきた『イダルマ』って、誰？」

こちらに対する注意が散漫になっている今なら、口を開くかもしれ  
ない。

そう目論んで、タイミングを見計らったの質問だったが、振り向き  
もせず、相槌もない。

（……かわいいげのない）

と、あきらめかけたその矢先、

「数日前、県境の河川敷で殺されていた男の名だ」

意外にも、返答はもどってきた。

軽くおどろくエイジだったが、女のほうは彼を意識した様子さえな  
かった。どうやら自分自身の頭の中を整理する一環として、話しかけ  
ているらしい。

「といっても、本名かどうかはわからない。戸籍も見当たらず、家族、  
交友関係は一切不明。遺体が回収された今となっても、遺留品からは  
何もつかめず、DNA検査にさえ引つかからない。『地球の本棚』にさ  
え、ヤツのログはなかった」

「そんなことが、あるわけが……」

あらゆるものがデータ化され、管理される世界において個人の身元

特定はほぼ100%にまでなったとされる現在だ。血液一滴からでも身体的特徴どころか、社会的な立場までも洗い出せるといわれるほどにまでなったというのに、そんなことはありえるのだろうか。

「そいつが、ギルガメッシュたちと財団とのパイプ役だった。奴らの正体を知っていたはずなんだが、ようやく見つけたのは死体だった。組織か連中、どちらかに排除された可能性が高い」

「それが、あの」

自分も居合わせたあの現場では、そういった暗闘の背景があったのか。エイジはここに至るまでの彼女たちForest1の苦労を想像し、あと一歩で手がかりをうしなつた無念に同情した。

「で、生きてた頃のイダルマさんと接点があったのが、この寺ね」

納得とうなずく彼をよそに、彼女は車を降りようとしていた。

「あ、待って」

とエイジも外に出ようとして、思い留まる。

携帯端末とシフトブレス。それさえあれば、ベルトごとダークドライブを呼び出せる。

当事者がすでにいないとは言え、まだここは敵とつながりがあるかもしれない施設だ。警戒しておいても損はないはずだ。

それとなく身に忍ばせてあるのを確かめてから、エイジは車から降りた。

次の瞬間、その眉間に、ごり、と硬い感触が押し当てられた。

「わかっているとは思うが」

助手席側のドアに回り込んでいた春奈が手にした、銃の発射口によるものだった。

「君に絶対に変身はさせない。万一のことがあつたとしても、私が君を保護するからダークドライブは必要ない」

「……わかつてるよ」

銃を突きつけた相手に言うことじゃないだろ、と内心でツツコミを入れたくなつたが、おそらく本人の中では矛盾はないし、その約束はウソというわけでもないのだろう。

ため息をこぼしながら、歩き出した彼女を追う。

労力を消費するばかりの急こう配の石段をのぼり、山門へとたどり着いたときには、スタミナを相当に消耗していた。

「なんでこう、不便なものを作るかな……っ?」

と愚痴をこぼしてヒザに手をついたとき、

「……わかつてる。あいつ、タケルには俺もいくつも借りがある。やるだけのことはしてみせるさ」

ふと、数段上のゴールから聞きなれた声と見覚えのある姿があった。

「えっ!」

思わずあげてしまった声に、スーツ姿のその男が振り返って反応した。

あわてて身を隠そうとしたが、疲労と衝撃とで身体が機敏にうごいてくれなかった。

背を向けるだけで精一杯な彼の姿、男は……赤いネクタイの刑事、泊進ノ介は捕捉した。

「エイジ……? お前、こんなところで何を?」

「え、いや……ッ、父さんこそ何を?」

親子ふたり、似たような質問をぶつけ合う。

背後で坊主が興味深げに見守り、彼を一瞬見てから、

「古い知り合いの寺だ。実はここで修行したこともあつてな。今から二十、いや三十年前か……」

「……父さん、その時いくつ?」

何となしに言いにくそうに答えた父に、エイジは訝しみの視線を向けた。だが、疑問を持ったのは進ノ介のほうだったろう。

「俺のことは良い、問題はお前だ。なんで縁もゆかりもないこの場所に……?」

「なんでって」

いつぞやの自宅での質問より強い口調で、エイジを問い詰める。

春奈は我関せず、という態度でふたりの間を素通りし、山門までのぼりきっていた

「ほら、大学の課題だよ。調べもの。そんなことまでいちいち報告に



あげなくちやダメな」

ごまかしもかねて階段をのぼろうとしたエイジの腕を、進ノ介がつかんだ。

四十路を超えても振りほどけないほどの強い腕力と眼力に、エイジは気圧された。

「いいかよく聞け。今、この世界に良くないことが起きようとしている」

「それって、この間大学おそった『黄金仮面』とかいうヤツのこと？」

「そうだ。だからこそ、フラフラせずに霧子を安心させてやれ」

「フラフラって……」

自分がどれほどの葛藤と戦いを経てきたと思っっているのだろうか。

話を打ち明けていないからしようがないのだが、それでも自分は、事態の解決に間違いなく父よりも貢献しているし、父よりも先に真実に迫ろうとしているのだ。

そうした気持ちだが、エイジに反抗心を起こさせた。

「父さんこそ、もつと家に帰ってあげたら？　もう変身もできないのにこんなところまで顔突っ込んで、いつまで仮面ライダーの気にいるのさ」

腕を振り払ってこう言った瞬間、さっと父の顔色が朱に染まった。

だが自覚はしているフシはあったのだろう。苦々しげに唇を噛みしめてうつむいてしまった。

言い過ぎた。その様子をエイジは後悔したがデータと違って発してしまった言葉までは取り消せない。

「……じゃ、そういうことだから」

とだけ口数少なく言い捨てて、気まずい空気から逃げるようにして、小走りでエイジは石段を駆け上った。

### 第三話：疾走の絆（6）

「……」

「……………」

山門の前では、腕組みしている男女が向かい合い、にらみ合っていた。

女の方は当然先行していた照井春奈だが、男のほうは本当の意味での作務衣を来た、精悍な顔立ちの男だった。

無言で春奈に負けまいと、いかめしく目を吊り上げ、唇を真一文字に結んでいる。

その雰囲気は坊主というよりかは、軍人のようだった。

「これこれ、ジャベル殿。お客人を威嚇するものではありませんぞ」

とその男の背からたしなめたのは、先ほど進ノ介と話をしていたらしい坊主だった。

紫衣をまとったその男は、夏の日差しにそり上げた頭を照り返させて名刺を差し出した。

「拙僧は大天空寺住職、正規住職の、山やまの内御成と申します」

やたらと住職のイントネーションを強めて自己紹介をする。

だが、その背の看板や名刺の肩書きにはそれとは別に、『不可思議現象研究所』の文字があった。

「インターポールの照井です」

「あ、泊です」

「すると貴方が、刑事殿の息子殿！」

「…………その呼び方おかしいでしょ…………」

門番の男の、視線が突き刺さる。そんな中で境内へと、御成と名乗った坊主が先導する。

さながら時代劇のセットのようにつくりを見渡していると、

「先ほどの者が失礼いたしました。決して悪い男ではないのですが、不幸が重なり気が立っております…………」

「つていうか、父とは知り合いませんね。父さんは、何の用でここに」

話の腰を折るな、と言わんばかりに、エイジの脇腹に無言の肘鉄が入る。

つんのめるエイジを押しよけるようにして、春奈が聞いた。

「その不幸というのは、この男に関係することでは？」

彼女の取り出した通信機器から、空中に小太りの男の胸像が立体的に浮かび上がる。

それを目撃した瞬間、坊主はクワツと目を剥き、口を開けた。

「なんと面妖な！」

「いやこれ、ふつうの3Dホログラムだから」

と指摘するエイジだったが、男の顔自体は彼にも憶えがない。おそらくはこれが、河川敷で死んでいたイダルマという男なのだろう。

はあ、ほお！……と現在の映像技術にひとしきりの感心を示していた御成だったが、死んだ男の、ふてぶてしささえ感じる面をながめて、

「いや、不幸というのはそれこそ刑事殿にお願いしてある件なのですが……そうですね。悪く言う気はないのですが、この方がお越しになられてから、事件がはじまった気がいたします」

御成はそう言って、遠い目とともに過剰なまでに思わせぶりな態度をとった。そこでようやく自分たちがお堂の前に至ったことに気が付いたようだった。

「さあさ。立ち話もなんですから、どうぞ中へ」

と、来客の出迎えをいそいそと準備する。

蟬の合唱を聴きながらその姿を見て、

「つながった……ような気がする」

とエイジはつぶやいた。

父が探しているという古い顔なじみ、イダルマの訪問、その後この寺に起こったという不幸。ギルガメッシュたちの暗躍。

一見ばらばらに見えるこれらは、きつと一本の事象でつながっている。そして、つなぎ合わせて推測できる時系列をさかのぼっていくと、やはりスタートラインはここなのだ。

「照井さん！ やっぱここが大当たりだ……よっ？」

春奈の方を向いて、エイジはしばし言葉を喪った。

彼女は靴を脱いだその足に、どこからともなく取り出したスリッパを並べて履いた。

緑の下地に、肉厚の金字で片や『照井家』、片や『娘やねん』とプリントされている。

坊さんにしてはすこし変わっている御成でさえ呆気にとられて見ている中、ふたりの視線に気づいた彼女は、真顔で

「マイスリッパ」

……と、みじかく答えた。

### 第三話：疾走の絆（7）

不可思議現象研究所。

そのうさんくさいネーミングにふさわしく、この住職ひとりだけがそう名乗っているだけらしい。

そんな民間組織も、かつては多くの仲間とともに、ガンマ眼魔と呼ばれる存在たちの起こす難事件をいくつも解決に導いてきたらしい。

この組織の中核にいた人物が、先代の住職である通称『おつちやん』。

その彼によって仮面ライダーゴーストとしての力を与えられたのが、さらにその先代住職の息子であるゴーストハンター、てんくうじ天空寺タケルという男なのだそうだ。

彼は、思想犯罪者集団ネオシエードの検挙、バタフライエフェクトバタフライエフェクト事件。そしてエイジが生まれる直前に起こったさいぜんみちひこ財前美智彦によるバ  
イオテロなどで、進ノ介と共闘したらしい。

「かく言う拙僧も、情報収集に荒事にと、多方面で尽力いたしました  
な」

御成はそう得意げにうそぶいたが、まあこれは聞き流して良いはず  
だ。

都内で起こった大事件を片付けた彼らはそれぞれの道に進み、事実  
上ここに不可思議現象研究所は解散となった。

当時住職代理だった御成は研究所の継続を主張していたようだが、  
誰一人として乗っては来ず、それどころか人望はジャベルに奪われ住  
職の座はおつちちゃんにかっさらわれと、散々なあつかいだっ  
たらしい。

それでもタケルだけはさすがに不憫に思ったらしく、学生生活のか  
たわら、彼をサポートし続けてくれたらしい。

そのおつちちゃんが、去年の初頭に行方不明となり、その後遺体とし  
て見つかった。

彼の死因を探っていたタケルもまた、その年の夏に姿を消した。

「我々の仲間も捜してくれているのですが、杳として行方は知れず

……そこで刑事殿にも、ご協力を仰いでいる次第です。エイジ殿は、そのお父上のお手伝いでここに？」

「あ、いや僕は父とは関係なく」

「彼のことはどうでも良いでしょう」

答弁しようとしていたエイジの言葉をさえぎって、春奈が進み出した。先ほどのホログラムを映し出し、

「それよりも先ほどの話と、この男がどう関係あるのか。それをお聞かせ願いませんか」

と尋ねた。

「そうでしたな、ポール殿」

「インターポールです。国際警察機構の」

「……中学校の英語の教科書に出てきそうな名前だな」

春奈は口元に手をやりむせ込んだ。

ややオーバーなほどにむずかしい顔をして、御成は首をひねった。

「この御仁、姓名までは名乗られませんでしたな。おっちゃん殿、いえ先代がじきじきにお会いになられ、それからすぐに彼をともなつて、行き先も告げずにどこかへと。まあ先代は元々そういうところがある方でしたから、その時には気にも留めませなんだが……まさか、あれが今生の別れとなろうとは」

やや悔恨を口の端に浮かべ、

「せめて場所さえ聞いておれば……」

と締めくくった。

エイジと春奈は、おたがいに軽い落胆の表情を見せ合った。

前後の事情は判明したが、けつきよくこのイダルマという男が何者かまでは分からずじまいだ。

春奈がさつきと席を立とうとした刹那、

「イダルマですか」

背後から、しぶい男の声が降ってきた。

突然会話に割り込んできたあげくに、おどろいて顧みると、門の前

であった作務衣の男が、むっとりとした顔のままホログラムを見て答えた。

思わぬ伏兵の出現に、あの春奈でさえ固まっていた。

「知って、るんですか？」

その場にいた全員が硬直するなか、まつさきに呪縛のような混乱から逃れて聞いたのがエイジだった。

男は、重々しくうなずいた。

それに憤慨したのが、御成だった。

「また貴殿は涼しい顔でおいしいところを持っていくウウ……！　つというか拙僧、それは初耳ですぞっ！」

十本の指すべてをわななかせて歯噛みして、喉と唇を震わせる住職に、男はただボソリと一言

「誰も、聞かなかったので」

とのみ答えただけだった。

### 第三話：疾走の絆（8）

夏の空が、ひたすら大きくて遠かった。

そのなかを、白い入道雲が悠然と泳いでいる。

霊山から吹き下りてくる風があるから、都心よりかは多少は快適だった。

エイジたちの今いる場所が、そこにいるだけで静けさとも悲しさをともなう特殊な環境下であるからかもしれない。

彼らは今、墓場に立っている。

「呆けた顔をしているな」

「……そりゃあ、ねえ」

「たしかに悪趣味だが」

先代住職の亡骸をおさめた巨大な墓に、敬意がさほどこもっていない合掌をしたたままに、春奈がたずねた。

人間の倍ほどはある、眼魂状の墓石。金色を惜しみなくつかったカラーリング。瞳の中心にはめ込まれた、ドヤ顔でピースをしている白髪の老人の遺影は、故人の強烈な個性と自己顕示欲を想像させた。

見るからに奇人変人の類とわかるのだが、それなりに人望はあるらしい。真新しい仏花が、色とりどりに献じられていた。

「いや、これもすごいけどさ。さっきの話」

ジャベルという男が、イダルマの素性を語るに際して告白した事情は、エイジの世界観を二転三転させるものだった。

眼魔が治めているという異世界の存在。

人の願いをかなえるという超越的存在グレートアイと、その制御システムであるガンマイザーの暴走。

それらを司っていた大帝一家の、悲劇的なすれ違いの物語。

あらましかでも混乱するような複雑な事情だったが、咀嚼できない内容なら、呑み込むしかない。

かんとんに要約すると、その異世界でジャベルはかつて武官的立場



の人間で、対するイダルマは冥術……こちらの世界で言うところの科  
学者だったらしい。

イゴールという上司とともに人間世界で暗躍し、眼魂や眼魔の力欲  
しさに接近してくるネオシエード、財団Xといった犯罪者や権力者た  
ちとの連絡役をしていたそうだ。

「イダルマは才能はともかく、とりわけ影の薄い男でした。おそらく  
は、アラン様……現大帝でさえ、その存在をご存知でないでしょう」  
かくいうジャベルも、人間界で二、三度ほど顔を合わせたただけだ  
という。

誰も聞かれなかったということ以上に、眼魔世界の軍服を脱ぎ捨て  
て年老いた彼を間近に見ても、とっさに思い出せなかったという。

「イゴールはかつては自信家で傲慢な男でしたから、みずからがそう  
いう雑務や交渉の場に出ることはせず、そういう場でイダルマを使っ  
ていたようです」

だが、そのイゴールのもとに人間の協力者が現れた。

西園寺と名乗ったその男は人間社会の仕組みを熟知し、かつ交渉術  
や人心を利用するすべにも長けていた。それゆえに重宝され、イダル  
マの立場や存在感はさらに希薄なものとなっていった。

「事件の後、肉体を取り戻したあの男がどうしていたかは、知りませ  
ん。ただ二年ほど前にふいに姿を現し、イーデイス長官と面会しまし  
た」

「イーデイス長官、というのは？」

「おつちやん殿の本名ですぞ。眼魔の世界では高名な天才だそうでし  
て」

御成が半ば強引に会話に割って入り、しみじみと遠い眼で虚空を眺  
めた。

「先代は何かと問題を起こす人物ではありませんでしたが、立派な方でした。  
あのような非業の死を強いられるいわれなどありません。ポール  
殿も息子殿も、今は刑事殿と別行動をとられているようですが、真実  
を追い求めたいという気持ちは同じ。ともに手を取り合い、事件を解  
決いたしましょうぞ！」

感激と追憶に涙ぐみながら、御成はぐつと強くふたりの手を握った。

あいまいにうなずくふたりには、その住職をはさんでジャベルが微妙に眉をひそめたのが見えた。

「……………立派……………」

と小さくつぶやいた彼はそれからすぐにむつつりと押し黙ってしまった。

それから故人の墓参りを言い訳に御成から逃げてきたふたりだった。

クールダウンと情報の整理のための時間が必要だったとも言える。

「でも、人が自動車で空飛ぶ時代に、幽霊に不老不死のアバターに異世界だよ？ 突飛にもほどがあるでしょ」

「空を飛ぶのはさすがに君のトライドロングくらいだがな。君は、幽霊の存在に懐疑的なのか」

「あれ、ひよつとして照井さんは信じてる？」

意外の念を込めて聞き返したエイジに、春奈は仏頂面のまま、

「鵜呑みにするわけでもないがな。おか」

「丘？」

何かを言いかけて、言葉を詰まらせた。いぶかしむエイジの前で咳払いしてつづけた。

「…………母も、若い頃少女の幽霊を見たらしい。それに、眼魂がらみで不可解な現象がいくつも報告されている。幽霊やオカルトも、アンノウエネルギーや実在する原理や現象で説明できるものである可能性も捨てきれない。我々のように」

『空飛ぶ自動車』も、ふつうの人から見れば十分に幽霊じみたものか」  
自虐的にそうつぶやいたエイジに向かって、ちらりと女捜査官は目を向けた。

墓前から立ち上がった彼女は、エイジの脇を通りすぎた。

「ようやく理解したか？ 君の力は、この二〇三五年においても過ぎた技術と力だ。容易に開放していいものじゃない。それよりも異常

な連中も目につけられている。それを理解したらさっさと手放すことだな」

「なんでそういう方向に持っていくかな……」

うんざりした気分を隠さず、彼女の方へと振り返り、

「しようがないでしょ。そりゃ力も世のため人のために使うでしょ。

僕、もう仮面ライダーだし」

と答えた。

表情も見せず、春奈は鼻で嗤った。

「父親の一挙一動にうろたえる仮面ライダーか」

(……ほんとうに、可愛くない)

痛いところを端的に、かつ正論で突かれた。しかも、まだ新しい心の傷をだ。

普段なら聞き流すこともできただろうが、さきほどの進ノ介のいさかい、その苦い記憶を思い返して攻撃的な気分になっていた。

なので、悪意はなかったが、ついその反論する口調にもトゲがあった。

「照井さんなら、わかってくれると思ってただけだな。さつきも家族や地元とあんまり仲良くできてなさげだったし」

墓地を出ようとした照井春奈と足が止まった。

次の瞬間、彼女はきびすを返していた。

ひるがえったジャケットの下から腕が伸びて、エイジの胸倉をつかむ。

表情に劇的な変化はなかった。

ただ、明らかにその眼光はいつも以上に鋭く、冷たく光っている。にも関わらず、その瞳孔の奥底には、激しい怒りの火が渦巻いていた。

「キサマと一緒にするな。私があの街を出たのは、より広く世界を守るためだ。父親への意地だけでヒーローを気取るようなヤツに、なにがわかる……ッ！」

女性とは思えないほどの腕力でエイジの瘦身を、イーデイスの墓石へと突き飛ばした。

尻餅こそつかなかったが後頭部を打ち付けて、激痛にもだえる。

エイジはそれ以上反論しようとしなかった。まだ口論の余地はあったが、頭の鈍痛で口を開く余裕はなかったし、これ以上何をどう言ったところで折り合えないことは予測がつく。

それに、彼は自分が不用意に口にした言葉を、明らかに竜の逆鱗に触れていたことを自覚していた。

どうにも迂闊な発言の多い日だ、と彼は反省し、自重をみずからに課した。

「ごめん……っていうかキサマとかいう女子、究さんから借りたマンガ以外ではじめて見たよ」

というジョークでお茶を濁し、背にもたれていた墓石に手をつけて体勢を立て直した。

だが墓に触れた指の合間から、淡い光が漏れだした。

「えっ？」

彼が触れた場所が、青白い光を放ちはじめた。

やがてそれは彼らの全身を飲み込んだ。

……訂正しよう、とエイジは心のなかで思った。

迂闊なのは言葉だけではなく、行動もだった。

気が付けばエイジと春奈は夏空の下の墓地でも寺でもなく、薄暗がりの広がる閉鎖的な空間の中にいた。

天井の穴からかすかに陽光の差し込むそこは、どこかの地下施設のようだった。

すすけた旧式のPC、かたむいた本棚、空っぽのキャビネットに、顕微鏡などの実験器具。

それと相對するかのよう、倒れた燭台や祭壇のような、オカルティックなオブジェが倒壊しかけていた。

今まで嗅いだこともないようなひどい埃の臭いに、エイジはせき込んだ。

「……これは」

何より目を惹くのは、その祭壇の奥の巨大な石板だった。

いや、元は石柱か。あるいは太古の化石か。

今ではやその残骸とっていいほどに半壊していたが、そこに刻まれた紋章には、さんざん見覚えがある。

仮面ライダーギルガメッシュや、ダークゴーストの胸にあった、あの目玉の刻印だ。

「部分的なワープロドライブか。あのバカみたいな墓に、そういうトラップが仕組まれていたと考えるのが妥当だな。……また君は、余計なことをして面倒に巻き込んでくれたものだ」

「待つてよ、そもそもは照井さんが突き飛ばしたからだろ!？」

あまりに理不尽な叱責に、エイジは反発し大声を出した。

大きく反響するその声に、

「うるさいぞ。奴らにばれる」

と、声が返ってきた。

春奈の声ではない。渋いがよく通る、男の低音だった。

彼らの背後の、ロフトにつながる階段の裏。そのスペースに、箱詰めめの荷物に埋もれて男が座っていた。

痩せぎみの細い手足、体温というものを視覚的に感じさせない白い肌。

「墓地では静かにする。それが、人間のルールではないのか？」

そして、ピッチリとフィットした紫色のライダースーツに身にとった男は、抑揚なくつづけたのだった。

### 第三話：疾走の絆（9）

男が、薄暗がりの中でムクリと姿勢をただした気配がする。

その腕で段ボールの荷箱を支えに、ゆっくり起き上がってエイジたちの方へと進み出る。

肩をゆすつて歩いたびに、胸や腰のシルバーアクセサリや擦れて金属音を奏でた。

ロフトの暗影に沈んでいた彼の全身像が、ほのかな明るさに照らされた。

もちろんその顔もだ。

細身の体に見合った、不器用そうでありながらも、ハンサムな黒髪の青年の姿……

「チャオ！」

などということはなく、フランクに笑う白髪の爺さんだった。

服と顔のアンバランスさに脱力したエイジは、危うくバランスを崩しそうになった。

その様子を見た老人は不満げに真っ白な眉毛を逆立て、指を差し向けた。

「あ、おぬし『似合わない』って思ったろ！ んなもんワシが一番わかっとなるわい！ このボディの標準の服装がこれなんじゃ！ ったく、暑苦しいわ息苦しいわで、ロクなもんじゃないわい」

はばかりなく大声をあげる老人の像が、おおきくブレてぼやけた。

一瞬現れたのは、鈍く照った鋼のボディ。胸に提げられたナンバープレートには『1002』とあり、それがエイジの記憶と強烈に結びついた。

それと会った日こそ、自分がダークドライブにはじめて変身した時

であり、こんなややこしい事態に巻き込まれたそもそのきつかけだったのだから。

「そのボディ、まさか!？」

「おう、あの時の小僧か。あの時はずいぶんと痛めつけてくれたのう」  
あつさりと自らがダークゴースト兼ボディ泥棒と認めるときには、サイバロイドボディはふたたび老人の姿にもどっていた。

「それよりも、その顔」

春奈がわずかに顔を引きつらせながら、老人の姿を指さした。

指摘されて、エイジも「あつ」と声を漏らした。

シワクチャで決して美男とは呼べないものの、どこか愛嬌のある表情、どこかで見たことがあるかと思えば、ついさつきまで手を合わせていた墓に飾られていた写真に写っていた面だった。

「死んだイーデイス長官を、コピーしたのか……っ!」

「ああー、違う違う」

身構えるエイジたちは歯牙にもかけず、老人は鋭く腕を突き出した。

「ライダー……変身します、変身します! 変身してまーす!」

テレーテテテテテ、などと鼻歌を歌いながら荷箱を開ける。

紫色のジャケツトとパンツを脱ぎ捨てると、タンクトップとトランクス姿になる。

ごくごく一般的な、痩せぎすの老人の裸体。

エイジも春奈も、そろって顔をそむけた。

「ふう、ようやく慣れた服に着替えられたわい」

吐息とともに満たされたような声が、向けた背越しに聞こえてきた。

それを合図に、ふたりの若者はバラバラに振り返った。

金色の派手な衣装の上から、赤いローブを羽織った老人。

ふざけた様子から一転、老成した落ち着きぶりで杖をつくくと、カツンと金属音が鳴った。

……だが、その衣服からただよう防虫剤の臭いまでは、表面上の威厳だけで隠しきれぬものではなかった。

「よくこの短期間でここまで迫った。若き仮面ライダーたちよ。おぬしたちをこの場所へ招いたのは、言わずもがなこのワシじや。おぬしらの動きは、逐一見ておった」

気づけば老人の周囲には、この空間によく似合った、異質なガジェットが徘徊していた。

コンドルと電話が合体したものが手すりに取りつき、ランタンと蜘蛛が合わさったものが、エイジたちの足下にすり寄ってきた。

愛くるしくもどこことなくブキミなそれからなんとなしに距離をとりながら、エイジはたずねた。

「……最初から確認したい。りんさんの研究室からそのボディを盗んだのは、貴方か？」

「いかにも」

「そして貴方は、姿かたちはどうあれ、イーデイス長官本人ということの良いのですか？」

「さよう」

若者たちの問いかけに、逐一重々しく老人はうなずいた。

「教えてもらえませんか？ どうして、あの研究所にいたのか。ボディを盗んだ理由も。シフトカーを狙った目的も。あと、あのギルガメツシユたちと、貴方との関係を」

しばらくは、沈黙がつづいた。だが、黙秘ではなかった。

老人思考と記憶とを整理するかのようになり、  
相当に込み入った事情なのだろう。

「すべては、あの雪の日からはじまった。あの怪物を、ワシらが蘇らせてしまったのじゃ」

と、繰り返言のように独語していた。

「いや……事の始まりは二年前の秋、イダルマがワシを訪ねてきおつた時から……いや、違う」

やがて意を決したように、老人は足を止めた。

沈みかけた白髪頭を持ち上げ、どこかすがるような弱々しい視線を、エイジたちへと注ぎ込んだのだった。



「今から話すことが、すべての始まりじゃ。そして、ワシの過ちの告白  
でもある」

### 第三話：疾走の絆（10）

——ガンマイザー、というシステムのこととはジャベルあたりから聞いておろう。

あれは、元はワシがグレートアイへのアクセスを限定するために開発したものであった。

だが、奴らのシステムは暴走し、グレートアイを掌握して眼魔の世界どころかこの世界へも危害を加え始めた。

タケルたちの活躍によってガンマイザーは破壊され、解放されたグレートアイは外宇宙へと旅立っていきおった。そして、人間世界は眼魔やガンマイザーの脅威から解放された。

が、眼魔の世界はそう簡単な状況にはならなかった。

眼魔としての肉体を捨て、生身を取り戻した者たちに待っていたのは、生きていくにはあまりに過酷すぎる環境じゃった。

その環境下で生き残る手段をめぐり多くの者が争い、傷つき、倒れていった。

……あの時ほど、自らの負債と力不足を恨んだことはあるまい。

と同時に、あの時ほどグレートアイの存在を渴望した時もなかったのだ。

グレートアイ自体は無垢で、純然たるエネルギー体じゃ。それが歪められたのはガンマイザーの暴走の結果にほかならぬ。

幸いにして眼魔世界の騒動は収束をむかえたが、いつダントンのごとき者が現れ、同じことがあるとも限らぬ。

備えとしてなんとかグレートアイを呼び戻せないかを、今までずっと思索してきた。

そして、ひとつの方法に思い至った。

かつてワシとその同志、天空寺龍、そして深海大悟とは、英雄の魂を封じ込めた眼魂によって、ガンマイザーを飛び越えてグレートアイへのアクセスを試みようとしておった。

その英雄の選定としての条件は、「才よりも努力によって偉業を成した人物」というものじゃった。

これは、不可能や理不尽を前にしても怖じることなく障害を突破できる強靱な精神力や意志力を求めてのことだった。

が、その条件に適合しても選出から漏れた英雄がおった。

それが、ギルガメッシュよ。

ヤツの魂は、あまりに強烈な個でありすぎた。

ゴーストドライバーを用いたとて、その魂に主が自我を喰われ正気を失うおそれがあった。ゆえに眼魂ごとヤツを封印した。

それを思い出したのよ。

たしかに扱いは非常に難しい。だが、王、術者、剣士、武人、神……様々な属性を持ちながら、未踏の領域へ挑む冒険者でもあるギルガメッシュならば、ガンマイザーの除かれたグレートアイへのコンタクトが可能なのではないか、とな。

ガンマイザーのように管理や制限をするのではない。ただ、願いを届けるためのメッセンジャー。その役目として、ギルガメッシュの精神エネルギーを使おうと思った。

ワシはタケルたちには内緒で研究を重ねた。相談すれば反対されるのは目に見えておったしな。

問題は、それを容れる肉体じゃった。

イダルマが現れたのは、そんな折のことじゃ。

奴はどこで聞きつけてきたのか、はたまた完全に偶然であったのか。似たような計画をもって寺を訪れ、ギルガメッシュの器を用立てられると言ってきおった。

目的さえわからぬような、本来なら忌避すべき異質な技術に、惜しむことのない投資と援助をしてくれる組織があるとな。

イダルマめは明らかに急いておった。

その組織とやらの世界で許され活躍していることへの対抗意識だったのか。そこまでは聞かなんだ。

……そして、急いておったのはワシも同じであった。

すでにその時点で、老いたワシの命はもう長くはなかった。世に災いをもたらし、恨みと嘆きを振りまいたまま、なんの役にも立てず死

ぬのが恐ろしかった。

ならばせめて、この命を燃やす覚悟で最後の賭けに出よう、と思つた。思つてしまったのだ。

果たして奴らは用意してくれた。

意思の抜けた強靱な鋼鉄のボディ。……そう、超進化体まで到達したロイミュードのボディじゃ。

コアが破壊されて打ち捨てられていたものを、奴らが回収し、修復した。

あやつらいわく、それは一種類にして二種類のロイミュードの複合体であり、かつて次元を飛び越えた経験を持っているのだという。

まあその辺りは門外漢ゆえよくは知らぬが、実際にギルガメツシユの魂を容れるには、最適であつた。

当然、ギルガメツシユの暴走をおそれたワシはいくつもの策をめぐらせた。

魂の分割化も、その一つよ。

かつてのガンマイザーや英雄眼魂を模倣し、ワシはそれを十の眼魂にまで分割した。

もし反逆されたとして対応可能なレベルにまで弱体化させるためにな。

質は本体のそれとは劣るが、その分のボディも、用意されておつた。

なんでもメガヘクス、なる異星人がサイバロイドボディを複製したものであつたらしい。

……が、そんなワシの思惑を超えて、ギルガメツシユの魂は強すぎた。

ヤツらは、肉体を持たぬその時点から組織やイダルマを抱き込んでおつたようじゃ。肉体を手に入れるや奴らを結託してワシを殺めた。

もちろん、その万一にもワシは備えておつた。

イチかバチかではあつたが、精神のバックアップをダークゴーストの眼魂に保管しておき、今日にいたるまでの準備を整えてきた。

ヤツらに対抗しうるすべを探し、いつか討ち果たす時を目指して

……！

### 第三話：疾走の絆（11）

「……というわけで、ワシは眼魂となったわけじゃが。あいにくウルティマエボニーのようにアバターを内蔵しているわけではない。そこで目をつけたのが、この身体、というわけじゃが……どうした？」  
ここまでの懺悔じみた説明に対し、エイジが頭に抱えていることに気が付いたようだ。

キョトンと、邪気のない顔を向けるイーデイスに、エイジは言った。  
「いや、なんかどつかで聞いた話だなんて……っていうか、それクリムのパクリじゃないか」

「……エヘッ、バレちゃった？」

この期におよんでおどけてみせる『おっちゃん』に、つま先を鳴らして苛立っていた様子の春奈が動いた。

腰から引き抜いた拳銃を向け、

「そこを動かすすべての元凶。確保する」

と青筋を立てて命じた。

エイジは「まあまあ！」と意外に華奢な彼女の肩を押さえた。

「まだ、全部聞いてないから」

と、言い添えて。

「ダークドライブのシフトカーを狙った理由、言っていないでしょ」

「狙ったのはワシではない。ギルガメツシユたちじゃ。ワシはその先回りをしようとしたにすぎぬ」

杖を鳴らしてそれとなくふたりから距離をとりながら、老人は声を低めて答えた。

「ワシらは宇宙へ届くほどのエネルギーについて、冥術以外の要素も検討した。ギルガメツシユが使うドライバーも、その流用や改造がほとんどよ。だが、ワシを殺したあやつらがより強く興味を示したのが、クラック、コズミックエナジー、そしてその、ダークドライブじゃ。そのうちの二つはすでに手中におさめておる。残るはダークドライブのシフトカー。そこでワシは空間の狭間でなぜか停止させられていたそれを叩き起こしたのじゃ……まあ途中で逃げられたがな」

「それが、あの久留間ドライブングスクールでの出来事か」

それでも、なぜそのシフトカーが、数十人は詰めていたあの施設の中、自分を選んだのかの説明にはなっていない。

泊進ノ介の息子だから、ということだろうか。

……そう考えるとまだ自分の上に父親がつきまとっているようで、楽しい気分ではなかった。

不機嫌さを押し隠すためにうつむいたその視線の先に、枯れ木のような手が伸びる。

「そこでおぬしを呼び出した理由につながる。ギルガメツシユたちに奪われる前に、シフトカーを渡せ。それを破壊する」

え、と聞き返すエイジの背後で「そうだな」と春奈もうなずいた。

「その老人は本当にどうしようもない男だが、そればかりは賛成だ」「待ってよ照井さん！ なにもこんな時に!?!」

「君は父親と同じ超人の力を偶然手に入れて舞い上がっているただのガキだ。仮面ライダーは、素人が道楽気分で名乗っていい名前じゃない」

「そんなことない！ それに父さんは関係ないだろ!?!」

かみつくように言い切ったエイジだったが、仮面ライダーになることへの意義をそれに続けて言うことができなかった。

にらみ合いが続いたが、突如として虚空に現れた文様がそんな両者の間に割って入った。

へそうか、ネズミは貴様だったか。イーデイス

石碑のものと同じそこから、ひとつの人影が現れた。

その少年の、金髪の頭髪と全身からみなぎる覇気は、この薄暗がりの中なかでも太陽のごとく、燦然と輝く。

「ギルガメツシユ」

異口同音。エイジとイーデイスの口から、同様の名が漏れた。

「なぜ、ここがわかった!?!」

驚きまじりに尋ねる老人にはお構いなしに、さながら王の巡察のよ

うに、ゆったりした足どりで周囲を見回した。

「ここは大天空寺の地下施設の残骸か？ 懐かしいな、ここでお前は龍やタケルに隠れてコソコソと俺の眼魂を生み出したんだ。感謝はしているが、尊敬には値しない。その後の仕打ちを思えばな」

「ぐむ……ッ」

冷厳な視線に圧される老人に、絶世の美少年は詰め寄った。煉獄を思わせる激しい怒りの炎をまとって、近づくと彼の前に、自分でも知らないうちにエイジは立ちふさがっていた。

「イダルマって男を殺したのも、お前か？」

「ああそうだ。ヤツは財団Xとの仲介を買って出たかわりに、俺たちの分け前をハネていた。俺たちの力を背景に、逆に財団もおどしていたようだったしな」

「そんな理由で、殺したのか!?!」

イダルマはたしかに、彼らにわたるはずだった金銭を横領していたのかもしれない。だが、それでも空中を舞うグライダーを用立てるほどの金は、ギルガメツシュたちにも行き渡っていたはずだ。

それが命を奪うほどの重罪だというのなら、郷原議員など二度三度死んでもおかしくない。

そんなエイジの憤りを、まっすぐな視線から汲み取ったらしい。

ギルガメツシュは筋のおつた高い鼻を鳴らし、肩をそびやかした。

「たしかに、金額を思えば微々たるものだ。もしヤツが真正面からその倍の金額を要求してきたとしたら、俺たちはそれに応えたさ。欲しいものはくれてやる。力だつて貸してやる。それが王の権利と義務だ」

「だつたらなんで」

「だが、俺に対する裏切りや欺瞞は別だ！ それについては全力で報いを受けさせてやる。その男もだ」

ギルガメツシュの白く長い指が、みずからの生みの親を糾弾する。

大きく上体を揺さぶったおっちゃんをかばうべく、エイジはシフトブレスをはめて前に進み出た。

だが、さらにその前を照井春奈がさえぎった。

「照井さん！」

「言っただろ。ヤツらの目的は君のシフトカーだ。わざわざそれをさ  
らすバカがどこにいる」

「でも……っ」

それ以上の問答は無用、とばかりに彼女はジャケットの裏からメモ  
リを引き抜いた。

〈ACCCEL〉

というガイダンスボイスとともに、その腰にベルトが出現する。

「強さに満ちた良い眼だ。容姿も美しい。気に入った、俺たちの女に  
してみるか？」

「黙れ。私に質問するな。どういう経緯だろうとお前たちは犯罪者  
だ。ここで倒す」

「おいおい、勘違いしてもらっちゃ困るな。……お前の意見は、聞いて  
いない」

ギルガメッシュは全身を覆い包む黒コートの前をはずした。

あらわになったのは、アンダーウェアごしにもわかるほどに引き締  
まった腹筋と、赤いドライバー。

「……ダブルドライバー」

それについて知っているのか、名称をつぶやく彼女の前で黄金の覇  
王は朱色と金色のメモリを片手にはさんだ。

〈EYES〉

〈UTOPIA〉

彼女のそれと同質の音声で鳴いたそれらを、ベルトの二本のスロッ  
トに同時に差し込んだ。

「変身」

一瞬その顔に電子回路か涙のようなラインが浮かび上がったあと、  
雷光のような輝きに総身が覆われる。

ギルガメッシュは黄金の騎士のような姿に変化していた。

ただし、甲冑や、首に巻かれた真紅のスカーフの隙間の所々からの  
ぞく、眼球のような模様は、神々しさと同時に魔や邪といったものも



同居させている。

手にした儀杖のようなものを突き出せば、そこにビツシリと張りついた無数の眼が、縦横無尽にうごめいた。

「仮面ライダーギルガメツシュ アイズユートピア……と言ったところかな」

かつてあらゆるものを見通し、理想郷を創り上げたときされる王の分霊は、高らかに称した。

### 第三話：疾走の絆（12）

「変、身！」

メモリをベルトに挿入した春奈の声に応じるように、T3アクセルの装甲が全身を包み込もうとしていた。

マズルフラッシュのような光の明滅。それが収まらないうちから、彼女は銃を撃ち放った。

まず一発。それが難なくかわされると、本格的な連射に変わった。だが、鮮やかに身体をスライドさせると、すべて回避して一気に距離を詰めた。

組み合いながら部屋の中央を横切り、ふたりは壁に激突した。破壊した先には、洞窟のような岩肌の通路が繋がっていた。

正式な通路が出来上がる前、工事用として使われていたのだろうか。

そこは思いのほか広く、ちよつとした鍾乳洞のようになっていた。エイジが意を決してそこへと飛び込むと、落盤と土煙を起こしながら、アクセルとギルガメッシュはさらなる応酬をくり返していた。

「照井さん！」

彼は彼女を呼びわりながらシフトカーを手にして追ったが、変身するなつて何度言わせる気だ!! それよりその男を守れ!」  
春奈はするどく命じた。

歯噛みしてエイジが振り返ると、そこには誰もいなかった。  
石柱に留められた「ごめんね」の書き置きが、爆風のあおりではためいているだけだ。

「逃げ足速ッ!?!」  
見苦しさもここまで来ると、むしろ感動さえおぼえるというものだ。

「役に立たん奴らめ……ッ!」

忌々しげな春奈の声が仮面越しに響いた。

たしかにおっちゃんはおっちゃん自分で自分勝手極まりなく、彼を取り

逃がした自分には責任があるが、それでも変身を禁止しておきながら無能とひつくるめられるのは釈然としないものがある。

とは言え、エイジが介入する余地がないほどに、両者の攻防は拮抗し、白熱していた。

(……いや)

春奈の格闘技は傍目から見ても洗練されたものだったが、ギルガメッシュの胴に届くことはなかった。

かと言つて、ギルガメッシュの技が格段にすぐれているわけでもない。

にも関わらず、彼の防御は確実に、完璧に速攻を捌き切っていた。  
(まるで)

「まるで未来が見えているようだろうか？」

エイジの考えを先回りするかのように、ギルガメッシュが嗤った。「そうだ。俺のこの眼はすべての見通す。お前たちの敗北もな」

だが、そううそぶく魔人に、春奈は冷淡なまでの反応で応じた。

「ハツタリは無駄だ。超視覚によつて相手の動きを予測する、アイズメモリの特性だろう」

「なんだ、知つてたのか」

秘密が看破されたものの、ギルガメッシュは悪びれる様子もなく肩をすくめた。

「だが、それで勝てるなどと思つてもらつちや困るな」

次の瞬間、ギルガメッシュの目立つ甲冑姿が、彼らの視界からかき消えた。

いや、死角を突いて春奈の装甲を拳でうがった。

反撃しようとする彼女の拳は、突き出した儀仗に妨げられた。

くりだしたパンチも、次いでくり出したキックも、彼の身体に触れることができなかつた。そこからさらに加えられた銃撃は、杖の先から放射された炎の壁に飲み込まれた。

かつてユートピアのメモリを使つていたという財団Xの加頭順かざしゆんのような、NEVERの不死性やクオークスの超能力がないのと、彼女自身がユートピアの感情エネルギー吸収能力を受け付けない体質な

のが、せめてもの救いか。

……だが、ギルガメツシユの言うとおりだった。

ガイアメモリの特性が知られていたからといって、正攻法でその鉄壁が崩せないことにはかわりがない。

エターナルメモリがあれば話が違ってくるが、あれはT1以前のメモリを無効化するものであって、ギルガメツシユの持っていたメモリは青端子……T2には通用しない。

だが春奈は、いつもの鉄の女つぷりを崩しはしなかった。

「ガイアメモリ犯罪のスペシャリストの前で、メモリを使う愚を呪え」という彼女の声とともに、何かが高速で飛来した。

UFOか、フライングディスクか。

(いや、バイクのホイール!?)

銀色の円盤状のものがふたつ、エイジの頭のそばを横切った。

切り裂くような風音が、耳をヒヤリとさせる。

交差しながら空間を舞うそれらは、輝きを帯びながらギルガメツシユの側頭部を打ち、火花を散らす。

銃を腰の横にしまったアクセルの、空いた両手に収まった。

〈UFO〉

と、ガイアメモリのそれとはまた声色の違うガイダンスボイスを鳴らして。

「なるほど、それがお前のガジェットか」

春奈は答えない。

手にしたものをグローブのように握り固めて、ギルガメツシユに向けて構えをとった。

一瞬の沈黙のあと、彼女の猛攻が一変した。

フェイントやスウエーといった虚実を織り交ぜたラツシユを駆使する春奈の動きは鋭く加速していく。

いかに超感覚を持っていたとしても、肉体が追い付かなければどうしようもない。

次第に対応しきれなくなったギルガメツシユが防戦に回りはじめた。とっさに交差した腕に、アクセルの正拳突きが直撃した。

「ぐっ……！」

後ずさるギルガメツシュの前で、アクセルの右手から円盤が分離した。

宙に浮いたその差し込み口に春奈が赤いガイアメモリを装填すると、意思を持ったかのようにガジェットはギルガメツシュに突撃した。

「なんちゃって」

苦戦した様子から一転、杖の一振りですぐにギルガメツシュは円盤をたたき落とした。

力なく落ちたそれを手中に収めると、

「素敵なプレゼントどうもありがとう」

と揶揄する。

対する春奈は、

「どういたしまして」

感情のこもらない声で、そう返した。

〈BOMB！ MAXIMUM DRIVE！〉

ギルガメツシュの手のガジェット、そこに入れられたメモリが、低く声を洞窟に響かせる。

次の瞬間、円盤のガジェットが轟音とともに爆炎に包まれ、ギルガメツシュを焼いた。

悶えるギルガメツシュを正視したまま、春奈は自身の論理ロジックにしたがうように、機械的な動作で濃紺のメモリを腰の銃のマガジンに差し込む。

〈INVISIBLE！ MAXIMUM DRIVE！〉

という音とともに、アクセルの派手な装甲が消えた。

闇に溶けたわけではない。かと言って、ギルガメツシュのように高速でエイジたちの死角に回り込んだのでもない。

時折空間が不自然に歪み、そのたびに黄金の魔人はダメージを受けたようによろめいた。

「なるほど、高度な迷彩技術だ！ だがな……っ！」

次に生じた歪みのなか、その動きをアイズの特性で読み切ったギルガメツシュが手を突っ込んだ。

破壊音とともに、春奈の姿があらわになった。

その背まで、ギルガメツシュのパンチが貫通した姿で。

「ハデに動けば、どんなカモフラージュだってひずみができるさ」

「……それは、どうかな」

貫かれた春奈の声が、口を閉じたままに洞窟を通り抜けていく。

刹那、倒されたアクセルの姿がかき消えた。

〈DUMMY……MAXIMUM DRIVE!〉

からみつくような、ガイダンス音とともに。

残されたのは、破壊された岩石。そこに取りついていた円盤が、宙を舞って離れていく。

「メモリの二重がけ!？」

おどろく彼の後ろで、本当のアクセルが土煙を突っ切って現れた。

腰の銃型のユニットに若草色のメモリを入れ替え差し込み、飛び上がった。

〈CYCLONE! MAXIMUM DRIVE!〉

おおきく身をひねると、緑の旋風を身にまといながら、振り返ったギルガメツシュを足で貫く。その反動でもう一度浮き上がったアクセルは、姿勢を作り変えてもう一度キックした。

黄金の甲冑に、大きくヒビが入る。そこからほとばしるエネルギーを流し込まれながら、ギルガメツシュは苦悶と哄笑を同時にあげた。

「……これが、T3か……まあいい、時間は、稼げた」

そして二人の間で生じた爆炎が闇の洞窟を照らし出し、エイジの視界を覆ったのだった。

### 第三話：疾走の絆（13）

エイジは激闘の後、シフトカーを握りしめたままの手を力なく下ろした。

だが、茫然としている時でもなく、すぐに我にかえって春奈を捜した。

火の粉と黒煙をかいくぐったその先に、変身を解除した彼女はい

た。  
薄れゆく煙幕のなかで身を屈している女戦士を案じて、おぼつかない足どりで、荒れた道を急いだ。

だが、彼女は無傷だった。

身を屈していたのは、その場に倒れ込むロボットを観察しているだけだった。

「やったんだ」

控えめに声をかけたエイジに、面白くなさそうな表情で勝利者は首を振った。

「いや、直前で自爆された。せめて奴らの足取りがつかめそうなものが残っていないかと思って」

そう言いながら、春奈は視線を半壊したロイミュード体へともどした。

だがその姿に隙はなく、戦闘直後の疲労や緊張の弛緩といった様子は見受けられない。

彼女の上司は「T3メモリは肉体変化できないから多様性にはとぼしい」と説明していたおぼえがある。確かに、エイジも戦ったことのあるドーパントのように、ひとつの特性をきわめた能力は使えないのかもしれない。だが春奈には、それを補って余りある機転があった。

その体質やライダーとしてのスペック以上に、彼女自身のセンスが抜群なのだ。

（もう全部彼女ひとりで良いんじゃないかな）

と、脳裏に浮かんだ言葉を、エイジは首を振って払った。

金属片を散乱させながら落ちていたW型のドライバーを拾い上げ

ると、すかさず横から手が飛んできて奪われる。

「本物と遜色ないな」

妙に感心したふうにならずに彼女に、「実物を見たことがあるのか」と問いたくなったエイジだったが、言葉にはしなかった。「私に質問するな」が返ってくるだけだろう。

「でも、あいつ気になることと言ってなかった？　ほら、時間は稼げたとかなんとか」

「さあな。ボディから精神データを移行するための時間とか、そういう……ッ!？」

だが、ドライバーをしばらく眺めていた彼女の表情が、一変した。春奈にしては珍しく驚きで目を見開き、ドライバーを裏返したり、見る角度を変えたりした。やがてその鋭いまなざしはその赤いドライバーのみにとどまらず、地面に散らばったパーツや、ギルガメッシュの『屍』へと向けられた。

背越しにも伝わってくる焦燥に、エイジは声をかけようとした。

だがそれよりも早く、

「……ギルガメッシュのメモリが、ない……」

その場に起こった異常な点を、春奈はひとりごちた。

瞬間、反射的にエイジの視線も彼女と同様のベクトルへと向かった。

「メモリブレイクしたってことは」

「あのメモリは財団Xがデータを所有しているT2だ。通常のマシンムでは破壊されない。それがたとえT3の攻撃でもな」

エイジの樂觀を、春奈は即座に否定する。

この謎を解くのに何か、忘れていないことはないか。

ここまでの情報を整理するエイジは、回想のなかである言葉を思い出した。

記憶を呼び起こすのは容易だった。何しろそれは、ついさつき聞いた話だ。

ただ、さりげなく語られていたがために、つい聞き逃しそうになっていた。



「かつてのガンマイザーや英雄眼魂を模倣し、ワシはそれを十の眼魂にまで分割した」

という、自分の見た光景と矛盾する、イーデイスの説明を。

「数が、合わない」

「え？」

「僕が見たギルガメッシュは、全員で九人だ。それも、別々のドライブバーを身に着けていた」

そう指摘されて、春奈はユニットが空になった変身アイテムを見下ろした。

「……ガイドライバー2G……そういうことか」

と舌打ちした。

切り出したのはエイジだったが、彼女がそこから一体どういう解答を得たのかは分からずじま이었다。

「ハメられた！ 急いでイーデイスの後を追うぞ！」

理由を問うまでもなく、そう言うや春奈は駆けだそうとした。

だが、元々不安定で整備もされていないような場所で、戦闘の後であつた。

「……危ないッ」

春奈の真上にあつた天井が崩落した。

助けようと手を伸ばすエイジをふくめて、ガレキが一瞬で、彼らにいた空間を埋め尽くした。

### 第三話：疾走の絆（14）

「こんにちはー、出前でーす」

白い割烹着姿とメガネの男が、大天空寺の門前に立っている。おおよそ仏教や悟りとは無縁の、ラーメンのおかもちを持って。それを出迎えた御成は、見知った顔に表情をほころばせた。

「おお、シブヤ。そういえば、しばらくはお店のほうのお手伝いでしたな」

「あはは。まあ、母も歳ですから。寺とかタケル君のこととか、手伝えなくてすみません」

「何を言う。親孝行も立派な修行のうちですぞ。タケル殿のことはこちらに任せて……………て、出前？」

「はい。チャーシューメン一丁。たしかにここですけど」

八王子<sup>はちおうじ</sup>シブヤが手書きの発注書を見せると、御成は嘆くようにため息をこぼした。

「またアユム殿か……………おや、あれは？」

その御成が、坂下の車道に停められた車に目をやった。

白いバンの車体には、シブヤの母がきりもりしているラーメン屋の屋号がペイントされている。

「ああ、出前用に新しく買ったんですよ。便利ですよ、揺れ少ないし」  
「また奢ったものを」

「ほらー、そう説教くらうと思ったから言わなかったんですよ」

「……………なんか、年々反抗的になってきておらんか。良いですか、おごれるものは久しからず。便利だからと容易に用いるものは、決して身につかぬものなので……………？」

小言を言おうとしていた御成だったが、その白い業務用車が動き始めたのを見て、眼を自分の頭のように丸くさせた。

口を大きく開けて声にならない悲鳴をあげ、そこから背を向けて気づかないシブヤにアピールした。

「なんですか……………ってええっ!?!」

またいつもの奇行かと怪訝な顔をしていたシブヤだったが、同様に

驚愕し、転びそうになりながら慌てて階段を駆け下りた。

だが二人が階段を下り切ったときにはもう、車は尾を引くように排煙をのこして遠のいていくばかりだった。

あと数秒早ければ御成とシブヤは、その車泥棒の顔を見ることができただろう。

そしてそれこそ、心臓が飛び出るほどに仰天したことだろう。

「すまぬ……！　すべては皆のため、世界のためじゃ！」

その泥棒、彼らが仙人と呼ぶ死んだはずの男は、ハンドルを切り、アクセルペダルを全力で踏む。

山道を進むバンに、空中より迫る無数の影があつた。

それは、蛇だった。そして獅子だった。そのいずれにも、コウモリやあるいは竜のような翼が生えていた。

口を開ければそこに火炎が渦巻き、砲丸となって射出される。

道路に着弾したそれは膨れ上がって、広がる爆炎は周囲の地面を削っていく。

前に回り込んで進路遮ろうとした数尾の蛇たちに車体が激突すると、彼らは銀色のメダルとなつて散乱した。

最低限のAI制御によつて、その危機を回避しながら、仙人の運転する車は一路、逃げ続けていた。

このまま逃げれば、狙い撃ち。

かと言つて、自らのボディは重加速どころか武装さえも持たない。彼は、高らかに車に声を発した。

「垂直離陸開始！」

〈そのような機能はありません。もう一度お願いします〉

「じゃあレーザー砲を出せ！」

〈そのような機能はありません。もう一度〉

「じゃあ何なら動くんじゃない？」

〈エアコンは正常に作動しています〉

緊張感を欠くようなアナウンスと不毛なやりとりを交わしながら、

異形の怪物群に追われまくる。

地面が火を噴くたびに外装やパーツを剥がされていく。その重量分は軽くなったが、バランスは失われた。

〈前方は市街地です。渋滞が予測されます〉

「……別ルートを探せ！」

本来なら渋滞さえも突っ切っていきたいところだったが、しばらく逡巡した後、彼は迂回を選んだ。

画面に表示されたナビに従って、車は脇道へとそれた。

だが、その車道の中央に、ひとつの影があった。

金色の絹髪に、燃えるような碧眼。黒いコートの上から、無骨で大ぶりな、赤いドライバー。

遠目にもわかる半神半人の姿に、仙人は反射的にブレーキを踏んだ。

だが、少年は避けようとしめない。その姿を一瞬黄金のロボットのものへと変えて、その手甲に取り付けられた片刃の大剣で、バンを両断した。

こぼれた燃料が電気と混ざり引火する。

空中を舞いながら、ラーメン屋の運搬業務を担ってきた車は、車検前にこの世から姿を消した。

「変身！」

だがその爆炎から、黒いゴーストが飛び出てきた。

彼は拳を突き出し、羽虫のように群がる蛇たちを追い散らす。

その身に隠していたコンドルデンワールやバットクロックが飛び立ち、異形の群れに突入し、彼らをほんろうした。

そしてダークゴーストこと仙人は振り返り、少年の姿にもどった彼……ギルガメッシュのコピー体と対峙した。

「……やはり、もう一体来ておったか」

照井春奈たちと今、戦闘しているはずの分身が身に着けていたものと、同型のダブルドライバー。その右側に、ユートピアメモリが転送されてきた。

それを見やりながら、仙人は言った。ギルガメッシュは嗤った。

「なんだ、気づいていたのか」

「おぬしらは足止めのつもりだったろうが……なんの！　すべては、ワシの思惑どおりじゃ！　一体一ならともかく、あの若者たちとて、おぬしら全員の相手は苦しかろう。そこでワシが逆に釣り出し、引き離したのよ」

「貴様なら、勝てるだけでも？　何かあるとすぐ逃げ出すような卑怯者が」

仙人は返答に窮した。

その答えは、決まっている。相手も自分も、この逃亡劇の結果など、分かりきっていた。

それでも、と一度死んだ男は、ダークゴースの凶相の向こう側で、噛み返す。

「おぬし、ワシのことをなーんもわかつたらんわ」

「なに？」

「確かにワシは卑怯な男じゃ。肝心なところでやらかすし、大事な局地で役にも立たん。おぬしの言うように場面場面で逃げたことも……まあある。それを自分でよく知つとる」

だが、呼び出した大剣を握りしめた。

「事態そのものから逃げたことなど、一度たりともない」

ほう、という呼気とともにギルガメツシユの碧眼のかたちが変わる。

腕組みする彼に、かつてイーデイスと呼ばれた男はさらに言葉をかぶせた。

「おぬしにも、財団にも、グレートアイの悪用などさせん！」

ギルガメツシユの唇が、ゆがんだままに吊り上がる。

怒っているような、逆に笑っているかのような、左右非対称な表情の彼の頭上で、何か鋭く滑空してきた。

小型だが、無数の蛇たちとはちがう。明らかにその形状も動きも、違っていた。

切る様な挙動と軌道でコンドルデンワーもバットクロックも撃墜し、地に堕ちたそれが小規模な爆発を起こす。

新たにその群れに加わったのは、機械の鳥……いや、翼竜だった。手も足も持たないかわりに自身の体長ほどの長さの両翼を持つそのガジェットは、ギルガメツシユへと接近していく。

だが彼の手に収まるかと思ったそれは、あろうことか鋭利なクチバシで、主人の頬を切り裂いた。

切り裂かれた表皮から血液を模した潤滑油が漏れて頬を濡らす。ギルガメツシユは一瞬苦痛と痛み顔に顔をしかめたが、彼の手はその手で翼竜を捕らえた。

この時すでに、怒りはあどけない苦笑に変わっていた。

「やはり、『蛇』とはつくづく相性が悪い」

冗談めかしくギルガメツシユは言い、次の瞬間には覇者の貌に切り替わった。

「わかっていないのは貴様のほうだ、イーデイス」

異様な光景に吞まれかけていた『親』をにらみながら、剥ぐようにしてガジェットを手で変形させていく。

ピタリとおとなしくなったそれは、巨大な翼を生やしたガイアメモリとなっていた。

「言葉ひとつで叶う願いに、なんの意味がある……？ 運命も過去も超越してこそ、俺たちの理想郷は現れる」

流れる『血』を止めることなく彼はそのメモリをドライバーへと装填する。

左右に押し広げ、

「変身」

と低くつぶやいた。

〈QUETZALCOATLUS！ UTOPIA！〉

ライブモードからメモリモードに切り替わった翼竜のメモリは、ダブルドライバーに、<sup>フアング</sup>牙のように食らいつく。紫電をともない、美少年

の姿が黄金の騎士へと変わっていく。

ただし、その隙間に目の類はない。代わりに上から猛禽や翼竜のパーツや特徴をあしらった黒い装飾が覆いかぶさり、まがまがしく彩った。

右手に持ったのは錫杖に代わり、重厚な装甲に護られた、鋼鉄の棒。それを握りしめながら、彼は生みの親へと飛びかかった。

### 第三話：疾走の絆（15）

寺の背にひかえたその霊山のふもとに、開けた場所がある。

まるで古戦場のような様相をていするその場所で、かつて本当に幾度となく死闘がくり広げられてきたのは、今となつては寺の関係者を除いてはほとんどいない。

それから身をいたわるように、あるいは眠るように静けさを取り戻していた山肌だったが、その日、ふしぎな光とともに内部から大きく盛り上がって、砂塵をまき散らして爆発した。

その地中から、低いうなり声のようなものをあげて、青白いヘッドライトが輝きを放つ。

黒い車体に浮かび上がる薄青色のラインは、たとえ土埃にまみれようともくすむことがない。

野太いクラクションを鳴らすその未来車……ネクストライドロンから、泥土で汚れた男女がせき込みながら転がり出てきた。

「また、気軽に……ッ、その力を使う！」

「助けてもらつて……はアッ……第一声がそれとか。ていうかコレのどこが気軽なのさ？」

エイジのシフトブレスから呼び出されたトライドロンのボンネットを支えに、春奈は身を起こした。

そして自身の端末が土砂崩れで壊れていないかを確認するべく、電源をオンにした。

ディスプレイは汚れのみで、ヒビのひとつも入っていない。問題は、そこに表示された緊急情報だった。

十分ほど前、謎の飛行生物の群体がこの近郊に来襲し、山道を破壊し、木々を焼き払いながら市街地へと向かっているという。

途上でその進路を変更したため大事には至っていないが、もし本当に居住区へと侵入すれば経済的、人的被害はまぬがれない。

「人がモグラの真似事をしているうちに、好き放題やってくれる……！」

歯噛みしながら春奈は画面を最新の情報を更新した。



穴だらけになった車道では渋滞を起こし、けたたましいサイレンやクラクション、そして人々の悲鳴や怒号が鳴り響く。

おぞましい合成獣たちが、大地を震わせるほどの咆哮を放つ。

正義を標榜する者にとつて、これほど耐え難い地獄もないだろう。だが急行し、イーデイスやギルガメッシュを確保しようにも、この悪路と渋滞だ。どうしても足をとられてしまうだろう。

しかし、悩める彼女の横から、立ち上がってその惨状をのぞき込んでいた青年は、本人よりも早く決断した。

自身の薄型タブレットを操作すると、その手にシートベルトにも似たドライブバーが光によって転送された。

「実はさっき、あのおじいさんにシフトカーを忍ばせておいてさ。僕のとライドロンなら、そこから座標を割り出して、大体の位置まではワープドライブできる。あとは空中を突っ切れば」

春奈はエイジの言葉を、銃口によって遮った。

しばし、膠着状態がつづいたが、

「撃ちたきや、撃てよ」

彼女を横目でにらむエイジの強気が、固まった空気を打ち砕いた。

「僕は、仮面ライダーをやめないから」

その言葉が、春奈の意識を十年前まで飛ばした。

『すまない春奈……しかし俺は、風都の仮面ライダーをやめることは、できない』

という、『あの男』の詫びる声。しかし明らかな、彼女の甘えや憤りを否定し、拒絶する言葉。

「……これだから、男の仮面ライダーは……っ！」

それは決してエイジ自身だけに向けられたばやきではなかったが、彼はそうとはとらなかつたようだ。

「関係ないよ。男とか、女とか」

「ああそうだろうよ。だがそれでも、君には戦う資格はない！ 父親の影におびえる君に、精神的にも肉体的にも未熟な半端者に」

「親だつて関係ない！」

エイジにそう断言される。あのなんとなく情けなかつた青年がはじめて攻勢に出た。そのギャップに、彼女はたじろいだ。

「トライドロンで君を助けたとき、とつさに身体が動いてた。考えるのをやめていた。でも多分、だからこそ、それが本質なんだ。今いる誰かを救うことができるのは、今この時の僕の正義だけだ」

「資格とか、いきさつとか理由なんて関係ない！ 今この瞬間にエンジンに火がついたら、全力でアクセルを踏む！ それが仮面ライダーだ！」

抽象的な言葉とともに、男は腰にベルトを巻く。イグニツションキーを回し、ドライブシステムをシークエンスにまで進行させた。

「変身！」

〈DRIVE！ TYPE……NEXT！〉

ブレスレットにセットしたシフトカーが、主の勇声に応じて発光し、黒い装甲を展開させる。

トライドロンから射出されたタイヤ型のパーツが、一度おおきく宙へと浮かび上がってから、ダークドライブと化したエイジの胸部へ合体する。

その雄姿を、春奈は唇を薄く噛んで見守ることしかできなかった。

「でもさ」

そんな彼女に、仮面ライダーは手を差し伸べた。

「たぶん、あの敵はひとりじゃかなわない。ハッキリ言って照井さんは不愛想でよくわかんないし、照井さんも僕に含むところがあるから突っかかるんだらうけどさ。でも実力は認めてる。だからこの場は因縁も振り切つて、一緒に戦おうよ」

春奈はその黒いグローブをにらみながら、自分のなかで渦巻き暴れる感情と暗闘していた。

何がこの場においては妥当なのか。その思考を阻害するものを出るだけ排除し、整理する。本棚のように。

そして春奈の答えは、重い呼吸とともにその手を握り返すことだった。

「……緊急的な措置だ」

という建前を言い添えて。

ダークドライブのシャープな意匠のマスクから、苦笑の気配が漏れる。

「レディーファーストでどうぞ」

と、エイジは助手席のドアを開けて言った。

調子づいているし、キザな言動が鼻につく。オマケに似合ってもいいない。

だが、共闘を約した手前、これ以上は口論する必要もない。

礼も言わずに彼女は車内に入る。

海外の高級車やスポーツカーを思わせる流線型の車体に見合わず、意外と足が伸ばせるスペースがあった。

シートに座った春奈は、腰回りや足下を手探りし、あるものを引き出そうとした。しかし、目当ての感触が捕まえられずに難儀している

と、

「どうしたの?」

と、運転席に乗り込んだエイジが尋ねた。

春奈は苦い顔で問い返した。

「シートベルトはどこだ?」

「今それ言う!?!」

### 第三話：疾走の絆（16）

ワープドライブの瞬間、照井春奈は無表情だった。

条件が揃えば理論上、ワープどころか片道なら時間旅行も可能なネクストライドロンだ。予断を許さない状況といえ、もう少し感動してもいいものだ。

これも、『愛車への情熱を語る男、興味のないガールフレンド』の一種とでもいうべきか。

苦笑するエイジだったが、現実世界への出口にいたった瞬間、そこに広がっていた夏空が獣の口腔によってさえぎられた。

「うわっ!？」

彼の操作を待つまでもなく、トライドロン自体の判断によって方向を変え、その牙が車体を捉える前に逃れる。

次いでせまってきた太い腕と爪とをかくぐりながら、鋼鉄質の五メートル近い巨体をすり抜ける。

「こいつ……ギルガメッシュたちが乗っていた……」

エイジはそうつぶやいたが、空を満たす怪異はそれだけではない。蛇のような、太古の翼竜のような、そんな飛行生物が青空を埋め尽くしている。

それらと、それらが吐き出す火球を、車体を旋回させながら回避する。

その回避行動もドライブシステムのAIと連動した自動操縦で、ほぼ人間の判断や操作は微調整程度しか必要としていない。だが、運転という行為に対する固定観念か、エイジの手はハンドルを握りしめたままだった。

エイジはハンドルを手放し、その付近にある映像パネルを操作した。

入力したコマンドに従い、車のバックミラーやボンネットに、ホログラムのような銃座が出現した。

そこから射出されたエネルギー弾が敵の火や本体を追尾し、撃墜していく。

だが、多勢に無勢とはこのことか。撃ち落としきれなかった怪物たちが、爆発や弾の隙を縫って、強行突破を図るトライドロンめがけて殺到する。

飛行する自動車を翼の生えた蛇やライオンが追うというその奇妙なドッグファイトの中、

「このままでは埒があかない」

助手席の春奈が、おもむろにシートベルトを外した。

「ちよっ!? 照井さん!」

「運転ご苦労。あとは下から行く。しんがり頼む」

慌てるエイジにみじかくそう答えると、自分の側のドアを開けた。シヨートカットの髪が、風圧で踊る。

そんな春奈の片手には、あのUFOのガジェットがあった。

そのスロットに銀色に光るメモリを差し込むと、

〈ENGINE!〉

と唸る。

そしてもう片方のUFOとともに左右両方に握りしめると、地上から五十メートルは離れたその上空から飛び降りた。

制止する間もなく中空に身を投げた春奈だったが、ガジェットを握りしめた両手の空間に、何かが形作られて行く。

無から光をともなって生み出されたのは、一台の大型バイクだった。埠頭でエイジを捕らえたときの、T3アクセル自動操縦形態。

ハンドルにあたる左右の部位に、UFOガジェットが一体化している。

それにまたがった春奈は、空中で緩やかな角度へと車体を調整し、速度を落としながら地面へと着地した。

UFOガジェットを通して制御されたそのマシンは、ライダーを乗せて車道を通り切る。

その途上から蛇たちが火を吹いたが、鮮やかなハンドルならぬUFOさばきで、ドリフトしながら戦場のごとき山道を抜けて行く。

啞然としていたエイジだったが、いつまでも呆けてはいられない。春奈の頼みどおり、生身の彼女を追手から守らなければならない。

エイジはあえて魔獣の群体へと突入し、一直線に突っ切った。

地上の春奈を追撃しようとしていた蛇たちが鎌首の向きを変え、トライドロンへと迫った。

それを正確な射撃で直近の相手から撃ち崩しながら、エイジも思案する。

「たしかに、このままだとまずいか……」

時間をかければ殲滅も可能だろうが、空中戦は人目につきすぎる。

盗んだ犯人も、敵の正体も判明した今、必要以上に姿を衆目にさらす意味などない。

となれば狙うは短期決戦。

仕留めるのは敵の最大戦力とおぼしき、翼を打って飛び回るライオンの頭と胴を持つ合成獣<sup>キマイラ</sup>。

エイジはアクセルペダルを強く踏み込んだ。

ネクストライドロンは加速し、あえてその巨獣の眼前を横切った。

宝石のような透明度の高い瞳が、その車を視界に捕捉した。

空気を揺さぶる野太い咆哮とともに、翼を打って獅子は追う。

トライドロンは彼から逃れるべく、木々の間を縫って飛ぶ。だが、

勢いを殺すことなく、獅子は樹木をなぎ倒しながら迫る。

鋭く研ぎすまされた牙が大きく剥かれて届こうとした、まさにその瞬間だった。

「今だッ！」

エイジがキレよく発した声とともに、ネクストライドロンはさらに上空へと急浮上、地面に天井を向けるようにして宙返りした。

口撃がむなしく空を切った獅子の眉間に、温存していたレーザービームを一挙に照射した。

青白い光に焼かれたキマイラは、野生の本能のままに吼える。

トライドロンは垂直に車体を停止し、そのドアを開ける。

開いた扉を足場に、エイジは外に出た。

右手首のグローブをキュツと締め直すように逆の手で押さえ、はやる精神を鎮めてからベルトのアドバンスドイグニッションをひねり、シフトブレスのボタンを押した。

〈NEXT!〉

というクリムの声を合図に、車から完全に飛び立った。

ダークドライブから分離したトライドロンは、大きく回転しながらその鋼のボディを魔獣へとぶつける。

そして自身が吹き飛ばしたそれを取り囲むように、空中に軌道を描いて舞う。

さながらサーカスのバイクショーで使うケージのように球形に、青い光の帯が獣を包囲する。

そしてエイジは、この『檻』のなかへと身を投げ入れた。

外周を三次元的に疾駆する愛車によってバウンドしながら、その中央の獣へと何度も、様々な角度からキックを見舞った。

「せい……りゃアーツ！」

その速度が最高潮に達したとき、エイジは裂帛の気合とともにトドメの一撃をくり出した。

雷光を帯びた飛び蹴りは、ライオンの頭をうがち、カメレオンを横した尾までを貫通した。

ここまで蓄積していたダメージが内部から膨張し、紅蓮の炎と化して魔獣を内部から四散させた。

その中を、愛車の上に乗ったエイジが振り切って抜けた。

だが、その後の光景は彼の目論見から外れていた。

自分たちの親玉が倒されて離散すると思われていた翼竜たちは、かえってその闘志をむき出しにして、エイジに迫ってきていた。

「っ、しっ……い……い……！」

ブレイドガンナーを召喚して銃口を突きつける。

だが、その横合いから思いがけないものが流れ込んできた。

〈エイツツ！ ロミオとジュリエット！〉

という音声と、まるで楽譜のようなエネルギーの波。

それが蛇たちを取り囲み、まとめ上げて包み込んで、逃げる間も与えず締め付けて、もろともに爆発した。

攻撃の源を、エイジは目で追った。

一本の針葉樹の上、キマイラと戦っていたときには気配さえ感じていなかったが、そこにひとりの立ち姿があった。

黒い肌地に紫の大目玉の紋章。その上から、まるで西洋貴族と彼らの住まうバルコニーを掛け合わせたような、特徴的な黄色の装いを身に着けている。そのマスクは、さながら向かい合う男女の影絵のようだった。

その腰には、やはりあの幽霊ゴーストのドライバーと、マスクと同じ顔を持つた眼魂がセットされている。

だが、イーデイスではない。でなければここまで苦勞はしていない。

「君は、いったい……？」

ギルガメツシュの使い魔を倒したということは、味方か。あるいは第三勢力の敵か。

だが、新たななるゴーストは、助けた相手に反応した様子も見せず、背の空間に浮かび上がった目の刻印への飲み込まれて、その姿を消した。



### 第三話：疾走の絆（17）

ダークゴーストのガンガンセイバーと、ギルガメッシュのシャフトが噛み合い、火花を散らす。

飛び散ったエネルギーの余波が、周囲の砂地を弾けさせてえぐり、木々を焼いて火柱をあげた。

さながら地獄の様相を見せる山道で、彼らはお互いに、決着のつかない迫合いをやめ、間合いをとった。

体勢を立て直したのは、仙人が先だった。

大剣を投げ捨て身軽になった彼の身体が、黒い霧に覆われる。高速で蛇行しながらギルガメッシュを翻弄し、その手前で実体化したダークゴーストが、野太い雄たけびとともに跳躍と共に、ギルガメッシュのプレートメールへと拳を叩きつけた。

よろめくギルガメッシュの前で、振りぬいた右腕を得意げに回しながら、その腕で自らのドライバーのレバーを左右させた。

「ダイカイガン！ ダークライダー！ オメガドライブ！」

再びジャンプした彼は、そのまま大きく一回転。黒雲を背にまとうて、くりだした飛び蹴りの前で、黄金のライダーは濃紺色のガイアメモリを取り出した。

「ZERO！ MAXIMUM DRIVE！」

シャフトのスロットに差し込むと同時にギルガメッシュはその鉄棒を投擲した。

楕円形がいくつも重なり合ったかのような、異質なエネルギーフィールドがシャフトとギルガメッシュ、仙人との間を遮った。

十分な威力をともなっていたはずのダークゴーストの必殺技は、それに触れた瞬間に輝きを失い、そのまま地面へと落下した。

「な、なんじゃ……力が……!?!」

脚を支えることさえやっとなんかといった様子の仙人の頭上を通過し、黄金のライダーの手元に得物は戻ってくる。

そこからつまらなげにメモリを引き抜き、今度は黄金のメモリを「多様なメモリを使えるのは、別に照井春奈と特権というわけでもな

いんでね」

〈NASCAR……MAXIMUM DRIVE!〉

テンションの低いガイダンスボイスを鳴らすそのシャフトの先端を地面へと叩き付けると、そこから地上絵のような幾何学的な刻印が地面に拡散し、それが触手のようにダークゴーストの脚部を捕らえた。

途端にその全身がスパークを起こし、仙人は苦悶の絶叫をあげた。ギルガメツシュ自身は一瞬、赤と青の閃光を放ったかと思えば、目にもとまらぬ神速で仙人を襲った。

雷光一闪、ともいうべき棒術の打撃は執拗に、ダークゴーストが完全に立っていらなくなるまで続いた。

「今度こそ、成仏するがいい」

冷酷な宣言とともに、シャフトの刺突がゴーストドライバーを刺し貫いた。

その勢いに流されるまま、変身能力を喪った借り物の肉体は、数十メートルを彼方に吹き飛ばされた。

「やりすぎたか」

戦闘の興奮の醒めない様子で、ギルガメツシュはサデイスティックに噛った。

だが、その背後から駆動音が聞こえてきた。

「まったく、良いところで」

とぼやきながら振り返り、乱入してきたライダー、照井春奈をマスキの下から睨みつける。

「今忙しいんだがな」

シャフトを構え直しながら、ギルガメツシュは喉を鳴らして嗤う。

「お前の手品に構っているヒマはない」

「安心しろ、私にもお前に割いている時間はない」

と春奈は返し、タコメーター型のドライバーを握りしめた。

「それにここからは、小細工抜きだ」

……T3アクセルの変身とは、バツクルの上下を逆にして。

ドライバーを腹の上にセットする。伸びてきたのは白い帯。その中を、黒い回路が幾重にも交差している。

バイクから離れたUFOのガジェットが二つ、両方の腰にセットされた。

「M—BUS、変身認証」

天をあおいでつぶやいた彼女の言葉に反応するかのように、両腰の円盤のスロットに、二本の赤いメモリが設置された。

〈ARMS！〉

〈ARROW！〉

という音声が流れ、最後に自身のアクセルメモリのボタンを押して、バツクル中央のスロットへと装填した。

〈ACCEL！ ADVANCED SYSTEM…ACCESS！〉

「超…変身」

その掛け声とともに、彼女の肢体に装甲のパーツが構築される。

深緑を主体としたカラーリングが反転し、赤がメインに移り変わり、銀色のホーンは金へと染色され、T3のそれとは逆向きに頭部へと取り付けられる。昆虫の触覚のように二本に伸びたそれを輝かせ、直垂のようなスカートを脚部の上からなびかせる。

手にした銃はより分厚い装甲に覆われて一回りほど拡張され、半月状の弦のようなものが、銃身の上に形成された。それは、もはや重火器というよりは、あきれるばかりに巨大なボウガンといった具合だった。

「仮面ライダートリプル A…アクセル…付き合ってやる。三分間だけな」

黒いバイザーの下、緑に変色した眼光に必殺の念をたぎらせて、照井春奈は引き金を引いた。

### 第三話：疾走の絆（18）

「……なるほど」

棒を肩にかついでその変身を見守っていたギルガメツシユは、不敵に笑った。

「宇宙の宝物庫から御大層なものを持ち出してきたな、面白いッ」

彼はそう言うやシャフトをその真紅の装甲へと叩きつけた。

だが、それを肩口に直撃したとして、春奈は身じろぎひとつしなかつた。

ボウガンの持ち手とは逆の手が鉄棒を掴み、腕ごとギリギリとねじ上げる。

抵抗しようとするギルガメツシユを拘束したまま、右手のボウガンの引き金が絞られた。

光の矢が至近から、黄金の装甲へと叩き込まれる。

もんどり打つギルガメツシユが起き上がるよりも先に、連射が彼を撃ち抜いた。

火花を散らして倒れた彼をさらなる追撃が吹き飛ばして、その前方からトリプルAが直進する。

〈ZERO！ MAXIMUMDRIVE！〉

メモリを叩くようにして差し替えて、ギルガメツシユはシャフトを突き出した。

だが、唸り声をあげて、その頭上から自動車が彼めがけて突っ込んできた。

シャフトはそれを防ぎとめていなすのに用いられた。

その車から頭から飛び出てきた黒い影が、青い刃を閃かせて身を落とさずさまに斬りつける。

空中で姿勢を整え、低く身をかがめて着地した仮面の戦士、ダークドライブの頭上を、紅の強弓が通過して、直線にギルガメツシユを射抜いた。

そして二人の新世代ライダーは、隣同士に並び立った。

「お待たせ。って、姿変わったる」

「待ってない」

「待ってなくとも一緒に戦うよ。君が誰かの助けを必要としないほど強いのは知ってるけど、そんなことは関係なく、僕は自分なりにこの事件と向き合おうって決めたから……！」

そう言うや、ダークドライブへと姿を変えているエイジは、ブレイドガンナーを逆手に握りなおした。

彼の背後に落下したネクストライドロンが、黒豹のように跳ねてギルガメツシユに飛びかかる。

それを棒一本でいなしたギルガメツシユから一度離れたそれは、レーザー砲のようなもので彼を狙い撃つ。

愛車と呼吸を合わせるかのように、エイジは逆手の刃で体当たり気味にギルガメツシユへと肉薄した。

彼と武器で競り合いながら、スロットへ差し込んだままのゼロメモリを起動させようとする。

だが次の瞬間、エイジの身体が脇へと飛んだ。追い打ちをかけようとする黄金の騎士を、真紅の矢は狙いをしぼって放たれる。

それを妨げようとすれば、今度はエイジとトライドロンが挟み込むような陣形で両側の側背からつるべ打ちに、トライドロンからの熱線やブレイドガンナーからの射撃が浴びせられる。

「ずいぶんと、仲良しになったもんだな」

反攻の隙を作れずに押されながら、ギルガメツシユは言った。

もちろんこれは、素直な称賛ではなく、多分に揶揄が込められている。両人の動きに協調も同調もない。

春奈はエイジもろともに撃つようなためらいのなさで射撃をやめないし、そういう火の粉を振り払うべく、エイジは背後を常に気にかけているようだった。

「助けは求めていない。が、多少は利用させてもらおう」

その春奈が、エイジに一度攻めをゆだねた。

自身は弩を手の中で立体パズルのような手つきで組み替えていく。

明らかに放置していたらまずい代物が出来つつあることは肌で感じ取っているが、それを止めるすべは防御にかかりきりのギルガメツ

シユにはない。

〈ARROW ACCEL!〉

という音声とともに出来上がったのは、彼女の半身ほどもある巨大な弓だった。

銃身だった部分はグリップに変形していた。そこにあるスロットに、自分のベルトの中央から引き抜いたメモリを装填する。

〈ACCEL!・MAXIMUMDRIVE!〉

つがえたノッキングポイントの中心に、熱と光が集中していく。

それを背で感じ取ったのは、今まで肉弾戦を挑んできていたダークドライブが、大きく飛んでその場を離れた。

春奈の指が弦から離れた。

『A』というイニシャルを模した三角形の矢が、風を巻き込みながらギルガメツシユを穿った。

大地をえぐり、木々をなぎはらいながら、彼に食らいついたままの矢は天空へと持ち上がっていく。

そして、爆炎が空を覆いつくした。

メモリとドライバー、そして黄金の眼魂をつかんだ翼竜のガジエツトが、よろめきながら飛び立っていく。

それを追うこともできたが、エイジたちにとってはまずはイーデイスを安否を確かめることの方が先だった。

「二分五十四秒。それが絶望までのタイムだ」

戦闘にかかったであろう時間をみじかく呟く彼女の身体から、装甲が消えてなくなる。

というよりも、上から力任せに引っ張られていくかのような、そんな不自然なエフェクトだった。

手にしたアクセルメモリは表示されたディスプレイが明滅をくりかえし、やがてそのイニシャルが消えた。

それをのぞき込むエイジに、春奈は問われるよりも先に答えた。

「トリプルAの稼働時間は三分が限界だ。それに、変身のたびにクルダウンと調整も必要になる。……T3でも、ダークドライブには負

けないがな」

それだけ言い置いて、さっさと自分は先へと進む。

「……………だからなんで余計な一言を加えるかなあ。ま、もう慣れたけどさ」

エイジのぼやきは、すでに遠くを行く彼女には届かない。

苦みのある表情を押し殺して、エイジもまた変身を解いて春奈を追った。

### 第三話：疾走の絆（19）

ギルガメツシユのマキシマムドライブによって吹き飛ばされ、山から転げ落ちた仙人は、その下の川岸に流れ着いていた。

手足に力が入らない。胸のあたりにバチバチとスパークがほとばしり、それに合わせるように視界が点滅をくり返していた。近くにあるはずの川のせせらぎは、濁っていてどこか遠い。

自分の状態は今の自分が一番良くわかっていた。

何度も味わった感触だからこそ、意識の途切れる間際だと知っていた。

ただ違うことは、もう次はないということと、今までにないぐらい、穏やかな時を刻んでいるということだ。

ここと似たような場所で天空寺龍の手をとったことを、ぼんやりと思いつ出した。

それから目まぐるしく走馬燈が飛び散る羽のように頭の周りを駆け巡り、想いを馳せる。

才気ばしって多くの人間を巻き込み、自分の不始末の処理と刹那的な欲求と衝動に突き動かされた。

この幾星霜の年月は長いようで、短かったような気もする。

ただそれをまとめてひっくりくるめば、

「ワシはいつたいなアにをやりたかったんじやろうなー……」

という一言に集約されるものだった。

自分の才知を頼りに事態を少しでもよくしようとはがんばっていたようだったが、その実、そんな自分の感情さえも見えざる大きな力に振り回されてきたかのような、そんな気さえしてきた。

ピエロじみたその半生に、思わず自虐的な笑みがこぼれた。

おのれを嗤う彼の耳が、砂利を踏むふたつの足音をかろうじて捉えた。

エイジと春奈がおのれを見つけ、駆け寄る姿がうすぼんやりと見えた。

だがその時、彼はある真相を悟った。



何故、ギルガメツシュが自分の生存を知り、行く先々に現れたのか？

その答えを経緯とともに説明する時間はなかった。力なく、河原の石とともに臥して転がるばかりだった。

「何故」

と、女のほうが見えた。

「何故、仲間を頼らなかった？」

「仲間……」

仙人が空を見上げてつぶやいた言葉に、エイジが反応した。

「御成さんから聞いたよ。タケルさん以外にも、仮面ライダーの知り合いがいたんだろ？ スペクター、深海マコト、<sup>ふかみ</sup>ネクロムのアラン。だったら、どうしてもと早く……っ！」

エイジの声が、焦燥を帯びて切羽つまっていた。

青年の甲高いその声こそが、自分が傍目から見ても致命傷を負っているのだと証言だった。

「タケルをあんな目に遭わせたあと、みんなに合わす顔などあるはずもなからう。特にあのふたりは、ワシのせいであまりに多くを喪い、傷ついた……ふたたび争いに巻き込むことなど……」

声にノイズが混ざる。生前の姿をコピーした像が、消えかかって薄らいでいく。

ヒザをつくエイジの肩に、手を伸ばす。

その腕をつかんだ彼の手首には、シフトブレス。黒と黄のツートーンのシフトカー。それを脇目に見ながら、最後の力をふりしぼって、かすれる声で忠告した。

「気を付けろ、おそらく……には……ろは……の……ア……が……れて……」

だがむなしいことに、もはやそれは自分でさえ聞き取れないほど、弱った声量だった。

自分の本名をくり返し呼ぶ青年の悲し気な顔を、白い雪のようなものがいっぱい埋め尽くす。

「ったあーく、死んでも生き返っても迷惑かけつづけて、また死ぬ間際になっても役に立たないとか、ホントどーしよーもないオツサンだな！」

なつかしい、声が聞こえた。

小動物的なかわいらしい声に反して、どこまでも空気を読まないドライさ、容赦ないまでの乱暴な毒舌ぶり。

啞然とする老人の前で、人魂のようなデイテイルのそれは、光の奥から湧き上がるようにして現れた。

「オラ、もう十分だろ。あとは、今を生きてる人間のやるこつた」

と伸ばされたオレンジ色の短い手を、彼はいつものようにブスツとして握り返したのだった。

「うるさいわい」

と、悪態をつきながら。

身体が羽毛のように風に乗って浮き上がる。

視界が一気にクリアになり、地上が遠のいていくのが見えた。若い仮面ライダーたちの姿も。

赤い外套をはためかせ、イーデイスと呼ばれ、仙人と慕われ、おっちゃんとは迷惑がられた男は、最期に届くかどうかともわからない言葉を、祈りを込めて言い残した。

「運命を打ち破れよ、若人たち」

そして後に残されたのは、うなだれる若い男女と、粉碎されて転がる眼魂、そして胴体部を半分以上上えぐられながらも、懸命に天へと手を伸ばす、鉄の人形だけだった。

### 第三話：疾走の絆（20）

物悲しいまでの夕暮れと、そこにそびえ立つ頭抜けて大きく派手な墓標は、陰気と陽気の釣り合いがとれている。

その根元に、エイジは買ってきた仏花を献じた。

と同時に、その墓前で四つ折りにした紙を開いてみる。

「ごめんね」と四字が書かれたその張り紙は、ここに通じていた地下のラボからの脱出の間際、とつさに回収してきたものだ。

土埃で汚れたその言葉は、決めた逃げたことに対する詫びではなかった。もう一体隠れていたギルガメッシュを、命を賭して引き離れた。それぐらいは理解できる。

では、何に対する詫びなのか。

エイジたちを巻き込んだことか。自分を追って犠牲になった天空寺タケルへか。彼の身を案じて取り残された仲間たちへか。

エイジは首を振った。

故人の思惑をあれこれと想像すること自体無粋でナンセンスだ。それに、二度も三度も蘇るこの時世に、すでにそこに魂など入っていないことを知りながら墓石に弔いをささげることが、どうかとは思った。

形式的に手を合わせ、ギルガメッシュの打倒。を故人と、そして自分に誓ってエイジは立ち上がった。

背後に立っていた照井春奈に、正反対の方向を向きながら並び立った。

「これからどうするの？」

「いったん帰るよ。母さんも心配してるだろうし、それに、あれも」

エイジは墓場の外に停めたトライドロンを見た。

その後部スペースに押し込むような形で、イーデイスの入っていた機体が収容されていた。

これで一応、当初の目的は達成したことになる。真相の究明と、サイバロイドボデイの奪還。

「そういうことじゃなく、もっと広義的な意味合いで聞いたんだがな」

と春奈はエイジの横顔をにらんだ。

まあこの程度のおためごかしが通用しないことは織り込み済みだった。だが彼女にしても、本当に聞いたかった答えは聞かずとも、承知はしているはずだった。

「ライダーを、やめる気はない」

「……さつきみたいなのが、あってもか」

エイジは半分ほど開けた右手に視線を移した。

まだ、イーデイスの腕をつかんだ感触が残っている。

たとえ偽りの人体だったとしてもそれは、間違いなく生命が抜け落ちていくのに、はじめて立ち会った瞬間だった。

この鉄面を顔に貼り付けたような女捜査官にも、似たような経験があったのだろうか。それを問うことを、エイジはためらった。

「それでも、やる」

いまだぬぐえない喪失感を埋め合わせるように、エイジのその手にはネクストスペシャルシフトカーが握りしめられていた。

「こいつは君でも父さんでもなく僕を選び、そして僕は過去とかいきさつとか関係なく、自分の意志でこいつをつかんだ。これは僕が自身でつかんだ未来で、運命なんだ。その事実があるかぎり、僕はダークドライブとして戦い続ける」

それにさ、と一歩進み出てエイジは笑いかけた。

「もし僕が暴走しても、照井さんが無理やりにも止めるでしょ。僕より強いんだから」

先ほどの彼女のセリフを逆手にとって挑発するように言った。

春奈は形の良い眉根を寄せて、表情に苦みを浮かべた。

ただ微妙に、ほんのわずかに、そしてエイジが認識できるレベルのはじめの笑みを浮かべて。

了承も承認もなかった。ただ、これ以上の議論を嫌ったのか、否定も反対もなかった。

ただ、

「好きにしろ」

と言っただけだった。

沈みゆく夕日の前で、ふたりの仮面ライダーは、別々の方角から、それぞれの道から、別々の速度で進む。

しかしその行き先は、ひとつの道へとつながっていた。

## 第三話までの主要ライダーと時系列

### 【登場人物】

とまりエイジ  
泊英志

大学生。二〇一六年十二月生まれ。

両親は仮面ライダードライブこと泊進之介とその妻霧子。

本作における主人公の一人。

運転免許をとった日、サイバロイドボディの盗難事件に巻き込まれ、仮面ライダーダークドライブへと変身した。

それをきっかけにヒーローとして活動していく中で、ギルガメツシユの騒動に巻き込まれていく。

力を手にする前はこの平穏な時代に自分のやりたいことが見出せず煩悶としていたが、父ではなく自分が『偶然』『他人の意志でなく』シフトカーを手にしたことに運命と意義を見つけ、それ心の支えに激戦を駆け抜ける。

・仮面ライダーダークドライブ タイプネクスト  
エイジの変身する仮面ライダー。

ドライブの後継機となるはずだったライダーだが、過去にロイミュードに悪用されたことがある。

その後変身するためのシフトカー、ネクストスペシャルは消息を絶っていたが二〇三五年に現れた。

本来の変身者はかつて変身していたロイミュード108とは別にいるようだが……？

『サプライズフューチャー』の時と基本スペックは大差がないが、ネクストライドロンのタイムワープ機能など、状況を大きく揺るがしかねないものは現在の技術では再現できず、凍結されている。

また逆に、科学者追田りんなの協力により、ネクストハンター、ネクストトラベラー、ネクストビルダーの三機が支援機として復元されており、以前にはなかった多彩な戦術を実現できる仕様となっている。

ギルガメッシュたちはこのドライブシステムに興味を示しているようだ。

死の間際、仙人はその装備のある秘密に気付いた。

てるいはるな  
照井春奈

インターポールの若き捜査官。

風都工科大学を卒業した後、海外へ渡りインターポールの特務部隊『Forest』へ所属。ガイアメモリ犯罪を主に担当する。

風都警察署長の娘として生まれているが、現在はあまり親子仲は良くない模様。

きまじめかつ常に表情を崩さないクールビューティーだが、時折それが故の茶目っ気を見せる。

・仮面ライダーT3タイプスリーアクセセル

春奈が変身する仮面ライダー。

ガイアメモリ対策として開発されたT3メモリからエネルギーを抽出。それを装甲として身にまとって戦う。オートでの自走システムも搭載している。

安全性を重視した結果、従来のガイアメモリのように肉体変化ではなくなったため、いくら適合率が高くてもその性能には限界が出るが、春奈はそれをUFOガジェットと併用することで変幻自在に戦える。

・仮面ライダートリプルアクセルA

春奈が変身するもう一つの仮面ライダー。

UFOガジェットにアームズ、アローのメモリを装填することで形成される。

そのメインシステム自体は遠く宇宙、M-BUSと呼ばれるインターポール管理の人工衛星が権限を持っている。

(もともとはある人物が所有していた衛星だが、彼の死亡後所有権が浮いていた。その機密性や独自の通信システムの悪用を恐れたインターポールが、『ある部下』の合意の下に回収し、以後特殊技術のデータベースとして利用されている)

リソースが三種の『A』メモリの運用に用いられているため、他のメモリが使えなくなることで、三分という稼働限界時間がネック。だがそれを補うほどの圧倒的火力と重装甲を持ち、固有の射撃武器『アクシズA』は連射可能なボウガンの『アームズモード』と一点集中型の弓型『アローモード』の二形態でもって、あらゆる敵を制圧していく。

#### ギルガメツシュ達

『黄金仮面』の仮称のもと、義賊的ふるまいが世評で人気を受けていた怪盗団。

その正体は、かつて眼魂として呼び出された最古の英雄ギルガメツシュだった。

長く封印されていたが、仙人によって分割されて、ロイミュードのボディを素体として再起動させられた。

分割された精神の大部分を持つ001主導の下、各方面の仮面ライダーたちの技術を流用して変身する。

独自の価値観で動く彼らの目的は、当初仙人が目指していたグレートアイへの接続ではないようだ。

#### ・仮面ライダーギルガメツシュ 真ギルガメツシュ魂

001が自身の精神を封じ込めた眼魂ドライバークによって変身する仮面ライダー。ゴーストのグレイトフル魂と酷似した姿を持つ。分身たちと違って特殊性こそないものの、他を圧するスペックを持ち、腕力のみでもってグレイトフル魂を打ち負かした。

他のギルガメツシュが異星人のコピーした強化体ボディ（メガヘクス）を使っているのに対し、彼にはある超進化体の体が使われている。

いわく、『次元を超えてきた特殊なロイミュード』らしいが……

#### ・仮面ライダーギルガメツシュ ギルガメツシュ魂

009がメガウルオウダーのレプリカに自身の眼魂をセットすることで変身する仮面ライダー。

そのボディは並大抵の攻撃ならば吸収し、英雄眼魂の洗脳能力も



持っている。

大斧ガンガンクラッシュャーはその破壊力もさることながら、眼魂の能力を使って攻撃することよも可能。

001に追い詰められたタケルを亜空間に追いやった。

・仮面ライダーギルガメッシュ アイズユートピア

002がWドライバーの複製によって変身する仮面ライダー。

微細な動作からあらゆるものを予測する目と、精神エネルギーを吸収する力とを併せ持つ。

また、もう一対のドライバーとユートピアメモリを介して、意識の共有や転送を可能としている。

・仮面ライダーギルガメッシュ ケツアルコアトルスユートピア

0010がWドライバーの二対によって変身する仮面ライダー。

アイズとは違い、超視覚こそないものの、高速移動と飛行能力によって敵を翻弄する。

独自の錫杖『ケツアルシャフト』と財団X製のT2メモリを駆使し、仙人のダークゴーストを撃破、再度殺害した。

謎のゴースト

ギルガメッシュの猛攻に耐え忍んでいたエイジを救った人物。

その胸のブレストクレストは、ダークゴーストのものと同じだったが……？

・??? (シェイクスピア魂)

謎のゴーストがあらかじめ変身していた形態。

音波攻撃によってギルガメッシュの呼び出した羽蛇（キメラヤミー）を一掃した。

余談だが、音声は玩具の取扱説明書では「きつとロミオとジュリエット!」であり、ガンバライジングでは「イツツ! ロミオとジュリエット!」。(音声を聞く限りでは前者のほうが正解っぽい)

本作では、ガンバライジングの表記に合わせている。

【時系列】

二〇三三年

・三月

照井春奈が風都工科大学を卒業。

Forestl (※)へ勧誘され、T3アクセルドライバーを与えられる。

・十月

イダルマが仙人(イーデイス)に接触。

財団Xの力を借りてギルガメッシュ眼魂の起動実験を開始する。

二〇三四年

・一月

財団X、イダルマ、ギルガメッシュたちがイーデイスを暗殺。海外を主要なマーケットとして活動。

仙人は精神をダークゴースト眼魂に移し、その野望を止めるべく奔走。

・八月

仙人の死の真相を探っていた天空寺タケルがギルガメッシュたちの襲撃を受け、消息を絶つ。

二〇三五年

・五月

仙人が異空間で凍結されていたネクストスペシャルシフトカーを奪取しようとするも失敗、逃げられる。

それを捕まえるついでにサイバロイドボディを盗難。

英志が逃走したシフトカーを使いダークドライブへと変身。

・八月

エイジがダークドライブとしての本格的な活動開始。

ギルガメッシュたちもそれに前後して来日。

Forestlはそれを察知して春奈たちを派遣。

本編へと続く……

※Forest 1

インターポールがアジアを中心に頻発する超常犯罪に、組織的に対抗するために結成した特務部隊。

設立者紙袋順平（しんぺい）の理念の下、各方面の技術的、能力的なスペシャリストたちが、国境の垣根を超えて、日夜この世ならざる悪と戦っている。

完全に英語表記にすると《Forestone》。

《Forest》と《Stone》で……

## 第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Action G（1）

都心のその立体駐車場は、高層ビル群に勝るとも劣らない高さを持つていた。

そのため朝昼は日当たりに恵まれていたが、さすがに深夜ともなれば濃い闇が周囲を包み、白々とした電灯が不気味に内部を浮き彫りにしていた。

その男たちを載せた長細い通路が、吹き抜けの中を分離と結合、下降と上昇をくり返し、自動的に目当てのフロアへと運んでいく。

もつとも彼らの目的は自分たちの車などではなく、その階層で待つ相手だった。

防犯のために監視カメラは点在していたが、今夜に限ってはそれが機能することはない。そこは表向きこそ一般的に解放されたスパーマーケットの駐車場だったが、裏では彼らが所有し、非合法な取引を行うための交流場所だった。

男たちの詰襟の白装束が人工の明かりを鈍く照り返す。

五人一組の彼らは、会話を交わすことなく、お互いがそれぞれの視界で周囲を警戒しつつ、柱のように直立していた。

彼らには法をおかしているという自覚はある。だが、悪事を行っていると自覚はない。かといって、自分たちのやり方が大義正義に通じていると信じているわけでもない。

ただ彼らにあるのは、おのれ自身と、自分たちが属する組織の損得だけだった。

地上八階。無人の駐車場で彼らを待っていたのは、無個性な白服たちとは対照的に、黒いコートで身を包み黄金のマスクをかぶった、個性的な少年だった。

その彼のすらっとした足の下には、トランクケースがあった。銀色のジュラルミン製のそれをつま先でもてあそぶように突つく彼に、男たちが近寄った。

「それがブツか」

挨拶も前置きもなく、男たちのひとりが冷えた声で本題を切り出した。

仮面を脱ぎ捨て、美貌をあらわにした少年……ギルガメッシュは、爪先でケースを叩く。肯定の意味を込めて。

先頭に立った白服が、背後に控えた同胞に目配せした。

端末を取り出したその彼は、慣れた手つきで操作する。同じように端末を懐から持ち出したギルガメッシュは、架空の口座への入金を確かめ、ケースを持ち上げたかかどで男たちの足下へとそれを押しやっ

た。

アスファルトをすべっていくそれを、男はかがんで受け止めた。そして、施錠を解いて開くと、色とりどりの眼球型ぼガジェットが、眠るように収容されている。

「たしかに、天空寺タケルの英雄眼魂の一部だ」

その鉄面皮にわずかばかりの好奇をにじませた彼が、長居は無用とばかりにきびすを返した、次の瞬間だった。

「カイガン！ カメハメハ！ ハワイワイワイ！ 治めたい！」

という、宵闇にふさわしくない、底抜けな調子の音声が続いた。

と同時に、地上から吹き抜けを通じ、巨大なヤシの木が……いや、それを模した膨大なエネルギーが突き上げてくる。

生じた風圧が彼らをよろめかせ、そのエネルギーの上昇気流から飛び出してきた人影が、無防備となったケースをかつさらっていった。

「!？」

手の中の感触が喪失したことで驚きを見せたのもつかの間のこと。白服たちはいつもの無表情に戻り、その乱入者を改めて見た。

ゴーストドライバーを腰につけた、華奢だが異様な存在感を持つそれを。

黒いボディスーツには紫の天眼をはじめとして特徴的な文様が刻まれ、金と赤とで彩られた民族的な衣装を上からまとった姿は、異国の戦士を思わせる。

「ロボセン、手に入れた」

ケースを背後の虚空に投げると、見えない何かがそれをキャッチしたようだ。空中に固定されたまま、それはスウツとかき消えた。

「ほう」

ギルガメッシュは金髪の切れ目からのぞく碧眼をすがめて、感嘆をもらした。

だが、その取引相手には目もくれず、白服の男たちはそれぞれベルトと奇妙な錠前を取り出した。

〈マツボックリー〉

という音声とともにスタンバイ状態になったその錠前を、腹まわりに巻いたベルトへと押し込み、そこに取り付けられた刀のような装置を上下させると、空間にジッパーにも似たゲートが開いた。

ジッパーとその穴につながった森から、角張った装甲が降ってきて、彼らの頭を覆い包んだ。

〈マツボックリーアームズ！ 一撃、インザシャドウ！〉

白い服から一転、黒いスーツが頭の下を包み、頭の装甲がさらにその上へと展開した。どこことなく足軽や歩兵の雰囲気と直槍を持った戦士……黒影トルーパーへ変貌した。

〈ミックス！ ジンバーマツボックリー〉

そしてさらにギルガメッシュとの交渉にあたっていた男が身に着けたそれは、他とは多少異なっていた。

腰のベルトには、木ノ実状の錠前がふたつ並ぶ。

マスクの造形こそ同じだったが、茶褐色の陣羽織のような装いと、十文字槍とが、彼らよりもワンランク上の存在だとアピールしていた。

「やれ」

というその彼の号令一下、侵入者を排除すべく黒影たちが、銀穂をその異装の戦士に傾けて突きかかる。

それが黒いスーツを貫通する前に、『黄金の幽霊』は、空手の回し受けのような手さばきで受け流し、間隙を縫うようにして、最前の二体に掌底を叩き込んだ。

前のめりになった彼らの肩の上から、後衛に控えていた黒影たちが

飛びかかった。

死角から不意を打たれた乱入者は、肩口に槍を振り下ろされてうめいた。鮮やかな連携を前に苦戦する彼の側面に、最初の二体が体勢を立て直して回り込む。

〈マツボックリスパーキング！〉

刀のパーツを上下させた彼らが、天井すれすれまで飛び上がる。

体の上下を逆転させ、その槍、影松と一体化しながらきりもみして落下してくる。

その姿は、まるでミサイルのようでさえあった。

肉薄する黒影たちの胸部装甲を蹴り飛ばした『幽霊』は、その反動で後ろへ飛び退いた。

〈ムサシー！〉

握りしめた赤い眼魂のスイッチを押して。

煙と共に眼魂から飛び出た浮遊霊のような存在が、両腕から伸びた短刀を振りかざし、追い討ちをかける槍兵たちを抑え込む。金色の衣装を脱ぎ捨てた主人を守護する。

〈カイガン！ ムサシツ！ 決闘ズバツと超剣豪！〉

裾を翻して主人と一体化すると共に、乱入者は手にした大剣を二振りの刀と分解した。

様々な角度から迫る槍撃を、その二刀が防ぐ。

だが、猛然と襲いかかる黒影たちの勢いは止まらない。

赤いゴーストを取り囲み、押し包み、槍袈が防戦する彼を上から押さえつけた。

だが、折り重なったその穂先を、下から突き上げるようにして押し返した。

がら空きになったボディスーツめがけて、鮮やかな太刀筋が叩き込まれた。

地面に倒れ伏す四体の脇を、陣羽織の槍兵がすり抜けた。

悠然と闊歩としていた彼は散らばっていた影松の一本の柄を、強く踏んで浮き上がらせてつかむ。

そして両手に槍を取った彼は、ムサシ魂の二刀流に対しての、二槍

流といったところだろうか。

身を抱えるようにして後退する黒影トルーパーたちに挟まれるようにして、面相や表情を隠した両者が対峙する。

槍を手にしたまま、その黒影は指を前後させて手招きした。

二刀を振りかざし、ゴーストは飛び上がった。

それとほぼ同時に、離脱したトルーパーが壁の装置を操作した。

彼らを支えていた足場が変形や分離をはじめめる。いや、立体駐車場自体が歯車のようにうごめきはじめた。

生じる亀裂、そこから落下しながら、彼らは刃を交えていた。

お互いがまったくの無言だった。ただ、互いに相手を押ししようという意志の強さがにじみでていた。

「ぐううー！」

「おおおおー！」

押し合いに勝利したのは、甲高い声を発したゴーストだった。

黒影を壁へと突き飛ばし、とどめとばかりに刀を振るって空を泳ぐ。

だが、黒影は手にした十文字槍を壁へと突き立てた。

耳をつんざくような鉄の音を響かせて、彼の落下速度がゆるんでいく。

完全に止まった時、突き立った槍を足場に立った彼は、鋭い回し蹴りでゴーストを撃墜した。

きりきりと舞いながら柱や下層の床に激突しながら、ゴーストは落ちていく。

その手には、新たに緑に瞳を輝かせる眼魂が握られていた。

へカイガン！ グリム！ 心のドア、開く童話！

それをドライバーに装填すると、新たなパーカーゴーストが覆いかぶさるように憑依する。

彼の両肩から、ワイヤーのようなものが射出された。

先端に取り付けられたペン先のような突起物が突き出た柱を絡めとり、彼の命をつなぎとめる。

へダイカイガン！ グリム！ オメガドライブ！



柱を軸として大きくその身を旋回させた彼は、その勢いを殺し切らないままワイヤーを切り離した。

深緑色の輝きを放つキックが、陣羽織の黒影を襲う。

壁から槍を抜きはなつと同時に壁を蹴った黒影も、二槍をたずさえベルトのバックルを操作した。

〈ジンバーマツボックリスカツシュ！〉

松カサにも似たエネルギーの光輝を伴い、振りかざされた槍が、紙一重でゴーストの通過したあとの空間を切り裂いた。

必殺を期した槍の合間を縫って、ゴーストの飛び蹴りが黒影のアーマーを穿つ。

そんな交錯のあと、苦悶の声をあげた黒影のスーツが剥がれ落ちていく。白服にもどりながら、男はその下の階層に倒れ伏し、白目を剥いて脱力した。

そのままゴーストは、ワイヤーを頼りに落下の速度を調整しつつ着した。

そしてよろめきながら、息を切らして立ち上がった。

ギルガメツシュはその死戦の行く末を、協力者である財団Xの構成員が逃げ散ったあとも高みから見物していた。なかなかに見ごたえのあるサーカスだった。

彼にはどちらに加担する気もなかった。

元々彼が天空寺タケルから略奪した英雄眼魂の一部になど、興味がなかった。財団にほしいとねだられたから、くれてやったただけだ。

(武蔵、グリム……そう疑問は、天空寺タケルとともに異空間に放り込んだ残りの一部が、どうしてアレが持っているかだが)

天空寺タケルではない、誰かの変身したゴーストが、じつとギルガメツシュを見上げている。

だが、連戦のリスクを悟ったらしい。未練がましく数秒間睨みつけた後、背後に眼玉の文様をえがき、それを潜り抜けて姿を消しこんだ。

「面白いことになりそうだ」

ひとり残されたギルガメツシュの分霊は、そう独語した。

彼の視線の先、その亡霊が立っていた場所には、真っ白い砂のよう  
なものが、山のように積もっていた。

## 第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double Action G〜（2）

この擬似ドライブピットに帰ってきたのは、ずいぶん久しぶりな気がした。

つい最近も通信でのやりとりは欠かさなかったというのに。

それだけ、この八月の数日間が、エイジ自身にとって濃密な期間だったということだろう。

「ハイ、終わったよ」

所在なさげに手足をブラブラとさせていたエイジの顔の横に、りんなが預かっていたシフトカーを差し出した。

飛びつくようにそれをもぎとった彼は、ようやく人心地ついたような表情を隠さなかった。

「戦闘データのバックアップと、あと言われてたスキヤニングもね。ベルトにもシフトカーにもシフトブレスにも特に異常は見当たらなかったけど、なんか気になることでもあった？」

まるでハムスターでも扱うような手つきで愛機を撫でていたエイジだったが、その質問には「いや」と言葉をにごした。

だが、その言葉とは裏腹に、彼の脳裏にはあの川岸でのイーデイスの死がまざまざとよみがえっていた。

苦悶の死相を浮かべる老人。消えかけた命の火を絞り切るように、何かを訴えかけていたその口、目。

その先にはエイジと、彼の身に着けていたアイテムがあった。

（まあ、なんかそそっかしそうな人だったし、気のせいだよなあ）

事実、検証の結果はシロ。陰性。ノープロブレムだ。

科学的な根拠からそういう答えが出ているのだ。ならば、そつちを信じるべきだろう。

「なんなら、徹底的に調べてみる？ それなりに時間と設備が必要だけど」

というりんなの申し出に、エイジはあわてて首を振った。

「いや、そのギルガメツシュってヤツらがこの先おとなしくしてるとは思えない。肝心なときに変身できないってのも困るから」

それに、施設だって問題だ。

大がかりな検査や実験をおこなうとなれば、正式な機関への協力をあおぐことになるはずだ。

その結果の先にあるのは、父や母たちへの、この件の露見だ。

「ひと段落ついたことだし、この際みんなに打ち明けたら？ アタシは、それでもかまわないけど」

りんなはそう言つて、装置につながれた鋼の人形を顧みた。

ギルガメツシュにさんざんに痛めつけられたであろうそれは、だいぶ破損がひどいものの、修復が難しいレベルではないそうだ。ただそれを使っていた魂は、戻ってはこない。それだけのことだ。

そして同時に、エイジの過失の償いと、おのれに課した本来の使命の成果としては十分なものだった。

「りんなさんも、あの人たちの性格知ってるだろ？ ギルガメツシュとか知ったら、トシとか考えずにぜったい無茶するに決まってるんだから。もういい加減落ち着いてもらつて、そういう役割は後進にゆずってほしいんだよ、僕としてはね」

その言葉は、ウソではなかった。だが妙に言い訳じみているのは、エイジ自身が自覚していることだった。

彼は、逃げるように荷物をかかえて実験室から出ようとした。

「そうやって、言いたいことを先送りにしてるときっかけを失うわよー」

と、その背に言葉の釘が刺され、反射的にエイジは振り返った。「うちのダンナがそうだったのよ。あの足臭刑事バカ、実際に式にこぎつけるまで何度まごついたか知ってる？」

「いやいや、プロポーズとヒーローの秘密を一緒くたにしないですよ」

苦笑いを浮かべてエイジは横顔を向けた。

よりにもよって、重ねられた相手があの旧式刑事とは。

「エイジ君も、気をつけなよ。月日はあつという間に流れるんだから」「それって結婚の話？」

「君ってば、最近イイ感じの子と会ったんでしょ」

「違うって。照井さんとはそういうのじゃないから。ルックスとか実力とかはともかく、不愛想だし、乱暴だし……とにかくありえないからっ」

「不愛想で乱暴、ねえ……」

「なに？」

「むかあし、どっかの誰かさんも、未来の結婚相手に言っただけでケンカしてた」

顔はニヤニヤと、かつ口調はしみじみと、りんなはそうエイジを茶化した。

エイジは赤面しながら目をそらした。

「……さって！ 今日も仮面ライダーがんばるかなあ！」

と、ことさらに大きな声を張り上げてから、エイジはりんなの制止も聞かずに部屋を出た。

りんなは、次第に小さくなっていくその背を、腕組みしながら見つめていた。

「……なーんか危なっかしいのよねえ。オンナノコのシユミも含めて、誰に似たんだか」

と、ため息まじりにこぼしたつぶやきは、青年に届いたのだろうか。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G (3)

陸堂市大天空寺。

「これ、この間のお礼です」

居間に通されたエイジは、茶饅頭の包みを御成という坊主に差し出した。

「これはありがたい。拙僧、饅頭に目がなくてすな」

小洒落た丸テーブルを挟んで相好を崩した御成は、社交辞令か本音かどうか分からない反応を見せた。

聖職者らしからぬ俗っぽい発言だったが、エイジはあいまいに笑って聞き流した。

そもそもこの居間自体が、点心料理のレストランの、そのまた個室のようなつくりで、寺の一室にしては異色だ。だが、広くはないに関わらず、不思議とくつろげた。

「して、今日はお連れの女性は？」

いそいそと包みを解きながら、坊主は尋ねた。

「今日は、別件です」

席につきながら答えたエイジだったが、彼にしても詳細な情報を教えられたわけではない。

最低限伝えられたのは、ギルガメッシュの関係のある組織……財団Xの構成員を、昨晚確保したということだけだった。そうなった経緯さえ定かではないが、それを伝えた春奈のわずかな洩面を見る限りでは、それは彼女らインターポールにとってもイレギュラーな事態らしい。

それこそ、監視任務にあたっていた春奈が、エイジの側を離れなければならぬほどの。

(と言って、完全にこっちをほっといてくれてるわけでもないけど)

窓の外に、時折UFOガジェット影がよぎる。

気づかれないようそれとなく振り返りながら、エイジは軽いため息

を漏らした。

「いよいよ真相に近づいてきた、というわけですな！」

言葉少ない返答に、御成は自身の想像を膨らませ、興奮したようだった。

エイジはあいまいにうなずいた。

嘘ではない。真相には近づいている。ただ、御成たちの知りたがっていること、『おっちゃん殿』の死因やタケル失踪の原因などは、すでに明らかになっていくというだけだ。

ただ、それをエイジの口から言うことは憚られた。

タケルの件は、せめてその生死が確定してから言うべきだろう。

『おっちゃん殿』の二度目の死は……エイジの口から伝えるには、あまりに重すぎた。

「ああそう言えば」

それとなく追及を避けながら、エイジは本題を切り出した。

わざわざ郊外までふたたび足を運んだのは、茶菓子をつまみながら世間話をするためではない。

一応現職の『不可思議研究所』として、多くのゴースト関係の事件に関わった彼に、聞きたいことがあったからだ。

「タケル殿やおっちゃん殿のほかにゴーストドライバーを持つ方、ですか？」

「はい、タケルさんの件に関わってる……と思しきヤツを追跡しているなか、それをつけた奇妙な仮面ライダーに出会い……出会ったつて、照井さんが」

ははあ、と相槌を打ちながら、御成はむずかしい顔をつくった。

麦茶を冷蔵庫から取り出しながら、二個の湯呑みにそそいでいく。「一度はある試みの中にて、大量に作られはしましたな。それでも粗製乱造のならいと言いますか、ことごとく使い物にならなくなってしまう。それに、純正のゴーストドライバーは使い手を選ぶのです」

「使い手を、選ぶ」

「ゴーストが見えるか、など……いわゆる霊感的な資質が欠かせぬも

のだそう。拙僧もかの石川五右衛門殿の眼魂と心を通わせはしましたが、資質がどうしても足らず……！」

と、口惜しげに御成は言った。

(あ、やっぱり)

とエイジは思ってしまったが、それは本人には言わず、用意された麦茶で喉の奥へと流し込んだ。

「開発者であるおっちゃん殿が亡き今、現存するのはタケル殿、マコト殿のもの……もしや、その御仁というのはタケル殿ではありませんか!?」

「それは、ないと思います」

御成には悪いが、エイジはその希望には懐疑的だった。

根拠はある。

伝え聞くだけでも、タケルの人となりは公明正大で、懐深く情に厚い。あのゴーストが現れたのは、この大天空寺からさほど遠くはない距離だ。無事を伝えるだけなら、容易なはずだ。

たとえばおっちゃんことイーデイスのように後ろめたい事情があるならまだしも、そんな人物があえて言わないということがあるだろうか。

それに、この御成やイーデイス、ジャベルを見ればわかるが、タケルの身近な人々は特状課に勝るとも劣らぬクセモノぞろいだ。そんな相手を不安がらせて、あえて暴走させる危険にさせるだろうか。現に、その独断専行によってイーデイスは今度こそ還らぬ人になったばかりだ。

心底残念そうにうなだれた御成をどうフォローしようか。悩むエイジが口を開きかけたとき、

「……あとひとり、ゴーストドライバーを持っている者があります」

すでに彼の剃り上げた頭の中は、別のことに切り替わっているらしかった。

苦い表情で瞑目したまま、坊主は重い口を開いた。

「生前のおっちゃん殿いわく、高い潜在能力を持った、次世代のドライバーなのだそうですが……なんでも、もとより『あの方』の一部には



グレートアイ殿が混じっていると、いないとか……?」

「その人はっ?」

「ただ、果たして本当にその人物かどうか……」

「もったいぶらずに教えてください! いったい誰なんです?」

自身の今後の行動、ひいては天空寺タケルの生死やギルガメッシュとの戦いにも影響する要素でもある。

渋面を作ったままの彼の肩に手を伸ばしかけた、その時だった。

「もーらいつ」

という少年の声とともに、ほっそりとした手が目の前の空間を横切った。

おどろく彼らをよそに、かすめとられた茶饅頭は現れた彼の口に運ばれていった。

見たところ、高校生になりたてといったところか。

やや袖のあまるカッターシャツの上から和柄のフードパーカーを着崩し、刀の鏢のようなものを首から提げた姿は、とても褒められた恰好ではなかった。が、それを咎められない程度には、顔だちのきれいな少年だった。

美少年というよりかは、愛嬌があるといったほうがしっくりくる。人懐こい印象は受けた。

あつけにとられるエイジの向かいで、御成は厳しい顔を向けた。

「アユム殿、行儀が悪いですぞ」

「たかが饅頭でとやかく言わないでよ」

御成の咎めを無視して、少年は二個、三個とつまんで菓子を平らげていく。

その様子を、御成は目を左右させながら見送ったあと、咳払いした。「こちら、泊英志殿。お父上の行方を捜してくださいる同志の方です」  
軽い会釈で返すエイジに対し、「ふーん」とアユムと呼ばれた少年の反応は薄い。

「アンタも大変だね、こんなことに付き合わされて」

「こんなことって……お父上が行き方知れずなのですぞ!？」

禿頭を赤くして怒る御成に、新たに口に入れた饅頭を飲み下してから、少年は言った。

「だいたい、それが疑問なんだよね。ホントに行方不明なの？ 遠出なんて、今までいくらでもあったでしょ」

「しかし、音信不通ということはないではありませんかッ」

「にしたって、仙人のじっちゃんが死んだからって、みんな気イ張りつめすぎ。人なんていつかは死ぬもんだから、それについてあれこれ深入りするほうも、どうかと思うな」

それに、とつけくわえ、含みのある物言いで彼は言った。

「もしなんかあったとしても、父さんなら自分でなんとかするでしょ。」

『天空寺タケルは、みんなの英雄』……なんだからさ」

それから御成の制止を振り切るように、小走りで自分の部屋のあるらしい方角へと進んでいった。

「どこで育て方を間違ったのやら」

深いため息をつき、まるで母親のような愚痴をこぼす御成に、

「……今のは？」

遠慮がちに、エイジは尋ねた。

ひどく言いにくそうにしていた御成だったが、意を決したように顔を持ち上げ、天をあおいで目を細めた。

「あれが、天空寺アユム殿。タケル殿のご子息にして……ゴーストドライバーの所有者です」

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（4）

大天空寺を後にしたエイジは、石段の下から改めてその場所振り返ってみた。

あのアユムという少年は、いまごろ御成に説教でも食らっているのだろうか。のらりくらりと、それをかわしているのだろうか。

御成がゴーストドライバーの所持者として彼の名を挙げることを渋っていた理由は、なんとなくわかる。

妙に大人ぶって悟ったふうには振舞っているが、あれはどちらかといえば、責任逃れの現実逃避でしかない。

どこか地に足のつかない言動は、戦う人間のものではない。

だが、どこはかとなく……エイジ自身に似ている、ような気がした。だが、あの謎のゴーストとつながる候補者が保管所いないのは確かだ。

今日は直接話し合う機会を失ったが、また後日改めて会ってみよう。

そう思いながら正面へと向き直ったエイジだったが、

「ぶっ!？」

ついさつきまでにはそこになかった分厚く硬いものが、彼の進行をはばんだ。

額をしたたかにぶつけると、小気味よい金属音を響かせる。

「誰だよ、こんなところに車停めた……の?！」

最初は、トラックかと思っただったが、前方に広がる壁のようなものに言葉を喪った。

『車』には違いなかった。

視界を完全にふさぐほどに黒くて長いボディ。無数についた車輪の下には、どこからともなく現れたレールが敷かれ、頭には、牛のような飾りが取り付けられている。

ただそれは自動『車』と言うよりも、

「つてなんだこの列『車』!？」

かたわらに居るのは、鳥の面をした黒づくめ大男。

「どうも」

「なんだこの怪人!？」

さらに車両から飛び出てきたのは茶髪の男。

「なんだこのオジサン!？」

「オジサン言うな!」

勢いに乗じて失礼なことを言ってしまったエイジの前で、男は口ポットにも似たその怪人の頭をはたいた。

「オイ、デネブ! むやみやたらに接触するなつたろ! ただでさえややこしい事態なのに、余計ヘンなことになるだろうが!」

「ごめん……でも、コソコソ監視するのはよくない。聞きたいことがあるなら、直接聞くべきだ」

怪人は気弱げで、かつ朴訥な口調で返した。その声には、いかつい容姿に反した人の好きがにじみ出していた。

男のほうもその性分は理解しているらしく、「つたく」としようがなさげに怒りをおさめた。

そして、やや季節と時代から外れたフリースを翻して、あらためてエイジの方を向いた。

「お前、泊と霧子の息子だな」

「は、はあ……そう、ですけど」

その列車な何なのか、とかこの怪人連れの男は何者だ、などはとりあえず思考のすみに追いやって、エイジは聞かれたことに対して首肯した。

すると男はあからさまに皮肉を浮かべて鼻で笑い、

「あいつらが結婚して子供まで作るとか、笑えるな」

と言った。

その傍らで、デネブと呼ばれた怪人は首をかしげた。

「え? いやあ、あの時から二人は仲良しさんだったけど」

と、余計なことを言いそうになる彼を、男は厳しく横目で睨んだ。大柄な身の丈を縮こまらせるようにして、デネブは口をつぐんだよう

だった。

「……あなた達、なんなんですか？ 父さん達の知り合い？」

突如現れた凹凸コンビに当惑しながら、ようやくエイジは逆に質問を返すことにした。

「俺は、桜井。桜井侑斗だ」

と、眉間にシワを寄せたまま、気難しそうな男はゆったりした口調で名乗った。

「で、こいつがデネブ。後ろにあるのが、時を渡る列車、ゼロライナーだ。くわしい説明はお前の親にでも聞け。今は説明してるヒマがない」

突き放すような言い方とともに腕組みをし、列車にもたれて桜井と名乗った男は言った。

「それよりも、お前に聞きたいことがある」

そう居丈高に放った侑斗の前に、デネブが立った。

さすがに間近に立たれると、威圧感がある。

「俺たちは、ある人間を捜してる。そいつはこの未来に干渉しようとして」

「ハイ、これはあいさつ代わりに、デネブキャンデーだ」

「あ、どうも」

「……過去に干渉して変えることも許されないが、今この世界の時間軸を正しいことに保つことも俺たちの」

「それと、これはご両親の結婚祝いだ。遅れてゴメンって、伝えておいてくれ」

「……………それに、お前にも無関係な話じゃない、何しろお前は本来なら」

「ああ、これは、渡せなかった安産祈願のお守りだ。それと、こっちが出産祝い。で、こっちがエイジの一歳からの誕生日プレゼントで」

「デエーネエーブゥー!!」

キャンディーやらプレゼントのボックスやらをエイジの腕の中へ積み重ねていくデネブに、悠斗は憤怒の形相を向けた。

勢いをつけたラリアットが、怪人の側頭部に直撃する。

「どうしてッ、毎度毎度お前はッ！　そう空気が読めないんだあ!？」  
突き倒されたデネブにキヤメルクラツチやチョークスリーパーを  
仕掛ける。

「ごめん！　でもこんな時じゃないと、渡せなくて！」  
もがいで抵抗はしてみせるものの、彼がダメージを受けた様子はな  
い。

その行為の無意味さを悟ったのか、それともあくまで彼らにとって  
は日常のコミュニケーションの一環だったのか。

「もういい！　お前中入ってる！」

解放されて立ち上がったデネブを列車の内部へ強引に押し込んだ。  
乱れた服装と呼吸と表情とを整えてから、改めて、エイジに難しげな  
顔を向けた。

「お前、天空寺アユムを見たか？」

——その唇から聞こえてきたのは、意外な人物の名前だった。

それが誰の名なのかは知っていたが、それを本人ではなく自分に聞  
く意味がわからない。何より、この場所で聞く意味もわからない。す  
ぐ目と鼻の先に、彼がいるではないか。

エイジが視線を天空寺に投げやると、

「もう良い。今の反応でいたいわかった」

と、侑斗は一瞬落胆と苦笑を同時に顔び浮かべたあと、くるりと背  
を向けた。

「待って、今の質問ってどういう」

意味だ、という言葉の続きは、

「だがこれだけは、前もって忠告しておく」

と、侑斗に遮られた。

「もし今の言葉の意味がわかるようなことがあれば……それ以上は関  
わるな。お前は今この瞬間を守っていればいいんだ」

男たちを乗せた列車は、牛のいななきにも似た重低音を響かせて、伸びたレールとともに浮き上がった。

エイジはそれを追おうとした。だが、手に抱えたプレゼント類が、傾いて一気に崩落して彼に覆いかぶさった。

「ぐえっ」

と悲鳴をあげながらもエイジは、その中を懸命にかいくぐった。

まさかあのプレゼント攻撃が、こんな足止めの姦計であったとは。

……いや、おそらく単純な善意だったのだろう。

頭にはりついたキャンディを振り払い、立ち上がった時にはもう、列車は天高く光のトンネルの中へと潜っていった。

言い捨てられた警告の意味を咀嚼することも、問い返すこともできないままに。

ただ、彼の言い放った捨て台詞は、

「フラフラせずに霧子を安心させてやれ」

という、同じ場所での父の説教と重なって聞こえた。

「……なんだよ」

つぶやいたエイジの手は知らないうちに、逆の手首に取り付けられたシフトブレスを、薄手の袖の上から握りしめていた。

たしかに桜井侑斗は、父と同類ではあるようだった。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（5）

「ハア……御成って、なんであんなうるさいわけ？ いい加減年相応に落ち着いてもらいたいんだけど」

ある日の昼下がりに、アユムは公園のベンチに腰掛けて、そうこぼした。

彼が座るベンチは、アクリル製の透明な、デザイン性を感じさせる透明なものだ。

単純にセンスがいいというだけでなく、雨の日にはまるで消えるように姿を雨粒の中に溶かし込んでしまう。これは、「雨の日にわざわざ野外のベンチに座る必要がない」という本質を突いた、意外に鋭い代物なのだ。

別の場所にあつたのを無理言ってもらってきたの、とは背後の屋台の主人のセリフ。元絵描きらしい審美眼が、彼女の中にはまだあるらしいし、今も時折筆を取るようだ。

「確かに、タケル君どこ行っちゃったんだろうねえ」

その女主人、福嶋ふくしまハルミが営むたこ焼き屋が、『フーミン』だった。年季の入ったプレートに生地を流し込めば、ジュウと音がする。

油の匂いを嗅げば、グウと腹の音も鳴るといふものだ。

代々受け継がれてきた味は、時代世代を問わず魅了する。

「つていうか、そんな状況下で呑気にたこ焼き買ってる方もどうなのよ」

「それが客相手にとる態度？ 良いの良いの。やりたいヤツらがやるとけば」

パーカーの中に眠る眼魂を握りしめながら、少年は言った。

「……ボクには何の力もないんだからさ」

弱々しく自嘲した。

胸にかけた鍔が、昼の光を浴びてかすかに輝いた。

「ねえ、まだ焼けないの？」



と、ごまかしもかねて振り返った、次の瞬間だった。  
景色が変わっていた。

太陽の下の牧歌的な公園から一変、薄暗い座敷のような場所に。  
魚眼レンズを通して見たかのように、畳や棟の縁が歪んでいた。

生地を焼く音も匂いもかき消えて、埃っぽい空気が充満していて、  
不穏な空気を醸していて、アユムは立っていた。

そして彼の視線の先には、ハルミではなく、

「呆れたガキだな、お前エは」

と悪し様に罵ってくる、黒い影。

鼻も口もなく、目だけが青白く発光している。浅葱色のんだら模  
様の羽織を頭からかぶさり、苛立たしげに腰の刀をガチャガチャと鳴  
らしていた。

「あのテツでもお前ぐらいの歳の頃には、真つ当な思慮を持つてたっ  
てのに」

さらにその両脇に、同じ姿格好の影がふたつ。

細身で平べったい体格の一体が、刀に手をかけた影をなだめるよう  
な手つきをし、最後の一体を中心に据えるように位置取った。

ガツシリとした肩をいからせ、腕組みしながら向けたその背には、  
白く染め抜かれた、

「誠」

の一字が浮き上がっていた。

「……アンタたちか」

そして彼らは、アユムにとっても知らぬ仲でもなかった。

祖父の遺品の刀から外された鏢。それによって時折、彼の意識に介  
入してくる。

その元の持ち主たる英雄と、彼の同志による魂の複合体。

近藤勇

ひじかたとしぞう

土方歳三

おきたそうじ

沖田総司

日本では知らぬ者のない剣士たちだ。

……新選組という、人斬り集団として。

「テメエの父親が殺られたかもしれないってのに、その仇討ちにも行かず、こんなところでスネてくずぶつて、無駄飯食って引きこもりかい。もし俺らの隊士なら、法度に照らして斬つてるところだ」

「……うるさいな」

「あア？」

「だからそういうのは、力とやる気がある連中がやれば良いんだよ！ 分不相応な力量で余計なことに首突っ込んで、それで何か変わるわけ？ アンタらがそれを一番良く分かってるんじゃないの!？」

父から譲られた偉人図鑑。幼心に、そこに記されていた鮮烈な最期を覚えている。

新選組局長近藤勇、政府軍に投降ののち、板橋で斬首。

副長土方歳三、近藤勇の死後も旧幕府軍として函館まで抗戦を続け、戦死。一説には逃亡する味方に撃たれたのだという。

一番組長沖田総司、肺病をわずらい、苦悶と無念のうちに病死。

だがアユムに言わせれば、そこに名誉などあろうはずもない。

「……なにが、壬生狼だよ。アンタら、みんな時代の流れに無意味に逆らった挙句の、犬死じゃないかッ」

彼らの記憶から構成される座敷が、シンと静まりかえった。

「……テメエ」

と鏢を鳴らして近寄る土方の影を、沖田の霊が抑えた。

「まあまあまあ。この時代には、彼ぐらいの歳でも、子どもなんですよ。……彼の中ではね」

と言いつつも、沖田総司はおのれの言葉の中にも、若干の毒を含めることを忘れなかった。

皮肉めいた言葉とともに振り返った彼は、ため息をついて、

「たしかに」

と頷いた。

「あの時は悔しかったなあ。体はどんどんままならなくなっていくし、外ではみんな戦って散っていくのに、何もしてやれない。あの時ばかりは自分の不運を呪ったなあ。だから……君の辛さもね、ちよつとはわかるんです」

次の瞬間、彼はおおきくむせ込んだようだった。それを払しよくするように、アハハ、と少年じみた笑声を彼はあげる。

表情こそ見えないものの、その声は一抹の寂しさを帯びていた。

「でも、弱かったり運が悪かったりっていうのは、何もしない言い訳にはならない」

と、しつかり言い添えた後で「ね、土方さん」と振った。

不本意げに殺気をおさめた土方歳三は、応じて答えた。

「そういうことだな。他人の力だ權威だ大義だの、世情だのってのは関係ねえ。テメエのしくじりや弱さにケジメつけられねえヤツは、男じゃねえ」

「うわー、流石意地だけで蝦夷くんたりまで行った人は言うことが違うなあ」

「茶化すな総司、叩つ斬るぞ」

「だから僕らもう死んでますって」

「そういうことだ」

などとやりとりをはじめた両者の間を、近藤勇の大柄な影は横切った。

アユムの前に立つと、英霊は、ガツシリとそのか細い肩をつかんだ。

「だから、君自身の心の声を聞き、動きなさい。そしていつか答えを見つけてほしい。今を生きる君にとっては、我々の戦いや死は本当に無意味なものだったのか。それを受けて君が、成せることとは、何なのか」

手甲を巻いた黒く、節くれだった指が、少年の肩に食い込んだ。その背後で、彼の同志がじつとアユムへと視線を注いでいる。

痛みはなかった。だが、別の場所が、胸が痛んだ。

奥歯を食いしめて、呻きながら少年は返した。

「またそうやって……ボクが、天空寺タケルの息子だから、アンタらは無茶を託すんだッ」

「それは違う」

近藤勇は首を振った。

青白く光る双眸が、やさしく細められていた。

「実のところ、我々は知っているのだ。君自身の中にある可能性を。たとえ絶望の未来にくじけたとしても、誰かに救いを求めたとしても、いつかはひとりで立ち上がり、いかに敵が強大であろうと抗い続けることのできる、そんな強い魂の持ち主であることをね」

「……………勝手な、ことを、言うなあッ!!」

「うわっ!」

振り払った手が、何かに、誰かにぶつかった。

目に陽光が差し込んだ。完全に覚醒したアユムの視界に広がったのは、公園ののどかな風景と……頭にとっさにアユムが繰り出した裏拳を食らってうずくまる青年の姿だった。

「つてー……………まだ何も言っていないだろ?」

「ご、ごめんなさい」

「なに、昼寝でもしてたの?」

呆れたように言いながら、ハルミがベンチの空いたスペースにたこ焼きのパックを置いた。

「アンタにお客さん」

と、客相手とも思えないぞんざいな物言いとともに、彼をアゴでしゃくった。

持ち上げられた青年の顔には、アユムもまた、見覚えがあった。

「あれ? アンタ確か」

「うん、昨日会ったよね」

そうだった、とアユムは思い出す。

饅頭を持ってきた、父を捜す手助けをしているという青年だ。たしか名前は、泊エイジ。

ただ、その背後でたこ焼きを追加注文しているショートカットの女は知らない。

赤いレザージャケットとミニスカートというコーデイナーと、手にしたたこ焼きが絶望的にスマッチだった。

そんな彼女を横目で軽くにらんだあと、ほほえみを繕って、エイジという青年は口を開いた。

「ちよつと、君と話をしたいんだけど……いいかな？」

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Doubly Action G（6）

その日の朝、エイジが自宅のドアを開けると照井春奈が立っていた。ビクツと総身が反射的に震えた。

美人は三日でなんとやらと言うものの、彼女の威圧感に満ちた堂々たる美貌は、慣れるどころか心臓に悪い。

「……あのさ、照井さんって驚かすのが好きな人？」

「君の肝が細いだけだ」

そっけなく言うのと切れ長な彼女の目が、外に出るようにながした。

イエスもノーもなく連れ立って歩きながら、またレンタカーへと押し込まれた。

「昨日、大天空寺に行ったようだな」

「ようだな、じゃなくて監視してたくせに」

運転席についた彼女に悪態をついたが、当の本人はどこ吹く風。自動運転を開始させながら、接続した端末を操作した。

「四六時中見ていたわけじゃない。こちらはこちらでやるべきことがあった」

「例の、捕まえた財団メンバー？」

「そうだ」

春奈はうなずいた。こここのところ、「私質問するな」と返される頻度は、ぐっと少なくなった。そんな気がする。

ピアノ奏者のようなきれいな、だが引き締まった指を端末に這わせたまま、彼女は説明した。

一昨晚、都内の立体駐車場でシステム暴走の通報があった。

そこが財団Xがらみの施設だったということで、そこを張っていたインターポールが、警察よりも先に、騒動に巻き込まれたらしく、そこから逃げ遅れて気絶していた財団構成員を拘束した。

「その男は今なお多くを語ろうとしない。ただ、自分がノビていた理

由については話した。いわく、『謎の仮面ライダーと交戦し、取引した品を奪われたあげくに敗北した』だそうだ」

「謎の、仮面ライダー」

「で、質問はこちからでもさせてもらうが……何故、また大天空寺に行った？ 真実が明らかになった今、何の用事があるそこにある？」

真実を射貫く、矢のような視線。それを受けて、エイジはシートを背で押すようにして退いた。

だが、せっかく珍しく春奈が正直に事情を説明しようとしていて、その説明には自分の感じていることが必要なのだろう。

エイジはごまかしを抜きにして、率直に答える気になった。

自分が目撃した、あのゴーストのことを。

「……なるほど、あのとき妙に追いついてくるのが早いと思ったら、そういう事情があったのか」

今日の春奈は、逆に恐ろしくなってくるほどに物分かりがよかった。それとも、これもエイジの歩み寄りの成果ということか。

「で、君はそのゴーストが天空寺アユムではないかと疑っている、というわけか」

「うん。照井さんはどう思う？」

すぐには答えず、彼女は無言で端末を操作した。フロントガラスをスクリーン代わりに、薄く映像が表示された。

「これは……？」

「事件現場の監視カメラの映像だ」

さすがに高感度のものを使用しているらしく、夜中の光景だというのにハッキリと見えるほどに画質は良い。

ただ支柱などの障害物で全容までは見えないのがもどかしいところだ。

「君の直感を鵜呑みにはしない。だが」

余計な一言とともに虚空に指を這わせると、その動きにしたがってあるポイント、そこに映った人影がクローズアップされる。

「私も、同じ見解だ」

それは、昨日会ったあの生意気な少年の、幼さの残る顔だった。

「……アユム君！」

すり切れた真つ白なパーカーを目深にかぶっているが、幸い顔がわからないほどでもない。

何より、あの特徴的な目玉のベルトが腰に据えられていた。

「現場では『黄金仮面』も目撃されている。ギルガメツシユとも無関係とは言えない。彼に会って、気がついたことはあるか？」

「いや……何か隠してるって様子もなかった、けど」

そう答えるエイジの言葉に、迷いはあっても力はない。

言うべきか言うまいか。しばらく言い淀んだあと、エイジは切り出した。

アユムに対する質問をしてきた、あの奇妙な二人組のことを。

「なに？ 列車のタイムマシンに乗った怪人と中年男性から飴ちゃんをもらった？」

「いや、重要な箇所そこじゃなくて……て言うか飴ちゃんって……照井さんは、どう思う？」

「深刻なノイローゼだな。一度診てもらえ」

「……僕のことじゃなくてね。あとノイローゼじゃないから」

とは言え、春奈のリアクションは、予想の範疇だった。

自分でも、白昼夢でも見ていたんじゃないかという、突拍子も無い出来事だ。

だが、物証もある。

プレゼントはネクストライドロンの後部スペースを占領しているし、キャンディーは手元にある。

「ほら、これが貰ったやつ」

と、エイジは上着のポケットからデネブキャンディーを取り出し、手渡した。

春奈はデネブの顔の入った包みを解いて、おもむろに飴玉を口に放り込んだ。

「仮に今の話が真実だとすると、あの寺の人間にはもう一度話を聞いておく必要があるな」

彼女が口腔の中で飴玉を転がす。



その様子を助手席から眺めながらエイジは「そうだね」と乾いた声で生返事をする。

あらためて映像の少年を凝視した。

たしかに顔の形は天空寺アユムのものだ。

だが、何かが違う。

……そう、心中で否定の声が響いてくる。

照井春奈の言うところの『鵜呑みにできない直感』ではあるものの、容易に肯定できない何かが、フロントガラスを通して伝わってくる。

画面の少年がああ黄色いゴーストと結びつかないのではない。

彼が、自分の出会った天空寺アユム自身と結びつかないのだ。

たしかに、そつくりの一言では片付けられないほどに両者は似ている。

だが、浮かれたりヒネたりする様子のない陰鬱な表情、余裕の感じられないシンプルな上下の服。

そうした細かいポイントが、彼とアユムとをイコールで結びつけさせてくれない。

ほとんど顔見せ程度の短い邂逅だったが、それでもアユムの人となりはある程度は掴んでいた。

浅薄で楽観的で、それを達観だと見せつけたくて背伸びしている……そしておそらくはエイジと同じく、偉大な父にコンプレックスを持つ男の子。

「案外、そういう些細な点が、真実に行き着くきっかけなんだ」  
いつだったかの父のボヤキが脳裏に蘇る。

エイジはそれを振り払い、シートに上半身を預けた。

決して高いとは言えない位置に天井があった。

フウ、と呼気を漏らしてそれを見つめた。

ポリポリとキャンディを噛み砕く音が隣で聞こえる。

それをBGMにしなから、切ない微笑を天井へと向けた。

(この人、なんでナチュラルに僕の飴食<sup>ひと</sup>べてるんだろ)

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G〜(7)

(……で、ようやくアユム君を見つけたわけだけど)

公園のベンチに座り、ヒザに握り拳を置いてうつむく少年を、斜め前からエイジと春奈は見つめていた。

「……話って、なに？」

寝ぼけていたであろう彼がくり出した裏拳の痛みが、まだエイジの頭部に残っていた。

それはアユムにとって目覚めの悪い夢だったのだろうか。覚醒した今でも、その不愉快さを引きずっているように、顔の筋肉がこわばっている。

気まずい空気の中、警戒心と拒絶をむき出しにしている彼に、たこ焼きのパックを手にしたまま春奈が接近しようとした。

「待った待った待った」とエイジはその肩を押し返し、アユムから少し距離をとった。

「照井さん、まさかと思うけど直球で聞かないよね？」

「君の時と同じで良いだろう」

「いやいや、相手にもよるでしょ」

あの時は不意打ちされてボロを出してしまったが、同じ手が通じるだろうかという疑問がある。

そもそも、アユムがあのだゴーストだったとして、自分とは何か事情が違う気がする。言語化できない違和感が、今なお拭えずにいる。

……何か、根本的な部分からズレている。そんな気がするのだ。

「とにかく、ここは男同士で話し合おうよ。照井さんはそこでたこ焼きでも食べてて」

そう言つて、答えは聞かず今度はエイジ自身が歩み寄った。

故意にはないとはいえ、殴ってしまった負い目もあるのだろう。戸惑いはあっても、そこに敵意はなかった。

「御成さんたちにはまだ伝えてないけど、君には正直に言うよアユム

君。君のお父さんさ、今、すごい危ない状況に巻き込まれてる」

「……で、それがなに？　父さんなら、いつもみたいに自分で何とかするでしょ」

結構重要ごとはずなのだが、対するアユムの返答はそっけない。それほどに父タケルの力量を信用しているのか。

あるいは表面上は楽観を振る舞いつつ、内心では覚悟していたのではないだろうか。

そんな自分の気持ちに素直になれない理由は、おそらく……

「しんどい？」

「え？」

「天空寺タケルさんの息子でいることがさ。わかるなあ、その気持ち」  
「……わかるもんか！」

さりげなく隣に座ったエイジから距離をとるように、アユムは腰を浮かせてた。

「こっちのことの知らずに、よくもそんなこと」

「僕、泊進ノ介の息子だから」

そんなアユムの言葉をさえぎる形で、エイジは改めて自己紹介した。

え、と聞き返した後、少年の中で何かが結びついた様子だった。

目に好奇の光が、じわじわと帯び始めていた。

「泊エイジ……泊……って、まさかあの泊？　刑事で、仮面ライダーライブの？」

エイジは微妙な笑いを浮かべてうなずいた。

「スツゲエ！　別の仮面ライダーの子ども初めて見た……あ」

少年らしい興奮を見せたのは、一瞬だった。すぐにエイジの複雑そうな表情で自分の失言を悟って、表情を曇らせて腰を下ろした。

「ごめん……そういうの、だよね」

「そうそう。人に会って親について知られるとき、だいたいはそんなリアクションなんだよな。ガキの頃はそれもうれしかったけどさあ。でも大人になると面倒の方が多くなってさあ。何？　ヒーローの息子は成績優秀者じゃなくちやいけなくて、下校中に買い食いしちやダ

メなの？　つてぎ」

「だよねー。でもドライブって、世間一般に公表してるでしょ。アンタのほうがキツイじゃんか。ウチは別に隠してはないけど、表には出なかったし」

親が仮面のヒーロー。その共通点を見出して、天空寺アユムは明らかに喜んでいた。安堵していた。早口になって、年相応の貌を、ようやく見せてくれた。

おそらくは、相当に人に言えない鬱憤が溜まっていたのだろう。めつたにない自身の境遇と苦悶を共有できる者など、まったくいないのだから。

「……ホント、カンベンしてくれよ」

フツ、と自嘲気味に目を細めて、少年は言った。

「天空寺タケルの息子なら結果が出せて当然。タケルならこれぐらいできた。タケルの息子なら飯もノドに通らないほどに親が心配なんじゃないのか、とか……ウンザリなんだよ」

それは、エイジにとっても身に覚えがありすぎる言葉の数々だった。

さすがに数をこなした今となっては、このたぐいの言葉はマトモに付き合う義理なんてなく、適当に受け流すすべも心得てはいるが、それでも多感な時期に言われることの辛さは経験している。

離れた場所からじっと春奈が見つめている。たこ焼きをつまようじで刺しながら。

何を思っているかは遠く離れたあの仏頂面からは察せられないが、焦れているのは間違いない。

個人的にはもっとアユムとコミュニケーションをとりたいのはやまやまだが、ようやく本題に入れそうなポイントまでこぎつけた。

この機は逃すまい。

「でも、アユム君はゴーストドライバーの持ち主なんだろう？　だったら、みんな期待しちゃうのは無理ないんじゃないかな」

「確かに、持つてはいるけどさ」

陽炎のようなゆらぎとともに、アユムの腰回りに眼玉のベルトが出

現する。

あの樹上で見かけたゴーストと、色といい質感といい、よく似ている。もつと言え、製作者であるというあのイーデイスがつけていたものとも。

次いで、彼が取り出したのは白い眼魂だった。

だが、ギルガメッシュやイーデイスともものと、違ってはいる。

その瞼は、まるで眠るように閉じていた。

試しにアユムが外装のボタンを押しても反応せず、卵のようなツルリとしたそれが目覚める気配は毛頭ない。

言うなれば、データのない空っぽの状態、ブランク体とも言うべきか。

「御成いわく『心の修行が足りないから、開眼しないんだ』だって。自分だって変身できないくせに。ほかの英雄眼魂も父さんと一緒にどこかに消えたし……残った規格外の眼魂もあるけど、そもそもあいつら父さんのシンパだからこつちの言うこと聞かないし」

エイジはアユムに気付かれないようそれとなく目を春奈へと向けた。

彼女もほんの少しだが、戸惑いの面持ちで、成り行きを見守っていた。

「まあつまり、変身できないんだよ。ボクは」

という、アユム自身の証言が、自分たちの推理を覆す決定打となった。

「ほら、お待ちどうさん」

割とディープな内容の話だったはずだが、それを聞いていたのかわからないのか。たこ焼き屋の女店主が、ぶつきらばうな感じでたこ焼きのパックをアユムに手渡した。

それを受け取りはしたものの、アユムの表情に喜びはない。やはり父のことに對する後ろめたさや遠慮があるのかもしれない。だが、本人のナイーブな内面にまで踏み込むつもりはない。

「……もう行くよ。食事の邪魔しちゃってごめんな」

立ち上がったエイジに、アユムは首を振った。

「いや、ボクとおんなじ思いしてる人がいるってだけで、うれしかった。また会える？」

「もちろん」とうなずいて見せたのは、エイジの偽りない本心からだった。

年相応に幼い笑みをほころばせて、少年は手を挙げた。

「またね、エイジ兄ちゃん」

(……兄ちゃん、か。父さんが叔父さんに『進兄さん』ってはじめて呼ばれた時も、こんな気分だったのかな)

対するエイジもこそばゆさを感じながら、手を振って純粹に笑み返した。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G〜(8)

公園の緑地帯を抜けて、噴水の前。

そこに飾られた鉄柱のようなオブジェをはさんで、男女が立っていた。

泊英志と、照井春奈。

ふたりの若い仮面ライダーは、背を突き合わせながら、野鳥と蝉の合唱を聞いていた。

自身は沈黙し、思慮に思慮をかさねて。

その空気を破ったのは、エイジの方だった。

「あれ、たぶんウソじゃないよ」

分からないでか。そういう感じに春奈は鼻を鳴らした。

エイジの指した『あれ』とは、アユムの「ベルトは持っているが、自分の変身できない」という趣旨の発言だった。

携帯や家電製品のように完全に動力をオンオフできるならまだしも、少年の眼魂は真正銘、彼の手に反応していなかった。

では、英雄眼魂はどうか。自分が見たあのゴーストには装飾が多かった。あれはドライブで言うところのタイプチェンジにも似た一時的な形態変化で、通常のフォームは別にあるのかもしれない。

これも「英雄眼魂は軒並み消えて、残った物も従わない」と否定された。

虚偽ではないと思った。

……でなければ、あのアユムの無力感に対する無念さと、それによる屈折が説明できない。

かつて同じものを感じていたエイジには、それが分かるのだ。

アユムⅡ謎のゴースト説を否定するのは簡単だ。

だが、それによって新たな疑問が湧いて出るのはたしかだ。

「……では、これは一体『何』だ？」

苛立ちとともに、春奈は端末を起動させた。



虚空に半透明に表示された平面的な画像。あの監視カメラに映った少年の像。振り返りながら凝視しても、やはり顔は紛れもなく天空寺アユムだった。

「やっぱりそっくりさんだった」

「そのドライバーはこの世にひとつしかないはずだ」

「ゴーストのほうは眼魔世界とかからやってきた。もしくはベルトは複製品。そしてアユム君は、偶然この場に居合わせた」

「同じドライバーを持つ人間がふたり、偶然同じ日時と同じ場所に？」

「……あるいは、コピー能力を持つ怪人。たとえばロイミュードのような」

ことごとく説が却下されていくなか、最後にエイジが出したものは、春奈は反論をしなかった。

「それが一番妥当ではあるが、問題はあえて天空寺アユムに変身するメリットがどこにあるかだ。それに、財団から奪ったものとの関係は？」

疑問点が多すぎて結論が出ない問答だったが、それが端末の着信音とそれを伝えるアイコンの点滅によって打ち切られた。

「はい」

と画面を切って端末に耳を当てた春奈。と同時に、エイジが持つ携帯にも、画面を見ると白衣の女性の写真が映し出され、音が鳴った。

「もしもしりんなさん？」

「エイジ君、今大丈夫？」

彼女の声は、いつになく真剣だった。

「うん、まあ」と、それとなく春奈の横顔を見ながら、エイジはうなずいた。

「怪物が現れたわ。場所は旧シーパラダイス跡地。そこで、正体不明の仮面ライダーと交戦してるそうよ」

「なんだって!？」

春奈の方を向いたままに、目を見開いた。

まるで示し合わせたかのように、彼女の冷たいまなざしも、わずかな驚愕を帯びて彼のほうへと向けられている。

おそらくは、同じような連絡を彼女の上司から受けているのだろう。

「警察も彼らを追ってる。到着する前に」

「わかった。今向かう」

そう言うとともに通話を切ってエイジは顔を上げた。

「春奈さん、シーパラダイスの件、そっちにも連絡が来た？」

あらためて問うたエイジに、春奈は予想以上に苦い顔を向けていた。

「そうか、君のそこにはそちらだけか」

察しは悪くないエイジは、『そちらだけ』という五文字で、今起っている事態がより困難なことを悟った。

「まさか、別の場所にも出現した？」

「そうだ。ある街に『黄金仮面』が出現したとの報せが入った。襲撃ではなく、あくまで目撃だが」

「こんな時に……ッ」

「無関係、とも言えないがな」

春奈は口ぶりこそ冷静だが、明らかに苛立っていた。『氷の女』にしては珍しく、まるで石でも誤飲したかのような、苦々しい表情を隠さなかった。

それから、まっすぐ体の向きを変えてエイジを見つめなおし、

「手分けをしよう……その仮面ライダーへの対処は、君にまかせる」

え、とエイジは聞き返した。それは、照井春奈らしからぬ判断だった。

「何を驚く？ アクセルメモリが調整中だ。変身できない半端な状態で介入すれば、余計に事態は混乱する」

と彼女は理由を述べたが、それでも意外の念は消え去らない。

いつもの春奈なら、戦闘しようとしまいと、まず急を要する鉄火場へと急行するはずだ。

何より、エイジに対して放任などまずしない。

もしかしたら、別にあつた目撃情報の方が、彼女やインターポールにとってはいより優先度が高いことなのかもしれない。

それは状況か、ギルガメッシュ自身か……あるいは場所か。

「わかった。照井さんも気を付けて」

そんな風に気にかけてあと、エイジは鉄柱のオブジェを足で蹴って勢いをつけた。

カン、と鳴り響いた金属音をゴングとするように、二人は対極の方角へと駆け抜けた。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（9）

エイジたちがたどり着いた時には、すでにかつての歓楽地は戦場だった。

海沿いの広場。逃げ惑う作業員。飛び散る火、煙。その奥で黒い無数の影がうごめいていた。

西洋悪魔を思い起こさせる風貌の石の怪人が、槍を手にして、隊伍のように整列して闊歩する。

その中央に三体、白をベースとした素体をし、紫の宝石を所々にちりばめた魔人が悠然と歩いていた。

そして彼らが追い詰めていたのは、深紅のパーカーを羽織った仮面ライダーだった。

鹿の両角を頭に伸ばし、マスクには六つの真円とその上下に刀が四本デザインされている。

飛びかかってきた石の怪人を紅の直刀を左右に振りかざして斬り落とす。甲冑とダウンジャケットの合いの子のような上衣がひるがえり、中から紫目玉の紋が覗いた。

（間違いない）

姿こそ違うものの、達人然とした太刀筋でわかる。

エイジが会ったのと同じゴーストだ。

それを目で確かめたあと、エイジは段差の陰に身を隠した。

避難者を一通りやり過ごしてから、飛来してきたシフトカーをその手につかむ。

「START OUR MISSION」

それに語りかけるように呟くと、音声入力に応じてベルトが腰へと転送されてくる。

「変身！」

〈DRIVE！ TYPE NEXT！〉

エイジはその場から身を乗り出して、高く跳躍した。

空を踊る青年の肉体に黒い装甲が張り付き、黄色い放物線を描きながら、その胴部にタイヤがはまり込んだ。

着地と同時に振り降ろされた槍を、ブレイドガンナーが受け止める。

それを受け流して、エイジは石の怪物の脇をすり抜けた。

上半身をひねると、背後から追おうとする敵に射撃を浴びせる。

引き金から指を離し、まだ紫煙が糸引く武器を宙へと浮かび上げさせる。

再び身を前方へと切り回しながら逆手でガンナーを捕まえると、握りしめて、迫りくる相手の胸へと叩き込む。

全身を衝撃で波打たせながら、数メートル先へ吹き飛んだ石人が、コンクリート塀に激突する。

ギ、ギ……と、断末魔らしいとは言えないかすれ声をあげながら、そのまま爆発した。

「ッー」

ダークドライブと化したエイジは、そこで頭上に

廃屋の屋根に、金髪の美少年が直立していた。

「ギルガメツシュ、やはりお前か……ッー」

だがその少年……ギルガメツシュの分霊は、まるで今までエイジの到来を待っていたかのように、次の瞬間には嘲笑を浮かべながら背を向けていた。

彼自身は建物の裏へと身を投げたが、彼がここまで引き連れてきたであろう異形の群れは止まらなかった。

「待てッ」

なおも追いつがろうとするエイジだったが、ギルガメツシュのいた廃屋の裏から、五、六体ほどの影が地上の怪物の群れの中に舞い降りた。

忍者のような風貌のそれは宙返りを繰り返しながら怪物たちの隙間を踊り、手りゆう弾を投げつけてくる。

その煙幕が晴れた時には、ギルガメツシュの気配はかけらほども感じなくなっていた。

エイジはマスクの奥で舌打ちした。

だが、観察も思考も会話も、すべては後回しだ。

敵の群れはダークドライブと紅のゴースト、その両ヒーローへと、タガが外れたように猛攻を仕掛けてきた。

自然、互いに敵を突つ切りながら、仮面ライダーはその背を、ほぼ見ず知らずの互いに預ける形となった。

それぞれの横顔を見やる。問答はない。

ダークドライブはグローブを締め直し、ゴーストは一度襟に手をやった。

そしてすぐに前をまっすぐに向き直して、敵へと向かっていった。突き出された槍を、ゴーストは黒いグローブでつかんで絡み取る。

奪った槍を水車のように振り回すと、火花を散らしながら怪人たちがのけぞった。

ゴーストが包围に作った穴を、順手に持ち替えたブレイドガンナーの連射が広げる。

そこから飛び出そうとするエイジだったが、白い魔人が全身から吐き出した宝石のような光弾が、忍者たちが繰り出した手裏剣型の爆弾がエイジに直撃し、その進路をさえぎった。

息を詰まらせるほどの痛みにうめくエイジだったが、退いた彼の手元には新たなシフトカーが握られていた。

それをブレスのネクストスペシャルと交換すると、

〈BUILDER〉

と音声 flowed。

黒と緑とを基調とした新たなタイヤがはまり込む。

次の瞬間、ダークドライブのアイカメラに、膨大な情報が流れ込んできた。

自身の状態、立ち位置、風速、敵の数、モーション、予測動作、彼らから発せられる生体エネルギーなどの動力源、それが集中する急所  
……

ネットワークや、拡張された演算システムを使ってありとあらゆる情報や周囲の環境が収集され、データとして視覚化される。

もつとも、エイジはそれをすべて把握できるわけではない。それをもとに、強化されたA1によって自動制御されたダークドライブの装甲が、エイジの肉体をベストな位置や姿勢へと導く。

それに抵抗せず従う彼は、振りぬかれた忍者刀を飛びのいて回避し、そのまま銃を連射した。

再び放たれた宝石や投擲武器を一発漏らすことなく撃ち落とし、背後からの槍の奇襲も、かがんでかわしたうえで振り返らず、背面越しに撃ち抜いた。

敵の攻勢をはねのけたことにより、アドバンスドイグニッションをひねり、シフトブレスのボタンを押す余裕ができた。

〈BUILDER〉

という音声とともにブレイドガンナーの銃口にエネルギーが集中し、エイジの指によってそれが解放された。

引き絞られた弾はまるで一筋の雷光のように群がろうとする敵を、軌道を直線的に変化させながらそれぞれの急所を貫通し、さながら数珠つなぎにでもするように、緑碧の尾を引いたまま、敵を巻き込んで爆発した。

そしてゴーストの方もまた、一気にケリをつけるべく行動を始めていた。

低く跳躍して襲いかかってきた石の怪人に、投げ槍を叩き込んで蹴り飛ばす。

敵群がその体に巻き込まれて雪崩うつ間に、地から新たな槍を拾い上げて、アスファルトの地面にその石突をめりこませて固定した。

彼の手の中で、真紅の刀が細身の拳銃へと変形させられた。

グリップのあたりにある、まるでサングラスのようなユニットへ、黒と白のふたつの眼魂をセットすると、その銃身を槍穂の付け根に据える。

〈ダイカイガン！ オメガフラッシュユー！〉

十字架のような、槍のようなエネルギーが、銃口から放出される。

大樹のような太さを持つそれは、射手の身体を反動でのけぞらせながら、一帯の敵を焼き尽くした。

「……すごいな」

周囲を一掃した後、エイジは周囲に反応がないことを確認してから変身を解除した。

照井春奈のトリプルAにも負けず劣らずの火力の痕跡を見やりながら、畏敬とともに称賛する。

だが、当の本人は変身を解かなかった。

かと言って、逃げる様子もない。当然、襲いかかる気配もない。ただ立ち尽くしていた。

いぶかるエイジの前で、ゴーストはくずおれた。

そのままゴーストドライバーのカバーが外れ、変身に用いた英雄眼魂が転がり落ちる。

〈オヤスマシー〉

間抜けた調子の音声と光とともに、そのスーツが引きはがされ、現れたのは白いパーカーの少年だった。

駆け寄るエイジは、うつむきがちの彼に駆け寄り、その横顔を覗き込んだ。

予期していた、かつどうしても聞きたいことがあった『彼』の顔が、そこにはあった。

「やっぱり、君だったのか……アユム君」

だが、彼は汗をにじませたまま、苦い表情で首を振った。

「たしかにぼくは天空寺アユム……けど同時に、もう天空寺アユムじゃないんだ」

と、謎を深める言葉を返しながら。



第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（10）

戦闘のあつた現場から離れ、人気のない土手で、ふたりは身を休めていた。

未だに自然を残すそこは、緑の芝生に寝転べば、青い空と、透き通つた川の流れが見えた。

彼らの視界の端には、黒い網のようなものが引つかかっていた。

「はい」

エイジが道中に買ったメンチカツを手渡すと、少年はほのかな微笑を浮かべてそれを受け取り「ありがとう」と礼を述べた。

「すごいね、この世界は。人と、あと食べ物にあふれてる」

続けて発した一言は、彼がすごいしてきた人生の凄絶さを物語るに十分だった。

そこには私情で追及したりせず

「教えてくれないか。アユムじゃないなら、君は誰だ？　そして『もうアユムじゃない』って、どういうことだ？」

と、エイジは今気になっていることについての、説明をもとめた。

「……きみに接触するつもりは、あまりなかった。けど、そうだね。きみならこの事実を受け入れやすいだろうね。エイジ」

自分を兄と呼び慕うようになった少年と同じ顔で、彼はエイジの名を呼び捨てた。まるで、肉体的にはともかく、精神的には長じているかのように。

優しげに目を細めながら、『アユム』は尋ねた。

「きみは、この歴史が、現在が、何度も書き換えられた末のものだと、知ってるよね？」

——この歴史。

思いがけないキーワードに、エイジは声を詰まらせた。だが、その脳裏に浮かんだのは、ダークドライブの力を手にしたときの、追田りんなの説明だった。

相手が理解したことを表情から読み取って、『アユム』は言った。

「そう、ドライブドライバーの暴走によりロイミュードが支配する二〇三五年がこれより前に存在していた。歴史改変マシンや仮面ライダー3号の存在によって、ショッカーという組織は過去を改変し、その未来を書き換えてきた。とりこぼしたセルメダルが、歴史を捻じ曲げたことがある。イマジンとよばれる未来人が自分たちの時間軸につなげるため、分岐点を求めて過去を荒らし回ったこともあった」

エイジが把握していること、していなかったこと。それらをひつくるめ、エイジが呑み込めないのもかまわずに『アユム』はつぶけた。

「そして……イゴールが開発したデミアシステムがデリートを逃れて成長し、グレートデミアとして人格を持って、人類を支配しかけた未来があった」

——そう、エイジがエイジが完全に知らない、先の物語を。

「ぼくは、そこで戦っていた仮面ライダーゴースト、天空寺アユムだ」

エイジがあっけにとられている間に、食べ終えたらしい。

我に返れば、『アユム』の手からメンチカツが消えていた。差し出したその手には、本来のアユムにはない無数の傷跡があった。そして、完全に瞳を開いた白いゴースト眼魂があった。

「奴は復元したロイミュードやバグスターウイルスとともに人類を襲い、多くの仲間が傷つき、倒れていった」

『アユム』はちらりとエイジを見た。

「その絶望的な状況下のなか、人類は何度もその過去を変えるべく、タイムワープを試みた。ぼくもそのひとりだ。結局それらは失敗に終わったけど、折れることのない希望を胸に、最終的には勝利した。……甚大な犠牲を、払いながらね」

でも、とそれで幕引きとせず、平行世界の『天空寺アユム』は語り口を止めなかった。

「追い詰められたデミアは、その矛先を変えた。かつてのぼくと同じように現在ではなく、過去から変えようと跳んだ。ぼくもふたたび過去へと追い、そして父さん……天空寺タケルたちと共闘のうえ、ついに撃破した」

「……どこかで聞いた話だな」

思わずこぼれ落ちたエイジのつぶやきに、真摯に目を向け『アユム』はうなずいた。

「きみのことも知ってる。勇敢で利発な戦士だった」

白い眼魂をしまい懐深くへしまい直し、彼は幽かに、そして深みを込めて笑む。この時間軸のアユムが絶対に作れない表情だ。

「……でもそれっておかしくないか？ 君がお父さんたちと倒したデミアっていうのは、未来からやってきたんだろ？ だったら」

「そうだ、それだけだったら未来は変わらない。勝利はしたが傷つき、荒廃したままだ。だからこの話には続きがある」

風が凧ぐ。草木が揺れる。その青さを愛でるように手元の野草を撫でながら、彼は答えた。

「事件の直後。二〇一六年では、イーデイス主導のもと、デミアシステムの完全な除去作業が行われた。それが分岐点だ。結果、進化したデミア……グレートデミアは生まれず、代わりにこの二〇三五年が現れた」

エイジは、しばらく無言でいた。あつげにとられていたわけではない。それは、今の状況と彼の説明を聞いたうえで導き出される解答のひとつだった。

だが、リアクションには窮していた。

イーデイスの為人を思えば、「また余計なことを」と毒づきたくなる

ところが……

「そう、正しいんだよ。その判断はね。近い将来確実に爆発して世界を壊滅させるとわかってる不発弾を放置しているほうが、どうかしている」

「……でも、それによって変わってしまった未来なら、君はどうして」

『アユム』は、本来この平和を一番に喜び、謳歌するべきであろう戦士は、青空を見上げた。

「ぼくの体質は親のせいかちよつと特殊でね、特異点ではないけれど単独で時間が跳べるし、改変の影響を受けにくい。……だからなのか。ぼくが戻ってきたときこの世界には、もうひとりの天空寺アユムがすでに存在していたんだよ。ごくふつうに親から生まれ、何不自由なく育てられ、戦いも知らないままに生きている、この世界の天空寺アユムがね」

「それが……ふたりのアユムの真相か<sup>こたえ</sup>」

『アユム』は、首肯して応じた。

「そしてこれは、ぼくへの罰だ」

少年は歌を口ずさむように言った。

「言っただろ。ぼくらはデミアがタイムワープする前、一度自分の世界に絶望し、過去から書き換えようとしたんだ。一度目は……ある青年、としておこうか。彼は未来の仮面ライダーだった。けど、自分たちの施設ごと変身能力をロイミュードに奪われた。そこで彼は二〇一五年八月に跳び、未来で復活したあるロイミュードの野望を阻止しようとした。けど、追いつかれた。そして、自分が変身してきた装備で殺された」

「……ッ!？」

「二度目はぼくだ。バグスターウイルスを増殖させた原因<sup>だんくろと</sup>檀黎斗からガシャットと呼ばれる装置を奪うことにより、未来でのバグスターの活動を阻止しようとした。でも本来、それは許されないこと」

「でもそれっておかしいじゃないかッ!? 現に未来は変わっている! 僕らの父さんたちや、君自身が戦ってくれたおかげで! だったら」

「エイジ」

まるで友を呼ぶような口調で、『アユム』は語りかけてきた。

「結局未来を決定させるのは、今そこに生きる人々の決断と行動によつてなんだ。未来からの干渉それ自体では、改変ができない。どうあつても、何らかの抑止力がはたらく。そういうものだ」

「……未来を変えるのは、今そこにある正義だけ、か」

「そういうこと。だからさ、今苦しむ父さんを助けられるのは、この時しかない。そしてそれをできるのは……もう『ぼく』じゃダメなんだ」

『アユム』はそう言つて、草のなかに横たわつた。

広げた手のひらに、真っ白な砂が張り付いている。震える指を折りたたむと、彼は拳をつくつて自分の髪の毛の生え際へと押しやった。

まるで、何か恐怖を押し込めるように。

そしてエイジは、彼にかける言葉が見当たらず、やり場のない感情で肩をいからせたまま、棒立ちになっていることしかできなかった。

「そうか、やっぱりお前の目的は、天空寺タケルの救出か」

そんな若者ふたりに、男の声がかけられた。

彼は季節外れの上着の袖に手を突っ込んで、川沿いの道にいた。

黒ずくめの男が、さながら従者のように歩幅を合わせて日傘を差すのを押しよけるようにして、早足で彼らに近づいた。

「桜井、さん」

エイジも顔は知っている渋面の男の名を、『アユム』が立ち上がったつむぐ。

忌々しげにちいさく舌打ちしながら、その男——桜井侑斗は甲高い声で言った。

「わかっているのか。これ以上無理をすれば、お前は消える」

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G (11)

「まあ、お前が行ける場所じだいといえはこの時間しかないよな」

皮肉げに嗤いながら、侑斗はさらに距離を詰めた。『アユム』は、後ろへと下がった。

「天空寺タケルの眼魂がゼロライナーに入ってきたかと思えば、飛び出して……理由にしても、考えられるのはそれぐらいだな」

「顔見知り、だったのか。っていうか……消えるって、なんだよ」

エイジは、侑斗から距離をとるように身を移した。目で追いながら、コクリと少年はうなずいた。

そこでようやく彼の存在に気が付いたかのように、桜井侑斗もまた、鋭い視線をエイジに送り、口を開いた。

「このアユムがいた時間は消滅している。時間からこぼれ落ちたそいつが砂の砂漠をさまよっていたところを、ゼロライナーが引き上げたんだ。ゼロライナーも、本来は失われた時間の中にあつたものだから波長が合ったのかもな」

「あなたも、本来の時間とは切り離された単独の存在だ」

「けど俺とお前とでは状況が違う」

突き放すように侑斗が言った。

彼とデネブと、『アユム』。それぞれの顔をうかがえる中間の立ち位置に、エイジはいた。

「ゼロノスでも特異点でもないお前が今も存在を保っていられるのは、ゼロライナーとゴーストドライバの恩恵とのバランスによつてだ。ゼロライナーから離れてゴーストドライバを酷使すれば、もう存在を保つのは限界のはずだ……おとなしく戻れ」

「断る」

『アユム』は立ち止まり、間髪を入れずその申し出を拒んだ。

「ぼくには、まだこの時間でやるべきことがある」

対する侑斗は、カツと眼をいからせた。

「お前、自分で言ったばつかじやねえか！ もうお前は这个世界に干渉できないんだよ！ そもそも、もうなんの関わりもない！ 自分が消滅してまで肩入れする義理がどこにある！」

つながった、とエイジは心の中でつぶやいた。

「お前、天空寺アユムを見たか？」

という、その問いの意味。そして、それらのやりとりの中にあつた、侑斗の焦燥。

それらは、ただ似たような存在であるこの『アユム』を、案じてのことだったのだと。

そして青年は岐路に立たされていた。

これ以上戦わせれば、『アユム』は消える。だが、彼の望みは、たとえ自分を代償に差し出してでも、父タケルを救いたいというものだ。その願いの前に、自分は、何を、してやれるのだ？

『アユム』は言った。

「それでも……ぼくにはやるべきことがある。『天空寺アユム』には、背負わなければいけない宿命がある」

透き通った目に頑なな信念を宿して輝かせて。

「十分なんだ！ ぼくが間違っていたとしても、そこで得たのがたとえ短い邂逅であいだったとしても、それが僕に大切な思いをくれた。それを今返す時なんだ！ ここは、ぼくが戦い抜いて守ってきた希望だ。過去おみさんが、未来ほくにくれた希望なんだ。……自分が残らなくなつていい。これが、ぼくが命を燃やして生きてきた証だ！」

侑斗は大仰にため息をこぼした。

「たとえ自分が消えても、未来を守りたい……そんなヤツらを、俺は三人ばかり知ってる」

ぞんざいに投げやった彼の視線に、川べりに引つかかった黒い網があつた。

「どいつもこいつもいけ好かないヤツらばかりだったが、それでも消えてもいいヤツなんか一人だっていなかった。俺自身、そんな覚悟

もしてきたはずだった。けど、実際に死んじゃうのは大違いだと、誰かに教えられた。もう誰に対するものだったのか、それさえも憶えてないけどな」

黒い網をしかめっ面で見つめ、彼は薄く唇を噛みしめた。常の洗面とは違う、もどかしげで、切なげに揺れるまなざしを、引き絞って。「そして思った。俺は、そいつらのようにはなれない。これ以上、誰かに背負わせるつもりもない」

真正面に向き直ったとき、彼の手にはベルトと、一枚のカードがあつた。

「力づくでも連れて帰るぞ……変身」

腰に巻いたベルトのバックルに、カードを差し込むと、

〈ALTAIR FORM〉

無機質な電子音声と、星を思わせるまばゆい輝きとともに、彼を緑色の大剣士へと変えた。

「仮面ライダー!?!」

おどろくエイジを、デネブが「ここは危ない!」と端へと押しやる。その彼らを、変身の衝撃波がおおきく揺さぶった。

「最初に言っておく! 俺はかーなーり、強いっ!」

と高らかに宣言とともに、大剣が地面に突き立てられ、空いた指が少年へと突きつけられた。

「うん……知ってる。それでも、止まる気はない!」

対峙する『アユム』の腹部にも、ゴーストドライバーが燃え上がりながら浮かび上がった。

そこに深紅の眼魂を装填すると、手刀で虚空に印を結ぶ。

「変身ッ!」

〈カイガン! ガリレオ! 天体知りたい、星いっぱい!〉

左右させたレバーの連動とともに、ドライバーから呼び出された、天球をかぶったようなパーカーが彼を頭上から覆い、三日月と望遠鏡をかたどった模様がマスクに浮かび上がる。

そのシンボルが、桜井侑斗の変身した戦士を見つめ返していた。寸時の見つめあいの後、時空をわたってきたふたりの仮面ライダー



は、互いに向かつて踏み出して、エイジの眼前で衝突した。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（12）

「お前、天空寺アユムを見たか？」

「もし今の言葉の意味がわかるようなことがあれば……それ以上は関わるな。お前は今この瞬間を守っていればいいんだ」

桜井侑斗と初めて出会った日、投げかけられた忠告だった。

言われたその時にはなんのこともはわからなかった。だが、今なら理解できる。

そして今、彼の言葉に従うわけではないが、エイジには目の前の状況を傍観することしかできずにいた。

目の前で渦中の両者が、相争う姿を。

ふたりの仮面ライダーは、肉薄しながら土手の転がるようにして駆け下りて、はげしい攻防を繰り返していた。

だが、徒手空拳で挑む『アユム』に対して、ゼロノス……と呼ばれたか。桜井侑斗の仮面ライダーの剣は、リーチ差を活かして優位を保っていた。

そのうちに防戦へ回り、それが経験差による純粋な苦戦に変わるまでそれほど時間はかからなかった。

胴体に直撃を食らい、『アユム』はうめいた。自身をかばうように背を侑斗へと向けた。

そこへ、大きく跳躍して勢いをつけたゼロノスが、大上段に振りかぶった。

……だがそれは、『アユム』による誘いだった。

〈ダイカイガン！ ガリレオ！ オメガドライブ！〉

ゴーストドライバーからレバーの操作音とともに鳴り響く音声により、侑斗もみずから失策に気付いたようだった。

振り返りなおしたゴーストの両手の間に、銀河のようなエネルギーの渦が生じていた。

おおきく突き出された『アユム』の両手から発射されたそれが、天

高く侑斗を押し返した。

だが、侑斗は慣れた手つきで手の中の剣をボウガンへと組み替えた。

乱射された光の矢が追い討ちをかけようと浮き上がった『アユム』に炸裂し、地面へと墜落させた。

侑斗は迫る。

倒れこむゴーストにボディプレスを食らわせると、流れるような動作でエルボーを入れ、締め上げる。

『アユム』はもがく。

どうにか侑斗の拘束からすり抜けた片手に、白い眼魂が握られていた。

ゴーストドライバーから眼魂を引き抜くと、彼に覆いかぶさっていたパーカーが浮遊霊のごとくに分離する。

「んなっ!? コイツ……ッ」

侑斗はそのパーカーをつかんだまま、そして逆に捕まれたまま、気球のように天へと舞い上がった。

その隙に、『アユム』は英雄眼魂を入れ替えた。

へカイガン！ ピタゴラス！ 三角の定理オレの言うとおり！

ガリレオ魂とはうってかわって、飾り気のないノースリーブの衣をまとうとともに、侑斗を捕らえていたパーカーゴーストが空中から消える。

ゼロノスは、土手をつなぐ橋の欄干へと着地した。

へダイカイガン！ ピタゴラス！ オメガドライブ！

その足がつくかどうかというときにも、『アユム』は攻撃の手をゆるめることはしなかった。

彼の背に浮かんだ眼玉の文様が、細長いエネルギー体として分かれ、三角の先端が追尾ミサイルのようにゼロノスへと飛んでいった。

その直線的な射撃を、侑斗は欄干や橋の上を飛び回って避け、矢で撃墜する。

相次ぐ射撃に足場が破壊され、逃げ場と足場を失うと、ためらいなくそこから飛び降りた。

「デネブ、来いッ！」

と、有無を言わさぬ語気の強さで、相棒を呼ばわりながら。

金色のカードを握りしめて。

方やエイジの動きを封じていたデネブだったが、その言葉にためらいの気配を見せていた。

だが、

「アユム……………ごめんっ！」

と詫びると、エイジのそばを離れ、大股で駆けながら『アユム』の脇をすり抜けて、侑斗の下へ。

そして二人の影がひとつに重なった瞬間、

〈VEGA FORM〉

ベルトが黄金に光を放って音を鳴らし、暴風と地割れの衝撃がゼロノスを包み込んだ。

まるでレールの切り替えのようにマスクや体格が変化し、その背にマントが膨れ上がって背中いっぱいに広がった。

〈カイガン！ ベンケイ！ アニキ！ ムキムキ！ 仁王立ち！〉

ゴーストもまた、荒法師のような外装になるとともに、大槌を振りかぶって応戦した。

鈍い金属音とともに衝撃波が草木を揺らし、小細工のないシンプルな力の競り合いが始まった。

だが、素のスペックが勝るのだろう。デネブと一体化したゼロノスを正面から押しよけると、ドライバーのレバーを引いた。

〈ダイカイガン！ ベンケイ、オメガボンバー！〉

その足下から湧き上がるエネルギーが、薙刀や斧など、多種多様な武器となって浮かび上がり、乱雑に飛び回りながら、体勢を立て直したゼロノスへと飛び向かう。

〈FULL CHARGE〉

侑斗、いやデネブは腰で輝くカードを引き抜くと、自らの剣へとセットした。

エネルギーを帯びた刀身を一閃させる。迫りくる武器が薙ぎ払われて、周囲の砂塵が巻き上がった。

その渦の中で、

〈CHARGE AND UP〉

という音声とともに、無数の弾丸が突っ切って『アユム』の胸元ではじけた。

砂の幕が開けたときには、ゼロノスは元の造形へと戻っていた。

……いや、その色は鮮やかな緑から、赤錆びていた。手には、デネブの顔を模した小型のガトリングガンが握られていた。

『アユム』の方は今も消耗をしているのか、ハンマーを支えにようやく立ち上がれる状態だった。

その状態を見て取ったゼロノスの頭が、わずかに揺れた。息を呑む。その奥にある表情が、見てとれるかのようだった。

「これ以上時間はかけられない……一気に終わらせる！」

おのれに言い聞かせるように、あえて厳格な声を発して赤く変色したカードをその銃へと挿入した。

〈FULL CHARGE〉

電光を帯びるそれを見て、たまらずエイジはシフトカーを握りしめて飛び出した。

ダークドライブと化して両者の間に立った彼は、ネクストデコトラベラーをブレスに入れて、ベルトのキーをひねった。

〈TRAVELLER!〉

ブレイドガンナーから発せられたサイケデリックな光線が、侑斗の発したレーザーを押しとどめた。

「お前……ッ!?!」

驚愕する彼をよそに、エイジは横顔を『アユム』へと向けた。「行け」と、無言で示唆するようにうなづく。

ゴーストもまたうなずき返すと、同系統の色の眼魂へと交換した。

〈カイガン! サンゾウ! サル! ブタ! カツパ! 天竺を突破!〉

という音声とともにその名のとおりに呼び出された三匹の供と、白い雲に覆われ、天高くへと飛び上がった。

そしてエイジの必殺技は、フルストットル侑斗の光線に押し負けた。ダークドラ

イブの装甲に直撃した。

セーフティシステムによって変身を強制的に解除されながらエイジは地を転がった。

「ぐっ……」

よろめきながら起き上がろうとした。すでにそこに、あの『アユム』の姿はなかった。

ひとまずは安堵するエイジの襟を、同じく変身を解いた侑斗が憤怒の形相でつかみ上げた。

エイジもまた、呻き、あえぎながらも彼の手首を握りしめた。

両者の間で、どうなだめようか、デネブはおろおろと右往左往をくり返していた。

「お前、自分が何したかわかってんのか!？」

「さあね……どうすれば正しかったのかわからない。けど、あなたと言ったんだ」

「はあ!？」

襟を絞る力がさらに強まる。

戦闘のダメージも相まって、呼吸さえもままならない。そんな状態でも、かすれた声でエイジは答える。自分でも説明できないことを、ただたどしく言語化して。

『お前は今この時を守っていればいい』って。だから……助けたんだ。今、助けを求めているのは、あの『アユム』だった。そして多分、この世界のアユムもどうすれば良いかわからないで苦しんでる。あのふたりを会わせれば、何かが変わえられるかもしれない……自分にとって何が正しいかを決めるのは、その決断が悲劇を生むのかどうか。彼ら自身だ。僕らが決めていいことじゃない」

侑斗は表情をこわばらせたまま、小刻みに揺れていた。

やがてそのやり場のない怒りのままにエイジを突き飛ばし、鼻を鳴らした。

「どこかで聞いたようなセリフだな」

とちいさくつぶやいて。

「だったら、お前自身もその決断を、後悔するなよ」

と言いつ添えて。

その響きは厳粛な警告というよりかは、親切心からの忠告のように聞こえた。

「行くぞ、デネブ」

あきらめたのか、それとも別の道から『アユム』を捜し直そうとしているのか。

侑斗はくるりと身をひるがえして、早足で元来た道へと帰って行く。デネブは戸惑いがちにその背を追いながら、一度だけ足を止めて振り返った。

そして、律儀にエイジに向けて仰々しく頭を下げてから、友の後を追っていった。

奇妙な二人組の姿が完全に見えなくなるまで見守ってから、エイジもまた、きびすを返す。

ギルガメツシュがこのまま『アユム』を見逃すとは思えない。ふたたび何らかの妨害を仕掛けてくることは、明らかだった。

心のエンジンに火をくべ直し、エイジは地を蹴った。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（13）

昼下がりの大天空寺は、常には珍しく静けさに満ちていた。

台所で御成が片付けや掃除、備品の整理をしているところに、天空寺アユムが現れた。

「やっぱたこ焼きだけだと腹減るなー。御成、なんかある？」

と言うや、中腰になって冷蔵庫を漁り始めるアユムに対し、その足下に屈む坊主は苦い顔をした。

「……アユム殿、今日の分の修行は、どうされたのです？」

つとめて平静に、大人としての余裕をもってという風に……しようという努力の感じられる調子で、御成は言った。

「いいでしょ別に。父さんいないとマトモにできないし。まあ、ほつときゃ帰ってくるし、誰かが助けてくれるでしょ。英雄なんだから」  
毒を含んだセリフとともにふたたび冷蔵庫の中身を物色しようとしたアユムの手を、

「喝アアアア!!」

という大音声が止めさせた。

反射的に総身を震わせる彼に、立ち上がった御成が睨みすえ、冷蔵庫の扉を閉めた。

「二日作なさざれば、一日食らわず！ 働かざる者食うべからず！ アユム殿、きちんとしなければ、おやつは与えられませんぞ」

「は？ じゃあなに？ 父さんが帰ってくるまで神妙に座禅でもして絶食でもしてろっての？ 父さんは良くて、ボクなら餓死してもいいってわけ？ それとも極楽にでも行かせてくれる？」

兄弟子にあたる人物に睨み返しながら、アユムは言った。

御成は微量の怒りを残したまま、嘆かわしげに首を振った。

「……また、大変なお心得違いをされておられる……仏の道とは、本来



極楽に導くための方法ではない。心を無にして雑念を払い、今おのれにできる作務を為して真理にいたる法。それぞれの道を進み、それぞれに人生の答えを見つける悟りの法なのです。座禅も、食を絶つことも、あくまで手段の一例にすぎないのです」

今度こそ本当に、平静さを持って坊主はつづける。

「食わねば人も動物も生きていけません。ゆえに食べることを否定はしません。食べることは罪ではないのです。しかしそれは、他者の命をいただくというその業は、逃避のための行為であってはならぬのです」

「逃避、だって?」

そこにいたのは、ひとりの大人だった。彼の言うところの仏道の理念を信じる、聖人の姿があった。

色合いを深めた瞳を細めて、彼は自分でも分からないままに気圧されたアユムに歩み寄って説諭した。

「食事で紛らわし、理屈で感情を押し込めて……そうやって今のアユム殿は、ご自分の使命から逃げようされている! おのれが何かをやるべきだと思いつながら、そこから目が背けようとされておられる」アユムはうめく。その身体の奥底で鼓動が暴れていた。

本能的に、自分が凶星を衝かれているとわかっている。それを自覚したとき、いつものような煙に巻くような態度も方便も、すべてが吹き飛んだ。

「……そして、お父上に固執されているのは、そのつながりを頑なに否定し続けるご自身だと、本当は理解されておられるのではありませんか」

極めつけが、その言葉だった。

「うるさい……うるさいッ」

とわめき立てて、これ以上の虚飾が剥がれるのを恐れて、彼は御成に背を向けた。

兄弟子の制止も聞かずに飛び出して、あてもなく駆け出した。

気が付けば、アユムは木々の合間に立っていた。

霊山につづくふもとの小路。蒸しかえるような暑さと、草木の青さが目や肌に入り込み、彼から猛りを奪っていった。

そこでようやく理性に帰り、残ったのは虚しさだけだった。

腰には、無意識にゴーストドライバーを展開させていた。

子どもの手慰みのように、あるいは親の手にすがるようにそれをなぞりながら、少年は薄く唇を噛んだ。

「ボクにだって……ボクだって、力さえあれば」

ふいに喉から突いて出た言葉が、唇ときしむ歯の間からこぼれ落ちた。

本来その独語は、夏の空気に霧散して溶けるはずだった。

だが、

「その欲望、解放しろ」

という男のバリトンが、こだまのようにそう返した。

「え？」

持ち上がったアユムの顔の前を、小さな円盤状の固体が通過した。

ゆるやかな放物線を描いて落下するそれは、プテラノドンの彫刻がほどこされた銀貨だった。

そして呆気にとられる彼をあざ笑うかのように夏の木漏れ日になぶく照り返しながら、ゴーストドライバーの眼窩の中へと呑み込まれていき、突如としてベルトに現れた投入口は、まるで呑み込むようにそれを受け入れたのだった。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（14）

メダルを投げられたドライバーが、その重量をぐんと増した。不自然に増加しつつある重みに少年の身体が悲鳴をあげる。

だが、それが頂点に達した時、その圧迫から解放された。だが、それは異変から解放されたわけではなく、始まりでしかなかった。

ドライバーの眼窩に、亀裂が入る。物理的にはない。そこを起点に、内部から何かが生じようとしていた。

まるで、卵から生まれ出る雛のように。

だが、中から這い出てきたのは、愛らしい雛鳥ではなく、不気味な茶褐色のミイラ男だった。

「ヒッ！」

おのれの半身から生み出された怪異に、アユムはおののき、腰を抜かした。

怪人がその姿をとっていたのは、一時的だった。いつの間にか低い呻き声を発すると包帯のような外皮が剥がれ落ちて、別の姿があらわになる。

引き締まった細身の身体に、鋭く伸びた手足の爪。すりきれたパーカーのような黒い上衣。フードの下には巨大な単眼がギョロリと剥かれて、ボロの服から垣間見えるのは、無数の小さな眼球だった。

造形こそ、父が変身していた仮面ライダーゴーストに似ている、だが、デイトールはまるで違う。

強いていうならそれは、伝承に出てくる妖怪……百目鬼<sup>とどめき</sup>。

後ずさる彼の前に、怪人がもう一体増えた。

トリケラトプスのような鋭い角を鼻に持ち、飛竜の翼のような漆黒のマントをひるがえし、大型の獣のような太い両脚が、地面を強く叩くたびに揺らし、足跡を深く刻み付けている。

だがその全身には所々に欠落が見受けられ、毒々しい紫色の肌地が表出していた。

「その欲望、解放しろ」

と、先ほど聞こえてきた男の声とまったく同じ調子の、同じトーンで恐竜型の怪人は言った。

「なんだよ……なんなんだ、お前はっ!?!」

悲鳴代わりに、裏返った声でアユムは誰何する。

「それは、ギルという」

代わりに答えたのは、その怪人の背後から姿を見せた少年だった。怪人たちの同類であるらしく、奴らが少年を襲撃する気配はない。

他の二体と比して見た目はごく普通の……いや、金髪と碧眼と、たぐいまれな美貌の持ち主である彼は、ただそこにあるだけで周辺の空間を、俗世から隔絶するかのようだった。

そしてその腰には、三か所に円形のスロットが空いた、ゴーストのそれとは別種のドライバーが取り付けられていた。

「大昔に錬金術師たちが開発していた紫のメダル。そのグリードのプロトタイプだ。二十年以上前に一時的に起動したが、その後停止し、こうがみ鴻上ファウンダーシヨンにひそかに回収されていた。もつとも、知性や感情面ではヤミーにさえ劣るけどな」

「は……!?! いったい何の話だ!」

「ただ使いどころもあるだろうと失敬してきたというわけだ……コイツと一緒にな」

そう得意げに言い放つや、美少年は三枚の、赤・黄・緑と色の異なるメダルを懐から取り出した。

ドライバーのスロットにそれぞれを装填し、フロント部分を傾ける。

エネルギーが循環するシークエンス音が流れ、腰についた円形の道具でその表面をなぞる。

「変身」

へハチー・バフオメット! オオカミウオ!」

小気味よい金属音とともに少年の瘦躯を包み込むや、異形の戦士がそのエネルギーの奔流から現れた。

スズメバチのような黒く鋭く光る複眼を持つ緑のマスク、螺旋をえがいた二叉の穂槍を持つ、黄色いボディ、上身の重量を支えるかのよう  
に重厚に護られたレッグ。

上下三色の仮面ライダーが、王者のごとく君臨していた。

変身した彼は、おびえるアユムをつかみ上げ、その凶悪な面相を近づけた。

「な、なにが目的だ……!?!」

「いやあ、お前のほうには何の用もない。もうひとり呼び寄せるためのただのエサだ……が、ちよつと実験に付き合ってもらいたい」

とどろくような哄笑とともにアユムを地面を投げ捨て、自身の背後に振り向き、「やれ」と低く示唆する。

百目鬼が動いた。不慣れでぎこちない手つきで、まるで本物のゴーストのように虚空に印字を描く。そのおどろおどろしい刻印はあまりに小さかった。

その中に、仮面ライダーは無造作に黄色の腕を突っ込んだ。が、マスクの奥底で舌打ちした。

「やはり単独の力では、この程度の空間しか広げられないか……いや、そもそもこいつの欲望が弱すぎる。大切な父親を助けたいという欲求さえ、この程度とはな!」

落胆と嘲りの入り混じった声でそう言い放つと、彼は引き戻した腕を転回させ、状況が呑み込めないアユムへとふたたび向けた。

今度は、ギル、という名の怪魔が動く。その意図は、戦士ではないアユムが瞬時に理解できてしまうほどに、明確だった。

土をつかみながら逃げるアユムの手が、転がっていた、太い木枝に行き当たった。とっさにそれをつかんで立ち上がる。

正眼に構える。

修練を積んでいたがためにいちおうは型になっていたが、その切っ先は揺れていた。北辰一刀流で言うところの鶴鴿の尾ではなく、純粹な恐怖からくる揺れだった。

冷静さを欠いた彼は、背を向けて逃げるのではなくがむしやらに魔人たちへと飛びかかる道を選んだ。選んでしまった。

その太刀筋を、ギルは避けもしない。強固な肉体はまるで錬鉄の集合体かのようだった。アユムは細手をしびれさせ、即席の木太刀を叩き割られるしかなかった。

根元から折れたその切れ端をつかんだままのアユムの腕を難なくどかせると、がら空きになった胴部を逆袈裟に爪が切り裂いた。

衣服がやぶれ、皮膚が裂かれ、傷ついた臓腑から血が逆流して口からこぼれ出る。

胸に提げていた刀の鍔が、むなしい鉄音を響かせた。

全身から力と熱とが抜けていく。

自然膝が支えを失ったように屈して、アユムは再び地に付した。

——これが走馬灯というものか。薄れゆく景色に代わるようにして、鮮明な記憶が脳髓から溢れるように蘇る。

そのうちの多くを占めていたのは思い出は、父タケルとのふれあいだった。

ともに食べ、修行し、そして眠る。

学校で、あるいは修行の一環として、与えられた課題ができずにいる自分に、最後まで付き合ってくれた日々。

その都度、決して起こることなくまっすぐに向けてくれた抜けるような笑みに、抱擁のやさしき、力強さ。

(ボクは、死ぬ……のか?)

死ねば、それらの記憶も、すべてがなかったことになるのか。

そうやって受けた好意や恩義を、父や、他のひとに返すこともできず。

こんな道端で、誰とも知れない相手に、わけのわからない理由で。

(いやだ……死にたく、ないッ！)

父は、勝ち目のない戦いに幾度となく挑み、自分の命が危機にさらされるたびに、尽きようとするたびに、そして今も、同じような無念を噛みしめていたのだろうか。

奇跡などという一言で、他人がかんたんに片づけていいものでは、なかったのだ。

だが、そんなアユムの無念や悟りごと、異色のライダーは血と土に

まみれた少年の肉体を踏みにしった。

そして天を仰ぎながら、挑発的に言い放った。

「見えているのだろうか！ おとなしく姿をさらせ、さもなければ……お前の希望は、ここで潰えるぞ？」

自分たちを包み込む草木が揺れ動く。

やがて、その樹上の葉の合間から、ひとつの人影が飛び出してきた。

「カイガン！ コロンブス！ さあ行こうかい、大航海！」

と、水色の発光を帯びた彼は、両肩に舵輪をはめ込み、前立てに碇を取り付けているが……まぎれもなく、仮面ライダーゴーストだった。

ガンガンセイバーを振り下ろしながら着地した彼は、その大剣を振り回してけん制する。

対するもう一体の仮面ライダーはあっさりとアユムを解放し、二体の怪人とともに距離をとった。

「ダイカイガン！ オメガブレイク！」

アユムをかばうように身を移したそのゴーストは、剣先で大地をなぞるように斬りあげた。

その刃先から水流がほとぼしる。対するライダーも、その爪先を旋回させた。真紅に発光しながら、同様に波濤のごときエネルギーがそこから生じてゴーストの必殺技を難なく相殺した。

だが、ゴーストにとってはそれも予測済みだったらしい。

その隙をついてアユムの身体を担ぎ上げる。その脇で、地響きとともに、木々をなぎ倒しながら巨大な物体が山道に接着した。

怪獣と帆船が融合したかのようなその奇妙な乗り物もまた、アユムの知るものだった。

「キャプテン……ゴースト……まさか、あなたは……」

ゴーストはそれには応えない。

アユムをかついだまま無言でその飛行ユニット乗り移った彼は、離陸するよう手で指示した。

三体の魔人を地上に残し、幽霊船は天高くにのぼりゆく。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（15）

風にあおられる帆船。その甲板の上に、『アユム』はもうひとりの自分を寝かせた。

血に染まった上着の前を外し、傷を検める。

かろうじて致命傷をまぬがれていたことにひとまず安堵しながら、彼は白い眼魂を自身のドライバーへと挿入した。

「カイガン！ ナイチンゲール！ 白衣の天使！ 救うは兵士！」  
羽衣のごときものが上天におおきく浮き上がった後、『アユム』の身へと舞い降りる。

それを羽織った彼は、アユムに手をかざした。

掌からあふれ出た半透明の液体が、彼の上半身の傷口を覆った。  
クアンタムリキッド。

治療用に特化された流体金属は、本人の治療能力を促進させながら血の流出を防ぎとめる。

応急処置をほどこされた少年が、唇からかすかに声を漏らした。

「父さん」

と、たしかに彼はそう言った。

焦点の定まらない目で、ゴーストを見上げながら。

「助けに、来て、くれたんだ」

童心にかえったかのように笑みをこぼす瀕死の少年と同じ顔がマスクの奥底で真逆に歪む。

「違う……アユム。今度は、お前がお父さんを救うんだ」

振り絞るようにつぶやいた矢先、船体が大きく揺れた。

何事かと問うまでもなかった。異変は、空のそこかしこから迫っていた。

風を切り裂いて滑空し、怪光弾を手から射出する恐竜の魔人。

船尾に取り付いた、タコのような無数のガジェット。それが列をなして地上へとつながる橋となっていた。その上を、常人離れしたス



ピードでヤミーが駆ける。大型バイクにまたがった上下三色のライダーが、追いつがる。

ギルガメツシユはためらいなく、船体の横合いにバイクを突っ込ませた。

爆発したバイクが吐き出した無数の銀貨とともに舞い上がった彼は、船上に着地した。

雨音のように、落下したメダルが甲板を叩く。

その欲望の銀雨のなかで、英雄王は傲然と言い放った。

「べつに敗者から奪った品に執着なんてしない。それをお前がどう使おうと頓着しない。だが、この俺から盗んだ行為それ自体は、罪だ」  
雷鳴のごとき高笑いをふたたび轟かせ、魔人は両手を広げた。

「だが赦そう」

……そう、声をあげて。

「父親への献身と、その死をもってな……たとえそれが、放っておいても燃え尽きる命だとしても、俺は正當に代償として評価するぞ？」

「!？」

知っている。見抜かれている。

こいつは、おのれの正体も、その寿命についてもすでに承知しているようだった。

ギルガメツシユの英名とともに、すべてを見通す眼さえ受け継いだというのか。いや、そんなことはありえない。

動揺を表出させないように押し殺し、彼はベルトの眼魂を青いものと取り換えた。

へカイガン！ ナポレオン！ 起こせ革命！ それが宿命！

「おまえに赦してもらおう罪なんて、なにもない……ッ」

ビコーンやマントを羽織って姿を変えた『アユム』はガンガンセイバーを正眼に構えた。

だが、その初太刀は、ギルガメツシユ自身に浴びせられなかった。その身ごと翻すや、横合いから急降下してきた怪獣ギルを斬りつける。

バランスを崩して甲板に激突したギルは、悲鳴ひとつ漏らさず、機

械的に体勢を立て直して歩いてくる。その歩幅に合わせるかたちで、ギルガメツシユと百目鬼ヤミーも『アユム』もゴーストへと接近した。そこから、地獄のような時間が始まった。

ヤミーの怪光線や拳が、ギルガメツシユの槍術が、ギルの吐き出す氷霧や魔弾の類が、三位一体となって『アユム』を追い詰めていく。だが、ブラフであつても退けない。自分の背後には天空寺アユムが昏睡している。

多対一の総力戦にして消耗戦。そして、ゼロノスから続く連戦。

しかも、背で未だに意識の戻らないこちらの世界のアユムを、気にしながら戦わなければいけない。ここまで極力戦闘を避けてきた『アユム』がもつとも恐れていたパターンだ。

過去の失敗から時間軸への接触到に消極的になりすぎたのがかえって仇になった。選択肢のない状況を作ってしまった。

予断を許さない戦局と変身能力の酷使が、文字通り若き仮面ライダーの身を削っていった。

(こうなれば)

三方向からの攻めを剣一本で受け止め、彼は賭けに打って出ることにした。

渾身の力で彼らを押し戻し、強引に彼らの隙をこじ開けた。

反撃確実のその只中で、『アユム』はガンガンセイバーを放り投げ、ドライバーのアクションレバーであるデトネイトリガーを引いた。

〈ダイカイガン！ ナポレオン！ オメガドライブ！〉

増幅したエネルギーが光輝と浮力となって爪先に集中して、アユムを宙へと浮き上がらせた。

脚を伸ばして繰り出したキックの矛先は、ただ一点のみに絞られていた。

ギルガメツシユ。

天空に浮かび上がる紋章に背を押された『アユム』は、刺し違える覚悟で敵の首魁に狙いを一極化させた。

ヤミーやグリードが発する弾がスーツを破損させ、彼の消耗を加速させていく。だが仮面ライダーゴーストは止まらない。

マントをたなびかせてギルガメツシユに迫る『アユム』だったが、その足下で、キャプテンゴーストが軋みをあげて傾いた。そこで眠るアユムの身体がわずかに動いた。

一瞬彼の意識がそこへ向けられた。

誰の非でもなかった。アユムにはまだ意識はなく、『アユム』は彼の安否に敏感にならざるをえなかった。

だが、その気の逸れが、同じ少年たちの明暗を分けた。

へサソリ！ バフォメット！ カンガルー！

ギルガメツシユは自身の力の源たるそのドライバーのメダルを入れ替えていた。

褐色の脚で甲板を叩くと、『アユム』と同程度の高さまで浮上する。

グレーへ変色し、形状も大人し目になった頭部で、アメジスト質の双眼が不気味に閃き、その後頭部から伸びたサソリの尾のようなものが、『アユム』の首筋を絡め取った。

へスキヤニングチャージ！

甲高い男の音声とともに、魔王の長槍が黄金の波動を帯びていく。

そしてそれは、息ができずもがき苦しむ『アユム』に叩き込まれたのだった。

その行為にためらいなどなかった。

まるで慈悲などなく。

ーいや、それこそが王者の慈悲だと言わんばかりに。

## 第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Doubly Action G〜 (16)

天空寺アユムは、目に入り込んできたかすかな光と、鼻から侵入してきた焦げ付く臭いと、耳に届いた金属音とで目を覚ました。

次第に輪郭がはつきりしている目の前の光景は、さながら異世界のようだった。

真つ二つに割れて炎上し、地上の山肌に墜落している幽霊船。

それを背景に、剣戟を鳴らして競り合う、仮面の戦士と怪人たち。いつの間にかふさがって痛みのない傷もあいまって、まるで悪夢でも見ているような心地だった。

だが、目の前の怪人たちは、自分を襲ったあの三人組で、彼らの存在が、これが非情な現実であることを証明していた。

そしてそんな彼らの姿を、アユムは自分を護る仮面ライダーゴーストの……胴から背にかけてに大きく穿たれた穴から目撃したのだった。

穿たれたアーマーと肉体だけではない。貴族か軍人ののようなマントやビーコン帽は端々が擦り切れている。何合打ち合ったのか。手にした両刃の剣は、そのどちら側も刃先も欠け落ちていて、もはや武器というよりは敵の攻撃を捌くための防具でしかなかった。

ただ、背にひかえた自身を護るために、そんな状態でも彼は戦っていた。

——仮面ライダーゴーストは。

「……父さんッ!?!」

たまらずアユムは声をあげた。

間違いない。フォームこそ見覚えがないが、基本の形状はゴーストのそれだ。

夢ではなく、本当にあれは父だったのだ。

そう思い、アユムは悲痛な声をあげた。

だが、彼のすぎるような悲鳴も、目の前のゴーストの健闘も、怪人

たちの猛攻を前には無力だった。

決死の特攻もむなしく距離をとられ、一斉射撃を浴びせられた。衝撃で足下まで転がりながら、ついにゴーストはその変身を解除した。

アーマーによってせき止められていた血液がその装着者の口端から、傷から一気に吹きこぼれ、またたく間に周囲に紅の潮海を拡げた。「父さん、しつかり……ッ!？」

自身の足下に転がって来た人間を見て、アユムは一瞬言葉をうしなつた。

父、天空寺タケルではなかった。だが、知った顔ではあつた。

——そう、自分自身と生き写しのような顔が、そこにはあつたのだ。「なん、だよ……コレ……何してるんだ、お前!？」

「なにを、しているのかだと？ そう聞きたいのはぼくのほうだ」自分と似ているようでどこか違う調子の声で、ゴーストに変身していた『彼』は言った。

逆注する血反吐に、まるで溺れるようにむせこみ、喘ぎながら。「自分の答えは……出ているはずだ……さんざん皆に背を押されたはずだ。なのになんでおまえは、何もしようと、しない……?？」

彼らの前で、まるでいたぶるように、あるいは自身の威容を誇示するかのように、色とりどりの怪人たちは歩幅は大きく、しかりゆつたりと追ってくる。

にも関わらず、死に瀕しながらも彼は、そうとは思えないほどの力強さでもって、アユムの肩をつかんだ。

その手のなかに、硬い感触があつた。

それはあのギルに斬られた際胸から切り離された、近藤勇の鍰だった。

たとえ時代に逆行していようとも、裏切られ、見放され、利用されようとも……大いなる力や流れの前には無力であつたとしても、信念と理想に従い、堂々と在りつづけた漢の生きた証。

それを改めてアユムに握りしめさせながら、血の気の失っていく唇を、『アユム』は震わせた。

全身でぶつかるとともに、すべてをゆだねるかのごとく、同じ顔のア  
ユムを抱きしめた。

「眼をそらすな、閉じるな……自分の心の、眼を開け」

そう言った少年は次の瞬間、灰のような真っ白な砂となって、崩れ  
去った。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（17）

……タケルが……!?

……グレートデミアは私たちが引き受ける……！ お前たちは、兄の下へ……！

……こんなところであきらめるな！ あいつは、どんな時でも……！

……アユム、あなたは、あなたのために生きて。その一歩が……ある時は、一枚の羽根に。

またある時は、写真のフィルムのように。虚空に切り取られた窓のように。

……どうしても行くの？ ……ジ兄ちゃん……

……ああ。でも、たぶん『アイツ』が追ってくる。それでも、もしダメだったとしても、無意味なんかじゃない。僕という小石が砕けても、そこで転んだ悪の道は変えられるはずだから。

映像として、あるいは一枚の画として。

耳を覆いたい悲鳴。慣れ親しんだ人々の、あるいは記憶にない友人の死のネガ。

……ゴーストでいたほうが良かったんじゃないの？

……それは、違う。生きていること、命そのものが奇跡だと思うんだ。

……人と出会い、想いがつながって、未来を変える力になるんだ。

あるいは、それらすべてを払しょくして希望で照らす、あたたかな  
感触。

記憶や想いといったものが、アユムのイメージとつながって流入してきた。

「理解したか？」

そして気が付けば彼は、川のせせらぎに足をひたしていた。

自分と同じ貌を持つ少年と、いや……同じ天空寺アユムと、相対しながら。

それは果たして夢か現か。

まるで生死の境界線であるかのような不思議なその岸边で、せせらぎのそばで、彼らを見守るように色とりどりの眼魂が散らばっていた。

「ぼくの記憶と能力を、おまえに移した。どうすれば父さんが救えるか、それでわかったはずだ」

濃密な追体験は、アユムの脳と胸とを焼いた。

細かい事象までも含めると、もはやそれがこの『アユム』のものなのか、この世界の自分のものなのか、アユム自身にさえ判別がつかなくなっていた。

「……ぼくにはもう、無理だからさ……」

いびつな苦笑いを浮かべる『アユム』は、現実世界と同じように、砂の粒子として崩れ始める。その像は、薄れつつあった。

どこか不自然でぎこちない所作で身をひるがえすと、そのまま足で水を切るようにしてその場から立ち去ろうとした。

「……待てよー!」

そんな彼を、アユムは呼び止めた。

一個の眼魂を川べりから拾い上げると、逆の手で『アユム』の手首をつかんだ。

「本当にこれでいいのか?」

「すべて覚悟のうえで、ぼくはここに来た」

「覚悟の問題じゃないだろ!」

『アユム』としての記憶をも得た少年は、その事実を完全に呑み込めずとも、心で理解していた。

本当は、もつと生きたいはずだ。自分も父を救いたいはずだ。タケルから受けたものに対して、全霊で報いるために。母親が遺した、「自分のために生きろ。その歩みが、未来につながる」

という言葉をも、反故にしてよいはずがない。



ましてそんな自分や他人の記憶や想いの数々を見せられて、黙って見過ごせるわけがない。

「……ボクだって本当は、助けに行きたかった。でも、父さんでさえかなわなかった相手に挑む力も勇氣もなかった。それは力と知識を得た今でも変わらず怖いまま、誰かに代わってほしい気持ちは残ってる」

「それでも、おまえ一人でやることなんだ」

諭すようなもうひとりの自分の物言いに、「いいや」とアユムははつきりと首を振って見せた。

「ボクは、その弱さから眼をそむけない。抱えたままに前へと歩む。……だから」

小刻みに揺れる手に握りしめられた眼魂……ダーウィン眼魂のオレンジ色の装甲部が、淡い燐光を帯び始めた。

たしかに『アユム』の言う通りだった。

前進するための知識も力も与えられた。そしてその力でもって今すべきことが、自分にとつての吾有事が、〈へこれ〉だった。

振り返った『アユム』は、見開いた目を向けた。

だが瞳の奥に、燃えるような生気を取り戻して、強く、深く頷いた。それに呼応するかのように、周囲の英雄の魂も震え、光る。

「お前も一緒だ……アユム」

そして眼魂からほとばしる進化と生命の輝きが、彼らの姿を覆い包み、ひとつに融かした。

ギルガメツシユは、あの凡愚な少年に覆いかぶさるようにただの砂山になった『アユム』を見て足を止めた。

「幕切れは、あつけないものだな」

舌打ちまじりにそうひとりごちた仮面ライダーは、同胞をともなつてきびすを返そうとした。

だが、体を横に向けた刹那、膨張する力を、彼と融合した獣の感性が察知した。

改めてそちらへと向き直る。すなわち、天空寺アユムの方へと。ただの屍であるはずの塵芥が、輝きをはなっていた。

その下に伏したアユムの肉体の裂傷から、あるいは彼がとつさに握っていたブランク眼魂に、その死灰が吸い込まれていく。

「なに……？」

予想を超える事態に、さしもの魔人も当惑に顔をゆがませた。

彼の目の前で、眼魂を握る少年がゆっくりと立ち上がった。

あの怯懦の顔から一転、少年は、戦士の面相でもって、ギルガメツシユたちを睨んでいた。

「ようやく……眼が開けた。覚悟も決まった。だからボクは、もう折れない。絶対にお前たちを止めて、父さんを救う！ 行くぞー！」

空洞であつたはずのその眼魂が、黒々とした瞳を開く。そのスイツチを押して、炎とともに顕現したドライバーへとセットする。

呼応した英雄眼魂たちが、どこからともなく振ってくる。さながら虹の輪をえがくように少年を取り巻く。

その中心で、アユムは右手の人差し指を立てた。

青天を衝くように掲げられたそれで印を結ぶと、高らかに宣言する。

「変身!!」

へレッツゴー！ 覚悟！ ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト！

まるで意志を持ったかのように白いパーカーゴーストが宙を舞い、アユムと一体化する。

総身に浮かび上がるライン。眼球の刻印。白いマスクに先代を思わせる楕円形の両目。

自らを覆い、影を落としていたパーカーを、アユムは自らの手で振り払った。

鬼のような一本角が高々と伸びて、陽光を射返した。

——ヒーローは一度死んで、蘇る。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（18）

エイジは空に浮いていた船が墜落していったあたりに、飛翔するネクストライドロンを向かわせた。

そして異変はすぐに、山の上のあたりで見つかった。

そして衝撃的な光景を、見てしまった。

砂になる『天空寺アユム』を。

もうひとりのアユムに取り込まれ融合するさまを。

そうして再誕した、仮面ライダーゴーストの変身を。

「……っ変身ー」

まだ高度はあつたが、着陸まで待つていられなかった。

車内から宙へと身投げした彼は、ダークドライブとして大地に、ここでゴーストと交戦するギルガメッシュユへとブレイドガンナーを振り下ろした。

だが、あらかじめ予期していたかのごとく、振り上げた槍がその一太刀を遮った。

「やっとなたか」

遅かったな、と言外に嘲りを含ませて青光りする刃を巻き込むように、二股の穂先をねじる。

それに絡め取られて奪われないよう、エイジは自身の身体ごと刃を翻して引いた。

「エイジ兄ちゃん」

彼に背中を重ねながら、ゴーストはそう名を呼ぶ。

だが、仮面ライダーの姿をとっている。ダークドライブを泊英志だと認識している。

「君は………いったいどっちのアユムだ」

「どっちとも、かな」

返ってきたのは、あいまいな答えだった。

だが、そのあいまいさこそが、今判然としないアユムにとって妥当

な答えなのだろう。

それ以上は追及せず、若き両ライダーは剣を立ててそれぞれの敵に相対し、剣を立てて攻勢を押し戻す。

恐竜の怪人とギルガメッシュはダークドライブが受け持ち、眼玉の妖怪にはゴーストが当たる。

怪人の剛腕を潜り抜け、次いで来たる二撃目を交差した腕で受け止める。それが完全に食い込む前に流して威力を殺して、上から突き上げるようにしてその姿勢を崩させた。

浮き上がった腕の下から掌底を突き上げ、連打する。足を開いて大地を踏みしめ、様々な荒ぶる感情を制すようにして握り拳に込める。

テレホンパンチが、怪人の胸板を強打した。

メダルを散らしながら苦悶する怪人は、逆に間合いがとれたことにして肉体のバランスを取り戻したようだった。

身体中にびっしりと張り付いた目から、まるで鏡片が太陽を乱反射するかのようになり、あるいはプラネタリウムのように、怪光線が照射される。

大地を削り亀裂をはしらせ、遠方の岩肌さえも焼いてえぐる。

アユムは、自身に迫るそのレーザーを、自身の肉体から生み出した剣によって横一線に切り払った。

両断された数条の光線が彼の両脇をすり抜け、地面に触れた瞬間爆発し、アユムの背を火炎があぶる。

彼は、剣を天へと放り投げる。慣れた手つきで、だが勢いをつけてレバーを左右させた。

〈ダイカイガン！ オレ！ オメガドライブ！〉

虚空に黄金の紋章を負う。

それがエネルギーとなつて前へとすり出した足に集中し、生じた磁場が踏みしめた地点の砂を巻き上げる。

「この一歩が……『ぼく』の歩みだッ……！」

指を立てて印を結ぶと、なお発し続ける光をかくぐり、妖怪へ向けて高く飛び上がった。

突き出した爪先が怪人の腹を叩く。

エネルギーがそこから流し込まれて内部から膨れ上がる。

退いて着地したアユムの目の前で、断末魔をあげて、百目鬼のごときその怪人がメダルとともに爆散した。

「……面白いッ」

エイジを攻撃していたギルガメッシュが、吼えるように言った。

獣の跳躍力でダークドライブを飛び越え、アユムの前に降り立った。

喉笛目がけた槍を、空から落ちてきた剣をつかんでアユムは受け止める。

「もうひとりを容れて、多少はマシになったか試してやるよ」

そううそぶいて、攻撃の手を一層はげしくさせた。

一度は槍撃をしのいだアユムだったが、その技量と単純なスペック差とが、次第に戦況を覆していく。

ギルガメッシュはベルトのメダルを一枚ずつ取り換えていく。その動作を隙に見せてアユムの反撃を誘いながら、逆にカウンターを仕掛けて格闘術で圧倒していく。

「ハチー・バフオメット！ ガゼル！」

交換したメダルをスキャンすると同時に放った、草原の獣を思わせる強烈な後ろ蹴りが、ゴーストの防御を突き破って胴へと叩き込まれる。

「アユム！」

空間を揺るがすほどの衝撃とともに吹っ飛んだ彼を援護すべく、エイジは駆け出した。

だがその前に、恐竜の怪人が立ちふさがった。口にあたる部分から吐き出された冷気が、ブレイドガンナーを凍結させる。それが手にまで及ぶ前に、エイジはみずからの武器を投げ捨てた。強引に突破口を開くべく突撃を試みるも、息遣いも間合いも関係ないと言わんばかりの力任せの猛攻が、それを許してはくれなかった。

アユムの手の中が、光を放ち始めたのは、そのときだった。

恐る恐る手のひらを開くと、そこにはペンダント代わりになっていたあの鍰があった。

アユムは、仮面ライダーゴーストは、その奇妙な現象を前に何をすべきか、瞬時に悟ったようだった。

その前の空間で、まるで眼玉のようなものを指で描く。

すると、その刻印と鏢とが一体化し、輝きに包まれた。その光の玉の中から飛び出た幽霊のようなものが、三体。

「あのバラガキが、ようやく一人前になったか」

そのうちの一体が声を空へと響かせる。

彼らはそれぞれの右手のような部位に生えた刀を閃かせて、ギルガメッシュに飛びかかった。

「共に戦わせてくださいよ！」

「うむ……！ 我らの力、存分に使いたまえ！」

一度押し返してアユムのそばに戻った彼らは、想い想いの言葉とともに合体し、ひとつとなった。

その下のアユムの手中には、水色の眼魂が握られていた。

それをドライバーにセットし、一度素体にもどったゴーストが、そのレバーを引く。

「カイガン！ コンドウ！ ヒジカタ！ オキタ！ 君と肩組み！」

「新選組！」

裾の長い、浅葱色のダンダラ模様の羽織、その背と顔に、『誠』の一字。そしてふたつのスロットのついた真紅の直刀を翻し、ゴーストはあらたなフォームへと進化する。

「英雄のなり損ないどもが群れた程度で、なにができるッ」

体勢を立て直したギルガメッシュが、高らかな嘲笑とともにふたたびアユムに迫る。

「たとえ一人で英雄になれなくても、二人なら、三人なら……っ！」

アユムは、剛槍を正面から受け止めることはしなかった。刀身に穂先を這わせるようにして力を流して殺し、返す刀で袈裟がけに斬りこんだ。槍の柄でそれを受け止めたギルガメッシュの腹を、アユムの足が叩く。

「二度でダメでも、二度目なら、三度四度とくり返せば！」

のけぞったギルガメッシュのその脛を、紅の斬撃がねらった。低姿

勢で駆けるアユムは、ダンダラ羽織を目くらましに、そのモーションを読み取らせない。何度も何度も、一ヶ所に狙いをつけて斬りつづける。

弱者と侮っていた相手に足蹴にされ、正攻法とは言い難いが致命的な箇所を確実に、そして執拗に狙われる。

王にとって、これ以上にならないほどの無礼であったことだろう。

表情には出さない。声も漏らさない。だが、そのマスクとアーマーの内部で、徐々に屈辱と怒りが蓄積されていくのが、エイジの遠目からも見て取れるようだった。

刀を脇にかまえ、アユムは地を蹴った。

対するギルガメツシュも、銀のメダルを槍へと呑み込ませ、スキヤナーでベルトのコアメダルを読み取らせる。

〈スキヤニングチャージ！〉

太陽を想起させる灼熱の光を宿した槍先が、柄ごと、身体ごと、おおきく旋回した。

〈ダイカイガン！ オキター！ オメガドライブ！〉

対するアユムの刺突が、それを迎撃する。

銀光を帯びた一突きが、二股の穂の軌道をわずかにそらした。

だが、アユムの刺突がつづく。

一突きが、ギルガメツシュの首の付け根に、さらなる突きが、その胸に。

〈ダイカイガン！ ヒジカタ！ オメガドライブ！〉

よろめくギルガメツシュの目の前で、アユムの得物が銃へと変形する。

片手で引き金をひくと、その銃口から火炎が吐き出され、ギルガメツシュを焼いた。

まわりつく業火を振り払ったギルガメツシュの身体を、刀に姿をもどしたアユムの武器が、オレンジ色の焰を巻き込みながら、乱雑に、だが豪快に左右に凧がれた。

その勢いに乗ったままにアユムの爪先が回る。その回し蹴りがギルガメツシュを吹き飛ばした。

〈ダイカイガン！ コンドウ！ オメガドライブ！〉

三度目、レバーを左右させながら、アユムは飛び上がった。

大上段から振り下ろされた重撃が、ギルガメツシュの肩に叩きつけられた。

だが、王は膝を屈さない。地面をすべりながらも、退きながらも、なお陽光を放ち続ける槍を手にふるう。

「今できることを尽くして生きていれば、いつかは絶対に手が届くー」  
今度は正面から受けて応じた。火花を散らして額と刃を打ち合わせる。だがその刹那アユムは、自身の身体ごと剣先を移した。槍の柄をなぞるようにして刃が走る。捉える。ギルガメツシュの鳩尾に届き、食らいつく。

アユムは、ドライバーが赤熱するのにも構わず、レバーを左右に動かした。

〈ダイカイガン！ コンドウ！ ヒジカタ！ オキタ！ オメガドライブ！〉

「……人間の可能性は、無限大だ……！」

空のように蒼く気高く、狼の爪牙のごとくまばゆく鋭く。

ギルガメツシュに食い込んだ刀が閃光とともにその胴をえぐり抜いた。

「……ハ、ハ。今日のところは……その健闘に免じて……退くか」

ギルガメツシュは不敵に振り返って、ノイズにまみれた声で言った。ただし半身を奪われて、不自然な姿勢のままに。

その姿勢のまま、アユムの背越しに欲望の王は槍を取り落として爆発した。

その爆炎の中から飛び出した眼魂を、残された恐竜の魔人が掴み取って羽ばたいた。

黒翼から生じる風に圧されている間に、ふたりはその逃亡を許してしまう。

ふたたび視界が明けた時には、すでに肉眼で視認できないほどの高みに消えた後だった。

〈オヤスミー〉



それぞれの変身装置からシフトカーや眼魂を引き抜けば、そこに立ち尽くすふたりは少年の姿にもどっていた。

だが、そこに若者らしい澆刺さはなく、勝利に歓喜するにはいろいろと複雑な要素が絡みすぎている。

ただ言葉もなく、見上げ続けた空は青かった。

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G（19）

翌日、倒された同胞の復讐にギルガメッシュが来襲する……

ということもなく、大天空寺は平穏を取り戻していた。

いや、本当に取り戻したとは言えない。

多くのものを喪いすぎた。まだ奴らの手から戻ってこない人がいる。

本当の意味で、天空寺アユムの戦いはここから始まる。

「……いろいろと世話になったね、エイジ兄ちゃん」

収容できるだけの日用品や非常食を詰め込んだデイバッグを、石段の手前に置いて、アユムはそう告げた。

父タケルは、まだ生きている。

取り込んだもうひとりの記憶からか、その息子は断言した。

異空間に閉じ込められた彼らは一部の眼魂を脱出させることには成功したようだが、自身はまだそこにいるのだ、と。

そこから救い出すべく入り口をこじ開けられるのは、自分のゴーストドライブだけなのだ。

自身の存在を代償に、『アユム』は、もうひとりの己にその術と智慧とを継承させていた。それがこの時代に来た目的だった。

その『アユム』が今のアユムにどれほど残っているのか。当人からあらましを聞いたエイジには分からない。あえて聞く勇氣も、なかった。

晴れ晴れと笑うアユムに、エイジはぎこちなく笑い返した。

「しばらく留守にするけど、それまであのギルガメッシュの相手は、お願いするよ」

「もちろん」

アユムはエイジに、両掌を向けるようにうながした。

言われたとおりにすると、ゆるやかなストレートがエイジの手を打った。

どこに由来するものかは知らないが、それが彼なりの友情の証らしい。

「たこ焼きのお姉ちゃんも、仮面ライダーなんだよね。よろしくね」

その場に立ち会っていた照井春奈に、アユムは言った。

(そう言えば名乗っていなかったっけか)

自らの呼称が多少はショックであったらしい。やや目を見開いて、それから不満げに片目をすがめて答えた。

「照井春奈です」

訴えるように、あるいは恨み節のような冷徹な語調で言った彼女に気圧されながら、アユムは微笑を浮かべて言った。

「わかったよ。照井姉ちゃん」

直後に春奈が漏らした吐息が、どこはかとなく満足げな色を帯びていたのは気のせいだったか。

エイジがわずかに笑みこぼすと、すかさず死角から鋭いローキックが入った。

怪人からの攻撃にも匹敵する急所への痛みにも、エイジは身悶えた。アユムはようやく少年らしい、ほがらかな笑顔を弾ませた。

御成が石段を下りてきたのは、そんな時だった。

散々にアユムに独立独歩を求めていたのに、いざその時が来ると物悲しいらしい。

表情をやや大きさに表情を曇らせながら、

「何か、忘れ物はありませんか？」

とか、

「危なくなったら、無理せず帰って来るのですぞ」  
などと、しつこいぐらい繰り返す。

「わかってる」

アユムはかつてのような反発はせず、あくまで好意として受け止めた。

御成は、両手に抱えた包みを解いて、その中身を捧げ持った。

それを見た瞬間、アユムの表情が強ばった。

それは、数個のおにぎりだった。

大きさも形も均一ではない、不恰好なもの。だが、だからこそ、手  
作り感とそれにとまあなう温もりが伝わってくる。

アユムは御成を見返した。

僧侶は、慈悲に満ちた目を少年へと向けうなずいた。

少年はそこから、何かしらの意図を汲み取ったようだ。その視線  
が、山門のあたりへと持ち上がる。

エイジはつられてそこを見た。

細い人影が、その境目をかすめた気がした。黒衣のようなものが、  
翻ったようにも見えたが、ハッキリとは見えなかった。

(でも、おそらくあれは、アユムの……)

アユムは改めて、おにぎりを見つめ直した。

わななく指先でそのうちのひとつを掴んで一口、かぶりつく。

刹那、あふれた涙がアユムの頬をつたって濡らした。

そしてこのことに、当のアユムが戸惑っているようだった。

「あれ……？ なんだろ……？ どうってことのない……塩っ辛いだ  
けの握り飯なのに……なんです……？」

涙をぬぐいながら不思議がる彼を見つめながら、エイジにはその理  
由がわかる気がした。戸惑いながらも、アユム自身だって本心で感じ  
ているはずだ。

あれは、『アユム』の流した涙だ。

泣くことも許されず、帰る場所さえもなく、ひとり絶望に抗い続け  
た少年。

その孤独な戦いの果てに待っていたのは、孤独な並行世界ではな  
く、帰るべきもうひとつの故郷だった。

涙を振り払った天空寺アユムは、旅立っていった。

ギルガメッシュを経て財団Xへと奪われかけた眼魂。その中に収  
蔵されていたというタケルのオレ眼魂を起点として、刻印を描き異界  
の門を開ける。

どこに通じているかも分からない未開の世界への入り口を、彼は晴  
れやかな表情とともにくぐっていった

「感謝しますぞ、息子……いやエイジ殿」

アユムの姿と、彼の描いた紋が完全に消えるまで見守りながら、前触れもなく御成が礼を言った。

「何やら事情はよく分かりませんが、とにかくにもアユム殿が一皮も二皮も剥けたことはたしかですからな、何よりです」

「別に、僕は何も」

エイジはほろ苦く笑って首を左右に振った。

謙遜ではなく、本心からこぼれた言葉だった。

（そう、僕には、何もしてやれなかった）

『アユム』を救おうとした男たちを妨害して、結果『アユム』はその肉体を捨てた。アユムは、そのもうひとりの辛い記憶も、宿命も背負うこととなった。

その時は身体が勝手に動いた。正しい選択だと直感で思った。だから桜井侑斗相手にそう気を吐いた。

だが理性が追いついたと同時にやってきたのは、後悔だった。

（僕の判断は本当に、正しかったのか）

エイジはそう思いかけて首を振った。

シフトカーは自分を選んだ。その運命に導かれた結果であるのなら、そこには何らかの意義があった、はずだ。

「照井さん、ここに来たのってアユム君の見送りじゃないよね」

一礼ともに御成が帰ったのち、自分を欺くようにして話題を切り替え、照井春奈へ話題を振る。

春奈は真顔でうなずいた。

「天空寺アユムの顛末は道すがら説明を聞きましょう。だが、それよりも同行してもらいたい場所がある」

「どこへ？」

エイジが尋ねると、女捜査官は複雑そうな感情をにじませて答えた。

「嫌な風が吹く街だ」

第四話：オレがお前で、お前がオレで！〜Double  
Action G〜(20)

ゼロライナーの食堂車は、静寂に包まれていた。

もともとその乗客は多弁なほうではないし、そんな彼に気を遣って、料理番兼相棒はその顔色をうかがってから話しかけることが多い。

だが、今日は乗客は一層寡黙だった。相棒は彼の内心をいつもより気にかけた。

彼らと旅をしていた少年が列車から降りた。そして、二度と帰ってくることはなかった。

それ故の、静けさだった。

少年の食事のために無理やり拡張されたスペース。そこが空いていると、かえってその不自然さが強まった。

その空間をボンヤリと見つめている男……桜井侑斗の背に、おずおずと、デネブは言った。

「これで、良かったんだ」と。

鋭い目だけを、侑斗は向けた。

「ああいや！ もちろん良くない部分は、あった。でも、完全には消えなかった。本当に帰るべき場所に帰れた。自分で、お父さんを救いに行ける。……だから、これで良いと思う」

侑斗も威圧感にうろたえながら、だがしつかりとした口調で、教諭するようにデネブは自分の意見を言った。

子どもがふてくされたような横顔を向けたままだった男は、そんな相方の態度に毒気を抜かれ、かつ理性に立ち返ったようだった。

「バーカ」

という悪態だけを返す。ただしそこには信頼と親愛を感じさせる。そんな口調だった。

えへへ、とだらしなく笑い、デネブは黒いフードの上から頭を掻い

た。

「ご飯、準備する」

「おい、シイタケは」

料理の食材に文句を言いかけて、侑斗の視線が乗客だった少年……『天空寺アユム』のいた席へとそそがれた。

満足に食事も採れない世界から来た彼は、好き嫌いも言わずに日々の食事に感謝し、その幸福を噛み締めていた。その幻影を見つめていた。

「……いや、たまには……良いか」

「……そっか」

また一步、人より遅いながらも精神的の成長していく相棒の姿に、デネブはひそかに喜び、噛み締めるように重く受け止めた。

ならばいつそ、これを期に完全に克服してもらおう。

そんなお節介じみだ 생각이、また彼をズレた方向へと暴走させた。「じゃあ、今日はシイタケのフルコースにしよう！ シイタケご飯に、シイタケのステーキ、シイタケのお吸い物に、デザートはゼリーにして」

そして喜びはしやぐあまり、ゆらりと立ち上がった侑斗が近寄ってくるのに気づかなかった。

「デーネーブ……！」

白い歯をむき出しにして、デネブに飛びついた彼は、その巨体を後ろへと引き倒した。

狭い車内、テーブルやクッションやらを引つ掻き回しながら、じやれ合いのように彼らは暴れまわって興じる。

「お前、程度つてもんを考えろよッ！」

たとえ、何かを得ても、逆に喪おうとも。

変わらないものがあっても、何も変わらなくとも。

それによって喜び楽しもうとも、嘆き悲しもうとも。

河の流れのように、絶えず時間は流れていく。

それが過去にも未来にも行ける列車であっても、それは変わらない摂理だった。

——なつかしい、汽笛の音を聞いた気がした。

しかし、閉ざされたカーテンをめぐってみても、そこには広がる青空と白い雲、そして高くのぼった太陽があっただけだった。

白々と輝くその光が、するどく眼を刺して、捜査一課特殊犯罪捜査第4係、泊進ノ介は目をそらした。

「もう朝か……」

「真ッ昼間だよ」

締め切られたオフィスの入り口から、声がかかった。缶コーヒーが投げつけられる。

寝不足の頭ではとっさに対応できず、手先ではじいて床に転がしてしまった。

「寝てないのか？」

と、その『相棒』がたずねた。

「ああ」と、進ノ介は生返事で応じた。

その男は、大仰にため息をついた。

はやせあきら  
早瀬明。

長年進ノ介のバディをつとめている、親友だ。

彼には相棒と呼べる存在が複数いる。

怠惰なときの進ノ介を戒める霧子。文字通り一心同体となつてもに死線をくぐり抜けたクリム・スタインベルト。そして、ひらめきや洞察力はあるものの突っ走りがちな進ノ介を冷静に、かつ理性的にたしなめるのが、この早瀬だ。

絆の深さに優劣はない。ただ、付き合いの長さで言えば彼が最長と言えるだろう。

その足取りがやや常人とくらべて若干重いのは、怪我の後遺症のためだった。

彼らの運命を変えた災厄の日、グローバルフリーズ。

そこで進ノ介が起こした誤射が、早瀬の脚の自由を奪ってしまった。

一度はそのトラウマに苛まれた進ノ介だったが、今では、それもい



い思い出と割り切って、より固い結束で結ばれていた。

現在にはほぼ完治していて日常生活には問題はないが、怪我のブランクと本人が「自分に合っているから」という理由から、現在もネゴシエーターなどの裏方に回っている。

それでも、変わらず刑事としての相棒であることには違いない。

その早瀬が、コーヒーマシンの差し入れ以外に、散乱したデスクの上に置いたものがあつた。

向こう側が透けてみえるのではないかという、薄型の端末。

それに親しんだかのような指捌きで操作すると、ほの暗い空間に複数の映像が投射された。

『黄金仮面』関連の映像の洗い出し、終わったのか」

「そういうことだ。で、その中に、ちよつと見てもらいものがあつてな」

早瀬はうなずいた。

多種多様なSNSや情報提供<sup>タレコミ</sup>。虚偽や合成もふくめた玉石混交とも言うべきその無数のデータの中から、たしかな情報のみをピックアップする。

ふるいをかけること自体はプログラムでも難しくないのだが、最後には肉眼と頭脳による確認が必要になってくる。

しかも今回はどうにも警察に対する圧力や規制があつたようだ。欲しい情報が、なかなか捜査側に下りてこない。そんななか、民間から、ネットの海から、とつてきてくれた情報だ。

自分に負けず劣らず、根を詰めて気の遠くなるような作業をしてきたであろう早瀬や鑑識、現場の警官たちに、ねぎらいの言葉を与えたかったが、それはすべてが解決した後で、酒でもおごりながらのことでだろう。

その場では目でだけ礼を伝え、自身の目で、早瀬のもたらした情報をチェックすることにする。

ふいに、その早瀬が肩に手をかけてきた。

いぶかしむ進ノ介に、相棒はまるで立てこもり犯に対する説諭のように言った。

「泊、お前も人の親だ」

「? ああ、そうだな」

「……だから、まあその、なんだ。冷静に、見てくれよ。そして落ち着いて、ひとりの大人として、対応してくれ」

「は? なんだそりゃ、いったいどういうことだ」

ネゴシエーターという職業柄、常日頃から早瀬の言葉には相手をなだめようという穏やかさと誠実さと理知の響きがあった。

だが、この時ばかりは違う。進ノ介は直感で思った。

何か、ためらいのようなものを感じさせた。あるいは、困惑か。何かを自分にゆだねようとしている反面、自分がとりうる対応自体に危惧を抱いている。そんな気がした。

そして、拡大された写真、そこに映っていたのは『黄金仮面』と対峙している異形の戦士の姿。

——見覚えがあった。

いやそんな言葉では生ぬるいほどに強烈に記憶に残っている。黒い仮面ライダー。頭のなかで反芻する、甲高い笑い声。身体に叩き込まれた斬撃の痛みがぶりかえす。

泊進ノ介は、言葉にしがたい衝撃を受けた。稲妻に、総身を貫かれたかのような。

次に胸を焼くような怒りが、こみ上げてきた。

だがふしぎと、頭は冴えていた。理解できた。早瀬のためらいの原因も、自分と同様、その正体におおよその見当がついてしまっているということも。彼が自分に冷静さを求めた意図も。

かつて、タイプテクニクにはじめて変身したときと同じだ。あまりの怒りに、感情が脳神経を通り越して、理性だけがそこに残っている感じ。

「もういい。だいたいわかった」

そう言っつて、彼は端末のスイッチを相棒に切るように促した。

両者が対する画像が消えてから、一度は通り過ぎた怒りが血とともにまた頭にのぼってきた。

「……あのバカ……! いったい何をやってるんだ!」

気が付けば、早足で出口に向かっていった。

「だから、落ち着けて言っただろ。全然わかかってないだろ、お前」  
その背に、何度も呼びかけながら早瀬が追ってくる。

理解自体は、しているつもりだ。

だがそれと自分がとるべき行動とは、また別の問題だった。

## 間章：金・王・入・都（1）

夜の闇を突っ切るように、一台のジープが大通りを抜けていく。

運転態度や速度は交通法規こそ守っているが、ナンバープレートは偽造のデタラメ。内蔵している機能も、実際のところには非合法的な改造がほどこされていた。

だが、それをとがめる者はいない。

街の監視カメラはナンバープレートや車自体が登録してあるIDによって即座に感知はできるがこの街では、その車両に関する事件が起こってはいなかったのだ、その用をなさなかった。

やがてジープは大きくハンドルを切って角を曲がり、より闇の濃い路地へと、工場跡地へと侵入していった。

その荷台には、濃紺の幌がかけられていて、あらゆる光を拒み、闇に溶け込んでいた。

だれに知られることもなく、闇夜と一体化しようとしていたその車を、頭から照らす存在があった。

それは、巨大な球だった。

太陽か月のようにまばゆく周囲を照らしながらも、放つ光輝は青そのもの。

フロントガラスに投影されたモニターでそれを目視しながら、ドライバーは車を加速させた。

時に直線的に、時に屈折しながらジープにせまり、追い越し、そして進路をふさぐように、地面に落下した。

すい星のように、あるいは隕石メテオのように。

接地した瞬間、光球は爆ぜた。だがその中から人型の異形が膝を屈した体勢で現れ、ゆらりと立ち上がった。

黒いボディスーツに星のようなきらめきが浮き彫りになり、流星を模した青いアーマーがさらにその上から彩る。

〈答えてもらおう、その積み荷はなんだ？ この街で、なにをしようとしている？〉

ハウリングをきかせた低い声でつぶやく彼の前で、車は逃走をあき

らめて止まった。

「プラネタリウムのデリバリーを頼んだおぼえはないんだがな」

その姿を揶揄するような物言いとともに、ドライバーは運転席から通りへと降り立った。

金髪、碧眼、白皙の美少年。彼……ギルガメツシユの異様な立ち姿にも、その怪人はひるむ様子を見せなかった。

「なんだ、お前？」

薄笑いを浮かべ、首を不自然に傾けながら、金髪の王は詰問する。

対して装甲をまとった男は名乗った。

〈仮面ライダー……メテオ。お前の運命は、俺が決める〉

ああ、とギルガメツシユは嘲笑まじりに相槌を打った。

「インターポールの飼い犬か。こんなところまでご苦労なことだ」

その彼の手には、クリアパーツで構成されたドライバーと果実を模したガジェットが握られていた。

〈データエナジー！〉

手の中でそのロックが解かれると、頭上でジッパーが開いて、異次元へのパスがつながる。

ベルトにその道具……ロックシードをセットし、現れた蜂蜜色のアーマーを頭からかぶる。ギルガメツシユの全身を包んだ赤褐色のスーツの上から、アーマーが展開する。

〈ソーダー・データエナジーアームズ！〉

軍楽にも似た民族的な独特の音楽が鳴り響き、その異形の戦士の登場を祝福するかのようだった。

その音調に見合った、ペルシャ軍の將軍を思わせる外套と装甲の混在した姿。

群生する果実にも似た飾り紐と宝玉が、首や腰回りに取り付けられている。

展開が完全に終わるとともに、短弓がその手に出現する。上下の弦から鋭い刃が生えたその弦を、ギルガメツシユはためらいなく引いて矢を射放った。

わずかに曲線をえがいて飛んでくる矢を、仮面ライダーメテオは裏

拳で弾いた。

そのまま両腕を広げ、構えをとる。

ホオオオア……という怪鳥音を喉から絞り出し、地を蹴る。

一気に距離を詰めてインファイトに持ち込む。

だが、ギルガメッシュによる反撃によって、決め手には欠け、拮抗した格闘戦の応酬がつづく。

〈OK！・MARS！・READY！〉

打ち合う拳、そこに取り付けられた装置をメテオは操作する。

その手をおおきく火渦巻く球体を包み込み、繰り出されたパンチは強烈な一撃となってギルガメッシュのアームズに叩き込まれた。

即時の判断か、それともそうするように誘っていたのか。のけぞりながらギルガメッシュは、その衝撃を利用して後へと退く。間合いを作る。

矢の威力を十分に活かせる距離になったとき、彼は胴のロックシードをその弓……創世弓ソニックアローへと付け替えた。

〈ロック……オン！・デーツエナジー！〉

放たれた一矢。その尾羽にくくりつけられた無数の球体が、地面に、空中に拡散する。

その着地点から、無数の火花が舞い散り、やがてそれは総合的にはげしい業火となって、メテオの姿を完全に包み込んだ。

〈うあああ！〉

という断末魔を聞きながら、ギルガメッシュは恍惚の笑いをとどろかせる。

……だが直後、頭上から降って来た光弾が、頭から打ちつけ、その嘲笑をさえぎった。

ジャケツトに身を包んだ女性が、ビルの非常階段から銃口を彼へと突きつけている。

そのギルガメッシュには直接の面識はないが、共有している記憶を通じて、ショートカットの彼女の素性と名前は知っている。

照井春奈。

女捜査官は銃口でけん制したまま、三色のガイアメモリを懐から取

り出した。

睨み上げるギルガメツシユの横で、燃え盛る爆炎が内側から膨れ出した旋風に吹き飛ばされた。

「メテオストーム！」

水車のように旋回する長いロッドが、舞い散る火花を一気に散らす。

中から現れたメテオの姿は、素地が鮮やかな青に、肩のパーツが黄色に変化していた。

「遅いぞ春奈！」

真紅の両目がバイザー越しに、登場した『部下』を見上げて毒づく。

「文句はメモリの調整に手間取った整備班に言ってください。……変、身！」

ガイアウイスパーを鳴らすと同時に手すりに足をかけて虚空へと身を投げ出した。

その肢体にベルトと、T3アクセルの装甲が転送される。

体勢を空中で制御しながら、銃撃と、同じく転送されてきたUFOガジェットとが、ギルガメツシユの動きを封じる。

「あいつがどう動いても、俺は右から、お前は左から！ とにかく、挟み撃ちだ。わかるな？」

「規定のフォーメーションぐらい、いちいち確認とらなくたって分かりますよ。ロボットやゾンビじゃあるまいし」

着地した春奈と合流したメテオの指示に、春奈は抑揚なく憎まれ口で答えた。

鳥の翼のようにおおきく左右に分かれたふたりのライダーは、黄金と赤褐色の魔人へとせまる。

走りながらT3アクセルは連射する。火力は不足しがちだったが、弓矢をつがえる速度よりも断然速い。

満足にリロードもできないギルガメツシユの右脇から、メテオのシャフトが突き出される。

翻したエッジでギルガメツシユはそれを受け止めると、逆に弓を叩きつけた。

転がるメテオの前で、ギルガメツシュはドライバーの抽出装置を左右に動かした。

〈アーツエナジースカッシュュ!〉

その両刃に無数の球が不気味に増殖し、ギルガメツシュがクルリとその身を旋回させると榴弾のようにふたたび周囲へ拡散される。

エネルギーの暴風暴火が、一帯を包む。

だが、それが広がる刹那、

〈JEWEL・ MAXIMUMDRIVE!〉

という声が聞こえ、硬質にして極彩色の輝きがその火の拡がりを防ぎとめていた。

光は、春奈の突き出した掌から生じていた。

その装甲の後ろから飛び出したメテオは、今度こそみずからの得物を叩き込むべく振り下ろす。

自身の肉体へと渾身の一打が届くよりも早く、ギルガメツシュの手がそれを握りしめて止めた。

だが、メテオはそれ以上は退かなかった。

競り合いながら押し負けず、かと言って距離をとらせず、絶妙な力加減で競りながら、ドライバーに入っていたスイッチをシャフトへと移し替える。枝のような細長い器具をそこから引き抜いた。

〈LIMIT BREAK!〉

〈メテオストームパニツシャアーツ!〉

エレキギターのようなシークエンス音、野太い男の音声、甲高い裂帛の気合い。

それらとともに至近から射出されたコマのような物体が、王の防壁をすり抜ける。

ゼロ距離でギルガメツシュのアームズを駆け巡り、縦横無尽に斬り刻む。

みずからが引き起こしたものと同レベルの爆発とともに、ギルガメツシュは破壊された。



## 間章：金・王・入・都（2）

夜天から降り注ぐMIBUSからの光線が、ふたりの仮面ライダーから装甲を引き剥がし、変身を解除させた。

メテオの中から現れたのは、濃紺のスーツを着た男、『先輩』朔田流星だった。

彼は取り残された横転したジープの車内を確認し、積み荷をあらためる。

幌を取り払うと、中からガレキの山が地面に転がって音を立てた。

何かしらのパーツかと思えば接合面はどこにもなく、どこにでもある工事前の資材でしかない。これが特別な意味をなす部品だとは、ふたりには到底思えず、どちらともなく舌打ちを漏らした。

「どうやら、道中で入れ替えたな」

「これ自体が罠だった、ということは何？」

「いや、その可能性は低い。だったら、そもそもこの街に寄る必要がない。……連中がここで何を起こそうかまではつかめないが、何かマズイ代物がすでにこの街に持ち込まれたのはたしかだ」

まくり上げた布を乱暴にもとに戻し、流星は春奈と向かい合わせになった。

「……ヤツら、ギルガメッシュは、本当にその名の通りの存在だと思うか？」

「質問の意図が不明です」

ひどく言いにくそうにつむいだ言葉を、春奈は回りくどく否定した。

太古に生きた半神半人の英雄王。

少なくとも、連中はそう考えている。そのころの記憶も有しているフシはある。

それにいかにオカルトじみた英雄眼魂とはいえ、無からそれを作り出すことはできないだろう。

つまりそれは神話や伝承のみではなく、かつてこの地球上に存在していたのだ。本物か、あるいはそのモチーフとなった存在が。

「でも神話においても万能の神などではなく、我々と戦ったギルガメッシュもまた無敵ではない。それを今証明したはずです」

「だが、俺たちのやることなすこと、すべて後手後手に回っている。それこそ、まるで未来でも見通されているようにな」

苦虫を噛み潰したような流星の横顔を盗み見ながら、たしかに、と春奈はひそかにうなずいた。

イーデイスの件、その隠れ家の件、そして今日起こったもうひとつのギルガメッシュの件、何もかもを読んでいるように、彼らは行動を起こしている。

（だが、万が一すべてを予測できたとしたら、もっとうまく立ち回れるはずではないのか。そもそも、そんなことが可能なのか？）

たとえば、この世のすべてを検索できる人間がいる……いたとする。

だが、彼はその知識を自分のものできていくわけではない。調べたいことに応じてキーワードを振り分け、試行錯誤を繰り返しながらその知りたいことに行きつくのだ。

常人には手に入らない知識や情報を得るにしても、そこにはそこに行きつくためのきっかけや出所があり、そしてそれを自身に送るためのルートが必要となる。

「とするなら、べつの可能性を考えなければな」

黙考していた春奈の先回りをするかのように、先輩は言った。

それから歩き始める。

「どちらへ？」

「お前の言う通り、この街への介入自体が囿という線もないではない。だから、俺は外回りから調べてみるよ」

「この街は？」

なにやイヤな予感がして、胸がざわつく。

通りすがりさま、ポンと春奈の肩が叩かれた。

「そこは、土地勘のあるヤツが当たるべきだろ」

「はっ」

「久々の里帰りだ。羽を伸ばすわけにはいかないだろうが……ま、親

に顔ぐらいは見せてやれ」

「はあ？」

じゃあな、と片手を挙げながら有無を言わさず男は去っていく。唐突に言われたことだったので、思わず抗弁もできずに立ち尽くしてしまった。

だが、次第に先輩の態度にも、自身の不覚にも、この街自体にも腹が立ってきた。

「っ！」

怒りに駆られて空のポリバケツを蹴り飛ばして、足早に立ち去ろうとする。

しばし立ち止まって、腕を組み、それから身をひるがえしてバケツを元の位置に戻して飛んだフタを頭にかぶせた。

そんな彼女をあざ笑うかのように、街のシンボルマークである風車の塔が、夜風になびいて回っている。

その街の名は、風都。

かつて、善と悪の風とが吹いていた街だった。

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(1)

風都。

長年、絶えず様々な風が渦巻いていたこの街も、こここのところは穏やかな流れの中にあつた。

それでも、たしかに時計の針は動いている。

あの風都タワーも今年の春に再建計画が建てられた。

もう来年の今頃には、いったん街の顔ともサヨナラ、ってワケだ。やるせなさとともに季節外れの空つ風が胸に吹くけど「これで良い」って声も自分の中にはある。

ーあの塔には、良い思い出も悪い思い出も、いろんなモンが染み付いちまつてる……

~~~~~

へさようなら風都タワー、今こそ思い出を作つて残そう!〜

飼い猫探しのついでにもらつた花火大会のチラシを折りたたみ、探偵、左翔太郎は物憂げにため息をついた。

翔太郎自身、街にそびえる塔には並々ならぬ思い出がある。

その想いを口にするのではない。それはハードボイルドに反する。

だが感傷には浸りたい気分だった。

自分たちの愛車、ハードボイルダーにまたがり、事務所に戻りがてら、タワーの周りを駆け巡る。

破壊されたこともあつたが、それでも風都タワーは街の象徴だ。その完全な消滅は、この街に住まう人々の人生や生活の一部がなくなることをも意味していた。

ふだんは穏やかな街も、その空気を感じ取つてかどこか騒がしい。

最近では、この光景を形にして残しておこうと、カメラや携帯で撮影する人もちらほら見受けられる。

どうにかタワーを元の形のままにどこかに保管できないか、という運動もあるようだ。

(ま、大切なもんはいつだって胸の中さ)

元かもめビリヤード場の二階に位置する鳴海探偵事務所。すでに

その姓を持つ身内はいないが、それでも故人である恩師の信念を引き継ぐ気持ちで、数十年、その名を残している。

その事務所の前に、ひとりの女性が立っているのを翔太郎は見た。背を向けていたのでその顔までは見えなかったが、ショートカットにほつそりしたシルエットから、若い、それも美人と見受けられた。なんとなくどこかで見たような既視感があったが、見慣れている、という姿ではない。

翔太郎は思わずバイクの上で背を伸ばした。

ともかくにも、貴重な依頼人だ。第一印象はできるだけ良く、頼れる硬派な男であるところをアピールしよう。

心の中でそう誓って、探偵はヘルメットを脱いで、指先で髪型を整えた。

愛用の WINDSCALE ブランドのフェルト帽を腰から取り出して土埃を払ってそのラインや角度を手づくりいし、彼なりに『キマった』角度でかぶる。

ン、ンと咳払いして声の調子をたしかめてから、

「お嬢さん……ウチの事務所に、何かご用かな？」

声を渋めに低めて、そう尋ねた。

「相変わらずですね、左探偵」

彼女は、訳を知ったふうな口ぶりで、そう答えた。

思いもしなかったリアクションに「あ？」と聞き返すと、美人とおぼしき女は振り返った。

なるほど、クセは強いが美人ではあった。だが、見知った顔でもあった。

「あなたも、この街も」

そのパーツにひとつひとつに、父母の面影を感じさせる。

「お前ッ!？」

「どうもご無沙汰しています」

友人ふたりの間に生まれたその娘は、ぶつきらぼうに現れた。

「…………どうもー」

自分でも立ち位置がよくわかっていなさそうな、見たことのない青年をともなうて。

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(2)

数時間前、風都警察署。

春奈とともに風都市に向かったエイジがまず連れてこられたのが、そこだった。

といっても、用事があったのは刑事課でも、ましてや交通課でもない。

そこからは、ガラス張りの壁から街の全景が一望できた。解体途中の風都タワーから、足下の人々の歩く姿まで。

絶えずそこを見つめ、エイジたちには背を向けているのは、白髪まじりだが背の高い男だった。

そこから察せられる年齢に反して肉体は引き締まっていて、隙というものが感じられない。服装のセンスも、ずいぶんと若かった。ジャケットやベルトなどの小物は、照井春奈のそれと酷似している。

そんな壮年の男を、春奈は睨みつけ、自身がやってきた用向きをかいつまんで説明していた。

「……というわけで、『黄金仮面』という犯罪者がこの街で何かしらのアクションを起こそうとしていることはたしかです。インターポールより風都警察署へ、捜査協力を要請したい」

きわめて、事務的に、ふだんの彼女以上にあなたかみを感じさせない調子で。

「話はわかった。協力は惜しまない」

対する男の返答も、平坦な語調だった。だが、冷たさはそこになかった。

「では詳細はまた後ほど」

これ以上の問答を忌避するかのように、突き放すかのように言うのと、彼女はきびすを返した。

だが、逆に男のほうは振り返った。

「久しぶりに会ったにしては、ずいぶんと味気ない会話じゃないか。

春奈」

一転、親しみに満ちた声を投げかけながら。

「……あ」

思わずエイジは声をもらした。さまよわせた視線の先が、磨き上げられたデスクのネームプレートに向けられた。

『署長 照井竜』

流麗な細文字で書かれた姓名に注視し、そこでようやくこの両者が親子だと確信した。

春奈は冷たい横顔を向けて、足を止めた。

「こちらには、何も話すことはないのです」

照井春奈はあくまで冷淡だった。いや、冷淡を装おうとしていながら、はげしい怒りが渦巻いている。

墓場でエイジをなじった時と、同じように。

「仕事でなければ、こんな街に来もしなかった。守ろうとも思わない。

……この街は、悪を呼び寄せる」

自分が守護する街をのしられても、照井竜は怒り返さなかった。

ただ、かすかに悲し気で、そしてあわれむような表情でうなずきながら「そうか」とつぶやいた。

「お前の中で、まだあの事件は終わっていないんだな、春奈」

そう、春奈の父親らしき男は言った。

彼女の鉄面皮から、怒りがにじみ出たようだった。夜叉のような形で父親を振り返り、その長いまつげを震わせた。

「今更言い訳はしない。どう思われようともかまわん。だがそれでも、俺にとつてこの風都も、お前も」

春奈は、最後までその言葉を聞こうともしなかった。

エイジが気が付いたときには荒々しい衝撃音とともにドアが閉まり、春奈の姿はそこになかった。

長く細い吐息とともに、署長もまた、ガラスの壁へと向き直った。重苦しく気まずい空気と、男二人だけが取り残された。

「……あ、じゃあ僕もこれで」

失礼します、と言いかけて、そろそろとドアノブに手をかけた瞬間、



照井竜の眼光がするどくひらめいた。

彼が手にしたりモコンを押すと、施錠音が分厚いドアの奥底で聞こえ、ドアノブは固定される。

「失礼しま、失礼、しつれ……ッ」

足早に出ていこうとしたエイジはその場で立ち往生して、どれだけ力を入れて押し引きしようとも、扉はまったく反応しなかった。

「ちよっ、なんですかコレ!？」

「俺に質問するな。聞きたいことがあるのはこちらのほうだ」

娘に対するときとは打ってかわってけわしい表情と語調で、照井竜が詰め寄ってくる。

その彼の背後で、風都署のポスターに、

へわからなかったら人にたずねましょう!」

とポップな字体で標語が書かれていたが、すぐに彼の長身の影に隠れてしまった。

いや、完全に視界がふさがれてしまった。

照井の真顔が息がかかるほどに近づき、研がれたような双眸が、ジロジロとエイジの上から下まで、余すところなく睨みをきかせていた。

「いったいきサマはなんだ?」

「は!?!」

「娘のなんだと聞いている……!」

「はあ!?!」

「どこまでだ? どこまで振り切った……!?!」

警察官という体面もあるのだろう。照井はエイジの身体につかみかかりはしなかったが、濃い顔が殺意にも似た気迫をにじませて接近して来れば、それだけで十分凶器だ。

本人としては『黄金仮面』の出没や娘との因縁と同程度に真剣なのだろうが、いかんせん憂慮すべき点が間違っている。

だが、エイジが返答に窮したのはたしかだ。

彼が勘ぐるような関係とはもちろん違うが、友人とも正式な相棒パティというわけでもない。

そんな煮え切らない態度に業を煮やしたか。照井は一度後退して自分の席にもどった。

そして自分のデスクの下から、メタリックに光る長物を取り出した。

バイクのマフラーと合体したかのような重量感のある剣。

警察にはおおよそ不釣り合いなそれをつぐようにして持ち出すと、

「返答しだいでは……ッ！」

とエイジに向かおうとした。

だが、

「ふぐっ……!?」

という低い悲鳴とともに、照井の顔が青白くなった。瞳孔と鼻孔を開閉しながら、腰に手をあてうづくまる。

持ち出そうとした剣が、ふたたびデスクの裏にこぼれ落ちた。

「え、あの、ちよつと……お父さん、どうかしました!？」

「うるさいッ！ 俺をお義父さんなどと呼ぶなア！」

そう大声で怒鳴り返したのがいけなかったか。小刻みに震えながら、背を丸め、より低まった姿勢になった。

「どうしたんです署長殿、そんな大声出して……ってなんじゃこりやあ!？」

室内の異常を察したのか、ふたりの刑事らしき男たちが、隣室につづくとおぼしき別のドアから顔をのぞかせた。

ツボ押し器具を手にした老刑事がまずうつぶせになった上司を発見し、エイジには見向きもせず駆け寄った。

「あー、腰ですか。腰、やっちゃいましたか？ いやでも、不謹慎だけどホツとしましたよ。署長もいちおう人間なんですねえ」

次いで部屋に入った短髪の中年刑事は、すぐくのんきに、そしてなんとなくに嬉しそうにニヤついていた。

「バカー！ んなこと言ってる場合か。いいからタンカとシップ持って来い。あと、オレには昆布茶な！」

そんな彼の側頭部を手にした道具ではたきながら、老刑事はその相

方に追い出すようにして指示を飛ばす。そして彼自身は照井の傍に座り、彼の姿勢を呼吸がしやすいように調整した。

「いやあ、でもその辛さ。わかります署長殿。いや私もね、この歳になるまでけっこうやらかしましてね。かれこれ五回ぐらいかなあ。こういうときこそ、独り身の辛さが出ますなあ。家にカミさんがいればまた違ったんでしょかね。なんかこう、清楚な感じの和風美人が私のパンツとか干しながら、『ミキオさんは働き過ぎなんですから、こんな時こそしっかり休んでくださいませね』とかなんとか言っちゃってナハハ……………今時分から婚活ってアリですかね？」

「今の俺に質問するなアツ！」

とりとめもない長話をするその刑事に、照井竜は怒鳴り返す。

「……………今度こそ、失礼しましたー」

そんな混沌極まる状況下、エイジは刑事たちが入って来たドアを利用して離脱に成功した。

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(3)

「なるほどな。話はわかった」

元々ビリヤード場のあった場所の二階。

そこになお健在の鳴海探偵事務所に若いふたりを招き入れながら、翔太郎は帽子を脱いだ。

そしてみずからの座席の後ろにかけられたフックへ、片目をすがめて狙いをしぼる。

「……つか、なにやってんだ照井のヤツ」

「あのひとも五年もすれば還暦ですからね。無理するからですよ」

春奈の容赦ない言葉に、思わず翔太郎の手が滑った。

放たれた帽子はあらぬ方向へと飛んで行って、むなしく床へと落下した。

「んなこと言うんじゃねーよ！ こっちにまで地味にダメージ来んだろうが！」

帽子がフックにかからなかった恥ずかしさも手伝って、翔太郎は大声で返した。

とは言え、万全の態勢で投げても帽子があのかかるのは三割程度といった調子だ。それをいちいち口にするのではないが。

「あとその青一才」

帽子を拾い、部屋埃を払いながら、翔太郎は青年を呼び止めた。

初対面の彼は、興味本位か、入り口脇の他の帽子コレクションがかかった扉を開けようとしていた。

「そこに近づくな。幽霊が出る」

そうおどしつけてから、

「なんなんだお前？」

とあらためて誰何する。

「あー、えーと僕は……泊エイジ、っていいいます」

聞きたかったのは素性や春奈との関係だったのだが、まず答えられたのは青年の名だった。

「……エイジ？」

そして翔太郎はその響きから、べつの知己を連想した。

「ただの捜査協力者ですよ」

探偵の回顧は、春奈のそっけない返答にさえぎられた。

苦い顔で座席に座った翔太郎の前に、

「ついでに、あなたにも捜査協力を依頼したい」

「あ?」

「警察署の署長がああザマでは、さほどアテにはならないでしょう。せめてこの街に土地勘がある情報筋も保険としてつなげておきたいので」

この街にふたたび悪が入り込んだとするならば、それと戦うのは探偵であり……そして、仮面ライダーとしての義務だ。

だが、春奈の物言いが癪にさわる。彼女に対してイエスと素直に答えることは、ためらわれた。

頬杖についてそっぽを向く翔太郎に、春奈は「それに」と付け足した。

「当然、報酬は出します」

彼女が机の上にあるものを置いた。

それは札束……などではなく、彼女が仕事で扱うらしい円盤状のガジェットだった。

それを垂直に置くとひとりでに、車輪のように転がって、やがてバランスを崩して倒れた。

机が、ではなく事務所のある施設全体が老朽化の影響で傾きはじめているのだ。

三人も入ると、とくに重心が寄りがちになる。

だが、施設自体を買い取って修築するほどの財力はない。

生活費とガレージの維持だけで精一杯だった。

経済的につぶれるのが先か、それとも物理的につぶれるのが先か。そんな状況下での春奈の『依頼』は十分に魅力的に言えた。

だが、

「この間は邪険にしておいて、今更頼りにするってか? ずいぶんと安く見られたもんだ」

翔太郎はそう答えた。

「お前のお情けは受けねえ。とつとインターポールなりどことなりに帰るな」

デスクのポットから飲み残しのコーヒーをカップにそそぎ、カップに口づける。極まった苦さに酔いしれる。

いくら大金を積まれようとも、探偵のとしてのポリシーやプライドまでは安売りしない。それこそが……ハードボイルドの、世界だ。

「じゃ、立ち退いてもらいます」

春奈が書類カバンから抜き出した事務所の権利書を見て、翔太郎は天高くコーヒーを噴き出した。

その先にはエイジがいて、青年の顔と胸とに吹きかけられた。

「お前ッ!? なんで……それ!?!」

吹きこぼした液体をボタボタとアゴからつたわせながら、探偵は言葉を詰まらせた。

「どうせそう言うだろうと思って、実家にもどつたついでに取って来たんですよ。さすがに権利は譲渡されてませえんが、これをやぶくぐらいは……」

「きつたねえぞ!」

「今の自分の顔見てから言え」

ある意味では気心の知れた応酬をくりひろげる彼らの脇で、上半身を黒く濡らしながら、エイジは呆然と直立していた。

怒りと呆れが自分のうちで通りこすのを待ってから、拭くためのものを、満足に目も開けられないなかで求め始めた。

やがて、まさぐるその手が柔らかい感触をつかんだ。

救われたような心地で顔をぬぐう。晴れた視界が、自分が手にした白いものの正体を明らかにした。

それは、白い浅地の着物だった。厳密に言えば、白い着物をまとった、人間。姿形で言えばエイジと近い華奢な少年。

さきほどエイジが出入りを禁じたあの部屋から出てきたらしい彼

は、じつとエイジを見返していた。

ただし着物のあわせは左前になっていて、彼自身は、その額に三角の布を張り付けている。

その異様な風体に詫びよりも先にエイジは啞然としてしまった。だが、着衣を汚された当人も怒った様子はなく、じつと目を凝らして顔をエイジの至近に寄せた。

「君は、幽霊というものをどう思う?」

と、名乗りもなく唐突に尋ねた。

は? と聞き返すエイジの反応など最初から期待していなかったように、すぐに退いて自分のアゴに手をやり思案顔。

「死者が生き返ることがありえない、と言い難くはなかったが、霊魂だけが復活するという現象については完全に証明されていない。精神エネルギーが何らかの要因によつて固定された、という考え方もできるけれども、一般的なイメージとしては、こういう白襦袢に三角の布の、いわゆるオールドタイプの死に装束だ。だが死人の全員が全員、それに思い入れがあつたり葬儀のときに着ているとは考えにくい。それに『恨めしや』。これにも疑問がのこる。何故、わざわざ古語で見ず知らずの他人にも恨み言をつぶやくのか。興味は尽きない。実に興味深い、ゾクゾクす……」

少年は、エイジの背後から伸びた手によつて、部屋の奥へと押し込められた。そのまま扉が閉められたことで、その際限ない自問自答は打ち切られた

左翔太郎の手によつて。

「……言つたら、幽霊が出るつて」

ハハハ、とかわいた笑い声を無理やりあげる探偵の背後を、権利書をちらつかせながら春奈が素通りして事務所を出ていこうとする。その背を小走りに追いかけているから、

「オイちよつと待て春奈! いや、ちよつと待つて……春奈さーん!」  
と呼ばわった。

硬派とは程遠い、情けない声色で。

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(4)

照井春奈。

俺たちの仲間の……いや、俺たち全員にとつての娘みたいなもんだ。

たとえ不愛想ではねっ返りで、頭でっかちでつるむことをよしとしない不良娘だとしても、そのことに依然変わりはない。

かつての父親アイツを思わせる彼女がこの街に帰って来たことが、風都に新たな風を呼び込むきっかけで……過去を振り切るためのチャンスで……そして今にして思えば、『あいつ』の悲劇は、ここが始まりだったのかもしれない。

~~~~~

「この風都タワー、もうすぐなくなるんですね」

有料の望遠鏡から街の景観をのぞきこみながら、エイジはすこしさびしげに言って見せた。

街の一大スポットがなくなるといふ経済効果のためか、あるいはこの象徴がそういう流れをつくっているのか。風都の東西南北あちこちで、解体や改装をしているビルや店舗、民家は目立っていた。

その過渡期にあつて、街はあわだたしくも寂寥を感じさせる雰囲気を持たせていた。

ただその目的はそうした景観を楽しむためではなく、高いところから街の異変を探るためだった。

原始的かつ短絡的な手法だ、と春奈はその方法を酷評したが、ここに来るまでの間にも、その提案者は自身の人脈やガジェットを駆使して情報収集を怠らなかった。

あるいは、監視を口実にここを案内したのかもしれない。

「ん？　なんだ、お前来たことあんのか」

その彼、左翔太郎という探偵は、隣の望遠鏡をのぞきこみながらたずねた。

彼の言葉の端々には、この街に対する誇りや矜持のようなものが感



じられた。

「いや、近所の遊園地からときどき見えるんですよ、この塔。天気の良い日とかにメリーゴーランド乗っていると」

「じゃ、風都に来るのは初めてか？」

「ついこの間までなんか物騒でしたから。ガイアメモリ犯罪とか」

「そりやまあ昔はな」

翔太郎は言葉をにこしながら望遠鏡から顔を離した。それに付き合っていたエイジもまた、同じように顔を上げた。

そして帽子の鏢に指をそえながら、翔太郎は得意げに言った。

「でも安心しな。今じゃこの街からはガイアメモリはすっかり消えちまってる。この街のヒーロー……仮面ライダーたちのおかげでな」

「……なんであなたが得意げなんです」

「おっとそいつは言えねえなあ」

という浮ついた調子は、どうにもそう振る舞う自分に酔っているフシがある。

だがそんな彼に、冷水を浴びせるかのような足音が背後からせまつた。

「しかし、ガイアメモリは流通こそ減少こそすれ、事件の数は絶対的には減ってはいない」

照井春奈だった。

彼女は窓から街の様子を睨み据えたまま、ふたりと同じラインに立った。

「むしろ、風都という市場を喪った犯罪者たちは、街の外へと分散した。おかげで余計に確保が困難になった」

「あ？」

興が醒めたような目つきで春奈を見返す翔太郎を、春奈はきびしい眼光で射返した。

「この街の仮面ライダーたちは、ゴミ溜めを掃き清めようとして、かえって周囲を汚しただけだ。まったく、視野のせまい」

「……んだと、もう一度言ってみろッ！」

激する探偵をつかむようにして、エイジはなだめすかした。だがそ

んな彼の息遣いを意に介していないように、さらにつづけた。

「私は、そうはならない」

「そう言い残して距離をとった春奈を、

「おい待て春奈アー!」

と翔太郎は追おうとした。しかしその背には明らかな拒絶の意志があつて、それ以上の問答を許さなかった。

「つたく、なんなんだアイツは!?!」

腰に手を当て、もてあました苛立ちで全身をゆるする翔太郎だったが、家族的な交流があるらしい彼でさえ察しえないのだ。取り残されたエイジがとやかく言える問題ではなかった。逆にその心当たりを問いたいのはこちらだ。

「ここに来るまでの間もなんとなくそんな気がしてましたけど、ずいぶん自分の故郷を嫌ってるみたいですね、彼女」

「ああ……まあ、理由は、あるんだけどな」

ひどく言いにくそうに唇を結んだ翔太郎だったが、帽子を目深にかぶり直した。

しばらく沈黙したあと、エイジではなく、おのれに言い聞かせるようにして彼はつぶやいたのだった。

『『BC事件』。ここで起こった最後の、そして最悪のガイアメモリ犯罪だ……それがあいつを狂わせちまった』

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(5)

(風都タワー、か……)

その展望台に入ると熱病のように、悪夢が脳裏でぶり返す。すでに克服したトラウマだが、ただ記憶として焼き付いている。

あのクリスマスの夜、大勢の人質がいて、母がいて、幼い自分がいた。

そして……

「あれれえく？ おつかしいぞおく？ 来れば解放するって教えてあげたのに、チミのパパはどこでちゆかあく？」

扇子をひらひらと扇ぎながら、自分たち煽ってくる男。

囚人服をまとった彼の物言いに、勇敢な少女は食って掛かろうとした。

だが、男の言う通り尊敬する父親は、威厳がありながらも自分には優しかった父は来ない。

多忙を極めつつも「クリスマスぐらい、休みはとってやる」とわざわざ休暇をとりつけてくれたはずの彼は、待ち合わせ場所のここには来なかった。

幼い照井春奈は、母のほうを見上げて、やや派手で若いその袖をつかんだ。

「なんで、お父さん来ないの？ なんで、助けに来てくれないの？」

彼女をかばうように立っていた母は、その童顔を苦悩にゆがめた。

言葉を一度あからさまに詰まらせてから、春奈に視線を合わせて、その華奢な肩をつかんだ。

「お父さんはね、今、悪い奴らと戦ってるの。みんなを守るために」

「そうそう、お前らを買った連中を、お前らより先になあ」

母親の慰めをかき消すかのように、男はさらに挑発的な物言いをする。

春奈は、自分と同じく監禁されている集団の一部を見た。その強い瞳に気圧されるように、男たちは眼を伏せた。

「ここに風都署副署長、照井竜の家族が来てるだろ？ 言えば開放し

てやる」

そんな甘言に乗って、自分たちが照井竜の妻子だと教えたのは、彼ら風都市民だった。

そして、今街で暴れ回り、火の海にしているのも、多くはこの街の犯罪者たちや囚人たち。

母は、そんな彼らに特に触れることなく、緊張と怒りに揺れる瞳を男に向けていた。

一切悪びれる様子もなく鼻を鳴らした男は、自身の首筋に黒いガイアメモリを叩き込んだ。

〈BROADCAST!〉

というガイダンスボイスとともに、男の身体が眼鏡や着衣や扇子ごと、灰色に変質する。

コンクリートのような角張った外殻を持つその肩の裏から、配線のような触手が伸びて、母を絡めとった。

そしてそのままもかく彼女を自身の脇へと抱えると、

「んじゃ、まずは……子どもの前でそんな悪い顔をする母親から、始末しようかな」

やめて。言葉を喉から絞りだそうとするが、声にならなかった。

だが、母を助けたという願望をまるでかなえるかのように、封鎖されていた出入り口が派手な破碎音とともに吹き飛んだ。

ブレイクされたメモリと、囚人服を着た男たちが一面に散らばる。

「お父さっ……」

思わずついて出た言葉とは裏腹に、現れたのは緑と黒、二色の仮面の戦士だった。

「仮面ライダー……?」

この街のピンチに現れるという正義の味方。

ひそかに憧れつつつけたヒーローの登場だったはずが、彼女は軽い落胆をおぼえた。

自分が本当に来て欲しかったのは、欲しかったのは……

「そこまでだ! このクズ野郎ッ!」

どこかで聞いたおぼえのある荒々しい言葉づかいとともに仮面ラ

ライダーは白いマフラーを風になびかせた。

「そいつを離せッ」

靴音を鳴らして迫る彼に、

「いいぞ」

と、あつさりドーパントは快諾した。

そしてその言葉どおり、彼女の肉体はコンクリート質の腕から解放された。

「でもさ、ルールはルールだから」

せせら笑いながらガラス戸をやぶり塔の外へと、その人質を放り投げることによって。

「ッ、亜樹子オオツ！」

そして仮面ライダーは、知っているはずのない彼女の名を呼んだ。

「……何か聞きたいことがあるといったところか？」

二〇三五年現在へと、意識を引き戻した照井春奈は物陰に気配を感じてそう声を発した。

やや日焼けし、色あせた『ふうとくん』の等身大パネルの裏から、洩エイジはややバツが悪そうに現れた。

「相変わらず、隙が無いね」

とお茶を濁そうとする彼を睨み返し、ため息をこぼす。背を向けた。真新しいガラスに、自身の洩面がかすかに映りこんでいた。

「……君がこの街を嫌ってるのは、『BC事件』があったから？」  
「左探偵から聞いたか」

エイジは素直にうなずいた。

あの半熟卵。春奈は内心で毒づいて舌打ちした。

そんな軽口だからいくつになっても、ハードボイルドにはなれないのだ、と。

エイジはためらいを見せていたが、自身が追及したいその点に関して完全に引き下がるつもりはないらしい。

春奈は二度目の吐息を漏らした。

「……あの」

「サンタクローズ」

そんなキーワードでさえぎられて、エイジは「え？」と聞き返した。「サンタクローズ。君はいつまで信じていた？」

あまりに季節から外れた、脈絡のないその問いに、彼は要領をつかみかねているようだった。

怪訝な様子を隠さず首を傾げる彼に振り向き、春奈は苦笑した。

「ものの例えだ」

自分でも、あまりに気取りすぎて漠然とした比喻と思った。

あるいは、苦い記憶と向き合うことを、無意識に避けた結果か。

だが、いつまでもそうしているわけにもいかないだろう。

「場所を移そう」

ツアー客らしい一団と入れ替わるかたちで、ふたりは展望台から出ることにした。

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(6)

「事の発端は、クリスマス。風都刑務所へ移送中だった囚人の脱走だった」

エイジと共に塔を出た春奈は、あらためてその全身を見上げていた。

脱走の中心にいたのは元警察官で、それは二度目の脱獄だったという。

警察官、あるいは脱獄者としての経験、人脈。

それらを悪辣に使い、男はガイアメモリを獄中にて入手。仲間とともに護送車内でドーパントへと変貌した。

自由を奪われているはずの囚人がたやすくその拘束を解き、持っているはずのない違法品を使い、現れるはずのない怪人へと化けた。

その時警備に当たっていた警官たちの衝撃たるや如何ほどか。今となつては知る由もない。

とにもかくにも風都郊外で狂乱の果てに、護送車は横転し、死傷した警官を残して囚人たちは解放された。

騒動が彼らが一路目指したのは、風都タワー。

地下から侵入した彼らは、警備室を制圧しながらホールから現れた。

意図したかどうかはともかくとして、ちょうどその手法は一度目に占拠された時と酷似していた。

そのことが、人々に実態以上の恐慌を引き起こさせた。

下から上へ、さながらそういう漁か、あるいはゲームであるかのように来客を追い立てた犯罪者たちは、彼らとともに展望台に立てこもった。

そこに、幼い春奈と……そして母、鳴海亜樹子がいた。

そして、彼女たちこそが目的だったようだ。

展望台につくなり変身を解いた男たちがこう呼ばわった。

「副署長の照井の家族が来てるだろ!?! 出せっ」

主犯格の男はともかく、その取り巻きは現役時代の照井竜に逮捕さ

れた犯罪者たちであり、その動機は怨恨による復讐だった。

当初は黙秘していた人質たちだったが、主犯格の男が、扇子で爪をとぐようなしぐさとも発した一言が、その空気を変えた。

「もし誰がそうなのか教えてくれたら……解放してやってもいいよ？」

むろん、それは守る気もない約束だった。すこし考えれば、その程度のウソは見抜けるはずだった。

だが、ギリギリの状態に立たされた観客たちには、その『すこし』を考える精神的な余裕は、なかった。

「たしか、その女が『竜くん』とか言ってた、ような」

「お、俺も聞いた！」

「その親子がそうだ！ 間違いない」

——それが、自分の半生を費やして街を守護した男に対する、街の人々の返礼だった。

これらの密通が決め手となり、照井母子は犯人たちの手元に置かれた。

そして主犯格の男は、ブロードキャストドーパントの特性を使って街中の放送をジャック、どこかにいるであろう照井竜に向けて声明を発した。

「えー、エリート警官照井くんの家族をお預かりしていまあす。返して欲しいければ、日没までに一人で来るように。……来る勇気があればの話だがなあ〜」

男がこう言ったのには理由がある。

実のところ、風都に現れたドーパントは彼らのみではなかった。

彼らと通じていたエグゼほか犯罪グループの残党が、最後の花火とばかりに一斉に蜂起。ドーパントに変身し風都中を荒らし回っていた。

おおよそ計画性も、自身の損得さえも関係ないと言わんばかりに、ドーパントたちは街で破壊の限りを尽くしていた。

そんな蛮行に、警察も、そして仮面ライダーたちも方々で対応に追われていたのだった。



そして結局、父は時間には来なかった。

代わりに現れたのが、仮面ライダーWだった。

そして母は展望台から突き落とされた。

当時小学生の頃の春奈にとっては、あまりに衝撃的な光景だった。そこだけが脳裏に焼き付いて、その前後の流れが千々に乱れている。乱雑につなぎ合わせて編集されたフィルムのように。

たしかWが、激情に身を任せてドーパントに立ち向かった。

展望台から飛び立ったふたりを追って、タワーから抜け出た春奈は、地上で争う彼らを見た。

その時Wの姿は変色していた。まばゆいばかりの黄色と銀に分けられた闘士。背負った鉄棒を振りかざせば、ムチのようになつて灰色のドーパントへを打擲した。

「メタルイリリュージョン……！」

そしてシャフトにメモリを怒りとともに叩き込めば、振りかざされるシャフトの軌道に沿うように、月輪のごときリングがWの周囲に展開する。

勝算がないと判断してか、逃げようとするブロードキャストドーパントの背を、その月輪が追尾し、存分に切り刻む。

断末魔とともに巻き上がる爆炎。ブレイクされるメモリ。うつぶせに倒れる犯人。

ノイズとともに、映像が一瞬途切れる。

「……おいっ、おいっ。すっかりしろ、亜樹子!？」

次に記憶に残っているのは、悲鳴にちかい、どこかで聞いた声。見慣れた男性が、ぐったりと力なくもたれかかる母を何度もゆする様。その彼女の細腕をつたって、おびただしい血の量が地面に広がる。

「左ッ、ファイリッブ！ 所長は……ッ!？」

そして今更ながらに駆けつけてきた父。言葉をうしない、さつと色がひいて、凍り付いたその顔。

どうすることもできず、誰を責めることもできずに立ちすくむ自身自身。

その足下を、母から流れ出た血が濡らした。

かくして、この年の聖夜は、街中のいたるところに傷痕を残し、後味悪く朝を迎えた。

その被害は最初に起こった『蜘蛛男事件』に比肩しうる甚大さであった。ただ一方で、地下でくすぶっていた犯罪グループはこれに機に一掃され、風都におけるガイアメモリ事件は激滅した。

ブロードキャストの男……主犯格も再逮捕された。

ただその動機は、事件の大きさに反して、ひどく卑屈で、身勝手に、矮小だった。

取調室に押し込められた男は唇をとがらせながら傲然と持ち込んだ扇子をあおいでこう供述したという。

——事件を起こした理由？　んなもんねえよ。

——強いて言うなら、あの副署長が気に食わなかった。一目見たときからそう思ったね。

——刑事出身つてのが気にいらねえし、赤いのも気に食わねえ。エリートで正義漢気取りつてのも虫唾がはしる。

——街とか市民を護る仮面ライダーとかいうのにも、やな思い出があつて、あのバカどもに恥をかかせてやりたかつたのさ。

——そうだな、まああとは……メッセージかな？　昔オレを逮捕した『あいつ』にな。『何度悪事を重ねても止めてやる』とかなんとか言つてましたけど？　でも管轄<sup>ツマ</sup>を出りやお前にはなんにもできませんから！　残念ツ！　つてなア！

——どうせオレの人生詰んでんだつ！　何やつたつて損はねえんだよ、うひやははははは！

自分は悪くない、自分をそうさせた世の中が悪い。

そう言いたげな吐露の数々に、取り調べをした警察官は閉口したという。

## 第五話：夏の終わりの Joker game!?(7)

「……そして私は、彼らがこの街を守る仮面ライダーだと知った」

「と言うことは、あの探偵もお父……署長さんも、ライダーだった?」

「もつと言えは、祖父もな」

「はは……すごいサラブレッドだ」

エイジは、その過去自体に追及することを少しためらった。

少女の心を傷つけた父たちの背信、街の歪み、人の醜さ。

「……じゃあ、お母さんは」

「……すでにここにはいない」

そして、母の死。

幼い彼女の内でそれらが醸成された先に、今の照井春奈がある。

だがエイジには、それに対する言葉を持たない。

「辛かったね」とか「きつといつか良いことがある」とか。そう言うのは容易だろう。

だがそれらは容易であるがために散々に言われ続けたことだろうし、春奈にとってはなんの益もない、呪いの言葉だ。

何より彼女にとってはすでに決着がついた問題であるらしい。今更外野がとやかく言っても無意味だろう。

「でもさ、署長さんはきつと」

「さすがに、成長すれば事情はわかる。父はあの時、外で警察官として指揮を執り、仮面ライダーアクセルとして戦っていた」

「それでも、許せない?」

「そんな風に二足三足とわらじを履いた結果が、あれだ」

——本人が、内心でどう思っているかは別として。

「事件の前の私は警察官としてあの男を尊敬し、優しい父親として慕い、この街のヒーローとして仮面ライダーに憧れていた。だが、それがひとり男の貌だと知った瞬間、夢や理想は現実に醒め、憧憬は失望へと変わる。あたかも、サンタクローズの正体を知ったようにな」

先ほどの比喻を持ち出して、春奈は肩をすくめた。

だが、言葉を重ねていくごとに、その双肩が、声が、揺れていく。「あの時、あの男は副署長としての責任に徹することもできず前線で戦い、家族よりもそれを売った市民の命を優先した。そうして半端に振り切れなかった結果、私たちを護れなかった。……私の慕ったヒーローは、父親として失格だった。私の愛した父親は、ヒーローではなかった……！」

エイジは、まるで見てはいけないものを避けるかのように、眼をそらした。

ヒーローを父に持つ。その点に関しては、エイジも、春奈もアユムも同じだ。

だが、決定的に違うものがある。

少女が父が仮面ライダーだと知ったのは、父にも、仮面ライダーにも裏切られた。そう思った瞬間だった。

かける言葉もなく、距離さえも詰められず、立ち尽くす。痛ましい沈黙がふたりの間に立ち込める。

ぱちり、ぱちりと、緩慢な拍手が聞こえてきたのは、そんな折だった。

「家族を引き裂く聖夜、いやなかなか聞きごたえがある物語だった」カフエスペースの一席に腰かけたまま、優雅に手を打つ金髪碧眼の若者は、まさしく歌劇を観覧する王族のようであった。

「ギルガメツシュ……！」

ベルトを呼び出し身構えるエイジに一瞥をくれたあと、その美少年……ギルガメツシュは鼻を鳴らして立ち上がった。

ただでさえ目立つ容貌を持つ彼が、別の若者たちと剣呑なムードになっっている。

来場客が何事かと注視をはじめていた。それによつてうかつに変身できずにいるエイジたちの退路へ回り込むように、ギルガメツシュは距離を詰めてくる。

「捜す手間が省けた」

鉄面皮にもどった春奈は、敵を前に強気な態度で対峙した。

そんな彼女を虚勢だと嘲笑を向け、金髪の王はふたつのガジェット

を手にした。

「とんでもない、待ってたんだ。テリトリーの外に居られては、かえってやりづらいでな」

ひとつは、大ぶりでサイケな色合いのドライバー。

エイジたちとは一線を画す意匠のそれを腹の前に据えると、展開したベルトがドライバーと腰とを固定する。

そして、もう片方は一昔前のゲームソフトのような、カセット型のアイテムだった。

その外装に張られたシールには、塔とそれに向かい合う黄金の騎士、そしてタイトルロゴが描かれていた。

「タワーオブドルアーガー」

スイッチが指にかかる、透明な基盤が光り、そのソフトの名らしきものを、軽妙な声が唱えた。

風都タワーを背負うように仁王立ちしたギルガメッシュの背後に、そびえ立つ山と咆哮するドラゴンがスクリーンとして投影される。

「階層60F、変身」

嘲りを捨てて低くつぶやくと、ドライバーのスロットのひとつに、納刀のようにそれを叩き込む。腹部のレバーをスライドさせる。

「ガッシャーン！ レベルアップ！ 女神と至宝が、つなげるサーガ、タワーオブドルアーガー！」

その眼前に生じたエネルギーの壁がギルガメッシュを取り込んで、その姿を変形させた。

牛の角のようなものが頭の左右から伸びた、フルフェイスの兜。その隙間から、アニメチックな青い瞳が閃いている。

鮮やかな紺碧を所々に配した、黄金の西洋甲冑。

右手には過度なまでに豪壮な装飾の両刃の大剣。左手には青い宝玉のついた短い杖。

好奇の視線で見守っていたオーディエンスたちは、突然の怪人の出没にあるいは逃げ、あるいは端末をカメラとして構えたり、様々な反応を見せていた。

そんな『下々の者ども』の反応などまるで気にしないと云わんばか

りに、剣先をふたりの若者に突きつけながら、騎士に扮した王は笑った。

「Let the game begin」

## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(8)

「照井さん、変身を」

「いちいち言わずともわかっている」

逃げ惑う群衆の中、春奈とエイジはその場に踏みとどまった。

状況がそれどころではなくなってあらかたの視線が自分たちへ向けられなくなったあと、彼女たちはそれぞれのドライバーをそれぞれの手に転送した。

変身するのはできるだけ注目がなくなってからにしたい。

そんな彼らをあざ笑うかのように、ゆったりとギルガメッシュは歩いてくる。

——あるいは、何かを待っているかのように。

春奈の耳が、異音をとらえた。

頭の上から聞こえてくるそれは、風切音だった。

——否、そう表現するには生ぬるい。

何か巨大なモノが、大気を突き破ってくる轟音だった。

「危ないッー」

その正体に気付いて反応をいち早く示したのは、エイジだった。

彼は春奈の肩を押して、走り出した。

彼らの上空から、その巨体は落下してきた。

地面をえぐり、衝撃波が若者たちや来客たちを巻き込んで、そのまま塔の中へと押し込んだ。

土煙が巻き上がる。野太い咆哮が、それを一気に吹き飛ばす。

それは、一頭の獅子だった。だが、複数の獣の特徴を持っているし、その表皮は鋼鉄の質感を持っている。

「いっ……この間倒したはず!?!」

エイジの言う通り、その姿は記憶に新しい。

イーデイスを追っていた際、妨害してきたあのキマイラだった。

突然現れたその怪獣は、塔の出入り口をつぶしてしまった。

本来外へ逃れようとしていた客たちは逆にタワーのホールへと押しやられ、かえって逃げ場をうしなった。

刹那、春奈の脳裏にノイズがはしり、視界をジャックした。クリスマス夜の夜、ホールに突然現れた怪人たち。追われる人々。母に手を引かれる自分。

季節や驚異の規模は違えど、春奈にあの『始まりの夜』を連想させた。

それを意識したほんの一瞬、隙が生まれた。

手にしたドライバーめがけて、何かが跳躍した。

「ぐっ！」

黒コートをはためかせて自分に襲いかかった金髪の青年を、春奈は生身で迎撃せざるをえなかった。

立てられた指が春奈の肩口に食い込む。腹部に何発か膝蹴りを食らう。

もよおす吐き気をこらえて、春奈は彼ともつれ合った。だが、冷静さを欠いた今、体勢を立て直すのには時間が要った。

だが、伊達に血反吐を吐くほどに訓練は積んでいない。頭よりも先に、身体が動く。

その金髪の男……ギルガメッシュがくりだしたハイキック、その軸足の警戒が薄れた瞬間を、彼女は見逃さなかった。

すかさずその足を払う。

姿勢を崩し、虚空に浮かび上がったギルガメッシュの腹部を、掌底でえぐり抜いた。

たしかに感じた手ごたえ。吹き飛ぶ男の肉体。

だがそれが彼の狙いであり、自分の失策だったと呪うのに、時は必要なかった。

突き放されたギルガメッシュは、不敵な笑みを浮かべていた。

その手には、自分が持っていたはずのものが握られていた。

——T3アクセルドライバーが。



## 第五話：夏の終わりのJoker game!?(9)

「……キサマアツツ！」

春奈は吠えた。

そのために仕掛けたのか。そう続けたかったが、怒りと屈辱と自身の迂闊さへの憤りで言葉にならなかった。

違和感もおぼえていたのもある。何故、わざわざ一度変身をしておきながら素の姿で挑んできたのか。

答えとしては、シンプルだった。明確なかたちで、目の前から現れた。

入り口を封鎖する獣の足下から、黄金の鎧騎士が笑い声を含ませながら現れる。金髪の少年は、また別の個体としてそこにいた。

「ふたりいた、というわけか」

「いや、三人だ」

彼らとはまた別の方向から、まったく同じ声が聞こえる。

ギルガメッシュは、三方向から春奈たちを取り囲むようなかたちで迫ってくる。

〈DRIVER ON!〉

黄金の騎士以外のふたりは、それぞれにまた別のアイテムを持ち、異なる意匠のベルトを腰に巻いている。

「グルーバー！」

右手のギルガメッシュが、合成獣の名らしき単語を発すると、大きな唸り声とともに獣は金色の粒子となった。

それは、波打ちながらギルガメッシュのベルト、門扉のようなレリーフの口へと吸収されていく。

「変身」

指に巻いた古代的な指輪を、その脇に鍵のようにはめ込み回すと、ライオンの顔が開いた扉からあらわになった。

〈SET!・OPEN!・L・I・O・N!・LION!〉

自身の前に現れた紋章の壁を怖じもせず潜り抜けると、黄金の仮面ライダーが現れた。

ベルトや、その掛け声と同様にライオンをかたどったマスク。インパネスコートのようにつくりの該当を双肩から打ちかけて、その下から長い腕と鋭い猛獣の爪が伸びていた。

左手のギルガメッシュは、二つのスイッチを片手で握りしめていた。

折れた翼をヘッドから生やしたスイッチと、幾何学的な文様が彫られた赤と黒が渦を巻くスイッチ。

そのうちのひとつ、翼のスイッチが、明滅をくり返しながら小刻みに震えていた。まるで、抵抗でもするかのように。

だがそれを歯牙にもかけず、みずからのベルトにそれらを挿入し、指でスイッチを押した。

〈3・2・1……〉

「変身」

機械的な、抑揚のないカウントダウンとともに、ギルガメッシュは天に拳を突き上げた。

ベルトから吹き上げた赤黒い霧とともに、星座が浮かび上がる。

今までのギルガメッシュライダースとは違う。白を素体とした肉感的なボディ。そこに核のような宝玉が関節部を青いラインと金の装飾でつないで浮かび上がり、頭部は牙をむき出しにした猛々しい獅子のそれ。岩石のような分厚い鬣が、その後頭部を覆い隠す。

直垂をひらひらとさせて闊歩するさまは、さながら地上に降り立った神のようであり、喉元からこぼれる重低音の呼気は、獅子の咆哮を想起させた。

ただの猛獣と違い、その背には黄金の片翼が生えていた。

前門の虎後門の狼とはよく言うが、この場合左右を挟み込むのは獅子だった。おまけに前方には勇者然とした騎士ときた。

距離を少しずつ詰めてくる彼らを警戒しつつ、ベルトを手にしたまま、唯一変身能力を保持したままの泊エイジは硬直していた。

変身のためのプロセス中に、攻撃されることをエイジは恐れているのだ。

だが、そんな彼の思惑に対し、ギルガメッシュたちに迷いはなかった。

た。

三人同時に、彼へと攻めかかる。

そんな彼らの間隙を、黒い小さな影が飛来したのは

クワガタを模した前時代的な携帯端末は、仮面ライダーたちの眼前をすり抜け、あるいは体当たりで足止めし、翻弄しながら彼らをエッジから遠のける。

強引に迫ろうとするスイッチタイプの子供のギルガメッシュの前に、二階の吹き抜けから飛び降りた男が立ちふさがった。

三枚目の雰囲気はナリをひそめ、目深にかぶり直した帽子で目元のやさしさや冷たさを隠した彼の手に、そのガジェット……スタックフォンはもどってきた。

「……てめえらか。この街を泣かせようってのは」

その男……探偵、左翔太郎は無残にも破壊された風都タワーの内装を見回した。

ぬいぐるみや化粧品、あるいは子ども用のバッグが散乱している。それらを認めると、顔をしかめた。

義憤のようなものを静かに両目にたぎらせる彼とは対照的に、ギルガメッシュたちは不敵に笑声を重ねた。

ゲームキャラのようなギルガメッシュが、自身のドライバーのサイドを指で押した。

「ステージ・セレクト！」

人工音声とともに、彼らを取り囲む世界が一変した。

塔の内部には違いないが、壁はレンガ造りに、床は石畳へと変わっている。

電灯や照明のたぐいは見当たらず、かわりにたいまつがほの暗い空間のなかで煌々と灯り、片隅や中空に、コインのようなアイテムや、宝箱が設置されていた。

（空間転移、いや……）

部屋の基本的な構造や散らばっていたものに変化はない。

テクスチャを実際の空間に貼り付けてそう見せているだけなのだ。

「つたく、妙なことするライダーもどきが増えたもんだ」

翔太郎が呆れ声を出した。

そしてスタックフォンをしまうと、腰の裏から……おそらく自身のWドライバーを取り出そうとした。

だがその手を、ギルガメツシユの嘲笑が遮った。

「無駄だ。この一帯は、外部との連絡は遮断された。一切の例外も無くな」

その言葉に、翔太郎は腰の裏に回した手を止めて舌打ちした。険しい顔で、黄金の騎士をにらんだ。

Wドライバー……正式名称ガイアドライバー2Gは、ギルガメツシユのように単独の意志で変身することはできない。相棒であるフィリップと意識を共有させ、彼が承認してソウルサイドのガイアメモリとともに自身の意識を転送させなければ、変身はできない。

つまり、今左翔太郎はWにはなれない、ということだ。

だがその表情に焦燥はない。

冷静さを取り戻した春奈も、彼が平静でいられる理由を知っている。

「だったら、シンプルに行くまでだ」

左翔太郎には仮面ライダーとして、もうひとつの姿があった。

今回のようにWに変身できない場合に使う、緊急措置的な形態。

一時期フィリップが消滅していた空白の一年間、この街を支えつつけてきた、風都第四の仮面ライダー。

前もって抜き出したガイアメモリはそのままに、彼はWドライバーと酷似したドライバーを取り出した。ただその片側のスロットは欠落している。

Wドライバーのプロトタイプ、ロストドライバーだ。

〈JOKER〉

ガイアウイスパーが主に呼応するように高らかに響いた。

「何度も修羅場をくぐり抜けてきたいぶし銀……見せてやるよ、小童ども」

探偵の声にハツとしたエイジは、状況に膠着状態に……変身できるタイミングになったことを悟り、自身もベルトを巻いた。

翔太郎と並び立つと、イグニッションキーを回す。

ベルトを待機状態にすると、ブレスレットにシフトカーをセットする。

同時に、ロストドライバーのスロットにもメモリが挿入された。

翔太郎の顔にコネクタのような、あるいは涙のような刻印が浮かび上がる。その横で、拳を握り固めた。

「変身」

〈JOKER!〉

「変身!」

〈DRIVE! TYPE NEXT!〉

歯がゆさを噛みしめる春奈の前で、ふたりの男が姿を変える。

「仮面ライダー……:ジョーカー」

銀色の触覚、赤い瞳。紫のボディラインに黒の体色。

無駄な飾り気のないその仮面ライダーは、右手を回して鳴らしながら、公然とそう名乗った。

地下に停めてあったであろうトライドロンが、きりもみしながら床を突き破って、空中に躍り出る。そのホイールから吐き出された黄色いタイヤを受け入れて、ダークドライブの正常な起動を示した。

みずからグローブを握りしめて指を開閉する。

新旧黒のライダーは、巨悪と対しながら、赤と青、二色の眼光を鋭く閃かせた。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(10)

「……さあ、お前たちの罪を」

仮面ライダージョーカー左翔太郎は、指を突き出しながら一歩前進しようとした。

「……あん?」

が、何か違和感をおぼえて横を見る。

自分と同じような、黒い装甲の戦士が、横に並び立っていた。

何だ仮面ライダーか、と翔太郎は正面へと向き直った。

何だ仮面ライダーか。

何だ。

何……

「……………ええーツ!? お前、仮面ライダーだったのかよお!」

「今更ですか!」

二度見しながら、指をエイジに向けて、翔太郎は背をのけぞらせた。

「つか、なんだその悪人ヅラ!」

「ほつといてくださいよ! 割と気にしてるんだからツ」

「しかも俺と色かぶってるしよ!」

「良いじゃないですか敵味方でわかりやすくて」

と、果てない口論をくりひろげる彼ら。その特徴的な角にめがけ、

春奈は銃をかまえて引き金を引いた。

ダメージはないが、思わぬ方向からの射撃が彼らを襲い、そこに火の花を咲かせた。

「のわっ!」

「って、あぶねえだろツ」

「前ッ!」

文句を言おうとする翔太郎たちに、春奈の怒号がうながす。

あん? と向き直した翔太郎の目前には、翼の折れた獅子が飛びかかってきていた。

超人的な跳躍……否、飛翔によって一気に距離を詰めた魔人は、低い唸声とともに獣性をむき出しに爪で切りつけてくる。

「……の野郎」

すかさず飛びのいた翔太郎たちは臨戦の構えをとって、反撃に打って出た。

そこから、五人の仮面ライダーとひとりの捜査官との乱戦がはじまった。

ダークドライブと、グルーバを取り込んだギルガメッシュとが斬り結べば、翼獣と化したギルガメッシュはジョーカーという仮面ライダーともつれ合ったすえに接戦をくり広げた。

時に互いの敵を入れ替え、時に二体の敵を同時に請け負いながら、彼らは格闘術や装備のかぎりを尽くして戦う。

ブレイドガンナーの一閃が、黄金騎士の杖を弾き飛ばした。

その隙を、エイジは見逃さなかった。

〈NEXT!〉

イグニッションキーをひねって放出したエネルギーが剣刃に渦巻く。

それが振り下ろされる前に、ギルガメッシュの空いた片手が空をつかむ。

〈ガシャコンシールド!〉

彼を中心としたおおきなリングと、さながらゲームのセレクト画面のようなアイコンが浮かび上がりそれらが手を包み込む。

その光の中から取り出されたのは、大きなふたつのボタンのついた、分厚い丸盾だった。

そのボタンを、剣の柄で連打すると、

〈1・2・3! 3・バリア!〉

と早口でボイスがアウンスする。盾の前に半透明の障壁が三層、展開する。

ダークドライブの一斬は、それらによって相殺された。  
「なっ!?!」

必殺の技がいともたやすく防がれたことに、エイジは動揺した。それを読んでいたかのように、ギルガメッシュはシールドを押し出して

叩きつける。退くエイジに対し、今度は自身の優位を確立しつつ、黄金の騎士は突進した。

すれ違いざま繰り出される刺突。一撃を与えられて反撃に出た時には、すでにそこに彼の姿はなく、剣は無慈悲に空振った。伸びきった腕を引き戻す前に、身を切り返したギルガメツシュが再び剣を突き出した。それらが、ダークドライブの装甲にいくつもの青白い火花を咲かせた。

直撃をかわすだけで精一杯だった。

追撃を加えようとするギルガメツシュの側頭部目がけて、春奈はトリガーを引いた。

放たれる銃撃。だがそれは黄金騎士に届くことなく、飛び込んできた別のギルガメツシュがその前に立ちふさがった。

「バツバー！ バ、バ、バ、バツファア！」

色を変じたマントがひるがえり、光弾をいなして防御する。

その所作には、荒々しくも気品があった。さながら闘牛士か、あるいは魔術師<sup>ウィザード</sup>か。

そのマントの下から分厚く伸びた爪が、不気味な光を宿しながら生身の春奈に狙いを定めた。

「……………ッ、照井さんっ！」

彼女の危機を先んじて察知したのは、エイジだった。

シフトブレスにセットされたシフトカーを抜き取った。

その隙を突こうと再度突貫してきた騎士のギルガメツシュを、翔太郎が遮った。

「させるかよッ！ てめえの相手は俺だ！」

と気炎を吐きながら彼と競り合い、エイジがシフトカーを入れ替える時間を作る。

彼の援護に心中で詫びと礼を告げながら、エイジは黒赤のパトカーをセットした。

〈NEXT HUNTER！〉

ネクストライドロンから発進したタイヤが分離し、ダークドライブの手に格子の形状でおさまった。



それを無造作に投げると、空中で分解したそれが、ターゲットの周囲に柱のように突き立った。

……ただし、ギルガメッシュではなく、春奈本人を囲む。

彼女を閉ざし、そして同時に保護した牢屋は、ギルガメッシュの爪撃を阻んだ。

舌打ちする魔術師の横合いから、エイジは飛び膝蹴りをくり出して春奈から退かせた。

〈CANCER ON!〉

だが、白銀の獅子が黄金と黒のライダーの間に割って入った。

その右手には爪に代わって蟹鋏のような武装が取り付けられていて、閉ざしたそれをさながら鈍器のように振りかざしながらエイジを追った。

二体のギルガメッシュを巧みに誘導しながら、春奈から引き離していった。

そんな激闘のさなかに外野に置かれた春奈は、歯ぎしりしながら石畳のテクスチャを荒々しく踏み鳴らした。

改めて、仮面ライダージョーカーは外見も形も、とうてい『仮面ライダー』と定義しがたい魔人の一体と相對していた。

〈1・2・3・4・5・6! 6バリア!〉

ボタンを連打し何層もの防壁を重ね掛けするギルガメッシュの前に、

「だったら、変わり種で勝負だ!」

翔太郎は、自身のマキシマムスロットヘガイアメモリを挿入した。ただし、ジョーカーメモリはロストドライバー自体に差したまま。青いメモリを別に。

〈TRIGGER! MAXIMUMDRIVE!〉

「ライダー……トリガーラッシュ……!」

必殺技の名前らしきものをつぶやきながら、青い輝きをほとばしらせた拳を握り固める。

飛び上がった翔太郎は、それこそ弾丸のように高速の打撃を繰り出

した。防壁を速度と数とで押し切って、削り抜いて、最後は限界いっぱいまで引いた拳をうならせ、突き出す。

だが、わずかにその拳先に、ブレのようなものが生じた。まるで、暴れ馬の手綱でも握っているように、突き出した腕の先から身体の重心が揺らいだのだ。

「手数でバリアを破るのは悪くない。が、慣れないマキシマムに身体がついて来なかったか！」

体勢をくずして生まれた隙を、文字通り、ギルガメッシュが剣の切っ先で突いた。

「ぐあっ！」

地面を滑る翔太郎の前に、残るギルガメッシュが合流した。

彼らに追いつくようなたちで、エイジが翔太郎の前に立った。

心身もろともぶつかり合うような凌ぎ合いが続いていた。

決め手に欠けるのはどちらの陣営も同じだったが、地力、すなわち単純なスペックと数で考えれば、この『黄金仮面』たちが優位に立っていた。

だが、示し合わせたかのように彼らは足並みをそろえて退いた。

「チュートリアルはもうここから良いだろう」

「そろそろ次のステージに進めさせてやっても良いな」

テレパシーで通じ合っている彼らがあえて会話をする必要があるかはさておき、その談合はすぐに一致を見せたようだった。

ジョーカーが踏み込むより早く、黄金騎士のギルガメッシュがきびすを返す。その退路には、色とりどりのコインがあつて、みずからの肉体にそれを吸収していった。

〈高速化！〉

〈透明化！〉

〈ジャンプ強化！〉

と、彼の設定したステージ内にボイスがけたたましく鳴り響く。

それに反し、ギルガメッシュの姿は視認できなくなり、音や気配はするが、ものすごい勢いでそれが上へ、さらに上へと遠のいていった。

〈ファアルコ！ ファッフアッフアファ、ファアルコ！〉

魔法使いのギルガメッシュは指輪から生み出した魔法陣をくぐった。真紅のマントをはためかせ、赤い羽根をまき散らし、上空に飛び上がる。

〈LIBRA ON!〉

獣のギルガメッシュが星雲の輝きとともに、錫杖をその手に生み出した。石突で床を叩けば、その像が大きくぶれて、陽炎のように姿はかき消えた。

〈この街の象徴たるこの風都タワーは預かった。中にいる客ともども無傷で返してほしければ、屋上まで来い〉

その場に立ち尽くすエイジたちに残されたのは、そんなテンプレートの言葉だけだった。

## 第五話・夏の終わりの Joker game!?(11)

照井春奈は入り口をふさぐ大門に触れようとした。

「待って、照井さん！」

そこに待ったをかけたのは、ダークドライブに変身したままのエイジだった。

ただし、胸のタイヤは換装して、ネクストビルダーのものへと変えていた。

「それ、ただのテクスチャじゃない。バグスターウイルスのコロニーになってる」

「つまり……触れば感染する、ということか」

虚空に浮かび上がるパネルを指で操作しながら、彼は制止の理由を告げ、春奈はそれに理解を示して手を引いた。

左探偵のほうも、覗いていたデンデムシ、あるいは双眼鏡のようなガジェットから同様の観測結果を導き出したらしい。

ふう、とため息をつくとき、そこから目をはなした。

「で、どうすんだこれから？」

「どうするって……やっぱり、最上階まで行って奴らを倒すしかないんじゃないですか……」

「いつそ、この車で一気にそこまで突っ込んでしまえばどうだ？」

翔太郎はネクストライドロンのボンネットを無遠慮を叩く。

引きつる顔をドライブのマスクで覆い隠して、やり過ごしてから、エイジは変身を解除した。

「それは、難しいでしょうね。構造がどう変わってるかわからないから、下手に柱とか壊したら塔ごと壊れるかもしれない。逃げ遅れた市民がそれに巻き込まれる可能性だってある」

「……だよなあ」

自分でも無茶な策だと思っていたのか、翔太郎は苦い顔で、しかしあっさりと取り消した。

「それに」と、視線を横に投げかけながら、言葉を濁した。

「照井さんのドライバーも、取り返さなきゃいけないし」

視線の先には、不機嫌そうに腕組しながらむっつりとしている、照井春奈の姿があった。

「ドライバーって……まさかお前も!」

榛名は返答しなかった。ただ、解いたその手に、奪われなかったアケセルメモリを握りしめていた。

またこじれそうになる予感を察し、エイジは先手を打った。

「そのメモリでドライバーの再転送はできないの?」

「転送後に私の支配下から離れれば、ドライバーにはセーフティロックがかかるようになっていいる。……だからこそ、今連中に妙な細工をされずに済んでいいるわけだが」

あえて話題を春奈からドライバーへと転じた。そんなエイジの意図を汲んでのことかそうでないのか。

春奈は涼しい顔で答えた。だが、

「はっはーん」

と、したり顔で探偵は春奈に近寄った。

「……なんですか?」

「いやあ? やっぱ、なんだかんだ言いつつも、俺らや父親のこと、リスペクトしてるんだな、って」

あえてエイジがそのことに突っ込むことを避けるようにしていたのに、あからさまにそんな空気を醸していたのに。それを意に介さず、探偵は即座に話題を引き戻してきた。

口にはしないが、率直に「空気を読め」と胸の内で呪った。

相手に虚栄心や親心はあっても、悪意自体はないことを承知はしているのだろう。春奈は露骨に激することはしなかった。

「なに勘違いしてるのか知りませんが」

ただ嫌悪感はその冷たい顔にわずかににじませ、肩に置かれかけた翔太郎の手を払った。

「私はあなた方に軽蔑しているからこそ仮面ライダーになった。振り切れもせず、半端で、どっちつかずのあなた方と違う。私は、私の理想とする仮面ライダー像を体現する」

そう言い切ると、自身はさっさと階段へ向かっていく。エレベー

ターがゲームデータによって隠匿された今、上層部へ向かう手段はそれしかない。

翔太郎は彼女の態度にイラツときたようだが、「これが大人の余裕だ」と言わんばかりに、ぎこちなく肩をすくめて笑い飛ばした。

だが、エイジに注がれた視線は、明らかに同情と同調を求めていた。

エイジは小首を傾げてあいまいに微笑み返し、春奈を追った。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(12)

石段を軽やかに駆け上がると、そこにはRPGのダンジョンが広がっていた。VR技術が医療、娯楽多方面で活躍する昨今、目に迫らんばかりの異空間など珍しくもない。

だがそれでも、肉眼で見、肌で感じるのとはまた別だった。

テクスチャで表層を上書きしたに過ぎないのに、その閉塞感からくる息苦しきは、本物だ。

そしてそれは、エイジのパーティーメンバーとも言うべき翔太郎、春奈も同様のようで、緊迫した面持ちで視線を左右に往復させていた。

ここまで敵のアンブッシュはない。

ふ、とエイジが一瞬気を漏らした瞬間、その声は天高くから鳴り響いた。雷鳴のように。

〈そういえば、ゲームの説明をしていなかった〉

と、もはやさんざん聞きなれ、嫌悪した少年の声音。春奈が顔をしかめながら……というより元からしかめっ面だが、

「ゲーム？」

と、聞き返した。

『タワーオブドルアーガ『ドルアーガの塔』は、一九八四年に発売されたバビロニアン・キヤッツスル・サーガのシリーズ第一作目だ。このゲームは、迷宮と化した塔にちりばめられた鍵を拾いながら、ヒロインとラスボスの待つ上へと昇り詰める。その左翔太郎は、ちょうどその世代なんじゃないのか？』

「……いや、そこまでトシじゃねーんだけど……」

名指しで話を振られた翔太郎は、わずかに気落ちしたように声のトーンを落としかけた。

だが、すぐに持ち直し、難関や魔王に挑む顔つきになった。

「けど、ちょうどテメーらを倒すにはうってつけてのゲームってわけだ。……直行してブツ飛ばしてやるから上で待ってる金ピカ共」

そう吠える探偵に、少年の、ギルガメッシュの声は失笑を漏らした。

「ゲームの説明はまだ途中だ。……もちろん、ただまっすぐ行ってボスを倒してハッピーエンドでは芸がない。勇者の前にはいくつもの障害が立ちはだかる。迷路のように曲がりくねった道。いくつもの種類のモンスター。そして、それを乗り越えるたび、宝物が手に入る」

「宝物？」

翔太郎は鼻で嗤った。

「ヒーローが、金目のモンにつられるかよ」  
権利書でさびれた事務所ごとにグラついた人のセリフだとは思えない。

エイジは内心そう思ったが、あえて言わなかった。  
そしてギルガメッシュは嗤いを返した。

「たしかに、発想が財布同様に貧困な者のえがく『宝物』など、せいぜい金銀財宝程度だろうな。だが、宝とは一辺倒なものじゃない。誰かにとっては価値のないものでも、別の誰かにとっては違う。……ただ、今回の場合は俺たちにとっては塵芥にひとしいものだが」

三人の眼前、その虚空にモニターが表示される。

映し出された光景に、彼らの表情は凍り付いた。

「ヒーロー君たちにとっては、宝ではないのか？」

塔内部の、いくつものロケーションに切り分けられた画面。そのいずれにも、上へ退避したはずの市民がいた。

宝箱のつもりなのだろうか。巨大な透明のケージに収容された彼らの周囲に光源が発生した。

そこから現れた、肉腫にも似た、異形のオレンジの頭部を持つ怪人がケージに群がり、外側から破壊しようとする。

音声こそ切られているものの、その人質の顔の一つ一つから、彼らの放つ悲鳴や慟哭が聴こえてくるかのようだった。

「様々なシチュエーションを考慮したうえで、こういう宝箱を道中に仕掛けています。急がなければ、間に合わないぞ」

黄金の暴君がせせら笑い、画面は消える。その虚空を、翔太郎は睨みつけたままだった。

「どうやら、てめえに対する怒りが足りなかったみたいだ。お前は、俺



たちの、この街の敵だ……！ 絶対叩きのめす！」

「能書きはいいから、かかって来いよ。直行でブツ飛ばすんだろ？  
今こそ警官隊が抑えているが、グズグズしていると、また新しい『宝』  
が中に入ってくるぞ」

嘲笑は絶やさず、ギルガメッシュはノイズとともに通信を切った。

「ふざけやがって……」

拳を打ちつけながら翔太郎は歯ぎしりした。

だが彼を横目にエイジがおぼえたのは、怒りではなく……違和感。

ギルガメッシュの挑発的な物言いにはもはや慣れてしまったが、今の言葉に、その一片に、彼の理性的な思考が引つかかっていた。

「こうしちゃいらねえ、行くぞ春奈、エイジ！」

「あ、はい！」

と、翔太郎に急かされたことよって、その思索は打ち切られ、頭の中から霧散した。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(13)

天までそびえたつ魔の塔。その下層で、不気味な含み笑いが轟いた。

真紅の宝珠がついた杖を手に、白いローブを頭からかぶった姿は、古式ゆかしい魔術師のようだった。

フードの下の昆虫チックの赤いマスクの奥から、野太い声を発した。

「我が名は大魔導士アランブラ！ 人間どもよ、我が術に恐れおののくが良い！」

演技がかった大仰な啖呵とともに、杖を振りかざす。

その隣を並び歩くのは、そのアランブラよりもさらに異形の度合いを深めた、まごうことなき怪人。曲がった腰を身の丈ほどはある長い魔杖、アラディアで支える姿は、祭壇アルターに祈りをささげる魔女にも似ている。

彼らの杖から業火が巻き上がるたび、周囲からは悲鳴があがった。

それは、このゲームエリア内に閉じ込められた人々のものだった。

幸いにしてケージへは収容されなかったものの、何が起きているか分からない状況下で、恐慌状態に陥った彼らを守る壁は何もない。ただ逃げ惑うほかなかった。

あるいはそれは、閉じこめられた人々よりも、危機にあるのかも知れない。

彼らを追い立てるアランブラの黒眼が、その囚われた側のひとりに向けられた。

単身、透明なケージに捕らえられていた彼は、怪物の姿に甲高い悲鳴をあげた。

「炎だけでは芸がない。新魔法を試してみるか……『オボレール！』」

短い呪文とともに、怪人魔導士が天に掲げた杖で円弧をえがくと、その先端についた宝玉から魔法陣が生じた。

面積を拡げながら中空をスライドすると、宝箱を模したそのケージの上へと覆いかぶさった。

それは天井から床へと水を流し、華奢な少年の身体を濡らしていく。

……いや、それは少年の領域をさらに侵食していく。

閉鎖的な空間、逃れようのない水量がパニックにおちいった少年の膝まで沈め、足を浮かせ、やがてケージを水で満たしてしまった。

呼吸するスペースさえもないような水責めの中、あぶくを吐き出しながら手足をばたつかせる生命を見て、アランブラは嗜虐的な笑いを高めた。

だがその笑いは、長くは続かなかつた。

側面から飛んできた剣と拳が、それを物理的に妨げたからだった。

ふたりの黒いライダー……ダークドライブとジョーカーは、それぞれ音もなく着地した。

「どうやら連中、過去の怪人たちのデータも流用してるみたいですね」

とダークドライブこと泊エイジが冷静に言えば、

「春奈！ その子を頼むー！」

とジョーカーこと左翔太郎が鋭く指示を出して、怪人に向かって踏み込んだ。

照井春奈は自身の銃型のガジェットに、ワインレッドのメモリの端子を差し込んだ。

〈KEY！ MAXIMUMDRIVE！〉

という音声とともに発せられた鍵溝状の光線が、分厚い『水牢』を貫く。そのプロテクトを解除し、防壁をも物理的に破壊する。

水に押し出されるかたちで外に出た少年を、春奈が抱えた。

無防備になったその背に、魔女の杖が突き出される。

その先端から放射された炎の渦を、ジョーカーの拳風が凧いだ。

フンと鼻を鳴らし、その手を回して火の粉を振り払う。第二射が

飛ぶ前に、翔太郎は一気に距離を詰めた。

「どうしたどうした、そんな……もんかッ!? 俺が昔会った『魔女たち』は、もう少し手強かったぜ！」

翔太郎は敵に攻撃するいとまを与えない。

手数と技で押しながら、回りくどい煽りをくり返す。

相手に人格がインプットされているかは彼らには分からない。だが、その挑発に反応するかのようには、魔女は杖を大振りに振り下ろした。最低限の動きでそれを避けると、回り込んで背に靴底を叩きつける。

体勢を立て直した魔女が振り向いたとき、すでに翔太郎はジョーカーメモリをマキシマムスロットに叩き込んでいた。

〈JOKER! MAXIMUMDRIVE!〉

「ライダーパンチ……!」

拳に正義の紫炎を宿し、握り固めて跳躍した。

怪人の横っ面に見舞われたそのテレホンパンチを食らった彼女は甲高い悲鳴とともに上空へと吹き飛ばされて、そのまま自身が爆炎となって散った。

その炎を突っ切る形で、紫色のラインが入ったタイヤが落下し、バウンドしてからもうひとりの黒いライダー、ダークドライブことエイジの肩口へと挿入される。

〈NEXT TRAVELER!〉

タイヤを付け替えたダークドライブは、残る魔術師と取っ組み合い、剣と光線と、杖と魔法とで応酬をくりひろげていた。だが、エイジが地力で押し切った。ガードを崩すや、アランブラに二度三度と極彩色の剣閃を浴びせた。

「うぐぐ……こうなれば、伝説の魔法『クダケチール』を、今こそ!」

と、上を向いた杖が魔法陣を展開させるよりもはやく、アドバンスドイグニッションをひねり、シフトブレスのボタンを押すほうが早かった。

〈TRAVELER!〉

ブレイドガンナーを渦巻く光が膨らみ、騒音とともにアランブラを包んだ。

威力はさほどではないが、その耳目を焼く。

くぐもった声とともに悶絶する魔法使いの前に、もうひとりのライダーが立った。

「上出来だエイジ。あとは下がってろ」

〈JOKER！ MAXIMUMDRIVE！〉

翔太郎のロストドライバーが、さきほどの同じ声を発する。彼自身は、手刀を斜めに突き出し腰をひねって脚部に力を溜めて石畳を踏みしめた。

脇に反れたエイジを横切ると、翔太郎は天井まで跳躍する。

「ライダーキックー！」

突き出した右足が矢のように、アランプラを貫く。

野太い絶叫とともに、内側から爆発した怪人は、オレンジの泡沫となって消滅した。

「カタがつくまで、下で待っていてくれ」

「あつ、でも出ようとはしないで。触れると、致死性のウイルスに感染するので」

その階層を解放した仮面ライダーたちは、注意をうながしながら、人質たちを下へと退避させていく。

いちおう仮面ライダーであることは、秘密であるらしく、翔太郎は公然とは変身を解こうとはしない。それに倣う形でエイジもダークドライブの姿のままだったが、やはり容貌のウケはよくないようで、手を差し出そうとするたびに、極端に委縮されてしまっていた。

（けど、三分の一ぐらいは攻略しただろう。まだ三分の一、と言うべきなんだろうけど）

窓から地表までの高さから目当てをつけると、エイジはそう推測した。

八割ほどは下におろしたが、ちょっとしたアクシデントが起こった。

春奈の抱えていた少年が、裏返った悲鳴をあげた。

動揺に揺れる彼の瞳の先には、先ほどまでみずからを閉じ込めていた水の溜まりがあった。

「水が、水があっ!!」

と、春奈の首にかじりつくようにすがり、春奈は一瞬息苦しそうな

表情を浮かべた。

年齢は、二、三歳程度だろうか。そんな年頃に溺死させられようとするシヨックはいかばかりか。

同じ場所で、わが身で体感したことでもあるから、春奈もまた冷徹に突き放すことができずにいるようだった。

かなり暴れるのでさしもの仮面ライダーでも無理やり引きはがせずに難儀していると、

「ミハル！」

と、母親らしき女性が彼の名らしき単語とともに、春奈から彼の身柄を受け取った。いや、強引にもぎとったと言ったほうが良いのかもしれない。

「水がトラウマになっているのかもしれませんが。今後、彼の周囲には細心の注意を払ってください」

淡々と事実を突きつける春奈に無言で頭を下げて、その母子は階段を下りていった。

その様子にマスクの奥でひとまず安堵する。

だが、幼い少年の受けた心の傷は、後々まで尾を引くかもしれない。そのことを思えば、やるせなさどギルガメッシュたちに対する憤りをおぼえた。

「……このままでは、埒があかない」

両手が自由になった春奈は、舌打ちまじりにそうひとりごちた。歩き出した。

「ギルガメッシュたちの狙いは、明らかに時間稼ぎだ。だから我々をこのタワーにおびき込み、行動の自由をうばってこんな回り道をさせている」

そんなことは春奈に言われるまでもなく、エイジも翔太郎も理解していた。

おたがいに顔を突き合わせ、その意思を確かめ合ってから、翔太郎が彼女を追ってたしなめるように言った。

「そりゃ俺たちだって急いでる。けどな……けど、今までのを見たら。この先、同じように苦しんでる人たちがいる。それを見捨てるわけに

も」

螺旋階段をのぼっていくなか、春奈が立ち止まって振り返った。その切れ長で特徴的な双眸。そこに暗い光が宿るのを見たエイジは、息を詰まらせた。

「まさか……本当に見捨てろ、ってこと？」

「救急医療におけるトリアージみたいなものだろう。些事に固執せず、急を要する根幹を解決する」

「ふざけんな！ 目の前で苦しんでる人たちを見捨てて、何が些事だ、何が急だ!? 照井だったらこんなこと……!」

激してつかみかかると翔太郎の手を、冷ややかに見下ろしながら春奈は握り返した。

「だったら連中の計画が成就するのを看過するのか。彼らが持ち込んだものが街ひとつ吹き飛ばすものだったらどうする？ あるいはこれさえも陽動で、今タワーの外で怪人が暴れていたら？ ……そういう選択をして

(それは、どうだろうか)

春奈の提示した可能性に対し、エイジは懐疑的だった。

彼女の言うようなことを、あの『黄金の王』が理由なくするとも思えないし、やろうと思えば正面からやれたし、やるはずだ。そういう気位だけは高い王様のはずだ。

だがそう言うことさえためらわれるほど、春奈の言葉は辛辣で、反論を許さなかった。

——もちろん、万に一つ、ギルガメッシュがそうした暴挙に出る可能性がないわけでもない。

だが、それでもと。

エイジは彼女らの間に踏み込んで口をはさんだ。

「たしかに……照井さんの言うことも一理ある」

「おいエイジ！」

「だからって、可能性だけじゃ、僕らがここにいる人間たちを見捨てる理由とはなりえない。それに照井さんは」

言うべきか言うまいか。ほんの少し迷ってから、あえてエイジは春

奈の目を見てつづけた。

「自分の感情とか都合を優先させ過ぎてる、っていうふうに思える」

エイジは、自分の見立てが正しいと思った。

だが同時に、だかこそ相手を傷つける真実だということも、感じていた。

短刀のように、鋭い視線がエイジを斬りつけるかのようだった。だが臆さず、エイジは畳みかけた。

「照井さんの理屈と感情は、矛盾してる。……もし、照井さんが見捨てた人たちの中に、かつての君がいたとしても、おなじことが言えるの？」

春奈は答えず、足を速めて先行する。

それを追おうとして、エイジはつまずいた。やはり実際の構造とRPGを模したテクスチャとでは、微妙に距離感に差異があるらしい。小窓からのぞく外の風景にしてもそうだ。

風都の街並みは覆い隠され、代わりにやや奥行きに乏しい暗い森の風景と薄っぺらい曇天が広がっている。

「おい、大丈夫かよ」

「ありがとうございます。……照井さんは」

「あいつがああなっちまったら、何言っても無駄だ。しばらくはほっといてやれ」

翔太郎に助け起こされながら、エイジは空から視線を外した。だが、意識はいつまでも、そちらにこびりついたままだった。

(塔の外……じゃあなんで、さつきあいつは………まさか)



## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(14)

『ドルアーガの塔』と化した、風都タワー中層。

そこに、照井春奈は到達した。

息を切らし、足を引きずりながら。排熱が追いつかない銃を手に提げて。

壁のレバーを引くと、次の階層へとドアが現れた。

そのノブをつかもうとした時、鈍い叩く音を聴いた。

壁にはめ込まれる形で設置された分厚いガラスのキューブ。その中で、数人の人質内側から助けを求めていた。

春奈は足を止めた。特に意図したわけではなかったが、なんとなくその中へ向けたその目が、そのうちのひとりの視線とちか合った。

自分と同じ年頃の彼女は、今まさに春奈が彼女らを見捨てる気であるともならず、「救われた」と言わんばかりに表情を明るくさせた。

弱者特有の一方的な甘え。自分が何をせざとも外部の誰かがなんとかしてくれるという、無責任な信頼。

(何も変わっていない。この街は、人は)

春奈は、奥歯を噛みしめる。

舌打ちし、銃を持ち上げた。

最初、彼女は自分たちが向けられているものが何なのか、理解していない様子だった。無理もない。何しろ一般的な拳銃や、暴徒や低級の怪人制圧用の電撃銃デューザーとは、その造形も機構も多少は異なる。

だが、それでもそれが凶器であると理解するのに、多くの時間は必要ない。

恐怖が笑顔を吹き飛ばし、彼らは低く呻きながら、動揺して壁側から後ずさった。

(それで良い。存分におびえろ)

春奈は意地の悪い気分とともに、そのトリガーを引いた。

〈KEY! MAXIMUM DRIVE!〉

何発目ともしれない、解錠の光線が射出された。

感覚の麻痺した指先に逃れようのない熱が染み、皮膚を焼くかのようだった。

自分たちの前にあった障壁が破碎の音とともに消滅し、人質たちは困惑の表情を互いに見せあった。

その物分かりの悪さにまた舌打ちしそうになるのをこらえ、春奈は一公人として居住まいをただした。

「私の中から救助が向かっているはずです。彼らと合流し、その指示に従ってください」

少なくともこの階層を彼らが無事脱出するのを見届けてから、自分も本来の任務に戻ろうとした。

その、矢先だった。

「危ないッ」

という高い声が空気を裂いた。振り向けば、人影が春奈に飛びかかろうとしていた。かみかかって押し倒した。それは、最初に目が合った彼女だった。

「……何をッ」

必死の形相で床に押し付けようとする彼女を振り払おうとした次の瞬間、春奈たちの頭上を目にも留まらないスピードで、何かが通過していった。

その砲丸のような球体は壁に当たって大きくめりこんでから、火花を放ちながら消滅した。

テクスチャがはがれたその痕からは、コンクリートの壁が無残に砕けている様子がのぞいていた。

あれが今生身でしかない自分に当たっていれば、と想像したとき、春奈の背に冷汗が流れた。

そして投げた先には、鋼鉄の怪人がいた。

肩から背にかけて、鳥翼のような、あるいは伝説に出てくるようなドラゴン火竜の鱗のようなものを生やしたそれは、自身の剛腕を誇示するかのよう<sup>ドラゴン</sup>に上下させていた。

頭部から足にかけて散らばる『星』と、それをつなげるスターライ

ンが意味するのは、それがドラゴン座のゾディアーツであるということだ。

「私の後ろに」

命の恩人とともに体勢を立て直した春奈は、硬い声とともに彼女を自身の背へと押しやった。

(UFOガジェットや他のメモリがあれば……)

相手がパワータイプであっても、たとえ自分が生身でも、ある程度渡り合えただろうが、今あるのはオーバーヒート寸前の銃と、数種類の補助用ガイアメモリだけだ。

あるいは手持ちの『ライトニング』のメモリであればダメージは通るかもしれないが、最大で発電所並みの電力を放出するメモリだ。いかんせん出力が大きすぎる。このマグナムも限界で、周囲に影響を及ぼしかねない。

ならば、防御と遁走に徹して退くか。

それも、ためらわれた。

今退いて、下から迫る左翔太郎や泊エイジに、どんな顔をして合流すればよいのか。

プライドと状況の狭間で思考し、せめぎ合わせる春奈の前で、ドラゴン・ゾディアーツのコピー体は、新たに精製した鉄球を身をひねらせて放った。

とっさに女性をかばうべく、身体を裏返して腕を拡げた。

そんな春奈の上を、ひとつの影が飛び越えた。

風に乗るかのように、軽やかに。

固めた拳をひるがえし、その鉄塊を叩いて明後日の軌道へとそらして防ぐ。

「大丈夫か？」

その仮面ライダーは、黒いボディで春奈たちを護り、真っ赤な目を向けた。

「……………いつてえー！ 硬ッ、こいつの身体！」

——そして、時間差で拳を抑えて痛みを悶えた。

いまいち締まらないこの道化つぷり半熟ぶりこそ、仮面ライダー

ジョーカー……左翔太郎だった。

呆れながらも、体勢を立て直した春奈は女性をかばいながら周囲を警戒した。

さらに翔太郎を、たとえ撃てずともせめて形だけでも援護射撃をおこなおうとした。

「こっちはいい！ お前は自分らのことだけ気にしてろ！」

だが、当の本人がそれを諫止した。

そして、春奈はそれに従った。

好悪がどうという問題ではなく、春奈たちをかばう必要がなくなつたジョーカーは、その動きが格段に良くなつていた。年齢を感じさせない敏捷さでドラゴンの投球をかわし、かつ小ぶりに身体を左右に動かしながら、翻弄する。じりじりと、距離を詰めていく。

溶岩流のように異様な造形で膨れ上がったゾディアーツの腕を片腕が振り下ろされた。

ジョーカーの交差された腕がちりとそれを防ぎ止め、かつ圧迫に耐えていた。

しかし、自身の支えをも失う覚悟で、翔太郎はタイミングを見計らって足払いをくり出した。

その奇手が功を奏して、ドラゴン・ゾディアーツは体勢を崩した。轟音を響かせて、230cmはゆうに超える巨軀の下を、翔太郎は身を低めて潜り抜けた。

「鉄には鉄だ」

やや浮ついた口調で取り出した銀のメモリの金端子を、翔太郎はマキシマムスロットに挿入して上から手のひらを添えた。

〈METAL! MAXIMUMDRIVE!〉

「ライダー……メタルファイト」

顔の横で握り固めた拳とともに、翔太郎は床を足蹴に馳せた。

その身体の重量が仇になって立ち上がりが一步遅れた竜の頭に、銀の軌道をえがくストレート、言葉どおりの『鉄拳』が直撃した。

単純かつ力強いその衝撃は、鋼鉄の鱗を波打たせて鳴らし、空気を震えさせて弾け飛んだ。

「とつと、と……！」

慣れない、パワーのあるマキシマムを行使したせいかな。翔太郎はおおきく身体のバランスを崩して前のめりに傾いた。

それを見届けた春奈は、安堵の息とともに自分が守り、自分を救ってくれた彼女を顧みた。彼女も同様に、表情の強張りをようやく解いたようだった。

背格好や歳が近いだけあって、間近で見ると鏡でも見ているような心境だった。

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「いえ、こちらこそ……ありがとうございます」

礼を口にする春奈に、彼女もまた首を振って、頭を下げ返した。

だが、彼女はなかなか頭を下げようとしなかった。春奈の胸元を、もつと言えばそこに掛けられていたアクセサリーに、視線がじつと定まったままだ。

「……なにか？」

「い、いえ！ 特に大したことはないんですけど！」

別に悪感情をおぼえたわけではないが、愛想というものを持ち合わせない春奈の態度は、彼女を必要以上に委縮させてしまったようだった。

「ただ」と伏し目がちにその顔色をうかがいながら、はにかみながら彼女は答えた。

「持ってたんです、それとおなじペンダント。昔助けてくれた赤い仮面ライダーの人が」

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(15)

「十年ほど前、この街に似たような事件が起こったんです」

指を絡ませながら語り始めた彼女に対し、春奈はわずかに表情を強張らせ、そんな彼女を翔太郎は背から見守っていた。

「事件そのものはこの風都タワーで起こったんですけど、塔の外にも怪物が現れて、辺り一面今みたいなパニック状態で、その中に、私はいました」

当時の恐怖でも蘇って来たのか。彼女の組んでいた指に unnecessary 力が加わっていた。

だが震えはない。話しづらそうに、という様子はなく、むしろ誰かに今まで誰かに聞いてもらいたかった話をするように、しっかりと、ゆったりとした口調で彼女はつづけた。

親とはぐれた彼女を見つけたのは、兵隊のようなヘルメットの怪物たちだったという。彼女の姿を認めると、機械的な、だからこそ容赦や加減のない動きで追ってきた。

その後を似たような感じの化け物がついてきた。その一体感はそのれこそ兵士と『指揮官』のようだったという。

自分が何故追われているのか。それさえもわからなず逃走し続ける。

だが、所詮は子どもの体力。疲れを知らないように追走をやめない魔人たちによって、壁際に追い込まれた。

だが、その彼らの背面からバイクのように変形して突っ込んで、自分を助けたヒーローがいた。

「それが、あの赤い仮面ライダーだったんです」

そして、幼い彼女の目前で激闘は始まった。

だが、互いの心身を削り合うようなその戦いは、意外にも、いやそれゆえにこそ時間はかからなかった。

青く変色したそのライダーが、ストップウォッチのような巨大なアイテムを宙へと放り出した。

肉眼では到底追いつけない速度で敵軍を撃破し、孤立した『指揮官』

に連蹴りを浴びせた。

「9.9秒。それがお前の絶望までのタイムだ」

という彼の勝利宣言とともに、その怪人を中心に火柱があがり、断末魔が冬の空に飛んだ。

やがて、その爆炎の中から吐き出されたのは、人間の男だった。

粉碎されたガイアメモリの副作用によるものか。目元のあたりはどす黒く変色して疲弊し、地面に倒れ伏す。

しかし、その正体は変身態とはまるで違う。痩せっぽちの、紳士然とした優男といった印象の男だった。

男と仮面ライダーとは、旧知あるいは因縁と呼べる仲であつたらしい。

「やはり貴様か」

と、モトクロスバイクに使うようなメツトの奥で、吐き捨てるようにライダーは言い放った。

倒れ伏す敗者は、自嘲気味に鼻を鳴らし、震える指先を、まるで不正を糾弾する審判のように突きつけた。

「これが、君の選択の答えだ……。我々のような犯罪者は、たとえ生かしたところで、同じ過ちをくり返す。そして君は今夜、そのせいで私と同じ運命をたどる。それでもまだ……。処刑人にならずにいられるか？」

「俺に質問するな」

対するヒーローは、男の意図ごと質問を真つ向から吹き飛ばすかのように、力強い口調で言い切った。

「たとえ何が起ころうとも、俺の答えはあの時と変わらない。俺は貴様のようにはならない」

半壊していたメモリが、内側から起こった火花の衝撃でさらに割れて、完全に機能を停止した。

まるでそれに呼応するかのように、男も白目を剥いて意識を手放し、糸が切れたように脱力した。

それを見届けてから、仮面ライダーは変身を解いた。

真つ赤なジャケットの背に、炎のようなエンブレムが入っていたの

が見えた。それをひるがえした時、春奈と同じアクセサリーが首にかじやっていた。

それらの一つ一つが、彼女の記憶には鮮明に焼き付いているという。

「大丈夫か？」と彼は目線を合わせて尋ねた。

自分は無傷だが、親とはぐれたと答えると、

「わかった。俺と一緒に探そう」

と、迷いなくそう答えた。

「でも、良いの？」

と彼女が問うと、彼はややぎこちない微笑を浮かべて言った。

「このまま君を迷子にさせたままというわけにもいかない。それに、俺にも娘がいる。君の身を案じている親の気持ちは、よくわかる」

そして彼は街中を駆け回って彼女とその両親とを引き合わせ、

「……それが、あの年で最高のクリスマスプレゼント。ちよつとメカメカしいけど、あの人は、素敵なサンタクロスだったんです」

そう締めくくった彼女だったが、春奈は……同じ日に地獄を見た少女は、

(欺瞞だ)

と思った。

偽善だとも心中で吠えた。

だが、照井竜の欺瞞偽善が救った命が、心が、なんの因果か、巡り巡って春奈を救った。

すなわち、今、自分は、父に……

「アクセサリーだけじゃなくて、どことなく顔つきとか、雰囲気も似てるんですよ。あの、ひよつとしてお知り合いとかだったりします？」

邪気もなく、彼女は問いかける。



「父です」

春奈は答えた。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(16)

女性が去った後、残されたのは左翔太郎と照井春奈のふたりだけだった。

左翔太郎はロストドライバーを閉めてジョーカーメモ리를抜いた。手順どおりに、変身を解いた。

変身を解くと、押しとどめていた疲労がどつと押し寄せてきた。

ダメージらしいダメージは受けていなかったが、それでもあの『B事件』とも勝るとも劣らない連戦は、確実に彼を消耗させていた。だが、それ以上に、春奈のダメージは大きかった。クールで頑固という、どこことなく『誰かさん』を思わせる彼女が目に見えるほどの傷を負い、それを隠すほどさえの余裕もない。

翔太郎は、彼なりに言葉を選んで、話の持って生き方を考えた。

「ずいぶん、遅いペースじゃねえか。追いついちまったぞ」

春奈は答えず、背を向けた。

本人からその理由を言う気がないことを察すると、証拠を突きつけるように畳みかけた。

「……………ここまで上がってくるまでに、けっこうな数の人らが下りてきてな。で、なんで無事なのかって聞いたら、その中の子どもが答えてくれたよ。『顔の怖い銃を持ったお姉ちゃんが助けてくれた』ってな。

……………お前、結局」

「嘘うなら嘘えば良い」

ようやく春奈が口を開いた。

その端を、いびつに引き結んだままに、横顔だけを向けて。

「頭ではわかっているはずだった。こんなところで止まっているわけにはいかない。かつて見捨てられた私が、同じことをしても因果応報だと、何度となく自分に言い聞かせた！ けれど……………実際に助けを求められれば、無視なんてできなかつた……………!」

双肩をいからせてうめくようにして、言葉をつむぐ。そんな春奈だったが、言い切るとふと脱力し、自嘲気味に結論を言った。

「そうだ。私も結局、父と同じ半端者だ」

翔太郎は、聞こえよがしにため息をつき、かぶり直したソフト帽の縁に手を添えた。

「嗚わねえさ。……やっぱりお前は、照井の、いや俺たちの娘なんだな」

彼女の背にまっすぐに視線をそそぎ、つぶやいた。

「Nobody's Perfect」

どういう意味か、と目で問う春奈に、

「お前の祖父さんの言葉だ」

と、翔太郎は答えた。

「人は誰しも完璧にはなれない。お前も、俺も、フィリップも照井も。だから、人の弱さを受け入れられる。欠点を補え合える。そうやって、家族になっていくんだ」

「家族？」

春奈は今度は声にして尋ねた。

「そうだ」

と翔太郎は神妙に頷いた。

「俺たちは家族なんだ、春奈」

「……………だったら、なんであの時、父さんはッ！」

「同時に！」

話は最後まで聞け。

そういう代わりに、翔太郎は大声を放って、荒ぶりかけた春奈を止めた。

「この風都も、家族なんだ」

「……………この街が、家族だと？」

「たしかに、時には胸糞悪い事件が起こる。特に照井は、そういう嫌な面をこれまで何度となく見てきた。それでも、あいつにとっては、ここは妹さんと生まれ育って、お前や、お前の母さんと出会えた場所なんだ。だから、命を賭けて街のために戦える。お前と風都、どっちを

取るかとか、どっちの方が大切かとか、そんな辛い選択を、あいつにさせないでやってくれねえか？ あの事件は、俺たち全員のしくじりなんだ」

それは、説得や説教というよりかは懇願に近いものだった。

春奈の気持ちは分かる、父親を非難する資格や道理があることも十二分に知っている。虫の良い言い分だと知っている。

それでも、春奈には過去のわだかまりを振り切って、父親と向きあってほしいのだ。

言葉や態度に出さずとも、一度家族を喪った照井竜にとっては、大切な娘なのだから。

春奈は一向にうなずく様子を見せなかった。だが、明確な拒絶も示さなかった。

家族として、言うべきことは言った。

ここから先は、春奈の決断することだ。

わずかに胸に差し込む苦みを押し殺し、翔太郎は帽子と顔を伏せた。

寂寥に丸めて男の背中に、

「あの一」

「うおおあ!?!」

と、声がかかった。

おずおずと、タイミングを見計らったはいいものの計り損ねて逆に時機を逸したような、情けない調子の声だった。驚いて振り返れば、エイジの姿があった。黒いライダーの姿ではない。

「お前、空気読めよ！　つか、なんで変身解いてんだ!?!」

そう言えば人質と怪人入り乱れる混戦のなか、エイジが消えていたことを思い出した。酷なようだが、そこまで気を回す余裕がなかったし、それに道中現れた怪人たちは姿能力こそ過去のデータを再現しているが、どれもスペックが一段劣る、言わば粗製乱造の劣化コピーばかりだった。彼のダークドライブとやらの戦いぶりを見れば、彼らに遅れをとる姿が想像できなかった。そこは認めていた。

ただ、その青年があえて危険をおかしてスーツを解除している理由

までは、翔太郎には理解しかねていた。

「シフトカーには、今見回りや盗聴器機のスキャンをやらせてるんです。どうしてもここからの話は奴らに聞かれたくなくて」

訳を問われたエイジは、落ち着き払った様子で答えた

「分かったかもしれませんが。このダンジョンと、ギルガメッシュの秘密。それを逆用すれば、攻略法が見つかると思います」

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(17)

最後の一枚の扉は、重く、硬く、分厚かった。

開けた先には、灰色の空、金髪の少年の後ろ姿。

そして、彼らが操作する宝塔のような、そびえたつ巨大な装置。

その先端から伸びた光線が、さながら落雷の逆再生のように天へと吸い込まれていくのが見えた。

ただ、ファンタジー調で統一されたゲーム世界において、そのメカニカルな風貌は、明らかに浮いていた。

『タワー・オブ・ドルアーガ』最終エリア、すなわち屋上にたどり着いたのは、腰にベルトを巻いたふたりの男。そのうちのひとり、左翔太郎は決意を新たにジャケットとベストの前を閉じて、その目元の表情を隠すように帽子をかぶり直して決意をあらたに、若いふたりを先導した。

「座標の特定まで90%完了」

「それまでもう少し待つてくれないか?」

「さっきまでと同じように、遊んで時間をつぶしてくれていると助かる」

異口同音ならぬ、異口同声で、三人のギルガメッシュはせせら笑う。

背越しにそれを聞きながら、翔太郎は彼らと、彼らの機材へと指を突きつけた。

「遊びはこれで終わりだ。……これ以上この街を泣かせたりなんかさせねえ」

「別に、こいつはエクスピッカーのように風都や市民をどうこうするものじゃない。というよりも、いずれこんなちっぽけな吹き溜まりなど、些細な問題でしなくなる」

「なに?」

「だが、たしかにこのゲームは終わりだ。……報酬は、与えないとな」

声を低めて意図を問う探偵たちに、ギルガメッシュたちはようやく向き直った。

左側のギルガメッシュたちの持っていたものに、翔太郎の背後の春

奈が反応した。

手にしていたそれはもともと、春奈のドライバーだったのだから。だが、右のギルガメツシユが抱えていたモノに、踏み込もうとした彼女の足は止まった。

その腕の中には、ひとりの少女がいた。

まだ中学にも入っていないような娘だが、身体を固くさせて震えていた。そしてそんな彼女がどれほど揺れようとも、美少年の細腕は鉄骨のように微動だにしなかった。

「ただし、褒美はふたつにひとつだ」

「貴様ら……！」

春奈がうめき、エイジが前に進み出ようとした。

翔太郎は帽子に手を当てたまま、深くうなだれた。やがて頭を持ち上げて、エイジたちの後を追おうとした。

そんな彼らをけん制するかのようには、ふたりのギルガメツシユはそれぞれの『質』を片手で吊上げながら、塔の縁へと立った。

自分たちも半身を乗り出すような姿勢はいかにも不安定で、少女やドライバーは、ちよつと手の力を緩めればたちまち落下するだろう。

そして、このゲームエリアは仮想空間ではない。あくまで周辺の空間に貼り付けられただけの偽装だ。

つまりこの高度は現実とまったく変わらず、その高低差から落ちた人や物がどうなるか、あえて語るまでもない。

三人もそれをよく承知しているから、立ち止まったのだ。

「選ぶ権利があるのは、その娘だ」

「初期装備のままクリアしたボーナス得典といったところかな」

「さあ選べよ、照井春奈」

「ドライバーを選べば、少女を落とす」

「少女を救えば、ドライバーを破壊する」

まるで三つ子のおなじ顔におなじ嘲笑を浮かべて彼らは迫る。

「ドライバーを破壊されれば、お前は仮面ライダーではなくなる」

「その結果、本来お前が救うはずだった多くの人間の命はその力不足

によって失われる」

「目の前のひとりか、将来の多くの人間か。全か、個か」

「父親とおなじ岐路に立ち、お前はどのような選択をする?」

春奈は表情を変えないまま、手にしていた銃を上向きにした。だがその口はわずかに揺れて、涙目に震える少女と、自身の力の源との間を、何度も往復し、さまよっていた。

「春奈」

そんな彼女の背に、翔太郎は声をかけた。

反応は、なかった。

「……信じる春奈!」

翔太郎は、叱咤の念も込めてもう一度、声を張り上げた。

「もうこれ以上、お前の『家族』は、『相棒』はツ、絶対にお前を裏切ったりしねえ! それを今証明してやるよ、俺が、いや俺たちが」

翔太郎は、ジョーカーメモリを手にして前に出ようとする。

「だから、お前らは動くなと言ってるだろ?」

「ついでに言えば、ネクストライドロンが階下に控えていることも把握している」

「というより、塔内部から外へは、その階段を通じてしか侵入できないよう設定してある。それ以外の方法で出ようとすれば、人もモノも破壊されるようにな」

足下に忍ばせていた『伏兵』を見破られ、エイジの表情に動揺がはしる。

『ドルアーガの塔』攻略案のうち、可能性のひとつを破壊されて、翔太郎は舌打ちした。

「チャンスは照井春奈の一発だ。それ以外は認めない」

そして厳粛な審判を、ギルガメッシュは下した。

あとは春奈の判断と銃の腕に、すべてをゆだねるしかないと、冷淡に告げるために。

風が、渦を巻く。唸り始める。

彼らを囲むその音は、泣いているようにも、何かを諫めているようにも、逆に背を押ししているようにも、翔太郎には聞こえていた。



照井春奈の右腕は、その瞬間に震えを止めた。

「おい、春奈」

翔太郎はふたたび声をかけた。

またしても、春奈は反応しない。反応を示さなかったのは、動揺をつづけていたからではない。もはや、反応も動揺も不要だと思ったからだろう。彼女は歩を進める。

どちらかには確実に的中させるだけの距離まで、春奈は進む。

だがそれでも、片方のみを助けることしかできない。けわしい目つきが、それ以上間を詰めることを許さなかった。

選択をくだした瞬間、傲慢の王は無慈悲にどちらかを落とすことだろう。

銃把にかかる指に、力がこもる。

銃口は、右サイドのギルガメツシュに向けられた。

「私の答えに、躊躇はない」

春奈のつぶやきとともに、光弾は発射された。

だが、完全にトリガーを引き切る前、その矛先はスライドし、左のギルガメツシュを狙った。

ドライバーが王の手より弾き飛ばされ、宙に浮きあがる。

と同時に、もうひとりのギルガメツシュの手は、少女を塔外へと放り投げた。

T3 アクセルドライバーは、元の主の手にもどる。少女は……絶叫とともに落下し、耳を衝くような彼女の声は、その途中でプツツリと途絶えた。

そして風は死んだように止み、周囲は薄闇と静寂が支配した。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(18)

その静寂は、塔の中央付近、装置の前に陣取るギルガメッシュによって破られた。

甲高い笑声を、天を衝く光線にも負けない勢いで轟かせ、やがてそれは左右の同胞にも伝播していった。

「ずいぶん思い切りが良いんだなっ！ 人ひとりの命を絶ち切ってまで、父親のような半端者にはなりたくなかったのか!? いやその選択を、否定はしないさ！ 俺たちにとってはただの時間つぶしなんだからなっ」

一度噛いをおさめた彼らは碧眼に愉悦をにじませたまま、今度はおのれらが、春奈に犯した罪を認めさせるがごとく、指を突きつけた。

「だが、結局のところはどうだ！ 人をひとり死にいたらしめておいて、幼い彼女を絶望に堕とし、それでもなお、お前は仮面ライダーであることを捨てきれない。今の行動は、その結末は！ 父親がやったことと同じだぞ！」

よほど、おのれらの趣味嗜好と合致したのだろう。

その座興に対する満悦の表情で、今までにないテンションの高さで、彼らは春奈を糾弾する。

「……春奈……！」

そんな彼女の細い背を、翔太郎は見つめていた。

だが、その『家族』の視線を歯牙にもかけない様子で、春奈は取り戻したドライバーと、銃を手に、ギルガメッシュたちに冷ややかに見つめ返した。

「その通りだ。今、私は父と同じ決断をくださいました。そして、あの夜の結末を、父を、私は決して許しはしない。あれは、まぎれもなく父たちのミスで、厳然たる罪で、私はそれを許さないだけの理由がある。色々と教わったとして、今もそれは変わらない」

ギルガメッシュたちは少しばかり、笑みを引かせた。

彼女の表情に、わずかばかりの違和感をおぼえたらしい。

「だが、その父のことで、ひとつ分かったことがある」

氷の女捜査官は、常のような、いつそふてぶてしいまでの鉄面皮で、黄金の王たちに接していた。

「あの時、父は私たちを見捨てたわけではなかった。後回しにしたわけでもなかった」

ふわり、とうすく額に張り付いていた前髪が持ち上がる。

真紅のジャケットの裾がはためいた。

そよ風が、はつきり肌を通じて自覚できるほどに、強くなっていく。

「そうだ、父は……いや、父も母も、『仲間』かぞくを信じていた」

旋風が、塔の下から吹き抜ける。

その風を操るように、弾丸のように、鋼のマシンが浮上した。

「何イツ!?!」

はじめて、王たちの貌が驚愕にゆがむ。

その彼らを煽るかのように、その機体は制動し、地表に対して垂直に持ち直す。

ハードタービュラー。

赤く伸びた両翼をユニットとして取り付けた、愛機ハードボイルダー形態のうちのひとつ。数十年来の付き合いだ。

その翼に足をかける彼と同じく。

彼……『相棒』フリーリップは、投げ飛ばされた少女を、ケロリとした表情で抱きかかえていた。

(どうやら、今度は上手くいったみてえだな)

少女は青白い顔で気を喪っているが、呼吸は遠目からでもわかったし、身体に目立った外傷も見当たらない。

今まで気取られまいと張りつめていた翔太郎は、安堵の吐息とともに、勝ち誇った表情を浮かべた。

「どういふことだ……ッ! 何故!?!」

という、ようやく出し抜いてやれたギルガメッシュたちの狼狽ぶりが、小気味よかった。

その勝勢に乗じて、今まで流れを見守っていたエイジも前に出た。

「お前が教えてくれたんだ、ギルガメッシュ」

「は？俺たちが……？」

「さっき言っただろ。『警官隊が外を抑えている』って。……でも、よく考えたらおかしいじゃないか。お前の言うように、ここからは外の様子はわからないし、こちらからは出ることもできない。なのに……お前たちはどうやって警官隊の動きを察知していた、って思ったんだ」

そのエイジの推理を引き継ぐ形で、フィリップが空中から話しかけた。

「塔のほとんどが閉鎖されたダンジョンと怪人で構成されている。きみたちが下に降りた気配もない。となればかんたんさ、きみたちが待ち受けているこの屋上エリアだけがテクスチャのみで構成され内外の防壁処理がされていない。このことに、そこの彼は気がついた」

「つまりここなら、外部と連絡がとれるっつーわけだな」

「付け加えるなら、リスクのない侵入も可能というわけさ」

翔太郎は、上着の前を開け放った。

そこにはさつきまでつけていたロストドライバーではなく、それとよく似た次世代機……ダブルドライバーが据えられていた。

そして、フィリップの腹部にもまったく同じ形状のものが複製され、転送されている。

そのドライバーを介して、彼らは互いの意思を疎通させることができた。

「だが……何故ここまで速く動ける!？」

疑問と怒りの入り混じる表情で、誰にともなく吼えた。

その問いに、表情を変えずにフィリップが答えた。

「事前に近くに待機していたに決まっていたからに決まっているだろう。事件の中心に連絡がとれない翔太郎たちがいることは察しがついたら、彼らが内部で何らかの手段で連絡ないし突破の手段を講じてくれると信じていた。だからあえて踏み込まず、じつとこの時を待っていた」

サラリと、だがごく自然に口から出たからこそ、魔少年の「信じて

いた」という言葉には、絶対の力強さがあった。

「あとは、俺がこいつらに合図や指示を出して、てめえらの裏をかいちゃればいい」

そして手には変わらずジョーカーメモリを、『左』で使う『切り札』を、握りしめていた。

——左を狙え。

と、それとなく春奈に伝えるために。

「わかりづらい」

と、当の春奈は低く文句を言った。

「だいたい、左探偵の持つのはどれも左側のメモリではないですか。それで『ジョーカー』を出されても、『切り札』が左にいても解釈できますよ。……まあ、そこまで気を回せる貴方でもないでしょうから、素直に受け取りましたが」

「え？ ああ、そりやそうだなあ悪か……っとうおい！」

毒のある言葉に、一步遅れて翔太郎がツツコミを入れて食って掛かり、険悪さが緩和された両者を見て、フィリップが肩をそびやかさせた。

「……貴様、やってくれたな……」

中央のギルガメツシユはそんな春奈でもフィリップでも翔太郎でもなく、エイジをにらんだ。

シフトネクストというシフトカーをつかんだ彼を。

そして自分たちも、指輪やスイッチ、ソフトを手にし、それぞれのベルトにセットする。

用済みとみなされたか。ゲームエリアがリセットされて、空間や、塔のテクスチャが剥がれ落ちる。

ゲームエリアが解除されたことで自由になったネクストライドロウが、下の階層から飛び出てきた。

フィリップはその後部座席に少女を收容し、自身はハードタービュラーに直立したまま、翔太郎の背後へと回った。

次第にその威容を取り戻していく風都タワー。鈍く銀色に輝くそのシンボルの上で、翔太郎と春奈はメモリを握りしめた。

「元々私、左を撃つつもりでしたよ」

翔太郎の顔を直視せず、春奈はベルトを腰に巻いて言った。

あ？　といぶかしむ彼に対し、涼やかな目を細めた。

「もし落ちるのが人なら、貴方がたならどんなに困難でも、絶対に助けたでしょうから」

いつもと同じ憎まれ口、減らず口、冷えた声音。だがそこにはたしかに、今までなかった……いや、あのクリスマス夜の夜以来無くしていた何かがあった。それを感じて、翔太郎の胸の奥底が燃えた。湧き上がるその熱に突き動かされ

「つたりめーだ！」

と、強く頷き、メモリを押しした。

〈JOKER!〉

〈CYCLONE!〉

相棒の意気に応じるかのように、背後を飛ぶフィリップも、マシンの上で緑色のガイアメモリを押しした。

彼ら風都のヒーローたちは、互いの影を重ね合わせるかのように、メモリを突き出した腕を交差させた。

春奈もまた、見たことのない赤端子のメモリを、だが父と同じキーワードを持つ『A』のメモリを、自身のドライバーへとセットする。

ダブルやアクセルの次世代機。その満を持しての、降臨だった。

〈ACCELER!〉

「START OUR MISSION」

エイジがシフトカーをブレスレット型のデバイスに滑り込ませると、エンジン音が野太く鳴って、不気味な光を放った。

「変身！」

「変身！」

「変、身！」

「変身」

風が轟く。

雷光がうねる。

意識が転送されたフィリップを乗せたハードタービュラーが離脱した後、その場に立っていたのは緑の戦士と、黒の戦士、彼ら若い後

輩に挟まれた、緑と黒のライダーだった。

白いマフラーをなびかせて、黒い半身を傾け、手を回し、二人で一人の仮面ライダーは、三位一体の怪人たちに指を突きつけた。

「さあ！ お前の罪を数えろ！」

第五話・夏の終わりのJoker game!?(19)

Wはもつれ合いながら『獅子』のギルガメッシュと塔の上を駆け抜けていく。

鉄音を放ちながら組みつく彼らは、ほぼ同時に互いの胸部を足裏で強打し、それを助けに距離をとる。

「……ハッ」

それでも翔太郎の変身するジョーカーサイドのWは、不敵な笑声を立てた。

その身を起こしながら、首に絡みつくマフラーを振り払い、触覚のような頭の突起を撫でる。

〈LIBRA ON!〉

ギルガメッシュがスイッチを変える。

手中に精製された錫杖で足場を叩くと、その像が大きくブレて消えた。

気配の消えた敵は、一瞬後にWの背後から現れた。

振りかぶった錫杖を、右手の甲が冷静さとともに的確に受け流す。

それに呼応して、翔太郎の左手が浮き上がった杖の胴を掴む。

〈HEAT! HEAT! JOKER!〉

相手の攻撃と動きを封じたその一瞬の隙に、メモリチェンジをした。

赤く変色したソウルサイドが、消えた白いマフラーに代わり紅蓮渦巻く拳を旋回させて連打を見舞う。

ギルガメッシュは一度退いて、間合いをとると、リーチを活かして得物を突き出した。

〈HEAT! METAL!〉

呼吸を合わせるように、今度は翔太郎の側のメモリを入れ替える。

『闘士の記憶』を引き出したWは、その背に転送した鉄<sup>メタルシヤフト</sup>棒で、突きを受け止めた。

そして互いに、低く跳躍した。

十メートルほどにもなる飛翔のなか、杖と棒とで打ち合い競り合



い、拮抗したまま地面に着地しそのままスリップする。

〈『星』には、『月』で行こうか〉

Wが右目を点滅させながら、理知的にもうひとりの人格へと話しかける。

だが、わざわざ許諾を得ずとも、彼らの意思はすでに統一されていた。

〈LUNA! METAL!〉

鞭のように、空気を裂いてしなりながら機をうかがいわずかな隙を穿ち、杖を取り上げた。

〈ARIES ON〉

だが、その錫杖がスイッチの入れ替えとともに消滅し、代わりにドラムが先端についた図太い杖へと切り替わった。

その重量差と質量差でメタルシャフトを強引にいなすと、その幾何学的な模様を手回ししながら、ドラムでWを殴打した。

重い。だがそれ以上に、奇妙な脱力感が、杖を防いだWの左側を襲った。

「おおっ……なんだか急に頭がクラクラ来やがった」

〈なるほど、生体エネルギーの吸収か〉

自由の効かないボディサイドのメモリを、フィリップの意識を持った右手が取り替える。

〈LUNA! JOKER!〉

Wの四肢が軟体生物のように、しなやかにたわむ。

人間離れたした挙動で伸縮をくり返しながら、黄色い右半身がギルガメッシュの猛攻をいなす。満足に機能しなくなった左側を労わるように間をとる。

〈しっかりしたまえ翔太郎、後輩が見ている〉

右手が左頬を何度か叩くと、「お、お」という声とともに我に返り、今度は自身で青いメモリを手にした。

それに合わせて、ギルガメッシュもまたスイッチを変えた。

〈LUNA! TRIGGER!〉

〈GEMINI ON!〉

ギルガメツシュが道化師のようなグローブを広げると、瓜二つの分身がその背後から現れた。

黄色と青のWは、呼び出した大型銃トリガーマグナムで彼らを狙って引き金を絞った。

蛇行しながらそれをかわすギルガメツシュだったが、光玉の連射は、クレセントムーンのように湾曲しながら、彼らを急追した。そして分身たちに回り込んで背を撃つかたちで、彼らを射抜いた。

〈CANCER! ON!〉

またもギルガメツシュがスイッチを取り換える。

分身は消え、グローブの代わりに右手に現れたのは甲殻類特有の鋏。

ゴツゴツとした質感をもった分厚い鋏が横に薙がれば、風の壁が面となって弾を防ぐ。

一気に距離を詰めるべくギルガメツシュは足を速める。

Wは一度引き金から指を離し、今度は赤いメモリをドライバーの右スロットに換装させた。

〈HEAT! TRIGGER!〉

再び突き出した銃口と、ハンマーのように振り下ろされた甲殻とがかち合う。

ゼロ距離から吐き出された火球の衝撃が、ギルガメツシュに膝をつかせ、後退させた。

〈VIRGO ON〉

赤黒い霧とともに、新たに細身の杖がギルガメツシュの手に現れた。

羽のモジュールのついたそれを大きく振ると、Wとの間の磁場がゆがみ、大きな円形の穴が穿たれた。

タワーを支える鉄骨の破片が、支えを失って崩落する。

Wがそれを避けている間に、白銀の獅子は杖先から生じた渦に、自身を沈ませた。

その口が閉じて、転移した先は風都タワーの風車の上。その羽を落させてWにぶつけるべく、杖をその接合面に叩きつけようとした。

「させッかよー！」

〈CYCLONE! TRIGGER!〉

メモリのチェンジとともに、Wの右半身が緑に戻る。

火力に代わり連射能力と速射性、精度を得たトリガーマグナムが、ギルガメツシユの足下からその杖を撃ち抜いた。

そしてWは手足を駆使してのぼり、みずからも風車の上に立った。すかさず仕掛けられた獅子の攻めをかわしながら、間隙を縫うように再度メモリを交換する。

〈CYCLONE! METAL!〉

メタルシャフトが旋風を絡めとるようにして曲線をえがき、風都の象徴を守護するべく、ギルガメツシユの魔杖を受け止めた。

「これ以上、タワーも、街も、傷つけさせねえ」

渾身の力を込めて押し出した一突は、王の両腕を浮かせた。がら空きになった胴に、蹴りを見舞って突き落とす。

だが、落下するその刹那、

〈SAGITTARIUS! ON!〉

ギルガメツシユは、次のスイッチをベルトにセットしていた。次の武装を左腕に展開していた。

サジタリウス・ゾディアーツを象徴する黒と赤の弓。

魔の矢、アポストロスを射出するための王たらしめる武具。

——その名を『ギルガメツシユ』と言った。

「心中でもしてみるか? どうせ消えるこのタワーとー！」

みずからの名を冠する強弓をつがえて、王はせせら笑う。

〈CYCLONE! JOKER!〉

基礎の姿に立ち戻ったヒーローは、街の象徴のそばにあって、赤い瞳を情義と闘志と、理知と意志とで燦然と輝かせた。

「いいや、消えやしねえ」

〈目に見える形ばかりじゃない。この風都には、託され、受け継がれていく多くの想いがある〉

「ああそうだ……! その想いの風は、これからも俺たちの胸の中で息づいているー！」

〈JOKER!・ MAXIMUMDRIVE!〉

ジョーカーメモリを叩き込まれたマキシマムスロットが決着を誓う音を鳴らす。

マフラーが蒼天の下ではためき、呼び起された風がWの身体を宙へと浮かび上がらせた。

それに共鳴するかのように、風車が回る。

軋み声をあげる。

それは、有終の美を貫こうとする風都タワーの咆哮だったのか。

あるいは、街の新たな息吹や産声か。

〈SAGITTARIUS!・ LIMIT BREAK!〉

ギルガメツシュがレバーの操作とともに矢を射放つ。

神々の火箭にも似たその一射は、彼の方に向かったWの正中線を貫通し、その肉体を真っ二つに割るはずだった。

——だがそれより一瞬前に、Wの身体が、割れた。

ギルガメツシュの矢は、黄色い断面図の間を素通りした。

「ジョーカーエクストリーム!」

みずからが二本一対の矢と化したWは、そのまま白銀の獅子王を射抜き返したのだった。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(20)

上空で咲いた大輪の火の花の下、エイジは身を低めて駆けた。

足場に肘がすれるほどに屈した不安定な姿勢のまま、ドリフトのような甲高い異音を脚部から響かせて。

金網の上で、互いの側背を狙うかのように円弧を描きながら、『魔法使い』のギルガメッシュと激戦を繰り広げていた。

エイジのブレイドガンナーと、ギルガメッシュのダイスのような装飾のついた剣が刃鳴り散らす。

押し合い、引いて隙を誘い合い、そんな駆け引きもふくめて拮抗していた。

一度はげしくぶつかり合ってから、それぞれの立ち位置を入れ替えて、もう一度ふたりの仮面ライダーの影は交錯する。

その鏝迫り合いのさなか、ギルガメッシュは空いた片手に、青の宝飾のついた指輪が自動的に転送された。

「ッー」

エイジは新手の奇手を警戒し、飛びのく。

そこに乗じる形で、ギルガメッシュはベルトの側面に指輪を重ね合わせて回した。

〈GOー ドツドツドツドツ、ドルフィーー!〉

という音声とともに、肩のローブが青く変色する。

だが、その姿を保っていたのはほんの一瞬。彼の姿は次には液状となって溶け、金網の隙間からこぼれ落ちていった。

姿をくらましたギルガメッシュの姿を、ダークドライブはそのモニター越しに追った。

だが、熱源を視界の片隅に感知した直後、エイジの胸部と脚部に鋭い連撃が見舞われた。

足下からせり上がってきた液体がふたたびギルガメッシュの体を成し、手にしたサーベルを振りかざしたのだ。

不意を衝かれ、遅れをとったエイジが火花を散らしながら思う存分になぶられた後で体勢を整えた時には、ふたたび液状化してギルガ

メッシュは金網の下に潜伏した後だった。

だがしかし、エイジもまた、飛び退いた時にはすでに、次の手を用意していた。

黒と緑の、特殊技能専用のシフトカーがシフトブレスに入り込んでいる。

〈NEXT BUILDER!〉

AIの音声を聞きつけると、人質を解放して自由の身になったネクストライドロンが唸りながら天を舞う。

そのホイールかた生成されたタイヤが、袈裟掛けにダークドライブのボディと結合する。

それによって視覚システムを重点に機能が拡張される。

微細な物音や、大気の乱れ。それらを視野に反映され、逐次情報がアップロードされ続けるなかで、エイジは自身の意識をクールに、可能な限り無我の境地に持っていき、自動操縦に身をゆだねた。

ブレイドガンナーが射撃モードに移行する。

ここまでの攻撃、思考のパターンをふくめた演算によれば、次の方は北北西。刺突による牽制からの連続攻撃。

次の実体化まで三、二、一……

エイジの上部が制動されてわずかに左に傾く。銃口が背面に向けられる。引き金に力を込める。

射出された光弾が、背後から突きかかったギルガメッシュのボディを撃ち抜いた。

もんどりうつギルガメッシュは、その反動で空中で側転しながらも、器用に指輪を移し替える。

〈GO! カカ、カッカカ! カメレオー!〉

ギルガメッシュのマントが、あざやかなエメラルドの色と質感を持つ。それを風を混ぜ返すようにひるがえすと、再び彼の影は姿を消した。

ふたたび液体へ変化し移動、いや光の屈折率を変動させたことによる透過か。

そう見切ったエイジは、ブレイドガンナーの把手を自身の額に押し

当て、集中した。

わずかに背後の金網がきしむ。

撃った。何もないはずの虚空で光が爆ぜたが、姿は見せなかった。ふたたび気配が消える。風車を中心に渦巻く風音に、濁りのようなものが混ざった。真正面。二、一……発射する。

至近でブレイドガンナーから放出された光の塊は破碎音とともに、透明化していたギルガメツシュの胸部で炸裂した。

吹っ飛ぶ彼は、鋭く伸びた十本の爪を支えに持ちこたえた。

その手に赤く宝玉が閃く。ギルガメツシュは、その輝きを帯びた指輪を、右腰のアタッチメントに読み取らせた。ひととき大きく光るその魔法石が、マントを同色へと染め上げる。

〈GO！バツバ、ババババツファア！〉

ギルガメツシュの包む空気が、硬く、重く、力強いものへと変ずる。ぐんと増したその重量が、そのポイントに彼を固定させた。

自身の立ち位置を確立した獣の王は、左腰に別の指輪を当てた。

〈GO！キックストライク！バツファアミックス！〉

そしてエイジもまた、ブレイドガンナーを逆手に持ち替え、迎撃の構えをとった。

〈BUILDER！〉

ベルトのキーをひねり、シフトブレスにタッチすれば、クリムを真似た音声が決着の時を告げる。

モニターに反映されきれなくなった情報の奔流が、外部にもウインドウとして展開された。

地面を踏み抜かんばかりに、ギルガメツシュは駆け出した。

猛牛の気をまとった爪先が、いくつもの空気の塊を突き破りながらエイジへと迫る。

その速度を超える複雑な演算が、ドライブのシステム内で行われていく。勝利の法則を決定づけていく。

そしてそれは、シンプルな剣の軌道<sup>コース</sup>として視野に刻み込まれた。

エイジは駆けた。

力強い踏み込みとともに浮き上がる。すぐ目の前には分厚い鎧の

ような気配。だが突き出された足の向こう側、右胸のあたりに、力の集中によってわずかにそのエネルギーが薄まった場所があった。

逆手に持ったままの剣刃がひとりでに吸い込まれていくように、ギルガメツシユの胸を払う。

ギルファアメツシユの胸部、裂傷を負ったあたりで火が散り、熱が膨らみ始める。

だが、その個体が死にゆく間際となっても、王は不敵に笑い続ける。「まあそろそろだからな。今回は……赦してやる」

爆散する直前、すれ違いざまにこぼした言葉が、ダークドライブの聴覚を介してエイジに伝わる。

その奇妙な言い回しは、エイジの意識に違和感としてこびりついたのであった。



## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(21)

互いの頭の高さまで上げた爪先が、T3アクセルとギルガメッシュ、それぞれの眼前をかすめた。

上段回し蹴りによる牽制の後、その身をおおきく旋回させて身体を整える。

その回転の勢いに乗って、UFOガジェットとガシャコンシールドが彼らの手から離れた。

二枚の『円盤』は、暗黙の主人の命に従い、互いを撃墜すべく、ふたりの仮面ライダーの狭間で、風を切つてドッグファイトのごとき空中戦を展開する。

それをよそに黄金の騎士と深緑の戦士もまた、肉弾戦をくり広げていた。

天賦の才能にして、練磨の集積。その下地をもとに卓越した春奈の戦闘技術を、ここまで溜めこまされていた鬱屈が鋭く磨き上げていた。

左手でギルガメッシュの攻勢をいなし、真っ向から防ぎ止める。あるいは牽制として連打する。

その時々によってそれらを虚実織り交ぜ使い分けながら、王を翻弄する。

もう一機のUFOガジェットをはめた右拳が、矢弾のような連打とともに、正確に、ことごとくギルガメッシュの反攻の芽をつぶし、強引にこじ開けた隙を穿つ形で、剛槍のごときストレートがその胸部を叩き、そこに表示されたゲージを摩滅させていく。

かろうじて残っていたエナジーアイテムを取り込むべく、ギルガメッシュの手がその背後へと伸びた。

「させるか」

銀光をはなつガイアメモリの端子を、春奈はみずからの右手に装填した。

〈ZONE! MAXIMUMDRIVE!〉

ギルガメッシュの指先が触れる直前、その巨大化されたメダル群は

その腕をすり抜け、右手をおおきく天へと突き出した春奈の頭上へと広がっていった。

「言われたばかりだろう。遊びは、終わりだ」と

対峙する王と勝るとも劣らぬ尊大な物言いとともに、春奈は手を真一文字に切った。

あらぬ方向へメダルが散らばる。能力の底上げの手段を喪った彼は、そのまま迷わずアクセルへと突撃した。

互いを弾き飛ばした円盤は、鉄音を立てて地面に落下した。距離を詰め合いながら春菜とギルガメッシュはそれら己の武具を拾い上げた。

〈ガシャコンソード〉

虚空の中から引き抜いた、ボタンのついた両刃剣。盾で春奈の視界を塞ぎながら、ギルガメッシュは迫ってくる。

だが、彼がいかな変幻自在の太刀筋をえがくつもりでいようとも、春奈は次にとるべき手を決めていた。

〈ARMS！〉

〈ARROW！〉

〈ACCEL！ ADVANCED SYSTEM……ACCESS！〉

体の両サイドに固定されたUFOガジェットが、そして一度春奈の腹から取り外されたバックルが、装填された三種のガイアメモリを読み上げる。

春奈からパージされたアクセルの装甲が、分解されながら空中に散らばった。

自分に向かってくるそれらを打ち払いながら、なおギルガメッシュは前進を止めない。彼女のとった行動は、ギルガメッシュにとっても予測していたことだった。

ゆえに、なお間を詰める。強化されるよりも先に、無防備になった春奈を一撃で仕留めるべく。

だが、何千回とも錬磨した照井春奈の挙動と、一秒でも処理を短縮しようとチューニングされたドライバー自身の性能は、ギルガメツ

シユの見積もりを上回っていた。

「超、変、身」

装甲の破片が反転する。色が暗緑から紅へと一転する。バックルが逆転し、それらは再び春奈へと吸い付く。

ベルトの色や模様が変じ、突き出た角が角獣のごとく天を衝く。

T3アクセル改めトリプルAとなった春奈は、真っ向からギルガメツシユの斬撃を受け止めた。

高密度のアーマーが、衝撃の一切を吸い尽くす。

単純なスペック差で、その剣把を掴んで押し返す。

ギルガメツシユの側頭部に、春奈は強烈なフックが何発も叩き込んだ。

のけぞるギルガメツシユに正拳を突き出したが、それは盾に防がれた。

「なるほど、やはり手ごわい……だが、どんな力と技を持っていても、いずれお前にも、選択と挫折の時が来る」

「来るはずがない。貴様は千里眼を持つ神などではないことが今回の一件でわかった。タネさえなければ、その予言に意味などない」

アクセルは、止められたままの腕をさらに前へと押し出した。残響の尾を引かせながらも、衝撃で黄金騎士は盾をたずさえたままに後退する。

〈ARMS ACCEL!〉

春奈は追撃を仕掛けることなく、右手に重装甲のボウガン型ユニットであるアクシズAを転送した。

「いいや、これはな……経験談からもとづく言葉さ」

〈1・2・3・4・5・6! 6・バリア!〉

不気味なまでの余裕とともに、王は自身の前に幾重にも障壁を展開する。

その奥で、自らの腰から抜き放ったガシヤットを、その剣へと突き刺した。

〈タワー・オブ・クリティカルフィニッシュ!〉

その銀刃に、毒々しい色の手のようなものが何本もまとわりつく。

腰を低く落とし、狙うは春奈が力を尽くして眼前の障壁を破壊しきつたその瞬間。その消耗の瞬間を討つ。

おおかた、考えているのはそんなところだろう。春奈はそう見切りをつけつつアクセルメモリをアクセイズAへと装填した。

ACCCEL! MAXIMUMDRIVE!<

力が、両手で握りしめたアクセイズAの発射口から放射された。

——否。それは一筋の力の塊のように見えるが、無数の弾丸の集合体だった。

反動で自身が後ろへ、塔の端へと下がっていくのも厭わず、彼女は奥歯を噛みしめ、感覚のない指をトリガーに押し込みつづけた。

それらは瞬く間に六層の壁を穿ち、破碎していった。

光弾たちはそこそ機関銃のように、その数の優位を崩すことなく突き進み、その万全の陣の奥で必殺の構えをとっていた王の身体を削っていく。

「絶望がお前のゴールだ」

黄金の身体を削り取られて行きながら、それでもなお、傲岸な暴君は嗤う。春奈を嗤いつづける。

「愉しみだよ、照井春奈。遠からず来るであろうその時、お前は……おのれの罪と……どう向き合うのかな……?」

その哄笑に、ノイズが混じる。崩壊しつつある声帯機能もろともに、ギルガメツシユの肉体は弾威によって塔の外へと押し出され、そのまま爆散した。

「……………私に、質問をするな」

——こうして、平和を取り戻した街をふたたび震撼せしめた三人の魔人は、撲滅された。

ただし、若い仮面ライダーたちに、呪詛にも似た耳障りのする嘲笑を遺して。

## 第五話・夏の終わりの Joker game!?(22)

「——いや、遠いところをわざわざすみません……何しろ、ゲーム病関連の患者なんてここのところまったく見なかったので、専門の設備もスタッフも……」

「とんでもない。むしろ、よく報せてくれました。ゲーム病とどこまでも向き合うこと。それが、あの事件に関わった我々の使命ですから」

「そーそー！ まあ今のところ発症者はいないみたいですから、簡単な検査だけで大丈夫ですって！ ねー？」

「黙ってる。てか、なんでテメエまでついてきてんだ!? とつとつアメリカに帰れ」

「はあく？ 久々に臨時でバイトしに来てやってんのに、なにその態度!? それが主治医のセリフ!?!」

——そんな、到底病院内とは思えないやかましい丁々発止のやりとりは、風都署の長の眼で覺まさせた。

見上げれば病室の天井があり、自身はやや柔らかさに欠けるベッドに横たわらされている。

その男、照井竜はその個室でふう、と息をついた。  
まさか、入院までするとは思わなかった。

運ばれた原因としてはぎっくり腰だったが、やはり長年の無理が積もりに積もっていたらしく、ありとあらゆる部位にガタが来ていたようだった。

検査と、大事をとっての安静を強いられ、何をすることもできずに寝かされれば、気が付けば病院の雰囲気当てられて本当に眠りについていた。

(そんな今の俺の姿は、かつてでは考えられなかったことだな)

もちろん、肉体的な衰えというのものもある。往年の照井であれば、たとえ全身を焼かれようとも這って出て事件に当たり、終わった後には悠然と探偵事務所でコーヒーでも淹れて飲んでいたことだろう。

しかし、それ以上にたとえどれほど寝たくとも、悪夢やトラウマ、身を焦がすほどの復讐心が自身を安寧の中に置くことを禁じた。

——特に、『医者』に身や心を許すことなど、決してなかったはずだ。戦士としては許されざる姿だ。だがそこに、たしかに幸福めいた感情や誇りのようなものを抱いているのだった。

「お目覚めかい？」

ふいに、幼い響きを残す声が聞こえた。

ふと目を病室の片隅に遣れば、仲間の魔少年然とした男が、白紙の本をめくっていた。

「フィリップか。なにやら人の出入りが激しかったが、何かあったのか？」

「ああ、ありはしたが、無事解決したよ。だから今は、気兼ねなく寝ているといいさ」

フィリップは何も書かれていないページに目を落としたまま、ナチュラルな調子で応じた。そこには彼らしからぬ気遣いのようなものを感じさせたが、ウソのようなものは見受けられない。だから、あえて追及はしないことにした。

「それに、ここからならよく見える」

見舞い客はそう言って、窓のほうへと視線を投げた。

その少年の横顔を、グリーンの輝きが包み込んだ。

爆発には違いなかったが、その光は柔らかで、穏やかだ。

それは、今夜予定されていた風都タワーの花火大会のものだった。

「ちよつとアクシデントは起こってね。予定がくり上がった。だが中止にはならなかった」

「……たくましいな。この街の住人たちは」

「変わらないのさ」

かすかに微笑んで、フィリップは言った。自分と出会ったころよりは表情豊かになったし、落ち着きもある。だが、その顔つきは変わらない。

フィリップは二度死んでいる。一度目は幼少期、園崎来人として。二度目は、姉若菜わかに取り込まれ、そして強引に分離した結果。

その後肉体は家族としての情を取り戻した若菜によって再構築されたが、やはりそれは、純粋な人間の肉体ではない。

本人いわく、

「その気になれば加齢も設定できるが、ぼくは外に出歩くタイプではないから、こちらのほうが都合が良い」

とのことだったが。

うらやましい、とは口が裂けても言えることではない。

そこには、彼自身にしかわからない悲哀や宿命があるはずなのだから。

先ほど漏れ聞こえた『ゲーム病』という名も、人間がデータとしてプロトガシャットなる記録媒体レコーディングメディアに保管されるという奇病だったはずだ。治療はほぼ終わっているが、老化や死から解放されたと喜ぶ声もある一方、ふつうの人間として生きられなくなったという嘆きも聞かえてくる。

その老いない魔少年からふと視線をそらすと、その手元に花瓶があった。ふと、その姿に違和感をおぼえる。睡眠に突入する前の記憶がたしかならば、その瓶は空だったはずだ。なのに、そこには、みずみずしく大ぶりの若い真つ白なバラと、それを引き立てる青いカンパニユラが咲いていた。

「……すまんな、わざわざこんなものまで」

それを活けたのがフィリップだと見越して、照井は素直に礼を言った。

だが当の本人は、首を振って否定した。

「……とすると、左か？ それとも……」

と、何人かの名を思いつくかぎりで挙げてみるが、フィリップはすこし意地悪げに口端を吊り上げるだけで、正解とは言わない。

そもそも自分と親しい知人というと、揃いも揃って騒がしい連中か、花を持ってくるなどという発想のない人間ばかりだ。そんな相手の中で熟睡できるほどまでは、平和ボケしていないはずだ。

照井は入り口がかすかに空いていることに気が付いた。

つい先ほどまで、誰かいたかのように。照井本人とは、直接顔を合

わせたくなって、それで目覚める気配を感じ取ってあわてて出ていったかのように。

「そうか」

それだけ、照井はつぶやいた。

ただそれだけで、戦友には自分が理解したと伝えるには十分だった。

今のところはそれだけで、花をくれた彼女に対する想いを、噛みしめることができた。

夕日が沈みかけた夜空でも、満開の花がおおきく広がっていた。



## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(23)

(今年の夏はもう花火なんて見られないと覚悟していたけれど、意外なところでギリギリ見られたな)

風都タワーの根元からすこし離れた場所にある、噴水公園。

そこで、エイジは奇妙な感慨とともに、暮色濃厚な夜空を見上げ、打ち上げられる花火の豪華な輝きを、顔面に浴びた。

風都タワーの影がその明滅のたびに浮き彫りになるが、その高くそびえ立つ雄姿は邪魔にはならず、むしろ自分たちがそれを護ったことを思えば、誇りたい気分さえなれる。

欲を言えば素敵なガールフレンドとともに見たい光景だったが、残念ながら隣にいるのは二枚目半の探偵だ。

「お前には、いろいろと世話になっちまったな、エイジ」

その彼、左翔太郎は、夜景を見上げたままおもむろに口を開いた。

「春奈のことでも、苦勞をかけたみたいだしな」

とんでもないと、エイジは首を振った。

謙遜ではなかった。またも自分は、何もできなかった。サポートはしたものの、この事件自体が自分たちの不手際が呼び込んだようなものだったし、春奈の葛藤は彼女自身が乗り越えたようなものだ。

ギルガメッシュの残したマシンは鹵獲こそしたものの、その内部のデータはすでに回収されていて、なんのデータも残ってはいなかった。翔太郎の相棒の見たところ、それは街に害をおよぼす代物ではなく、この街を座標として、何かを探查するものだったらしい。

(ほんとうに、僕は何もできちゃいない)

とは言え過度な遠慮は、話をややこしくさせるだけだ。

多少の後ろめたさは残しつつ、エイジはその礼を無言で受け取った。

「……これで、少しは親子仲も改善されるといいんですけどね」

「まっ、心配いらねーだろ。ただ不器用なだけなんだよ、あいつらは。いつか解決するさ」

「そうなれば天国のお母さんも、報われるでしょうね」

ドン、と音と光が夜空で爆ぜる。

「……………あ？ 天国？」

翔太郎が怪訝そうな顔で、一拍子間を置いてからエイジを見つめた。

「え？ だって、照井さんのお母さんってもう…………」

花火のせいで完全に聞き取れなかったか。そう思ったエイジは改めて説明した。

しかし探偵は、すこし気の抜けた表情で首をかしげるばかりだ。

「…………いや、天国って…………亜樹アイツ子が今いるのは」

——なにか、根本的などころで彼と自分の認識は食い違っている。違和感と、話題それ自体の重さのせいでしどろもどろになりながら、エイジはそんな感触をおぼえた。

「やーっと着いた！ 帰って来たー！」

そんな瞬間、花火にも負けないくらい大きな声が轟いた。

周囲に一切はばかることのない大声量にエイジが振り返ると、そこにひとりの女性が立っていた。

「いやー、やっぱ古傷には湯治だわトウジ！ おかげでお肌もピチピチ！ 十代に若返ったみたい！ 竜くんも仕事休んで来ればよかったのに」

少し流行から外れたセンスの服装の、大きな声に反して小柄で華奢な背の女性。後ろ髪を団子状に結び、顔つき自体は幼いが、ひよつとしたら見た目よりも歳はいつているのかもしれない。そんな気がした。

土産や旅荷らしきカバンや紙袋をパワフルに提げていた彼女は、それらを地面にドスンと落とす。

ちらりと半袖からのぞいた二の腕には、だいぶ昔のものとおぼし

き、一筋の長い傷痕が見え隠れしていた。

「おう、なんだもう帰って来たのか？」

そんな彼女と翔太郎は知り合いらしく、馴れた調子で言って彼は歩み寄った。

ところが、

「あぁーッ!？」

その翔太郎を突き飛ばして、女性は甲高いんだか野太いんだか形容しがたい奇声をあげて、花火を食いつくように見上げた。

それからすぐにきびすを返して、自分が突き飛ばした相手へと詰め寄り、夜空を指さした。

「翔太郎君、なんでもう花火上がってんの!? せつかく間に合うように急いで帰って来たのにッ」

当人に、相手を突き飛ばした自覚などなさそうだった。恨みごとのひとつも言えず、やり場のない怒りをこらえるように、翔太郎は帽子を頭の上から押さえつけた。

「……ツたくお気楽なヤツだな! こっちはいろいろ大変だったんだぞ!? 敵は出るわ、春奈は帰ってくるわ照井はぎっくり腰になるわ!

……あだっ!？」

女性の早口に引きずられるかたちでまくしたてていた翔太郎だったが、その頭で快音が響く。女性がどこからともなく持ち出し、探偵の帽子をはたいしたのは、緑色のスリッパだった。

——そして、エイジにとってもどこかで見覚えのあるデザインのものであった。

「つてエな!! いきなり何しやがる!？」

「そ・れ・を・早く言わんかい!？」

スリッパを握りしめながら、アゴを突き出すようにして目をいからせ、大阪弁ですごむ。その怒りはとてつもなく理不尽なものだったが、翔太郎やエイジに有無を言わせない力強さがあった。

だが次の瞬間、勇ましく表情を作り変えて、まるで演劇のように明後日の方向を向いて、スリッパを構えた。

「こーしちゃいられないわ! 待っててね春奈、竜くん! 良妻賢母

が、今帰ってきたからね！」

ほりやー！ ……などという、少々間の抜けた掛け声とともに、嵐のごとく彼女は走り去っていった。

「おーい！ もう良妻賢母って歳でもないだろうが！」

翔太郎が遠のく背に余計なことを言ったが、戻ってくる気配はなかった。

やれやれとため息をつく彼の横で、その勢いに圧倒されて啞然としていたエイジだったが、

「……今のつて、まさか……」

と、彼女の素性を漫才のようなやりとりから察して自分の思い違いを悟り、そして頬をひきつらせた。

「……ま、そーいうこつた」

そんな青年を気の毒そうに見つめ返した探偵は肩に手を置いた。

彼を慰めるように、風都の空に、大輪の華が音とともに開いたのだった。

「——じゃあ、もう行きます」

まるで悪夢でも見ているような心地なのだろう。泊エイジは、心労を隠さない、低いトーンでそう告げてきた。

「おう。ほんとに、いろいろとありがとうな。今度困った時は、遠慮なく言ってくれ。この借りは返すぜ」

でも、と青年は逡巡する気配を見せた。

翔太郎は、そんな迷える後輩を見て、くすぐったげに笑った。

そしてエイジに、指を伸ばした左手を差し出さし切り返した。

「『ライダーは助け合いでしょ』……つてな」

それは、かつて助けてくれた仲間になわれ、その彼が困ったときには、受けた恩とともに返した、仮面ライダーの心構えだった。

彼もまた青年や自分と同じく仮面ライダーで、そして青年と同じ

……

個人的な事情や感情まではわからなかっただろうが、泊エイジの表情からは、多少の気おくれは除けたようだった。

ほかからかて無垢な笑顔をたたえて、「ハイ」と気持ちよく返事をしてくれる。

その身を切り返し走り去っていく。

「またいつでも戻って来い！ 今度こそ本当に風都の案内してやるよっ！」

その若さにほほえましさを覚えつつ、翔太郎は新たな後輩に、最大級の親愛を示してみせた。

足音が遠のいていく。と同時に、花火が打ち上がる回数は少なく、間隔も長くなりつつあった。もうそろそろ、大会もファイナーレに近いのだろう。

「……さて」

と、あらためて翔太郎は周囲を見返した。噴水公園にいるのは彼ひとりだが、その背には、山のように盛られた旅荷たちが散乱していた。

「ったくあのバカ、肝心なもの置き忘れていきやがって」

毒を吐きながらも、彼はそれらを自分たちの事務所へと運ぶべくひとつにまとめ始めた。

「んっ、結構重いなコイツ。よっ、と……！」

その中でも最大級の大きさであるキャリアケースを、翔太郎は両手で抱えて持ち上げた。

だが、その大きさをゆえに背をそらしてのけぞった時、腰に不自然な負荷がかかった。

「うおおああああ!？」

腰を起点に激痛がおとぼしり、電流のごとく翔太郎の総身を駆け巡った。

たまらず断末魔をあげた。だが、その声がかえってさらな苦痛を招き、翔太郎はそつとバッグを地面に倒して前のめりに突っ伏した。

「ああー……ああー……うお」

反射的に抑えた腰からは、シグナルのように痛みが強弱をつけて寄せては引く。

言葉どころか呼吸さえまならない状況。

だが不幸にも、花火のベストな見物場所とは言い難いこの場所では、通行人と都合よく望みは薄かった。

ゆえにあえて痛みをこらえて、まだ近くにいるであろう彼に、必死に呼びかけるほかなかった。

「戻って来い！ やっぱ今すぐ戻ってこオオイッ！」

しかし、半熟の探偵の悲痛な叫びは、周囲にあるオブジェの風車を、むなしく空転させるだけだった。

## 第五話・夏の終わりのJoker game!?(24)

打ち上げ花火もファイナーレを迎える中、病院帰りの春奈は泊エイジと再会した。

公園につながる階段で自、分を待つ体で座っていた彼は恨めしげに見上げた。

「照井さんの言い方のせいで、赤っ恥かいたよ」

などと憎まれ口を叩きながら腰を持ち上げる。

何のことかと春奈は思ったが、そんな彼女に「ほらお母さんのこと」とエイジは補足した。

「死んでるのかと思ったじゃないか」

ああ、と春奈は理解を示した。

「勝手に勘違いするほうが悪い」

だが、おのれの非を認める気にはなれなかった。

「それに、結果的に母が生きていたからと言って、父を許せる理由とはなりえない」

一歩間違えれば、自分を含めて本当に死んでいたかもしれない。

事実、落下死はまぬがれたとしても、母の腕にはその時負った傷痕が残ったままだ。

そして認めがたいが、自分の記憶と心にも、未だ……

たとえそれが、ほかの誰かの生命を助けるためだったとしても。

たとえそれが、到底秤にかけられないような二択だったとしても。

エイジはふうん、と声に出して相槌を打った。

そっけないそぶりだが、その眼の色には同情があった。そしてそれを安易に口にしない気遣いが感じられた。

「……君にも」

「え?」

「今回の件で、世話をかけたようだな」

きつとこの謝意は、自分には到底不似合いなものだったのだろう。

わずかばかり大きく目を見開いた彼は、はにかみを見せながらうつむいた。

そんな少年の面影を残す反応に、春奈はフ、と胸中にこそばゆげな苦笑を漏らした。

今にして思えば……そして本人にもその自覚はないだろうが、この泊エイジの存在が、いくばくか気を軽くしている、ように思える。

ときには呑気すぎるきらいもあるし、かと思えば臍腑を射貫くかのような正論をぶつけられることもあるが、それらがかえって、春奈の心を救っていた。彼がいなくば、きっと自分は任務の重圧や他者との軋轢、自身の能力とT3アクセルの機能に慢心し、身をほろぼしていただろう。

「……ありがとう」

その言葉はあえて、花火の光と音の中へとまぎれ込ませた。

「え？　なんだって？」

「正体を隠してる君に親子どうこう言われたくない、と言った」

聞き返したエイジに対して表情を変えずに答え、春奈は階段を下り始めた。

「絶対ウソだ。もつと短かった。つていうか、今度会ったらちゃんと話すよ」

ムキになって自分を追い越そうとするエイジに道を譲ってやり、ちよつとしたいたずら心から薄い笑い声をその背にぶつけた。

振り返って突つかかってくると予想していた春奈だったが、現実はその彼女の予想を裏切った。

エイジに反応はない。ただ、視線を眼下に向けられたまま、指の本まで凍り付いたかのように、青年は硬直していた。

階下で腕組しながら立っている長身の男には、春奈も憶えがある。前に会ったのは同じく、階段でのことだった。

「……父さん」

呼気と語気とを震わせながら、エイジは喉から声を絞り出した。

暑ささえ忘れそうな鋭く冷たく、激しい怒りを秘めた目つきで、その男、泊進ノ介は我が子を睨み上げていた。

青年の夏の終わりを告げるかのように、最後に一発、大輪の花火が



開いて消える。

そして、色濃い闇が彼らのいる空間を閉ざしたのだった。

## 第六話：Dark Night (1)

車内は、沈黙と薄闇につつまれていた。

風都に現れた父、泊進ノ介は「乗れ」と促したきり何も喋らず、今まで見たことのないようなけわしい表情でハンドルを握る。

助手席に座らされたエイジ自身はそんな彼の不機嫌な顔色をうかがいつつも、その理由はいくつも思い当たり、あえてヤブヘビとまらないよう自分からは詮索しない。

部外者の春奈は何故か後部座席で腕組み脚組み、何食わぬ顔で同乗しているが、元々の性格からして多弁なタイプではない。

さながら護送車に詰め込まれた囚人か、パトカーによって連行される犯人のような心地だった。

そうして連れていかれた先は、警察署……ではなく、その管轄にあたる久留間ドライビングスクールの一角。

決して一般人が立ち寄らないであろうその場所は、進之介たちの古巣であり、今のエイジの拠点でもある。

すでにそこには、見覚えのあるかつての特状課の面々が沈痛な面持ちで集まっていた。

母霧子もまた張りつめた顔で我が子を見つめ、その弟の詩島剛は、ソファにもたれかかりながら、逆に心配げに甥を注視していた。その隣には、同じような表情でさらに西城究さいじょうきゅうが並んでいる。

追田現八郎もまた角張った強面をさらにけわしいものとしていて、時折鋭い視線をクッションを抱いて委縮する妻へと向けていた。そのりんなは肩をすぼめるばかりだ。

彼らの視線がエイジへと一極化した次の瞬間、父はようやくリアクションを見せた。そしてその反応は、今まで感情を抑制していた分の激烈だった。

「いったい何をしてるんだ、お前ッ！」

にわかにエイジの胸倉をつかむと、息ができなくなるほどに強く絞り上げて、壁へと叩きつけた。

「言ったよな？ 母さんの近くにいて安心させてやれって……なのに

なんで、よりにもよってダークドライブになって、事件の渦中に飛び込んでる?」

やはり、父の激怒し、それを受けたらしい皆が集まった原因はそこにあつた。自分が隠した秘密のなかで、もつとも言いたくなかつたこと。と同時に、自分の口から告白しなければと思つていたこと。だが、よりにもよってこんな最悪のタイミングでなくても良いはずだ。

落ち着け、とエイジは自身に念じた。まだ、確認まではつかんでいない。変身やその解除の瞬間を、父やその関係者、マスコミには目撃された自覚はない。りんなも問い詰められてはいるだろうが、ああ見えて口の軽いほうではない。つまり、まだ確信が持てないからこそ、父はあえて厳しく詰問しているのだ。つまりこれは、ブラフでしかない。

そう推察したエイジは、この場合は韜晦することにした。

「なんの、こと……? まさか、例の黒いライダーがまさか僕だつて……? いくらあれがドライブに似てたつて、さ……息子が変身してるつていうのは安直じゃ」

その遁辞を遮るかのように、一度引いた進ノ介の腕が、ふたたびエイジを壁に押し当てた。

「いまさらそんなウソが通じるかッ! ダークドライブはお前しか変身できないつて知つてるだろ!」

え、と声が漏れた。

りんなが父の名を切羽詰まった声で呼ぶ。

だが激昂した進ノ介は、両者の反応など耳目に入らないかのように、その事実を口にした。

「元々あれは、別のお前が使つてたんだからな!」

しん、と場が静まり返つた。

親子の、息遣いだけが聞こえてきた。

ただ目を見開くばかりのエイジが、影として父の瞳に映り込む。

そんな我が子の反応に、今度は進ノ介が虚を突かれる番だつた。

「……まさか、知らなかったのか？」

そんな父の背越しに、りんなは額に手をやって天井を仰ぎ見ている。

「——どういうこと？ りんなさん」

父を飛び越えてそう問う声は、エイジ自身が驚くほどに低く冷たく、そして虚ろだった。

口を真一文字に結んでいた彼女は、やがて重たげに答えた。

「だって、フツ―は察しがつくだろうし……そのうち自分で答えに行き着くかなーとか思ってるうちにこうなっちゃったし、だから、その………ごめんなさい」

バツが悪そうにつぶやいていた彼女だったが、その事実が青年にとって重要なウエイトを占めていることを、表情から読み取ったのだろう。神妙な面持ちで、頭を下げた。

だがりんなの黙秘を責めることはできなかった。

彼女の言うとおり、それはエイジ自身が悟ることだったし、そのことを考えられる材料や機会は今までの戦いでいくらでもあった。あるいは無意識のうちに、そこから目を背けていたのかもしれない。

「今まで何もなかった自分が、運命的にシフトカーに戦士として選ばれた」

そのことを、精神的な支柱として戦ってきた彼を、根底から揺さぶることだったからこそ。

内外ともに静止した青年に、落ち着きを取り戻した父が頷いて見せた。

「……ダークドライブの元の装着者は、かつての、この未来になる前の、お前自身だ。エイジ」

エイジは自分の心底で、何かが崩れ去る音を聞いた気がした。

## 第六話：Dark Night (2)

場は、暗い空気に包まれていた。

だが、進ノ介の突拍子もない発言の後にも関わらず、驚嘆の色は意外なほどに少なかった。

特状課の面々は当然知っている、と言わんばかりの沈痛な面持ちでいる。むしろ、エイジに対する憐憫の情や気まずさを滲ませている。完全なる部外者である春奈の眉根も微動こそすれ、憶測の範囲内であつたらしく、驚きはない。

——つまり、道化はこの場で当の自分だということだ。

総身を強張らせるエイジをまっすぐに見つめていた進ノ介だったが、りんなへと目と無言の疑問を投げかけた。

付き合いの長さに裏打ちされた、直接的な言葉に頼らない疎通。その後で、父はゆっくりと切り出した。

「二十年前、未来からの使者……に化けたロイミュード、108が現れ、ベルトを悪用。永遠のグローバルフリーズを引き起こそうとした。そこまでは、りんなさんから聞いているな？」

エイジは答えなかった。答えられなかった。だが、その言語化できないシヨックの深さこそが、何よりの肯定のサインだった。

「そのコピー元こそが、こことは違う未来で戦っていたお前だった」別にそれを打ち明けるのは父でなくても良いだろう。エイジの麻痺した頭で、ぼんやりと他人事のようなコメントが浮かぶ。そんな自分をよそに、遠くのことのように当事者である進ノ介は感傷と感慨を織り交せて語りつづける。

「最悪の未来を変えるため、お前はそのベルトを使って、あの二〇三五年で孤独に戦っていた。その辛さは、直接は会えなかったが俺にはわかる。けど結局、108に敗れ……そして恐らく……」

死んだ。

父は、自分ではない誰かの顛末を、苦しげに告げた。

え、と乾いた声で聞き返す。変身能力を奪われた戦士の末路など、知れ切ったものだった。ただそれでも、そうオウム返しをせざるをえなかった。

頭の中で死というワードは反芻する。ある少年との会話が、それと当てはまつて連結する。

「きみのことも知ってる。勇敢で利発な戦士だった」

「……ある青年、としておこうか。彼は未来の仮面ライダーだった。けど、自分たちの施設ごと変身能力をロイミュードに奪われた。そこで彼は二〇一五年八月に跳び、未来で復活したあるロイミュードの野望を阻止しようとした。けど、追いつかれた。そして、自分が変身してきた装備で殺された」

それは、父さえも知らない、もうひとつの二〇一五年に起こった出来事。

そこでも泊エイジは、ダークドライブを奪われ、自分に擬態した108によって殺された。

エイジはその手に、隠し持っていたベルトを転送させた。さすがにうに、さながら嬰兒が、お気に入りブランケットを掴んで離さないように。

「エイジ、それを返せ」

父がそれへと手を差し出した。

「それは本来、あのエイジとともに消滅するはずだったものだ。そして俺は、平和な未来でお前に会うと約束した。それが叶った。なのに、お前にまたそれをつけて戦わせるわけにはいかないんだ。でなきや、俺たちの戦いが無意味になる。だから」

そう言つて、泊進ノ介はベルトをエイジの手からもぎ取ろうとした。

だが、エイジは距離をとり、ベルトを父から遠ざけた。

「……なんだよ、それ」

父親であるはずの男を拒絶し、精神的の突き放した。

「じゃあなに……？ 僕がこのベルトを使わせたくないのは、そのエ

イジのものだから?」

「違う、そういうことを言ってるんじゃないよ……!」

「じゃあどういふことなんだ!? 死んだそいつのことを引きずって、ずっと僕にその影を重ねてきたのか!? 父さんにとって、いったい僕はなんなんだ!?!」

今まで溜め込んできた、いや抑圧されてきた分、その衝動は激しかった。

「僕は、貴方が救えなかったエイジの代わりなのか!? ずっと、そんな風に見てきたのかッ!」

そう言い放った刹那。場が、キンと凍り付いた。

みずからの失言が、ノイズとなって狭い室内に反響していた。

それは、口にしてはならないことだった。

たとえ激情に突き動かされたとしても、思っていたとしても、それが真実だったとしても、決して超えてはならない一線だった。

エイジの頬で、かわいた音がパンと鳴った。遅れて、鋭い痛みがゆつくりとにじみ出した。

彼を打ったのは、父ではなかった。

今まで状況を見守っていた、母の霧子だった。

キツと睨み上げる彼女の美しい目の端に、涙の粒が浮かんでいる。母にそんな風に怒られたことよりも、そんな顔をさせて自分が情けなかった。

詫びることもできず、ただ居たたまれなくなって、彼は身を切り返して部屋から飛び出した。

場の深刻さは、一層その度合いを強めていた。

まるで出口のないトンネルや、深夜の森で立ち往生するかのよう  
に、解決の糸口さえ見つからず、ただ皆どうすることもできずに忘我し、脱力していた。

「……ホームドラマあるあるキター……!」

その中で、西城究がおもむろに声をあげた。

彼なりに場を和ませようとする気遣いからの発言だったろうが、そ

の目論見は失策に終わった。いまいち乗り切らない言葉尻が、むなし  
くこだまされただけだった。

だが、それが一応きつかけにはなった。

成り行きを見守っていた詩島剛は、究の抱くマーマーマンションの  
ぬいぐるみの頭を撫でながら、立ち上がった。

「エイジのやつがガキすぎつてのもあるんだとき。進兄さんも姉ちや  
んも、もうちよつと言ひ方や方つてのがあるんじゃないの？」

それは、当人たちも含めて、その場にいた全員が思っていたことだ  
ろう。それをあえて直接口にして咎めてみせたが、夫婦は俯いたま  
ま、我が子を追おうとはしなかった。

剛からしてみれば、そういう真つ当で『あるある』な親子ゲンカが  
出来ること自体が大切なことだと思ふのだが、同時に「無理もない」と  
理解もしていた。

何しろ、泊親子の間では、ここまでこじれた諍いは今の今までな  
かったのだから。

「捕まえてくる」

剛はため息をつきながら、椅子にかけていた白いジャケットを羽  
織った。

「剛」

「ん？」

「すまん」

進ノ介からの見送りは、背を向けてのただの一言。

だが、その三字に込められた義兄の複雑な想いを、剛は汲んで受け  
入れた。

「良いさ」

白い歯を見せて、少年のように微笑む。

「たまにはオレが抑え役ブレーキつてのも、悪くない」

剛が裏口から外に出ると、月を分厚い雲が覆い隠していた。

予報にはなかったはずだが、派手に降り出すかもしれない。

バイクでここまで来たのは失敗だったかもしれない。



エイジを乗せて帰るにしても、雨に濡らすわけにはいかない。

かと言って今更引き返して傷心の泊夫婦に車のキーを借りてくるのも、情けない話だ。

そう思った剛は、端末を手に取った。

「……あ、狩野か？ 悪い、ちよつと車でこつち来れるか？ ……は？  
『公用車を私事で使えない』？ 良いから来いって！ 泊家の危機  
なんだから！」

誰ぞに似て融通のきかないバディに辟易しながら、一方的に言つて  
通話を切る。

ため息をひとつこぼすと、その相手……進ノ介直属の部下であり友人であるチェイスのコピー元、狩野洗一（こういち）と合流すべく警察署に向かう  
ことにした。

その進路に、ひとりの男が立ちふさがった。

いかにも分厚い上衣に身を包んだ彼は、ほがらかに笑いながらコンパクトな旅荷を立てかけ、手を挙げた。

そのしぐさ、その笑顔は、剛もまた知る人物のものだった。

「あ、アンタは……ッ!？」

「久しぶり。令子さんからこつて聞いて、顔出してみただけど」

予想以上の驚きぶりに、男の細目が開かれる。わずかばかり、柔  
さが引く。

「——なにか、あつた？」

純度の高いその瞳は、まるで剛を取り巻く状況の変化までも、見透  
かすかのようだった。

## 第六話：Dark Night (3)

山道を、エイジを乗せたネクストライドロンが疾駆する。

人気の少ない夜道だ。前走車や対向車は多くなく、スピードは可能な限りで出されていた。

だが、その中において運転手はハンドルに指一本さえかけていなかった。アクセル、ブレーキいずれのペダルにも足は触れておらず、ギアはカーブのたびにひとりでに変速していく。

機械の自動運転に完全に身をゆだねながら、彼自身は、膝をかかえたまま、表情ひとつ変えなかった。まるで揺籃ゆりかごに閉じこもる赤子のよう。

たしかにそのとおりだ、と彼は自分の発想に同意した。

このちっぽけな空間だけが、自分にとつて唯一運命から解放されることを許された、唯一の居場所なのだから。

目を伏せかけたエイジの耳が、何か風音のようなものを車体ごしに捉えた。

バックミラー越しに音の正体を探ってみれば、この車を追う形で、車が走っていた。

その前時代的なオープンカーは、唸り声のような異音をあげながら、夜道を疾駆する。

出しているスピードからして、衝突すれば崖からの転落をまぬがれないようなコーナーもあざやかにドリフトし、幾度のカーブを前にしても速度を緩めることがない。

否、なさすぎた。

まるで一本の矢のような鋭さをともなったオープンカーの向きは、明らかにトライドロンを狙っていた。

みるみるうちに距離を縮められていく。そして、外気にさらした顔が明らかになった。

——金髪碧眼の、白皙が。

エイジはアクセルペダルへと足を伸ばす。だが一手遅かった。

次の瞬間、車のリヤバンパーに、その車のスポイダーが衝突した。

食らいつかれるがごとき衝撃に、エイジは呻き、トライドロンはおおきくバランスを崩す。

速度を落とさせられた彼らに、そのオープンカーが追いついた。並走する。運転手が上体を乗り出しながら、嘲笑を浮かべていた。

「よう、泊エイジ」

「ギルガメツシユ……ッ！」

「どうした？ 親に裏切られたような顔をして」

まるで見聞きしたかのようにエイジの心境を揶揄しながら、ハンドルをその姿勢のまま器用に操作する。

黒いボディを基調とし、金色の炎や獅子のレリーフを要所にあしらったデザインは、いかにもこの派手好きの王様らしい。

だが、基本的な造形は、この流線型の低重心のありようは……

「このトライドローンのコピーかつ！」

「そういうことだ」

そのフロントドアを叩きながら、得意げに襲撃者ギルガメツシユはうそぶいた。

「だが創り出したのはこの『ライドトレーサー』だけじゃなくてな」

と言って取り出したのは、自分のものとまったく同型のベルト。

一度完全に手をハンドルから離すと、そのベルト……ドライブドライバのレプリカを腰へと巻いた。

「変身」

シフトブレスもなく、ただイグニッションキーを回し、低くささやく。

だが、ギルガメツシユを覆い包んだのは、光の粒子ではなく、まがまがしいノイズの音と砂嵐。

その異質な繭をやぶって現れたのは、ドライブとよく似た、毒々しいレッドアイを持つ、けっして品があるとは言えない、金色のアーマーだった。

その姿を、エイジは資料で見たことがあった。

ロイミュード事件の発端となった科学者一度肉体を喪った彼が……自分の祖父にあたるその男が、ロイミュードの身体を奪い変身し

た姿。

決して仮面ライダーではないその姿を、その呼称を、

「ゴルド、ドライバー！」

エイジは、口にした。

あいさつ代わりにと、ギルガメツシユは腕を振りかざした。

その指先から放出された金色の波動に当てられたトライドロンの動きがにわかに鈍麻した。

落ちていくスピード。メーターを確認しようとする向き直れば、フロントガラスをスクリーン代わりに表示されるのは、次々と吐き出されていく機能不全を報せるアラームと、エラーメツセージたち。

それが、システムをハッキングして管理者権限を奪う、ゴルドドライブの特性。しかも、基本システムは同じとは言え彼は平行世界の技術にさえも干渉してきた。

状況をすばやく整理したエイジは、自分もシフトブレスを通じてベルトとシフトカーを転送した。

「変身！」

〈DRIVE! TYPE NEXT!〉

車内でダークドライブのスーツをまとったエイジは、あふれ出てくるウインドウ画面を精査し、状況を把握する。

この段階ですでに、自動操縦を含めた、大部分のシステムが敵によって掌握されていた。ドライブシステムを介して最低限の操作への侵食は防ぐことが出来ているが……つまり今、このトライドロンを動かすためには、

「——くそおっ！」

エイジは意を決してその手でハンドルを握りしめ、アクセルペダルを踏み込んだ。

ネクストライドロンはエイジの予想を超えて加速し、ギルガメツシユと彼の乗るライドトレーサーを振り切ろうと突っ切った。

一度はそれを見過ごし道を譲ったものの、ギルガメツシユもまたスピードをあげてトライドロンを猛追する。

教習所での緊急時の訓練を除けば、この夜中の、強敵とのカーチエ  
イスこそが、泊エイジの初運転となったのだった。

## 第六話：Dark Night（4）

山の宵闇を、赤と青のテールランプが彩って行く。

未だ自然が多く残る峠で、同じ原理で力を得たライダーが、同じスペックのスーパーカーを駆って競い合う。

スピードの話だけではない。

罅迫り合いのように車体そのものをぶつけ合い、装備している銃座を左右に展開させながら、縦横無尽に撃ち合う。

だが、優勢を誇っていたのは、模造品であるギルガメツシユのライドトレーサーだった。

外側からコーナーに突入して内側を攻め、抜けきると同時にふたたび外側に出る……俗に言うアウト・イン・アウトという基本的なテクニクを抑えつつ、そうしてエイジより先に出るや、狭まった道でスピードを落とさないうまに一八〇度回転して砲撃を浴びせるなど、人間離れした荒技をこなしてみせる。

砲火をくぐり抜けてかじりつこうとすりエイジだったが、怪物のごとき自らの車を御するだけで精一杯だった。

（ハンドルが重い。切り返すのに、ここまで力がいるんだっか……!?)

そして直に伝わってくる、一手操作を誤ればそのまま死に直結するという予感。

この愛機とはこういった危機は何度も潜り抜けてきた。そのはずだったのに、今ほどそれを痛感したことはない。ぞくぞくと、腹の底から染み出してくるような悪寒は、決して上手いとは言えない彼の運転をさらに硬化させるのだった。

戸惑う彼はその逃走劇の最中、何度もガードレールにぶつけ、ギルガメツシユの車体に押され、至近から容赦ない連射を浴びて、火の華を散らしてスリップする。

その都度、車体のダメージの度合いと損傷箇所を、ネクストライドロンは律義にアナウンスやモニターで示してくれるが、逆にエイジの焦燥感を煽るばかりだ。

「くっ！」

その中で、エイジは一度利き手を離した。自身のシフトブレスに、緑のラインが入ったシフトカーを装着させた。

〈NEXT BUILDER!〉

ホイールを介してではなく、車内で直接生成されたネクストビルダーのタイヤは、ダークドライブのボディと結合すると同時に、高速で回転し、内部データを読み取った。

ドライブシステムに保存されているバックアップデータをハッキングされた部分プログラムに上書きして、コントロールを取り戻していく。

いち早く取り戻すべきは飛行機能。あれさえあれば、この狭い道に縛られることはない。そう判断したエイジは優先順位をそれへと設定。細かい調整を手動で取り仕切りつつ、もう片方の手はハンドルから外すことは許されない。

ネクストライドロンの頭を押さえる形で先行するライドトレーサーを、ラフなコーナリングで強引に突破する。

10%、20%、30%……徐々に進行していく工程を、焦れながらエイジは頻繁に見ていた。

だが、前を向いた瞬間、目前にはガードレールがあり、その向こう側には黒々と闇に沈む山や谷があった。

まだ自動操縦機能は回復できていない。エイジは慌ててハンドルを切った。だが、力を入れ過ぎて振り切った車はそのままサイドからレーンを突き破って、虚空へと飛び込んだ。

度重なる衝突から揺らいでいたフロントギアが、大きく開く。

一気に流れ込んできた山風が、エイジの身体を絡めとって外へと放り出した。

低く悲鳴をあげながら落下していくダークドライブのモニターが捕らえたのは、大きくうねる川。

大きく水音としぶきをあげながら、エイジはその奔流に巻き込まれたのだった。

停車したライドトレーサーから、ギルガメッシュは飛び下りた。

暗雲たちこめる夜空を、一台の車が飛翔していく。その軌道上に現れたワームホールへと飛び込む。皮肉にも、その主を追い出してからネクストライドロンは己の自由を取り戻したのだった。

「揶揄に満ちた失笑を浮かべながら、ギルガメツシユはスーツを解いた。」

「やはり、システムごとでなければアレは奪えないか」

未練そうにつぶやいたその背に、一個の影が回り込んだ。

何者か、と問うことも敵と見なして襲いかかることもしない。顧みずとも、彼にはその正体がわかっていた。

ほかならぬそれは、『我がこと』だったのだから。

後ろを向けばそこには、今の自分と寸分たがわない、同じ姿があることだろう。

ナンバー001。

そのほとんどを撃破されたギルガメツシユ十人衆の内、008じぶんを除く最後の一体。

精神の大部分を持つ、ナンバーズの総元締。

一切の増長も虚飾も取り払ったかのような表情でたたずむ彼に、  
「何があった？」

と念波で問う。だが、その答えを聞くまでもなく、共有している思念と記憶が更新される。

なるほど、とナンバー008は納得した。

「計画の最終調整に入った。それにあたって動くであろうライダーたちの情報を得るためにも、もう少し泳がせてやってもよかったが、照井春奈あたりがこちらのトリックと迷惑に気付く頃でもあるだろう。彼がくだした判断はそういうことで、まったく同じ自分も、情報を得た今導く解答は同じものだ。」

「——ああ、遊びは終わりだ。……そろそろ『お前』にも、働いてもらうぞ」

足下に流れる黒い流れに向けて、ギルガメツシユたちは唇を歪めたのだった。



## 第六話：Dark Night (5)

水面への落下の衝撃が、ダークドライブの防御性の許容を超え、エイジの臓腑を揺さぶる。息をすることさえ億劫になるほどの激痛が、温情なく体力を奪っていく。

泡がまとわりつく。

河川の激流が手足を拘束する。もつれ合う四肢が逆に枷となって、身じろぎすることさえ許さない。

それでも、せめて心だけでも。

彼はそう思って、手を伸ばす。否、伸ばそうとする。突っ張ったままのその手は、ただ痛みとともに流されるばかりだ。

誰か、誰か助けて。

最新鋭の鎧に護られているはずの英雄の中身は、今はただの無力な青年だった。

「この手を掴んで」

ふと、聞こえるはずのない声がした。

温かみのある、優しい男の声音。

エイジはがむしゃらにその声の主を手探しし……暗く冷たい世界の中で、青い輝きと、硬い感触に行き当たった。

彼の手はぎゅっとエイジの手を握り返し、その肉体と精神を急浮上させていく……。

ハツとして、エイジはまぶたを上げた。

覚醒した彼の変身は、すでに解けていた。浅く呼吸をくり返す。急に視界が鮮明さを取り戻していく。自身の頭上に、分厚い雲、その切れ目に覗く、星と月。薪の燃える音と臭いが、隣から流れてくる。指先には、川原の小石の丸い感触。

あれは夢だったのか。それとも今、自分の見ているものが、溺れる自分が見ている幻なのか。

「あ、気がついた?」

そのことを確かめるよりも先に、エスニックな服装の男が顔を覗き込んできた。人の好きそうな笑みを浮かべて、焚き木を背にしていた。その在りようは、俗世離れしていて、雲霞を食べて生きる仙人を思わせた。透明感のある声は、水中で聞いた声に似ている。

助けてくれたのはこの人か。そもそも誰なのか。

疑問は尽きないが、口にすることをエイジはためらった。

……何故か、パンツをくくりつけた枝が、傍に突き立ててあったから。

絶句するエイジの視線を、男も追った。

「ああ、コレ? ただの荷物だから、気にしないで」

と言いかけた時、男の肘が枝に当たった。倒れた。

先端から落ちたパンツが、焚き火の中にダイブした。

パチリ、と火の粉が爆ぜる。

男は、キョトンとしてその様を見つめていた。

「ああああああ!」

ワンテンポ遅れて、彼は悲鳴をあげた。

焚き火をかき分けたり、指でとろうとして熱さに悶絶したり、枝の先端で強引に引っ張り出そうとして、その狼狽ぶりを惜しみなく露呈させる。そうやって苦闘のあげくに手に入れたパンツは、もはや半分ほどしか形を留めていなかった。その穴から、彼の全財産らしき硬貨がすり落ちた。

「俺の明日があゝ……」

と、情けなく嘆いて項垂れる男に、エイジはため息をついた。

この人が助けてくれたか正体だとかよりも、気疲れの方が勝った。とにかく、関わってはいけないタイプの変人だ。

エイジは起き上がって彼に一礼すると、足早にその場を去ろうとした。

「泊エイジ君、だよね？」

その足は、名を呼ばれたことで止まった。

硬貨を一枚一枚拾い集め、それをパンツの残骸の上に置き、丁寧に折りたたんでいく。ズボンのポケットにしまう。

「叔父さんから聞いたよ。君、仮面ライダーだって？」

その横顔には、可笑しげな笑みが浮いていた。

何で知ってたのか、はなんとなく想像がついた。それでも、自分が仮面ライダーを名乗ることがそんなに笑えることなのか。エイジのムツとした顔に、男は軽く慌ててみせた。

「ああ、ゴメンゴメン！ 深い意味はないんだけど……偶然ってあるもんだなって」

しみじみと呟く彼の心底や背景は知りようもないが、そこにはエイジの邪推したような悪意は感じられない。

だが、この出会いが偶然ではないことは理解したから、エイジの声は強張ったままだった。

「叔父から頼まれたんですか」

「うん。剛君……君の叔父さんとは旅先で会ったんだ。お互い、似たような目的を持ってたから、それが縁で、気が合ったり情報を交換したりしてね」

「……ということは、貴方も」

大切な誰かを喪って、それを生き返らせようとしているのか。そう問おうとしたエイジに、男は複雑げに目を細めた。

「俺たちの場合、純粋に友達と呼び合えるような仲間じゃないけど」

そして、彼は可能な限り、真摯な言葉で答えてみせた。

男は川べりに腰かけた。

「まあ座りなよ」

エイジに、隣に座るように促す。

逡巡するエイジに、男は言った。

「まだ帰るつもり、ないでしょ。親と気まずい気持ち、俺にも分かるから」

彼の手つきや目は優しげではあったものの、反発しがたい力強さがあつた。

ちよつとしたアクセントがあつて勢いは弱まったものの、火はまだ暖かく柔らかな光で辺りを包んでいる。

彼に従つて隣に座る。ある程度の距離は保つて。

だが、男はエイジに対し説得や説教はしなかつた。ただ黙つて、エイジが落ち着くまでニコニコとしながら見つめている。

次第に落ち着いていく、いやそう必死に念じたが、そもそもこうなつたきつかけに立ち返ると、怒りと疑問もまた蘇つてくる。

長く続いた沈黙が、思わずその念を吐き出させた。

「……間違つてる……と思います」

「ん？」

「父さんも、叔父さんも……それに貴方も！ 死んだ誰かにいつまでも縛られるなんて、間違つてる！」

父は、自分に死んだ『息子』の影を重ねている。代わりにしようとしている。そのくせ、彼が使つていた道具を用いることを許してくれない。

あまつさえ、叔父やこの人は、その相手を生き返らせようとしているという。それは、自然の道理に反する、ともすれば悪にもなりかねないではないか。

焚き火の音が弱くなつてきた。風が強くなり、雲は再び星月を覆い隠す。

「……そうだね」

男は、エイジの主張に声を低めて頷いた。面と向かつて否定自体は、しなかつた。

「俺もさんざん悩んだ。君と同じことを、先輩に言われたこともある」  
でも。

それでも。

彼は空へと右手を伸ばす。まるで、そこにある小さな何かを、掴むように、ぎゅつと指を折つて握りしめる。

「あいつを生き返らせたいと思つた。あいつがいたから、俺はまた旅

に出られた。……過去にしがみつくんじゃなくて、明日へ進む力になるなら、誰かの死を抱えて生きることが悪くないと思う」

遠く天空へと視線を送る彼。その彼の横顔は、全てを受け入れられてもなお、自分の道を進まんとする確固たる信念に満ちていた。しかし同時に、危うさと儂さを併せ持っているようでもあった。

横顔を盗み見るエイジは、思わず彼の名を呼びそうになった。だが、この恩人の名を、エイジは今なお知らずにいる。

上から、エンジン音が流れ聞こえてきた。自分の真上で止まったその音は、クラクション音へと変化した。

顔を上げれば、心なしが見覚えのあるワゴン車が停まっっていて、そこからふたりの男が出てきた。

顔までは確認できないが、叔父の好みの白いジャケットは、月の隠れた夜においてもよく目立つトレードマークだ。

「迎え、来たみたいだね」

火の始末をしながら立ち上がった男を、エイジは軽く睨んだ。

彼は人畜無害そうな表情で、飄々と小首をかしげた。

ひよつとして、今までのやりとりは叔父たちが来るまでの時間稼ぎだったのだろうか。だとしたら、温和そうな立ち振る舞いに反して、なかなかの食わせ者だ。

「じゃ、俺はもう行くから」

「待って！」

立ち去ろうとする彼を、今度はエイジが呼び止める番だった。

「名前、まだ聞いてなかったから、その……」

あどけなく振り返る彼に、タイミングを思い切り逃したエイジは言葉に詰まりながら尋ねた。

男は虚を突かれたように目を見開いたが、ふわりと微笑んでその質問を受け止めた。

そして、少しイタズラっぽく名乗った。

「俺も、エイジ。火野映司」

## 第六話：Dark Night (6)

運転試験場へともどるワゴン車の中は、奇妙な沈黙に包まれていた。

エイジは後部座席で身と拳を固くしていたし、助手席の剛は、バツクミラー越しにそんな彼を見やりながらも、どんなふうに扱えばいいのか考えあぐねていて、会話らしい会話はなく、ただ時間と山の木々だけが流れていく。

もつとも、この重苦しい沈黙のそもそもの原因は、運転手の独特の威圧感ゆえだろう。

狩野洗こういち。

端正な顔立ちのこの男は、かつては白バイ隊員であったが、進ノ介と知遇を得たことよって、長年その直属の部下として活躍をしている。

そして、何よりもチェイスのコピー元である。

線の細い端正な顔立ちは、若いころ、ひいてはチェイスの姿の面影をエイジにも想像させる。

だが多少……いや多分に融通がきかないところがあり、感情や記憶まではコピーしてはいないとのことだが、「その点でも似ている」とは叔父や父の談だった。

だが、夜分に駆り出されたにも関わらず、フロントガラスに映り込む彼の顔には、不満の二字はなさそうだった。ただ、フランクという表現とは無縁の空気が、ひたすらに空気を暗く重くさせているのだ。

そんな中で、剛は半ば無理を押しようにして、エイジに話しかけ、

「——なあ、エイジ」

「エイジ、お前に言っておきたいことがある」

……ようとした矢先に、件の運転手がそれを遮った。

「——おッ前、ヒトが話そうとしてたのに……ッ」

口をパクつかせて文句をかぶせようとする叔父を無視するように、狩野はハンドルを切りながら淡々と語り始めた。

「お前も承知しているとは思いますが、俺はチエイイスというロイミュードにコピーされた」

「……知ってる」

「俺は直接会ったことがなく、コピーされたという自覚さえもなかった。だが、この男や元特状課メンバーの言葉が、俺への信頼が、そいつがいかに大切な存在だったかを物語っている。ある意味においては、その剛もお前の父親も、俺に死んだチエイイスの姿を重ねていると言って良い」

まるで、どこかで聞いたような話だ。エイジは苦さを浮かべた顔を上げた。

その真偽はどうあれ、長年友人として付き合ってきた剛にとってはそう思われるのは心外なことだったのだろう。

むっとした表情で「おい！」と声を張る彼を、

「だが」

と変わらぬ調子で狩野は遮った。

「俺は、それで良いと思っている。そのことに感謝をしている」

彼への同情から顔を上げたエイジを待っていたのは、意外な答えだった。

エイジは目を見開き、狩野は——ほんの、わずかにだが——その目を細めた。

「俺はこういう性格だ。最初に進ノ介に言われたように、友達を作ることなんて、出来ないはずだった。だが、そのチエイイスが、俺と剛たちを引き合わせてくれた。感謝しているとは……そういう、ことだ」  
自分でも少し恥ずかしいセリフを言っている自覚があったのだろう。

狩野は、暗い車内のなかでもかすかに顔を紅くした。

ストレートに言われて気恥ずかしいのは、その相手だって同じこと

だ。

声にならない声を詰まらせながら、剛は後ろ髪をバリバリとかいた。

そしてひどく言いにくそうに、

「まあ、そういうことだ」

と口にした。

「進兄さんたちだって、お前が本当の息子じゃねえとか、前の時代のエイジのほう而立派だったからとかで、あんなことを言ったんじゃないんだ。ただ、誰かの死への悲しみつてのは、理屈じゃないからさ。頭じゃわかってても、お前に面影を重ねちまうし、過去を想いたくなることだってある。でも、きつとそれを含めての、お前への愛なんだと思う」

そう言い切った剛は、気恥ずかしさから狩野と同じように紅潮した。

「つて、お前に引っぱられて、なんかオレまでクサイセリフ吐いちやつたじゃねえかつ！」

「俺のせいにするな」

「いや、お前のせいだ！ つーか、そもそもお前が変なタイミングで割り込んできたから」

叔父と、その友人との他愛ない口論、その後ろで、エイジは忍び笑いを漏らした。

知っている。さつき、似たような言葉で火野映司に教え諭された。

知っていた。ここに来るまでの道中にいろいろなことがあった。様々な考えが浮かんでは消えた。それでも最後に残っていたのが、剛と同じ結論であり、最初から自分の中にあつた答えだった。

心の暗雲を晴らしたエイジは、軽く息を整えた。

「僕、帰ったら父さんに謝ります」

その言葉を聞いた前のふたりは、言い争いを止めた。彼の心境の變化に、剛たちは追及をしなかった。ただ、少し間を置いてから、

「ああ、それが良い」

叔父は、それだけ言って、相好を崩してうなずいた。



「素直になるのはいいことだ。でなければ、この男のようにひねくれた人間になる」

「うるせーよ！ てか、お前にだけは言われたくない！ 余計なことで一言多くなりやがってッ」

また、口論をしようとするふたりに割って入るべく、エイジは身を乗り出した。

だが、その視線の先、フロントガラスの向こう側に立つ影に、思わず視線が引き寄せられた。

季節外れの黒いロングコート。

それでもなお闇に溶けるをよしとしない、王冠の輝きにも似た金色の頭髪。

緑碧に燃える相貌。

夜空へ向けて大きく振り上げたその手が、極彩色の光を帯びて……

——意識と、記憶が、混濁していた。

焦げ付く異臭が、エイジの意識を無理やり引き戻す。

濁っているが火の爆ぜる音。頬には熱せられたコンクリートの感触。

焦点の定まらない視界の中に、横転した車の残骸から、頭から血を流して倒れる狩野を、引っ張り出す叔父の姿があった。

耳鳴りがひどい。頭痛をとまなうほどに。

それでも、残された五感のすべてが、この場における異変と危機を報せてくれる。

前方から、金髪の孤影が闊歩してくる。

彼はその手に、黄金の塊、いや巨大な眼魂を持っていた。

それを腹の前に据えると、ベルトと一体化して彼の胴部に固定される。

歩みは止めず左のスイッチを押す。

「変身」

盛る業火、つんざくような耳鳴りの中、唇の形はそう告げていた。

ベルトを核として呼び出されたのは、十体の獣の影。神霊か、あるいは凶獣の魂か。

それらはこの金色の魔少年……ギルガメッシュに吸い寄せられ、取り込まれていく。獅子のレリーフを刻む、黄金にして異形の具足となる。

「最後の、ギルガメッシュ……！」

完全に覚醒すると同時に、エイジはみずからの身体を叱咤し、よろめきながら立ち上がった。

「叔父さん、狩野さんを連れて逃げて」

剛と狩野とを助け起こし、鋭く伝える。

逆の手には、すでに転送したドライブドライバーが握られていた。

「おい、お前……ッ」

「大丈夫。あいつならもう何度も負かしてるから！」

剛とて仮面ライダーマツハだ。だが、わざわざ突発的に飛び出した甥を迎えに行くのに持ち歩いていないだろうし、マツハドライバーはそのポテンシャルが高く多様に富む反面、破損や故障が多発し、いまだに動作が安定しない。

何より剛自身が「なんのために仮面ライダーになるのか」そのことに悩み、今も答えを探し続ける求道者でもあった。その叔父に、気を失って出血もしている友人を見捨ててまで、助力は仰げない。

つまり、この天災にも似た暴君を止めるためには、自分が変身するしかない。

「……気をつけろよ！ そいつ、ヤバイ！」

歴戦の士としての勘が、本能的にそう告げるのだろう。そう言い残し、ぐったりしている狩野を介抱しながら、剛は離脱した。

だがその目線には心配と未練を強く残し、くやしきや無念を噛みしめた唇ににじませて。

両者の影が消えてから、あらためてエイジはギルガメッシュと向き直った。

彼は、一定の距離を保ち、足を止めた。

そして、

「お前のベルトをもらおう」

と低い声で言った。

エイジは当惑し、その言葉の目的を探る。だが、対峙して理解したこともある。

常日頃の、こちらを上から目線で嘲弄するような雰囲気はない。

だからこそ、ほかの個体とは一線を画す存在であることを、剛に言われるまでもなくエイジも感じ取っていた。

だが物は考えようだ。

ここで最大の障害を排除してしまえば、事件の大部分が解決することになるだろう。

父や母たちに、これ以上の心配や負担をかけさせることもなくなるし……認めてもらえる。

「断る！……変身ッ」

勇ましく足で地面をたたきながら、エイジはダークドライブへと変身をした。

## 第六話：Dark Night (7)

全力で腕を伸ばし、腕を伸ばす。

繰り出した拳は、難なく受け止められ、捻り上げられた。

愕然とするエイジの眼前に、ギルガメツシュのマスクがあった。

頭突き、頑強に保護されているはずの顔面に鈍い衝撃が入る。前頭葉から波打つ衝撃が、彼から思考を奪っていく。

だが、おかげで両者の間に間隙が生まれた。

その合間に、エイジはブレイドガンナーを転送し、握り固めた。

「ツアー！」

みじかい気炎を発して蒼刃を、黄金の鎧に叩き込む。叩き込もうとした。斬れる、はずだった。

だがその一拍子速く、ギルガメツシュの拳撃がその手首を叩いて軌道をそらした。

だがエイジは諦めない。軽く崩しかけた姿勢を強引に引き戻すと、無理な姿勢のまま再度拳を打った。

防がれる。だが、相手に攻撃をさせないままに、エイジは連打し続けて反撃を妨害する。反動で自身の身体を立て直す。

だが、肝心の攻撃はことごとく、ギルガメツシュの剛腕によって撃ち落とされていく。

最小限の動作、最低限の無駄、最短の軌道、最速の振り。

あらゆることにおいてベストな連撃は、それを上回るギルガメツシュの打撃ではね返されていく。

何度も、何度も打ち込んだ。それでもエイジの猛攻は、金色の装甲に火花ひとつ立てさせることはできなかった。

エイジの身体が音をあげるほうが先だった。

痺れと消耗で鈍磨した斬撃の合間を縫って、ギルガメツシュは力任せの中段蹴りを放った。

エイジの脚が一瞬地を離れた。その威力と圧力はあまりに強く、息をする間もなくそのまま踏み倒される。

銃撃に切り替えたブレイドガンナーのトリガーを、ギルガメツシュ

の面に目がけて絞る。

すんでのところでかわされたが、エイジは解放された。起き上がった。

後ろ跳びで退きながら、二射、三射と続けざまに放つ。

だが、黄金の王は退かない。

光弾の横雨を、浴びながらも平然と前進する。

接近するごとに激しくなっていく連射に身じろぎもたじろぎもない。ただ、視界をふさぐ顔面への射撃だけは、わずらわしげに、羽虫を払うかのような手つきで防ぐばかりだ。

動揺の寸時が、そのまま相手の反撃の機へと直結する。

これが真の格闘だ。そう言わんばかりに突き出した拳はそのままガラ空きになったダークドライブの胸部を穿ち、今まで打ち込んできた連打連射の倍するであろう苦痛がエイジを襲った。

(勝てない)

腹の底から染み渡るような冷たい実感を抱く。

これまで戦ってきたギルガメッシュたちとはまるで違う。

今までの彼らとて、ライダーとして高いスペックを有していた。

だが、彼らには慢心があり、そこにつけ入る隙もまたあった。ゆえに、勝つヴィジョンが浮かばない、ということはずなかつた。

だが、この最後のギルガメッシュは違う。

心技体いずれにおいてもダークドライブやエイジに劣る部分がなく、遊び心や油断といったものがない。構えも作らずだらりと両腕を垂らしているにも関わらず、そこには小細工や小手先の技術を介在させる余地がない。

だからと言って、しんがりを買って出たというのに、すぐ後ろに叔父たちがいるのに、負けを認めて逃げるわけにはいかない。

ネクストハンター、ネクストビルダー、ネクストトラベラー……

いずれのシフトチェンジも、勝算のある戦いが思い浮かばない。となれば、残された手段は力攻めしか残されていなかった。

〈NEXT!〉

加速をつけつつ、エイジは飛んだ。

突き出した右足に、するどい雷光がほとばしる。

車道という狭さからネクストライドロンによる助攻は受けられないが、それでも全出力を集中させた。

だが、

「これは、天空寺タケルの方がマシだったな」

ギルガメッシュは技で応戦しない。ただ隻腕で受け止める。そのまま握り固められ、並の怪人であれば触れるだけで爆散するようなエネルギーは、彼の外殻を素通りして流散していく。

エイジの爪先はボルトで打ち付けられたかのごとく固定され、その身は宙づりになった。

ギルガメッシュの逆の手がその喉輪へ、蛇のように伸びる。獅子の牙のように食らいつく。

そのままギリギリと締め上げられて、エイジは苦悶の声をあげた。

「いい加減、お前を好きに遊ばせておくわけにもいかない。そろそろ働いてもらおうぞ」

「ふぎ、けるな……誰が、お前なんかの、ために……ッ！」

精一杯の抵抗として手足を揺らしながら、エイジは低く声を振り絞る。

対するギルガメッシュは「ああ」と声を漏らした。

まるで、この瞬間も戦っているエイジのことなど、今の今まで忘れていたかのような調子で。

「別に、お前には言っていない」

ぞろり、と。

王の背に、触手が生えた。あるいはツタか、孔雀の羽か。

先端に独特の突起を持つそれは中空で幾筋も分岐しながら、捕捉したダークドライブへのベルトやシフトブレス、そしてそこに取り付けられたネクストスペシャルのシフトカーへと絡みつく。

瞬間、悪性の情報の嵐が、エイジの視界と神経を焼いた。

脳に直接針を刺しこまれるかのような激痛が襲い、たまらずエイジ

は苦悶の叫び声をあげた。

彼の断末魔は途切れることなく、意識はそのまま深い闇へと沈んでいったのだった。

## 第六話：Dark Night (8)

「……エイジ、話がある」

泊進ノ介は神妙な表情で切り出した。

だが、自身で納得がいかないように、ため息をついてから表情を改める。

「……エイジ君！　じっくり話をしようっ!？」

にこやかに、というよりも引きつった繕い笑顔で、声を上ずらせる。だがそれも合点がいかず、首を振る。

他にも

「久々に風呂に一緒に入らないか！」

と風呂桶に見立ててバケツを抱えて迫ったり、

「キャッチボールはどうだ!？」

とエンジンマフラーとヘルメットを持ち出しそれを自分の足に取り落として痛がったり、

「良いか、一本じゃ折れちまうシフトレバーだって、三本揃えば……」  
などという謎説教をぶったりしている。

そんな芸人の一発ネタのようなやりとりを、何も無い壁に向けて都合五、六度はくり返していた。

「……何やってんだ、ありやあ」

身内の奇行を冷ややかに見やりながら追田現八郎は妻に耳打ちした。

「ああ、練習でしょ?。」

「なんの?。」

「エイジ君が帰ってきたときの」

「くっだらねえ」

かはっと呼気を呆れとともに吐き出し、老刑事は毒づいた。

「んなもん、ぶっつけ本番で本人に洗いざらいぶちまけちまえば良いんだよ！　自分の気持ちをさっさと吐き出せねえとか、みつともねえ」

「……それをあなたが言いますか、と」



その背で、タブレットで手慰みに執筆作業をしていた西城究が、ボソリと毒づいた。

しか自身で漏らした失言に、彼はハツとして息を呑んだ。おそろおそろ振り返れば、その間近には、昭和の雰囲気の色濃く残す、いかつい怒りの形相があつた。

「んだとおく……!? そうやって面と向かつて言うこともねえモヤシみてえな性根だから、てめえはいつまで経っても嫁さんひとり見つけられねえんだろうがッ！」

「ぼ、僕のごとは今関係ないでしょ!? 僕のごとは……ぐええ！」

意味不明なたとえとともに『究太郎』の首を、小脇に抱えた人形もろとも締めあげる現八郎。

そして夫の暴走を呆れながら止める妻りんな。

喧噪そちのけでまだイメージトレーニングを続ける進之介。

その場は、時間の経過とともに緊張感は薄れ、和やかさが戻つたようだった。

そこにはいつもの……かどうかは『彼女』には知るすべはないが、往年ではそうであつたであろう特状課の光景が広がつていた。

だが、当時とは違う異物が、他ならぬ『彼女』自身だった。照井春奈は、部屋の片隅で背筋を伸ばして座つていた。

本来なら自分もエイジを追つて退出しておくべきだったのだろうが、ついタイミングを逃してしまつたし、無理に追つて何かを伝えるところで、彼の頑なさを氷解させることなどできようはずもない。むしろ、よりこじれる可能性があるというのが彼女の客観的評価だった。

(それに、考えをまとめるいい機会かもしれない)

エイジのルーツであり、彼がギルガメッシュ追跡の拠点として使つてきたこの設備の中なら、また新たな見方も生まれる可能性がある。

——なぜ、ギルガメッシュたちは、自分たちの先回りができていいのか、などといった疑問はいまだに残つたままなのだから。

彼女が組んだ腕の前に、香気が立ち上つた。

ほっそりとした手が、コーヒーの入つたカップを差し出していた。

「ごめんなさい。いろいろと騒がしくて」

エイジの母にして進ノ介の妻、霧子はそう言って目を細めた。

理知と厳しさと、それとは正反対の慈愛に満ちたまなざし。かつてそれを、別の誰かからも向けられていた記憶がある。だが、あえてそこを追及しないように努め、春名はカップを受け取った。

「コーヒー、苦手だった？」

「——いや、むしろ家族にうるさい人が……ああいえ、ありがとう、ご  
ざいます」

機械的に礼を言う。

「照井さん、だった？」

「はい」

「ごめんなさいね、息子が迷惑かけちゃったみたいで」  
「いえ」

それ以上の会話に発展することはなかった。黙考にふけろうにも、あれこれと気を揉んでくれる相手をかたわらに置いて無視するわけにのいかない。

ただ間を持って余すだけの、無為の時間が過ぎていく。

そんな非合理的な余暇を、彼女は許すわけにはいかない。

春奈は鉄の顔の向こう側で、必死に探る。共通の話題を。そして頭に浮かんだのは、ここにはいないひとりの青年……霧子の言うところの『息子』だった。

「——彼は」

「え？」

「よくやっていた、と思います」

言葉少なに、あいまいに彼女は言った。

それでも、彼女の立場と人間性の許容できる限り最大限の賛辞だった。

霧子はキョトンと目を丸くしていた。

だが、春名の言わんとしていることをすべてくみ取ったかのように目を細め、かすかに微笑んだ。

「そう」

とだけ、彼女もまた短く相槌を打った。  
だが、居心地の悪さはほんの少しだけ、和らいだ。

春奈が手元に置いたドライバーに、霧子の視線と興味が向けられていた。

「これですか、これは」

と持ち上げて見せる彼女に霧子は単刀直入に尋ねた。

「それがT3アクセルドライバー？」

なぜ、彼女が詰まることなくその正式名称を唱えることができたのか。

危うくコーヒーカップを取り落としそうになる。だが、かろうじて持ち直し、ドライバーの代わりにデスクへと置きなおした。

「さつき、インターポールの人から情報提供されて、あなたのことでもその中であつたのよ」

先輩め、こういうところは根回しが速い。

舌打ちしたい衝動をなんとか抑え、春奈は素直に首肯した。

「うらやましいな」

意外な言葉が返ってきた。

てつきり仮面ライダーに対して、反対意識を持っていると推測していたのだが。

そればかりは、表情に出していたらしい。

「意外？」

目をのぞき込んで尋ねてくる彼女に、「いえ」と春奈は言葉をにぎし  
た。

「私も、昔はドライブになろうとしていたから」

「貴女が？」

「それこそだいぶ前の話だけだね。だから、もちろんあの子が心配つ  
ていうのもあるけど、本当は先を越されて悔しいのかも」

冗談めかしく言つてのける霧子に春奈はわずかに苦笑いと愛想笑  
いを同時に浮かべた。

「触ってみてもいい？」

と尋ねる霧子に、

「私以外が触ると、ロックがかかりますので」と断る。

「ああ、やっぱりそうなんだ」

それを不満がることなく、霧子はあつさりを受け入れた。

そのことに安堵しつつ、春奈は続けた。

「もちろん力が悪用されるのはもちろんのこと、これはインターポールの情報と技術の集合体でもありますからね。たとえばその内部にスパ」

机が、おおきく揺れた。

コーヒーカップが大きく傾き、中の液体が少しこぼれた。

それは他ならぬ、春奈自身が立ち上がったことによるものだった。

「……まさか、か……」

ワントンポ遅れて、咀嚼された情報と疑問と、経緯の断片が、頭の中によみがえる。

なぜ、イーデイスの潜伏先や逃亡ルートは露見した？

なぜ、『白いゴースト』の正体とタイムリミットまで知られていた？

なぜ、風都まで自分たちが向かっていることを知っていた？

なぜ、風都タワーでの最後の作戦は成功した？

あの時、何が他と違った？

——Wドライブ。

——貴様、やってくれたな……

——……には、今見回りや盗聴器機のスキャンをやらせてるんです。どうしてもここからの話は奴らに聞かれたくなくて。

春奈の脳裏に浮上した『まさか』は、一筋の雷光となって雑音のごときフラグメントを接合させ、記憶の最奥までさかのぼっていく。

その総括となったのは、最初。

『あの青年』を取り調べたとき、本人の口から聞いた言葉だった。

——だから、ギルガメッシュを一度は捕まえかけられたんだよ。け

どあいつ、『厄介なのに絡まれた』とかなんとかって、適当にあしらってきて……

「……照井さん？」

握りしめたドライバーを震わせる彼女を不安そうに見上げていた。だが、彼女への配慮など、衝撃でとうに吹き飛んだ。すべてがつかなくなった今、去来したのは自分への憤りだった。

「――なぜ」

「え？」

「なんで、今まで気が付かなかった?! この程度のことにつつ!!」

春奈の怒号が、周囲の喧噪を止めさせた。

今まで寡黙でいた女捜査官の、喉を裂かんばかりに荒げた声は、静まり返った場の中で一身に注目を浴びた。

そんな折、進ノ介の携帯がけたたましく鳴り響きはじめた。

一瞬、ビクツと身を揺らして、一同は振り返る。だが進ノ介が、じつと眼を春奈へと注いだままそれを手に取った。

「剛か、悪いが今………え？」

進ノ介の表情が変わる。その深刻さに、重さが加わる。

春奈が答えへ行き着くのを待っていたかのように……あるいはその遅さを嘲笑うかのように、事態は次の段階へと進行しようとしていた。

## 第六話：Dark Night (9)

「……わかった。剛、お前はそのまま狩野を病院に連れて行ってくれ」  
凶報に触れた進ノ介は、走って駐車場へと出ながら、それをもたらした剛に素早く指示を飛ばす。まだ食い下がろうする気配を見せた義弟との通話を一方的に断った彼は、自身の車に乗り込もうとした。「待ってよー」

背後に何色もの制止の声而降りかかってくる。

そのうちの一つがすぐ間近に近づいて、女の手が彼の袖を引いた。

霧子のものではない。もう一つの、馴染みある甲高い声。

追田りんなが、息を切らせながら袖を引いていた。

「貴方、今からどういう場所に飛び込もうとしているか分かってる!?  
状況も全然わからないのにッ」

「……ヤバイってことぐらいはわかってるよ」

「だったらー!」

「それでも、これは俺の責任だから」

進ノ介は、りんなの言葉を遮った。

「……剛の言うとおりで。あんな頭押しえつけるような言い方したら、反発するって、分かってたはずなのに」

他ならぬ、かつての自分がそうだったのだから。

そういう辺り、エイジは自分の性質を引き継いでいるのだ。

だからこそ、「自分は父親にとってはなんなのか」という我が子の切ない問いを向けられた時、心臓を直接殴られたかのような強いショックが進ノ介を襲った。

自分は果たして、今まで父親としてちゃんと向き合っていたのか。その答えが今の惨状だと言うのなら、それを受け入れ今こそちゃんと対する。

「だから、俺は!」

「だったらせめて、あの子も貴方も助かる努力ぐらいはしなさいっ」

知らず声を漏らした進ノ介に対し、りんなは遮られた続きをやや強引に話した。袖を引いて向き直らせた彼の手に、楕円形の合金を置い

た。

覚えにある、触感と重さ。その正体を見たとき進ノ介の胸に湧き上がったのは、安心感とそれに勝る当惑、旧懐、そして躊躇。

「……なんで」

様々な感情が、三字に集約されてついて出る。

「万が一ダークドライブに不調があつたり壊れた場合の『代車』ってところよ。……分かってるってば、どうせ止めたって行くってことぐらい。どれだけ付き合ってきたと思ってるの？　ほんっと、そう言うところばかり似て」

そう早口でまくし立てたあと、女科学者は目を細めて笑った。手のかかる弟に接するかのよう。

やはり他人から見ても、自分たち父子は、どうしようもなく似ているらしい。進ノ介は、淡く苦笑い返した。

「貴方は使いたくないかもしれないけど、それでも、助けるために必要でしょう？　父親として、そして」

最後まで言い切ろうとした時、彼らの前で軽妙な駆動音が響き渡った。件の女捜査官が、どこで調達したものやら、先進的なデザインのバイクにまたがって停まっていた。

「お伴します。息子さんは……貴方が想像しているよりも、厄介な状況に置かれているかもしれません」

苗字と物言いと目鼻立ちに奇妙なデジャヴ感じさせる彼女は、若干の後悔を切れ長の瞳に乗せて言った。

剛が伝えきた座標に向かうと、戦闘の形跡が色濃く残っていた。道路やガードレールはまるで爆心地のように歪んでねじれ、あるいは溶けて、異臭を放つ。

そこかしこで燻りつづける火は、一帯の酸素を容赦なく消耗させていき、吐く息さえも焦げ付かせるかのようだった。

災厄、あるいは煉獄としか言いようがないその中心に……彼は立っていた。ダークドライブの装甲で、その身を固めながら。

「あ……照井さん、父さんも」

それぞれの愛車を降りたふたりへと振り返りながら、ダークドライブはエイジの声で応じた。ただその声音は

重厚な黒いアーマーに、大小の傷がついていた。

「ギルガメッシュは？」

そう問う春奈に、彼は答えた。

「……ちよつと、前に、なんとか、撃退できたけど……こつちもかなりダメージを……ぐっ！」

彼らに歩み寄ろうとした彼は大きく姿勢を崩し、膝をついた。

しゅうしゅうとその外殻は白煙を吐き、ベルトのディスプレイはその光を失いかけて、明滅を不規則に繰り返していた。

「……無事ならいい。こちらも用がある。今すぐダークドライブの」

春奈は安堵を隠し、助け起こそうと歩み寄りかけた。

だがその前に、進ノ介の腕が伸びた。

そして冷ややかにダークドライブを見ながら、

「お前は誰だ？」

実の息子にかけるものとは思えない、非情な問いを放った。

うずくまっていたダークドライブは、ハッと息を呑んで、顔を上げた。

「……そんなに、僕のことを憎いのか……っ」

ややあって、地につけた両の拳をブルブルと震わせて今にも泣きそうなの、いやマスクの下ですでに泣いていそうな声で父親を責めた。

「傷ついた我が子を助けようともせず、突き放すのか……っ？ やっぱり僕は、所詮代用品だって言いたいのか!？」

ダークドライブは、無機質な青い目を春奈へと向けた。

だが、春奈の彼を見返す目もまた、驚愕と共にその色を変えていた。この『エイジ』を包み込む言い知れない不自然さが、そうさせていた。口調も声も仕草も同じなのに、この『彼』は今までの彼と何かが違う。……否、何か重要なものが、欠落している。

こういう不確かな物言いは好むところではないが、今までインター



ポールの捜査官として、仮面ライダーとして、多くの悪意に接してきた春奈の直感と経験則が、それを内より訴えてきていた。

悲壮な『彼』の訴えによるものではない緊張感が、場に熱風とともに渦巻いていた。

そんな中、進ノ介が重々しく口を開いた。

「……俺の息子はな、ついさっきまで言い争いをしていた相手に縋れるほど凶々しくもなけりや、泣き言を押し付けてくるほど弱くもないんだよ。お前は、エイジじゃない」

ほとんど父親としての感性に頼った、だが確信に満ちた言葉。

それが、決定打となった。

バチリ、と火が爆ぜる。

ダークドライブの、瘡のような全身の震えは止まっていた。

さっきまで多弁に父親に食ってかかっていたのが嘘のように無言になり、反論もしなかった。

何を言っても無駄か。そう言いたげに立ち上がる姿に、ダメージに苦しむ様子はない。むしろその挙動は、外見もいまって、機械仕掛けの黒騎士のようだった。

ふう、とわざとらしいため息がこぼれる。

「さすがに、二度も騙されない、か」

二度も、の辺りの語気を強めて言う。

訝しむ進ノ介だったが、彼の前で、にわかにダークドライブがエイジの声で笑った。その哄笑に、ノイズと、まったく別物の声が入り混じった。

分厚い黒雲の中の雷鳴を思わせる、威厳と傲慢さと悪意に満ちた、野太い音声。それが、エイジの音量を上回っていく。

それを聞いた進ノ介の顔色が、徐々に変わっていく。

熱と怒りでかすかに赤らんでいたのに、さつと血の気が引いて白くなっていく。彼の中で、遠い記憶が呼び起こされようとしていた。

「……まさか、お前……はっ！」

暗い光をたたえたダークドライブの眼が、愕然として声を失う刑事の顔を写し取る。

ベルトのディスプレイが、そこに表示された「NEXT」の象徴は消滅し、代わりに別の文字列が表示された。

「だがやはり貴様は、ギアが入るのが少々遅い」

108

——それが、ベルトに表示されたナンバーだった。

## 第六話：Dark Night (10)

ロイミュード108。

個体名、パラドックス。

その凶悪性ゆえに他のロイミュードたちからさえ危険視され、封印されたラストナンバー。

二十年後の未来で復活し、ダークドライブの力を奪って過去へ飛び、当時の自分と融合し進化するという異質なアプローチによって、自分だけのためのグローバルフリーズを目論んだ巨悪。

すでに倒したはずの、旧敵。

この機械生命体にまつわる情報は多くあるが、だが進ノ介にとっては何よりも、我が子の仇という、絶対的な確執が存在している。

「……エイジはどうした？ 何故お前が復活している？ 一体いつから？」

怒りで拳を震わせながら、それでも理性で必死に感情を押し込めて、進ノ介は問うた。

「質問の多い男だ」

我が子とはかけ離れた胴間声で、ダークドライブは嗤う。

「安心しろ。泊エイジはこの中で休眠状態にある。肉体を持たぬ今の私には、こいつはまだ必要だからな」

「体を、持たない？」

108は笑みを含んでその尾を引かせ、左手を掲げて見せた。

「では次の質問に答えよう。いつから、私が復活していたか？ ……最初からだ！ 事の始まりから、私はここにいた」

右手の指が示すのは、掲げて見せたその手の首。

厳密に言えば、そこにはめられたシフトブレス。

セットされた黒と青のシフトカー、ネクストスペシャル。

ダークドライブのスタートアップシステムに欠かせぬ存在を、彼は答えとして提示してみせたのだった。

「やはりそういうことか」

応じたのは春奈だった。

「我々の手の内や動向がことごとく知られていたのは、貴様が情報をギルガメツシユに流していたからか」

パラドックスは、鼻を鳴らして、というよりもデータである彼にそんな機能はないので、そういうニューアンスの音声を作って肯定した。

イーデイスやアユムの居場所、正体。それらを知ることができる情報は、限られている。そしてギルガメツシユの千里眼とやかも、その視野はあまりに限定されすぎていた。そこをもう少し早く、深く掘り下げていけば、『泊エイジの見聞きしたこと』と透かし絵を重ね合わせるかのように、一致するはずだったのだ。

ただ一点、風都タワーでの件を除けば。

最後の作戦が成功したのは、警戒を厳重にしていたためではない。他ならぬ、シフトカー自体があのだ説明の時に近くにいなかったためだ。

「つまらぬことに囚われて、今更真実に気づいたか」

ダークドライブはせせら笑う。

くすぶる炎を足で切るようにして、ふたりに近づく。身構える進ノ介たちを煽るかのように、その外周をめぐる。さながら孤島に取り残された遭難者と、それが力尽きるのを待つ鮫の構図だった。

そして進ノ介たちは退くこともできない。あるいはうかつに踏み込むこともできない。他ならぬ、エイジがその怪人の内部で人質に取られていたからだだった。

「――二十年前、私は貴様に一度ならず二度までも敗北した」

パラドックスの右手の形が変わる。明確な怒りと憎悪を感じさせるかのように強く、泊進ノ介を指弾する。

「だが、同一にして二つのコアを掛け合わせた私は、それでも完全破壊をまぬがれた。ボディとは分離してしまい、コアは半壊したあの欠片となったが、それでも正気と狂気、現実とネットワークの狭間を漂っていた」

その執念の日々を反芻するかのように、指を畳んだ拳に、めぐる足取りに、力が加わった。

「だが、私は長い年月をかけて、ふたつの機を得た。ひとつは、貴様も

覚えがあるだろう」

「なに？」

「5886、と言えはわかるだろう」

にわかに出された四桁の数字が、進ノ介の脳裏で過去につながった。

「……ロイミュードの残骸の集合体か！」

本来存在しないはずのナンバーは、プロトゼロをふくめた全ロイミュードのナンバーを加算させた答えだ。

破壊されたデータの欠片が、生への執着と結びつくこと形を成した、自我なきバグ。

進ノ介がすぐその可能性に到らなかつたのは、彼自身がその案件に深く関わらなかつたためだった。

「当然、集められたデータの中には108わたしのデータもあった。5886が破壊された後、飛び散ったコアの破片を、私は未だに覚めやらぬ無意識のうちに取り込んだ。時間をかけて、だが故にこそ見つからず、悟られずに」

何度破壊されながらも、まともに自我を持てずとも、悪運と執念で復活を遂げる。進ノ介はあらためてこの機械生命体たちの、殖えることがないからこそその自己への執着というものを見た気がした。それこそ、創造主と同じように。

「そして気の遠くなるような長い年月の中、夢と現の中にあつた私を呼び覚ましたのが、半年前の我がボディの再起動だった」

半年前。『黄金仮面』たちが活動を開始するあたりの時期。

その符号は、決して偶然ではありえない。

そこには即座に理解を示したかのような春奈の顔に、ダークドライブは得意げな呼気を投げかけた。

「気が付いたようだな。そう、ギルガメッシュ001のボディは、元はこの私、パラボックスのものだ」

「そして今は自分のボディを奪った相手の、使いつ走りつてことか」

精一杯の虚勢を張りながら、進ノ介は皮肉を言う。だが、挑発によって相手の優位を崩すことはかなわなかつた。

「財団Xとイーデイスによって目覚めたあの身体と、私のコアは今なおリンクしていた。完全に記憶と人格を取り戻した私だったが、現実世界で行動するための仮初めの器が必要だった。……まさしく、運命とでも言おうか。同じように異次元をさまよっていたコレを見つけないのに、そしてそれをこの小僧に見つけさせるのに、それほど時間は必要なかった」

話は戻る。シフトカー、ネクストスペシャルを撫でながら、得意げに黒い怪人は嗤う。かつても敵として対峙した進ノ介だったが、それでも、パラドックスにその『形見』が触れられるたび、おぞましい気分になる。

「奥深くの領域に潜り込んだ私には、大部分のシステムへの干渉はできなかった。だが最初のギルガメッシュの邂逅の際に、奴と接触したことで、パスを完全に開くことができた。貴様らの動きは逐一、私を紹介してあの『黄金仮面』に筒抜けだったということだ」

「……文字通りの『スパイウェア』ということか」

雷声が轟く。

それに呼応するかのように、星月を覆う分厚い雲は急速に広がり流れ、ますます闇を深めていく。

「滑稽だったぞ、行く先々で悲劇が起こるそもその原因は、貴様らが私を連れ歩いているためだとも知らず！　呑気にヒーローごっこを楽しむ様はなあ！」

春奈が奥歯を噛みしめる音が、傍から聞こえた。

猛犬のごとく今にも飛びかかろうとする彼女を、進ノ介は再度抑えた。代わりに前に出る。

止めるつもりはなかった。春奈のT3アクセルの概要は進ノ介もスベック承知している。自分以上に、ダークドライブと渡り合えるかもしれない。

それでも、ここからは自分が先駆けなければならなかった。

ここまでの見通しの甘さの結果が、今この悪夢のような光景の再来だ。その清算をするために、泊進ノ介はここに立っている。

「俺の息子をどうするつもりだ？」

「しばらくは生体電池バッテリーとして使ってやるさ。中で枯れて使い物にならなくなるまで、私が本来の身体に戻るまで。このダークドライブはそのための交換条件でもあった」

ギルガメッシュとどのような約定を交わしたのか。そこまで踏み込ませるつもりはないらしい。

不自然なほどに首を傾けて身体をねじりながら、

「だがその前に」

と言葉を置く。

「……いつぞやの返札をさせてもらおうッ！」

翻ったその腕に、青い刃が握られていた。

進ノ介と春奈は磁石の反発のように、お互いに左右に飛び分かれた。その間の空間を、ブレイドガンナーの一線がよぎる。二の太刀が、蛇のように軌道をうねらせながら進ノ介を追った。

「何のためにこんな長話につき合わせたと思う？　今から死ぬ貴様らが未練や疑問を残さないようにしてやるためだッ」

「お前……ッ」

「今度は本当の息子の手にかかって、死ぬがいい！」

剣の把手を支えるようにして斬撃を防ぎながら「ふざけるな」と枯れた声を絞り出す。

激しい怒りが、胸の内から湧き上がる。

だが、それはおのれの私怨ではなかった。自意識が奪われ、知らぬうちに誰かを手にかける我が子の悲痛と、取り残される妻の悲嘆とを想い、彼は心のエンジンに火をともし。

もはや、銀色の輝き……マツハドライバー炎を再び手に取ることに、抵抗はなかった。

「俺の息子も、その力も！　二度とお前に奪わせはしない……ッ！」

逆手で胴にそれを取り付ける。持ち上げたスロットルに差し込むのは、鍵の形をしたもの。戦士として潜り抜けた日々の記憶ロケの結晶。

〈シグナルバイク・シフトカー！〉

本来量産型として開発されたそれは、流れ込んできた規格外の情報に対し、誤作動のメッセージを吐き出す。

だが、彼の心火は、そのシステムさえも超越し、ベルトと同調を開始した。

「変身ー！」

彼らの周囲にめぐる、炎の車輪。それが、戦闘から身を退いた進ノ介の身体を、ふたたび英雄のそれに変化させていく。

だが、それは彼の変身していた従来のドライブの姿ではない。

ドライブをスポーツカーだとするなら、それよりも一回り重層になった姿は、重戦車のそれ。

だが、装甲の分厚さに反してボディスーツから浮いて出るようなむき出しの基盤は、関節部から吹き出る白煙は、極限の危うさを見る者に与えるだろう。

その身から放出された力と熱の波動が、ダークドライブを一度は押しつけた。

だが、108にさしたるダメージはない。

「また、その急場しのぎか」

傲然と立ったままに軽侮の声を発した。

〈超・デッドヒートー〉

それはドライブであってドライブでない、イレギュラーな形態。

仮面ライダー超デッドヒートドライブは、二十年の歳月を超えて、ふたたび因縁の相手と対峙したのだった。



## 第六話：Dark Night (11)

泊進ノ介の変身したドライブは、雄叫びとともに、そして自ら吹き出す白煙を突っ切つてダークドライブへと挑みかかった。

が、108は避けもしない。真正面から、右腕一本で受け止める。押し返す。

しかし元より進ノ介は、このスペック差で競り合うつもりはないらしい。精一杯に踏み止まりつつ、伸ばすその手が目指したのは腕のシフトカーだった。

そこには108の意識が組み込まれているはずで、強制的に引き抜くまではいかずとも、ダメージさえ与えられればダークドライブは108の支配から

「無駄なことを」

パラドックスはその手を上から押さえつけて嗤った。

「私が何故今まで干渉できなかったこの身体を自由にできると思う？

すでに我が肉体を介し、コアのデータをすでにベルトに移してあるからだ！」

強引で力任せの正拳が、ドライブの体勢を崩す。

彼の言葉を証明するかのように、以前スタインベルト式のドライブーには、108の三文字が不気味に点灯していた。

進ノ介は反撃を試みるが、いかんせん性能差が開きすぎていた。

さながら絡む子どもをいなすかのように、進ノ介の渾身のパンチやキックの連打を、はたき落とし、振り払う。

反撃にくり出されたボディブローは、たった一撃で重装を破るほどの衝撃を与え、進ノ介の膝を折らせた。

「どうした？ 以前はもつと歯ごたえがあつたはずだが？ ……所詮は生身の人間。この二十年で、ずいぶんと衰えたよう、だなあッ！」

ドライブの腕を掴んだまま逆に離さず、ダークドライブは何度も踏みついたり膝蹴りを見舞う。合理的だが人道的ではない、泊エイジであれば決してしないであろうラフファイト。

春奈は動いた。

一度は進ノ介に止められたが、やはりあの戦力差では太刀打ちできないし、エイジの精神を呼び戻すことさえできないだろう。

駆け出した春奈だったが、ガイアメモリを手にした指先に刺激がはしった瞬間、反射的に足を止めた。

その小さな筐体がスパークを発している。ディスプレイが、明滅を繰り返す。

(やはり……調整不足か！)

風都タワーでトリプルAに変身したがゆえの、過度な負担。それがまだ残っている。

だが、そのまま看過されることが許される状況ではない。

いけるのか、と自問する。私に質問をするな、という自答が返ってくる。

そうだ、選択肢などもとより存在しない。

「変……身！」

〈Acceler!〉

やや濁りのあるガイドンスボイスとともに、背後のバイクが分解され、T3アクセルへの装甲となつて春奈を身を包む。そして、ダークドライブめがけて飛び蹴りを放った。

難なくかわされる。それで良い。元より、進ノ介を解放させて体勢を立て直させるのが目的だ。

彼の代わりに組み合いながら、春奈はやりづらさを感じていた。手足が命じた通りに動かない。

T3に匹敵するダークドライブの出力、自身のドライバーやメモリの動作不良。そんな外的要因もあるが、心情的な部分によるところも大きい。エイジを人質にとられているという重圧、見慣れたものともまるで違うファイトスタイル。それに苦しめられているということも、認めざるをえなかった。

持ち直した進ノ介が、ふたたび加わった。

横槍を突く形で飛来したドライブの拳をかわして、伸びきった腕を掴み、その身体を大きく振り回す。進ノ介は春奈に激突した。避けきれず、勢いも殺しきれずにつんのめったところを、ブレイドガンナー

の刃が襲う。

(おまけに、本人よりも偽物のほうが扱いが上手いときた)

舌打ちしたいのをこらえ、拳と剣とを打ち合う。

即席コンビは呼吸こそ合わないものの、互いの動きを読んで左右に分かれ、ほぼ完璧とも言える挟撃の体勢をとっていた。

だが、ダークドライブはくすぶる火やガレキを用い、狡猾なまでに、一対一の状況を作り出すことに徹底していた。

そういう演算と判断の速さ、視野の広さは人間の比ではない。

このまま分散するのはまずい。そう判断したふたりの仮面ライダーは、諮らうまでもなく一つ同じ地点にまとまった。

だが、それを見越していたかのように、ダークドライブの手の上で球形により集められた青い電光が、その場所へと投げつけられ、着弾とともに大きく爆ぜた。

防御する間も無く、数メートルのコンクリートを削りながら、ふたりは地面を転がった。

春奈は痛む全身を叱咤し、立ち上がる。

(どうすれば良い)

思い悩む。逡巡する。

出力が不安定な今のT3アクセルであったとしても、ダークドライブにダメージを与えることはできるだろうし、相打ち覚悟で挑めば完全破壊も可能だろう。だがそれは、そのまま負担が装着者であるエイジにかかることを意味している。下手を打てば、死にも至るだろう。

進ノ介の安否と意向を目で確かめる。

彼は、静止していた。

呼吸は荒い。膝立ちになりながら、総身から火花と白煙とを吐き散らしながら、スパークを起こす右腕を抱きかばうように。それでも我が子が封じられた黒い鎧を、じっと見据えたまま。

ダメージを受けているのはお互い様だが、見た目や108の言動から推察するに、それは万全のフォームではないだろう。もしや自分の認知していない部分で深刻なダメージがあったのだろうか。

「頼みが、ある」

危惧する春奈に、進ノ介は低い声でささやいた。

そのマスクから、苦しい喘ぎの切れ間に、ひとつの手段がもたらされた。

「……そんなことが、できるわけ、ないでしょう」

しかし、春奈がまず第一に示した反応は、一回り以上年上の男の正気への疑いだった。

進ノ介が冗談を言っているようには思えない。そんな状況ではない。こうしている間にも、彼の子を抱え込んだダークドライブは、勝利を確信しながら車道を闊歩し近づいてきている。

「T3アクセルの資料は俺も読んだ。できないはずはない。手はこれしかない。108とエイジを切り離すには、これしか」

たしかに、理論上で言えば可能だった。それを成すだけの技量も自信もあった。それでも、この場にいる全員を追い詰める、危険な策に違いなかった。

「しかしっ」

逡巡する春奈と、進ノ介はそれ以上の問答をするつもりはないようだった。

完全に起き上がると同時に、ドライブは疾駆する。

敢然とみずからの正規の次世代型に立ち向かいながら、進ノ介はみずからのドライバーの上辺を連打する。

〈超！ デッドヒート！〉

ベルトが叫ぶ通り、まさしくその突撃は決死行のようなものだった。

ぐんと一段階加速すると、砲弾のごとくダークドライブに肉薄する。

掴みかかる手の節々から、排煙が漏れ出る。それは熱を逃がすためというよりかは、主の生命をも吸い上げ、そのまま気化させエネルギーに転換させているかのようだった。

だが、ダークドライブは数歩押し返されただけだった。その必死さに対し、108は鼻で嗤うばかりだ。

「訂正しよう。衰えたのは、肉体ばかりではない。その頭脳さえも、ど

うやら錆びつかせたようだなあ！ 泊進ノ介ッ！ その程度では  
ダークドライブにさえ及ばないと、何度言えば理解するのだ!？」

ドライブの足が止まる。押し返されつつあるそのツギハギの装甲  
に、容赦なく、あるいは嘲り、なぶるかのように反撃の拳や膝が見舞  
われる。

それでも、我が子を救うべく、我が子の身体にしがみついて、離れ  
なかった。

——その意思の強さを見ては、照井春奈もまた、仮面ライダーとし  
て覚悟を決めざるをえなかった。

一本のメモリを、衛星を通じて転送する。

手を止め、寸時の躊躇のあと、彼女はアクシズAにそれをゆっくり  
と挿し込んだ。

「——いいや、身体はともかく、頭のほうはまだ健在らしいぜ……ロイ  
ミュード108」

いくらか往年の若さを取り戻したかのような口調で、彼は笑いを含  
ませる。

虚勢か。勝ち目のない戦いを自覚しての自暴自棄かあるいは……

その余裕の意味を凶りかねるかのように、108の動きが一瞬止  
まった。

みずからの腹部に打ち込まれた拳を強く抑えつけながら、進ノ介は  
静かに答えた。

「お前が教えてくれたんだ。そのベルトのリムーブの方法をな」

やれ、という鋭く乾いた声がかかる。

春奈の身体は、考えるよりも先に反応した。

〈LIGHTNING! MAXIMUMDRIVE!〉  
濃青色のガイアメモリを読み取った銃型のデバイスを、春名は組み  
合うふたりへと向けた。

銃口に、青白い電流がほとばしる。その光輝を浴びた瞬間、闇夜の  
遠目から見ても、明らかにダークドライブは動揺し、取り乱していた。

「貴様ア！ まさか……離せ、離せエ！」

ドライブの拘束を振り払うべく、108の攻勢は激しさを増している。

だが、どれほどの無秩序な暴力にさらされてもなお、進ノ介は離さない。食らいついたまま、叶わぬまでもその意志力でもって耐え忍び、みずから重石となつてダークドライブの行動を抑制していた。

「離れてください、泊刑事！」

銃口を構えたまま、春奈は吼える。

彼女の射程の先で、二世代のドライブの影が重なっている。

「構わない！ 俺ごと撃て!!」

「でもッ」

「撃てえ！」

そうだ。ダークドライブが動けなくなっている今しか、タイミングは存在しない。

進ノ介が振りほどかれるのも時間の問題だった。

——他に、とれる選択肢はなかった。

トリガーを絞る瞬間、まったく別の光景が脳裏をよぎった。

クリスマスのある夜。風都タワー、籠城犯、W、落ちる母、遅れる父、彼らを、なじる、幼い自分。

紫電が発せられた。

一条の流星のように伸びるその一射は、さながら春奈の動揺をそのまま写し取ったかのようにおおきくブレて、そして予想よりも、勢いが強い。

進ノ介もそれを見て取ったのだろう。

あろうことか、彼はその電流の前に回り込み、背で受け止めた。

他ならぬダークドライブを、いや泊エイジを、その直撃からかばうために。

そして、自身が電流の調整弁となつて、ベルトに膨大な電力を流し込むために。

「オオオオオオオオ！」

仮面ライダーは勇ましく声をあげる。刑事は、父は、声を発し、みずからを焼く激痛に耐えていた。

そして雷光を帯びたその手が、震えながらもドライブドライバーを握りしめる。

108と表示されたディスプレイが電光を浴びせられ、ノイズ交じりの、裏返った苦悶の悲鳴が轟いた。

小規模な爆発がその接点で起こり、一帯の闇を切り裂くかのような真っ白な稲光が、二色の断末魔の悲鳴もろとも、彼らを呑みこんだ。

## 第六話：Dark Night (12)

夜が、ふたたび暗黒を取り戻す。

電光が収縮した後、視覚こそ取り戻した春奈だったが、烟る煙火が視界を遮っていた。

「泊刑事！」

息苦しさとひどい臭いとむせ込みながら、彼女は彼の名を呼んだ。

もう一度、そして続けて三度目……呼べどもむなしく木霊が返ってくるばかりだ。

「……っ！」

思わずもう一人の彼の名を呼びかけたとき、霧の中から影が浮かび上がる。

身構えた春奈だったが、徐々にはつきりとしてくる輪郭に、拳と肩の力を緩めていった。

それは、脱力したダークドライブを抱えた進ノ介の姿だった。

「けっこう、来るもんだな……」

本人は変身も解けて傷ついていないところがないほどに散々な有様だが、それでも意識はハッキリしているし、両の足でちゃんと二人分の体重を支えている。

一方、ダークドライブも強制的なシャットダウンによって、解除が始まっていた。その装甲はキューブ状になって分解され、徐々に剥がれ落ちていく。ベルトも、黒焦げたディスプレイに忌まわしき三桁の数字が見えず、ただ点滅とスパークをくり返していた。

「父……さん……っ？」

その間隙を縫うようにして、エイジの声が漏れ聞こえる。弱り切った語調に、虚偽の響きは感じられない。エイジ本人のものだと確信が持てる。それは進ノ介も同じだろう。

「まったく、いつまでも寝ぼけるな。自分の足で歩け」

毒づき、安全な場所を選んでエイジを下ろしながらも、その口元に、安堵と喜びがある。

自分に向けて片手を挙げる刑事を見て、春奈もまた、胸を撫で下ろ



して、ほっと息をついた。

ずぶり、と醜い音がした。

びちやりと、血がしたり落ちた。

青い刃が、背と胸にかけて、進ノ介を貫通していた。

その場にいた、すべての時間が停止した。

凍りついた顔を上げた照井春奈も。

信じられない、と言わんばかりに目を見開き、後ろを顧みる泊進ノ介も。

「……………え……………？」

そして、ブレイドガンナーで父を突き刺した、泊エイジでさえも。

いったい、何が、起こった？

エイジの意識は、混乱と混沌の極みにあった。

彼の空白の時間を埋め合わせるかのように、この二時間ほどのメモリーをモニターが反芻する。

自分が知覚しえない、凶暴そのものの、ダークライダーの姿がそこには映っていた。

自分のものではない、醜悪な高笑い、彼の意識を徐々に覚醒させていく。

いったい、何が、起こった？

いま、いったい、なにを、した？

いま、自分は、なにを、して、しまった。

悪夢であろうと何だろうと、目を開けて正視すれば、現実はそこにある。血にまみれた父の背中がある。

そして、その背を刺し貫く凶刃が伸び、元を辿れば……………返り血を浴びた自身の手が、そこにある。

「おのれ……………よくも……………よくもオオ！ たかが路傍の小石風情が、何度もワタシに泥をつじえるとはア！」

自分のものではない声が、ダークドライブのマスクに響く。

知っている。ロイミュード108。今の今まで、自分の意識とこの姿を奪っていた存在。……かつての自分を、殺した存在。

その支配からはシステムは解放されつつあったが、その執念と父への憎悪が、ほんの一瞬……それも意図してかは知らないが、誰もの気が逸れた直後に上回った。

その報復に残る力を使い果たしたデータの魔物は、システムから排斥された。と同時に、ダークドライブのシステムも完全にダウンした。

ブレる視界の片隅で、そのコアが空中を漂いながら逃げていくのが見えた。だが、誰も追わなかった。追えなかった。

恐慌と耐えがたい吐き気が自分の中で相殺する。

感情の渦の中で、身動きが取れず、ただ酸欠のように、荒い呼吸を繰り返す。

「違う……こんなはずじゃ、こんな……っ」

言い訳めいた繰り返言を反復する彼に、進ノ介は生気をうしなつた目で振り返った。

怖気づいてしまつて退こうとする我が子を、死に体とも思えない力強さで引き留めた。

そして、精一杯、震えるエイジを受け入れ、抱擁した。

「すまなかつた」

という、かすれ声の詫びとともに。

「お前に、ずいぶんと辛くて、寂しい思いを、させちまつてたんだな……俺は」

意識の混濁のためか。……あるいは、今この瞬間を逃したら永遠にないと覚悟を決めたかのように。

彼はここまでの確執に対して謝っていた。

本当に辛いのは自分のはずなのに、子を想つてその声を震わせ、悲しみをにじませて。

「けどなあ、前のエイジの代わりだなんて……すごい勘違いだぞ？」  
固まるエイジの襟元に、すぎるように身を寄せながら、彼は語り続ける。

それはきつと、彼の生命を削るだけの行為のはずなのに、エイジはその腕の中で小刻みにわななくしかなかった。

「前のエイジおまえと今の英志おまえを、区別したことなんて一度もない。たしかに、お前に対する負い目はあった。けどそれは、きっかけに過ぎなかった……お前が生まれて、笑って、泣いて、成長して、それが、たまらなく嬉しかった。お前があんな辛い未来を乗り越えた先の、次の、平和な未来を生きてくれることが、幸福だった。お前たちがいてくれたから、俺はここまで戦えたんだ。どっちかが偽者かなんて、そんなこと、あるもんか」

父さん、とエイジは呟く。

英志、と進ノ介はおだやかに目を細めた。

「ほかの誰でもない。お前は、俺の、自慢の息子だ」

父の腕が落ちていく。全身から力が消えていくのがわかった。

必死につかもうとしたその手はすり抜けた。

泊進ノ介は、自身の血の海に沈んで停止した。

遠くで、照井春奈が救急車を呼んでいる。

間もなくして、その手配通りに駆け付けた救急車と、そして叔父たち<sup>ち</sup>がやってきた。

ストレッツチャーに乗せられて、父が運ばれていく。特状課の皆が、必死に彼の名や愛称を呼んでいた。

その息子をよそに、めまぐるしく状況は移り変わる。

膝を落として呆然とするばかりの青年に、声をかける余裕は誰にもなかった。

世界から取り残されたかのような状況で、青年は、涙さえ流さなかった。

ただ、贖いようのない罪だけが、あるばかりだった。

そして雨が、降り始めた。

## 第七話：Next (1)

聖都大学附属病院。

急患、泊進ノ介の受け入れ先として選ばれたのは、その大病院だった。

現場からは少し離れていたこの場所が選ばれたのは、深夜でも十分に対応できる設備と人員がそろっており、なおかつ実績があつたからだ。

摂理や常識から外れたかのような、未曾有のパンデミックを乗り越えたという、実績が。それも、幾たびも。

空港か、あるいは大コンサートホールかのものであるかのような待合室で、数名の男女がその広さを持って余すかのように集まっていた。あるいはじつと座り続け、あるいは廊下の左右をせわしなく往復し、あるいは壁を手足で叩いて。

そんな彼ら、特状課メンバーから離れた位置に、患者の息子は座っている。

雨に濡れた髪を拭かず、拭いてももらえず、ただうつろな目で、じつと床にしたたる水滴を見つめていた。

足音が、近づいてきた。

進ノ介のオペをしている方角から聞こえてきたそれに、彼……泊工イジ以外の全員が、食らいつくかのように反応し、視線を集中させた。白衣をまとったその男もまた、落ち着いた足取りで彼らに寄った。

「先生、進ノ介は!？」

取り囲まれながらも彼らのプレッシャーに気遅れせず、自身の前手で手を組みながら毅然とした態度をとっている。

それなりの歳だが、目元のあたりに鋭さと幼さをその医者は同居させていた。

彼自身は、執刀医ではない。

今なお、オペは継続中だった。そもそも彼は、救命医ではなく小児科医だった。

だが、泊進ノ介の個人的な知己でもある。その好意によって、部署

を超えてわざわざ報せに来てくれたというわけだ。

「急所は外れていたのだから今のは、どうにか。けど、ガイアメモリによる肉体への負担に関しては本人の回復力を信じるしかない状態です……けど」

「けど、なんですか?」

「今回の件だけじゃなくて、もともと刑事さんの身体に蓄積していた負担が、ここに来て一気に出ています。もちろん最善は尽くしていますが、それでも……最悪の結果だけは、覚悟しておいてください」

その物腰はやわらかく、だがハッキリと、状況がかんばしくないことを告げている。

彼の肩をつかんだ追田刑事を始めとした仲間たちに、悲嘆の色が浮かぶ。

「——ずっと、戦ってきたんですね。あの人は。たとえば変身できなくなっても、刑事として、仮面ライダーとして」

感心しているのか、医者として怒って良いのか。自身さえ迷ったような複雑そうな口ぶりで、しみじみと彼は言った。その視線が、ひとり離れた場所に座る青年を見つめた。

もとよりその素性、進ノ介との関係を、その医者は知っていたのだろう。

無骨な両腕をスルリと抜けて、エイジへと歩み寄った。

そして目線を合わせるように屈みこんだ医者は、ふっと表情をやわらげた。

「大丈夫! ウチの外科医は、優秀だから。『俺に切れない傷病もはない』!……なんてね」

その執刀医たる人物の物まねだろうか。両手の甲をかがけてみせて、ことさらに明るく振る舞っている。

「……大丈夫。君のお父さんの運命は、僕たちが変える。君のお父さんが刑事として戦ってきたように。僕らも、医者として。だから君も信じて待ってて。お父さんの強さと、そして君自身を」

水晶のようなきらめきを瞳に宿し、彼は見返す。

さすが小児科医。『こども』の扱いには慣れているといったところ

か。

皮肉な気持ちで自嘲で返すエイジの心に、その医者 of 言葉は遠い。君にもいつかわかるよ、そう言いたげに目を細めた彼は、白衣をひるがえしその場を後にする。

胸から下げた、赤いストラップ。そこから先の、ID付きのネームプレートには

「宝生」

と書かれていた。

## 第七話：Next (2)

医者が去ると、全員の胸にはふたたび暗い影が落ちた。

経過が伝えられ、今は、ただ治療室で戦っている当人を信じて待つしかない。それは理解しているが、それでもただ待つという行為は、それだけで彼らの心を疲弊させていく。

真綿で首を絞められるかのように、たとえような焦燥感とやり場のない無力感だけが、積もっていく。

そんな中、一番こらえ性のない人間が、ついにしびれを切らした。

追田現八郎は、拳で作って壁を叩き、本人が意図してかはどうかはともかく、衆目を集めた。

「だ、だいたい……お前らがコソコソ妙なコトやってっから、こういうややこしいことになっちまったんだろうがっ」

と、りんなどエイジを非難し始めた。

この事態の元凶となったエイジを名指しで詰らなかつたのは、不器用な彼なりの配慮であつたのか。

だが、本来なら聞き流してしかるべきその言葉に、  
「なんですってえ!？」

神経をとがらせていたりんなが、過敏に反応した。

「そもそもアンタが時代遅れなヘツポコな捜査ばっかやってるから、アタシたちががんばるしかなかつたんじゃない!？」

売り言葉に買い言葉の見本市というべきか。

自身にとつては痛いところを容赦なく突いてかかつたりんなに、現八郎は凶器的な大きな顔面を突き合わせ、

「ぬぁにい!？」

とすごむ。

「何よ!？」

とりんなは睨み返した。

天才科学者と肉体派刑事。相反する両者が同レベルの諍いをして  
いる間に、呆れたように、あるいは慣れ切つた感じで、西城究は仲裁  
に入った。



「やめなよ、ふたりとも……ああ、ごめんねエイジ君。いつもの痴話ゲンカだから、あんまり気にしちやダメだよ」

と、慰めのフォローを入れるが、その気遣いが、かえってエイジには突き刺さったようだった。

会話に加わらず、終始無言のエイジの前に、同じく今まで何も語らなかつた春奈が立った。だが、エイジは視線をわずかに持ち上げただけで、反応をしなかつた。

「追田りんなさん」

春奈もまた、彼が目の前にいないかのように、りんなをフルネームで呼んだ。

「ドライブドライバーは、まだ動きますか」

抑揚のない声で、そう問うた。

夫とにらみ合っていたりんなは、顔色を変えた。その怒りは夫婦喧嘩の延長線上にあつたような軽いものではない。もつと深刻味を帯びた調子になった。

「……まさか、まだ彼に戦わせようっていうの……ッ？」

何かと個性のアクも強く欠点も多いりんなだったが、一線を超えるような非情な女性ではない。自分に詰め寄らんばかりの勢いの彼女に、春奈は冷たい視線を流すばかりだった。

「本人がどうであれ、変身せざるをえないでしょう」と言い添えて。

「108のコアがベルトのリムーブの直前に逃げたのを見ました。この二十年間、復讐のみを支えに生きながらえてきた怪物です。泊刑事が生きっていると知れば、再度襲ってくる可能性は非常に高い。となれば、ロイミュードと対等に渡り合うためにはドライブの力が不可欠です」

淡々と道理を語られれば、科学者としての理性が納得せざるをえなかつた。

一度、かたく唇を引き結んでからやや間を置いてからりんなは

「ベルト自体は、初期化されてるだけで基本システムは無事よ。ただ、ソフトカーは別。……108がどんな置き土産を残しているかわ

かったもんじやないし、ギルガメッシュとの通信記録から、今の彼らの居場所を割り出せるかもしれない。だから一度念入りにチェックしないと」

エイジが変身するかどうかについては肯定も否定もせず、りんは答えた。

「では、そちらのチェックもなるべく早く」

「いやだ」

今まで沈黙を貫いていた青年が、春奈の言葉を遮った。

「いやだ。僕はもう、変身しない」

我が身さえも消えてしまいそうな弱々しい声音で、だがハッキリとした語調で、拒絶の意思を表した。

「そんな身勝手が許される状況だと思ってるのか」

そんな春奈の追及に、エイジは皮肉な笑みを浮かべて顔を上げた。

「そもそも、照井さんは僕が変身するのに反対だったじゃないか。それなのに、僕が嫌だって言ったら変身を強制する。……身勝手は、どつちさ」

「……」

「と言うか、照井さんには言われたくないよ、君が父さんを撃たなければ、今頃……ッ」

エイジの言葉は、途中で遮られた。

胸ぐらを掴まれて壁に叩きつけられる。

「エイジー」

半歩遅れて剛が声を出した。

だが、それは甥を案じるためのものだったのか。それとも決して言ってはならないことを口にしようとした彼への諫めだったのか。

「望んで撃ったと思ってるのか」

春奈の、引き絞られた眸に、光がわずかに波打っている。

「変身する資格がないと、今でも思っていると」

張り詰めた声が、空気を震わせる。

エイジが言ったことは、間違いではなかった。

だが正しいことをそのまま口にすることが、常に正しいとは限らな

い。むしろ、それを発した後に残るのは、尾を引くようなわだかまりと、言った本人の後悔だった。今のようにならぬ。

「……全部、僕のせいだった。」

春奈の手を強く払いのけ、だが力なく呟くように、言う。

「僕が108を連れ回したせいで、イーディスさんも、『アユム』も死んだ。他にも、大勢の人間が巻き添えになった。挙げ句の果てには父さんまで……僕が何かを選ぶたびに、状況が悪くなっていく。」

春奈は、変わらず睨んだままだった。

だが、その目元に垣間見える感情の断片は、りんなの思っているような冷血のそれではなかった。

「……好きにしろ。どのみちもう、ここに用はない。」

突き放すような物言いだったが、真実、彼女にはエイジに強制する権限も資格もない。少なくとも、自分自身ではそう思っているようだった。

108はともかく、ギルガメッシュがここに再来する可能性も薄い。

あのロイミュードに一度ダークドライブを乗っ取らせた時点で、おそらくは彼らの目的は達成されている。それゆえに、奴ひとりとその場を任せ、姿をくらましたのだろう。

それに加えてエイジが変身しないとすれば、監察の意義も失った。言った通り、照井春奈にはここにいられるだけの大義名分がないのだ。

泊霧子は、感情と理性の両面から、きびすを返して去りゆく彼女の内面を察した。

その彼女は、ただじつと窓を見つめていた。

音を立てて打ち付けられる水滴を、目で数え続けていた。

雨。

良くも悪くも、彼女の人生のターニングポイントには、常に雨が降っていた。

そして『彼』はその雨とともに現れ、雨とともに去っていった。

岩石ぼように、暗く分厚い果ての見えない雨の向こうに、霧子は在りし日の『彼』を暗視する。

プロトゼロ、仮面ライダープロトドライブ、魔進チェイサー、仮面ライダーチェイサー。

雨粒が激しく窓を洗うたびに、彼の幻影は姿を変える。

馴染みのある青年の姿に変じた彼は、表情を変えずに口だけを動かした。

「家族とは、そんなに大切なものなのか？」

いつかと同じようなその問いを突きつけられる。

こんな有様になっても、いや今だからこそ霧子の答えは変わらない。  
い。

(今でも……ううん、前よりもずっと、大切なの)

身勝手は承知のうえだ。

それでも彼女は、雨に向かって祈らずにはいられなかった。

「だからお願い、チェイス。どうか家族を助けて……っ！」

## 第七話：Next (3)

都外のさらに郊外、山麓の工事現場。

そこは、新たなテーマパークを開園させるべく確保されたスペースであったが、工事の途中に近隣住民の反対、利権問題にそれによる工賃の不足。様々な事情から作りかけのまま中止された場所だった。

……というストーリーのもとに偽装された、財団Xの拠点の一つだった。

極東支部における往年の超技術をかき集め、雌伏の時を過ごしている。

電波妨害などの隠蔽工作も万全で、最新鋭の衛星から監視したとしても、その瞬間、ジャミングプログラムが干渉し、自身を探る者たちに、何の変哲もない、廃材置き場のダミー映像を見せつける。

よしんば突き止められても、重火器で武装した無人機が、あるいは生産された怪人たちが、制圧などさせはしない。

これこそが、一時代を風靡した死の商人、財団Xの最後にして最強の砦。難攻不落の鋼の城だった。

——ただしそれは、外部からの攻撃に対しての話だった。

「はあ……はあ……っ、はあ！」

息を切りながら、研究開発部門の長、ペペルモコは廊下を走っていた。

彼の瘦躯を煽り立てるように、あるいはなぶるように、複数の足音が近づいていた。

ペペルモコが指を鳴らせば、その追走者を防ぐべく、生物兵器たちが現れた。

動植物をかたどったモノ、そもそも、何をモチーフにしているかさえ定かでないもの。

だがそれらすべてが無意味な有象無象と言わんばかりに、派手な破砕音とともに彼らは黄金の仮面ライダーによって爆破されていく。

いずれこうなることはわかっていた。

ゆえに、追い立てられながらも彼は冷静で、決められた逃走ルートを通過しているだけにすぎなかった。

そしてたどり着いたのは、施設の心臓部。

ひとときわ開けた空間に、砲弾さえも跳ね除ける分厚いガラス。

その奥に、掌をかたどった巨大な装置が鎮座していた。天いっばいに広がるカブセル状の船体があった。

「それが、お前たちの方舟か？」

同じ部屋の中で声が出た。

驚愕のあまり声が出なかった。尖った鼻を左右に振りながら、その声の主を追う。

「なるほどエニグマの転移機能は世界のリセットによって未完成となったが、観測装置はまだ生きています。そこで収集したデータをメガヘクスの残骸に転写させるというわけか。いやあるいはアンドアジェネシスから回収したこのデータか？ ……だが、残念だがメガヘクスの復元では、これの持ち味は生かせない。このライダー、いや怪物は、生物であるからこそ最大限の脅威となりうるのだ。データや機械化で再現しても意味がない。まあもともと、本人にとってはそのほうが幸福なのかもしれないけどな」

手中の一枚のカードをもてあそびながら金色の髪をなびかせたギルガメツシユは得意げに語る。

奥歯を噛みしめながら、ペペルモコは後ずさった。

「人に無断でこういうものを使おうとしていたということは、やはり俺への対抗手段を講じていたな？」

「対抗手段？」

馬鹿め、と口にして毒づく。

白い詰襟の制服の袖から取り出した端末。そこに展開したウィンドウをそのギルガメツシユの死角にて操作する。

「貴様らなどいつでも消去できた！ その数も減った今、もはや用済みだッ」

それを披露した時には、コマンドはすでに入力済み。あとは彼が内部から暴発するのを待つのみ。

……の、はずであった。

だが、何も起こらない。誤作動か操作不良か。そう疑って繰り返しても、正しくプログラムを入力しても、反応はなかった。

英雄の王の分身はせせら笑う。ゆったりとカードを懐におさめて腕を組み、余裕をもってふたたび歩み始める。

「やはりボディにキルプロセスを仕込んでいたな？」

そう言い当てられる。驚きはない。今、自分が出た強硬な態度と手にしたものを見れば、おおよその察しはつくだろう。

だが、問題は何故、それが起動しないのか。何故機能しないことを、本人が知っているのか？

その可能性は、限られている。

そして明敏な科学者の頭脳は、凡人のそれより早く察した。

「ま、まさか……ッ」

「ご名答。……このボディは、爆発しない」

褒美とばかりに、その腕が伸びた。その指先がペルモコの咽喉を撫でさす。

そして一転、力を加えて一気に圧迫した。

首の折れる音がする。

枯れ枝を踏むにも似た、人体から出ているとは思いがたい軽妙な音だった。

後腐れなく、不純物を始末したギルガメッシュは、あらためて、ペルモコが操作しようとしていた端末にアクセスした。

セキュリティを難なく突破し、足下にいびつな姿勢で転がる故人にはすでに必要ない権限を、一気に剥奪する。

彼がやろうとしていた事業を、自分たちなりのアレンジを加えて流用するために。

「データは持ってきたのか」

重厚な駆動音を響かせる、様々な機械の融合体に目を向けながら、ギルガメッシュは尋ねた。

その彼の頭の周囲を、三桁の数字がめぐっていた。その輪郭はまるでナイフで削ったかのようにささくれ立って、その節々や数字間の接合部分がスパークしている。

108。

みずからのナンバーそのものを示すデータとも物質ともとれる姿が、今のパラボックスロイミュードの全体像だった。

108は、無言で紫電を矮小な三字の間からほとぼしらせた。

端末でそれを受け取止めれば、その画面上にコードが連ねられていった。

ギルガメツシユは、はじめて機体から視線をそらした。自分たちが求めていたデータ。並行世界におけるドライブシステムの解析情報。

だが、目を通したのはそれだけで、あくまでも108のコアへは目を向けなかった。

「約定は、果たしてもらおう」

怒りを抑えたように胴間声で、108は言った。

ギルガメツシユは一顧だにせず、小型の車を足で床に、ぞんざいに滑らせた。

黒く平べったい車体を覆うかのように、暗く濁った赤蜘蛛の意匠があしらわれていた。

それを前に、ロイミュードのコアは固まった。

「——なんだ、これは……」

「そのバイラルコアがあれば、現実世界で行動するぶんには問題ないだろう」

「ふざけるな……ふざけるなあ!」

パラボックスは電流をほとぼしらせて嚇怒した。

「アレはもともと……私の身体ボディだ! 本来であれば、貴様から返還してしかるべきものだッ!」

その電光が、タイル張りの床を焼き焦がす。すぐ足下でその表面が吹き飛び、溶けても、ギルガメツシユは動じない。それどころか、おだやかな微小さえ浮かべていた。

「——実のところ、お前の欲深さ、虚勢と虚妄は、嫌いじゃない」



と、初めて108を見据えて彼は言った。

だがその腕は、先ほどと同様鋭く伸ばし、パラドックスのナンバーへと食らいついた。

そのまま絞めて碎かんばかりに力を込めれば、ロイミュード唯一の生き残りは、苦悶の声をあげた。

「だが、お前はみずからの私怨を優先させ、自分で果たすべき報復も、自分で獲得すべき権利も取りこぼした。他にも、こちらまで巻き込まれるような迂闊さが幾度あった？ そんな奴に、やすやすと俺の肉体をくれてやると思うか？ —— 凶々しいおねだりの前に、自分ですべきことをしろ」

それだけ言い切ると、ギルガメツシユはコアを解放した。

中空をただよっていた108は、呼気を荒く巻きながら、身近な場所にあったコンピューターへと飛び込み、姿を消した。

「納得したと思うか？」

コントロールルームの中へ、同じ顔と声を出してもうひとりのギルガメツシユが入ってきた。

もうひとりの自分に対し、見た目相応の少年っぽく、肩をすくめてみせる。

「いや、大方ふたたび報復に行ったのだろう。それが逆恨みか、さっきの話を『ちゃんと仕事をやり通したらボディを返してやる』と受け取ったのかまでは知らないがな」

「まあ、好きにやらせてやることだ。ただ、監視だけは怠るな」

そう言明したギルガメツシユは、あらためてふたりで、いや二体の身体を使い、作業を開始した。

ブラックアウトした窓ガラスに投影された、いくつもの操作パネル。

ギルガメツシユは薄く笑いながら指を動かし、データ内の設計図を中央に広げた。

そこには、ネクストライドロンの姿が立体として表示されていた。

## 第七話：Next (4)

病院から出た春奈はロータリーの平坦な道のりで躓き、おおきくつんのめつた。今まで、こんなことはなかった。少なくとも、捜査官となつてからは。子どもに立ち返ったかのような心地だった。

予想以上に、ダメージを受けている。

ドライバーも、メモリも、肉体も。

そして、彼女自身の精神も。

「ずいぶん有様だな」

そんな彼女に、男の声と姿が近づいてくる。

聞きなれた、だが久しく聞いていなかっただかのような錯覚さえおぼえる懐かしい調子に、女捜査官は渋面を見せた。

「先輩」

と照井春奈が呼ばれる人物は、インターポール内でもただひとりしかいない。

朔田流星は、明らかに不機嫌なバディに微妙な顔をしながらも、ひるむことなく接触した。

「今更登場とは、フットワークが重くなったんじゃないですか」

「定時連絡を怠つたのはお前だ」

流星は、自分たちの周囲を旋回するUFOガジェットを睨みながら答えた。

お互いの非難がぶつかり合う。

一瞬険悪なムードになりかけたものの、あちこちに火種を撒いていることを自覚し、春奈はため息とともに怒りを収めた。どれをとってみても、確かに非があるのは自分だ。

そんな常ならぬ彼女にいぶかしげに細い眉を吊り上げながら、上司は首をかしげて改めて問うた。

「――何があつた？」

そして春奈は、証拠を並べ立てられ観念した犯人のように、昨日の定時連絡から今までの経緯をすべてぶちまけた。

「なるほどな。……たった一晩で、なんて有様だ」

かいつまんで私情はまじえず、最低限の情報のみを開示したはずだったが、その裏側までくみ取ったかのようなまじめくさった調子で、流星はうなずいてみせた。

「だが珍しいな。いつものお前だったら、自分が必要と思つたものは首根っこを引きずつてでも連れて行つただろうし、相手に怒つたら最低二、三発は食らわせるだろ」

「……どんな野蛮人のイメージですか、それ」

とは言え、彼と出会う前、いや風都タワーがゲーム化された前の自分なら、どういう反応をとつただろうか。

春奈は一瞬考えたものの、すぐに答えが出なかった。

「だが、せめて言い返すぐらいはしただろう。何故、しなかった」

流星は重ねて質問した。

その名のとおり、一条の昴星のような、鋭く光るまなざし。それを拒むようにして、顔をそらし、背を向ける。

「言えるわけが、ないでしょう」

と苦さを押し殺して。

「彼は、あの時の私と同じだ。そして私は、あの時の父と同じだ。選ばれるをえない二択の中で、最良と思える行動をした。その結果が、取り返しのない過失だ。……結局、私もあの父と同じことをしてしまつた」

エイジや翔太郎たち風都の住人を除けば、自分の過去を知る数少ない人物だった。だが逆に、この先輩にどのような過去があるのかを、春奈は知らなかった。

だがその振る舞いから決して彼の仮面ライダーメテオとしての活動の一部が順風満帆であったとは言えず、一抹の暗影が差し込んでいくことは察しがつく。そのせいか、自分に対しては少々甘いきらいがあることを、春奈は知っていた。

——いや、そも仮面ライダーとは、誰しも背負った、あるいは背負わされた罪を抱えて闘う者なのかもしれない。

とはいえ、そんな言葉で今の自分の感情に整理がつくとも思えない

し、父も、自分も許すことはできなかつた。

「そういう貴方こそ、どうなんですか？　ここに自分自身で赴いたということは、何かそちらでも進展があったのですか」

振り返った時にはすでに春奈の両目に感傷の色はない。冷徹なエージェントが、男の瞳に映っていた。

「言っただろう。『たった一晚で、なんて有様だ』と」

とても分かりにくい言い回しで、流星は肯定した。

スーツから取り出した自身のアストロスイッチを操作し、内臓されていたデータが春奈のガジェットへと転送される。UFOから照射された光線が、廃工場か、でなければ遊園地跡といった感じの荒れ地の立体映像となって映し出された。

「つい先ほど、財団Xのアジトを割り出した。風都タワーの比ではない、かなり大型の機材が搬入されたのも確認されている。今まで巧妙にカモフラージュがされていたのにも関わらず、そのプログラムが突然解除されたんだ」

「——罫の可能性は？」

「ありえるが、俺の印象では『もう隠す必要がなくなったからいつでも来い』といったところだな。もう猶予は残されていないようだ。明朝、仕掛けるぞ」

春奈は無表情で首肯した。

「で、大丈夫なのか？」

と流星に問われた。

「戦意喪失した彼は、もはや戦力として期待できません。放置しておいても、無謀な戦いを挑まないでしょう」

春奈は、無表情で返答した。

「俺が言ってるのは、お前のことだ」

流星は我がことのように、重く、苦し気な息を吐いた。

だが、それも一瞬のこと。武術家としての呼吸法をくり返し、表情から緊張や陰がとれていく。

春奈の痩せ我慢とは違う。感情を無理やり押し殺すのではなく、柳のように勢いを流して自らのうちに流し込んで力と換える、気構え。

その自己制御法を、後学のためにも食い入るように、春奈は見ている。  
た。

彼女に、朔田流星は重みのない口調で言った。

「じゃあちよつと、気晴らしにでも行くか」

「……………は？」

思わず聞き返す。

「久々の日本だ。羽を伸ばすには良い機会だと思うがな」

「いや」

猶予がないと言ったのは貴方自身でしょうよ、と言いたい春奈の先回りをするように、流星は答えた。

「そうは言っても、お前のこのザマじゃ返り討ちに遭うだけだ。それに俺も、いろいろと支度をしている最中だ。すぐに出撃というわけにもいかないんだよ」

理路整然と反論されれば、元来理屈屋の春奈としては返答のしようもない。

それに、流星の所作は冷静そのもので、この絶望的な状況に知性が吹っ飛んだ、というわけでもなく、思惑があつてのことのようだ。

「——しかし、出かけるといつてもどこに？　芝居でも見に行きますか？」

皮肉をまじえて言ったつもりだったが、

「まあ、そんなところか」

先輩は肯定も否定もしなかった。

「こんな時間帯に、わざわざ世界中に、自分の芸を配信してる奇特なヤツがいてな。ちよつど近くでほかの知人と会う約束もあるから、その時間つぶし程度にはなるだろ」

「芸？」

聞き返す春奈に、流星の顔にほんの少し、苦みが戻ってきた。

それをあえて見せようという、覚悟のようなものも垣間見えた。

「伝統芸能って奴だよ。……まあ、あいつの芸なんて、邪道で悪趣味も  
いいところだろうけどな」

## 第七話：Next (5)

「……でね、そこで閻魔様が提案したわけですよ。『どれ丁稚の歌吉とやら。そんなに死んだお友達を蘇らせたってんなら、一人アタシを笑わせてご覧なさいよ。そしたら返してやらんこともない』『えっ、返して頂けるんで?』『いや返すとは言っていないよ』『えっ!?!』」

笑いが起きる。

「ただまあこっちはヒマを持って余してしようがないんだ。だからお前さんの頑張り次第じゃあお友達の魂を返してやろうじゃあないか』『ええええ、それはもう励ませていただきます。何しろアタシはこう見えてIQ600もありますからね。がっかりさせません』『ほうそりやあ良い。で、どう笑わせてくれるんだい?』『はい、変顔で勝負させていただきます』」

嵐のような笑いが、またそのホールに響き渡る。

流星に誘われてきたのは、筋書きを聞いたこともない創作落語だった。

シニカルで生真面目な彼にはおおよそ不釣り合いな組み合わせで、彼自身は半笑い、薄笑いと言ったところだが、周囲の反響は良かった。同時通訳されているライブ配信も、洋の東西を問わず好評のようだった。

話の節々には他者を皮肉る悪意めいたものがあって、春奈の笑いの嗜好からはやや離れていたが、談ずる落語家の高い力量は感じられた。

話のテンポ、表情の作り、登場人物になりきる一挙一動。芸事にはとんと無縁な春奈だったが、どれをとっても一流とわかる。

「うあっははは！面白えー！」

途中、あたりを憚らない大笑が、朗々と響く演技をかき消した。

それを背に受けて、流星は苦笑を漏らした。

ふと、その落語家と目が合った。いや、その視線が推移していく過程で、偶然かち合ったというべきか。

落語家らしく、お調子者然とした細目に、何か鋭く、刃のような感

情が忍ばせてある気がした。

そしてそれは、どうにも自分の隣の上司に向けられていくような気がした。

当人はどうか。

ただつまらなさげに鼻を鳴らし、用は済んだとばかりに席を立つ。春奈もまた未練などなく、流星の中座に従ったのだった。

「どうだった？」

自分から席を立つたにも関わらず、演芸ホールから出た流星は施設の軒下で藪から棒に尋ねてきた。

「噺家としての力量があると思います」

極力私情を排した評価を告げると、

「まあ俺は好かないけどな」

と、誘っておいて身もふたもないことを言われた。

「……では、何故ここに？」

と問えば、

「俺にも付き合いがあるからな」

とこれまたそっけない答えが返ってくる。ただその横顔には、喜劇を観た後とも思えないような苦みばしったものがあり、

「あーらら、やっぱり流ちゃんじゃない」

という親しげな呼び声が、ますますその苦味を増させた。

上司と部下、ふたり揃って振り返れば、つい十分ほど前に見た顔があった。

「まさかホントに来てくれるとはねえ。電子チケットを送ってあげた甲斐があったってもんだよ」

ニコニコと相好を崩した親しげな表情。噺家特有の、ふしぎと聞き取りやすいしゃがれ声。

だが、どことなく座で感じたように、そこには一抹の剣呑なものを感じざるをえない。

取り巻きを適当にあしらい、散らしながら、その落語家はまっすぐに春奈たちへ、いや流星に歩み寄って来た。



「ああ、お前の芸でも待ち合わせのヒマ潰しぐらいには使えるからな」「おやずいぶんな物言いじゃないか。これでも世界をまたにかけろ落語の伝道者なんだけどねえ。……さて、そんなアタシとかけて、鉄火巻きを踏んづけちまった寿司職人と解く。さあお嬢さん、その心は？」

『海苔に乗ってる』

春奈に扇子とともに向けられた謎かけに、流星がすかさず口を挟んで応じた。

いよつ、と落語家は扇子の先を指先で打ち鳴らし、流星にわざとらしいほどの喝采を浴びせた。

「さつすが流ちゃん。頭の回りがやつぱり良いねえ」

「お前のシヤレと芸のレベルが落ちただけだ。よりにもよって、自分の恥を全世界に配信するなんてな」

先の演目のことを言っているのか。もとより皮肉屋めいた彼だが、この人物に対しての風当たりは、とくに強かった。

「やだなあ、流ちゃん」と、その毒を落語家は笑って受け流した。

一歩進んで流星に視線を合わせると、

「あれは、あんたの恥でもあるでしょ」

声を低めて目を眇め、彼は至近であれば明確に汲み取れる敵意を流星に飛ばした。

「だからあんたに招待状を送ったんだ。忘れてもらっちゃあ困るよメロスの旦那。……まあ、余計なものもついてきたみたいだけど」

自分のことを言われているのか。そう思った春奈は前に出ようとした。だが、扇子を突きつけ落語家はその機先を制した。

「ああああ、別にお前さんのことじゃないさ。って言うかなに、てつきり来るならあの根暗な嫁さん連れてくると思ったんだけどねえ。いやさつすが人間プラネタリウム、『新星』を見つげるのも落とすのもお手の物って？」

傍目にはまったく要領をえない会話だったが、両者の間に流れる不穏な空気は伝わってくる。

だが、『人間プラネタリウム』という呼称は、朔田流星という人間か

ら連想し得るものではない。

仮面ライダーメテオという、彼のもうひとつの姿を知らずして、出てこないキーワードだ。

「それとも、カミさんには嫌な思い出を見せたくなかったかい？ 当時相当怖がってたから。——笑わせるねえ！ そんな目に遭ったのはそもそもあんたが」

「憶えてるさ」

饒舌に語りながら、扇子で煽るように流星の胸を叩く。その手を、彼は払いのけた。

そして訳はわからずとも口を挟むことができず、成り行きを見守るほかない春奈を横目で一瞬見やってから、あらためて対峙した男を睨み返した。

「あれは、俺とお前の罪だ。俺たちは共犯だ。だから、ここに来た」

短く区切るような強さで、流星は答えた。

道化じみた相手はどう受け取ったのだろうか。

彼の笑みが消えた。虚を突かれたかのように細い目を開いた。敵意をしばませ、つまらなさげに鼻を鳴らした。

「つまらない男になったねえ、流星」

「お前の落語よりよっぽどマシだ。もつと精進しろ」

男は、もう一度だけ、だが言葉とは裏腹に、楽しそうに笑った。

「それじゃあヒマなアンタと違ってあたしや忙しい身の上なんでね。消えるとしますよ。……さてお別れの言葉とかけてまして、途中で縫えなくなつたミシンと解きます。さてその心は？」

『お糸増いとまします』

流星の解に、きびすを返した落語家は手を振るだけで、その成否は答えなかった。

鼻で嗤つてそれを見送る流星に、春奈はようやく話を振ることができた。

「あの男、何者なんですか？」

流星と一言で片づけられないような関係であることは推察した。

だが、仮面ライダーであることまで知っているとは、ただごとでは

ない。

今までに疑問にさえあげなかった過去の詮索を上司にぶつけた春奈は、自分で考えられるかぎりの可能性を考え、精神的衝撃にそなえた。

だが、その予測を、流星から発せられた真実はおおきく上回ってきた。

「奴の名前は鬼島夏兎<sup>きしまなつじ</sup>。かつて俺たちが戦っていたゾディアーツの十二使徒がひとり、キャンサー・ソディアーツ。ホロコープスという組織の幹部だった男だ」

## 第七話：Next (6)

かつて、天ノ川学園高校という一校では、生徒がスイッチを使ってゾディアーツという怪人に変身するという怪事件が頻発していた。

適性を持つのある生徒たちにスイッチを手渡していたのが、黄道十二星座になぞらえた上級ゾディアーツたちで構成された組織だった。

他ならぬ学園の理事長であった我望光明が学園とともに設立した、彼のためだけの組織。

それがホロコープスだった。

鬼島夏見は、かつてそのうち蟹座を司る幹部だった。

「——おい、そんな怖い顔をするな」

帰る道すがら、雨の中、傘の下の春奈の表情を見て、流星は苦笑を漏らした。

まったく、笑いこそしないだけで悪感情はすぐに顔に出る部下である。

「スイッチチャーの多くは、未成熟な若者ばかりだった。実際に組織を運営していたのはごく一部の成人メンバーで、その多くも死亡している。中には、記憶を奪い取られて自身がゾディアーツであったことさえ知らない連中もいる。スイッチを押す前後の事情もかんがみて、ロイミュード特措法同様、情状酌量の余地ありと彼らは放免もしくは減刑となった。それはホロコープスも例外じゃない」

「……更生している態度とは、言い難かったです」

「そうだな」

流星はそれを否定しなかった。

春奈の懸念、いや疑念はおそらく的を射ている。

「鬼島はゾディアーツの中でも異質な存在だ。そもそもあいつは、ホロコープスに選ばれたわけでもなく、偶然手にしたスイッチを使っていた愉快犯だった。そこから十二使徒まで覚醒し、倒されるその最後までみずからの行いに罪悪感をおぼえることがなかった。今になっても、もしキャンサーのスイッチがあれば、ヤツはためらうことなくそれを押すだろう」

「そんな人物を、何故……？」

春奈は問う。ごく自然なクエスチョンに、流星は一度だけ苦笑でごまかそうとした。

自分でも、いまだ心底でくすぶる思いを、あの小憎らしい落語家に対する感情をうまく言語化できないでいる。それを強引に他人にわかりやすく説こうというのだ。一瞬言葉を詰まらせるのも、無理らしからぬことだった。

「ヤツのおかげで、解決した事件もあつてな。それに、力を喪えば自分からつまらない犯罪に手を貸すような男じゃない。時折、ああいう底意地の悪いちよっかいを出してくるが、それさえいなせば、まあそれなりに味のあるヤツだよ」

流星は空を見上げた。

「だからこそ、もう二度とあいつの手にスイッチは渡さない。押させない。それが俺なりの、あいつへの友情……なのかもな」

八月の終わりの空である。

多くの星座が都心の夜空から失われて久しいが、ましてや今日は雨が降っているが、分厚い雨雲の向こう、今なお輝く星がある。

「俺たちが戦ったそれらの敵は、人間だった」

流星は、雨音の合間につぶやいた。

鬼島のように、絶対的な価値観とプライドを持った奴がいた。

宇宙や我望に対する憧れからゾディアーツになった女性たちがいた。

最低で卑劣な人間だが、みずからの存在の重さを知らしめるために命を賭した男がいた。

死すらいとわかない絶対的な忠誠心を持った漢がいた。

歪んではいたが、交わした契約のために友人を救ってくれたヤツもいた。

一度は悔恨と復讐心に取り付かれながら、みずから正気に立ち戻ったヤツもいた。

——裏切ってしまった友への贖罪のため、巨悪を相手に孤独な戦いを続け、若者たちを陰で見守り、導いてきた人がいた。

「信念の強さでは決して俺たちに引けをとらなかつた。彼らにもまた、すべてを賭けるだけの理由と苦悩があつたんだらう。じゃあ、俺たちと悪の怪人を分けるものは、なんだ？」

春奈は答えない。洒落つ気のない傘で目元の冷たさと弱さを隠す。かつてであれば、ためらいなく「秩序に反するほうが悪」とでも答えただらうが。

だが、悪いことだとは思わなかつた。

彼女もここに至るまでに、いろいろなものを見てきたようだった。それらは決して、無駄でもなければ照井春奈を弱体化させるものでもなかつた。

流星は歩道橋の前で足を止めた。春奈が追いつくのを待った。

やがて並び立つた彼女の肩に手を置き、流星はふたたび言った。

「春奈。俺たちは仮面ライダーだ。けど、その前に人間なんだ。時にはゾディアーツやお前の知るドーパントのように、自分を見失つて道を踏み外すことだってある。その時、仮面ライダーと怪人を分かつものがあるとするならば、それは力や信念の強さじゃない。……他人の弱さを受け入れる、優しさだ」

「……弱さを、受け入れる……？」

「俺は、友人達にそう教えられた」

自分がかつてそうだったがゆえに。

自分がかつてそうされたがゆえに。

春奈は黙って先を行く。

だがその背の向こうでどういう表情をしているのか、誰を想っているのか。流星にはわかる気がした。

「許してやれよ」

流星は追わずに言った。

誰を、と言及する無粋はせず、ただ彼女の背を押すために。

「でなきや、お前自身が許せなくなるぞ」

返答はない。

ただ無言で階段を歩き始めた。

だが、彼女の足取りに再会したばかりのような、おぼつかなさはない。

い。出会った当初のような、不必要なまでの力の入り方もなかった。安堵と確信とともに、流星は部下を見送ったのだった。

雨足が弱まった。

彼の背後の一面で、雨音が収まった。まるでそこだけ太陽がやってきて晴れたように。

「……我ながら、ずいぶん説得力のないことを言ったな」

そう独りごちで、苦笑を漏らす。

「いいや」

それを否定する声が、雨音の収まったあたりで聞こえてきた。

目を柔らかくして細めて、流星は振り返った。

「お前だから良いんじゃないか。お前の言葉だから、ここにビシバシ来るんだ」

グレーのスーツの胸のあたりを拳で叩き、流星に強く指を突きつけ無尽蔵の友情と信頼とを示す。

……そこにはかつて、自分が止めた心臓がある。

本人が気にしていないから、男同士、今更互いに蒸し返すことはない。それでもあの件を思い出すと、鈍く痛みが差し込んでくる。

「お前も、りっぱな『教師』になったんだな。流星」

だがそんなことにはまったく気遣わずに、屈託無く笑ってやってみせるこの男には、やはり銀河をかき回すかの如き豪快さと、宇宙規模の度量があった。

流星はそんな親友に一度微笑みかけてから、あらためて向き直って言った。

「わざわざ来てもらって悪いな。……イカロスの捕らわれた先がわかったから、直接伝えにきたんだ」

「ところで、よくあんなな嘸で爆笑できたな」

「え？」

「あれ、俺たちの地獄大喜利がモデルだぞ」

「えっ!?! あれオレらの話だったのかよ!?!」

……あんの蟹野郎オ

!

「……まったく気づいてなかったのか……」



## 第七話：Next (7)

雨は、途切れることなく続いていた。

量こそそれほど多くはないが、分厚い雲が覆っていた。

永遠に続いて街を水没させてしまうかのような錯覚さえ起こしそうだった。

その中で、待合室で、エイジは停止していた。春奈からも見限られ、ついに一言も発さなくなつたエイジを氣遣つて、ひとりそこに取り残されていた。

じつと床を見つめていた。いや、たしかに目はそこへとむけられているが、精神が、目から入ってくるはずだったあらゆる情報を拒んでシャツトダウンしていた。

だが、視覚を閉ざせばかえつて他の五感が鋭敏になる。

自動販売機の小刻みな振動が絶え間なく聞こえてくる。コンセントだけがつながられた旧式のテレビの電流が、はめこまれた壁の向こうで滞留している。

そして、靴音。それもスニーカーのようなカジジュアルなものではなく、どっしりとした革靴が鳴らす音だ。

加えて言えば、わずかなぎこちなさが、その歩行のテンポに見出すことができる。

やがてその音は、エイジの手前で止まった。

「よう」と、懐かしい男の声が、うなだれた頭へと落ちてきた。

早瀬明が、そこにいた。

「早瀬……さん？」

「おっ、憶えてたか。最近仕事仕事で会えなかったからな。つい忘れられてると思つてたよ」

感心感心、と相槌を打つ父の友に、

「僕に、怒りに来たんですか」

と、率直に尋ねた。

「怒ればお前の親父は意識を取り戻すのか？」

そう、逆に問い返された。

「お前は、これ以上ないぐらい自分が悪いと感じている。なのにこれ以上何をどう咎められる？ だからみんな、お前を直接責めたりしないんだ」

余計なお世話だというのが、率直な気持ちだった。

むしろ、すべての怨嗟をぶつけられて現八郎にでもタコ殴りにされたほうが、いくらか救われた心境になったことだろう。

「むしろそうされたほうが良かったか？」

その思いを先回りするかのようには、早瀬は重ねて尋ねた。

「……だってそうでしょ。現さんの言うとおりで、僕のせいで事態が悪化した。人が死んで、多くの人が犠牲になって……これ以上、何をどうやったって罪は償えない」

晩夏もいいところで、空調だって抑えめにさせられている。だが、エイジは指先から自身の身体が冷えていくのを感じていた。

「そうだな」

早瀬は安易な慰めは入れず、それを肯定した。

無意識下でそれを求めていたエイジの甘えを、突き放すように。

「けど本当にそれだけだったのか？」

「え？」

「たしかにお前は取り返しのつかないことをした。追田夫人に聞いたが、人の死も幾度となく体験したんだろう。でも、彼らはお前を恨んだのか。後悔にまみれながら死んでいったのか」

「……………それでも、何もしてやれなかった」

「だが、彼らは何もお前に残さなかったのか？ それは、お前が何でもこなせる完璧な存在だったからか？ 逆に、たまたまその場にいたのがお前しかいなかったからか？」

早瀬は問いを重ねていく。答えはしない。すでにそれは、エイジの中にあると言わんばかりに、理知の瞳を細めて言った。

答えは、否だ。

イーデイスは、泰然と悟ったように、無念や未練を一言もこぼさず、チエイスのボディを解放した。

もうひとりの自分と融合した『アユム』は、自分と笑って手を打ち

鳴らし、自分に現実世界のことを託してくれた。

照井春奈は、なんだかんだ悪態をつき反目し合いながらも、たしかな信頼を感じるようにはなってきた。

父、泊進ノ介も、命をなげうって自分を救い、そして赦してくれた。そして知らない『自分』が、父に託した未来に、自分たちは生きている。

春奈の先輩、桜井侑斗、左翔太郎、火野映司、あの小児科医、特状課の面々にも、忠告やいくつもの想いを語られ、学び、託されたものがある。

早瀬の言うところの、たまたまそこにいたという偶然もあるのだろう。

だが間違いなくその想いを受け取ってきたのは、そこにいた自分だった。

そしてそれらが、誰かにかんたんに託してしまえるようないい加減なものだったとは思いたくない。

全部を嘘や幻にしてしたくもない。

だが、それにどうやって報いれば良いのか。それがわからない。

——いや。

その答えさえもまた……わかっていた。

自分が許せないから認めたくないだけで。

自分のしたことを正当化なんてしたくないから、考えないようにしていただけで。

「エイジ」

と、早瀬はあらためてその名を呼んだ。

「お前はたしかに、少し道をそれたのかもしれない。これからの長い道のりで、停止することもあるだろう」

けど、と言葉を区切って早瀬は、膝をついて目線を合わせる。

かつて自身の脚に負い目を感じていた相棒にも、おそらく彼はそうやって背を押したのだろうか。

厳しくも、温かみのある叱咤だった。

「通り過ぎた場所へ逆走はできない。お前がキーを回したんだ。誰も

運転を変わってなんかくれない。どんなに遅くてもいい、みつともなくて、拙くても良い。だがそれでも」

自分たちの周囲を、ここまでの旅路がめぐる。

——トライドロンで君を助けたとき、とつきに身体が動いてた。考えるのをやめていた。でも多分、だからこそ、それが本質なんだ。今いる誰かを救うことができるのは、今この時の僕の正義だけだ。

——自分にとって何が正しいかを決めるのは、その決断が悲劇を生むのかどうか。彼ら自身だ。僕らが決めていいことじゃない。

ああ、そうだった。

答えは、常に、自分の傍らにあった。

「あいつや他の連中に申し訳ないと思うなら、全力で突っ走れ。今その一瞬の、泊英志らしきで」

今までずっと、そうやって戦ってきたように。

ここまですっと、そう託されてきたように。

——『英志』らしき？

顔を上げたエイジだったが、背筋に突如雷でも浴びせられたかのような衝撃が襲った。

もちろんそれは肉体的ではなく、精神的に。

「しまった」という独語は、思わずこぼれた。

「エイジ？」

ゆっくりと立ち上がりかけた早瀬の前で、エイジはすばやく立ち上がって、きびすを返した。

あいさつも、礼もしている暇はなく、内心でそれに対して何度も詫びを入れた。

だが、その寸時さえも惜しかった。

それこそ、今迫りくるその『悪』を振り払えるのは、自分以外にいなかった。いや、泊英志がやらなければならなかった。

「完全復活……とまではいかなくても、ようやくエンジンがかかったみたいだな」

取り残された早瀬は、脚を丹念に伸ばしながらそうつぶやいた。

「ずっいるいなア、早瀬さん」

それに、応える声があった。

合わせて、曲がり角の陰から三つの影が伸びてきた。

「人が言おうとしたこと、全部ひとりで言っちゃうんですから」

そう言つて顔を覗かせた詩島剛を顧みて、彼は微笑んで見せた。

「これが、俺の本領だからな」

「五十三分と二十一秒、出るタイミングを逃して立ち往生していたのが無駄になったな、剛」

悪意もなく、だがサラリと言つて現れた狩野が現れた。

ギルガメツシュ襲撃時に、進ノ介に次いで手ひどいダメージを受けた彼は、頭に包帯を巻き、手を吊っていた。

そんな彼の様子に構わず、剛はするどく睨みつけた。

「るせえ。つか、具体的に言うんじゃねえ」

と文句を垂れる彼の影から、バツが悪そうに追田りんなも顔を覗かせ、手を振った。

そんな漫才のような取り合わせに噴き出しそうになるのをこらえつつ、早瀬は剛の肩に手を置いた。

「君も、自分のすべきことをすれば良い」

その激励を受け、剛の顔に重く影が差し込んだ。

ふだんこそ子どもっぽさの抜けない、責任感や社会的立場といったものを感じさせないが、その実彼ほど他人の痛みに繊細で、責任感の強い男はいない。

エイジの姿から、内面的なものではなく、外からの危機が迫っていることを悟つたのだろう。

覚悟を決めた男の貌を、りんなへと向ける。

「りんなさん。頼みがあるんだけど」

「そう言うと思つて、とうに整備済みよ。ラボにあるから、取つてきなさい」

皆まで言うな、という調子で、りんなはすかさず応答した。

目を丸くする剛に、彼女は茶目つ気をまじえて肩をすくめて見せた。

「もう何度おねだりされたと思ってるのよ。何考えてんのかぐらい、お見通し」

「さっすが」

剛はほろ苦く表情を綻ばせた。

「ずいぶんと彼に入れ込んでるんだな」

早瀬は剛に苦笑した。

「まあ、そりゃあ」

剛は言葉を一瞬詰まらせた。

「あいつは、昔のオレでもあるから」

つまらない意地を張って、ひとりで勝手に突っ走って……大切な人間を、何度となく危険にさらした。大切なものを、幾度も取りこぼした。

「もうあいつに、同じバカはさせたくない。姉ちゃんを泣かせたくない。……『お前』も、そう思うよな？」

感傷とともに、彼は自分の上着へと目を細めていた。

が、その目元はすぐに違和感で歪んだ。

ジャケットやジーンズのポケットをまさぐり、あるいは裏返したりして、何かを探しながら、しきりに首をひねる。

そして、

「あいつ、どこ行った……!?!」

と独りごちたのだった。

## 第七話：Next (8)

「……ごめんなさいー!」

病院の待合室で、エイジは追田現八郎と西城究に深々と頭を下げた。

「父さんが目の前で犠牲になって、ようやく自分がバカだってわかった。頭が冷めて、自分がとんでもないことをしたって理解した。到底償いきれないことって自分でも思ってるから、許してほしいなんて言わない。だけど……っ」

苦しげに、だが早口でそうまくし立てるエイジの肩に、ふたつの手が置かれた。

究のものと、彼が腕に抱えた人形のものだった。

では残るひとり、『現さん』のほうはどうか。

いわゆる古い日本人体型といった体躯だが、骨組みがガツシリとしているぶん、ただ目の前に立たれるだけで威圧感がある。

長年の刑事生活で鍛えられた太い腕を組んで、唇を引き結んでいた。

萎縮してみせるエイジの前に無言で立っていた現八郎だったが、刹那、クワつと大きく目を見開いて、究を押しつけるようにして青年の肩を掴んだ。

「よく、わかってくれたなあ……!」

……などと、感極まったような泣き笑いで。

究はやや迷惑そうに顔をしかめていたが、そんな現八郎の様子を見ては色々と吞まれて何も言えず、エイジを気遣うように、曖昧に笑って同調した。

エイジは先ほどまでの様子とは打って変わって、好青年然とした微笑みを返して言った

「父さんにも、お返ししたいんだ。……処置後の病室って、どこだった?」

ふたりの話によれば、オペを終えた泊進ノ介は、そのまま東棟の一

室にて安静にさせられているという。

やはり一番のネックはガイアメモリによるダメージだったが、風都より取り寄せたという事例や資料が、間一髪進ノ介の 生命を食いつないだようだった。

もつとも、その資料というのはかつてガイアメモリの魔力に取り憑かれた凶悪犯が、自身をも含めた臨床実験の産物であり遺物なのだが、それが人間の生命を逆に救ったというのは皮肉以外の何物でもない。

だが、そんな理論を一読しただけで把握し、みずからの技術に取り込んだ執刀医もまた、その時代を代表する名医という高名にふさわしい手腕の持ち主といえるだろう。

しかしそんなことは彼には関係のない話だった。

進ノ介の生死。それこそが、自分が今気にするべき一点だった。

現八郎らに見せていた表情とは打って変わり、引き締まった面持ちで彼は泊進ノ介のいる病室へと足を速めた。

だがその前に、細い影が立ちはだかった。

——武装を、していた。

右手に、ブレイドガンナーを掲げ、手首にはシフトブレス。

腰にはシフトカー三種を収めたベルト。変身できないことを除けば、ダークドライブとしての装備一式をすべて身につけていた。

そして、うなだれがちの顔には暗い影が落ちて、さながら亡霊のようでもあった。

ろくに手入れもされていない黒髪の奥に、静かに、だが確かな憎悪を滲ませて……鏡のように同じ顔を、エイジへと向けていた。

動揺と不審とともに、その身を止めたエイジだったが、

「はっ」

と、呼吸を吐き出した。

「なぜ分かった、と聞くまでもないか」

ひどくいびつに顔を歪ませた。



それは目の前にいる『本人』には、決してできない表情だった。

「お前には分かるんだよなあ、エイジ？ 何しろ僕は、お前なんだから」

エイジ、否『泊エイジ』を模倣した何者かは、肩を揺らすようにして嗤った。

感情の動きとともに、その瘦躯に砂嵐のようなものに覆われた。一瞬、鋼鉄の怪人の姿が露わになった。

ロイミュード108。

それが、復讐のために泊進ノ介に接近しようとした、彼の本来の名だった。

「違うとは言わせない。僕はお前の姿形だけをコピーしたわけじゃない。当然、かつてのお前になりすますために、記憶や感情まで模倣している」

エイジの偽装に戻った108は、再び進み始めた。いや、エイジに向かって、歩み寄った。

エイジは立ったままだ。指一本動かないし、一声も漏らさない。ただ目線だけが、同じ顔の怨敵を追っていた。

「つまり、どれだけ否定しようとも憎もうとも、僕の大部分はお前の中から生じたものだ」

一歩の間まで詰め寄った。腕を伸ばして指を、その胸に突きつける。

「お前は、心無い正論で相手の想いを踏みにじり、偽りの言葉で他人の隙を突いて操ろうとする。そんな自分が上手く立ち回れていると自惚れている醜悪な人間だ。世界が変わろうとも、お前という人間の本质は変わらない」

前の時間軸ではろくに会話もせず葬ったが、ようやく面と向かって言ってみることができた。

その痛快さから、108は腹の底から笑った。

「……………」

対する青年は、項垂れらまま、今にも消え入りそうな声でつぶやいた。

「そんなこと、お前に言われなくてもわかってる。僕はどうしようもない人間で、そのせいでここに来るまでに多くの人間を傷つけた。でも、だから今ここにいます。だからこそ」

彼の手からかすかな異音が聞こえる。腕に、不自然な力みを感じる。

「お前だけは……僕がケリをつけなきゃいけないんだよッ！」

刹那、顔と同時に手が持ち上がり、ブレイドガンナーの銃口が火を吹いた。

そしてマズルフラッシュが視界を埋め尽くし、互いの写し身をかき消した。

それが薄らいだ直後、新たなる光が、その煙の渦中から発せられた。その粒子を浴びた世界が、停滞する。

煙の動きは遅く、窓に打ちつける雨は、その水粒の変形が視認できるほどに鈍化する。

『どんより』とした世界の中で、動くモノはふたつ。

ひとりの青年と、金と黒の二色が渦巻く、雷雲を思わせる異形の怪人。

両者は一度距離をとって状況を確認し、そして互いに雄叫びをあげながら再び激突した。

## 第七話：Next (9)

ベルトが初期化されていようと、ネクストスペシャルのシフトカーが修理に出されていたとしても、ブレイドガンナー自体の機能はまだ生きている。

ダークドライブによる腕力のサポートがない分、多少の重みは当然加わってはいるものの、それでも振り回すことが苦というほどではない。

ロイミュードのボディにも有効なダメージは与えられる殺傷力を保ったままだ。

加えて、支援の三機はまだ活着している。変身能力こそないが、ただ腰元のホルダーに提げておくだけで、重加速を無効化できる力がある。

それに、ベストコンディションでないのはパラドックスだって同じだろう。

ギルガメッシュが用済みの相手の復讐に付き合うはずがない。あのボディ自体は、本来のものではなく、通常のバイラルコアから精製されたものに違いない。

他のライダーやロイミュードを圧倒したとされる全盛のスペックではないはずだ。

条件それ自体は、現状においてはかぎりなく対等に近い、はずだった。

(なのに)

その一撃を加えるまでが、あまりに遠い。

剣に引きずられるように振り下ろした決死の一太刀は、たやすく避けられ、代わりに強烈な打撃が腹に見舞われる。

うめきながらつんのめる彼の頭を、金色の右腕が掴む。その爪が鉤のように鋭く変形し頭皮に食らいつき、大きく横薙ぎに振り回した。

その軌道上にあった備品や医療器具が破損し、その破片が容赦なく、防ぎようもなく背に突き当たり、絶え間ない激痛がエイジを襲つ

た。

血がにじみ、頭蓋がきしむほどに締め上げられた頭が、悲鳴をあげることさえ許してくれない。その遠心力は、手足や内臓がねじ切られるかと思われるほどの負荷を、エイジの肉体に与えてくる。

解放されたその先に、ロータリーと棟内をへだてるガラスの壁があった。

とつさに腕で顔をかばったエイジは、破片で腕や手を切りながら、雨降る屋外へと放り出された。

もはや、満身創痍だった。病院という場所柄もこうなつてはもはや皮肉というべきか。流血と傷のない場所を、探すほうが手間、という状態にまでエイジは追い詰められていた。

いかにパワーダウンしたとはいえ、人智を超えた力に、エイジは打ちのめされた。人と機械生命体が単純に争えば、ここまでスペック差が出るというのか。

そして父はどうして、変身できたとしても、こんな強敵に臆さず最後まで立ち向かうことができたのか。

——幼いころ、それを聞いたことがある。

「おとうさんは、どうして

淡く苦い笑い声とともに、父はなんと答えただろうか……？

「変身もできない貴様が、私に勝てるものか」

108は嗤い、この事実の核心を突いた。

「たとえば変身できなくとも、僕は仮面ライダーだ！ ……そうありたいと……思うッ」

そう吠え返したエイジが起き上がるよりも速く飛んできた蹴りが、彼の胸を叩いた。濡れたコンクリートへと、その肉体を昏倒させた。

「いいや貴様はライダーなどではない。変身能力を奪われ、自分さえも奪われ、何者でもなくなつて私に敗れて死ぬのだ。それがどの世界においても貴様の運命だ」

エイジの意識が、明滅をくり返す。

暗転と復帰をくり返す視野の中で、自分を踏みにじる108の影が変化する。

完全体のパラドックスとしての姿、ナンバープレートをついた素体としての姿、そしてエイジの姿、奇妙な白い着衣をまとったかつてのエイジの姿。

それは自分が見ているだけの原因か。それとも高揚によるヴィジョンのブレか。

「そして今度こそ私は、泊進ノ介に報復を果たしたうえで、この世界で完全復活を果たす！」

「……ッ、ロイミュードは、とつくの昔に滅んでるのに……かつ」

「それがどうした。むしろ好都合だ」

冷ややかに笑いながら、エイジはエイジを踏みつけた。

「私を同胞と認めず見捨てたハートたち、蛮野と004といった対抗馬もない。肉体さえ取り返せば、残機も少ないギルガメッシュなど恐るるに足らん！ この私こそが、唯一無二の、そして絶対の機械生命体として、この地上に君臨するのだ！」

両手を広げ、雷雨の中でそう高らかに宣言し、鋼鉄の悪魔は狂笑した。

——そして、知らずエイジ自身もまた、激痛をこらえて笑っていた。無理矢理にはなかった。絶望して我を失ったわけでもなかった。

ただ、自然に笑みがこぼれた。

思い出した。

理解した。

そして悟った。

それゆえの、笑みだった。ひどく、自嘲を含んではいたが。

ああせめて、もう少し早くに思い出していれば、気づいていれば、こうはならず済んだものを。

「……なにが、おかしい？」

すでに負かした相手に嘲笑されるほど、腹が立つことはない。

今エイジが考えているこの理屈は、その性格をコピーしたパラドックスにも当てはまるらしく、はじめてその低い音声から余裕が消えた。

「だから、お前は人間に、父さんに負けたんだ」

負けた、そうハッキリとエイジが口にした瞬間、パラドックスの怒りが瞬間的に沸点にまで達したのがわかった。

鬼のようなマスクの目元が左右非対称に歪み、エイジの襟髪をつかんで引き立たせた。

力なく青年は、吊り上げられるがままになっていた。

幸い、氣道までは抑えつけられていない。

「お前が目覚めた未来では、蛮野天十郎が世界を支配していた。そして二十年前、お前は父さんに負けた。どっちも、もうすでに終わったことなんだよ」

「黙れ……」

「過去にいつまでもしがみついて、先を見ようとしていない。なのに、未来に対する執着ばかりは誰よりも強い。だからお前は、どこへも進めないんだ。その矛盾<sup>パラドックス</sup>が、お前の正体なんだ」

「黙れエー！ 貴様に、何がわかる……!?!」

そう問い返す怪人に、今度はエイジが、意地の悪さを見せる番だった。

「お前が、言ったんだ。……そうさ、それさえも、元は僕の感情だった」  
元は同じ生体情報ゆえか。

掴まれたその手から、パラドックスの激情とともに、覚えのない記憶が流入してくる。

そこには、かつての自分がいた。自分の知らない、泊エイジの煩悶があった。

孤立奮闘していた彼だって、人間だった。弱さを抱えて、生きていた。

——ああ、こんな時に、話に聞く父さんがいてくれたなら……

——そうだ。過去からやり直せれば……そうすれば、きつと父さんにだって会える。会いたい……

「けど、もう終わりだ」

それをぐつと奥歯で噛みしめ飲み下し、その苦みを今のエイジは力に換えて、パラドックスの怪力を押し返した。

「僕は過去お前を超える。次を手に入れる！」

こじ開けた片腕の隙間に、ブレイドガンナーの銃口をねじ込んだ。放たれた光弾のいくつかが、竜巻のような意匠の胸部で弾けた。多少はダメージがあつたのか、くぐもつた断末魔をあげるロイミュードに、エイジは逆の拳を振り上げた。

その先にあつたのは、異形の顔ではない。鏡を見ればいつだって見られる、自分の顔。構わない。そのまま殴り抜く。なんてことはない。取り返しのつかないことをし続けたそいつにずっとそうしてやりたかつたのは、他でもない自分そいつ自身だつた。

パラドックスはノイズとともに姿を戻してエイジを振り払つた。

吹き飛ばされた衝撃で、頼みのブレイドガンナーも取り落とした。

だがエイジは諦めない。自身の武器を拾っていては間に合わない。パラドックスが武装を展開するよりも早く、組みつく。

その必死さに、金と黒の魔人は再び声を轟かせた。

「いくらあがいたところで、貴様の罪も過去も、消えるものではない！」

「だから、そんなことは知ってるんだよ！　ただ、そこに立ち止まるのはもう止めた！」

人の身で、ロイミュードには対抗できない。

対峙したこのわずかな時間で、エイジは骨身に沁みて理解していた。だが、あえてそこに意識を向けられないように必死で抗えば、ふしぎと身体が軽くなった。重心に力が入り、ありえないことにパラドックスを押しとどめることに成功していた。

父流に言えば、「考えるのはやめた」という境地か。

(ああ、そうだ)

あの時たしかに、父はこう答えた。

「人は、変われる生き物なんだ。英志」と。

「俺も戦う前は、いや戦ってる最中でも、しょっちゅうしくじった。けど、もう二度と、あの時と同じ間違えはしないと、その都度誓った。やり直しはできないが、次こそは同じように苦しんでいる誰かを助けら

れる。コピー元のルーツをもとに進化するロイミュードと人間の成長は、そこが違う。それが人間の本当の強さ、つてヤツで、ロイミュードの一步先を行けたんじゃないかな。……今は、わからなくても良い。けどお前も、そういう人間になつてくれると良いな」

少しはにかみながら父は、まっすぐに自分を見据えて言った。

(ああ、そうだ！)

過去は決して切り離せない。

それがたとえ闇の中から生まれたモノだとしても。あるいは石油のように黒く、ドロドロとした罪だったとしても。

だがそれでも、そこから目を背けず受け入れて、自分の中に正しく組み込めば、きつと明日へと手を伸ばせる燃料に換えられる。

そして過去とは、決してそんなものばかりじゃない。

何気ない一言、わずかな交流。ひとつひとつは闇の中の些末な輝きでも、集めればきつとそれは、真っ赤な太陽にも成れる。

それを背に受けて、自分は、泊英志は変わる。

変身してみせる。仮面ライダーとして。

「ナメるなあアアアア！」

パラドックスの怒号が響く。あるいは、悲痛な叫びだったのかもしれない。

とにもかくにも、その全身から発せられた雷光を浴びて、英志は飛ばされた。距離を開けられた。視界を取り戻した時にはもう時遅く、パラドックスの右腕は機関銃へと変形していた。

それを突きつけられても、英志の心はもう折れなかった。ブレイドガンナーをなんとか手繰り寄せようとするが、その時間もない。肉体の疲弊も、限界に近付いていた。

終わりだ、とパラドックスが宣告する。

ボディから構築された実弾が、正面からはありありと見て取れた。

負傷を覚悟し、本能的に顔をかばおうとした彼の懐から、何かがす



り抜けた。

ちいさなものだった。素早いものだった。英志に劣らず傷だらけ、  
だった。

紫色の軌道を直線的に描きながら、それは正確に弾丸を跳ね除け  
た。

鎌で刈り取る死神のように。

……あるいは、獲物を見定めた狩人<sup>チエイサー</sup>のように。

「なんだと!？」

驚愕に声をあげるパラドックスをよそに、それは、その小型のバイ  
クは、緊張から解放されて半開きになっていた英志の右手に自分から  
収まった。

その名を、彼は知っていた。

「……シグナルチエイサー……」

その多くが地下深くに多くが凍結されている中、地上に現存してい  
る数少ないシグナルバイク。

あるロイミュードのボディを材料に構築された、特殊なタイプ。

剛が後悔と追悼を込めて、ふだんは肌身離さず持っている、その口  
イミュードとの友情の証。

その彼、『始まりの仮面ライダー』であるチエイサーが、変身に用いて  
いた、彼の分身であり形見。

それが今になってなぜ再起動したのか。なぜ英志を守るのか。

その多くは分からないが、もしそれが世界を未だ彷徨う彼の意思で  
あるならば……おそらくその使命は、共通している。きっと、応えて  
くれる。

「START OUR MISSION」

浅い呼吸とともに、ベルトのアドバンスドイグニッションをひね  
る。

ディスプレイがリングを表示し、シークエンスを開始する。

英志は意識をその新たな相棒に同調させるべく腕を交差させてか  
ら大きく回転させた。シフトブレスに、シグナルチエイサーを走らせ

た。

そしてあらためて、真摯なる覚悟と願いとともに、その言葉を紡ぐ。

「変身」

その形態は、本来はその男のためのものなのだろう。

いつかきつとたどり着く未来。戻ってくる彼のための、新たなるドライブシステム。

プロトドライブでも魔進チェイサーでもチェイサーでもない、だがロイミュードであり仮面ライダーでもある彼の独自性を十全に活かすための、新たなる姿。

本来、英志がそのシグナルバイクを使用しても、変身しようとしてもできるものではない。

だが、そのありえない奇跡が、あるいは見えざる何者かが彼の信念を認めるように、あるいは、死してもなお『彼女の家族を守る』ために、現実となって青年の肉体を包み込んだ。

素体となっているのはダークドライブだが、マスクの視覚センサーは、従来の青に代わってオレンジが点灯していた。顔の右半分をモノクルのように、銀色の強化モジュールと保護プロテクトが覆い、視覚情報を拡張している。

下地のボディースーツは銀色となり、そこに黒い外部装甲が重ねられている。だがそこに刻まれたエネルギーラインは、雷のような青の直線ではなく、濃い紫の、それこそ打ち付ける雨のごとき曲線だった。

〈DRIVE!・TYPE……GET!・NEXT!〉

一挙に流し込まれた情報の処理を終えたベルトが、新たなる未来の仮面ライダーの名を響かせた。

## 第七話：Next (10)

「……バカなッ！　このようなドライブは、ありえない……っ！」

108の鬼のような面貌に、驚愕もろもろの感情が浮かぶことがない。だが、その上体の揺れこそが、彼の受けた衝撃を十二分に物語っていた。

だが、彼は劣化していたとしても怪人だった。それも、幾度となく戦闘と謀略を重ねてきた、上位種だった。

思考を切り替え、武器を持ち上げる。ガトリングが火を噴く。

だが動揺の隙を突いて間を詰めた泊英志は、そのまま勢いを殺さずパラドックスに飛びついた。

もつれ合いながら、水沫を飛ばし、泥水に沈み、雨にまみれ、轟く雷鳴の中で、彼は自身の分身に接近戦を挑んでいた。

力の量質、技のバリエーションを組み合わせてスマートに戦っていたダークドライブが、汚れや自身の危険さえも顧みずラフファイトを繰り返している。

ようやく、一皮剥けたといった塩梅だろうか。

だが、惜しみなく別の未来の技術を投入した本来のダークドライブと違い、多くの重加速がらみの技術が凍結されたこの世界で設計されたであろうそれは、戦術の幅においても単純なスペック差においても、やや劣っている。

パラドックスが、自身の手で生えた銃器を撃つのではなく、ドライブの側頭部に叩きつけた。

火花が散る。今まで優位に立っていた英志の上半体が大きく揺らいだ。

すかさずロイミュードは、そのまま銃口を揺れる英志の頭部へと突きつけた。

だが、英志の身体はその射線上から大きく逸れた。ダメージからか、否。意図的に、身体を崩したのだ。相手が他ならぬ自分自身であったからこそ、彼はそういう大胆な行動をとれたのだろう。

彼のいるはずだった空間に、命中するはずだった銃弾が通り過ぎて

いった。

その脇の、108の死角から、英志は右手を突き出した。

そこに握られていたのは、刀身を失ったブレイドガンナーのような武器。いや逆にそれこそが、ブレイドガンナーのベースとなった武器なのだ。

ブレイクガンナー。

チェイサーを代表する基本的な武装のひとつ。

〈GUN〉

低い音声を鳴らしたそれは射撃モードに移行し、エネルギーの弾丸を射出、逆に108のボディを撃ち抜いた。

姿勢の均衡を喪った両者が、おおきく転倒する。

持ち直すのが早かったのは、被弾をなぬがれたダークドライブの方だった。

〈BREAK〉

すばやく格闘モードに移行すると、その拳を雄叫びとともに振り抜いた。

「……少しはマシンになったじゃないか」

そこまで戦闘を観察していたギルガメッシュは、彼らから認知できない場所から控えめな賞賛を送った。

病院の上層のバルコニー。雨避けのためにゴルドドライブの姿を借りたギルガメッシュ008は、そこで両者を遠視していた。

そして考えていた。

すなわち、パラドックスに加勢するか否か。

形勢は英志の方向へと傾きつつある。今更108の生命など惜しくもないが、『忠勤』に励んでくれた配下をむぎむぎ犬死させては王としての沽券に関わる。

それに、実利の面で言っても、英志とドライブシステムの復活は厄介なものだ。

たとえヒーロー面をした連中がどれほど攻め寄せたとして、正面切って挑まれればすべて撃退できる自信がある。それは、彼らの持ち

得ぬ重加速というアドバンテージがあつてこそだ。

それを無効化できる相手はいないに越したことはない。

だからこそパラドックスの私怨による報復を黙認もしたし、仮初めのボディだつて与えたのだ。

「まあ、潰しておくに越したことはないか」

それほど重要なことでもないが、目についた羽虫は潰さなくては気分が悪い。

その程度の心境でもって、彼は地上に降り立つべく手すりに指をかけた。

が、その刹那、鋭い飛び蹴りが彼の軽さを咎めるように、その胴をついた。

生身の人間の飛び蹴りなど、ダメージがあろうはずもない。その蹴りを跳ね返されたその男にしてみても、ほんのあいさつ代わり程度の不意打ちだったのだろう。ただ、無然とした表情で姿勢をただし、白いジャケットの襟元を掻き合わせる。

「よりにもよって、その姿かよ……」

などと毒づいて。

その男の横顔は、ギルガメッシュたちや財団Xが收拾した情報の一項と合致した。

「詩島剛か。悪いが、ライダーになれないお前になど興味がない……と言いたいところだが」

赤い視覚センサーが、正面を向いた剛の腹部へと向けられる。

中年男性のものとも思えない引き締まったその上から、銀のベルトが巻かれていた。

マツハドライバー炎。

だが泊進ノ介が使用していた量産型のものではないはずだ。新品同様に輝くパーツのディテールは、数回使つて破損するような、粗悪品のそれではない。

「ハーレー・ヘンドリクソンの置き土産か。墓場からでも掘り出してきたか？」

とおちよくると、怒りに顔をしかめながらも

「りんなさんが預かってたのさ。てめえみたいな小悪党をブツ倒すために使う日のためにな」

「だが俺の前でそのベルトを巻く意味、わきまえているのか？」

重加速に対抗できるものはこれ以上はいらない。

要はこの男は、わざわざ自分に倒されに秘蔵の武器を持ち出してまでやってきたというわけだ。

「お前こそ、わかってんのか。そんなふざけた格好でオレの前に立つた意味を」

冷やかな怒りとともに、剛は応じた。

だが、そんな自分をあえてたしなめるように首を振った。

「——いいや、それだけじゃない。よくもオレの兄さんを、かわいい甥っ子をさんざんに痛めつけてくれたな。その落とし前は、キツチリつけさせてもらうぜ」

そう気を吐いた剛の手が、ベルトのマフラーを模した部分を持ち上げる。

そしてそこに、白いシグナルバイクをセットしたのだった。

〈シグナルバイク〉

ベルトから、懐かしい音声が聞こえ、全身を振動と熱とを伝播させていく。

甥の確固たる決意、変わりたいという悲痛な願望の叫びは、剛の耳にも届いていた。

そして同時に、彼の心を深く強く打った。

(そうだ、英志。人は変われる)

たとえどんな呪われた出自だったとしても、どれほど道を違えようとも。

清く幸福に生きたいと手を伸ばしつづける限り、いつかは。

それを証明するために、そんな誰かを守るために、彼は、詩島剛は仮面ライダーで居続ける。

「さあ、英志！ Let's……変身っ！」

高らかな宣言とともに、彼はスロットを拳で押し込んだ。

ミュージックホーンのような調子のシークエンスの後、その全身は雨をもはじくまばゆい白光に包まれた。

ゴルドドライブに扮したギルガメッシュがそれが完全に形作られる前に動き出した。

「追跡！」

剛はそれを難なくかわし、挑発的に指さした。

「撲滅！」

それに乗ったギルガメッシュが繰り出した二撃目を全身を旋回させながらくぐり抜ける。すかさず三撃目のナツクルが飛んできた。腕部に装着された白いグローブが、それを挟み込んで直撃を防ぐ。

「いずれも、マツハ！」

右手に展開された射撃武器、ゼンリンシューターを水車のように回して反撃を畳みかける。

「仮面ライダー……マツハ！」

名乗りの隙を突く形で仕掛けられた足払いを、狙われたほうの片足を持ち上げてやり過ごす。

ギルガメッシュの正拳が風を切り裂く。白と赤のマフラーをなびかせて、仮面の戦士となった剛は今度こそ真正面からそれを受け止めた。

「もうオレに隙はないッ！」

そして、戦士、仮面ライダーマツハは完全復活と同時に得意げにうそぶいたのだった。

## 第七話：Next (11)

どこかで、爆発音が聞こえたような気がした。閃きが垣間見えた気がした。だが、それは雷光や雷鳴にかき消され、雨の帳の中には、両者の闘争のみが存在していた。

純粹かつシンプルな殴り合い。いつまで続くのかさえ分からない決定打に欠ける不毛な応酬が続いていた。万一看る者がいたとすれば、目を背けずにはいられない。そんな惨状が、そこにはあった。

やがて示し合わせたように、それぞれが打ち出したパンチがほぼ同時に直撃してのけぞった。

わずかに開けたその空間スペースに、互いの銃器がねじ込まれる。

危機感によるためらいは、ほんの一時。

だが次の瞬間には、ゼロ距離射撃がそれぞれの胸で衝突した。

一発撃って終わりではない。終わりにしない。終わりにさせない。狼同士が食い合うような、連射が続く。

苦悶の声を絞り出す。苦痛の嘆きが漏れ出す。だがそれらはすぐに、互いの聴覚を殺すような気がします雄叫びへと変わった。つんぎくのような鉄の弾ける音曲。その果てにあったのは膝を突いた両者の、白煙とスパークだった。

「おのれええ……！」

108は憤る。英志は溺れるような呼吸を反復させる。

108の機関砲は、多くの弾丸を浴びて大部分をえぐられ、根元から折れて崩れた。

だが、露わになったその手中には、複数のバイラルコアが握られていた。

わずかに躊躇を見せた後、パラドックスは左右に広がった胸部からそれを埋め込んだ。

そこにプログラムされている武装の情報を過剰に取り込んだ機械の身体が、膨張と変異をくり返す。

金銀左右非対称の色を持つ、コウモリの翼、蜘蛛のボディ、後部リアには蛇のごとき尾。



あるいはそれを組み込んだ巨大な自動車。

本来の形状とはかけ離れた暴走体となったロイミュードは、絶叫にも似た咆哮とともに雷雨の中で飛翔する。

当然、イレギュラーな変形に、コアが無傷でいられるはずがない。尋常でない負荷がそこにかかり、自我には破綻が生じる。

だがそれでもロイミュードは、みずからが殺すべき相手を確実に捕捉していた。

本来のダークドライブとは無縁の今の形態では、ネクストライドロンのリンクがつかない。呼び出すことはできない。

よって上空よりの攻撃に対し、今の英志には迎撃手段がなかった。地上で往生している英志に、容赦なく砲撃がばら撒かれた。だが、

彼にそれが触れる寸前、自走してきたその『一台』が、彼らとの間に割り入り防いだ。

くすぶる火煙の中から、死神のごとき銀の髑髏がその顔を覗かせた。

黒いボディとそれを彩る紫の炎も組み合わせ、敵を連れていく地獄の光景を想起させる。

ライドチェイサー。

それを模したシグナルチェイサーと同様に、呼ばれもしないのに封印を破って唐突に現れたそれを、英志はしばし呆然と見ていた。だが、すでに上空ではすでに第二射が装填されている。そこで停止する選択肢は、ない。

飛びつくようにまたがった英志は、グリップを回した。

仮の主を乗せて、死神の愛馬は疾駆する。

矢次ぎ早に射出される空爆を、その車体を左右に振り分けながらかわし、被害の拡大を避けるために、隣接する立体駐車場へと飛び込んだ。

それを追って、暴走したパラドックスもまた飛び込んでくる。

それで良い。これで、高低差は埋められる。

坂道を駆け上がり、上のフロアへ。パラドックスの車体の両サイド

から展開された機関銃が、容赦なく英志の背へと迫っていた。

大きくターンをしながら、その弾丸と向き合う。

その手に、バイクに格納されていた武器が吸いついた。

〈シンゴウアックス〉

信号機と大斧が一体化した、製作者のセンスが爆発したような奇妙なその武器は、英志の手に納まった瞬間自身の名を告げた。

おおきく横薙ぎに一振り。自分に迫っていた攻撃を払いのける。

だがその弾幕が晴れたときには、すでにあの巨大な車体の姿がなかった。

風の流動を、センサーが捉える。英志はライドチェイサーを急発進させた。

闇の中から、駐車場の支柱を粉碎しながら108が横合いから奇襲を仕掛ける。間一髪それを避けたダークドライブだったが、またも視野から怪物の姿が消えていた。

だが上昇していく英志の背を、機を見計らって、執拗に蛇の尾が追撃を仕掛けてくる。

タイヤのすぐ近辺を穿ち、コンクリートに無数の空洞を作っている。飛んでくるその破片を避けながら、英志は上を目指す。シンゴウアックスに、自身のシフトブレスから抜いたシグナルバイクを装填する。

〈ヒツサツ！ マツテローヨツ〉

と斧の音声は待機を促すが、状況は停滞を許さない。

絶え間なく繰り返される爆撃、射撃、砲撃、突撃。

暴走しているとは思えない執着と精密さで多種多様な攻めを仕掛ける108に対し、英志はその攻撃の変化に応じて、またシグナルチェイサーのマニピュレーターの制動の助けもあって、小規模な破片の衝突こそあったものの、直撃は避け続けた。

ふたたび、夜景の灯りが眼前に現れた。

何層ものフロアを踏破し屋上に出た。

だがその光明は、おおきな影によって遮られた。

先回りしたパラボックスが、上空から急降下してきたものだった。

今まで散漫に撃っていた武装をダークドライブ単身に一曲化させ、集中砲火を浴びせてきた。

その破壊力、その余波で、駐車場の上層部が崩落する。いかな超人であつても助かりようがない。

そのはずだった。

〈イツテイーヨー！〉

だが、彼はふたたび現れた。

無茶な急降下から体勢を立て直し切れていない108の頭上。

前輪を高く浮かせて火炎を突っ切り、紫電を帯びた大斧の一斬が108の両翼をもぎ、返す刃がおおきく旋回してボンネットに叩き込まれた。

飛行ユニットを破壊された暴走体は、獣の咆哮とともにきりもみしながら落ちていく。

英志はシートの上で立ち上がると、シグナルチェイサーを自分の腕へと戻し、ベルトのイグニツションキーを回した。

〈GET！ NEXT！〉

ライドチェイサーを踏み台に、仮面ライダーは飛んだ。

「これで終わらせる。僕は……次に進むッ！」

その背に、タイヤにも似たリング状の力場フィールドが形成される。自由落下に、その雷光の力が推進力を加える。

今まで追いつけてきた英雄たちの残像が、その背を押す。

今まで聴き続けてきた彼らの言葉の残響がその身体を突き動かす。

明日へ手を伸ばせと。

次へと進めと。

いつか来るその『次』に、自分自身が胸を張ってそう告げるために。過去の残影を、青年の一撃キックが貫いた。

〈バカなッ……ワタシ、が、キサマ、ごとき……一度殺した相手にさえエエエエエ！〉

幻影が、すぎるような調子で何かを叫んでいる。構わない。すでにそれは踏み抜いて、通り過ぎて背の向こう側だ。

ため込んでいたエネルギーが、誘爆を起こす。

ふたりの『エイジ』の接点から放たれた雷電が、天を衝いて轟かせる。

それが、静止した時間の中で起こった、最後の輝きとなった。

## 第七話：Next (12)

詩島剛は、雨夜の中に流星のような輝きを見た。

泊英志が、おのれの因縁を乗り越える瞬間を見た。

だが、彼自身は未だ、亡父の残影と銃火を交えていた。

ゼンリンシューターで雨露を切り、くり出した一撃がゴールドドライブの胸部装甲をかすめる。避けられた。剛は即座にそれを判断すると、引き金を弾いた。

絞り出されたエネルギーがギルガメッシュに命中し、火花が両者の間でまたたいた。

反撃の拳を、剛は地面を滑るようにしてかわした。

次いで迫る蹴りを、身をよじって流すと、そのままの勢いを借りて、スリップ音を鳴らしながら大きく旋回する。マフラーがギルガメッシュの視界を覆い、その死角から今度は剛が踵を彼の胴体部へとめり込ませた。

「あまり凶に乗るなよ」

焦れたような声で、ギルガメッシュは威圧的に言った。

複製ドライバーのアドバンスドイグニッションを無造作なタッチでねじると、タイヤと一体化した肩口の装置、ゴールドコンバージョンから波動が放射された。

過去の光景がその脳裏にフラッシュバックした瞬間、剛は後ろへとスウエーしようと試みた。

だが、人体が光より速く動ける道理はなく、公開されている技術においても、今なお実現はされていない。

その波を、マツハの機体と武器とが浴びる。

全身が痺れるかのごとく動かなくなり、補助を喪った装甲はそのまま重石となつてさらに自由を奪ってくる。

武器は粒子化して流れていく。その先にゴールドドライブの右手があった。

所有権の渡つたゼンリンシューターは、主人を無慈悲に撃ち抜いた。今度は、剛がもんどり打って転倒する番だった。

「見かけこそお前の『父親』と同じだが、当然バージョンアップは施してある。二十年前のカビの生えた防壁コージェインゲなんか、通用するものか」

形勢は逆転する。うそぶくギルガメツシユは、シューターを連射しながら剛を痛ぶり、あえてゆったりと距離を詰めてくる。

もがこうとする剛の前に立つと、大きく振りかぶって打ち出した中段への蹴撃が、剛の右胴へと何度も叩きつけられた。

呼吸さえ許さない速さと強さでくり返されるその連打に、ついに剛は膝を折った。

「そんなものを頼みにしていたのなら、見通しが甘すぎる」

そう無慈悲に宣告する彼は、ギロチンの刃のように、振り上げた足を剛めがけて振り下ろす。

だが、その一撃は、まっすぐに伸ばされた剛の腕によって防ぎ留められた。

「——見通しが甘いのは、そっちの方なんじゃねえの?」

口調とは裏腹の、腹の底から響く声が、ギルガメツシユに嘲笑も反論も許さない。

懸命の膂力と決して折れることのない気力とが、ギルガメツシユの攻勢を防ぎ留め、自身に引き下がることを許さない。

ままならない肉体を叱咤し、雄叫びをとともにマツハはゴールドドライブを押し返した。

いや、向こうがあえて決死の抵抗に対して、労して得ようとはしなかった。距離をとった。

だがギルガメツシユは攻撃を中断したわけではなかった。

強奪したゼンリンシューターの引き金を、天へと向けて撃ち放つ。

一度浮上した光線が、空中で何条にも枝分かれし、光の榴弾となって剛のいる足場を焼き尽くした。

視界さえも白く埋め尽くす爆炎。その中で、剛はドライバーのシグナルバイクを抜き放ち、一回り大きい車体を取り出し、装填し直した。  
「シグナルバイク、シフトカー!」

装いを新たにすることで、システムを更新したことで、自由を取り戻した。

光が晴れた時、そのには『マツハ』の姿はなかった。

チエイサーの要素を組み込みながらも、マツハの形態をベースにした姿。今の英<sup>データドライブ</sup>志がイレギュラーなものだとするのならな、こちらは正規の手順を踏んだ純正品といったところか。

青いボディが雨をしのぎ、バイザー越しの真つ赤な瞳の輝きが、雷の激しさを跳ね除ける。駆動する力の余波が、渦巻く火炎を吹き消した。

〈マツハ！ チエイサー！〉

かつて起こった奇跡の融合。その形態に技術的に近づけた姿。それこそが今の剛、仮面ライダーマツハチエイサーだった。

剛は腹のドライバーを拳で連打する。

肩のシンボルマークから発せられた青い輝きの波動が、拡散した。

〈カナリ！〉

ゴルドドライブの発したものと、同質の、だが真逆のベクトルを持つそれは、逆に彼の肉体を絡め取った。手にした武器がふたたび粒子化されて剛の手で実体化した。

急に手に在ったはずの重みを喪った。それによる肉体と精神の均衡の、一瞬の揺らぎを突いて、剛は逆襲を仕掛けた。

〈ゼンリン！〉

ゼンリンストライカーを回転させ、ギルガメッシュを撫でるように斬り上げる。高速でエネルギーの渦を作るそれが、忌むべき金色の装甲を削り取る。

「英志との戦いのデータを解析して、そいつはすでに対応済みだ」

「この短期間で、ワクチンプログラムを作り上げたとも言えるのか……ッ」

「ウチのメカニックは優秀でさ。ピットインからここまでさすがの<sup>マツハ</sup>早業だったよ」

剛が手を止めない。互いの呼吸さえ整わない間に、射撃と打撃を切り替え、組み合わせ、瞬時に追い詰めていく。

その名の通り、また本人が常々言っている通り、マツハ系統をベースとするシステムは短期決戦を意図して設計されている。だからこ

そ、隙を見出せば、一直線に突っ切る。勝利を得るまで突き詰める。「そうさ。人間は日々成長している。おなじ過ちをくり返さないために！」 夢見た明日を手に入れるためにっ！」

蓄積したダメージが限界を迎え、ゴールドドライブの表層が火花の電流を散らした。

剛は腰のベルトからシフトライドクロツサーを引き抜くと、シグナルランディングパネルへと装填した。

「へっ！ サツッ！ フルスロットル！」

クリーム好みのセリフを合図に、剛は車輪を回し、全開にされたレブストリームがそこを基点に渦巻く。

「そしてオレの夢のためにも、もう二度とクリームやロイミュードの技術を、もう悪用なんてさせない……絶対だッ！」

永く続いた暗雲を払うかのように、またそのシフトカーにも組み込まれた友人の遺志が同調するかのように、青い力の旋風は、せり上がるような駆動音とともに曇天を衝く。

一度放出されたそれが凝縮し、シューターのマズルへと収束する。モデルとなったライドクロツサーを象ったヴィジョンが、マツハチエイサーの拳を覆い包んだ。

腰を深く沈めてひねり、右足をバネに、剛は飛んだ。

拳に握りこめたシューターの一打が、ギルガメツシユをえぐり抜く。

一層、また一層と削っていきやがてその衝撃が炉心を射抜く。

バルコニーから投げだれたゴールドドライブから、眼魂がこぼれ落ちる。核から切り離された肉体は、悲鳴もなく、浮き上がったままに爆散した。

「——いい画<sup>え</sup>だったろう？」

その火の華を見届けた世界的な写真家は、その光景に手向けるように、雨粒を二本の指で切って見せた。



## 第七話：Next (13)

爆発の中から、三桁の数字が転げ落ちていく。

そのナンバーが……108がその場を離脱しようとした矢先に、雨の帳から腕を伸ばし、鷲掴みにした。

仮面ライダーダークドライブは、パラドックスのコアを、離さない。静かに起動したコアドライブアのシステムが、そのコアに干渉を開始した。すなわち破壊へと、そのカウントダウンを刻み始めた。

手の中で、断末魔が起こる。雷とは比較にならない微量な電流が、子蛇のように噛みつき、抗っていた。

「離せ……離せえ！ 私は、私はア……！」

「『こんなところでは終われない』か？」

英志は、彼の訴えようとしていたことを言い当てた。

一言一句、その通りだったはずだ。

だから、108はノイズ混じりの悲鳴を、わずかな驚愕の声とともに詰まらせたのだ。

「わかるよ。……やっぱり似てるのさ、僕たちは。たとえコピーなんかしていなくとも」

感慨めいたものを形にしながらも、英志は自分のものを、どこか冷たく遠いようなものを感じていた。

「嫌だったんだろう、封印されたまま終わるのが。何も為せないまま、自分が何者かになれないままにその運命が決められるのが。だから無茶な時空転移までして、お前は自分だけのグローバルフリーズを起こそうとしたんだ」

同情をいや同調しつつも、英志はその手の力を緩めない。むしろ、より一層強めていき、伸ばした右腕と声は、わずかに震えていた。

「僕だってそうさ。自分の中に何も見出せないままに、一生を終えることが怖かった。だから父さんの影から抜け出たかったし、ダークドライブの力を求めたし、その力で自分にしかできない何かをしたかった」

あれだけ強力な力を誇っていたロイミュードが、砂糖菓子のように

手の中で砕けていく。

だが、パラドックスだったモノは、悲鳴をあげなかった。時折思い出したようにスパークを奔らせるだけだった。

「……けどもう良いんだ」

英志は抱擁するかのように、優しい声をかけた。

「お前がしようとしたことも、その願いも、僕が記憶している。お前の罪は僕の中で消えない闇として生き続ける」

それで妥協しろ、とは英志は提案しない。答えなど求めていない。ただほんの一瞬、逃げ出せない程度に、指の力を抜いてやった。

だが、ロイミュードのコアに、抜け出る気配は感じられなかった。代わりに、その手の中では異音が鳴り始めた。

その耳障りな響きはもはや慣れ親しんだ、雷鳴の残響。人間で言うところの、喉から迸る、笑いの声。

「……ならば、お前の中で永遠に生き続けてやる。せいぜい死ぬその瞬間まで、『自分』の罪に苦しむがいいッ」

エイジの声を模した声が、高らかに彼を呪う。

英志は一気に握力を加えた。

小規模な爆発とともにパラドックスは、その所業とは裏腹に、呆気なく砕け散った。

その光の残滓を一粒、英志は握り固めたままだった。指をほどくことができなかった。

そのくせ、全身は緊張から解放されて脱力していく。

ブルブルと震える右拳を額に押し当てると、英志はそのまま膝を折って崩れた。

後悔、慚愧、苦悶。

今まで凍りついていた感情が一気に融解してあふれ出してくる。達成感の喜びを上回り、英志の心身を貫いた。

英雄のかたちをしていたものの、今その瞬間にそこにいたのは、嗚咽とともに泣くひとりの青年だった。

そして夜は明け、雷雨は止んだ。

朝陽が、立ち上がった青年を照らし出した。

## 間章：フューチャー&パスト（1）

力と光と色が、嵐のように渦巻いていた。

そこは次元の狭間、いや果てとも言つて良い世界。

何にも介入出来ず、時間の流れもおおよその人類の感知できるそれとは違う。

息をするだけでも気がおかしくなりかねない、正気の見当たらない孤独な領域。

そこは、異なる世界、様々な時間軸より漂流してきた物体が、寄り集まってかろうじて土台となっていた。

だがその中で、明確に自律した意思でもって動いている存在は、ただふたつしかなかった。

そのうちのひとつ……黒くて白い、『幽霊』<sup>ライター</sup>は、幾度とも知れない交錯の後に、まくりあげたパーカーを翻し、正眼に自身の大剣を構えた。彼が対峙しているモノこそが、その領域における彼以外の知性だった。

と言つて、彼をはるかに上回るその巨体は、人のかたちをしてはいない。

さながら石碑<sup>モリス</sup>、まるで墓標。朽ちかけたその中央には、眼球のような刻印が埋め込まれている。彼の胸と、同じように。

その亀裂から、ひとりの人間がコードに接続されていたのを彼は見た。その人間こそが、世界の果てまで探し抜いてまで彼が求めていた相手……敬愛すべき父親だった。

「まさか……」

幽霊の仮面をかぶった少年は、天空寺アユムは、ガンガンセイバーの柄を握りしめて独語した。

「お前が、生きていたなんて」

そのシステムは、消えたはずだった。『自分』の世界とともに。それが誕生する可能性は、摘まれたはずだった。

このアユムはそれを見たこともない。だが同一化した『アユム』の部分が、必死に警鐘を鳴らしていた。

グレートデミア。

高くそびえ立つこの機構こそが、後に世界を破滅寸前まで追いやる『悪』となる。だがそれは未然に防がれたはずだ。だからこそ、あの父も生きている世界が在るはずだった。

「生きていた、とは、違う」

『彼』の知るグレートデミアとは違う。その構造にはこの領域で取り込んだと思われる雑多なレアメタルと生体部品が多分に盛り込まれていて、より醜悪な代物となっていた。何よりそのノイズ混じりの音声には感情の抑揚がない。自分をこそ完璧にして至上の知性体と信じ、他の一切を見下すあの傲慢さが無い。

「我は、いや、未来の、我、は消える直前、データの一部分を、我に、飛ばした。それによって、知った。我、が宿命。世界、のあるべき、姿。だから、消える前に、移した。データを、ここに。いつか、肉体を得て、戻る。そのために」

アユムは奥歯を噛みしめる。

馬鹿正直に語ってくれたおかげで、目の前の存在の原因、目的もだいたい察しがついた。

つまり、かつて過去に飛んだグレートデミアの一部が、デリートされる前のデミアの元データに自身の一部を転移させたのだ。

完全に人格をインプットするまではいかずとも、自身が消去されることを予期したデミアもまた、人間が干渉できないこの領域へとメインプログラムを移行させた。それが偶発的なものか、狙ったのかはともかく。

そしてここで、流入してくる物質や生物を食らいながら、再構築しようとしているのだ。

そしておそらくはそこに……

「天空寺タケルが、流れて、来た。一度失ったムゲンの力、戻りつつあった。我にも関係がある力。そのリソースを取り込めば、我は、より完全に、仕上がる。……そう、お前たちのように言うならば……格別の『栄養』だ」

平坦だったその声に、わずかな感情が乗った。人間で言うところ

の、喜びと嘲り。

『自分』の知る、グレートデミアまで成長しようとしていた。

「ふざけるな！」

アユムは怒気を飛ばす。

「もう二度と、お前の勝手にはさせない！」

もはや事は父の奪還だけに留まらない。ここで食い止めなければ、あの惨劇がふたたび再現させられる。それだけは絶対避けなければならない。『自分』を含めた、散っていった多くの生命のためにも。

孤島のように点在する岩石や鉄骨などを足場に、接近を試みるアユムを前に、グレートデミアの生体部分からいくつもの肉塊が分離した。

花卉を模した頭部を持つ、貴族めいた肉體。

その形状ゆえに行動できないグレートデミアの代わりに精製されたアバターだった。

五、六体ほど分離したそれらは、直剣をたずさえてアユムの突進を防ぎ止めた。

五方向から繰り出される剣撃をさばきながら、アユムは一度後退しながら捌き切る。そしてわずかな隙を見出したアユムは、自身のドライバーに薄緑がかった眼魂をセツトした。

「カイガン！ ダヴィンチ！ 一切！ 合切！ 超天才！」

全知全能、神にも等しき才覚を持つとされる天才、レオナルド・ダヴィンチ。そのパーカーゴーストをまとったアユムの周囲に、無数の絵画が展開される。

それに押しつぶされる形で拘束されたグレートデミアの分身体の中心で、アユムはドライバーのレバーを左右に押し引く。

「カイガン！ ダヴィンチ、オメガドライブ！」

背後に膨れ上がったエネルギーが、持ち上げたアユムの爪先に集中する。激しさを増すエネルギーのほとぼしりが、まるで何本も手足が増えるかのように錯覚させ、ヘリコプターのローターののように旋回した足が分身体を一気に薙ぎ払った。

連続して起こる爆発。だがそれが晴れぬ間に、正面から熱源が迫

り、足場もろともアユムを焼き飛ばした。

自身の分身の残骸もろとも、グレートデミアの刻印がアユムにレーザーを放射したのだ。

あまりに無慈悲なその奇襲はアユムからダヴィンチ眼魂を乖離させ、苦悶の声とともに通常のフォームに戻された彼を、血管にも似た赤黒いコードが絡め取った。

「諦めろ」

自身の目の刻印に引き寄せながら、グレートデミアは宣告する。

「どうせ、天空寺タケルの生命は、残り少ない。そんなモノを守って、なんとする？ この男のように、自分の命も無駄にする気か」

グレートデミアの『眼力』には、その気がなくとも屈して肯んじたくなるような威圧感と魔性が内包されている。

アユムとて、その事実を知っている。いやもうひとりの『自分』から流入した記憶が、父母も伏せていたその酷な真実を教えてくれた。

眼魔界の怪人ダントン、その血液や細胞組織をもとに精製されたりアクター。それを動力源に生きていた母に新たな生命を吹き込むために、タケルはムゲンの力や自身の生命を犠牲に彼女に与えた。その代償として、自身の寿命を大幅に削ったということ。

そうしてふたりが築き上げた愛情の証明が、自分なのだ。

自分はそんなことさえ知らず、今まで漠然と生きていた。

(けれども)

屈するわけにはいかない。目の前に、その恩と愛に報いるべき相手がいる。

「お父さん、は……」

自身を戒める肉縄を握りつぶしながら、アユムは足掻き続けた。

「お父さんの戦いは、その命は、無駄なんかじゃない。他人の命も自分の命も諦めない……ッ、その答えがあの世界だ！ ぼくだ、ボクなんだ！ だからボクも諦めない！ 最後の一瞬まで、命を燃やす！」

もう、恥じたり誤魔化したり茶化したりなどしない。

今まで失っていた者たちも、これから生まれてくる誰かも。すべての生命を背負う覚悟でもって、彼は吼えた。

「無駄だ」

その情熱を否定しながら、デミアは嘲笑を含ませ、捕縛を強めた。「あの時と、同じだ。ここでは、天空寺アユムの声は、誰にも届かない。ここで押しつぶされる」

喉輪に噛み付くその縄を解こうとするアユムの間近で、ふたたび不気味な色合いの輝きが広がり始めていた。

剣に手をかけたままだが、指先一本動かない。

(それでも、それでもだ！)

自分の叫びは、たしかに届かないのかもしれない。

『天空寺アユム』のように、孤独な戦いを強いられるかもしれない。だがそれでも、一度は折れた『自分』が父に教えられて戦い続けたように、天空寺アユムは、そうでなければならぬのだ。

——それでも、自分は、絶対に諦めない。  
と。

「その通りだ」

声が、聞こえた。

声が、届いていた。

〈スイカ双刃刀！〉

回転する赤と緑の大太刀が、鋭く虚空を抉る。軌道を描いて、アユムを巻き取るコードを切り裂いた。

「絶対に諦めない。その心さえあれば、どんな残酷さにだって屈しはしない。閉じた道は必ず開ける」

適当な足場に落下したアユムは、前に降臨した彼の姿を視た。

白銀の鎧には、父のムゲンと同じく極まった強さを感じさせる。

身の丈ほどにある異形の大剣を右手で肩に載せ、黒マントを翻し、

柔らかな虹色の眼光を傾けて、

「悪いな、さすがに手間取った」

と苦笑まじりに、そして気さくにその『英雄』は語りかけた。

自分を顧みたその彼の背に、無数の触手が迫ってきていた。

危ない。その声をかける間もなく殺到するそれらを見もせず、その白銀の鎧武者は左手をそこへとかざした。

すると、半透明の障壁が黄金の色を波打たせながら出現し、彼らを守護した。

弾かれたコードの類を、手にした大剣の一振りが薙ぎ倒す。

「まだ立てるだろ？ 帰りを待ってるヤツらが、いるはずだ」

救援がやってきたことへの喜びよりも、その神々しさに目を奪われるよりも、取り戻した使命感を噛みしめることをアユムは優先させた。

そうだ。これがすべての決着ではない。再会を約した家族がいる。再戦を契った戦友がいる。

「だったら、こんなところで立ち止まんなよ！ さっさと片づけようぜ」差し伸ばされた手をうなずきながら、握り返し、立ち上がる。

そして自身が財団Xより取り戻した眼魂のうち、最大級の火力を持つ一個を取り出した。

〈カイガン！ ノブナガ！ 我の生き様！ 桶狭間！〉

霸王の魂を宿したパーカーゴーストに呼応し、ガンガンセイバーの形が変形する。取り付いたバットクロックと結合し、ライフルの形態となったそれを、ドライバーに読み取らせる。

その銀色の仮面ライダーは、大剣を虚空へと放り投げる。

〈火縄大橙DJ銃！〉

代わりにその両手には、重厚感のある大筒が握られていた。

イチゴの形を形をした錠前をその中心へとはめ込む。

〈ダイカイガン！ オメガインパクト！〉

〈ロックオン！ イチゴチャージ！〉

砲口から撃ち出された真紅の散弾が、ふたたび伸びる触手のことごと



とくを撃ち落とす。

アユムとグレートデミアとの間に、遮るものは何もなかった。増殖したガンガンセイバーが、隊列を組んでゴーストの背後に展開し、十字砲火をただ一点、モノリスの中央に狙いをしぼって、アユムがトリガーを引くとともに射放たれた。

中折れした石碑から、雑音交じりの断末魔が聞こえる。その全体に亀裂が広がり、やがて核たる目玉を割った。

明滅とノイズをくり返し、内側から爆発したそれが、瓦解を始めた。亀裂の中から、コードにくるまれたタケルがこぼれ落ちた。

跳躍とともに落下する残骸の中へ、アユムは飛び込んだ。懸命に腕を伸ばす。

——今度こそ、自分の手で……。

力のよりどころを喪失したグレートデミアの残骸が、異空間の奥底へと引きずり込まれていく。

その引力から脱したアユムたちは、固い地面を選んで降り立った。父を呼び慕いながら、その安否を確かめる。

その声に反応する様子はない。かすかに聞こえる息遣いに、少年は安堵の声を漏らして変身を解いた。

「よう『二代目』。先代は、なんとか無事みたいだな。……ひとりまでこまでよく頑張ったな」

そう言っつて、眼前に歩み寄った鎧武者もまた、ベルトに取り付けられたふたつの錠前を閉じて引き抜き、変身を解除した。

光の粒子から現れたのもまた、金髪に白と銀の帷子という超然とした姿だった。だがやがてその装いもまた変化をはじめた。

最終的に彼がとつたのは、黒髪の短髪に小柄な、それこそ自分や泊英志とたいして年齢差を感じさせない、救命胴衣のような上着を羽織った青年の姿だった。

感謝や喜びよりも、おおよそこの異質で孤立しているはずのこの空間にはあまりに不釣り合いなその在り方に、そして父を知るかのような口ぶりに、興味や当惑のほうが勝った。

「あなたは、いったい……？」

おずおずと聞きたいことを切り出すアユムに、屈託なく歯を見せて青年は答えた。

「オーバードロード葛葉紘汰<sup>かずらほこうた</sup>。またの名を、仮面ライダー鎧武<sup>アイマード</sup>だ」

## 間章：フューチャー&パスト（2）

およそ二十年前。

かつて、その世界は二つに分かたれていた。

文化も歴史も酷似する世界が、ごく近い位相に存在していた。

あえてその差異を挙げるとすれば、その片割れには天にも届く巨大な壁がそびえたち、極東の島国を三つに分割していたことか。

北と西、そして東に分かれた三国は、再統一を図ることなく、そうなった原因たる一個の箱をめぐる謀略と戦争をくり返した。

まるで神話のような話だが、それはすべて、二十年足らず前に起こった現実での出来事である。

そしてその二つの地球における冬のみぎり。

両星の衝突による対消滅を狙った事件を、それぞれの世界における英雄たちが未然に防いだ。

この一件はある時を機にリセットされたが、それを未だ知らないふたりが、勝利を飾って凱旋した時点まで、事は遡る。

「ウィーヤツホー！ フッフウーツ！」

ジッパーのように開かれたワープホールをくぐったロングコート  
のその男は、両手を挙げて奇声をあげた。自称ではあるが本来は理知的な天才物理学者ではあるからして、本来感情的なキャラクターではないのだが、この時ばかりは、次元間を通過するゲートを体感しては、好奇心を抑えられなかった。

いったいどういう物理法則で成り立っているのか。それを模索する数式で頭は埋め尽くされ、疲労困憊、グロッキーでその場にへたり込んだ相棒のことなど後回しに、情動のままに頭髪をかき回し、それに合わせてつむじのあたりが飛び出た。

そんな異世界の若き英雄たちを、その次元の扉を作った『神』は、苦笑とともに見守っていた。

「すごいね神様、何でもありじゃん」

子どものように目を輝かせながら顧みるその男に、「それでもない

さ」と神様……仮面ライダー鎧武はかぶりを振って答えた。

「できないことだってそれなりにある。……この世界もオーズの言う通り、救うためにはまだまだ手が足りない」

建造物の隙間から立ち上る不気味な赤い輝き、国を隔てる障壁スカイウォールのエネルギーを、彼らは遠く望んだ。

男もまた、複雑な感情でもってその壁を見つめていた。

「戻ってきて本当によかったのか？」

ふいに投げかけられた問いに、彼は「え」と言葉を詰まらせた。

「俺たちの世界にも、いろんな技術や知識がある。そこからだって、この世界を救う方法は見つかるかもしれない。俺たちだって力を貸してやれる」

試すように、『神』は問う。

一瞬心臓が跳ねたのは、その提案に科学者としての自分が魅力を見出したからだろう。

たしかに戦いに終始するより、技術の発展に尽力して平和的に解決を図る方がよっぽど有意義だし、可能性は大きい。

十年前のスカイウォールの惨劇。その有無から分岐したであろう並行世界が、どういう発展を遂げたのかにも興味がそえられる。

それでも、

「せつかくだけど、断るよ」

迷わず答えた。

「これは、俺たちの戦いだ。たしかにこの世界で戦う限り、これからもつと辛いことがあるかもしれない。けれど、そこから逃げ出すわけにもいかないし、今その瞬間に苦しんでいる誰かを見捨てることなんてできない」

科学者であったとしても、彼の本質はたとえ綺麗事であろうとも人の善性と可能性を信じて守ろうとする甘ちゃんだった。たとえそれが空っぽの自分を創る形骸であったとしても、愛と平和のために戦えるヒーローだった。

「だから俺は、ここに居るよ。ラブ&ピースのため、人々の明日を創るために。それこそが、俺たち仮面ラ」

「うおおおおえっ！」

「……………」

聞こえてきた豪快なえづきに、男は表情を引きつらせた。

さすがに公衆の面前で汚物を撒き散らすことはしないだろうが、この世界におけるもうひとりのヒーローは、重苦しげな表情で

「酔い止め持ってねえ？」

と、男に尋ねた。

「…………お前ね。俺今すっげえ良いコト言おうとしたのよ？」

「はあ？ 知らねーよ…………なにこれ乗り物酔いとか？ それとも時差ボケってヤツかな？」

ふらふらと覚束ない足取りで男の洗面を横切り、肩でぶつかり、その場を後にしようとしていた。

「最ツ悪だ…………どこまで空気の読めないバカなんだ、あいつ」

やはり、この世界は離れられない。

あんなバカひとりにヒーローの真似事をやらせるのは、不安すぎる。

男は、そう決意を新たにした。

険しい顔をしていたのは『神』も同じだった。

「ね、どうしようもないでしょ、アイツ」

と同意を促す彼に、

「…………なあ、あの万丈ばんじょうって、どういうヤツだ？」

と、妙にまじめな調子で問い返した。

「どういうって…………ただのバカですけど」

意表を突かれてキョトンとする科学者に、しばしの沈黙の後、鎧武は肩をすくめて

「——まあたしかに、お前たちなら大丈夫かな」

と笑って男の腕を突いてきた。

「いいもんだな、仲間って」

恥じらいもせずサツパリと言ったのける『神様』に、逆に男の方が照れてしまって、頭を力なくかき乱す。

そんな彼の目前に、手が差し伸ばされた。

「それじゃあ行くよ。……いつか、また」

男は、顔をほころばせて握り返した。

「遠くない未来で、きつと」

再会を約束したふたりは、そうして別れた。

鎧武が開いた異次元の口——クラックをくぐって消えていく彼を、男は最後まで見届けた。

わずかに感じる寂寥と、名残惜しき。

それを吐息に換えてこぼしつつ、コートの襟もとをただして気合いを入れなおす。

そして、遠のいていく相棒の背を追うべく振り返った。

その、矢先だった。

頭上で、ふたたびジッパーの口が開いた。

「はっ」

「のおあああ………!」

「あああああ!?!」

その向こう側にあるうねりの中から二色の男の悲鳴が聞こえて、やがてそれが大きくなっていく。

落ちてきたのは、三つの人影。

「ったー……やっぱり無茶なワープはするもんじゃねえな……あと  
は、ジオウの影響か」

派手に尻もちをついて悶絶する彼の姿は、同伴者の存在や服装の差異こそあれ、ついさつき別れたばかりの『神』。仮面ライダー鎧武こと葛葉紘汰そのもので、

「——いやいやいや、未来遠くなさすぎでしょ」

と、男は思わずぼやいた。

そのつぶやきに、葛葉は目を上げた。

男の顔を軽く驚いたように凝視した。それこそ、シワの数を数えるほどだ。

ややあつてから、

「そうか、ここは統合前の時間軸……壁があるほうの旧世界か」

と、ひとり合点しつつ、自らが連れてきた少年と、意識を失っている男に語り掛ける。

「えーと……？」

要領を得ずに戸惑う彼に、ふたたび現れた『神』はイタズラ小僧のような笑みを称えて言った。

『戦う時は一緒』って、前に言ったよな？」

「……いや、つい一時間ぐらい前？」

「悪いが、ちよつと付き合ってくれるか。……ビルド」

仮面ライダービルド、桐生戦兎きりゆうせんとうは

「へ？」

と、ただ間の抜けたように目を丸くするほかなかった。

## 第八話：スタートトミツシヨン2035（1）

風都署署長、照井竜の朝は早い。

起床とともに軽いジョギングと運動の後にシャワーを浴び、その後、朝にめつぼう弱い妻のために、食事を作る。その日のメニューはカリカリにベーコンを焼いたパンケーキに乗せて、サラダと野菜ジュースだ。

まるで文豪か何かのような小洒落た朝食がテーブルに出並ぶあたりで、ようやく寝ぼけ眼の妻がダイニングにやってくる。

数十年にわたって親しんだ流れだというのに、彼女はそれがまるで始めてのように料理に目を輝かせて感謝感激を全身で表現する。

そうやって素直に喜んでくれるのが嬉しくて、つい甘い顔をしてしまうのだが、それは他の者には到底見せられない。

食事を済ませるのも、家を出るのも妻よりも早い。  
ガレージから愛車にバイクを引き出し、またがる。

そのドライビングには、加齢による衰えはほとんどない。

これから買ったての最新型を転がしに行こうかという若いバイクカーが目を見張るほどの鮮やかな運転は、とても老境を間近に控え、かつ二日ほど前まで腰をいわしていた人間のそれとは思えないだろう。

しかし交通マナーは遵守しながら、ものの十分もしないうちに署に到る。

泊まり込みや夜勤明けに署員を除けば、彼は誰よりも速く来る。  
今日も、そのはずだった。

だが、到着し、バイクを停めた彼の前には先客が待っていた。

玄関口に続くロータリー。その脇の花壇のあたりに、彼女は陣取っていた。

「春奈」

竜は軽い驚きとともに娘の名を呼んだ。

だが、それ以上言葉を続けることが出来なかった。

彼ら自身が口下手ということが前提にはあるが、複雑な因縁が絡み



合って、長きに渡る冷戦状態が続いていた。だからこそ、その沈黙は、苦痛を伴っていた。

そんな彼らが今共有できる話題は、ただ一点しかない。おそらく春奈もそれがらみの件で訪れたのだということは予想がついた。

「左たちから聞いた。お前、仮面ライダーになつたそうだな」

先に切り出したのは、竜のほうだった。

「……そうか、お前がな」

言葉と言葉の間に挟まれた、数秒間の空白。

そこには言い知れない深い感慨と、「何故そんな道へ進むのに相談をしてくれなかった」と責めたい気持ちが込められていた。

「それで何の用だ？ 今になって、俺がお前にしてやれることはないかと思うが」

別に他意はなかった。Wの両名から伝え聞く実力を考慮したうえで導き出した、厳然たる事実を口にしただけだった。

だが、彼が望まらずしてその口調は冷たく突き放すような態度に終始してしまふ。

「別に、今さら貴方に何かしてもらおうなんて思っていないよ。……この事件は、私の事件だ。助けは必要ない」

春奈もまた、慣れた調子でそっけなく応じた。

だが、と言葉を切つてから、一度まつすぐ、父譲りの強い眼差しを向けてきた。

「ひとつ、やり残したことがある。貴方とのここまでの関係を清算しなければ、私は前へ進めない」

清算とは、親子の縁切りということか。肝心要の場面に腰を痛めた父に、いよいよ愛想を尽かしたのか。

そして本当にそう言われた時に、自分はそれを拒んで叱るべきなのか。それとも自分の力不足を悔やみながら受け入れるべきなのか。

悩みながらも、その重圧に耐えるようにうつむきながらも、竜は身構える、彼女の言葉を待った。

やがて、風が吹いた。

激しい暑さだった夏の終わりを告げる、秋の風。

「貴方を、許しに来た」

その風の中で、彼女はそう言った。

竜は驚きとともに顔を持ち上げた。

その風の中で、花が舞った。

この庁舎を改築した折、署長手ずから植えた、白い花が。

娘の眼には、先日会った時の、夏の太陽のような激しさや険しさはなかった。

そうあれかしと願ってつけた、そして亡き妹と共有する一字、すなわち春のごとき慈しみがあった。

何も知らない優しく無邪気な少女だった時以来、いや、成長して初めて見せる表情だった。

だがその中には、同時に深い悲しみもまた漂っていた。

「一つ、大きな決断をしました。その結果、友人の心と、彼の大事な人を傷つけてしまった」

と言葉少なに語り出したのを、竜はじつと聞いていた。

「その時思い知らされた。誰しも完璧にはなれない。それは私も、貴方も同じだった」

「——いや……俺は……」

「しかし貴方は、私と違って大勢の人間を救った。心の傷を負って、誰よりも苦しみながらも、今までそれを他人に訴えようとはしなかった。あの決断が、正しかったとは言わない。あの時どうすべきかだったなんて、簡単に答えの出るものじゃない。それでも」

途切れることのなかった春奈の言葉が、そこで一度止まった。

重い息遣いが聞こえる。今まで背負ってきた重荷を下ろすかのような。

それでも、と春奈はもう一度くり返した。

「それでも、父さんは、きっと悪くない」

春奈。竜はたまらなくなつて、強く娘の名を呼ぶ。

しかし次の瞬間にはもう、春奈はどこからか呼び出したバイクにまたがっていた。

「今さら虫が良すぎると思うだろうけど、それでも伝えておきたかった」

こぼした口元の自嘲をメットの中に押し隠し、近未来的な緑の車体を急発進させる。

瞬く間に署を出、そして遠のいていく。

優しさも冷たさも、後悔も弱さもマスクで覆い、ライダーは旭へ向かつて疾走していった。

## 第八話：スタートミッション2035（2）

生命維持装置がバイタルを数値化する音と、それを取り付けられた本人の口と呼吸器が漏れ出す呼吸音が、まるで泊進ノ介の命数を刻むように、あるいは試すように狭い病室に響いていた。

幸いにして父は一命を取り止めることができた。

だがいつ容態が急変するとも知れず、その命は細い綱の上にあるとのことだ。

そして、同じ綱の上に、その妻霧子の精神もまた乗っていた。

閉め切ったカーテンの隙間から、朝日が漏れ出し、母子の口元を照らし出す。

眠る夫や背後に立ちすくむ息子に話しかけるどころか、息をすることきえ忘れたように、霧子の唇は硬く閉じていた。

そんな表情をさせてしまったのは、すべて自分が原因だ。そのことに対する自覚を新たに、英志は進み出た。

「僕、行くよ」

どこへとは言わない。恐らく母は察し、そして告げられることを覚悟している。

そのうえで、彼女はかすかに両肩を強張らせて、英志が言葉を絞り出すことを待ってくれていた。

「自分が許されないことをしていたのはわかってる。それでも、僕は父さんが守ったこの世界を、未来を守りたい」

いつものように茶化さず誤魔化さず、飾り気なく青年は言い切った。機械の音と三人分の呼吸だけの、痛ましい沈黙が続いた。

気まずい空気の中、英志はきびすを返そうとした。

「ひとつだけ」

母が今日初めて口を開いたのは、英志が出入り口にその身を半ば傾けた時だった。

向き直る我が子に、霧子もまた涙の跡と憔悴をにじませた、だが自らを励ますようにあえて強い笑みを向けた。

今と同様、かつてはまったく笑わなかった母。だが、父が根性や気

概を見せた時が唯一それを見られる時だったという。

「ひとつだけ、約束して。……必ず生きて帰ってきて。そして、ちゃんと自分で、この人と仲直りして」

その笑みに背を押されて、見送られ父も戦いに身を投じて投じてきたのだろうか。

「……わかった、約束する。必ず戻ってくるって」

決意を改めて言葉にして、青年はキャビネットの上に手を伸ばした。父が倒れる直前に身につけていた品や着衣が片付けられて、置かれていた。その中から擦り切れたネクタイを引き抜く。

未だに焦げ臭さの残るそれを、身につける資格は自分にはない。ただそれでも、一時でも良い。父の意思と正義の心を借りたかった。

英志はそれを右腕に巻いて、部屋を飛び出した。

外に出ると、すでに特状課の面々が集まっていた。

出立することは知らせてはいなかったはずなのに、ライドチェイサーの周囲に集って、整備をしてくれている。

そして英志の姿を認めると、数日前の彼の醜態を忘れたように、朗らかな笑みを向けてきてくれた。

英志はその喜びを噛みしめ、また面に出ないよう、唇を噛み締め、目を伏せた。

「シフトカーから抽出したギルガメッシュ達の最終座標はインプットしてあるわ。ほら、この建設中止の遊園地」

バイクにまたがった英志に対して、りんなは手にした端末に表示されたマップを指で示した。

自分自身の脳にもすっかりその位置取りを叩き込みながら、英志は礼とともにうなずいた。

おそらくそのデータを急ピッチで取り出すまでに、少ない人員で相当の無茶をしながら夜を徹したのだろう。

彼女や究の目には、霧子もかくやという疲労の痕跡があった。

「オレも、こいつのシステム更新が仕上がったらすぐに追いつく。……それまで無理するんじゃないぞ」

と、剛は本来の英志のアイテム、シフトネクストスペシャルを振りながら、肩を軽くはたいた。

行動にこそ支障はないものの、108から受けた傷はまだ完治はしていない。

痒みとも痛みともつかない刺激を表情からは押し殺し、英志は笑い返して見せた。

「けど、やっぱりそれが出来てからのほうが良いんじゃないか？ 連中のヤサが割れたんだし、何もそんなに急がなくていいよ」

知識も技術もないなりに、英志の身を案じる現八郎が、口をはさんで危惧を示す。

たしかに、今の武装……タイプゲットネクストと名付けられたそれは、本来のダークドライブとは半世代ほどのスペックの隔たりがある。万全の状態で挑んだにも拘わらず、真ギルガメッシュには完敗を喫したのだから、それより劣る装備で勝てる見込みはない。

彼にしては、筋の通った道理だった。

だが英志にしても退けない事情が、意地以外にもある。

「多分彼女は、ひとりでも戦おうとするから」

と、苦笑をこぼして英志は答えた。

「それって、春奈さん？」

ずばり言い当てたのは、究だった。

その名を聞いた剛や現八郎に、かすかな苦みが浮かぶ。

彼らにしても、自分の惚れた女や信念のために、二十年前には無茶をしたものだ。今だって、同じことが起これば迷わずそうするだろう。

なので、彼らにとってはこれ以上ないほど引き留められない理由だった。

「ちよつと見ねえ内に、男の顔になりやがって」

鼻をさすりながら感慨深げに呟く現八郎の顔を、意地悪気にりんなはのぞき込んだ。

「それ、偽英志くん見た後にも言ってたよねえ」

「バツ……！ んなことねえよ！」

慌てふためきながら、彼は否定した。が、そのうろたえようを見る  
とどうやら真実らしい。

「ごまかすように拳を打ち鳴らしながら、悔しげに現八郎は声を張り  
上げた。」

「あの野郎……、今度同じ顔を見たらブン殴ってやらア！」

——彼が吐き出した気合いを機に、その場にいた全員の笑いが絶え  
た。

微妙な空気の中、同じく微妙な顔つきと視線が、ただ一方、泊英志  
本人の面へと向けられた。

英志は、真顔で自分を指した。

「……………モノの例えだよッ！」

自分の失言に気づいた現八郎がいかつい顔をくしゃつと歪めなが  
ら吼えた。

なごやかさを取り戻した空気の中で見送られ、英志はバイクを発進  
させた。

遠のいていく懐かしい駆動音に聞き惚れながら、その背を特状課メ  
ンバーは地平線に消えるまでいつまでも見つめていた。

「ほんと、誰かの言いぐさじゃないけど、ちよつと見ないうちにしつか  
りしちゃつて。ねえ？」

英志が完全に視認できなくなった後で、なお蒸し返して夫をいじろ  
うとするりんなだったが、当の現八郎は神妙な顔つきで、病院のほう  
を睨んでいた。

「——なあ、なんか後ろを通らなかつたか？」

と誰に向けるでもなく疑問を投げかける彼に、妻は慣れた様子でた  
め息をついた。

「またそうやってごまかす。ほんつとに男らしくないんだから」

「いや、ウソじゃねえよ！ほんとに何かいたんだって！」

そんな彼の訴えに反して、実際のところ不審な影どころか木の葉ひ  
とつ揺れてはいない。

はいはい、と適当にいなしながら、りんなは自分のラボに戻るべく、

駐車場に停めた車のほうへと歩いていく。

ほかのふたりも同情と憐れみの生暖かな眼差しでいながらも、りんなの意見に賛成らしく、角ばった肩をそれぞれに叩いてから彼女へと続いていった。

そうになると、言った当人も自信がなくなってきたらしく、叩かれた肩を落としてすすごと彼らに追従した。

「……いや、誰かいたと思ったんだけどなあ」

と、なお未練を口にしながら。

追田現八郎。

その魁偉な容貌と同じく、唐竹を割ったような直情のタイプの為人である。

だが、そんな性格のためにミスや勘違いも多く、また反面妙に女々しく、自分の専門外のことに関しては肝も細く縮まり、見慣れぬものに対しては猜疑心が強い。

だが、彼には時折思い出したように、所謂「刑事の勘」とも言うべき動物的直感が働くことがある。

自分も他人も忘れていたが、今まさにそれが作用していた。

つまり、彼が感じていたことは……事実であった。

その男は、大病院の中に苦も無く侵入していた。

季節外れの黒いロングコートをはためかせているにも関わらず、傷病者の受け入れに奔走する医師も看護師も、彼の姿を感知していないかのように咎めることなく素通りしていく。

靴音を鳴らしながら進んでいく彼は、棟を渡ってある病室へと進んでいた。

その先のドアには、

『面会謝絶』

『泊進ノ介』

そんな、二種類の四文字が書き連ねてあった。



男は口元に余裕のある笑みをこぼしながら余裕のある足取りで、まっすぐその病室へと、着実に接近しつつあった。

## 第八話：スタートミッション2035 (3)

そこは、遊園地というカバーストーリーにはほど遠い、荒涼とした大地だった。

アトラクションどころか遊具ひとつ転がってはおらず、山は採掘の後が今なお残るむき出しの肌を晒していた。

その前身は、採掘場であった。

かつては人々の生活を支えるため、新たな技術の進歩のために、この場所の石炭や鉄鉱が掘り出されていたのだろう。だがそれを絞りつくした今となっては、立ち寄る者など誰もいない、不毛な場所となった。

ところが今、その最奥には鉄の城塞が出来上がっていた。

巨大な手に包まれた目のようなレーザー装置が天に突き出され、マクロファージのような小型の宇宙船の残骸が、支柱となってその巨大な身体を支えている。

それはいずれも過去、この世界を脅かしてきた侵略者たちや闇組織が用いてきた技術であった。それを乱雑につなぎ合わせ、組み合わせさせて、出来上がった財団Xの最期の拠点だった。

この場所は、あの城は、かつての死の大商人の成れの果てが抛り、そして過去の大王が籠るには相応の空間と言えるだろう。

そこにふたりの仮面ライダーが現れたのは、ほとんど同時刻だった。

眼下に広がる赤い荒野を見ながら、照井春奈はバイクに寄りかかるようにして立っていた。

その隣に停車させた英志は、並び立つように地に足をつけて降った。

その接近に、明敏な彼女が気づかないわけがない。

だが、しばらくは春奈は無言だった。ただ、英志が隣に立つに任せた。

風音だけが両者の間を抜けていく。それもまた一区切り終わり、本当の意味で静寂が訪れたときに、彼女は言った。

「結局来たのか。というか、乗り換えたのか」

皮肉とも直截的な疑問ともとれる彼女の言葉に、

「まあ、いろいろあつて」

と英志ははにかみながら答えた。

「照井さんこそ、来たことに怒らないんだ」

今度は彼女の変化に、彼が追及を入れる番だった。

「まあ、いろいろあつてな」

と、異口同義の返答をした。

乾燥した風が、ふたたび若者たちの隙に滑り込んできた。

「すまなかった」

だしぬけに、春奈が言った。

「君の大切な人々を傷つけてしまった。辛い立場にある君を、責めてしまった。だがそれでも、君は戻ってきてくれた。ありがとう。……こんなことを言えた義理じゃないが、ともに戦ってくれ……英志君」  
直言はあつても素直な謝意なんて、それこそ今まで春奈の口から聞いたかどうか。

本当に、いったい何があつたのか。

なんかする態度に、戸惑いもあった。問い詰めたくもあつた。だがそれよりも先に、英志は笑うことを選んだ。

「……なんだ」

春奈は茶化されたと思ったのか不機嫌そうに訊いてきた。

だが、英志が笑つたのは春奈が思っているような点ではなかった。むしろこれは、可笑しさではなくて嬉しさから来る笑いだった。

「ごめん、けど初めてだったから。照井さんが、僕の名前をちゃんと呼んだのって」

春奈は怪訝そうに眉根を歪め、あらぬ方向の虚空をぼんやりと見つめていた。

彼女の脳裏で、スタートシグナルが刻まれているようだ。段階を踏んで、その表情が驚愕へと変化していく。

そしてそれが青に達した瞬間、春奈は目一杯に見開いた瞳孔を、弾かれたように英志へと向けた。

「いやそんな『ウソだろ』みたいな顔されても、事実だから」

「せめて一度や二度ぐらいはあるだろう」

「なかったよ。というか一度や二度あったからってどうだってハナシだけど」

「ハハハ」

「笑つてごまかそうとしないですよ……むしろ目が笑つてないし笑い方がヘツタクソ過ぎて逆に怖いから」

敵の本拠を目前にそんなやりとりをしていた矢先、彼らの前方で異変が起こった。

天を衝く機械の目。そこから光が発射された。

敵が先手を打ってきたか。ベルトを腰に巻いてふたりは身構えた。だが、それは彼らを焼きはらおうと狙ってきたものではなかった。それは彼らと城の中間ぐらいに幅広く大地を照らした。

その光の柱から、異形の群れが生まれ出でる。

過去、暴威を振るった敵。

覚醒態も含めたロイミュードがいた。ドーパントが闊歩し、ゾディアーツが列を成して接近してくる。そして彼らのデータベースをもつてしても知り得ない未知の怪人たちがいた。

体系も由来も姿かたちも、一個一個がまるで違うそれらだったが、一糸乱れぬ足取りだった。

だが、それ故にこそその正体を、英志たちに教えることとなった。

おそらくは、惑星メガヘクス。回収したその残骸を素体とする模倣品。

オリジナルの戦闘データ、あるいは行動や思考、人格のパターンをプログラムし、外見を似せたテクスチャで外皮を覆った機械人形。

それらが、広大な平野だったはずのそれを埋め尽くしていた。

「作戦決行に必要な時間稼ぎの番犬、といったところか」

春奈はそう言つて鼻白んだようだった。

だがふたりの若者の表情に恐怖は見受けられない。苦難の夜を超えたという自負、そのうえで持ち合わせた勇気が彼らをそうさせたというところもあるが、どれほど数で勝ろうともあの城を潰せば、コント

ルールを喪いこれらは無力化できる。その道理を知っているがゆえに。

だが、打ち止めに現れたソレは、そんな恐れ知らずの彼らのしばらく硬直させた。

表情さえうかがえるほどの最前線、細まっていく光線が最後に転写したのは、ひとりの少年だった。

擦り切れたジーンズ。どことなくエスニックな雰囲気醸すマフラーと、くたびれたジャケット。

小柄で華奢な、どこにでもいそうな少年。ただそれだけに、動物の横顔を模したと思われるベルトの赤いバックルだけが、浮き彫りになって不気味だった。

その場に留まり、眠るように瞼を落としていた彼だったが、やがて顔を持ち上げ、眼を開けた。

物憂げな表情と、生にしがみつくかのような渴望じみた力強さ。相反する要素が、その目の中でせめぎ合っていた。

機械で再現されたとは思えない、苦悩と葛藤に満ちた表情のまま、彼はジャケットのポケットから注射器にも似た容器を取り出した。

見たこともないそのベルトの、持ち上げたスロットに押し込んだ。  
〈NEO〉

流れる音声に、感情の抑揚はなく、切れるように短い。

だがそれとは対照的に、ベルトを介して薬液を取り入れていく彼の眼光に、獣の獰猛さが混じりあって、勇ましいものとなっていく。

そうして内側から変異していく衝動のままに、彼は低く唸るように言葉を発した。

「変身……いー」  
アマゾン

そう声を絞り出した直後、少年の身体は炎と熱波とに覆われた。

現れたのは、獣とも魚人とも思える生物を強引に機械化させたような、他のモノたちとも勝るとも劣らない、青い異形の姿の怪人。

——いや、『仮面ライダー』だった。

たたずむ姿には再現されたとはいえ、明確な自我を感じさせる、人格が残っている。

だが、彼は英志たちと対峙し、怪物たちの列に加わることを選んだ。そして天へと向けられて放たれた高らかな咆哮が、他の者の獣性をも煽り立てる。

疾駆する無数の怪人たちが、青い獣を先陣に英志と春奈に迫りつつあつた。

## 第八：スタートミッション2035（4）

敵の先駆けが発した光弾が、英志たちの足場を吹き飛ばした。

変身する間もなく、高所から転がり落ちたふたりに、怪人たちが殺到した。

瞬く間に互いの姿は見えなくなり、代わりに視界を塞ぐ鋼鉄の魔に、英志は蹴りを入れた。

むろん、超人たる力のない今、有効打にはなりえない。だが、姿勢を打ち崩すことはできた。

一度で崩れなければ二度。くり出す拳は数を重ねるごとに反動の痛みは薄れ、道は拓けていく。

蜘蛛、蝙蝠、コブラ。三種のロイミュード復元体がチームを組んで襲いかかる。だが、ダークドライブの制動、身体の捌き方が染みついていた英志は波濤のように押し寄せる彼らのコンビネーションをかわし切り、その背に飛び蹴りを見舞う。否、踏み台にした。

空中で身を翻す。背の上から握り固めた拳が、背後に迫っていた骸骨頭のスーツ男たちの出鼻をくじいた。

その体軀が傾いた先に、春奈の姿があった。

華奢な彼女を意図的に狙ったか。そこに寄りあつまる敵は自分の対していたそれより数が多い。

だが彼女の放つ技は余裕がないからこそ苛烈で、効率的だった。

鋭く放つ蹴撃は、相手の後の先を叩く。くるぶしや踵を潰し、大きくさらけ出された側頭部に、銃器のガジェットを至近から発射する。

背後から緩慢に掴みかかってきた大型のクズヤミーを、逆に春奈は背越しに掴み返して一本背負い。

周囲を巻き込みながら天地をひっくり返った巨軀が、大きく地響きを立てて昏倒した。

その振動によって敵軍に麻痺が生じた。身構えていた英志側の包囲は自然と遠巻きになり、道ができる。それを見逃さず、英志は一気に突破した。

数分ぶりを見る春奈の背に、自分のそれを重ね合わせるようにして

立つ。

英志によって突き破られた包囲の一角がすぐさま埋められた。だがそれぞれに、ベルトを転送し、デバイスを取り出す余裕<sup>ポケット</sup>は生じた。「調整は間に合わなかった、というわけか」

英志が取り出したシグナルバイクを横目で見た春奈が確認した。

その通りだったのであえて何も言わず、ただ

「まあ、本命が届くまでの代車、つてところかな」

と冗談めかしく虚勢を張る。

失笑の、いや自嘲めいた笑いの気配を頭の後ろで感じる。

「奇遇だな。私も、似たようなものだ」

春奈が取り出したガイアメモリもまた、彼女の言う通りアクセルメモリではなかった。

色は上下三色ではなく、赤一色。

イラストも、それが表するイニシャルも違う。

「ドライバーもメモリも、酷使に次ぐ酷使でクールダウンが追いついていない。だから、アクセルメモリに次いで相性の高いメモリでセーフモードを起動させる。最後のギルガメッシュに一撃をくれてやる、その時までな」

飛びかかってきた敵を空中で撃墜しながら、淡々と告げた。

視界で、体勢で、互いの死角を埋めながら彼らはそれぞれのプレスやベルトを起動状態にし、セットする。

「そういえば、さっきの話だが」

春奈がおもむろに話を切り出したのは、それが完了する間近だった。

「最初に君と会った時、私、たしか名前で呼んだぞ」

「ええ……アレをカウントする？」

どうだお前の勘違いだったろう、と言わんばかりの誇らしげな物言いに、英志はげんなりと肩を落とした。

それを隙と見たのか、忍者のような怪人が超人的な飛翔とともに、逆手に構えた刀とともに迫りくる。

英志と春奈が同じタイミングで突き出した上段蹴りが、延髄にあた



る部分を左右から揺らすように叩きつけられ、忍者は地上へと落下した。

「これを使い切ったら」

「え？」

「いくらでも呼んでやる。君の名前をな」

戦場とは不釣り合いな、いやそもそも今まで一度も聞いたことのない、彼女の明るい声音。それに対し英志は、曇りのない笑みで応えた。「……ああ！ これはゴールなんかじゃない。ここからが、僕らのスタートラインだ！」

そして背中と背中で互いを押し出すように、ふたりは駆け出した。

「変身ー！」

「代、変、身ー！」

との、気炎とともに。

〈DRIVE！ TYPE……GET！ NEXT！〉

その場から飛び上がった英志の身に合わせて浮き上がった装甲が、彼を保護しながら一体化する。

転送されたブレイクガンナーを地上に向けて乱射し、足場を確保するとそのまま無数の怪人たちに接近戦を挑んだ。

一方春奈の姿もまた、別のものへと変わっていた。

下地はたしかにT3アクセルのものと同じ規格。だが、その上に張り付く装甲がまるで違っていた。

重戦車のごときトリプルAよりスピードを取った細身のアクセルよりも、さらに軽量化がほどこされたボディに浮き出たラインは、さながら肋を想わせる。

フェイスマスクを護るのは、Aを象った触覚ではない。赤いメットだった。

アクセルのシャープな意匠の顔の上に、女性らしからぬデザインが施されていた。

〈SKULL！〉

——頭蓋骨、髑髏をデフォルメした装飾が。

赤い骸骨……<sup>スカル</sup>……<sup>レッド</sup>R スカルとも言うべき形態で、春奈もまた多勢の敵に挑みかかった。

## 第八話：スタートミッション2035（5）

着地した英志を待ち受けていたのは、雲霞のごとくに押し寄せる怪人たちだった。

地に足をつけると同時に、ブレイクガンナーを腰に添えて連射する。先陣を切るロイミュードたちのメタリックの身体が火花を咲かせ、彼らはもんどりうって転倒する。

だが地に伏した彼らが道を阻もうとも、彼らを踏みつけようとも構わず、敵は勢いに任せて攻め寄せる。

ダメージによって彼らは痛みも感じなければ、次は我が身という恐怖さえもない。

わずかな隙を見出した英志は、手の内でマズルを強く押した。

〈BREAK〉

銃から一転。打撃武器へと変化したブレイクガンナーで、寄り集まるロイミュードたちの胴を抜いていく。

だが敵勢は衰えることを知らない。

なお突っ込んでくる彼らを順々に相手取りながら、間隙を縫うようにしてシフトブレスのシグナルチェイサーをガンナーへとセットした。

〈NEXT SYSTEM〉

速度と威力を範囲を増した弾丸が、引き金に指をかけると同時に、紫紺の弾道をえがいてひしめく軍団の中央へと連射される。

地面に火の華が咲く。轟音とともに。

瞬く間にその勢いを増した火煙の幕をもともせず、ロイミュード軍団はまるで引き寄せられるように英志へと肉薄した。

その先陣を切って、アイアンロイミュードが飛びかかった。

巨大な手甲をハンマーのように振りかざすと、地面が大きく広く崩れた。

圧殺をかううじて回避した英志だったが、その彼の頭上に、ペンキのような赤い液体が飴のように降り注いだ。

成分を解析し、それが引火性のものだと判断されるや、さらに飛び

のいてかわす。

さらに加えられた火勢の先に、ペイントロイミュードの像が、蜃気楼のように歪んで立っていた。

息つく暇さえ与えず、固定の形態を持つ上級ロイミュード、その複製が襲いかかる。

〈シンゴウアックス！〉

英志は自身の手に直接大斧を転送し、左右に薙いで彼らを斬り伏せた。

リーチと牽制で彼らを遠ざけ半ば強引に隙を作りながら、今度はアックスのスロットにシグナルチェイサーを装填し、待機状態となつたそれを、高々と天へと放り投げる。

それが宙を回っている間に極力その場からは移動せずに敵襲や銃撃をいなし、そして空となったブレイドガンナーの差し込み口に、今度は自身のシフトカーを差し入れた。

〈TUNE……NEXT HUNTER〉

この形態に合わせたことにより、アップグレードされた『拳銃』は、次世代型のシフトカーにも対応していた。

〈EXECUTION！ FULLBREAK……HUNTER〉

マズルとトリガーの同時押しによりネクストハンターの特性の読み取りを実行し、レーザーを発射する。その着弾点から電磁の檻がダークドライブの周囲に立ちふさがった。

〈イッツテーパー！〉

自身の手には、準備と充填を終えたシンゴウアックスが返ってくる。それを英志は大きく旋回させた。

前方に半月を描いて、そして転身して一八〇度の弧を描いて。

みずからや仲間の身体がその電光に焼かれるのも構わずその檻の隙間から這い出てくるロイミュード達は、ストライプ状のエネルギーを浴びて、跡形もなく爆散した。

背越しに英志の無事と健闘を目視した春奈だったが、彼女とて余裕があるわけではない。

アイスエイジドーパントの復元体が、突き出した手のひらより氷柱を打ち出した。

アクシズAでその第一波を撃墜させると、すかさず横にローリング。寸時遅れ、彼女がいた地点に向けて、トライセラトppsが棍棒を突き出した。着弾と同時に火柱が上がり、爆風が軽量化されたT3アクセルを吹き飛ばした。

だがそれによって間合いを稼いだ彼女は、腰に据えられたUFOガジェットに自身のベルトからガイアメモリを移した。

〈SKULLI〉

と音を鳴らすそれを、frisbeeのように敵の塊に向けて水平に放り投げる。

その円盤状の機体から、紫炎にも似たエネルギーがほとばしった。その力が、髑髏のヴィジョンとなって、実機の倍にも膨れ上がった。

最新鋭の科学のガジェットに二種類のオカルトという奇妙な複合体は、その大きな顎門を開いて人魂のように彼女の周囲に空間を暴れまわった。

強度に劣るドーパント復元体から、その直撃を受けて撃破されていく。乱れ咲く火花の中で、役目を果たしたガジェットはふたたびアクセルの腰に据えられた。

だがメモリは戻さずそのままに、マキシマムスロットとして、春奈はガジェットのスイッチを押した。

〈SKULLI・MAXIMUMDRIVE!〉

大きく築き上げられた春奈の爪先に、紫光が宿る。

やがてそれは再び髑髏と化して、春奈の脚部を覆う。右から左へ、大きく振り抜いた回し蹴り。それによって前方のドーパント達が吹き飛んだ。

〈BLADE LOADING〉

だが、敵に向かって飛んだ火達磨を切り裂く刃があった。

件の青い未知のライダーが、腕と一体化した剣で自身の降りかかるうとした火の粉を払ったのだ。

元より仲間意識は薄いのだろうが、かと言ってこちら側に寝返った

わけでもない。彼は、その勢いのままに、雄叫びとともに春奈へと向けて突撃した。

だがその力強さは、プログラムされた他の怪人たちとは明らかに違っ見える。

そのガムシヤラな攻勢は、春奈の動きを封じるのみならず、同胞を介在させる余地さえ与えない。

春奈の銃撃を驚異的な跳躍力とともにかわし、不自然な体勢のままに、廃棄された鉄骨へと張り付く。

そしてその一部を切断すると、春奈へ向けて蹴り飛ばした。それを払いのけた春奈だったが、

〈CLOW   LOADING〉

生じた死角より射出されたフックとワイヤーが、彼女の利き腕を拘束した。

やはりその咄嗟の機知は、とても自我を奪われたうえでのものとも思えない。

「貴様……操られてなどいないか？」

そこで春奈は、腕の自由を奪われたままで対話を試みた。

マスクに防護されたために表情こそ見えないが、わずかに伏せた視線に逡巡のようなものが垣間見えた。確信した春奈は、声を張って訴えた。

「何故だ……、お前だって、曲がりなりに仮面ライダーだろう。どうしてあんな連中に協力する!？」

「カメンライダーなんて知るかッ！」

青い怪人は、ハウリングの利いた声で吠え返した。

「……分かってるさ。あいつらがろくでもない連中だって……それでも、あの建物が壊されれば俺はまた死ぬ！ たとえ誰かに握られた仮初の命でも、いつかは終わると知っていても！ ここに居ること自体が間違っていたとしてもッ！ 俺は最後の一瞬まで生きたいんだ！」

あまりに身勝手に、感情的な答え。

だがそれゆえにこそ、彼の剥き出しの叫びは春奈の正義心さえ揺ら

がすほどに切実だった。

それは果たして、生きていけると言えるのか。

そんな当然の反論さえ、ためらわれるほどに。

だがそれとは別に、戦士としての春奈はこのやりとりの最中に隙を見出した。

わずかに撓んだワイヤーがまきとられるより速く、むしろ彼女から接近する。その勢いのままに縛られた手で殴りつける。

本人の動揺が伝播したかのように、ワイヤーに緩む。その間隙から、春奈は抜き出た。

対峙する青い怪人は、膝をつきながらもベルトのアンプルを強く押し込んだ。右手のワイヤーが赤熱とともに溶けて再び剣へと変形し、彼はそれを杖代わりにふたたび立ち上がる。

その彼を守るわけではないだろうが、怪人達がふたたび両者の周囲に寄り集まろうとしていた。だが数は確実に減っている。

「照井さん、平気？」

英志もまた、自身を阻んでいた敵を蹴散らし、春奈との再会を果たした。

(これなら一気に突破も)

可能、という春奈の目算を、その中心地を揺るがす衝撃が吹き消した。

敵味方問わず全てを砕くようなエネルギー波は、妨害されながらも着実に前へと進んでいた春奈たちを嘲笑うかのように、遙か後方まで吹き飛ばした。

地にその身を打つ春奈たちは、自分たちの頭上を仰ぎ見た。

大地を挟むようにそびえ立つ丘陵。その片側に、金髪の美少年の姿があった。自分たちを見下ろし、その手をかざしている。

「ふん……まさかの王様直々の出馬か」

軽侮さえ感じさせる冷たい眼差しに、春奈は皮肉で応じた。

だが、春奈たちの目の前で、丘陵の奥からさらにもうひとり、同じ顔が現れた。

「そんなッ!? 本体以外はみんな倒したはずだ!」

声を上ずらせる英志を「取り乱すな」と手で制する。

「奴らの元々どういふ存在か知らないわけないだろう。大方、オリジナルとは別にコピーを作っていたというだけのことだ」

春奈の考察は果たして当たっていたと言つて良い。

彼女が説明をしている合間に、そろそろと、ギルガメッシュたちは増えていく。

そしてこんな短期間にオリジナルの十体以上の性能を持つ個体が量産できたとも思えない。

おそらくはある程度は質が落ちているはずだ。

(それに、一度は倒した相手だ)

だが、量産されたギルガメッシュは、すでにオリジナルの数を超えていた。

五体が十体。十体が二十体……四十、八十。さらに真正面からはその倍以上の数のギルガメッシュが現れた。

見る見るうちに地面を、頭上を覆い尽くしていく無数の王を目にして、さしもの春奈も、全身から血の気が抜けていくのを感じた。

「変身」

異口同音。

それらが、見覚えのある『仮面ライダーギルガメッシュ』たちへと変わりつつある。

「——行こう。進むんだ」

かすかに震える声で、英志が促した。

そうだ。すでに自分たちに退路などない。その選択肢さえ頭にない。むしろ、この絶望的な状況こそが、かえつて雑念を振り切らせてくれる。

だからそれ以上は思考も、言葉も不要だった。

「うおおおおお！」

「はアアアアア！」

希望の焰を自分たちのエンジンに焚べ直し、彼女たちは無数の絶望へと突き入った。



## 第八話：スタートミッション2035（6）

若き仮面ライダーたちは、自身に課せられたハンデにも関わらず圧倒的な物量を相手によく健闘したと言って良い。

撃破した敵の中には、ギルガメツシュの分身体もあった。

だが、相手は英志らが開けた穴を、彼らが穿ち突破するよりも早く埋めてくる。

ただでさえ弱体化していた彼らは、少しずつエネルギーの消耗と装甲の摩耗を繰り返していた。

そして彼らの予測、いや希望的観測に反してギルガメツシュの複製は手強かった。

たしかにスペックは落ちているはず。

かつては有効だった攻撃が通じなくなっている。剛柔、正奇を織り交ぜても、防がれる。

あるいはこの時ギルガメツシュにふしぎなことが起こり、彼の意志の強さに感応してパワーをスペック以上に高めたのかとも考えた。

だがギルガメツシュの機体に、ましてその量産型などに、そんな仕様が施されているはずがない。

そしてギルガメツシュは高揚や意志力によって能力を引き上げる質の戦闘者ではない。

ではチューニングによって出力ではなく技術力を向上させたのか。これも否に思える。

ギルガメツシュの武練はある意味では完成されている。

完璧とは言えない。攻めに偏る傾向もある。だが猪武者ではないし、デバイスや技の切り替えは誤ることなく、惜しみなく使い切るからバリエーションに富んでいる。

これ以上に余計な機能を持たば、かえってその動きを阻害しかねない。

では何故、こうもやりにくいのか。

『『なんでスペックはまだこちらが上なのに勝てない？』か』

正面で鉄棒を振りかざすギルガメツシュが言った。

「お前のごことなど小細工がなくとも読める」

と、かつてそう宣ったとおりに。

「たしかにスペックは上がっていないさ。だがすでに行動パターンは入力済みだ。理由は……それだ！」

ギルガメッシュのくり出したアッパーが、膝元からせり上がって春奈のガードを崩した。

浮き上がった両腕を引き戻そうとするよりも速く、機械的な所作で、彼女に対するギルガメッシュは腕輪のような装置のボタンを押した。

〈DESTROY! DAITENGAN! GILGAMESH  
OMEGARUUDO!〉

水音とともに、ギルガメッシュの突き出した正拳が黄金を帯びて春奈の胴へと叩きつけられる。

わずかな呼気を激痛とともに吐き出しながら、春奈は地面を転がった。

その身から、骸骨の装甲が剥がれ落ちていく。

「……っ！ 照井さん！」

変身の解かれた彼女を見て、英志は思わず意識を引かれた。

だが、それが災いとなった。振り返った彼の右側面で、件の青い敵ライダーは、ホルダーを上下させた。

〈AMAZON SLASH〉

機械的な起動音とともに、彼の腕の刃が赤熱を帯びる。

赫奕と光を放ち、火花を散らしながら、英志の肩口目がけて振り下ろされた。

「ッ！」

とつさに英志はシフトブレスを押した。

〈NEXT!〉

手順を省略した簡易的なキックは、紫光を走らせながらその剣尖を迎撃した。

さながら冷えたコップに熱湯を注ぐかのように、方向性も出自もまるで違う力の衝突は、劇的な奔流を生んだ。

そして彼ら自身を巻き込んで大きく爆せて、その中から青年と少年が弾き飛ばされた。

相打ち。だが周囲の状況がまるで違う。

歯を剥く少年の背後には無数の怪物たちがひしめいている。英志の側には、同じく変身を解かれた春奈しかいない。

英志より先んじて、少年が起き上がった。その傍らの列が割れた。その最奥から現れたのは、金髪の少年だった。だが、明らかに他のコピー体とはたたずまいや全身から感じる気位がまるで違う。

残る唯一無二のオリジナルナンバー001。真のギルガメッシュ。自分たちが倒すべき最大の目標が、手を伸ばせば届くような位置にまで接近していた。

「……ずいぶん、遅い登場だな。列でも詰まっていたか?」

春奈が乱れた声音で皮肉を言った。だがそれが虚勢であることは、英志にさえも明らかだった。

ギルガメッシュたちもまた、敗北者たちに対する憐憫こそ浮かばせるものの、攻撃の意思はとりあえず見られなかった。

「もう足止めは、必要ないからな」

静かに真のギルガメッシュが宣言した瞬間、彼の背に伸びる鉄塔が光を放った。

柱とも杭とも思えるその波動は、周囲一面を巻き込んで風を起し、天へと伸びていく。

地が揺れる。天が割れる。さながら神話世界のごとく、天地は同和されていくようだ。

空が割れ、にわか闇が生じた。その亀裂から、目を覆わんばかりの、地上のすべてを呑みこもうとする赤い星々と、闇を帯びた緑の巨塊が迫っていた。

そして英志たちは理解した。

施設から伸びる光柱は、それをつなぎとめるためのもの……いや、引きずり込むためのアンカーのような役割だと。

目でわかるほどの速度で近づきつつあった。それこそ、肉眼でそれが何物なのか、判別がつく程度には。

その『緑』は、惑星だった。

見たこともない植物がその表面を覆い、文明らしき輝きは見られない。

ただ、その植物の間隙でひしめいているのは、虫とも獣ともつかない、異形の怪物たち。

知性など感じられず、だがあちら側も異変は察知しているらしく、無秩序に暴れ狂っていた。

「あれは……ッ!？」

「あらゆる可能性、時代、ユニバース世界。あれを検索するために、メガヘクスのシステム、エニグマやこの時空間を自在に移動できるお前のクルマのデータが必要だった」

啞然と見上げる英志たちに、ギルガメツシユは淡々と語りかけた。

「あれはヘルヘイムに浸食されつつある惑星。もつともこの地球と適合率の高い世界だ」

「適合……?」

ギルガメツシユが用いた言葉にただならぬおぞましさを感じ、英志は凍ったような声で聞き返した。

金色の王は、その天頂へと指を差した。そして、いつになく厳かな音調で、静かに宣言した。

「今からあの星をここへ『移植』させる。そして、ただ生まれ、増やし、食い潰されるばかりのこの世界の文明と環境を一度破壊する。破壊と再生のバランスの整った、闘争の神話世界へとやり直させるために」

正気とも思えない、突拍子もない言葉。

それを、ギルガメツシユはごく当たり前のように、唯一無二の正答だと言わんばかりに告げた。

「なに、一度や二度は通った道だ。行き詰った世界を、他の世界と融合させてやり直すことなどな」

世界はそれを拒絶するかのよう、震撼していた。

その地響きだけの音だけが場を支配し、その王以外は誰も言葉を口にしようとしなかった。

機械であるコピーたちはもちろんのこと、唯一知性を感じられた青いライダーの少年でさえ、あまりに自分の許容量を超えた話に頭から手足の端まで硬直させていた。

やがて、かすかな嗤いがあがった。春奈の喉から絞り出されたものだった。

自分がここまで静寂だったのは、呆れて物も言えなかったのだと言わんばかりに。

「かつて沢芽市で起こりかけていたことを、世界規模で再現しようとも言うのか」

ヘルヘイム。そのキーワードだけでギルガメッシュが意図するところを汲んだらしく、訳知り顔で聞き返す。

「王だなんだというからどんな壮大な計画かと思っていたが、なんのことはない……お前は、どの時代にもいたありふれた三流の小悪党だ！ 世界の救済を謳いつつ、結局のところ世界を破壊することしか頭にないつつ！」

激する感情と強がりのままに、春奈はそう食いかかった。

だが、ギルガメッシュの碧眼はもはや揺るがない。嘲弄の気配さえない。

むしろその瞳は、春奈の無理解を憐れむようだった。

立ち上がりかけていた彼女に、そして英志に、ギルガメッシュは視線を合わせた。

「小さな惑星の話しよう」

混ざり合いつつ次元の狭間で、黄金の王は語り始めた。

## 第八話：スタートミツシヨン2035（7）

「その惑星は、直径においてはこの地球の三分の一にも満たないちっぽけな、だが美しく恵まれた環境を持っていた星だった」

轟音の中にも関わらず、ギルガメツシユの声はよく届き、心や頭の中にさえ介入するかのようだった。

それこそ、見知らぬ惑星の澄んだ青さを想起させるほどに。

「そこでは人々が慎ましやかに、穏やかに生きていた。だがある時、未知の植物が発生した。いくら焼きはらおうとも決して衰えることなく、つける実は人々を誘惑し、口にすれば最後、たちまち化け物へと変貌してしまう」

「ヘルヘイム……！」

「そうさ。そして魔性の果実に追いやられた人々は住処や食物を失い、猜疑心に駆られ、残されたそれらを求めて互いに殺し合った」

このままだと同様に自分たちも陥るであろう、異世界の惨劇。だがそれを語るギルガメツシユの目は真剣そのもので、そして不意を打つ隙を与えてはくれない。

「もはや人が人たりえなくなり、滅亡寸前となって、ある研究者がその森の発生源に強力なエネルギー源を見つけた。それは果実の形をしていながら他のものと異なり、神々しい黄金の輝きを持っていた。男はその果実を持ち帰ったが、もはやそれを利用してできる施設や設備、資源などその世界にはなかった。そこで彼はその一部を持って惑星から脱出した。いつか母星を取り戻すためにな。……それこそが黄金の果実、シーブイツサヒルアメル……持ち帰った男こそ、俺の父だった」

語る目的、この凶行の動機はまだ掴めずとも、それが何の由来なのかは英志にも分かった。

ギルガメツシユ叙事詩。すべての原典ともされる英雄譚の、さらなる原点。

「父はこの星にたどり着き、黄金の果実を培養しようとした。だが、環境こそ酷似しているようとも、適応できるかは別だった。父は高度な技

術力によって現地人によって神と崇められたが、この星の大気は彼の身体を確実に蝕んでいた。そこで彼は自身や自分の家族の記憶と遺伝子、そして地球人の遺伝子を掛け合わせたクローンを作った。それが、この俺だった」

ギルガメツシユは感傷を交えて語り続けた。

間もなくして、父は枯れ木のように死んだ。だが残された彼のクローンは、その遺志を継いだ。

長い年月をかけ、もつとも保存に適した水中でそれを着実に成長させつつ、エネルギーを抽出し、生命の神秘を解き明かし、やがて父が思い焦がれた故郷に持ち帰り、滅びた文明を再生させる。それが彼の悲願だった。

「だが収穫を間近に控えたその時、『蛇』が現れた」

いや、元々黄金の果実とともに在ったのか。

呼び名どおりの絡み合う蛇のようでもあった。植物のツタや葉のようであったし、あるいは種族も定かではない人間の男にも見えた。

そして違和感なく周囲に溶け込み、そして去る時には本当にそこにいたのかさえ印象に残らない。そんな超常の存在。

「そいつは、ルール違反ってもんだろ」

そう嗤いながら、果実を取り上げた。

「お前たちも進化もできずに負けたんだ。そして、滅びるべくして滅んだ。今さら足掻くのはみつともないし、おれとしても興味が無い」

愛嬌とも茶目つけともとれる口調で、だが皮肉げに、冷酷に宣告した。

「けどこの惑星は気に入った。活力もあり、さらにその先を求めようとする欲望がある。ゆえに、おれは広めよう。永遠の生命にまつわる神話を、人智を超えた力の存在を。いつしかそれらを求めて、彼らが争うように。ここに至るお前の伝説もまた、そのための土壌となる。そして次へのステージが整った時こそ、黄金の果実はふたたびこの世界へと顕れる」

高らかに謳う『蛇』は「もつとも」と指を立てて付け足した。

「その時にはもう、お前はいないだろうがな」

彼の言うことは自明の理だった。

すでにここに至るまでに、黄金の果実を完成させるために、彼は世界を奔走し、その肉体は摩耗していた。友さえ

「ふざけるな！」

詰め寄るギルガメッシュの瘦せた手をすり抜け、『蛇』は姿を消した。

「人としても神としても半端な男よ。せめて、人として一生を終えるといい」

と言い置いて。

「——そして、俺は死んだ。死んでいる間に、奴の言葉通り黄金の果実は生まれ、そしてある人間が手にした。それを使えば、あるいは世界の再生だってできたはずだが、奴はその力を持ち去り、現状維持を望んだ。その結果が、今のこの世界だ」

なんとという馬鹿馬鹿しさ。そう吐き捨てるように、ギルガメッシュは回想を終えた。その時には、彼の碧眼には激情の火が灯っていた。

「だからこそ、俺がふたたび、それをやる。もはや故郷など跡形もないだろうが、それでも第二の故郷たる地球は、衰退の一途だ。神としても人としても半端というのなら神として世界を再生して、人として新世界を統べる。俺は、神と人、両方を超える存在となる」

「……負け犬の自己満足に、全人類を巻き込む気かッ！」

春奈が義憤とともに立ち上がった。

彼女を冷ややかに見返し、半人半神は

「ひとつ、お前たち仮面ライダーを研究してきて疑問に思ったことがある」

唐突に話題を転じた。

「照井春奈。お前は言ったな？ 世界の救済を謳いながら世界を滅ぼす悪党はありふれていたと。そしてお前たちはその度に、人類の質が問われ、世界が危機に瀕するたびに彼らの前に立ちふさがり、そして言う。『人類は決して愚かではない』。『人は弱くなどない』と」



ならば、と王は問い返した

「——だったら何故、仮面ライダー<sup>前</sup>は、立ち上がる？」

なに、と春奈は眉根を引きつらせた。

乗るな、と英志は抑えた。だが会話を打ち切るよりも早く、ギルガメッシュは続けた。

「たしかに、この計画が成就すれば、全人口は今の三割程度に減るだろう。今ある国家や文明の大部分は崩壊するだろう。だがそれでも、俺は人間の可能性を信じている。どんな過酷な状況になっても、力と知恵を尽くしてきつと生き残ると」

「ふざけるな……お前がしでかしておいて、何をぬけぬけと！」

「だったらお前たちはどうなんだ？」

王はゆっくりと腕を動かし、英志と春奈、そしてその背後の空間を指弾した。

「そのオーバーロードを含め、世界を守ると息巻いて現状維持のままにゆるやかな衰退を許した仮面ライダーたちだって、つまるところエゴだろう。もちろん救われた人間もいるだろうが、その行動や判断に伴う犠牲者だって生んでいる。今の俺と、いったい何が違う？」

一度持ち上がった指が、少年の頭を掴んで撫でた。弄ぶかのように、モノのように。びくりと身を震わせ過剰に反応する彼には興味を示さず、笑いながらギルガメッシュはかぶりを振った。

「いや……俺は人の愚かさを理解し、愛でてもある。無思慮に俺に刃向かうのも赦す。浅ましくも世界を破壊した俺に救いを求めるのなら庇護してやろう」

手をかざし、試すように、そして挑むように王は再度尋ねた。

「だがお前たちは、自分たちの行動を正当化しつつも犠牲を出し、人の善性を信じると抜かしつつも、その実不信を体現している。人間の悪性からは目をそらす。己や人の善悪を受け入れる俺の方が、よっぽど健全じゃないのか」

「詭弁だ」

英志は一言、否定を入れた。

だが、もはや声を荒げたりはしなかった。もはやお互いに許容し合

えないのは事の起こりから分かっていたことだった。

ただ、過去のおのれへの決着と、親からの呪縛の解放。その境遇だけは、共通点だった。

雄弁を連ねてきたギルガメッシュとて、それは同様だろう。

肩を竦め、そして己は軍勢の最奥へと消えていく。

「これ以上の問答は無用だ。ではお前たちの死をもって、新世界への幕開けとするとしよう」

そして果実の装甲をまとう彼のコピー体が、英志たちの前に立ちはだかる。やがて、弓に取り付けられたその刃が、断頭台のように英志への首筋に向かって振り下ろされた。春奈がとつさに銃器を構えて前に出ようとした。だが、頭上から降り注いだ黄金の粒子が、彼女の動きを緩慢なものにさせた。

（重加速粒子……あのギルガメッシュの置き土産か！）

その違和感の正体と出所を、英志はすぐに悟った。

今それを使えるのは、108の肉体をベースとしているオリジナルのギルガメッシュしかない。

そしておそらく対粒子コーティングが施されている敵を除いて英志に影響がないのは、腰につけているシフトカーが機能している証拠だ。

だが、見切ったところでどうなるものではない。

武器も、シグナルチェイサーも爆破の衝撃であらぬ方向に飛んだつきり返ってはこない。

眼前に迫る刃を防ぐ手立ては、彼にはもはや残されていなかった。

影響がないはずなのに、命運が尽きるその一瞬、青年の時間はゆくりと流れた。

時同じくして、聖都大付属病院の一室でも、異変は起こっていた。窓から見える光景は尋常ならざるものだということ、誰の目にも明らかだった。不安がる患者たちが騒ぎ取り乱すのを、院の内外で医者や看護師が落ち着かせ、避難させることに奔走していた。

だが、その病室で起こっていたパニックは、もつと深刻なものだった。

た。

外の異変の影響か、あるいは心通じた誰かの変調が彼に影響を及ぼしたのか。

未だに意識の目覚めない入院患者、泊進ノ介が、身悶えていた。手足をビクビクと痙攣させて、ベッドを割らんばかりに胴が跳ねる。

全身を苛んでいるであろう苦痛が、本人の目覚めぬままに喉から悲鳴をあげさせていた。

「貴方、しつかりして……！ 進ノ介……泊さんッ!？」

彼の身体が傷つかないよう押さえつけている霧子自身もまた、取り乱し、その意識は、呼び名は時間軸を錯綜する。

ナースコールならもう何度も押していた。だが、一向に助けが来る気配はない。

もしや英志の身に何かがあったのか。そんな考えが脳裏をよぎった。だが不吉な考えは振り払い、ただ夫の回復を必死で祈った。

——それこそ、音もなく背後に現れた男の存在に気づかぬほどに。

その男は笑い、彼女の肩に手をかけた。

驚き振り向く彼女に、彼は箱を突き出した。

## 第八話：スタートミッション2035（8）

——時は、前後する。

彼らはふたりでひとりの探偵だった。

自分たちの愛する街に平穏をもたらし、そして今も、街の守護神として人知れず戦っている。

今日も今日とて探偵事務所を営んでいた彼らだったが、その様子はいつもとは変わっていた。

素性と性格ゆえに、ガレージに引きこもりがちのその魔少年が姿を現し、彼にしか閲覧できない白紙の本をぱたりと閉じた。

「じゃ、そろそろ行くかア」

それに合わせて、ソファにうつ伏せに横たわっていた彼の相棒が上体を起こし、気分によって選んだ白いソフト帽を目深にかぶる。

「まあ、翔太郎君の身体は留守番だけどね〜」

そんな半熟探偵を締める所長が、オホホと口に手を当ておちよくつた。

彼女の挑発に子どものように乗るのが常のこと。

「うるせーよー」

とがなつた探偵は、自身の声で腰の痛みをぶり返し、「おおう……」と患部に手をあて悶絶した。

そんなおのれに苦笑をこぼしながら、信頼の視線を相棒へと傾けた。

「いつものように、半分だけ力貸せよ。相棒」

「ああ」

すでに慣れ親しんで久しいその呼び名をごく当たり前のよう受け止めて、もうひとりの探偵は掌を虚空に突き出した。

その手に納まった恐竜型のガジェットを手の内で組み替え、そしてボタンを鳴らす。

〈FANG!〉

彼は、少しのお金と明日のパンツがあればいいというのが信条だった。

それは、かつて求めればたやすく満たされた欲望と、そしてそんな環境と自分自身に裏切られたことで生まれた渴望の果てに導き出された彼の人生観だった。

だが、そこに後悔はない。その望みの先にあつた出会いとは間違いないかじやないと、彼は思い、そして今日もパンツとその手に納まる富を片手に旅をしている。

だが今日は、その旅を少し寄り道していた。

「へえー、珍しいなあ。まだあつたんだ」

「なにこのおつきな箱？」

「いや、昔は転送とか高速ドローンとかなかったからね。これにお金を入れてジュースとか買ってただけ……」

などと、ある自動販売機の前で他愛ない会話をしていた親子の前に、

「あ、ちよつとごめんね。すみません。ちよつと離れてもらつていいですか？」

と、物腰柔らかく割り込んだ。

不審がる彼らに、

「これ、変わるから」

と説明になつていない説明を伝え、いぶかし気な親子の前でポケットから日本円ではない、銀の硬貨メダルを取り出し、指ではじいてキャッチし持ち直す。そして入り口に挿入してボタンを押した。

すると自販機は前のめりに倒れながら自身を組み替え、一台の大型バイクの形へと変わった。

「……パパ、これって、こういうものなの？」

「……いや、こんな自販機見たことない」

ぽかんと親子そろって口を開けている彼らに、旅人はいたずらっぽく微笑んで、

「はい変わった」

と言ってみずからそれにまたがった。  
そして誰かの明日へ続く一本道を、走り抜けていく。

その教師はかつて、青春バカと称されたその学園の転校生だった。  
だがすべての障害を打ち砕く無鉄砲さと底抜けの人の好きと銀河級の懐の深さはあらゆる人間の善悪を受け止め、多くの人間の心を惹きつけ友情を結んだ。

そして今はその友情を胸に、教師として全力を注いでいた。

——が、今日は、教師である前に誰かの友人だった。

自習の二字を液晶版に張り付けて教室を出て、廊下を疾走する。

「如月先生、おはよっ！」

「おはようございます」

「チャオ」

普通では考えられない教師の姿に、行きかう生徒や教師は慣れた調子であいさつすつ。

「おう、おはよーさん童次！ ああ、悪い七夫！ みんなに今日自習つて伝えといてくんねーか!？」

あわただしくもそれぞれにダイヤモンド一対一で向き合い、言魂を交わす。

引き留めようとする校長が、残り寿命の少ない髪を逆立て怒っているのを詫びとともにすり抜け、サスペンダーの音を背で受け流す。

そして校門に躍り出た時、懐かしいフラッグが視界を覆った。

それは学生時代、彼らの青春の象徴だったクラブのもの。

焼ききれ、焦げ付き、布地は経年劣化していても、そこに秘めた想いは不滅だった。

それを手にした宇宙工学の権威は、彼を知る者ならば驚くであろう  
柔和な笑みとともに、もう片方の手で小型のコンソールのようなものを差し出した。

「ロールアウトがようやく終わった。……長く待たせたな」

もがき苦しんでいた生徒の心を救うために一度は喪失したそのド  
ライバーを、教師は足を止め、しばしじっと見つめていた。

それから歯を見せてさつぱりと笑い、その『戦友』を強くつかみ取つ

た。

昔、ともに戦った仲間に手を貸すために。そしてまだ見ぬ『友人』<sup>ダチ</sup>と、心を通じ合わせるために。

その宇宙の神は、かつてはどこにでもいるダンサーだった。

何者でもなかった自分から、変身するために必死にあがいた。

何度も現実や仲間が、彼を裏切った。無慈悲で理不尽な悪意を前に、幾度となく心が折れそうになった。

だがそれでも彼は最後まで諦めなかった。自身が花道と信じる一筋を突き進み、最善と信じたステージに達した。

それでもなお人としての優しさを失わず、救いを求める声に応じ、戦いに身を投じる。

そして今、彼の故郷悲痛な叫びを発していた。

だから彼は舞い降りた。

この悲劇に幕を下ろすために。同じく救いを求めながらも孤独の中であらがっていた少年たちや、異世界の友人<sup>ダチ</sup>とともに。

次元の壁を突破し、転がりついた先は高架下だった。

多少それぞれの座標にズレがあったのか、連れてきた少年と青年は捨て置かれたバスケットコートの中、そして神はフェンスを隔てて外側にいた。

「佐藤太郎アニバーサリーツアー……ってことは本当にここは未来なのか」

興味深げに電子板を眺めていた青年は、やがて空を覆い包む異変に気付いてのけぞった。

「おわ、なんかスゲーことになってる!？」

妙に緊張感のない声をあげる彼に、急いでいる心が少し和んだ。

かすかな苦笑を漏らすと、

「時間がない、先に行く。準備を整えてから来てくれ」

と、手短かに伝える。

マントを翻し、フェンスに背を向ける。

同時に黄金の輝きが彼を覆い包み、光の速さで空間を跳躍した。

取り残された青年は、天才物理学者だった。

実は世界を統合させるといふアイデア自体は、将来の彼自身の発想と決断から端を発しているのだが、二〇一七年時点の彼ではまだ知り得ないことだった。

——そして、二〇三五年、この世界にいる『現在』の彼もまた、各地で蜂起した財団Xの残党との暗闘に専念していた。

この時間軸に一度跳び、そしてその結末を見届けているがゆえに。その後、ベストマッチな仲間たちとどんな苦境でも諦めず、それが正しかったと証明したがゆえに。

ただそのことを、この彼は知るべくもない。

「さて、じゃあまあ出遅れずにいきますか」

コートをはためかせて軽やかに言った彼を「あの」と父親を抱きかかえた少年が呼び止めた。

「おじさんは、大丈夫なの？」

少年の目に映り込む男は、たしかに消耗している。

勝利したとは言え、最上魁星との死闘による疲労や傷は当然癒えきっておらず、そして時間跳躍の直後である。

どこぞのバカと違い、神経をすり減らさないほうが、どうかしている。

それより今の発言こそが、彼にとっては問題だった。

「おじさんじゃない。お・に・い・さ・ん」

つかつかと歩み寄って少年の眉間を小突き、また正面へと向き直る。

「もちろん、行くに決まってるでしょ。でない俺、なんのために呼ばれたのよ」

その無理難題を、彼は当たり前のように背負って立つ。

それこそが、偽りだったとは言え彼が志した英雄の姿だったのだから。

青年はチラリと、親子の姿を盗み見た。



その見知らぬ少年もまた、仮面ライダーなのだろうと青年は見た。それも未来の。

だが、父親と推測される『ゴースト』の状態を案じているらしく、膝をついたままに動かない。この時代、この瞬間にも、彼の仲間が戦っているに違いなかった。今すぐにでも、助けに赴きたいはずだった。父親と仲間、その板挟みになって、強張った少年の肩を、叩いてなだめすかす。

「仕方ない。悩み多き若者のために、大天才の大先輩が、手本を見せてあげますか」

コートから引つ張り出した二本のボトルを上下に振り、腰に巻いたドライバーにセットし、レバーを回す。相反する成分がベルトの回路を駆け巡り、ランナーが彼の前後に形成された。

〈Are you ready?〉

ベルトが彼に覚悟を問う。

できてるよ、と答える代わりにファイティングポーズをとり、そして鋭く声をあげる。

「変身ッ！」

天才物理学者。

未成熟とはいえ、未だ空っぽの英雄像とは言え、ラブアンドピース愛と平和を信じる想いの強さは、『現在』にも決して劣らなかった。

父は、一度死んでよみがえった。

いや、一度では済まないほどに肉体や魂の消滅の危機を迎え、そのたびに命の尊さを訴えてきた、みんなにとっての英雄だった。

その声望が、かつては少年にとっては妬ましかった。

ひけめに感じていた。そんなもの、まぐれ続き、奇跡に頼った結果じゃないかと非情な罵声を内心で投げたことだってあった。

けれども、今は違う。

少年は知っている。もうひとりの自分の意識を通じて、痛感していた。

その奇跡は、父が自分で引き寄せたものだった。

他人の生命や幸福を無条件で願い、矛盾だとしつつもその命さえそのために擲つ、無償の愛。

それこそが、彼が祖父から受け継ぎ、そして母に託し、自分に巡ってきた、力の源だ。

生きていることそれ自体が、あらゆる生命にとっての奇跡のようなものなのだ、身をもつて知っていたから父はそのために命を燃やして今その一時一時を戦い、そしてそのたびに希望と奇跡を引き起こせたのだ。

「お父さん……」

少年は、父を呼ぶ。

詫びたいことが山ほどある。交わしたい言葉がいくつも残っている。

父のために、自分にできることはないかと模索する。

思えば自分は与えられてばかりだった。父に何かを返せていたことなど、一度もない。

その歯がゆさが握った拳の力となる。涙を生む。

その時、不思議なことが起こった。

こぼれ落ちた一滴が、父の頬に落ちた瞬間、父の顔に血色が戻ってきた。

父の懐の中で、白い眼魂が輝きを放ち、彼らを包む。そして少年自身のドライバーの中で、彼の眼魂が共鳴を始めた。

うつすらと開いていく父の目。

「ああ、そうか」と。少年は、自分の力の由来ルーツと、そして自分の中に返せるものがあることを知った。

空から迫りくる死の宣告は、都心部からも見えていた。

だが、明確に危機と感じている者はまだ少なかった。ゲーム感覚でカメラをかざし、興奮で騒ぎ立てる。その世界の命運を賭けたゲームは、自分たちもまたプレイヤーであることを、まだ知りたくない。

だが、交差点を白衣をなびかせ歩く男には、それを咎めることはできなかつた。

その男は、小児科医だった。

かつて親から見放され、空虚な心を抱えて生きてきた彼もまた、道を行き交う人々のように、ゲームが世界の中心だった頃があった。いい大人になった今でも、ゲームは彼にとって人生の中で大きな意味を持っている。

それを介してでなければ癒せない人物がいると知っているから。いつか『彼』の高らかな笑い声が、他人への侮蔑ではなく、世界や自分に対する絶望の裏返しではなく、純粹のゲームを楽しめるように、自分はそうなることを願いつつ、今でも彼と向き合い、『治療』を続けている。

今もまた、医者として彼は世界の危機に向かっていた。

本来ならば自分が戦うべきはあの病院でなのだろう。

だが、今頭上に迫りつつあるそれもまた、世界を病ませる病巣だった。

思い悩む彼の背を押したのは、同じ病院で働くチームの皆だった。

「小児科医。お前の存在は今ほノーセンキューだ。……全力で、お前にしかできないオペをしろ」

「そうそう。ここは自分らに任せて、ノリノリでかまして来い！」

「ピッペポピンチ！ の時には、みんなで力を合わせないと！」

「少しでも手エ抜いて無様さらしたら許さねえぞ」

「ねえぞ！」

個性豊かな仲間たちに希望を託し、医者は自分のたしかかな鼓動をたしかめるように、ぎゅつと胸に拳を握って当てる。

自分はもう、空疎な水晶ではないと、心の底から言える。

「——行こう、パラド……！」

自身のうちに在るもうひとつの生命に語りかけ、ゲームドクターは世界という患者を癒すために駆けだした。

霧子の前に突き出された箱からは、甘い香りがただよっていた。

そのことが、彼女が飲まず食わずで看病していたことを思い出させた。

「これ、お見舞いの品。それと、こっちは預かりもの」

その甘い箱……ドーナツ屋のギフトセットを霧子の手に落としてから、あつけにとられた彼女の脇をすり抜け、男はコートポケットから円形のものを取り出した。

それは、奇妙な錠前だった。

赤く塗装されたそれには、今や懐かしい、夫のもうひとつの顔がレリーフとして施されている。

もだえる怪我人にそれを握らせると、そこからほとばしった輝きが、波打ちながら進ノ介の全身を駆け巡った。

そして嘘のように手足から力が抜け、夫の相貌には眠りにつくかのような安らかさが戻っていた。

——例えるならさながらそれは……

「さつすが神様のお守り、ご利益できめん」

男は軽やかな口調でそう言った。だが彼の横顔には、心の底からの安堵の表情が浮かび上がっていた。

「あなたは……？」

とりあえずの警戒心は緩めながらも、恐る恐る誰何する。

あつという間にその場に溶け込んでしまった彼は、ふわりと微笑んではにかみながら答えた。

「おせっかいな神様に頼まれた、おせっかいな魔法使いってところかな。まあ昔この人には、ちよつとした手品サフライズに付き合ってもらったから、そのお礼も兼ねて」

そう言うと、彼は右手の指を立てた。

中指にはめられた、やや大振りな真紅の指輪が閃く。

そして魔法使いは強く誓った。

「大丈夫、もうみんな集まってる。……俺が、最後の希望だ」

## 第八話：スタートミッション2035（9）

静止した時間の中、風が、静寂のドアを叩いた。

強い力が唸りをあげながら加速をつけて流れ込み、戦場に満ちる野望の軍勢に穴を穿った。

へスーパー！ タトバ、タ・ト・バ！ スーパー！

三色一対の光は、英志に触れんとしていた刃をその持ち手ごとに粉碎し、目にも留まらぬ速さ、いや速度や時間の概念さえ超越した軌道で敵を切り払っていく。

「重加速の中で、動けるだど……？」

その乱入者の登場に、王の模倣体が呟いた。

それを受けて、英志の安全を確保した『彼』はその足を止めた。

「悪いけど、これ、ここよりちよつと未来のコアメダルだから」

と返しつつ、腰のベルトに触れながら。

多少くぐもっているが覚えのある声。その仮面ライダーの乱入に当惑する英志の前で、彼はバックルの傾きを水平にして変身を解いた。

鷹をあしらったマスクの奥にあったのは、自分と同じ名の響きを持つ、旅人。

「火野さん……!?!」

「ここまでよく頑張ったね、泊君」

思いも寄らなかつた恩人の登場に、英志は面食らった。

その彼の隣に、音もなく軽やかに白いライダーがマフラーをなびかせて降り立った。

「よっ！ クリーニング品のお届けに参りましたよ、ってね！」

澁刺なその調子の声の正体は、あえて変身を解かずともわかる。

そのライダー、マツハに変身する資格があるのはこの世でただひとり、叔父の詩島剛だけだ。

彼が無造作に投げ渡したものを、英志は慌ててキャッチした。

シフトカー、ネクストスペシャル。

叔父たちに預けていた、自分本来の力の源。

「ピッカピカの新品同様だ。ついでに、こんな機能も付け足してある」  
剛が中指と人差し指で宙を切ると、シフトカーから青い粒子が放出された。それが、周囲に散布されていた重加速を取り込み、もろとも消えていく。

自分たちの周りだけじゃない。一帯に広がっていた時間の減速現象が、無効化される。プログラムがインストールされている。  
ということとは、春奈の方も。

顧みた英志は、流星のように降り注ぐなくつもの光の筋を見た。  
その内のいくつかは春奈を守るように、地上へと降り立った。

〈SHOULDER FANG!〉

獣の牙にも似たナイフが、宙を乱舞し敵を斬りとばす。その間隙を縫うように、真紅のライダーの放つ、何もかもを振り切るような斬撃が敵を爆散させていく。

宙から反撃をしかけようとした鳥や羽虫のような怪人たちを、

「ライダーきりもみクラッシュアーツ！」

大気圏を突破するような勢いの力の塊が、大きく旋回しながらそれを撃ち落としていく。それと並走していた青い流星は、一足先に降り立ち、自身の中に春奈を取り込み、銃撃から彼女を護っていた。

「大丈夫か？ 春奈ア？」

その傍らに、ダブルが降り立った。

風都タワーの戦闘中にも様々に左右の色を切り替えていたそのライダーは今、白と黒の猛々しい形状となっていた。だが、聞こえてくる声はまさしく左翔太郎のものだ。

「べつに、助けてくれなどは頼んだおぼえはないですけどね」

青い球体の中から現れた春奈がそう毒を吐いた。

ダブルの右側から、かすかな笑いがこぼれる。

「ツンデレ。その感情はとっくの昔に検索済みさ」

得意げにそう言う彼……いや彼らを、春奈は複雑に睨み返した。

「だが、その調子なら平気そうだな」

青い球から現れた隕石のマスクを持つライダーは、冗談めかしくそれを拾った。

多少変声が入っているが、語調には覚えがある。

「先輩こそ、時間がかかりすぎなんじゃないですか。月面でも経由してきたんですか」

とシビアに返された皮肉で、英志はようやくその人物が自分も会ったことのある春奈の『先輩』だと気づかされた。

未だ姿勢を立て直しきれしていない彼女に、手が差し伸ばされた。

その赤いライダーのデザインの胴体のアーマーは、どこことなく春奈のT3アクセルと似ている。おそらくは、その前世代。

「立てるか……春奈」

手が春奈に向けて差し伸ばされる。そのぎこちない所作と同様に無骨な声にも、覚えがある。彼女の、父親だ。

春奈は一瞬の戸惑いの後、父親よりも一段不器用な動きでその手を取って起き上がった。

彼らの間に、ロケットのようなオレンジのライダーが白煙とともに着地した。

ベルトの四つのスイッチを一気に両手の指で持ち上げると、変身が宙へと引き上げられるように解除され、中からグレーのスーツを着た、リーゼントの男が現れた。

そして春奈と英志の顔を相互に見やると、「よっ！」とまるで十年來の知己のように手を挙げ、さっぱりと笑いかける。

「オレは仮面ライダーフォーゼ、如月弦太郎だ。よろしくなツと！」

その勢いに唾然とする英志の春奈の手を拳で叩き、打ち鳴らし、そして固く握り合わせる。

「うーし！ これでお前らもオレのダチだツ。ダチのピンチだ、手を貸すぜ」

言葉もなくされるがままになっていたふたりに白い歯を見せて彼は明朗に言い放った。

「……なんなんですかこの人。いろんな意味で」

「慣れる、これが弦太郎だ」

無然と呟く春奈に先輩が答えになっっていない答えを返す。

苦笑交じりでありながら、その声にはどこか誇らしげな響きがあつ

た。

改めて、英志は一帯を見渡した。

見知った姿、資料で情報だけは知っている者、まったく見知らぬ存在のヒーローたち。それらが一同に会し、数こそ劣るものの、それぞれのまっすぐに、敵と対峙していた。

「僕らが出会った人々の中に、偶然ライダーがいたなんて」

知らずこぼれ落ちた言葉に、「それは違う」と、最後に何も無い空間から降り立ったライダーが答えた。

世界の絶望を一瞬でぶっ飛ばすほどの、ルビーの輝きを閃かせて。

「こればかりは、奇跡でも魔法でもない」

白銀の武者が神々しい輝きを帯びて、この争いを終わらせるべく、希望の言葉を継ぐ。

「助けを求める声があるなら、オレたちはどんな遠く離れた世界からでも駆けつける」

その彼の背後で、見覚えがある目の刻印が浮かび上がる。

そこから現れた少年は、英志の姿を認めるや、ほがらかに笑いかけた。

「アユム君」

「久しぶり、英志兄ちゃん」

「君が戻ってきた、ということとは……」

その少年、アユムの背後からもう一回り大きな人影が現れた。

アユムの仮面ライダーとしての形態と同じタイプ。先代のゴースト。

その中には父と同様に彼を見知った仲もいたようで、同じ時代に生まれた彼らは仲間の生還を喜んだ。

その歓声を受け取って、しっかりとした、それでいて温かみのある声を響かせた。

「たとえ時代が違っていても、俺たちの心は、魂は……ずっと一緒にある」

「そして繋いだ命は、もっと多くの人々の命へと繋がっていく」

ゴーストの言魂を引き継ぎ、ドクターライダー……エグゼイドが記



憶に残っている声で唱和し、心音を熱く高鳴らせる。

「人類の科学は技術はそうやって、いつだって願いや意思とともに明日の平和を創ってきたはずだ」

チヨークを持つような指使いで、赤と青のライダーが左右非対称な触覚をなぞる。

冷静でありながら強い情熱を秘めた彼のメッセージは、心に触れて英志たちの胸に届いて伝わる。

若者たちの肩を、火野映司がやわらかく手を置いた。

「つまりこれは、君たちや、君たちのお父さんたちがかつての『今日』その時に、明日へと手を伸ばしつづけたからってこと。だからこそ、俺たちはここに集まることができたんだ」

たとえば、誰かを助けようと差し出した手。あるいは逆に、誰かへ向かって救いを求めて差し伸ばした手。そして出来たつながりの輪が、今この終結と助力だと映司は告げてくれた。

「だから使って。俺たちの力」

自分たちがしてきたことは、誰かの策謀のためじゃない。すべてが無駄だったということは、決してない。

理屈じゃない喜びと達成感が、英志の心の炉をたぎらせた。

沈みかけていた顔を上げ、今割れんとしている青空を仰いだ。

「お願いします。先輩方」

ありったけの誠心誠意で、自分たちのヒーローだった人々に、託す。

映司は曇りのない笑顔でその想いに応え、メダルを取り出した。

そして、弦太郎と並び立った。

「そっか。オレらももうとっくに先輩か」

「どこかで聞いたことのあるセリフだね。あの時とは逆だけど」

「けど、悪い気はしねえ」

くすぐったげにはにかみながら彼らは視線をかわす。それ以上の言葉は、彼らの間には要らなかった。

三色のコインが映司のベルトに投入される。

四種のスイッチのボタンが、リズム良くふたたび押され、起動を始

める。

〈3・2・1!〉

「変身!」

「変身ッ!」

声をそろえて発する。

へタカ・トラ・バツタ! タ・ト・バ! タトバ、タ・ト・バ!〉

腰と腕をひねり、あるいは交差させる彼らの身体が、星と命のきらめきが覆い包む。

それが晴れた時、平成の英雄たちは、ふたたび若者たちの前途を切り拓くべく、姿を現した。

「宇宙キターーッ!」

「あ、やっぱりそれは言うんだ……」

## 第八話：スタートトミツシヨン2035（10）

「まったく、巢穴からぞろぞろと虫のように」

呆れと嘲りを含んだギルガメツシユの笑声が、戦場に雷鳴のように轟く。

「そうやってお前たちはまた先送りにする。いずれ来る破滅からも、人の悪性からも目を背けて」

幾重にも重なる、王たちの嘲笑。

彼らの、いや彼の言葉には、たとえ極論だったとしても、道理があるのかもしれない。だが、今こうして揃った仮面ライダーたちの姿を見ても、その黄金の英雄が唱えたような感想を、英志はどうしても持つことができなかった。

「それは違う」

と、胸を張って前に出て否定することができた。

「彼らは……僕たちは、人の善意を疑うから行動するんじゃない」

父泊進ノ介は、その職業柄、むしろ多くの人間の悪意に晒されてきたはずだ。ロイミュードが悪に奔ったそもその原因は、人の悪意にこそあると結論づけた。だがそれでも彼は、人の可能性を信じて戦い続け、その身をもって人間の価値を証明してきたはずだ。

ならば何故、立ち上がるのか。

今なら、はつきりとわかる。

「僕たちもまた、今を自分の意志で生きているからだ」

英志の得たその解に、ギルガメツシユは沈黙で対した。

「結果がどうかじゃない。相手が信じられないかどうかじゃない。僕たち自身が今、彼らを守りたいから戦うんだ」

その英志に、春奈が続いて歩み寄った。

「——たしかに、お前から見れば短絡的に見えるかもしれない。結果からしたら間違いだった愚行もあったのかもしれない」

細められた彼女の眼が、その父親を捉えた。

「頭ではどうすることが正しいかわかっているのに、その理屈と行動とが、矛盾することだつてあるよ」

みずからの胸を服の上からぐっと押さえ、アユムが低く呟いた。しかし、

「だが、すべては今その時を生きた人間の善意や信念からの行動だつた」

すべてのわだかまりを振り切つて、照井春奈はまっすぐ先を見据えた。

「みんな、心に従つての決断だつた。後悔はある。罪悪感も。それでも、その痛みがあるからこそ、また心に従つて前を見据えて進んでいける」

天空寺アユムは、胸の前でぐっと拳を固めて、強く言い切つた。

「今を生きる人々の明日のために、驚きサブライズフューチャーが待つてる未来のために、今この瞬間の正義と信念で、僕らは戦う」

泊英志は腕に巻いたネクタイを掴む。そこからあふれ出る想いのままに、自身の熱を言葉に替える。

「ギルガメツシュ。たしかにお前とは、背負つた過去の重さは違うかもしれない。お前は、誰よりも未来を見通しているのかもしれない。けれどもお前には、『今』がない。だから、お前に世界は渡せない」

ここまで静観を保っていたギルガメツシュは、その気力を鼻で嗤つて吹き飛ばした。

「笑わせるなよ、エイジ。お前はそうやって誰かの受け売りを、その時の都合にいいように使いまわしてるだけだろうが」

核心に近いところを、容赦なく痛打してくる。

しかし英志はもう揺るがない。

「それでも構わない」

と、言い切る。

「誰かの受け売りだつたとしても、その人々から引き継いだ願いは、僕

が感じた心は本物だ。だからその言葉を紡いでいく。いつの日か、その想いが誰かの心を救うように……それが、僕の使命だミッションッ!」

ドライブドライバーのアドバンスドイグニッションを回す。

〈ACCCEL!〉

T3ガイアメモリのウイスポアを鳴らす。

ドライバーを炎とともに自分の胴へと転送させ、眼魂のボタンを、掌で押しして起動させる。

シフトブレストにネクストスペシャルシフトカーを走らせる。

アクセルメモリを、T3アクセルドライバーのスロットへと挿し込む。

〈アーイー・バッチリミナー! バッチリミナー……!〉

オレ眼魂をゴーストドライバーのカバーの中へと収めて、いく。

彼らと相對する少年は、ぐつと何かをこらえるように唇を噛みしめ、まぶしげに瞳を揺らしていた。

今にも泣きそうな表情のまま、だが獣の本性が彼の奥底から引き出されていく。

〈NEO〉

その迷いを無意味だと切って捨てるように、情の通わない音声か彼を胴回りで響く。

残された行程はただひとつ。

その言葉を、ただ口にするだけで良い。

「変身!」

〈DRIVE! TYPE NEXT!〉

「変・身!」

「変身ッ」

〈レッツゴー! 覚悟! ゴ・ゴ・ゴ・ゴ・ゴースト!〉

「ウアマゾンツツツ!!」

自分たちの姿を取り戻した若き仮面ライダーたちは、誰が示し合わせたわけでもなく、ほぼ同時に、一直線に駆け出し、力と意志とを激突させた。

怪人とライダーたちが彼らに続き、瞬く間に乱戦へと突入した。

天地が裂ける混沌の世界。  
人と神、破壊、再生と守護、そして現在と未来の運命を定める大戦  
は、今ここで幕が上がった。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（1）

「さあ、お前たちの」

へいや、『お前』の罪を数えろ！」

仮面ライダーダブル。

二人で一人の仮面ライダーは、理知的に口元に尖った指先を添わせながら、押し寄せる敵の集団を掲げた指先で糾弾する。

正確には、それら無数の機影の裏側にある、たった一個の野望へ向けて。

だが、その跳躍は、その猛攻は、インテリジェンスとは遠い獣の動きだ。

〈ARMFANG!〉

右腕が強化デバイスと化したファングメモリの一角をプツシユする。腕から伸びた『牙』が、マスカレイドを模した敵を刈り取っていく。

そんな彼らの前に、巨漢が立ちはだかった。

マグマドーパント。その全身からほとぼしる炎熱が、周囲の空気を歪めながらゆらめく。

雄叫びとともにそれがたぎり、火山岩のごとき球体が発射された。着弾とともに、火柱をあげるそれらを、ダブルはかわしていく。

地を駆り、宙を駆け、上下左右あますところなく駆使して火球を避けながらそしてマグマの頭上に到る。

雄叫びとともに自身の機体をもってそれを迎撃する。ファングジョーカーの動きが、その中空でようやく留まった。

だが、彼らはそのままペースを奪わせる気は毛頭ない。

へおおおおおー！

左が雄叫びをあげる。

彼の扱うサイドは、本来出力としてはファングメモリよりはるかに劣るジョーカーメモリ。

しかしそのメモリとユーザーの相性の良さ。そして持ち主の意思に呼応して能力を無尽蔵に引き上げるといふその特性は、加齢による

劣化の気配を見せはしない。むしろ、フアングの敏捷性さえも逆に引きずるような力強さで、黒いハーブボディは一層鋭くその身を研ぎ澄ます。

目の前を遮る焼ける剛腕を斬り除いた彼らは、そのままマグマの身体を天から両断した。

「はアッ！」

地にその足をつけるや、腕の刃を下から振り上げた。

同じ身体から発せられた二色の気合いは、そのまま衝撃波となって白く輝きながら地面を駆け巡り、前方の道を切り拓く。

生じたその間隙に、新世代のライダーたちが足を踏み入れた。

その途上に、マグマを上回る巨大な異物が割り込んだ。

ティーレックス・ドローパントだ。

本来は頭部だけが肉食恐竜の造形で肥大化した形態なのだが、かつてと同じように、この疑似テーマパークの廃材を取り込んでティラノザウルスそのものへと進化していた。

敵味方を問わないその暴れぶりは、英志と春奈を立往生させ、そして彼らとともに変身したもうひとりを引き離した。

そんな彼らの頭上を、ダブルは飛んだ。

〈FANG! MAXIMUM DRIVE!〉

空中でレバーを三連打。その脚部に、マキシマムセイバーが展開する。

「フアングストライザー！」

呼吸を合わせるべく必殺技の名を叫ぶ。

刹那、恐竜のヴィジョンが右脚を包んで牙を剥く。ティーレックスもまた、大きく旋回するダブルの接近を察知してアギトを開けて待ち構えた。

そして古代の記憶から引き出された力は、互いに噛み合った。

純粋な力の衝突は、ダブルの方へと軍配が上がった。

本体たるティーレックスの頭部は鼻先から破壊され、支えを失った身体は、元のガレキに戻って散乱した。

「翔太郎さん！」



着陸したダブルに駆け寄る英志たちの背を衝かんと、マスカレイドたちが殺到する。

だが、その背を一台のバイクが彼らを轢き飛ばした。

そのバイクは、仮面ライダーアクセルはドリフトしながら人の形へと戻り、抜いたエンジンブレードで後続を薙ぎ払い、娘たちの背後を護った。

〈時間がねえ！ お前たちが行けッ！〉

その光景を見届け、翔太郎は鋭く吼え、ショルダーセイバーを半身で構えた。

「ここは俺たちが食い止める」

敵の銃撃や剣撃をその言葉通りに妨げながら、アクセルは横顔を向けた。

「べつに気にしてませんけど、腰のほうは大丈夫なんですか？」

後継機の中にあつてその娘は、減らず口を叩く。

対する答えはその場にいた全員の予想通り

「俺に質問するな」

というものだった。

「——まあ、そうでしょうね。貴方はそうやっていつも、必要最低限ことも言いやしない」

不満めいた愚痴をこぼす春奈に対し、敵を撃退した照井竜は、少しばかりの沈黙の後、言葉を発した。

「……俺は仮面ライダーだ。これからもこれからも、どんなことがあつてもそのことを止める気はない。それでも、ただひとつ、これだけは誓っているということがある」

「……それは？」

「俺は死なない。必ず生きて、お前や所長のもとに戻る」

マスク越しの父娘の表情は、ただ推測するほかない。

ただ、春奈のほうは複雑そうに、

「父さん」

とちいさく呟いただけだった。

それだけで通じ合うものがあつたらしく、得も言われぬ空気が、和

やかに流れた。

「だアーツ！ 不器用にもほどがあんだろこの親子ッ!?」

「たまらず声をあげたのは、翔太郎だった。」

「不器用で、半熟で強情で、けど、それでこそ照井竜やアキちゃんの、そしてぼくらの、風都の娘だ」

「どこか楽しげに、フィリップは声を弾ませた。」

「へにしたって、もうちよっと昔の可愛げを取り戻せってんだ……!」

「その苛立ちを迫る敵にぶつけながら、半ば捨て鉢に吐き捨てた。」

「へさつさで行けッ！ で、ちゃんとカタアつけて来い!」

「言われなくてもそうしますよ!」

「それじゃあ、あらためてお願いします!」

「それぞれの反応もまちまちに、ルーキーたちは先へと進む。」

「大人しく風都に引きこもっていれば、せめて街の滅びぐらいは防げたかもしれないものを」

「小さくなつていく後輩たちの姿に覆いかぶさるように、ギルガメツシユのコピー体が立ちふさがった。」

「呆れとも嘲弄ともとれる口ぶりの彼のベルトは自分たちと同じもの。鎧うパーツはかつての宿敵に酷似し、手にした杖はメタルシヤフトをより悪趣味に装飾したかのようだった。」

「照井はどうなっているか。今彼はまた別の敵と相対している。実質、自分たちと同じ力を持つ敵との一騎打ちだった。」

「探偵事務所出張サービスさ。お代はてめえにツケといてやるよ、ゴッドマン神様野郎!」

「抜かせ!」

「悪意に対して皮肉を返し、ケツアルコアトルスとユートピアの特徴を持つギルガメツシユは、杖を構えて飛びかかった。」

「だが次の瞬間、重装甲車が悪路と敵陣を踏破し、彼を横合いから吹き飛ばした。」

「自分たちのマシン、リボルギャリーは、開いたハッチの中に自分の主人たちを取り込んだ。」

「その内部で眠る、ソファにくくりつけられた左翔太郎の抜け殻。そ

の前で、フィリップはあらためて相棒へと確認をとった。

「一応聞いておくけど、腰のほうはもう大丈夫なんだよね？」

「ああ、こんぐらい、どうってこたあねえ！」

ならばもはや、ふたりの間で何かを語らうことはない。互いを信じ、その心と、そして身体をひとつにするだけだ。

〈CYCLONE!〉

〈JOKER!〉

〈EXTREME!〉

ふたたび開いたハッチから、虹を描いてダブルは飛び立った。

緑と黒の両サイドを、プリズムの輝きが繋ぎ止めた姿で。何物にも貫けぬ盾と、すべてを貫く剣を携えて。

それこそがサイクロンジョーカーエクストリーム。

文字通りの一心同体となった、極限のダブルだ。

〈NAZCA…MAXIMUM DRIVE!〉

自身のマキシマムスロットにガイアメモリを装填したギルガメッシュの肩に、幻想の両翼が展開する。

幾何学的な模様を描くそれをもって飛翔し、王は両脚を突き出してダブルを打ち落とさんとした。

〈HEAT! MAXIMUM DRIVE!〉

〈LUNA! MAXIMUM DRIVE!〉

〈CYCLONE! MAXIMUM DRIVE!〉

〈JOKER! MAXIMUM DRIVE!〉

対するダブルの手によって、ビツカーにセットされた四種のメモリの力が、その半身、プリズムソードの刀身に転送され、集約する。

「ビツカーチャージブレイクッ！」

交錯は、眼にも留まらぬ速さで行われた。

ギルガメッシュのライダーキックを正確に読み切ったダブルが回避し、その胴を虹色の極彩色の剣閃が払った。

その切り口で赤熱が膨張する。やがて行き場を失った莫大な地球のエネルギーは、ギルガメッシュの模造品を内部から打ち砕いた。

爆風を背に受けて着地した風都のライダーたちは、彼の娘たちの負

担を少しでも減らすべく次なる敵と対峙した。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（2）

カマキリヤミーをメダジャリバーの斬撃で上へと打ち上げると、刀身に投入したセルメダルをオースキャナーで読み取らせる。

「トリプル！ スキャニングチャージ！」

「セイヤーッ！」

裂帛の気合とともにくり出された一閃が、次元をも切り裂く。

一度大きくスライドしたヤミーの身体は、元の形に戻ると同時に、その負荷に耐えきれずに爆散した。

王の欲望を吸い上げた銀色のメダルが、仮面ライダーオーズ、火野映司の頭上へと、雨のごとく降り注ぐ。

その銀光を節足で振り払いながら、大きな影がオーズの背後に迫っていた。

オトシブミ型のヤミーと、それにまたがるギルガメッシュだった。

オーズドライブバーの複製を腰に巻く彼は、周囲を巻き込むのも構わずに異形の乗り物にまたがり、一帯を蹂躪していく。

手の意匠を組み込んでいることもあって、その様は地上を平らかにせんとする魔人の一挙手一投足のようでもあった。

それに対するオーズは、単騎で挑む。

欲望と質と量が違うのか。かつては同型のヤミーに有効だったメダジャリバーの斬撃は、弾かれる。

足下で懸命に剣を薙ぐオーズの攻撃などものともせず、大蟲は大きく振り上げた押しつぶさんと多足を振り上げた。

緑に輝くオーズの脚部が、バッタの特性を借りて高く跳躍した。

彼らを見下ろしながらバックルのメダルを入れ替える。

「タカ！ クジャク！ ワニッ！」

急降下とともに、オーズは脚を突き出し、その身をネジのように旋回させた。

ワニの咬筋力の宿る飛び蹴りは、オトシブミヤミーの胴をかすめた。セルメダルが生じた裂傷からこぼれ落ちた。

その傷口に、映司はタジャスピナーを差し向け、火球を発射した。

身悶えた大蟲は棹立ちとなつて、主人を振り落とした。

「よしッ！ 効いてる！」

その効果を確認した映司は、地面のセルメダルを拾い上げて、自身の所有する、いや借り受けたコアメダルと組み合わせさせてスピナーへとセツトし、読み取った。

「ゴブラー！ カメー！ コンドル！ ギン！ ギン！ ギン！ ギガスキャン！」

火炎の蛇を渦巻かせ、妨げようとする敵の横撃をはね退け、銀の光輪がまっすぐに伸びて、虫の頭を射抜いた。そのまま胴体から腹にかけてを焼いた。

内部から膨れ上がった力の奔流はそのままヤマミを呑みこみ爆散させた。

炎と銀貨の中から、異形の二又槍を抱えたライダーが黒い影となつて現れる。

その穂先をしごいて突きかかるのを、映司はスピナーを盾代わりに防いだ。

「あらゆる欲望を一身に背負う王。お前にならわかるはずだ」

その残響が鳴りやまぬ間に、至近に迫ったギルガメッシュは語り掛ける。

「ありとあらゆるものが過程や経緯を省いて容易に手に入るようになった今、願望が希薄になりつつある。それが世界を凋落させる一因となっている。その状況を一度崩壊させなければ、人々は夢や希望が何たるかを思い出すことはないだろう」

「——俺は王様じゃないし、今の世界を手放したりはしない……！俺たち仮面ライダーは、昔も今も、これからだつてずっと手を取り合つて人々のために戦うっ！」

「……痴れ者め。お前の方が、よっぽど欲も業も深い！」

称賛とも罵声ともつかないテンションでそう吐き捨てると、ギルガメッシュの全身から気炎が放出された。それは念動力となつて腰のホルダーから彼のメダルと、スキヤナーを浮遊させた。

「サソリ・カニ・エビ！」

ドライバーのスロットを交換とともに、黒一色のコンボが完成する。

刹那、ほとぼしる瘴気のようなものが、ギルガメツシユの身体から発せられ、肉薄する映司を吹き飛ばす。

黒と鉄の色を帯びた甲殻類の外装を、その威容を目の当たりにした時、映司の脳裏を何か閃光のようなものがかすめた。

だが、そのことに意識を奪われたほんの一瞬の間、それを見計らつてか、ギルガメツシユの後頭部から伸び上がったサソリの尾が、彼の足首を絡め取った。

「おわっ！」

オーズはそのまま逆さ吊りにされ、大きくスイングバイされた。廃材などのオブジェに激突し、その身を引きずられ、映司は声をあげた。そこに、混戦にもつれ込みながら、敵味方の集団が乱入してきた。

その中に、仮面ライダーゴーストの姿もあった。

ただし彼の姿は、何色何種というエンブレムをまとった、黒いスーツになっていた。

「オーズ！」

共闘の数や時間こそわずかであれど、互いにかけてがえのない仲であった。自身が相対する敵との距離を作りながら、ゴーストは助太刀に入った。

〈ノブナガー！〉

……いや、入らせた。

彼の表皮から分離するように頭れたのば、紫と金のパーカーをまとった、影のような存在だった。

手にした長銃を素早く構えて照準を定め、的確にサソリの尾の根を横合いから射抜く。

ギルガメツシユの身体に、もう数発、間断なく見舞う。

火花と所蔵していたメダルが、周囲に散った。

「いやー……久しぶりに体感したよ。横G」

解放されたオーズは、ふらつきながらいまいち緊張感に欠けるようなことを呟いた。

その碧眼が、そのへノブナガの亡霊を、捉えた。

「えつと……ありがとうございます……ごいします？」

自分でも名状しがたい奇妙な感慨とともに、映司は彼に礼を言った。

フードの下で、紫色の眼が彼を見定めるように底光りした。

へ大望才を抱いてエ、蒼穹をあおぐ者よ。おのが道を、征くがア、良  
い

やや大仰に過ぎる物言いに、苦笑する。その彼は、己が足下に転がった三色のコアメダルを、一掴みにすると、映司に投げ渡して蜃気楼となって消えた。

その造形を、じつと見つめる。そして、傾けた自身のドライバーへとセットしていく。

鴻上ファウンデーションから強奪された最新のコアメダル。未来から来たサメ、クジラ、オオカミウオらのメダルの失敗を経験に、修正された計画から再生されたうちの一組。

あの彼は、自分の知る『彼』ではないけれど、このメダルにも、彼の魂は宿っていないはずだけれど。

それでも、自分には長すぎるほどの交流の日々は、今も自分の中で生きている。

そのことを、共にその下で笑いあつた青空を守るためにも、無かつたことにしないためにも、自分は戦う。

『彼』と同じメダルで。

へエビー！ カニー！ サソリ！ ビカソ！ ビーカーソ！

オーズの形態が、新たに湧き上がる力とともに変化する。

オレンジ、マゼンダ、そして明るい紫と暖色で統一された姿が、そこにはあつた。

そのプロトタイプたる黒のコンボとは、頭部と脚部に該当するコアメダルが逆転している。

エビの瞬発力を持つ脚と、サソリの毒気を持つ脚が、互いを狙い定めて地を蹴った。

常人にはその応酬は、姿もその兆候もなく、ただ砂嵐が巻き上がつ



たようにしか見えなかっただろう。

だがその渦の中では、それを引き起こした両者が神速の打ち合いを繰り返していた。

その姿が視えるのは、足を止めたその一瞬だけだ。

「だだだだだだ！」

頭と脚のサソリが、互いを刺し穿つべく彼らの間を交錯する。

だが、決定打に欠ける力のぶつかり合いは、彼らをいたずらに消耗させるのみだった。その無為を悟るのも、自ら退くのも、ほぼ同時だった。

呼吸を整え、ふたたび撃ち合う。今度は彼らの共有する部位、カニの鉗をもつてして。

金属音が、風を切り裂いた。

「だだだだだだ！」

短く切れるような、呼気の連続。

それによって自身のリズムを確立した映司は、やがてギルガメツシユを押し始めた。

柔軟性を突き破り、堅牢なガードを打ち崩す。

大きく上体は揺らいだのを見計らい、オーズはそのスキヤナーをベルトの前でスライドさせた。

へスキヤニングチャージー！

半拍子遅れて、ギルガメツシユもまた同じように読み取らせた。

へスキヤニングチャージー！

解放した力を行使したのは、ギルガメツシユの方が先だった。

丘陵を背に陣取る映司へと向けて、無数に枝分かれした尾が迫る。

「はあっ！」

映司はチャージした力を、まず自分の加速に使った。

丘陵に足裏をつけてそこを駆ける。自身に迫り、囲まんとする敵の刺突をくぐり抜けていく。

速度をわずかも落とすことなく、反時計回りにギルガメツシユの背面に回り込むや、低く、だが勢いをより増して敵へと飛び込んだ。

突き出した膝が、サソリの鋭さをもつてギルガメツシユの頭部に炸

裂した。

毒気が、逆にギルガメツシユが流し込もうとしたそれを取り込み、彼の体内へと逆流する。

機械の身体さえも冒す猛毒は、彼の最深部に達するや暴走して、スパークを引き起こす。

「セイ……ヤアーツ！」

動きが止まった魔王の分霊に、地に降り立ったオーズはその身を翻す。

最大威力、渾身の回し蹴りは、ギルガメツシユを高く、遠く飛ばした。

くるりと回り、残心を示す映司の背を爆散の熱と風が押した。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（3）

「出し惜しみゼロだ！ 一気に突き抜けるッ！」

〈COSMIC ON!〉

時が流れても、遠く別々の場所にいたとしても、決して緩まぬ絆の力が、その白いライダーの力を銀河の輝きとともに明るく青へと変色させる。

フォーゼコスミックステイツが、二十年ぶりに復活した瞬間だった。

白煙を噴射しながらその推進力でもって敵陣真っ只中へと踊り込む。

ロケット型巨大モジュールバリズンソードで大味に敵を叩きながら、

「仮面ライダーフォーゼ！ 久々のタイマン張らしてもらおうぜー！」

如月弦太郎は、高らかに名乗りをあげた。

ロケットを持つのは逆の手に握りしめた赤褐色のモジュールをベルトに装填し、返すその手で、胸の39番のボタンをタッチする。

〈GIANTFOOT ON〉

〈STAMPER ON〉

合成音声か、二つのスイッチの名を呼ぶ。

精製された巨大な足型のエネルギーが、頭上に展開されるや、フォーゼの動きに合わせ、重装歩兵隊のごとく前進していたオリオンゾディアーツの群体を踏み潰す。

だが、それだけでは終わらない。

突如空いた欠落を埋めるべく、ダスダードが殺到した。だが、彼らの足下には、先の踏みつけが刻んだ、フォーゼのシンボルマークが明滅をくり返していた。

次の瞬間、地形が一変するほどの大爆破が彼らを吹き飛ばした。

手足をばたつかせて宙を踊る宇宙忍者たちを、青い光球がさらにピンボールのように弾き飛ばした。

地上に降り立った球から、殻を破るようにメテオが現れた。

「この数相手でも『タイマン』か。今さらだが、どういう定義なんだか」  
フォーゼと背中合わせになり、怪鳥の構えを取りながら呆れ混じりの冗談をぼやく。

「カントンなことじゃねえか」

背越しにそれを聞いた弦太郎はカラリと明るいう調子で言った。

「百対一だろうと千対一だろうと、向き合うのは一人一人だ！ んで、ガチンコでぶつかりゃお互いに通じ合うモンがあるはずだッ！」

矛盾に満ちすぎて、指摘するのもバカらしい強引な論法。だがそこそが如月弦太郎だと、彼を知る者にとっては納得のいく答え。

その弦太郎は、自身の手の中にコックのついた赤いスイッチを呼び出した。それに合わせ、メテオこと朔田流星もまた、自身の名を冠するスイッチをドライバーから抜き、背を預ける戦友へ託した。

〈FIRE ON READY?〉

〈METEOR ON!〉

火熱を帯びて勢いを増したメテオの拳が、並み居る敵を打ち砕く。

「ワーチャチャチャ！ ウォーリャア！」

そんな彼の氣勢を声真似しながら、フォーゼはバリズンソードを連続して突き出した。そこから発射されたコズミックエナジーは、青く発光しながら宇宙忍者たちと、それらを先導するカメレオンゾディアーツを吹き飛ばした。

「……まあ、こいつらを統率しているのはギルガメッシュただひとりの意思だ。なににせよ、ある意味タイマンか」

敵を火拳で捌きながら苦笑まじりの声でこぼした流星に、弦太郎は「いや」と強く引き締めた声を返した。

「向き合わなきゃなんねえヤツは、もうひとり、いる！」

弦太郎は身を翻し、振り上げたモジュールを振り下ろした。

背後から奇襲を仕掛けてきたギルガメッシュの拳と打ち合う形となり、そのまま鏢迫り合いへと移行する。

〈CANCER ON!〉

バリズンソードと組み合うその手が、見覚えのあるハサミへと形状を変える。

その切れ味は、自分が身をもって知っていた。だが、かつてよりさらに強化されたであろう切断力でも、自分たちの『友情』の象徴は決して断てない。

対しているのは、無数に増殖したギルガメッシュの中で、唯一コズミックエナジー由来のライダーである。

何故、このタイプのみコピー体が存在しないのか。

その理由が彼の使うモジュールにあることを、フォーゼは知っている。

「うおりゃあッ!!」

挟みきれずに硬直した隙を見計らい、フォーゼはバリズンソードで押しに押しに押しに押しした。

同じタイプでありながら、一切の理屈を捨てたフォーゼのがむしやらの攻めは、勢いにおいてはギルガメッシュのそれを上回った。

無理矢理に作った胴と腕の隙間に、ロケットを叩きつける。

「……………」

ギルガメッシュはスイッチ入れ替えるべく距離を作る。だが、弦太郎の狙いはそこにあった。いや、ひたすらな攻めは本心かつ無心によるものだったが、隙を見出した瞬間、本来の狙いを瞬間的に思い出した。そうなれば、彼の動きはさらにまっしぐらなものとなる。

ピンクのスイッチをソケットに挿入する。

〈MAGIC HAND ON!〉

合唱するように音が鳴り響く。ロケットの先端を、手の形をしたエナジーが包み込む。その指先が伸びるや、敵のドライバーからスイッチを奪い取った。

メインコンソールを喪ったギルガメッシュのベルトが動作不良を起こし、動きが止まる。

「これでもう何の加減もいらねえ！ 全力でブッチ切るぜっ！」

背中から青い粒子を放出させながら、フォーゼは腰を落として構えた。そして大地を蹴って、バリズンソードを敵へと突き込む。ふたりのライダーが向かう虚空に、ワープホールが開き、その先には銀河が広がっていた。そこに自身もろとも、ギルガメッシュを押し込み、宇

宙空間へと転移した。

今なお超然と生命の輝きを放つ地球。それを背に、フォーゼはバリズンソードのレバーを引いた。白煙とともに、ロケット内部に格納されていた刃が露わとなった。

「抜いて、挿す！」

ソードの後尾に収まっていたスイッチを入れ替える。

〈LIMIT BREAK〉

あたかも星月が目の前に現れたかのような光輝とともに、青い刀身はその威を高めていく。

「ライダー超銀河フィニッシュ!!」

それが最高潮に達した瞬間、フォーゼは円弧を描いて刀身を横一文字に振り抜いた。

かつての、遠く銀河の果ての来訪者は、その斬光に飲まれ、昂となって消えた。

「よっと」

フォーゼは、ギルガメッシュを倒す直前に彼から奪取したスイッチを押した。ラストワンを迎えたゾディアーツスイッチのように、それも役割を終えた青いスイッチは、その外装を霧散させて中身を解放した。

こぼれ落ちるかのように現れたのは、宇宙にたゆたう、ちいさな流動体。黄金の果実探求のための並行世界や外宇宙の観測の折、彼らに見出されて捕らわれ、動力源の一部とされていたもの。

いわゆる生命の種ともいべき存在、それが今弦太郎の前に在る、SOLUだった。

そして弦太郎は、今まで二種類のSOLUに出会っている。

自分の想いを受けて知性を得た『彼女』と、人間の悪感情を吸い上げて獣と化した『彼』。

そして今、弦太郎が相対しているのは、『彼』のほうだった。『彼女』からその消失を報され、ずっと探索していた。

一度は形を失ったSOLUが、フォーゼの眼前に寄りあつまる。かつて学習した言語と容貌をふたたびトレースしはじめ。ある女性

にまつわる、ツバサという少年の顔だけを空間に浮かび上がらせ、弦太郎へと硬い声で問いかけた。

「何故、助けた？」  
と。

彼らのはかつて敵として相対した。彼は、弦太郎に近しい相手も、悲劇へと巻き込もうとした。憎みこそすれ、救う意義などないはずだった。

だがそんなことは、問題にならない。すでに過ぎ去った、些細なことであった。少なくとも、如月弦太郎にとっては。

マスクに奥ではにかみながら、弦太郎は迷い一つなく答え、手を差し伸ばした。

「あの時誓ったんだ。次会った時は絶対えダチになるって」

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（4）

スーツの裾をはためかせ、その身を回転させながら、仮面ライダーであり魔法使いでもある操真晴人は敵陣の合間をすり抜けていく。

ウィザードガンから放たれる剣撃と銃撃が、その動きに合わせてるように、グルルたちの間をぐぐり抜けて、翻弄していく。

鮮やかな手際は軽業師のような、いやそれこそ魔術師のようだった。

アストラレザールの切先を翻し、肩越しに裏に回す。

後ろを突くようにして襲ってきた牛の怪物……ミノタウロスのファントムの斧の一撃を、背面で受け止め、いなし、自分の正面へと引きずり出す。

「お前か」

その姿を見た晴人は、やや複雑な感情を込めて呟いた。

それにしても、絶望させた人の形骸をかぶってさらなる絶望を拡げるファントムを、希望も絶望も持たない機械が模倣するというのは、皮肉というか、なんというか。

さらに言えば、このミノタウロスは晴人自身にとっても因縁の深い相手でもある。

オリジナルとなった奴、それ自体には特別に抱く心はない。ひとりの父親の妄執から生じた産物のひとつだ。

だがその悲劇の産物が、本来決して交わることのなかった自分と『彼女』とを引き合わせた。

ひとつの時代の節目に、再会を果たしたその『縁』に、虚心でいるというのは無理な話だ。

だが、ウィザードの剣筋にも、照準にも、乱れはなかった。

追い立てるように乱舞し、やがて片方の角を一剣のもとに両断した。

へっ！ フレイム！ スラッシュ！ ストライク！

指輪の魔力を汲み取らせた刀身に、炎がゆらめく。

反撃の斧をコートにかすらせもせず避けると、その回転の余力で



もって、無防備になった敵の胴を斬り払った。

流し込まれた魔力によって爆散する。そのゆらめく火煙によって生じた陰影から、暗い炎が人の形を取って現れた。

自分の魔力に反応して魔法じぶんと同じ体系の怪人が集まっているというのなら、その特性を持つモノはただ一種。ヘルハウンドだ。

影から伸びて実体化した掌から生じた火炎が、ウィザードへと迫る。

晴人は横に身体を傾けながら回す。

バックへと飛びながら宙を舞う。その滞空時間の中で、彼はベルトを上下にシエクさせ、入れ替えた指輪を読み取らせた。

〈フレイム！ ドラゴン！ ボウ！ ボウ！ ボウボウボオー！〉

その軌道の途上に現れた魔法陣に晴人は飛び込んだ。

潜り抜けたウィザードのコートを、炎の龍が赤く染め上げる。

その力のほとぼしりは、敵の放つ業火さえも我が力へと換えて、取り込んでいく。

着地と同時に、フレイムドラゴンのスタイルとなったウィザードはスペシャルリングをベルトのバックルへと押し当てた。

〈スペシャル！ サイコー！〉

胸のドラゴンのレリーフが、突き出して実体化する。その罅から放たれた炎のブレスは、放射され続けていた炎をも飲み込み、ヘルハウンドを跡形もなく焼き尽くした。

その炎の奥で、四体の同型のライダーが迫っていた。

かつてのビーストを模したものが、同じ顔を並べながら、別のリングをその指へとはめていく。

〈ゴーツ！ ファツ！ ファツ！ ファツ！ ファルコー！〉

〈ゴーツ！ カカツ、カツカカツ、カメレオー！〉

〈ゴーツ！ ドッドドッドドツ、ドルファイー！〉

〈ゴーツ！ バツバ、バババツファー！〉

それぞれ別の動物の力が、マントとなって彼ら、ギルガメッシュの両肩に宿っていく。

あるいは飛行し、あるいは透過し、あるいは潜行し、あるいは突撃

する。

上下問わぬ、硬軟、柔剛を織り交ぜぬ反攻は、ここまで優勢に運んでいたウィザードを攻勢を食い止め、翻弄し、そして逆に後退させた。四方から迫った獣の爪に対し、晴人は支えるように剣で抗した。

「魔法だろうと何だろうと、力と物量がすべてを制する。その道理が覆ることは決してない」

ギルガメツシユたちは、脅すような物言いとともにさらに圧を加える。

晴人はウィザーソードガンを片手で持ち替えながら、晴人は軽やかに笑った。

「どうかな」

一度下げた片手を、再び掲げてみせる。

〈ドラゴタイム！ セットアップ！〉

その手首にはめられた時計型のデバイスを、ウィザードは起動させた。

「そんなつまらない『当たり前』をひっくり返すのが、魔法使いだろ」  
そう言い切ったウィザードは、素早く飛び退いた。

地表を液化化させながら、ドルフィマントを身に着けたギルガメツシユが彼を追った。

〈ウオータードラゴン！〉

その目前に青いコートをまとったウィザードの分身が現れた。

その裾の下から生えた尾からほとぼしる冷気は、水となった大地もろともギルガメツシユを凍り付かせた。

〈ハリケーンドラゴン！〉

両翼の力を頼りに空を切り、緑のウィザードは風を巻き上げながら『ファルコン』を宙で翻弄する。

〈ランドドラゴン！〉

粉塵とともに地面から現れた黄色いウィザードは、正面から迫る『バッファロー』の突進を、自身の爪と怪力でもって食い止めた。

〈ファイナルタイム！ オールドラゴンツ！〉

胸の竜で『カメレオン』の潜伏する空間をもろともに焼きながら、晴

人の本体は時計の針を巻き戻す。

そして魔法陣を背に浮かび上がった彼の分身が、ふたたび彼と融合していく。

フレイムドラゴンを素体に、それぞれとパーツが組み合わさっていく。

そして一度高らかに舞い上がった彼は、四色の魔法陣をその足下に発生させた。

それぞれの魔力が結合し合い、ひとつの巨大な陣を形成していく。宙に固めた風の塊を蹴り、魔法使いは螺旋を描く。

巨大な陣の中央を突破し、それを推進力に魔力は膨れ上がる。

色を加えて、速度を増し、虹の紡錘、あるいは竜そのものと化したウィザードは、その軌道上にあつた四体のギルガメッシュを一気に粉砕した。

「――仁藤」

着地した晴人は、を模倣された友の名を、重い調子で呼んだ。

「仇はとつたぞ」

感慨を込めて呟く。

仮面ライダービースト。ギルガメッシュにその力と姿、そして宿したファントムを模倣された無二の戦友だった。

その彼は、今……

「死んでねえよ！」

ふつうに、晴人の後ろに立っていた。

「あ、聞いてた？」

ビーストの姿になっていった彼にダイスサーベルで小突かれながら、冗談めかしく晴人は言った。

「皆まで言うな。ほら、次行くぞ！」

「おうー！」

彼らは慣れた調子で互いに呼吸を合わせて並び立った。現代に生きる魔法使いたちは、それぞれに剣を携え、絶望を希望に変えるべく

次なる戦いに身を投じた。

## 最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（5）

戦場に単騎、白銀のオーバーロードは屹立していた。

その周囲一帯をインベスが十重二十重に取り囲んでいた。

彼の視界の視界において、その不気味な外皮を持つ怪物のいない場所はない。

ただ、彼らの爪や牙が、その白銀の鎧に触れることはなかった。

〈影松！〉

〈無双セイバー！〉

彼の呼び出した十文字槍と刀が、銀光を描いて彼らを叩き落としていた。

「オウラアツ！」

雄たけびとともに振り回すその軌道は嵐を巻き起こし、実寸よりもずっと伸びて地を駆けるシカや滑空してくるコウモリのインベスなどを撃破していく。

その姿はまさに、一騎当千の戦神といった様相だった。

爆炎の中をくぐり抜け、泰然とギルガメッシュのコピーはソニックアローを片手に歩いてくる。

宮殿の宝塔のごとき兜の奥で、ギラリとその眼が野心と怨嗟の光を見せる。おそらくそれは、戦極ドライバーに取り付けられた『鍵』へと向けられたものだろう。

「知恵の実……それを手にしながら、人類に革新をもたらさないと、<sup>オーバーロード</sup>『上帝』の名折れもいところだ」

「こんなものがなくなったら、人は前へと進んでいける」

無双セイバーを肩にかつきながら、みずからの力の源たるそれを、？ 紘汰は否定し、あるいは受け入れて、自身も前進する。

彼らの間に、インベスの群れがなだれ込んだ。

様々な形態を持つそれらを、武器を替え、手段を変えながら蹴散らして、その群れを鎧武は割っていく。

「言い換えれば、その果実がであろうとも人は誘惑に克ち、その力を良い未来のために使えたはずだ。だがお前はそんな奴らに何度裏切られ

た？ どれだけさんざんな目に遭わされてきた？ だから果実を持ち去り、果ての星で隠棲したんだろう。それこそ、お前が人間の可能性を信じていなかった証拠だ」

挑発のようにそうつぶやき、ギルガメッシュは矢で牽制しながら自身は後退を始めた。

群れの中に影となって埋もれていく彼を追うべく、鎧武は遮る者すべてを斬り伏せていく。

ふいに、その群れが開けた。

遠い隔たりの先に、ギルガメッシュがいた。

ただし、一体ではない。

ゲネシスドライバーを持つ彼らは、怪人と劣らぬ数百と言う数で、整列していた

そしてその『弓隊』は、ソニックアローをそれぞれ天へと向かってつがえていた。

「っー」

それを防がんと手を伸ばそうとした鎧武を、強化されたシカインベスの巨体を取り囲んだ。

単純な力比べであれば、たとえそれが屈強な怪力を持っていたとしても負けはしない。だが、動きは制限された。

〈デーツエナジー！〉

引き絞られたエネルギーは、斉射とともに矢の形となって割れた空を覆い包んだ。落ち行く異星の下で、弧を描き、インベスをも巻き込みながら、鎧武のいた地表を滅却していく。

「だからお前は禁断の果実を地球に置いておきたくなかった。野心を抱えた人々に、種火を残したくなかった。そうだろう」

その火力と範囲は、たとえオーバーロードといえども跡形もなく消し飛ばす。

その、はずだった。

〈ミックス！ ジンバーチェリー！〉

えぐれた大地からもうもうと立ち込める黒煙を切り裂いて、紅桃色の閃光が突き出てきた。

三日月の前立てを頭に輝かせ、陣羽織を負った青いスーツとなった鎧武は、足を止めず高速に蛇行しながら、その軌道にいるインベスやギルガメツシュを撫で切っていく。

「たしかに、禁断の果実を多くの人間が求めた。中には誰かを利用して、善意を踏みにじった奴もいた。そのために、たくさん被害を出したヤツだっている……！」

矢を撃ち、走り、あるいは上下両端のアークリムで敵を押し返し、ギルガメツシュの弓隊に迫る。

中央のスロットに、別のロックシード……かつて涙を流して討った戦友から譲り受けた、バナナロックシードをセットした。

「けど今ならわかる！ ああの戦いは誰だって、自分の信念のため、信じた夢のため、今の自分を変えたくて戦ってきたんだっ！」

〈バナナチャージ！〉

射放った光矢は、黄色い檻となつて最前列で撃ち返そうとしていたギルガメツシュを覆い包んだ。

条件さえ整えば下級程度のオーバードの動きさえ封じるその拘束に、弦を手にしたままにギルガメツシュの一体は捕らわれた。

「俺はそれを、笑わないし、笑わせない！」

高らかな宣言とともに、鎧武はきりもみしながら高く飛び上がった。カッティングブレードを一度上下させた。

〈オレンジスカッシュ！ ジンバーチェリースカッシュ！〉

オレンジの切り身のようなサークルが、彼らの間に形成される。

クラッカーのような、あるいは赤い榴弾のごとき二個のエナジーボールを伴って、鎧武の脚は突き出される。

「セイハーツツ!!」

サークルをくぐるたびに、スピードと力と光が増していき、やがて全身で押し込むようにしてギルガメツシュへとキックを叩きこんだ。

爪先からくるぶしにかけて包み込んでいた真つ赤なふたつのエネ

ルギーは互いにぶつかり合うかのように大きく左右に揺れて衝突し、やがて大規模な爆発を引き起こした。

「……じゃあッ！ 次はどいつだ！」

燃える炎を背に受けて、腰を落とす。

創世の弓をかついだ鎧武は自身のステージの中、無数の敵へと相対した。



最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（6）

「おらっ！」

仮面ライダーマツハが旋回させるゼンリンシューターが虚空に轍を描き、下級や死神タイプのロイミュードたちをなぎ倒していく。

ノンストップで前進していくマツハこと詩島剛を防ぎとめるべく、前に進み出たのは、テンガロンハットをかぶった二機のロイミュードだった。虫とも骸骨ともとれる容貌のそれらは、表情も鬨の声もなくそれぞれの銃で際限なく弾を吐き出した。それこそ、荒野のガンマンのように。

剛の脳裏に、かつての友の死相が浮かび上がる。

それを噛みしめるように、マスクの奥底でぐつと奥歯に力を込めた。かつては同型のロイミュードのコンビ相手に、シグナルバイクを変幻自在に駆使して撃破したが、かつての戦友は今はドライブピットごと地下深くである。

ゆえに正攻法で、有り体に言えば無茶攻めで押し切るしかない。

被弾を覚悟でマツハは距離を一気に詰める。肩口に弾丸が数発かすめ、重い衝撃が襲う。バランスを崩しながら、剛は駆動音を響かせて彼らの懐に滑り込んだ

〈ゼンリン！〉

下から突き上げたシューターが、018のコピーを天高く吹き飛ばす。銃口を向けたガンマン・ロイミュードの後の先を突く形で、モードを切り替え、マツハのシグナルバイクを装填。ゼンリンシューターのトリガーを引く。

〈シューター！ ヒッサツ！ フルスロットル！！〉

絞られたエネルギーの球体が、至近距離からロイミュードの胴体を穿つ。マツハドライブバーのバツクルを上下させた。

〈ヒッサツ！ フルスロットル！〉

マツハは高く飛び上がると、縦に自身を回転させる。そして鋭く光線のカーブを描きながら所在無く浮いていた残りのロイミュードを、我が身を持って貫いた。

所詮はコピーである彼らは、コアのナンバーを吐き出すことなく消滅した。だが、彼らとの戦闘は、剛の心の古傷を疼かせるには十分だった。

「わざわざあんなもんを用意するなんて、いよいよ性根が腐ってんな、お前」

着地した剛は、忍び寄ってきた金色の擬似ライダーに、マフラーを翻しながら振り向いた。

「別に意図して製造したわけじゃない。それだけお前が因果を持つお前だということだ」

ゴルドドライブを真似たギルガメッシュは、そう言う割には、剛の宿縁の最たるその姿を、突き出すように前を出た。

突き出したその両手に、金色混じりの砂嵐が生じてシンゴウアックスとゼンリンシューターとして形作られる。

シューターは剛の右手に未だに健在だ。となれば、奴自身が盗んだマツハやチェイサーのデータから生まれた模造品だろう。

一瞬の沈黙、寸時の膠着。

次の瞬間、ふたりのライダーはゼンリンシューターを互いに向けて引き絞った。胸部に火の花が咲いた。

軽く体勢を乱した両者が立ち直るのは、ほぼ同時だった。

そこから見るに、量産型ゴルドドライブは、素のマツハのスペックと同程度の強度と攻撃力と機動性といったところか。

射、打、斬。

様々な形と色の攻めが尾を引いて剛とギルガメッシュの間を交錯し、互いの装甲を削り合う。

幾度目かの衝突の後、同型の武器で競り合う最中、相対したゴルドドライブの面相を見た時、ふと剛の奥底から笑みが湧き上がった。それは目に見えるほどのものだったらしく、ギルガメッシュの動きに、かすかな怪訝があった。

「いや……『そいつ』は人一倍自尊心が強い野郎だからさ。もし今、ここにいたら……自分が他人をパクるのは良くて、自分の技術を盗られたなら、きつと怒り心頭だったろうな、って」

そのことを想えば、暗い喜びがかすかに己の内部に灯る。

だがそれに身を委ねてはいけない。そうなれば、自分はその男と同じところまで堕ちていくから。

「確かに、オレたち家族が背負ったもんは……それこそ英志とは比べもんにならないぐらい、重い罪かもしれない！」

声を張って剛は宣言した。

馬力において拮抗をさせながら、それぞれの空いた片手は別の動きを見せた。

ギルガメツシユのシンゴウアックスが振り上げられる。剛の左手には、別のシグナルバイクが納まっていた。友が預けてくれた宝物、シグナルチェイサーが。

「シグナルバイク！ ライダー！ チェイサー！」

本来は適合しないはずのそのシグナルバイクが、ドライバ―にセツトされる。剛の今までの戦闘データを基に、マツハの下半身をチェイサーとしてのそれにリデザインしていく。

マツハ改めチェイサーマツハは、奇しくも再びゴールドドライブと対峙することになった。

左手に転送したブレイクガンナーを腰に据えて、剛はそれを撃ち放った。

斧刃がマツハに食い込むよりも先に、マズルから吐き出された光がギルガメツシユのボディを吹き飛ばす。

「けどもう逃げない。オレ自身の罪も、オレの家族の罪も、向き合って生きていく！」

剛は吼えると同時にふたたびベルトのバイクを抜き取った。そこに、銀色に光る、クモを載せた車体が入り込む。

「バイラルコア！ チューン！ チェイサーツ―メー！」

シグナルバイクと同じく、オリジナルは未だ凍結されている。これは、ゲットネクスト用の試作品に過ぎない。それでも、かつて敵と見なした力を借りて、友の想いを貸してもらおう。そんな心持ちで、剛はその右手に巨大な鉄爪を作り出した。

質量を増したチェイサーマツハの一撃はギルガメツシユのシンゴ

ウアックスを弾き飛ばし、リーチの優位を奪った。

〈TUNE……CHASER COBRA!〉

〈ヒツサツ!〉

未だ手にしたブレイクガンナーにも、ゼンリンシューターにも、同じくチェイサー専用のバイラルコアが飛来し、セットされていく。

これがマツハチエイサー流のトリプルチューンといったところか。鞭と弓が爪の組み合わせり、長短いずれにも対応した巨大な複合武器が出来上がった。

「だから、これが最初で最後の親孝行だ! アンタが残した未練は……オレが全部ブツ潰してやるツ……『父さん』ッ!」

紫立つ光輝を帯びたエネルギーを、剛は後ろに跳躍しながら、ゼンリンシューターを引き金にして一気に解放した。

〈フルスロットル!〉

一直線に伸びきった弾道は、ゴルドドライブのボディを穿ち抜いて爆散させた。

頭上を、一台の車が飛翔していく。

その姿を仰ぎ、剛は無言のメールとともに見送った。

ネクストライドロンは、今にも破れ落ちそうな空の中を駆ける。

基地から放たれる対空砲を、巧みにかわし、みずからハンドルを握る泊英志と、その彼に同乗する照井春奈を目的に届けようとする。

だが最奥にある本拠に接近するごとに、砲撃はより苛烈さを増していく。

拠点の屋上には、空に伸びる光の根元と、ギルガメッシュの姿が見えた。敵の弾幕も、自分たちの限界点に達した。

英志はトライドロンから半ば振り落とされる形で飛び降りた。

自由落下の速度を借りてブレイドガンナーを振り下ろす。だが大上段から繰り出した渾身の斬撃は、変身もしないないギルガメッシュに、たやすくいなされた。

この程度で倒せるのなら、ここまで状況はこじれていない。

英志はギルガメッシュの前に転がりながら足をつけた。

春奈もまた、ギルガメツシュと、世界を改造せんとするその装置を英志と挟み込むように降り立って降り立った。

装置の基幹としてして組み込まれているのは、ライドトレーサーと言ったか。あのオープンカーだった。

「ギルガメツシュ」

万感の思いと覚悟を短い言葉に込めて、英志は呟いた。

「今更問答は不要だ。もう戯れもいらぬ。俺が勝つ。……変身」  
「ゼンカイガン！」

名を呼ばれたギルガメツシュがそう宣言する。腰に据えた眼魂ドライバーのボタンを押す。周囲に浮かび上がったパーカーゴーストたちが彼を包み、一体化して黄金のライダーへと変貌させる。

その光の圧に、苦い敗戦と失敗の記憶が引き起こされる。思わず萎縮してしまいそうになる。

だが、自分はもう、あの時の自分ではない。

ドライブの力と名前にすぎた頃の、エイジでは。

それに今は、信頼してその命を預けられる仲間がいる。

「最後のひとつ走りに付き合ってくれる？ 照井さん」

「私に質問するな」

決戦を文字通りに目前にしつつ、いつもの口癖にも関わらず、その口調はどことなく柔らかな調子を持っている。だがそれゆえにこそ、無類の頼もしさを感じさせる。

それぞれの武器を構えたダークドライブとT3アクセルは、因縁の相手に向かって、そして目の前の戦友を信じて踏み込んだ。

## 最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（7）

空飛ぶ自動車が本拠に突っ込んだのは、未だ道半ばで奮闘するゴースト達からも見えていた。

あるいはこのふたりは、その場で共闘するどのコンビよりも、呼吸の合った戦いぶりを披露していた。

一方のゴーストが幽霊のごとく宙を浮遊し敵を翻弄すれば、地上ではその子がガンガンセイバーで敵をなぎ倒していく。

その白いゴースト……アユムは大上段で振り下ろした大剣で刀眼魔を一刀両断し、返す一太刀で槍眼魔をその得物ごと切り裂いた。

〈闘魂カイガンブースト！〉

地上に舞い降りたタケルは、その身を真紅に燃え上がらせた。

文字通りに、その生命に火を灯すような彼の攻めは、並み居る大群をもものともしない。達人然とした所作で反撃を捌きながら、苛烈な後ろ蹴りを見舞う。

転送したサンングラスラッシュシャーで敵を押し込み、撫で切っていく彼の前に、電気眼魂が現れた。

辺り構わず放電し、眩いばかりの電光で眼を潰さんとする。その怪物相手にも、そしてソレの放つ光線が自らのすぐ脇を焼こうとも、タケルは臆さず剣を傾けて突っ込んだ。

〈メガー・オメガシャイン！〉

中空を舞った父が、赤い刃で電球の頭部を叩き割った。爆炎をも自身の推進力として取り込みながら、タケルはなお、前に進む。

たとえ絶望的なタイムリミットだとしても、自らが半ば死に体のようだったとしても、その前途をいかな大群が覆い尽くしたとしても、命を燃やして最後の一瞬まで戦う。自分の側にいてくれる。

それが、天空寺タケル。

これが、皆が信じ憧れた英雄の姿。

アユムは初めて、いやあらためて、父に対する敬慕を強めた。

だがそんなアユムの前にも、危難が形を成して立ちふさがった。

紫のメダルを核に、銀色のメダルが肉を作り、幻獣と恐竜の象徴と

変化する。

試作型グリード、ギル。

因縁に引きずられるように、両者は期せずしてふたたび邂逅を果たした。

足下から湧いて出るようにして出没したそれに、先手を打たれた彼は鋭く翼爪を、二発直撃として喰らう。

「アユムー！」

火花を散らして膝を屈す我が子を援護すべくタケルが動く。

だがその先を、ギルガメツシユのメガウルオウダーが遮る。

強敵をそれぞれに抱え、親子は分断された。

アユムが態勢を立て直すよりも先に、ギルは紫の瘴気を総身から迸らせた。それに触れたありとあらゆるものが、運動能力を奪われて凍結する。

アユムとてそれは例外ではなく、冷気がその脚に霜を走らせ分厚い氷塊で覆い、身動きを取れなくてさせた。さらにせり上がってくる冷気が、ゴーストドライバーまで達しようとしていた。

「ッー！」

それよりも先に、アユムはオレンジ色の眼魂を起動させ、ドライバーへとセットした。

へカイガン！　ダーウイン！　議論結論進化論！

パーカーゴーストが彼の身体を覆う。

そのマスクには種の多様な可能性を示す枝分かれしたシンボル。

その型に刻まれたのは、進化の果てに自立を果たした人類の姿。

流動する生命の営み、人間の可能性をその身に宿したこの形態こそ、虚無の中で時を停めた魔獣を相手取るに相応しい。

みずからを粒子化させたアユムは、閉じようとする氷の隙間から脱した。

赤と黄、二色の粒子が絡み合い、放電しながらギルを取り囲む。

逃れようとすれば奔る電流がそれを遮り、反撃に転じようとするれば、衝撃波が押し戻す。

「ぼくの仇は……ぼくがとるっー！」

〈ダイカイガン！ ダーウィン！ オメガドライブ！〉

光の檻に拘束されたギルの正面に、実体化したアユムが現れ、爪先を繰り出した。

叩きこむのは進化のエネルギー。生きるためにみずからを変えようとする原初の欲望。言い換えれば、明日へと進もうとする人の意思。

それを胸板に、直に流し込まれた虚無の魔物は、胸板に絶叫と咆哮とともにメダルの集合体へと戻って爆散した。

地面に降り立ったアユムは、父を顧みた。

そこには、ギルガメッシュと競り合い、そして押し負けつつある父の、消耗しきった姿があった。

「お父さん！」

たまらずアユムは叫んだ。

この乱戦に柔軟に対応すべくフォームの多様性を重視してゴーストドライバーにあえて戻したタケルであったが、それでも本来であれば量産機相手に遅れをとることはないはずだった。

だが現実が遅れをとっている理由はただひとつしかない。

『彼』が、いや『自分』が体験したことだから分かる。

生命の灯が、ジリジリと細まって、薄れゆく感覚。今、父の身で、それが起こりつつあった。

「ムゲンにもなれない、残りの命数もたかが知れている！ そんなお前に、何ができる？ お前はただの、無力な死に損ないだ」

ほとんど無抵抗に近いタケルを容赦なく打ちのめしながら、ギルガメッシュが嘲る。彼も、そのことに気づいていたのだ。

自分にもまだできることがあるはず。最後まで戦わせてくれ

そう強いて頼むタケルに根負けしてそれを受け入れたアユムだったが、今はそのことを悔いつつあった。

(けど、それももうここまでだ)

アユムはその手に、オレ眼魂を握りしめた。

二つの記憶、二つの世界線ですつと疑問に思っていた。なぜ自分がこれを持っているのか。なぜゴーストになれたのか。なぜ色が違う



のか。

父が天空寺タケルであったのだから、遺伝したのだと自分を含めて皆は納得していた。眼魂の色はそのまま魂の色である。だからタケルとアユムとで違っていてもおかしくないとも。

だが、真実は微妙に違っている。

この戦いの直前、父に反応し、覚醒を促したこれを見て、悟った。

この純白は、この力の正体は……

「……お父さんは、無くしたわけじゃない！」

父に、敵に、訴える。

「今なら分かる……誰かに託した思いが、力が……つながっていく。いつか自分へ巡って、さらに世界は広がっていく。それこそがムゲンの魂だ！」

ふたりの仮面ライダーが、彼の啖呵にわずかに意識を傾けた。

アユムは、決意とともに、自身の分身を彼らの間へと投げ込んだ。

眼魂が、繭のように、転がした糸玉のように、解きほぐれて形を失っていく。

と同時に、アユムのゴーストドライバーは消滅し、変身が解除された。ダーウインを含めた英雄眼魂はその権能を無くして浮き上がった。

押し寄せる脱力感と寒さに、ぐつと歯を食いしばって耐える。それは、今まで父は代わりに背負ってきた感覚だ。

輝く糸となったアユムの力と権限は、そのまま眼魂たちに守られて、残ったゴーストのエンブレムへと吸い込まれていく。

いや、本来あるべき場所へと、還っていく。

それは天空寺龍から受け継がれてきた命のバトン。

祖父が父タケルを救い、そして彼と、その仲間の絆によって限界を突破した。

そしてタケルは、母クロエを救うためにグレートアイにその力と命の半分を捧げた。

だがその力は、喪失したわけではなかった。

分け与えられた生命とともに一部がクロエの中に残留し、やがて彼

女から産まれたアユムへと流れ込んだ。

もちろんそれのみでは、タケルを補うには至らない。

だがここには、ふたりいる。

多くの人間との関わりを経て、あの眼魂は分岐した時の流れを別のアユムとともに生きてきた。

そして今、それはアユムの宣言したとおり、倍のリソースでもって天空寺タケルの元へと帰ってきた。

ゴーストのブレストクレストから、一つに融合した眼魂が精製される。

タケルのムゲン眼魂は、その煌めきを完全に取り戻した。

へムゲンシンカー！

長い裾が戦雲の闇を切り裂き、たなびく。

タケル自身でもあるパーカーゴーストが融合し、ゴーストをまったく別の姿へと変えていく。

へゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴ・ゴ・ゴ！ゴースト！

神々しい装束をまとった仮面ライダーゴーストムゲン魂は、フリードをとって一角をさらした。

「……バカな……選ばれなかった世界とともに消えるしかない半端者が……そいつの足下にさえ及ばない未熟者が……ムゲンの代わりになどなるはずがッ!？」

その変化を待たずして、ギルガメッシュは拳を打ち出した。

だが、あくまでも分身である彼は、本来の力を得た天空寺タケルの敵ではなかった。渾身のパンチは、事もなげにゴーストによって受け止められる。

「たしかにお前の言う通り、俺たち人間は力がなければ何もできないのかも知れない」

静かに説論しながら、だがタケルはギルガメッシュのその手を強く包んで離さない。

「それでも、立ち向かう気力さえあれば、どんな強大な敵にだって、たとえ神にだって立ち向かえる。その勇気で切り拓かれる人間の可能性は……無限大だ！」

退くことも押し切ることもできないギルガメツシユを、タケルは解放した。だが、反撃に移るわずかな隙も与えなかった。掌底二発。バランスを崩した彼に、強力な回し蹴りを見舞う。そのエネルギーの余波が、白い羽となって風の中で踊る。

それだけで、今まで自分が受けてきたダメージに相当する衝撃を、ギルガメツシユへと与えた。

ギルガメツシユはきりもみしながら、だが自身の眼魂をメガウルオウダーへとセットした。

〈DAITENGAN! GI……〉

だがスピードにおいても、軍配があがったのはゴーストだった。

ギルガメツシユが反攻に出ようとしたその先に、すでにタケルの姿はない。

ギルガメツシユの頭上高くに、巨大な瞳のクレストが浮かび上がる。

そこから現れたゴーストは、ガンモードへと切り替えたガンガンセイバーで狙いを定めていた。

「命……燃やすぜ！」

〈イノチダイカイガン! イサマシユートツ!〉

ドライブのレバーを動かす。

虹を描きながら撃ち落とされた一筋の光線は、ギルガメツシユを貫いた。

穿たれた穴から迸るエネルギーは、<sup>ムゲン</sup>∞のマークを描いてギルガメツシユ自身の攻撃をも巻き込んで彼を内部から爆発させた。

タケルはそのまま、両翼を打たせて割れた天空へと向けて舞い上がった。

レバーを何度か左右させ、その爪先に生命と感情の輝きが七色の彩を成す。

〈ダイカイガン! ムゲン! ゴッド! オオメダマ!〉

瞬く間に、小惑星のごとき球体と化したその力を、ゴーストは足で上空へと蹴りだした。

拡がっていく亀裂に向かって飛来したそれは、着弾と同時に空全体

を覆うフィルターとなり、ヘルヘイムの降下を抑止した。

翼を羽ばたかせて音もなく降り立ったタケルは、改めて我が子と視線を交わした。

「アユム……ありがとう」

彼から手向けられた礼の言葉だけで、アユムには万感の思いが去来した。

もちろん、正気を取り戻した彼は、今は、その一言だけで十分だった。

## 最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（8）

空へと伸びあがった大球が、目のエンブレムとなって亀裂を塞いだ瞬間、大気全体を大きく揺るがした。

あまねく拡散するその衝撃波は聖都大付属病院の一室にも到り、そこで眠る泊進ノ介の肉体も跳ね上がらせた。

そして霧子は、暴れる夫の身体の負担を少しでも減らそうと、覆い被さるようにして彼をかばう。あるいは、時を刻むごとに押し寄せる破滅の予兆と自身の不安に打ち勝とうと、自分のヒーローにすがろうとしていたのか。

そしてその彼は、今なお知人を名乗る魔法使いから与えられたドライブの顔の入った錠前を握りしめていた。

空から降り注ぐ光の波は、やがて彼女たちの部屋にも浸透した。

ドライブよりも少し過去に生まれた仮面ライダー<sup>アイマード</sup>。その直後に誕生した仮面ライダー。

彼らとは直接言葉を交わしていない霧子には知るべくもないが、ドライブこと泊進ノ介は、たしかに彼らと確かな絆で結ばれていた。

そして進ノ介と連なる彼らのエネルギーは、錠前と、亀裂へと叩きこまれた大目玉から進ノ介の半死半生の肉体に、そして魂に、技術の垣根を超えて影響をおよぼし始めていた。

かつて、いくつものシフトカーを握りしめたその指が、ピクリと動く。

心のエンジンに、火が灯る。

「ノーコンテニューで、クリアしてやるぜ！」

世界の運命を患者として相対し、ドクターゲーマーは飛び上がり、ガシャコンブレイカーを大きく振り上げた。

地面に強く打ち付けられた。サイケデリックなエフェクトとともに衝撃が大地を揺らし、可視化されたダメージがHITの三字とともに乱発される。

マイティアクションX。

そのライダー、変身者の宝条永夢の得意とするアクションゲームを具現化させたエグゼイドは、その敵キャラたるソルティとその配下たるコック姿のバグスター達を吹き飛ばした。

落下する彼らを腕で払いのけるように黄金の騎士ライダーが両刃の剣と円形の盾を両手に、エグゼイドへと肉薄する。

『タワー・オブ・ドルアーガドルアーガの塔』。ゲーム史に名を残すダンジョンRPGの原点とも言うべきゲーム。

かつてのDr. パックマンと同様に、永夢は憤りを覚えた。

ゲームを愛する者として、そして救われた者として、人々の笑顔や生命を奪うために、それを利用されることは許せない。

その心が、同調する。

彼の中に住まう半身。

同じくプログラムから生み出された者の心を、たぎらせる。

レベル差を超えて、黄金のライダーギルガメッシュとエグゼイドは拮抗した。

ブレードモードに切り替えたブレイカーで、横面を打つ。だが、盾に展開された六層の防壁バリアが、その斬撃の威を完全に殺し切る。

そしてギルガメッシュは、このままレベル差とアイテムの性能による、力任せの戦闘ブレイクで押し切る算段でいるのは明確だった。

——だったら。

この防壁を相手にするのであれば、『彼』のほうが適役だ。

「……パラドツ!!」

へよっしや! 待つてたぜえ! エム!」

心の奥底から、明朗な声がこだまする。

永夢の左手が、まるで意志を持ったかのように、二層一組のガシヤットを手に、ベルトのそれと移し替えた。

「デュアルガシヤット! マザルアップ! 赤い拳強さ! 青いパズル連鎖! 赤と青の交差! パーフェクトノックアウト!」

水平に伸ばした手の側から迫るエナジーフィールドが、エグゼイドの姿をよく似た、だがまったく別のライダーのものへと変化させる。

仮面ライダーパラドクス。

永夢の感情から生み出され、そして感情を、時として肉体を共有するバグスター、パラドであるからこそ可能な芸当だった。

「久々の戦いだ。心が躍る……!」

〈ガシヤコンパラブレイガン!〉

エグゼイドが身を潜めたことにより、ガシヤコンブレイカーが消滅する。空いた手でパネルから呼び出した自身の固有武器のボタンを連打しながら踏み込んだ。

〈1・2・3・45678! 8! 連打!〉

ふたたび防壁を展開しようとしたギルガメツシュよりも速く、そして多く、ボタンを押した。斧から発せられる刃の風が、七つに分裂しながらギルガメツシュのバリアを削り切り、盾を弾き飛ばして重い一撃を食らわせる。

「ぐっ!」

体勢を立て直すべく後退したギルガメツシュを追いながら、ゲームドライバーのレバーを前後させる。

〈ウラワザ! パーフエクトクリティカルノックアウトボンバーツ!〉

旋回させた右足を軸として、青い知性のパズルと、赤い闘志の炎が大気を切り裂いた。

その軌道が、爆炎の線を引く。文字通りそれは、ギルガメツシュの模造品の死線となった。機械の身体を業火の一太刀が切断し、そのまま呑まれて消滅した。

ギルガメツシュを含め、自分たちに向かってきていた第一波を攻略した永夢たちだったが、このフィールドにセーブポイントは存在しない。

休む暇なく、第二波が迫っていた。

その先頭に立つのは、アランブラとそしてあと一体。どこかで見覚えのある青いライダーだった。

「ここからは、超キョーリヨクプレイで、クリアしてやろうぜ」  
〈ああ!〉

パラドは勇ましく共同体へと語りかける。その弾む心に引きずられるかたちで、融合している永夢も勇ましくうなずいた。

〈マイティブラザーズ XX！〉

パラドクスが導入したガシャットによって、永夢はふたたびエグゼイドとして分離した。それに合わせて、パラドクスもまた色と形が対となったエグゼイドの分身となる。

永夢はガシャコンキースラッシュャーを、パラドはガシャコンブレイカーを携え、左右に分かれてそれぞれの敵に相対した。

アランブラの出す火魂を一斬ごとに剣圧で吹き飛ばしながら、あるいはジグザグと、屈折した軌道に我が身を動かし、攻撃魔法を回避しながら着実に接近する。

そして『魔力』が切れるその一瞬を見計らい、最大加速で踏み出した。

なにも、むやみに攻撃をかわすための蛇行ではなかった。その道程にあるエナジーアイテム、おそらくは敵のギルガメッシュが使用するためだったものを確実に拾っていく。

〈高速化！〉

〈ジャンプ強化！〉

敵の足下に滑り込んだ永夢は、そのまま下から足裏を突き出した。

本来は飛躍に用いるための脚力は、そのままアランブラを宙へと打ち上げるための発射台となった。

〈キメワザ！ マイティ！ ダブル！ クリティカルストライク！〉

永夢は必殺技のカットインを思い描く。

所在なく手足をばたつかせ、次第に高度を落としていく悪の魔法使いに、永夢の飛び蹴りが炸裂した。

膝を滑らせ着地したエグゼイドの頭上に表示されるのは、大々的なHIT。大輪の火の華。そしてGAMECLEARの賛辞。

その爆風に心身が推されるかたちで、もうひとりのマイティも青いライダーへと肉薄した。

互いにまったく意匠の異なる刃を絡ませ合<sup>ブレイド</sup>いながら、互いを押し切らんとする。



おのれがデータから生み出された存在であるからして、パラドとしても目の前の敵が完全に心を喪った機械人形だとは思わない。彼の中には、かりそめとは言え、確かに生へとしがみつく執着を感じさせる。

それでも、退くわけにはいかない。負けるわけにはいかない。

「この世界は……」

獣じみた猛攻をぎりぎりと言を鳴らして耐え忍びながら、パラドは声を絞り出した。

「ただのウイルスだったオレを……受け入れてくれた……一度は罪を犯しても、仲間たちと一緒に、生きていい場所を作ってくれた……！だから、オレも、この世界の生命を護るために永夢たちと戦うっ！」  
その気炎が彼自身に力を与えたのか。

「……………」

——あるいは、彼の放った言葉のどこかに、その青いライダーに突き刺さるものがあったのか。

一瞬、勝りつつあった敵の腕力と気力に、緩みが生じた。

自身もまた天才プレイヤーたるパラドは、その隙を許すほど甘くはなかった。

押し返す。青いライダーの肘から先が浮き上がり、その胴に逆の拳を叩き入れる。

「…………ツアアッ！」

つんのめる敵は、膝を突きながらも、なお獣の咆哮でおのれを叱咤し、戦いに挑む。

ぴしりと。

彼の素顔を覆う仮面マスクに、亀裂が入る音がした。

## 最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（9）

彼の思い描く勝利の方程式が、空を泳ぎ、大地を破って吹き上がる。ドライバーに取り付けられたレバーの回転に応じて高まったエネルギーが、計算式や演算結果の形となって相手を縛る縄となり、地上にいた怪物たちを縛っていく。

あるいは体毛を生やした蜘蛛、あるいは黒くツヤのある両翼を持った二足歩行のコウモリ。獣とも機械ともつかない外皮と、赤く光る腕輪を持った彼らは、もがくものの拘束を振りほどくことができないでいた。

〈Ready Go! ボルテックファイニッシュ!〉

彼らの頭上を、白線の上を、赤と青、二色のライダーが足を突き出し滑ってきた。

異世界の過去のデータから生み出された複製たちは、数式の結論として組み込まれ、奇しくも『別世界』の過去からやってきたライダーの滑空キックによって駆除された。

戦車の成分を司る右足が、キャタピラとなって着地の衝撃を吸収し、前進する力と換える。

だがその横合いから、別の戦場をくぐり抜けてきたとおぼしき青いライダーが飛びかかってきた。

「ツアアー!」

ここまで、幾度となくライダーたちと衝突してきたのだろう。

その装甲にはいくつもの欠落や破損が見られ、青い地肌にも細かい傷がついている。

何度も斬り、斬られてきた手甲のブレードは、もはや刃が潰れ果てている。

だがその戦意には、いささかの衰えも揺らぎもない。

それはどういった理由に基づくのか。ドリルクラッシュャーを転送してその凶刃を捌く仮面ライダービルドこと桐生戦兔には察しも同情もできるが知るべくもない。

だが、自分があえて彼を倒す必要はない。

目的としては、本命である若いライダーたちの背を撃たせないように敵を食い止めること。

「今回ばかりは、ヒーローの座は譲りませんか」

大儀そうにそうぼやいた彼は、勢い任せの斬撃を、脇へ威力を逸らして殺す。

そのうえで、赤とオレンジのフルボトルをベルトへと装着した。

〈タカー！ 消防車！〉

自身の名の由来ともなったフォームから一転し、『赤い鷹』とも言うべき形態となったビルドは、オレンジの翼を開いて舞い上がった。

そのうえで、左腕のノズルを地上へと突きつけ、火炎を放射する。わずらわしげに人外じみた唸り声とともに、青いライダーは剣と腕で取り巻く炎を振り払わんとしていた。

だが、ただがむしやらに両腕を動かしていたわけではなかった。その乱雑な動きは、ブラフだったのかそれとも本能的な切り替えの速さの賜物か。

暴れ狂う片腕の影で、彼の左手はベルトのシリンダーを押し込んでいた。

〈NEEDLE LOADING〉

擦り切れたブレードの形が赤熱とともに変形していく。

炎の中、筒状へと錬成されたそれは、戦兎が知覚するよりも速く彼へと照準を定めた。

いったい肉体のどこから形成されるのか。針のような弾丸が、ビルドを狙う。

「くっ……！」

みずからを射止めようと乱発されるそれを回避しながら、みずからも銃撃戦に長けたホークガトリングとなるべくボトルを入れ替えようとした。だが、いわゆる『弾込め』に近い動作を要求されるビルドよりも、ワンタッチで武器を換装できる敵ライダーのほうが、速い。

〈CLAW LOADING〉

銃撃が止んだ次の瞬間には、しなるワイヤーが飛んできて、ビルドの右足を捕らえた。

細身でシンプルなシルエットに見合わぬ、強力なスイングバイ。廃材や鉄骨をなぎ倒しながら、大空を駆ける能力を持つビルドは、遠心力のままに放り投げられた。

そして視界を大きく揺さぶられながら、放棄されたプレハブ小屋へと墜落。大穴をあけて背中を打ち付けた。

もうもうと立ち込める土煙の中、戦兎は自分を手放しかねないほどの激痛相手に苦闘する。

誤算は、ふたつ。

ひとつはあのコピーライダーが、簡素な装備に見合わぬ複数の武装と怪力と耐久性とを兼ね備えていたこと。耐久性……いやあえて言うならば生命力か。

もうひとつは、相手のその生きることへの執着を甘く見て、加減をすれば退くと考えたこと。

(もつと最悪なのは……)

スパークリングを元の時代と世界にいるあの万丈バカに預けてしまったこと。

つまりは現段階においての最強の手札が、自分の許にはないことだった。

さてどうするか。そう思案する戦兎だったが、それでも敵は待つてはくれない。

炎を振り切った敵ライダーは、傷つく肉体をもともせず、戦兎に追い打ちをかけるべく馳せ来る。

だが、彼らがそれぞれの間合いに入る直前、けたたましい鳴き声が鳴り響いた。

青と黄を基調とする、ドラゴン型サポートボット。クローズドラゴン。

蒼炎を吹き付けて敵を足止めしながら、今おそらくもつともハザードレベルが高いであろう戦兎の周囲を泳いだ。

「え、なに。お前ついて来ちゃったの？」

そう尋ねるも、言語能力は設定していないから答えられるはずもない。

肯定をする代わりに、ドラゴンは自身の背に格納されていたフルボトルを弾き出して、戦兎の手元へとパスした。

——マスクの奥で、顔がくしゃつとする。

そういえば、もうひとつ大事な目的があった。

生きてあの世界へと帰る。これの本来の持ち主の待つ場所へと。

たとえ造られた存在ヒーローだとしても、それ以外に何もなくても、自分には帰るべき家があるのだから。

「まだまだあのバカには、ヒーローの座は譲れねえからなっ！」

声を弾ませ、時代を超えて受け取ったボトルを揺らす。

群を抜いて強力なそのボトルは、今はベストマッチでのみかろうじてコントロール可能だった。それでも装着者への負担は相当なものだが、ハザードレベルの上があった今なら、かつて持て余した時よりも長く持続できるはずだった。

〈ドラゴン！ ロック！ ベストマッチ！〉

青と黄金のパーツが、精製されたランナーから切り離された。

「ビルドアップ！」

前後から組み換えられたビルドのマスクを、青龍の横顔と黄金が錠前が飾る。

〈封印のファンタジスタ！ キードラゴン！〉

理解した。この敵に手加減や小細工は通用しない。力攻めで押し切るほかない。

白煙を噴出しながら、フォームチェンジを終えたビルドの右腕に、ランナーが大剣を形作る。

〈ビートクローザー！〉

本来は万丈こと仮面ライダークローズの武装ではあるが、ただ闇雲に振り回すあのバカにばかり使わせるのは技術の無駄遣いだ。当然ビルドにも使えるようアップデートされている。

ふたたび手をブレードへと変換させたライダーの刺突を、幅広の刀身でもって防ぐ。

廃屋の残骸に挟まれて、剣戟を高らかに響かせながらも、その柄を戦兎はもう一方の手で前後させた。

へヒッパレー！ ヒッパレー！ メガヒット！

軽妙な音楽と虹の閃光を乗せて、ビートクローザーの剣刃が躍る。青いライダーの刃を打ち砕き、その胴に強化された連撃を見舞う。つんのめる敵に、今度はビルドが追撃を仕掛ける番だった。

「勝利の法則は……決まった！」

〈Ready Go!〉

レバーを回し最大限のパワーを抽出したビルドは、腰を深く沈め、剣を捨てた両腕を広げる。

そして、鍵溝を体勢を立て直さんとしているライダーへと突きつける。

その背後の空間が歪む。現れた鍵穴は、彼を吸い込み、飲み込んだ。思いもよらぬ方向からの吸収に、成すすべなく彼は消えゆく鍵穴へと消えた。

そして鍵穴は、次にビルドの上空へと開き、青いライダーを吐き出した。

〈ボルテックファイニッシュ！〉

そしてタイミングを自称天才的な計算でもって見切り、炎渦巻く爪先を翻し、叩き込む。

岩盤に激突した青いライダーは、今のビルドの最大出力の直撃を喰らい、野太い断末魔とともに爆発した。

かに、思えた。

「まだ、『終わり』じゃない……！」

もうもうと立ち込める黒煙。急速に、何かに吸い取られるように不自然なまでに鎮まりつつある火炎。

ノイズにまみれたと咆哮が轟く。

蜃気楼の中、ゆらりと立ち上がったその華奢な影が、内側から大きく盛り上がり、無数の触手、六本の腕で銀の装甲や仮面を食い破っていく。

「ちよつちよちよ……!?!」

慌てる戦兔の眼前で、さらに原形を留めないほどに青いライダーは変身を遂げつつあった。

「俺たちはまだナニも始めちゃいない……！ 何も始めては……いなかったんだアアア！」

どこか泣いているかのようなその絶叫が、変わり果てた彼の、理性ある最後の言葉となった。

厄災とも言うべき病魔をもたらす青いベイルライダーは、高く飛び上がった新たな戦場へと向けて飛び上がった。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（10）

その場所に、時の概念などあまり関係ないのかもしれない。

意志や肉体の強弱も尊貴も善悪も超越した領域。その時々、人々に、個々に、別々の姿を見せる。

今の泊進ノ介には、それは無限に続く草原に見えていた。

果てのない青空と並走するかのようなその大地を踏みしめて進ノ介は歩き続ける。

どこへ向かっているかは分からないが、ひとりでに足は動いている。進んでいるのか、退がっているのかさえ定かではなく、変化のない情景からそれを判断することは難しい。

だが、疲れは感じなかった。むしろ、今までにないぐらい心は安らいでいた。

今までずっと正義感や使命感、あるいは罪悪感に突き動かされて走り続けていた。

停滞することもあったが、その時にも心には煩悶が分厚い雲のようにかぶさっていた。

それが取り払われ、なんの気負いもなく、ただ青空と草原に向かい合っている。そのなんと爽快なことか。

だが、ある地点にたどり着いた時、かすかな抵抗を足に感じた。無意識に踏みとどまろうとしていた。

目の前の風景に変わりはない。だがあと一歩、踏み出せば後戻りできない、そんな予感が一瞬、だが強烈に進ノ介の背を貫いた。

だが、身体はそれを乗り越えることを欲していた。右足がひとりでに浮き上がり、前へと動き始めた。穏やかな気持ち

で、進ノ介はそれを甘受する。

ああそうだ。

きつとこれが、自分の終着点。ゴールライン……

「どこへ行くんだ」

やぶからぼうに、男の声が飛んできた。

「こつちじゃないだろう。お前の居場所は、まだ」



責めるような声が、平穩だったはずの進ノ介の心に波風を立てる。男は、正面にいた。開けていたはずのその先は薄く編まれた黒い帳が覆い、その奥に影があった。

「誰だ、あんた？」

ざわざわとしたものを感じながら、進ノ介は誰何する。だがどこか、自分の問いが滑稽なもののように思えた。

自分とそいつとは、どこかで会ったはずじゃないか、と。

男は答えない。

どこかふてくされたような、ぶつきらぼうな調子で、一方的に問い続ける。

「世界を守るんじゃないのか？」

世界。あまりに漠然としたキーワード。憶えのない、その問いの意味。

だが自分とは遠いはずの問いが、彼を現実へとじわじわと呼び戻しつつあった。

「……いや」

言葉の意味を模索するよりも先に、言葉が口からついて出た。

「俺にはもうやれることなんて、ほとんどないさ。世界なら、守ってくれる仲間たちだけだっている。彼らなら、きつとこれからも」

タケル風に言うなれば、命を燃やし尽くした、といったところか。一番新しい記憶は、息子を救ったあたりだ。そこに至るまでに、自身の生涯をかけて生き抜き、持てるすべてをもって人々を、世界を救ったという自負があった。

だからこれで良いと、この先に待ち構える宿命を受け入れる覚悟はできている。

「剛もそうだったが、気取るのが好きなヤツらだな」

男は呆れたように言った。不躰な物言いだった。

「じゃあ聞くが、お前にとって世界ってなんだ？」

男は問いを重ねる。

帳ごしに何度も心を揺るがす問いを投げってくるこの影は、あるいは自分自身なのではないかと、そんな気さえしてくる。

言葉に詰まる進ノ介に、男はぽつぽつと、低い声で語り始めた。

「あの時の俺たちにとつて、周りのすべてが敵だった。世界は、あのことばけなドライブピットだった。あるいは……自分の中にある思いとか、仲間、だった」

何故ドライブピットのことを知っている？

今更そう尋ねるのもためらわれるほど、男の言葉は徐々に真剣味を帯びてきていた。

「少なくとも俺には、そう大それたものはなかった。けど、その『世界』を救うために戦った。……もう一度だけ訊く。今のお前にとつて、守るべき世界ってのはなんだ？」

さあつ、と草の音が足下を転がっていく。

無辜の市民、と答えることもできた。

あるいは、それこそグローバルな意味での世界とも。

だが、脳裏に思い描かれたのは、かつて守れなかった父親。

偽者ではあったが、撃ち殺された未来の我が子。そして本物がすでに殺されていたという、絶望。

だが、一条の光が差し込んだ。

霧子。

そして、光は広がった。

英志。

背から、エンジンの音が聞こえた。車高はそれほど高そうに思えない。振り返らずとも形ぐらいはわかる。多分、前時代的なオープンカー。

「どうやら、迎えが来たようだな」

目の前で、男が言った。

「まあせつかくだ。乗せて行ってやるよ。お前ひとりだと、また迷いそうだしな」

背後から、車を停めた別の誰かが言った。ニヒルで、キザったらしい物言い。黒い羽が、背を押す風の中で踊る。

「これは……夢なのか？」

進ノ介は茫然と問うた。

「まあ、そうかもしれないな」

黒い帳の奥で、男の口元がほろ苦く笑った、ような気がした。

「けど、夢だろうと現実だろうと、今お前が想ったことは本物だ。だったら、その世界のために生きて、戦え。人間として、ドライブとして」  
風が、より強く吹き荒れる。

やがてまともにも目さえ開けられなくなって、男たちの輪郭さえもおぼろげになっていく。

黒い羽が舞う。青い蝶が視界を埋め尽くす。

「あんたは……あんた達はいつたい……!?!」

積もりに積もった既視感と焦燥感に突き上げられるように、嵐の中で進ノ介は一步、踏み出した。

幕が上がる。男の素顔が、そしてその背ではためく真つ白な洗濯物が露わになった。

きつと彼が見せないようなはにかみ混じりの表情で、普段の彼が絶対に口にしないような言葉とともに、男は進ノ介を見送った。

「誰でもない。ただの……夢の守り人、かな」

その素顔が垣間見えた瞬間、進ノ介の記憶の欠落が一気に蘇った。どうして、彼らを忘れていたのだろう。彼は、彼らもまた自分の大切な……!?!

「待てッ！ 待ってくれ、くろ……ッ！ た……み……ッ!?!」

懸命に手を伸ばす。

だが進ノ介を、蝶と羽とが覆い尽くしていく。

微笑む彼らを最後に、意識はそこで途絶えた。

頬に押し当てられた硬く冷たい感触で、進ノ介は覚醒した。

気がつけば自分はコンクリートの上に放り出されるようにして眠っていた。

ぼんやりとした痛みとの差し込む頭を押しさえながら、進ノ介は立ち上がった。

夢を、見ていた気がする。

何か、大事なことを思い出していたはずなのに、懐かしい誰かが出

会えたはずなのに。今となつてはその全てがまた忘却に沈んでいた。そのことを悲しいと思いつながら、ほんのすこし時が経てば、そんな感傷さえも消えてしまう。そんな気がした。

あらためて、彼は辺りを見渡した。

そこは、古ぼけたガレージだった。

時代が移り変わつても十分に名車と呼ぶにたるクラシックカーのラインナップ。それを整備するために十分な工具やスペース。

または本物ではなくとも芸術的なまでに精巧なミニカーの数々。覚えている。こればかりは、忘れるわけがない。

すでに焼失したその宝箱の中。

サプライズで、自分が譲り受けるはずだった記念品たち。

立てかけられた写真に映る、『彼』からの親愛の証。

ということとは、ここにはきつと……

「ようやくお目覚めかな？ 進ノ介」

上質な靴音が聞こえる。低く透き通つたバリトンも。

すらりとしたシルエット。柔らかな物腰。独特のイントネーションを含む、だが流暢と呼ぶに十分な言葉遣い。

「と言つてもここも、死者が見る夢の中のようなものだがね。だが、眠っている時ぐらい、生前の思い出とともにあつても良いだろう？」

写真でも映像でも、コピーでもない。そしてベルトでもない。

自分がずっと会いたかった、語らいたかった相棒が、ひとりの紳士の姿をして立っていた。

## スピンオフ三部作情報公開！

というわけで、いよいよクライマックスに近づいてきた仮面ライダーNEXTジェネレーションズ。

その後日談を描くスピンオフ三部作の情報をここに発表します。

その名も、仮面ライダーNEXTジェネレーションズ：デイ・アフター・トウモロコシ

長つたらしい名前ですね（笑）

2035年の仮面ライダーたちのその後の物語、それぞれの日常、それぞれの新たな戦い。

そのあらすじをちよつとだけ紹介します。

第一段：『仮面ライダーNEXTゴーストvs仮面ライダーブラックゴースト』

分岐前の世界はまだ存続している……？

その可能性を見出した天空寺アユムは、もうひとりの自分の記憶と能力を頼りに、旧世界へと遡り、グレートガンデミアを撃破し、その世界のタケルを救う。

その後、滞在して復興を手伝っていたアユムの前に、再び魔の手が迫ろうとしていた。

脅威の名は、仮面ライダーブラックゴースト。

ユリゲラー、ライト、聖徳太子、ワイアットアープ、ジェロニモ、劉邦、服部半蔵、キャプテンキッド、アレキサンダー。

九つの眼魂を駆使して戦う、第四の仮面ライダーゴーストがその正体をあらわにした時、アユムに衝撃がはしる。

「俺の名前は天空寺タケル……六歳の頃に父さんの実験の失敗で眼魔の世界に飛ばされた。救ってくれた眼魔世界のために、その命を燃やす兵士。俺たちの世界を、可能性を、戦いを、なかつたことになどさせない……絶対に！」

それは、暗黒の時間軸から現れた襲撃者。

もうひとつの可能性からの来訪者。

もうひとりのゴースト。もうひとりの父。  
その強さと混乱に挟まれて、次第に追い詰められていくアユムは、  
ふたたび『父』を救うことができるのか？

第二段：『仮面ライダーNEXTアクセス アンダー・ザ・A／女に  
は向かない宿業』

ギルガメッシュとの戦いの後、T3アクセスドライバーを破損して  
しまった照井春奈は、日本で謹慎処分を受けていた。

——だが自分の判断は間違いではない……今度こそ。

そう信じる彼女は、家族と穏やかな日常を過ごしていた。

だが、風都でふたたびドープメント事件が発生する。

「やはり街には断罪者が必要だ。それも、絶対的な価値観と強さを持つ者が」

そう声をあげるハイドープ、アロー。

かつて自分の力を司ったメモリの怪物は、春奈自身をも巻き込み、  
街の悪人たちを次々と殺害していく。

ライダーではなくなったとして、それでもガイアメモリのプロである  
ことには変わりはない。

春奈は風都署にみずから協力を申し出る。その護衛兼相棒に選ば  
れたのは、新人刑事の藤堂纏という青年で……

ドジでヘッポコでヘタレで……だが人一倍正義感と風都への愛に  
厚い彼とともに、春奈は怪物を追い詰めていく。

狩人の矢が最後に射るのは、誰なのか？

第三段：『仮面ライダーNEXTドライブ なぜ仮面ライダーは機  
械の夢を見るのか？』

チェイスを目覚めさせる。そして借りを返す……。

新たに目的を得た英志は、彼の復活のために研究に手を貸してい  
た。

だがある日目を覚ますと、周囲の環境が一変していた。

電車や道路、あるいは携帯といった交通、情報の機器は一昔前のも

のに変わり、ロイミュード達との戦いは継続中。

祖父泊英介やクリムが生きていて、進ノ介はプロトドライブ、早瀬がマツハとなつてロイミュードたちと戦い……自分が、仮面ライダードライブ!?

「ズレている……時間が……」

これは夢か現実か。本来とは一段階遅れた世界に現れるのは、とある奇妙な時計で変身する、ダークドライブにも似た異形の怪人、アナザーダークドライブ。

「英志、あんたらは時を進めすぎたんだ。だから、俺が管理する」

撃破しても倒しきれないアナザードライダとの戦いはくり返され……だが喪つたものが取り戻された、幸福と充実感に満たされた生活。

それを破壊するのか、守るのか。

「人とは支配するものでも管理するものでもない。その自由のために戦える者こそ仮面ライダーではないのか」

決断を問われる英志の前に、ついに『あの男』が復活する！

\* \*  
\* ウソです \*  
+  
+ (ヨ) \* 108 (E) \*  
Y Y \*  
n | | n  
n | | n  
n | | n  
n | | n

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（11）

闘争の音が響く。金属の悲鳴が空を割る。

荒れ果てた更地。その残骸たる廃屋の上こそが、今世界の中枢であり、頂点だった。

ブレイドガンナーで斬りかかるダークドライブを、ギルガメッシュは素手で捌く。移動どころか身体さえも傾けず、T3アクセルを片腕で迎え撃ち、その攻めを押しとどめ、力任せに体を崩すと即座に反撃に移る。

善悪も、意志の強さも性別も。人も神も。

年齢も、経験も、ライダーとしてのスペックや武装の数も関係ない。純然な力量差が、そこにはあった。

「無駄だ」

ギルガメッシュが拳を打ち出す。その撃が、圧が、英志と春奈を一旦とめにして苦境へと追い落とす。

「お前たちが意気を高め束になろうと、未だ俺とは10倍の開きがある。抵抗など、無意味だ」

ギルガメッシュの言葉をそのまま状況が証明していた。

彼の固めた左拳はぐぐ、と英志たちを押しやり、反撃に転ずることも許さない。仮に死力を尽くしてこじ開けたとしても、彼が今度は利き手を突き出せば、もろく吹き飛ばされるだろう。

だが、もはやバックするという選択などとうにない。ただひたすらに進み続ければ良いだけで、気は楽な方だった。

「だったら、それぞれ11倍の力を出せば、お前を倒すのに計算は合うわけだ……！」

「君のキャラじゃないな」

春奈は鉄拳を支えもつように受け止めながら、呆れる。笑う。

「状況に応じて運転を合わせる。それが僕の走り方だ」

「そうか。だが私はそんなことは知らん。常に全力で疾駆する」

言葉を交わす。心を交わす。

真綿を締めるように距離を詰めつつある絶望など、ものともしない



ように。そもそこに、気を吐く自分たち以外誰もいないかのよう。  
「うん。わかってる。だから全力でついていくよっ！」

「せいぜい振り切られるなよ！」

情をつなぐ、信を確かめ合う。目線を絡ませる。

決して長いとは言えない。良好とも言えなかった。だが確かに築かれた関係は、彼らをもう一段階上のステージへ、そのスタートラインへ並び立たせていた。

英志は進み、春奈は退く。

両者に同じだけの加圧を同じだけのベクトルに与えていたギルガメッシュの体幹がわずかに崩れた。

英志と春奈は、すかさず挟撃に移った。

ブレイドガンナーとUFOガジェットとが、それぞれに胴を狙う。だがギルガメッシュは素早くその身を切り返した。ブレイドガンナーの切っ先が胴をかすめる。  
浅い。硬い。

次の瞬間を狙った春奈の突撃も、ギルガメッシュは一顧だにせず応じる。

顔面に迫るナツクルよりも速く、繰り出した裏拳がアクセルの脇を強打した。

そして改めて相対した英志に、強烈なミドルキックを見舞った。

バラバラな方角へと吹っ飛ぶ青年たちは、しかしそれでも折れなかった。むしろ、一縷の希望を見出した。

わずかにだったが、当たった。それはさらに加速すればその神速に届くと言うこと。避ける動作を行った。それは、自分たちの一撃がまったくの無効ではないということ。

そして痛みは……折れないかぎり、何ということはない。

〈NEXT〉

起き上がりざまブレイドガンナーの刀身を輝かせ、切り返し、横一文字に斬光を飛ばす。

三日月を描いて飛ぶ一閃を、ギルガメッシュは右の拳風で消し飛ばした。

だがその間隙を縫って、春奈が動き始めた。  
背に回った彼女だったが、いまだ背を自分の側へとさらす王ではな  
かった。

絶えず光柱を吐き出し続けるライトトレーサー。それに向けて、春  
奈は足を速めた。

だが、ギルガメッシュはそれを赦さない。肩のアーマーをがしりと掴  
むと、引き戻して容赦呵責一切ない連打を浴びせた。数にして五。そ  
の直撃をすべて受けた春奈の身体が、足下から崩れ去る。

〈DUMMY！ MAXIMUMDRIVE！〉

——かに、思えた。

だが四散した春奈の身体はコンクリート片へと変化し、その裏から  
本物のT3アクセルが現れた。

おのれ目がけ飛びかかる彼女の腕を、ギルガメッシュは拘束する。  
だが、それは彼女にとって織り込み済みだった。

「超・変・身」

春奈の装甲が反転し、その厚薄が推移スライドしていく。

トリプルAとなった春奈は、その重装甲でもってくり出された必殺  
の拳を肩で受け止め、強化された腕力でもって、捕まえられたその上  
腕を逆に固定させて自由を奪う。

「今だッ！」

春奈の合図とともに、英志は床を蹴った。

〈NEXT！〉

シフトブレスのボタンを押して跳躍する。一条の蒼雷となって黄  
金の王へと迫る。

「舐めるな！」

怒号一喝。ギルガメッシュは力づくで春奈を振りほどき、英志を迎  
撃した。掌でもって英志の突き出した右足を捕まえた。

かつてと同じく、トライドロンに頼らない、シークエンスを省略し  
たキック。

だが、あの夜とは違う。

あの時押し負けたのは、スーツの性能差や、準備不足のためではない。

絶対的な力の差を見せつけられた自分が折れていたからだ。

でももう負けられない。

負けなければいい、というものではない。戦え、勝てと自身に命じる。ただの足止め、時間稼ぎではない。今この神を打破しなければ、世界が滅びると、あらためて噛み締める。

それに、捕まるのは想定内だ。至近まで寄ることさえ、接してくればそれでよかった。

〈NEXT！ NENENENENENEXT!!〉

英志は吼える。ベルトは吼える。

ダークドライブの残された全リソースを、蹴撃へと一極化させる。

ギルガメツシュとの接点の光が、膨張を始めた。

「なんだとッ!？」

自信の見込みと余裕を超えつつある力に、ギルガメツシュは軽く動揺を見せた。その動揺が身体にも伝播し、彼らの体重を支える膝がガクリと傾いた。

〈ACCEL MAXIMUMDRIVE!〉

態勢を整えた春奈もまた、空中に轍を描いて翔ぶ。

ギルガメツシュが舌打ちしながら、片腕を開けて彼女の攻めをも防ぐ。

だが、この時のためだけに余力を温存していた彼女もまた、機と見て全力を投じる。

〈ARROW！ MAXIMUMDRIVE!〉

それは引きしぼられた剛弓のように。

〈ARMS！ MAXIMUMDRIVE!〉

それは発せられた徹甲弾のように。

加速度的に鋭さと重さを増していく春奈のキックは、ギルガメツシュを押し始めた。

ほとばしるエネルギーの余波が、周囲に火の華となって咲き乱れ

る。

ダークドライブの耐久性にも、限界が来ていた。バイザーに亀裂が入り、青いガラス片が割れて散る。光がさらされたさらされた肉眼の網膜を焼き、肌を焼く。

「おおおおお！」

「あああああッ！」

だがそれでもふたりは退かない。さらに我が身を、エネルギーの奔流の中心へと押し込んでいく。

「うおおおオア！」

それはギルガメッシュもまた同じだった。彼の最終目的の要たるライドトレーサーが、後ろに控えている。

両陣営の覚悟は、そのまま拮抗を生んでいた。

英志は意志を貫き通し、そのうえで願う。

全てが勝っている必要なんてない。

ただこの一瞬、ほんの少しだけ、たった一点だけ、この神を上回っていれば良い。

その刹那のために自分は、自分たちは死力を尽くすと、今も夢の中で、現の戦場で、同じように闘っている父に誓う。

その一念が、大規模な衝突を生んだ。

ギルガメッシュの両の腕を、英志たちの渾身が弾き飛ばした。さまざま防壁の力場を展開する王だったが、魂の咆哮は、回天を期した技は二層、三層とそのエネルギーを打ち砕いていく。

最悪の未来を乗り越えるため、まだ見ぬ先を拓くため、青年たちの足は、数センチの、だが万里にも等しいその道のりを踏破する。

ダークドライブとトリプルAのキックが、真紅の火焰と蒼い雷が、ギルガメッシュを胸部を直撃した。

獅子の鎧が、大きく浮き上がる。なお食らいつくがごとき怒号とともに、ギルガメッシュが吹き飛んだ。

音の壁をも超える勢いとともにライドトレーサーへと衝突した。

臨界点間際にあつた『機械』がぶつかり合ったことで瞬間的に巻き起こった爆発は、その場にいた三者を覆い尽くした。

天を貫く、光の柱が消えた。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（12）

長く続いた、闇が開けた。

英志は、亀裂を収縮させて遠のく異星と、本来の青さを取り戻していく空を膝をつきながら仰いでいた。

もはや変身を解く気も起こらないほどに精魂が尽き果てていた。隣でよろめきながら立ち上がった春奈も同じ様子だった。

「生きてるか？」

くたびれた様子を隠さない調子の声で、春奈が言った。

見てわからないのか、と返したくなかったが、言いはしなかった。

目の前の互いが現か幻か。それさえ疑わしいほどに、疲弊していた。

「まあね」

英志もまた、疲弊のためにそっけない返事に終始する。

だがそんな自分たちの有り様がなんだかおかしくて、笑い合った。

そして互いの存在を確かめるように、腕を伸ばし拳を突き出し、打ち鳴ら、

……がしやり、という鉄の音が、それを妨げた。

戦慄とともに、弾かれるように、その音源……ライドトレーサーの残骸へとふたりは目を向けた。

ドアだったらしき鉄片が内側より吹き飛ぶ。その異変の中心に、金髪の少年が立っていた。

事の始まりから、騒乱の中心には、常に彼が、ギルガメッシュがいた。

「まだ生きてたのか……！」

英志は驚いたのは、その耐久性ではなかった。今の彼の状態で立つことこそ、脅威だった。

すでに美少年たる外装<sup>カモフラージュ</sup>は剥げ落ちて、蜘蛛か、頭蓋骨にも似た鋼の頭部をさらけ出していた。その隙間からは絶えず潤滑油たる血液を模した液体がこぼれ落ち、オーバーヒートした表皮に触れるたびに、ジュウと音を立てて蒸発している。結果、総身から絶え間のない

血煙となつて立ち上つていた。

しつかりと二本の脚で立つてはいるものの、その姿もどこか細かい野花のようだった。

自身の要、眼魂ドライバーにも修復不可能な傷跡が刻まれていた。

「……やめておけ」

春奈が言った。

「もはや勝負はついた。お前は、もう立っていることさえままならんはずだしそれに」

「もう助かり様がない、か？」

肉体の状態とは違い、いまだ覇気の衰えない音声で、ギルガメシユは言った。

「そうだ。間もなくこの身体は停止する。核も半壊している。放つておいても死ぬき」

「だったら、なんで……っ！」

なぜ、死ぬとわかつていても戦うのか。

なぜその事実を、従容と受け入れられるのか。

言葉少なに、だが幾度となく心の中で反復して問う英志に、ギルガメシユは半分だけしか残っていない唇をゆがめてみせた。

「さつきとは立場が逆だな」

と、少年のように面白がる。

だが、話の本質を突いている。

たしかに、この戦いが始まるすぐ前までは、自分たちが決死の窮鼠だったはずだ。

そしてその時に胸に抱いていた覚悟を想えば……

「そうさ。お前たちと同じだよ。たしかにお前たちのせいで過去の清算もままならない。未来も途絶えた。だが信念は捨てられない。最期の一瞬まで、それを胸に戦い続ける。……それが仮面ライダーだろう」

そう、言い切った。

イン・モルテ・エト・インナーテ・アンブレ・サラントール・ジェネラチオーネ  
「死と誕生によって人の世はめぐる！」

雷鳴のぶとき声を、天へと轟かせる。

「世界は停滞している。人は衰退している。だからこそ一度その枠組みを破壊することこそが地球人類にとつての幸福であり、ふたたび生を受けた俺の使命だ。俺が死のうともその主張を翻す気はない」

穏やかになつたはずの空が、揺れる。風が、荒れる。

その流れの中心にあつて、敗残にして不屈の王は、右の拳を突き出した。

彼の内部に蓄積されているデータが、それをマテリアライズさせるリソースが、その腕に英志のそれとまったく同じものを形作つた。

シフトブレス。そしてシフトカー。

ただ無骨な鉄色を帯びたその周囲に、黄金の球体が群体で取り巻く。

眼魂。

イーデイスらによつて分断された、ギルガメツシユの魂の容れ物。

英志たちが幾度となく打ち破つてきたそれらは、共鳴するように寄り集まり、内側から膨れ上がるエネルギーによつて自壊した。

溢れ出した霊魂はあらたな器を求める。それを、本体のシフトカーと定めて寄り集まつた。

分かたれた身と心が、連戦の果てに、今、統合された。

「これが最後だ英志、春奈。この時代の先駆けよ。最後はお前たちの流儀に沿つて、戦つてやる」

シフトカーを神気を帯びた黄金へと染め上げる。

〈FIRE ALL SPIRITS〉

だが、その中で内燃するのは、野心と信念の炎。今この時を生きてもそれらを貫かんとする、その紅。

〈ギルガメツシユ〉

自身でもあるベルトを再起動させる。

彼の名を呼ぶそれから離れた手が、シフトブレスを上下させた。

「変身」

ドライブシステムと、眼魂ドライバーの技術が、奇跡のきらめきとともに融合していき、彼をあらたな姿へと変貌させていく。破壊されたはずのライドトレーサーのパーツが浮かび上がり、形を変えながら



彼の総身を鎧っていく。

無駄のない、メタリックなフォルムを持つ上半身。パーカーゴーストを思わせる、霊験の神秘を編み込む腰巻が、王者のベルトを保護している。

肩口にはまり込むのは、燃え盛る異形の車輪。

顔に凹も凸もなく、ただ一点。眼のシンボルが中枢に刻まれている。

もはや余計なものに意識を配る必要などない。その目は指すのは唯一無二の宿敵のみ、と。

これが、最古の英雄の最終形態。

一切の妥協のないその姿は、だからこそ力にその全てが集約されている。少しでも気を緩めれば、ただそれだけで消し飛んでしまいそうだった。

その力の影響は、対する英志たちだけに限らなかつた。天が、ふたび唸り声とともに、封印らしきシンボルを砕き、閉じかけていた亀裂を拵げようとしていた。

おそらく自身を媒介に、ライドトレーサーの転送システムを再起動させたのだろう。強引に。

だがそれらの力に、今の……いやたとえ無傷だったとしても、ギルガメツシュのボディが耐え切れるとも思えない。きっとそれは、死と隣り合わせなのだろう。

彼自身が宣言したとおり、過去も未来も度外視し、今この瞬間に命を燃やしている。

「この時代を生きゆくものたちよ。真にこの世界の在り様が正しいと言うのであれば、その強さを示してみせろ」

王は宣う。強く踏みしめた一歩は、英志たちの立つ大地を揺るがした。

「……ああ、では望み通りにしてやる！」

受けて応じたのは照井春奈だった。蛮勇というわけではない。恐怖や気後れを自覚するよりも先に、身体を動かしてそれらを振り切るのが彼女の流儀のはずだ。

トリプルAの、現状持ちうるかぎり最大の出力でもって踏み込んだ。

迎え撃つギルガメッシュは正拳の構え。腰を低く沈めてひねる。だが力の流れは、その変化は、彼の肩と拳を含めた半身に重心を移していた。

〈ヒート・ファイアー・フレイム〉

様々な音声が織り混ざった声が、呪詛のように低く響く。

拳に業火が吹き上がる。今まで見たことのないほど大きく、広く、そして熱く烈しい。

その拳は、確実に一拍子は速く動いていた春奈の攻撃よりも速い。後の先を打っていた。

たった一撃。それだけで、トリプルAのボディが宙を舞い上がった。爆煙と衝撃が、その装甲を剥がして溶かす。

いかに消耗していたとして、トリプルAの重装甲に綻びなどあろうはずもない。つまりは……

いや、あえてその威力を疑う余地さえなかった。

余波がその下にある足場……否、施設の半分が、この世から消滅したのだから。

肉体を晒した春奈が、崩落に巻き込まれて落ちていく。下層の闇へと、飲み込まれていく。

「……照井さんツツ！」

英志は叫んだ。一瞬、地球の命運など忘れて、春奈を救うべく駆け出した。

〈チーター・スピード・チェリー！〉

だがその先に、いつの間にかギルガメッシュが立っていた。

「どこへ行く気だ？」

その単眼に、祈りにも似た決死の覚悟と戦意をみなぎらせて。

——どこかで、排気パイプでも壊れたらしい。

ガスが漏れ出す音がする。焦げ付くような異臭が鼻につく。

……というよりも、そもそも無事なところが無いのだから当たり前

か。

全身がバラバラになってしまいそうな痛みと闘いながら、春奈は最下層で立ち上がった。

落下の衝撃から自分をかばったUFOガジェットが、彼女自身とガレキの下で粉碎されていた。

これでトリプルAには変身できない。だが、ドライバーの限界値などどうに迎えている。どのみち再変身はできない。そのことを訴えるように、手元に転がったドライバーもならスパークを迸らせている。

だがそんなことはお構いなしに、

メモリが碎けたわけではない。まだT3アクセルへは変身できる可能性が高い。

——彼が、まだ戦っている。ギルガメッシュも、自身の限界を承知で最後の戦いを挑んできた。

自分だけが、ここで休んでいるわけにはいかなかった。

引きずる足を速めた春奈だったが、その前に巨影が落ちてきた。

それは、無機物ではなかった。だが……彼の六本の太い腕は、触れるものすべてを傷つけるような青く鋭い外皮は、生物と呼ぶにはあまりにも冒瀆的だった。

しかし、どことなく憂いを帯びた赤い瞳に、春奈は覚えがあった。

そしてそれを忘却するほど、長い時間は経っていない。

胸にこびりついたアーマープレートの切れ端が、彼の最後の理性を象徴するかのごとく、剥落する。

それが決め手となって悟った。これは……あの青い仮面ライダーだ。

低い唸り声を発する口で、つい十数分の彼は、シンプルな自分の願いを語ったことをも、思い出す。

「——そうまでして、そんなことになってまで、生きたいのか。お前は……」

生理的な畏怖と同時に、春奈は奇妙な感慨さえも覚えた。

彼に、善悪のしがらみはない。ただ徹頭徹尾、自分の生命を永らえ

させるという、生物として当たり前の望みだけがあったのだ。

たとえおのれが仮初の複製でも、どういう結果となつてもいざれ捨てられると知りながらも。

「……………」

春奈はきびすを翻す。

逃走ではなく、別のルートから英志たちのいる最上階を目指して。

その背を、理性をなくした猛獣は狂猛に追尾し始めた。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（13）

……時は、前後する。

いやそも、その世界に正常な時間の経過などあるのだろうか。

この死者が眠りスリープにつく、寝室とも言うべきこのノスタルジックなガレージで。

「すまないね、進ノ介」

その男、クリム・スタインベルトは、まず詫びを言った。

「ここには私と君の経験が全て収容されている。だが、私自身が持て余しているデータもまた、存在する。書き換え不可能な領域にあるブックボックスは、何らかの理由で破損していて開くことができない。どうやら、そこに一時的に、傷ついた君の意識が入り込んでしまったようだ。なにぶん、あの神様が君をここに招いたのでね。こちらの受け入れ準備が不十分だった」

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ ということは、ここって……」

「Exactly. ここは休眠状態にある、ドライブシステムのネットワーク内部だ」

そんなことを聞きたいわけじゃない。そんなことを語るよりも優先したいことがある。そんな焦れる気持ちを抑えて、進ノ介はじつとかつての相棒に耳を傾けた。

「しかし、君もとうとう人の親か。どうかな、『跳ねっ返りの若者』に走りを合わせていた、あの頃の私の苦労も少しは分かってくれたかね？」

イタズラっ気を込めた皮肉を織り交せて、クリムは微笑んだ。

「……親目線だったのかよ。ていうか、言っていないのによく知ってるな」

「まあ、私が眠ったあとも色々あったからね」

クリムは虚空に手をかざした。

彼の指の動きとサイズに合わせて、タッチパネルが浮かび上がり、まるでピアノ奏者のような華麗な捌き方で、それを操作していく。

「だから眠っている間にも、少しだけ『目』を開いていくことにした」

彼の手の先で、タッチパネルがモニターへと変形した。分割された。

そこにはいくつもの情勢、空に開く亀裂や緑の隕石に恐れおののく住民たち、病室で昏睡する現実世界の自分と、それにしがみつく霧子。そして無数の怪人たちを突破していく仮面ライダーたちの戦場があった。

「……あんたこそ、秘密主義は相変わらずか」

進ノ介は苦笑まじりに皮肉を返した。

「だがやはり、その判断は正しかったようだ」

クリムはそう言っ、そのモニター群の中心にあった一枚を引き出して、拡大した。

ダークドライブと、タイプトライドロンの上半身の酷似した、異形のライダーが戦っていた。

自分が斃れたあと、様々な苦労もあつただろう、苦悩と向き合ってきたのだろう。英志の攻撃には無駄な気負いもなく、常に最適なコースで、最速で技を繰り出し、最大限の力を出して奮闘していた。

だがそれでも、あのライダー、おそらくはギルガメッシュの全身全霊の猛攻には遠く及ばない。防戦一方と呼ぶことさえためられる、一方的な蹂躪が行われていた。

「英志……」

我が子が、殴られている。蹴られている。痛めつけられても、世界のために、市民のために、そして自分自身や家族のために懸命に立ち向かおうとする彼を嘲笑うかのように、敵は彼の反撃をことごとく無効化し、ドライブの装甲を飴細工のように痛みを与えるように引き剥がしていく。

自分には、今ここで何もできないのか？ 世界の危機に、仲間が、息子が、いや今を生きる人間ひとりひとりが、懸命に自分の使命を全うしようとする戦うなか、安穩と。

記憶の中で、誰かに世界を託されながら。

進ノ介は、モニターの片隅で眠るおのれを睨みつけた。

データであろうと痛みを感じられるほどに、拳を硬く握り締めた。

そんな進ノ介の震える腕を、噛み締められた唇を、クリムは横目で見つめていた。

「進ノ介」

やがて口を開いた。

「ここに至るまでの状況を観察していたが、ギルガメツシュについてひとつの仮説を立てた。聞いてくれるかね」

「仮説？」

すでにその正体も出自も、そしておそらくは目的も知れた。

そのうえ、今さら何を知らうというのか。

それを知ること、この状況を好転させられるのか。そもそも英志に知らせることができるのか。

疑問が無数に浮かび行く。だが、このクールで知的なバディは、無意味にこのタイミングで言うはずがない。その信頼が、疑惑の泡を打ち消していった。

「彼は、ことあるごとに泊英志の前に立ちはだかった。何故だろうか」

「それは……英志のシフトカーの中に、108が潜んでいたから」

「だが、ほかに警戒すべきライダーはいくらでもいた。こう言っているんだが、力と肩書きに振り回されていた彼よりも、真に強い者はいくらでもいたはずなんだ。そもそも、目的に必要だったのは彼のトライドロンド。それだけを奪う方法だってあったが、ギルガメツシュは執拗にダークドライブのシステム自体に固執していた」

「……」

クリムの疑問は、根本的なものであると同時に誰しも見逃していた点でもあった。

現場から離れ、戦局の全体を見渡していた彼だからこそ、たどり着いたのだ。

「思い出したまえ進ノ介。我々が、かつて戦った強大な敵のことを」

追憶しろ、考えろ。暗にそう言いたげなヒントに促されるまま、進ノ介は逸りを自身から排し、思考する。

感情の熱さはそのままに、その熱でもって頭脳のタービンを回していく。

今まで戦った中でも強敵、そして今回の件に関わった怪魔たち。情景が、まるで万華鏡のように様々な色彩でもって、泊進ノ介の頭上を駆け巡る。

「……敵はZZZを吸収した。そのためロイミュードと同じ弱点を抱えてしまった……」

宇宙からの敵、メガヘクスを、ギルガメツシュと財団は流用した。「まさか……時空を超えてドライブを身につける……！ 私と同じ力を!？」

ギルガメツシュと結託しながらもそのボディを彼の素体として利用されていたパラドックス。

それぞれには全く接点とその二体が思い浮かんだ。ギルガメツシュという点が線を結ぶ。

「……つながった……！」

進ノ介は声をあげる。クリムのたどり着いた結論……いや、打開策に、自分も至ったことを確信する。

「奴は、108のボディを使っている……！ けどそれはメガヘクスと同じく、その弱点まで引き継いだということに他ならないんだツ！」

「YES！ すなわちあのドライブは、彼にとって天敵となりうる。本人がそれを自覚していたかは知らないが、だからこそ、それになり得るダークドライブを奪っておきたかった！」

クリムもその熱に当てられて、昂りを見せた。だが、すぐに落ち着きを取り戻した。一刻を争う。実証せずして、喜んでいる場合ではない。

「……あの時とは逆だが、条件はクリアしている。私を信じ、ついてきてくれるか？」

「当たり前だろ」

進ノ介は迷いなく言った。何をしようとしているのか理解し、信じた。

「合図は君に任せる。君が望む、最善の形で私も答えよう」

進ノ介は、少し考えた。少し、笑った。



固めていた拳を解き、右腕を差し伸ばす。

面食らった様子のクリムに、進ノ介は歯を見せた。

クリムもまた、最高のボディの意図を理解した。

握り返してくれる。お互い、実体を持たないデータだ。この感触だって、幻のようなものだ。でも理屈じゃなかった。知らずこぼれ落ちた二筋の涙が、頬を熱く濡らした。

溢れた雫が、握手の上に落ちる。そこから生まれた光が、ふたりの男を包んだ。

「あのお別れの時から、ずっと夢見てた。あんたの手を、ちゃんとこうして握れたらって」

「……私もだよ、進ノ介」

しみじみと、噛みしめるようにいった。そして、湿っぽさを振り払うように、クリムは声高に言い放った。

「START YOUR ENGINE！」

彼らを象徴する、最高の号令を。

〈クワガタ・エレキ・エジソン〉

神罰にも似た雷が、ギルガメツシユの全身から放出された。屋上をあまねく焼いた。

避けるすべもなく、英志はその身を貫かれた。

「ぐうううああああ……はー！」

ままならぬ四肢を投げ出したまま、膝を屈する。

しゅうしゅうと溶けゆくダークドライブのアーマーは、その一撃でもって完全に解けた。

無防備にさらされた白い喉輪を、ギルガメツシユが絞り上げる。

「勝負あったな」

失望にも似た低いトーンで、王は無慈悲に宣告する。その声が、黒いシミのように、英志の心を絶望へ染め上げていく。絞り上げ、何もできないままに吊るし上げられた。

「当然の帰結だ。お前はひとりでは何も成せん。だがこの俺は、単身でいくつもの伝説を踏破した。その生涯には友と呼べるものもいたが、継ったことはただの一度もない。根本のところ、お前は俺に勝てない」

誉れでなく事実として、淡々とそう語るギルガメッシュは、力任せに英志を持つ腕を振るい上げた。

手放された。浮き上がったのは一瞬のこと。あとは落ちていくだけだった。

「ではな。生きていたのなら、せいぜい俺の創る世界を謳歌しろ」

その姿が見えなくなりざま、そう言い捨てた。彼にとってはすでに自分は過去の敗北者でしかなかった。

——ここまでか。

諦めたわけではない。だが状況のすべてが、自分に抵抗をやめると恫喝をかけてくる。

節くれだった地面が、凄まじい勢いで迫ってくる。

生身ではどうてもい助かりそうにないし、変身しようにも、ドライバーのAIが正しく機能せず、どれだけキーを捻ろうともプロトコルが実行できない。

「それでも……！」

呻きは、咆哮に変わる。

地を睨み、天に食いかかるように。

「それでもこのベルトもつけている限り、最後の一瞬まで諦めない！

僕は……！」

その言葉を、結ぶことはできなかった。

数秒後には自分の頭蓋を砕くだろう地盤を前にしては、目も口も閉じてしまう。

そして闇と静寂が、彼の意識を覆い包んだ。

↑——そう、君の父親も、ピンチに陥ったときは同じことを口にした↓

声が、聞こえる。

どこかで聞いたことのある声。だが自分の知るものとは違い、人の心がこもっている。

音が、聞こえる。

クラクシヨンにも似たような調子が弾む。それが、止まりかけた心臓の鼓動となる。

光が、灯る。

ギルガメツシユの持つ神々しきや眩さと違い、穏やかな赤く淡い電子の光。だがそこには、人に寄り添うぬくもりがあった。人の前途を照らす明るさがあった。

目を、開く。

自分は、宙に浮いていた。

いや、周囲に寄り添う資料でしか見たことのない、封印されていたはずのシフトカーが彼を近くを周回し、重力を奪って自分が体勢を整えるまでその身を留めていた。

もがきながら、正しく頭頂を天へと向け直した時、すんと両足が地に着いた。

へやあ、君が泊英志か。あらためて目にしてみるとなかなか複雑な気分だ。

声は、ベルトから発せられたものだった。ディスプレイには本来、ダークドライブのシンボルマークが表示されているはずだが、その円の中には顔文字がにこやかに笑いを見せている。

「まさか……本物のクリーム・スタインベルト!？」

驚きとともにみずからのベルトを見つめる英志の周囲では、今なおガレキが宙に浮かんでいる。一度彼から離れたシフトネクストスペシャルが、空いたその手に下りてくる。

へだが君が諦めずにエンジンに火を点そうとしたからこそ、我々もここへ自分たちを転送できた。その不屈さこそ、君が名乗ろうとした存在に必要な素養だ。

クリームは、『我々』と言った。『自分たち』とも。

つまりそれは、どういうことか。

考えるまでもなかった。

燐光が隣できらめいた。やがて、人の輪郭を、自分もよく知る人物のヴェイジョンと成っていく。

未だ病院にいるはずの、泊進ノ介の姿に。

再現映像か。いや違う。父がいる。自分のそばに。

父は、一度英志の全身を眺めた。次いで、腕に巻かれたおのれのネクタイを。我が子の顔を。そして、強く頷く。

息子もまた、父に目を合わせて頷き返した。

言葉を交わす必要はなかった。ただそれだけで、親子のわだかまりは瞬時に、完全に氷解し、時間が動き出した。

何をすれば良いかは、心で理解できた。

アドバンスドイグニッションをひねる。シフトカーを、自分が使う黒い側ではなく、今まで試そうにも使えなかった、黄色のサイドを上にしてセットする。

英志と進ノ介は、並び立って突き出した両腕を大きく回し、シフトブレスを上下させた。

「変身！」

異口同音。そのコードを唱えると、進ノ介と英志はドライブとダークドライブへと変身した。そしてドライブとなった父の影が、ダークドライブに変わった自分とスライドして重なり合った。

〈DRIVE! TYPE SPECIAL!〉

黄色の稲妻が、英志の道を彩る。

目元の険しさは取れて、だがトパーズのような、揺らぐことのない重厚な輝きが宿る。

ネクストライドロンから放たれたのは、赤いラインの入ったタイヤ。その身で受け止めると、パワーに押し負けそうになるものを受け流し、受け入れ、四肢へと流し自分たちが戦うための力と替える。

その力のままに、英志は跳んだ。一息に、みずからが落下した王城の頂にまで。

着地の音に驚き、振り向くギルガメッシュ。未だその頭上の空は神

威をもってしても破られてはいない。まだ手招くようなほどに深く澄んだ青さを保っている。

その下で、三位一体のヒーローは告げた。

『俺は……いや、俺たちはッ！』

あえて言い直した父の言葉を、意思を、子が継いだ。

「仮面ライダードライブ！」

腰を深く沈めて左脚を伸ばす。

仮面ライダードライブタイプスペシャルは、相乗りするふたりの声で言霊を発した。

「さあ………ひとつ走り、付き合えよ!!」

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（14）

半壊の建物が、彼女がふたたび上がるのを阻むようにふたたび大揺れとなった。

照井春奈は、不安定な足下につまずきそうになった。だが足は止めない。

もちろん、英志を危ぶんで急ぐ気持ちもある。

だがそれ以上に、すぐ背の数メートル先から、確実に距離を詰めて複腕ヘカトケンケイルの巨魁は迫っていた。

圧倒的な死のイメージを植え付けてくるそれは春奈と同じ悪路を進んでいるにも関わらず、剛体とたくましい六本腕を惜しみなく駆使して追いつけてくる。

三階層目の廊下で、とうとう追いつかれた。

文字通りの間一髪。寸毫の真上を、青い巨体が通り過ぎていく。

「……………」

春奈はそこであえて足を止めた。

ハリネズミのごとく全身から飛び出し、地に突き立つ触手をアクシズAでもって撃ち返し、落としきれなかった分は目視とともに回避していく。

だが、問題は速度ではなく、足場そのものだった。

ただでさえ支えやバランスを喪って脆弱となつてるところを、青い怪人の腕が食い込み、触手が貫いていく。自然、春奈が通過できるスペースが奪われていく。

とうとう今現在、彼女の足裏をつけている地点のタイルまでもが削げ落ちた。

大きく姿勢を崩した春奈はその背をのけぞらせて、ふたたび地上へと転落していった。

体勢を持ち直したところで、生身で助かる高度ではなかった。

ただでさえ不安定になっているドライバーを、空中で扱うのは至難だった。

メモリを装填するのも、バイクに変形することもままならない。

ぐつと唇を噛んで、痛みも死も、覚悟を決めた春奈だったが、

〈ACCEL UPGRADE! BOOSTER!〉

黄色い影が、ジェット噴射で軌道を描きながら飛来した。

「春奈ッ！」

鋭く声があがる。

春奈が落下する寸前に両腕をあらんかぎり引き延ばし、その身柄をすくい上げる。

だが、空を駆ける彼に神が嫉妬でもしたか。

屋上を中心に、四方八方に雷光が降り注いだ。

あたりかまわず無軌道に地に向けられた落雷に、さしものその仮面ライダーも空中での制動が至難を極めていたようだった。

ジェットの出力の差を左右で調整し、右に身体を傾ける。だが、不覚にもさらされたその背に、ついに紫電は直撃した。

制御を喪ったそのライダーは、手にしていた剣を手放しフリーになったその両腕でもって春奈をきつく抱きしめた。

生身の彼女を自身のイエローの装甲でもって衝撃から守る。やがて身体から施設の壁に激突した彼は……仮面ライダーアクセルは、春奈をかばったままに、照井竜としての姿をさらけ出した。

「大丈夫か、春奈……」

疲労と負担を隠しきれない声で、娘の名を呼ぼう。

「それはこっちのセリフ、ですよ……！ 老体にムチ打つような真似を……！」

そんな彼を案じているのは、春奈とて同様だった。だが彼はおのれに気遣う様子はない。どれほど傷つこうとも、他人にどう思われようとも、おのれの意地を張り通す。昔から、そういう男だった。

「……やっつと……」

竜の込める腕力の力が強まる。そこには、不器用なこの父親なりの、ありつたけの感情が込められていた。

「やっつと、お前を救うことに、間に合ったな……」

感慨深く呟かれた言葉でもって、春奈は父の心を閲した。

なぜ、幼い自分たちが監禁されていたあの時、父は助けに来てくれ

なかったのか。

十年間、自分が抱えて生きてきた疑問。だがそれはあくまでひとりよがりなものだった。相手の想いなど、何も知ろうとはしなかった。だが今なら分かる。

父も、自分と同じ呪縛に苦しんできたのだ。

だが今、それが明らかになったこの瞬間、もはや何のわだかまりもない。

父の身体そそつと押し返して、立ち上がる。

次の瞬間、春奈らを追ってきた青い怪人は、地響きを立てて着陸した。

赤く明滅を繰り返すその猛獣と目線が合った竜は、真紅のアクセルメモリを手にふたたび立ち上がった。

その父の傍らに、春奈も並び立った。

「ここは任せて先に行け……と言っても、聞かないんだろうな？」

父は尋ねる。だが、歴戦の仮面ライダーアクセルとは言え、今の状態で目の前の六本腕は確実に手に余る。

「私に、質問をしないでくれるかな」

娘は笑って返した。

十年ぶりに、父に見せる笑みだった。

〈ACCELER!〉

まったく同じガイダンスボイスが二重に響く。

メモリとは別にドライバ―に電流がほとばしり、春奈を苦痛が襲う。表情に出さずそれに耐え、父に合わせてそこにガイアメモリを挿入した。

「変……」

「身ツツ！」

駆動音が彼女らを包む。

親子の絆を閉ざしていたぶ厚い氷をも溶かすほどに熱は高まり、彼らの周囲で回転するエネルギーの輪は彼の肉体を紅い鋼へと変容させ、彼女の瘦身を緑の鎧で護る。

その一本一本が短刀のように鋭く閃く歯を剥きながら、青い獣は牙



を剥く。

ふたりの仮面ライダーアクセルが。

赤と緑の、彼を終わらせるために遣わされた戦士が。

互いの存在を受け容れた、親子が。

「グウウウウウウ……アアアアアアアアアアアア！」

その咆哮に、悲痛な音調が入り混じる。

それに揺さぶられない硬骨の意志でもって、側に突き立っていたエンジンブレードを拾い直し、直に構え、そして啖呵を切った。

「さあ……今こそ完全に親子の因果を……振り切るぜッ！」

そして青い業魔は少年の影を微塵も残さない絶叫とともに、飛び上がった。

アクセルたちは、地に足をつけたままにそれを迎え撃った。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（15）

獣の猛攻を支えきれない。そう判断した照井親子は、左右に散開して勢いを殺した。そして挟み込むように、反撃を加えていく。

青き異形の背筋から、腕から脚から、液体が噴き出る。それは瞬間に凝固し、風を切つてしなる鞭となり、鉄をも貫くであろう鋭利さを持った、錐と化した。

それはどれほどに斬り払っても、雑草のように再生し、枝分かれして数を殖やし、物量でもって容易に接近を許さない。

「はあああ……い！」

そこに罅を開けるべく、初代アクセルは気炎とともに突入した。

〈ELECTRIC〉

雷電を帯びた太刀筋でもってな自分の周囲を一掃し、再生よりも速くに飛びかかる。それでもなお、追いつがろうとする無数の敵意が真紅の装甲へと迫ろうとする瞬間、彼は足を止めずにドライバーのグリップを捻った。

アーマーを、周囲が歪むほどの高熱が包む。それに怖じて退いた触手を、文字通りの炎刃が雑草のごとくに薙ぐ。

肉薄。

太刀筋の間合にその巨体を収めたアクセルは、エンジンブレードを腕の一本に叩きつけ、振り抜いた。切断した。

絶叫が響き渡る。時折少年の声色が混じるその怒号は、精神的にも肉体的にも圧迫感がある。傷つけたこちら側が、逆に生々しい息苦しさや痛ましさを覚えてしまう。

手負いに獣は、さらに猛る。

ますます数と勢いと速さを加えた触手を、春奈は援護射撃で落とすていく。だが、残る腕までは、遠距離からの牽制程度では止まりもしない。父のように、乾坤一擲の接近戦で挑まなければ、ダメージは与えられない。

残る五本の腕が竜の全身をつかみ上げた。地表がまくれ上がるほどに叩きつけ、滑る身体が荒れた大地をさらに削る。追撃を妨げよう

とあえて距離を詰めて射撃をする春奈だったが、その彼女にも、触手が迫っていた。

「春奈ー」

竜が叫ぶ。叫びながらも、その行動は素早くて確だった。

ドライバーのバックルを自身の身体から両手へと移し替えた彼の身体が、機械のように変形していく。

そして、一台のバイクとなって、地面に突き立つ針を縦横に回避しながら娘へと身を寄せた。

その意を察した春奈は、自身が絡めとられる間一髪のところ、アクセルに足をかけた。

ひさびさに乗る、父の背。

奇妙な感慨を共有しながら、親子は一度死地から離脱した。

操縦は父に委ね、春奈は彼よりエンジンブレードを受け取った。

コンクリート片をもともせず、たくましいドリフトとともにその身を旋回させる。爆音を響かせて再度迫った。

迫るその手を、腕を、『運転』に専念する父はたくみに回避していく。そこは、自身にまたがる春奈の上背、それを考慮するとような……：気遣いと、想いやりがあった。

親の心を噛み締め、誓いのごとく、剣を立てる。

世界を守ろうとする正義への献身。人々を守るために燃やす闘志。その疾走を、一ミリたりとも無駄にしてなるものかと。

〈CYCLONE MAXIMUMDRIVE!〉

互換性があることを承知で、T3メモリを弾倉のようにエンジンブレードへと装填する。

緑碧の旋風を帯びた一太刀が、引きちぎるように周囲の触手を薙ぎ払う。返しの斬撃が実寸よりもはるかに伸びて、飛びかかった怪獣の右腕を一気に全て斬り伏せた。

自身のウェイトの多くを占めていた部位の消失は、そのまま体幹の均衡の崩壊を意味していた。持て余した力によって大きく姿勢を崩した獣はしかし、それでも偽りの生を諦めない。なお食らいつくべく春奈たちを頭から飛びかかかって追尾した。

竜は、その前輪を大きく持ち上げ、ビルの壁に押しつけた。そのまま馬力によって垂直の壁を強引に駆け上り、怪物の頭上に回り込む。その身を大地と並行に横たる。

春奈は剣を獣に向けて投擲した。自身は、空転する前輪に飛び移った。

回転の渦へと我が身を投じる。その勢いを借りてカタパルトとしてみずからを撃ち出す。

獣もまた、断末魔とともに飛び上がった。

〈ACCELER! MAXIMUMDRIVE!〉

マキシマムスロットの代わりに、メモリ自体を一度を抜き差した。

「——お前の苦しみも、痛みも、罪もっ！ 私たちは、すべてを背負って乗り越える！ その先に、始まりの未来があるッ！」

全リソースを絞り出してくり出した回し蹴りが、赤い轍を虚空に描く。

三度目の激突。策も小細工もない。純粹な力と力、今日を生きようとする本能と、過去も今も振り切つて、明日を拓こうとする意志が、拮抗する。

景色が溶けるほどに、風が叫び出すほどに。

荒れ狂う力の渦はやがて彼女らを分厚く覆い包み、嵐となって互いをえぐる。

だがそれは決して、永続するものではなかった。

「希望が私の、スタートだッッ！」

残る左腕を力づくでこじ開けて、春奈はさらに膝を曲げて空中で回転した。

槍のごとく、矢のごとく。そして彼女自身の心の鏡のごとく。

まっすぐに横一文字に振り切つた照井春奈の踵は、青い獣の脇腹を直撃した。

たしかな手ごたえを感じた春奈が着地すると同時に、その背で巨魁は脱力と傾きを見せた。

くつきりとその胴に刻まれた轍が、導火線のように明滅をくり返

し、熱を持ち、そして暴発する。

天さえ引き裂くような絶叫が、鳴り響き、それは爆発音へと変わった。

彼の内より膨れ上がる日からかばうように、アクセルは春奈の前に駆け付けて、火除けとなった。

おのが腹部にかすかな痺れと痛みが差し込んだのは、その次の瞬間だった。

ドライバーがスパークを放ち、火花を散らし、そして腰に固定していたベルトが調整機能を停止してたわみ、バックルごと地面に落下した。

——このあたりが、限界だったようだ。

むしろよく、ここまで力を維持してくれたと感謝すべきだろう。

バックル部分がオーバーヒートによって小規模な爆発を起こした。外部からの衝撃では容易に破損したドライバーだが、内燃機関の冷却が追いつかなければ、その防御性も意味をなさない。

装填されたアクセルメモリをも巻き込んで、ついにT3アクセルドライブは砕け散った。

「……」

知れ切った結末だった。覚悟もしていた。だが実際にその無残な姿を目の当たりにすれば、達成感にも似た一種の脱力感や虚無感が、春奈の胸に去来していた。

揺らぐ視界の彼方に、ふと青い人影が飛び込んできた。

顔を持ち上げる。炎と蜃気楼の壁を隔てて、ライダーの姿に戻った彼が、よろめきながら遠のいていくのが見えた。

人らしき姿には戻っていても、やはり怪物に変貌していた間のダメージは、それでも反映されているものらしい。

その右腕は、二の腕から先が切り落とされていた。

切断面からは、絶えず放電が続いていた。

（——なんという）

生きることへの欲求だろうか。

善悪を抜きにしても、あらためて深く噛み締める。

彼の執着を。ただひたすらに生きようとした彼の純粹さを、踏みに  
じって先へと進むことの意味を。

「待てー！」

人型に戻った父が、今度は自分の足で追いかけてしようとするのを、春  
奈は肩で押しとどめた。

「もう、十分でしょう」

どう見立てても、あのライダーは致命傷を負っていた。その手ごた  
えもあった。

そして装置と融合したギルガメッシュ自体が、もはや勝とうと負け  
ようと長くは保てない。

あの王が停止すれば、彼と繋がる軍勢は役目を終えて、偽りの肉体  
は死滅する。それはあのライダーとて例外ではない。

生かそうにも、もはや止めようのないことだった。

ただそのほんの一時、残っている余命が数秒だけだったとしても。

「せめてそれぐらいなら、生きること、赦してやっても良いでしょ  
う」

父は言葉もなく、娘を見返した。

だが彼女の視線は、自分が落下した施設の屋上へと向けられてい  
た。

力が流動しながら、その圧と勢いを増していた。竜にもそれは伝  
わっているのだろう。春奈の視線を追いながら、息を呑んで天を仰い  
でいる。

その潮流が良い方向に向かっているのかどうかはわからない。

だが英志が踏みとどまっているからこそ、まだ戦闘は続いている。

(すまない。これ以上の力にはなれない)

春奈は内心で英志に詫げる。

身を守ることでさえままならないこの状態で無理やりに介入すれば、  
かえって英志の足を引っ張ってしまう。一片の妥協も手抜きも無駄  
も、そのまま命取りにつながる。あそこで行われているのは、そうい

う駆け引きであるはずだ。

ただ彼女にできることは、信じること。任せること。そして、

「負けるなよ、『仮面ライダー』」

託して勝利を祈ることのみだった。

最終話：父よ、あなたはだれに今を託すのか（16）

〈ジョーカー！ クルミ！ マイティ！〉

〈SPESSPESSPECIAL！〉

限界まで突き伸ばした拳と拳が、衝突する。行き場を失ったエネルギーが余波となり、嵐となりあらゆるものをねじ曲げ、引き裂き、雷となつて地表を奔り、火柱をあげる。

「良いだろう……決着の時だ人間……！ 泊英志ツツ！」

一帯を巻き込んだ純粹な力の衝突は、引き分けと相成つた。引き分け。そう、五分の力。拮抗。

本来スペックのみで論ずれば地球上のいかな存在にも引けをとらないギルガメツシュが、ひとりの、いやふたりの仮面ライダーの力と、互角。

本来であれば、あり得ない。

いかに強化されたとして、雛鳥のごとく幼く、ただの人間がまともだけのライダーが、神として完成したに等しい、英雄の原典に太刀打ちできるなどということは。

「……仮面ライダードライブ、タイプスペシャル。やはりこの肉体にとつての蛇か……！」

反動を受けた自身の手を押さえながら、ギルガメツシュは舌打ちする。鎧武者の甲にも似たマスクの奥底で、憎悪の色が波を打つ。

「だが……使用者の器量が伴わなければ何の意味もない！」

肩に担いだ、火の円環が回る。魔性の輝度を高めていく。

〈サイクロン！ エアロ！ ハリケーン！〉

それを基点に嵐が巻き起こる。英志たちを含めた一帯を覆い込んで、攪拌し、切り刻む。

暴風に翻弄されるドライブの手に、剣が形作られていく。

ハンドルを模した鍔。まっすぐな青い刃。読んで字のごとくハンドル剣。

〈TURN！〉

ハンドルを回す。急発進したドライブは、渦の中心にギルガメツ



シユへと向けて、その身を旋回させた。

英志の若さと勢いを、その中に同居する進ノ介が抑え、システム面よりクリムが制動する。

心技体が一体となった彼らは、荒波を超える船のように、回り続ける独楽のように、その暴威の風をむしろ自分たちが推し進む力に替えて、突き進む。

間合いに、至る。

大上段に振りかぶった一撃は相打ちとなり、互いに呻きながら転がった。嵐が止んだ。先に立ち上がったのはドライブの方だった。

今度は彼の周囲に、色のついた竜巻が巻き起こる。

いや、それは単なる自然現象や、エネルギーの波動によるものではなかった。

走路を空中に構築しながら英志の側近く周回するのは、新旧一式全て揃ったシフトカーだった。

〈シフトカー、シグナルバイク全機発進！ 我々の全戦闘データ、全武装も全て解禁した〉

『出し惜しみなしだ！ 全部使えッ！』

父と『ベルトさん』がそう高らかに宣言すると同時に、ハンドル剣はドア銃へと換装された。

〈ガトリング！ カチドキ！ ガトリング！〉

上半身を跳ねあげ、腕を振り下ろしたギルガメツシユの背後に、砲門が開いた。無数の銃口が現れた。

そこから一斉に発射された銃弾が天を、弾痕が地を埋め尽くす。

英志は片手で銃を乱射した。狭い足場の中、確実に自分に命中するであろう敵の弾を狙って、撃ち落としていく。

〈ハンドア！〉

……順調に撃墜していったなか、クリムの声帯に似せた音が響くや、銃トリガーにロックがかかった。

「へ？」

『馬鹿！ 半ドアだ半ドア！』

〈確認を怠っではいかんよ！〉

間の抜けた声とともに銃口を覗き込む英志の耳元で、二人分の声が必要り立てた。

だが、保護者たちの忠告は、次の瞬間には無為のものとなった。鋼鉄と光熱の雨あられが彼らを叩いた。

「うわあー!?!」

三者三様の悲鳴があがる。だが、ドア銃のシールド機能と、ドライブ二体分の装甲の強度が、その斉射を凌ぎきる。結果、そして新たな武器の準備をする時間を作った。

へフルフル! デッドヒート、大砲!〜

両手で構えるトレーラー砲の上部にはデッドヒート。内部にはスピードとワイルドを徹甲弾のごとく装填し、ドライブはトリガーを弾いた。

へブドウ! ドラゴナイト! ドラゴン!〜

車輪は、神王自身の生命を代価に、なお激しく燃え立ち、回転する。

砲門は消え、代わりに巨大な龍のミツ又の首が、異界の口より顔を覗かせた。それぞれの顎門アギトに火炎を渦巻かせた。中央の龍の首に飛び乗った騎士の決定に従い、一気に放出した。

轟、剛、劫……風が揺れる。

手数による主導権の奪い合いは、一極化された出力による競合いへと推移した。

彼らの中間で衝突した力は、互いの身を焼くほどの熱を発しながら、間もなく臨界点に達して暴発した。

いずれの火力と意志が優っていたのか。

それさえも判然としないほどの崩壊が、一帯を襲った。

ついに傾き、する牙城。その中でも、ドライブとギルガメッシュは互いに狙いを定めて撃ち合い、押し合い、殴り合い、もつれ合う。

互いに掴みかかって離さないまま、受け身とらずに地表へ激突した。

自由落下による衝撃は、彼らを痛みとともに荒廃した大地に仰臥させた。

へシンゴウアックス! マツテローヨ!〜

シグナルチェイサーをセットしたシンゴウアックスをガレキの山に突き立てて、英志は立ち上がる。

だがそのチャージを待つほど、王には時間も余裕もないし、行儀良くない。

体勢を整えるやすかさず突撃し始めた。

〈シューター！〉

空いたその手に、ゼンリンシューターを創造する。弾幕でもって敵の侵攻を押しとどめようとするも、勢いも速度も一向に衰えを見せず、むしろますます猛る。駆ける。

〈ヒツサツ！ フルスロットル！〉

シグナルトマールをシューターに装填し、発射する。

クレストを模した電気の壁が、王の足を止めた。

だが、それも砕かれ、突破する。手負いの獅子が、網を噛み破るように。

ギルガメツシュの拳が、ドライブの姿を間合いに収めた。

振り上げられた腕は、雷を帯びた鉄槌となって英志たちに襲いかかった。ドライブの傍らの大斧は、いまだに信号音を刻んでいる。

対するドライブは、腕を真一文字に切っただけだった。

一閃が、ギルガメツシュの周囲を切り取った。まるで映画のフィルムネガのように。

「この……技はッ……!?!」

ドライブの右手には、黄金のナイフが握られていた。

そこに内包されていた戦闘データが、かつての宿敵の技を再現させた。

本来であれば、ヒーローである前に警察官であるドライブが、その装備、ルパンガンナーを、宿敵であった彼の技を、用いることなど、決してしないはずだった。

だが、今のドライブには使える。

泊英志が主軸となった、今のドライブならば。

警察官でもなく、未だ何者でもない彼ならば。

〈ULTIMATE! LUPIN……STLASH!〉

斬撃が、青い三日月となって空を裂く。

それを腕で受けてつ、ギルガメツシユは後退して衝撃を脇へと流した。フィルムのような隔壁は、車輪の炎熱に焼き切られた。

だが、時間は稼ぐことができた。

〈エイツテイーヨー〉

ランプが青に切り替わったアックスを引き抜くと、再度攻め来るギルガメツシユへとすれ違いざまにその刃を叩きつけた。

ベルトの眼球に直撃し、バックル全体に亀裂が奔る。

「ぐ……ウウウツウウ！」

呻きながらも彼は、ドライブの肩口を掴んで留めた。自分の下に引き寄せ、渾身の膂力がボディীবローを見舞う。

重、  
痛、

苦……

心身の均衡が、たった一撃で崩れる。

自分が今、何を感じているのか。それさえも判然としないままに前のめりに傾いたドライブの側頭部を、ギルガメツシユはそのまま強引に、捨て鉢気味に殴りつけた。

他のライダーの力を流用しない、独力による殴打。だが、今まで食らったどの攻撃よりも、英志に苦痛を与えた。

首がねじ切られるのではないかという衝撃とともに、崩壊した城を突き抜ける。その余波が、その残骸さえも跡形もなく地上から消滅させた。

だがそのギルガメツシユも、もはや限界が来ていた。

ベルトから始まった亀裂は108のボディ自体にも伝播しつつあった。その激痛は、神経を引きちぎられるがごときものだったに違いない。機械の肉体であるにも関わらず、反撃は成功したにも関わらず、その呼吸は荒く、痛ましい。

互いに満身創痍の体を引きずって、接近する。

ドライブが斃れるのが先か。

ギルガメツシユが幽鬼となって冥府へ還るのが先か。

あるいは、緑の異星が墜ちて、王の言うとおりの、究極の救済を果たすが先か。

フェイズはその最終段階を踏んだ。その答えは、過去にも未来にもない。今この瞬間、目の前の敵を打破した先にしかない。

そして一切の障壁も、彼らの間には存在しなかった。

駆け出す。

アドバンスドイグニッションを回し、シフトブレス上下させる。

へヒッサーツ！ F U L L T H R O T T L E !

ドライブの背後から、エンジン唸りがあがる。サブミッションが軋む。ネクストライドロンのタイヤが廃城を踏みしめ、加速する。

英志は腕を突き出した。主人を追い抜き、腕の先のいる敵へと食ってかかるかのように、愛機はギルガメッシュへ突っ込んだ。

「舐めるなアアアア！」

一喝。王は真正面からそれを受けた。両腕でもってネクストライドロンの全速前進を妨げ、あまつさえ、そのフロントタイヤさえも持ち上げた。

だが次の瞬間、その横合いから瓦礫突破して、別の機体がギルガメッシュを突き飛ばした。

「何ッ!?!」

二十年以上も過去の、前世代機。だが焰や、太陽にも似た熱い真紅の輝きは、決して色褪せることはない。

進ノ介やクリムたちと、常に共に在って魂をリンクさせてきた愛車。

トライドロン。

『言っただろ。出し惜しみはなしだって』

そう嘯く進ノ介と同調し、鋼鉄の相棒はギルガメッシュを上空へと打ち上げた。

両手が、ネクストライドロンから離れた。

解放された未来のトライドロンは、クラクションとともに宙へと舞い上がり、さらに追い討ちをかけて、鯨のように突き上げた。

「見せてやる！これが僕たちの……オーバードライブだ！」

蒼雷の軌道を描いたネクストライドロンは、ギルガメツシュをその中へと覆いこんだ。

ライドブースターと合体してトライドロンはその後を追った。

ある程度の高度に達したあとで分離し、後継機の敷いたロードにタイヤをつけて疾駆し始めた。

描かれた円弧が数を増やしていく。リボンを束ねるように、編むように、球の形を成していくさまは、あたかも地球と異星の狭間に、その宇宙に、別の天体を生み出していくにも似ていた。

地球を背に、ドライブは両脚をそろえて突き出し、飛び上がった。大喝、怒号。ギルガメツシュもまた、異星を頭上に控えさせ、ドライブへ向けて蹴り返した。

へギルガメツシュ！ オメガフォーメーション！

光速と、神速が衝突した。

星の中で、十字となって交差した。牙となって双方噛み合った。形成された小惑星の中で、彼らこそが支配権を争う王たちであった。

鋼が響く。互いを削る。

いつしかその像は単一のものではなくなり、一秒間に幾重にも分裂して見えた。

——否。

ドライブの像は、いつしかふたつに分かたれていた。

すなわち、タイプスペシャルではなく、タイプスピードとダークドライブタイプネクスト。

ふたつのスーツ。ふたつのフォーム。泊進ノ介と泊英志。一組の親子。

「まだだ……っ！ 俺には乗り越えるべき過去がある！ 命を焼べても進むべき未来がある……！ そして、そのために倒すべき今がある！！ 負けるわけには、いかない……っ！」

そうか。英志は、確固たる声音で、王の覚悟に応えた。ダークドライブの像が、新旧のトライドロンの加速を推進力にギルガメツシュとぶつかった。

だが、もう彼の心身は揺らぎはしない。その背を、父が見てくれるから、押してくれる人がいるから。

「だけど負ける気はない。——僕にはお前みたいに確かな展望も力もない。けど、立ち止まっても間違っても、その背を正しい方向へと押してくれる人がいる。その人たちの想いを受けて、それを明日に伝えるために、今日を生きたいという願いがある！」

英志は言霊を放つ。

多くの人たちが調整に加わり、もうひとりの自分から譲り受けたダークドライブが、自身の闇を振り切って光を放つ。

そこにドライブの、父の像が後押しをするように重なった。

「どれだけ人類の未来を想っても、多くの犠牲の果てに立っていたとしても……結局はひとりぼっちのお前には、僕たちは超えられないっ！！」

進む。進む。進む。突き進む。

天を衝かんばかりの雷が、ドライブ二台にして二代分のきらめきが、この時の中、唯一にして孤独の王の鋒を折る。盾を破る。

「ああああああああああああっ！！」

苦痛、後悔、悲壮感、そしてそれらを噛みしめ敗北を享受する自分自身への憤り。

死の間際なればこそ、積み重ねていた感情が、業が燃え立ち、高らかな断末魔となった、それとともに、肉体の内側で臨界点を迎えていた動力炉は、肉体そのものと、力と魂の容れ物たる眼魂ドライブバーを焼いた。

黄金に輝く世界を見通すその瞳は、派手な爆炎の中で粉々に粉碎された。

英志はその破壊を義務として、そしておのれの罪として見届けた。消えゆく焔から遠のいていく。

二台のトライドロンが描く螺旋をくぐり抜け、一体に戻ったドライ

ブが着地した。

ブレスレットから、シフトカーを引き抜く。

——使命は、果たした。

まるでそうとでも言いたげに、シフトネクストスペシャルは、英志の手を離れると、差し込む太陽の中へ、そこに開かれた次元の門の向こう側へと消えていった。

来るときも唐突だったが、去り際もまた潔いものだった。

「……いつか、また会おう」

だが多くの戦いを経た自分たちには、たしかな絆があると信じて、変身の解けた英志は小さな盟友に再会を約した。

へ……では我々も、そろそろあるべき場所に戻るとしよう」

クリムに促されて、ベルトを外す。

かすかなスパークがはしり、そこからクリムたちの意思が消えたのを肌で感じる。

父と、父の相棒の気配が、自分から遠ざかっていくのがわかった。

——だが、

N I C E     D R I V E

去り際に、二色の声がそう言い残す。

シンプルだが、英志にとってはこれ以上ない賛辞を贈る。

青年の双肩に、たしかな手のぬくもりがあった。

その感触を噛みしめながら、こみ上げる涙と汗をぬぐい、顔を上げる。

生じていた亀裂は今度こそ塞がり、緑の惑星はその姿を隠した。

久々に見る、傷一つない青空だった。

だが問題は山積している。今後、何度も綻ぶことだろう。

それでも空はきつと、どこまでも続いて、つながっていると、今では信じられる。

今日の前で待つ春奈とも、アユムとも、剛を始めとした、多くの先駆者たちと。



泊英志は、晴れやかな心を胸に抱いて、走り始める。  
自分の速度で、そして足で、明日へ続くその道を。

## エピローグ：re-ray (1)

天地の境さえ定かではない、灰色のしじまに、彼はたたずんでいた。波とも砂地ともつかないさらさらとしたものが足元を埋め、どこかへと彼を引っ張ろうとしているような錯覚に陥る。その牽引力が徐々に強くなってきた。さほど時を置かず、その力はいかんともしがたい強さとなっていくだろう。

まるで悪夢のような心地だった。いや、むしろ醒めようとしているのか。

これが死後の世界ということか。あるいは今わの際に見る夢か。ひとつだけ確かなことは、ただひとつ。

自分は、ギルガメツシユは戦って敗れた。

本来であれば歯牙にもかけないような、人間の親子に負けた。

そして、眼魂を破壊され、統合された精神はそのまま地上から消滅した。

かすかに漏れた呼吸は、怒りの残滓かむなしい自嘲か。

すべてを失った今となっては特に何かができるわけでもなく、行く当てもなく、ただ灰色の砂浜の中で茫洋とたたずむ。

かしやり。

シャッター音が聞こえたのは、そこからどれほど時が経った時だった。

「なかなかいい画<sup>え</sup>だな」

何もかもが輪郭を持たないこの境界で、その男だけが明確なヴィジョンを維持していた。

「タイトルは『最古の敗北者』といったところか」

高い背、すつきりと筋の通った目鼻立ちだが、自分に負けず劣らず傲然とした、

ふてぶてしい面構えと物言いだった。

胸の前にぶら下げたトイカメラで自分に何度もシャッターを切り

ながら、鼻で嗤う。

そこには好意も嫌悪もない。尊敬も恐怖もない。

あくまでレンズ越しに、公平や中立の眼差しを向けていた。

「——なんだ、お前は」

そのあまりに傍若無人なふるまいに、怒りを覚えるよりも逆に毒気を抜かれる。

誰何するギルガメッシュに、男は名乗りもせず言った。

「ま、俺は他のライダーよりもずっと視野が広いつもりだ。お前の願ひも、理解できなくはない。破壊なくして創造はないからな」

「だが、そんな近視眼の連中に俺は負け、ふたたび死んだ。一度目の生と同じだ。収奪も破壊も、次のフェイズに必要なものだと分かろうともしない連中が、邪魔をする」

「なんだそれ。だからお前は負け犬だっていうんだ」

理解を示したその舌の根も乾かぬうちに、男は掌を返した。

「勝ちだ負けだ、生だ死だのと。そんな枠組みに収まっているうちは終わりじゃない。命は終わらない。誰かが覚えているかぎり、俺たちは死も生も超えて、物語として存在し続ける。俺たちの旅は続く」

その超然とした生死観を、まるで自分の体感のように男は語る。

両腕を広げて伸ばし、朗々と。

是非はともかく、スルリと心に滑り込んでくるような、奇妙な説法。

その男の手には、いつの間にか一枚の紙片があった。

それは指の間で輝きを放ち始め、やがて仮面ライダーとしてのギルガメッシュの姿の写し絵となった。

それを満足げに見届けたあと、男はあらためて顔を上げて目線を彼へと合わせた。

「ギルガメッシュ。お前の叙事詩も、まだ続く。今までがそうだったように、人々に語られ続ける限り。みずからの殻を破れ。新たに紡げ。——すべてを破壊し、すべてを？げ」

王顔負けの不遜さでそう高らかに宣うと、男の背後に、オーロラのように波打つ壁が出現した。

「結局、何なんだ？ お前は」

ギルガメッシュに目を向けたままにその向こう側へと身を沈めていく男に、彼はあらためて尋ねた。

影さえもその中に消えた後で、虚空に声が響く。

慣れたような調子で、しかし揺るぎない確固たる強さでもって。

自分が何者か。多くの人があるいは即答できないであろうその問いに。

「通りすがりの仮面ライダーだ、俺のことも、覚えておいてもらおう」

存在感の大きな放浪者が消えて、あたりにはふたたび静寂が訪れた。

いや、男の破壊したその境界から、光が差し込んだ。春風のような、なだれかな流れが生まれた。

この空間にこうした風穴を開けることが、この空間においてあの男に課せられた役割だったと言わんばかりに、変化が生まれた。

亀裂の向こう側から、手が伸ばされた。

少年じみた、ほっそりとした手。

亀裂は広がり、逆光を背に顔が見えた。

悪童めいた、莞爾とした笑み。

「——ああ、お前か」

なつかしさとともに、その彼に、ギルガメッシュは微笑みかけた。

かつて獣だったもの。この惑星の異物たる自分を、怖れもせず試し、そして受け入れてくれたもの。

彼がいたればこそ、自分は知ったはずだった。

楽しみを、友情というものを、人間の心のなんたるかを。

そして、一個の命の儂さを、尊さを。

いつしか、それを忘れていた。

個ではなく全を視るようになっていた。

そのくせ誰かに歩み寄る気がなく、その命や意思を嗤うようになっていた。

未来や過去に目を向け続け、今この一瞬を愛することをしなくなっ

ていた。

自分の行いの全てが間違っていたとは思わないが、それでもやはり、気負い過ぎていたのだろう。

業腹だが、あの男の言うとおりにしがらみに囚われていたのだろう。だが、もう十分だろ？

友はカラカラと笑みを転がす。

神や王を気取っても、お前もまた、地球や宇宙にとってはちっぽけで唯一つの命だと。

「そうだな」

ギルガメツシユは苦笑する。

そろそろ、その荷を下ろしても良い頃だ。

王ではなく神でもないのなら、人としても未熟であれば、一個の生命として世界を廻る。あの時と同じように。

「帰ろう、ギルガメツシユ」

少年は手を差し伸べる。

「ああ。また、お前と旅に出るのも悪くない……エンキドゥ」

少年はその手を握り返す。

自由な風が吹いていた。

強く、優しく、懐かしい土の薫りを運んでくる。

灰色の淀みは取り払われて、いつしか目の前には蒼天が際限なく広がっていた。

——きつとこの空は、つながっている。

## エピローグ：re-ray（2）

「やああがて、ほしがふる……ほしがふる……ころ……」

自分にはまぶしすぎる世界の空の下、少年は歌を歌う。

真つ白な砂浜に足跡を残し、打ち寄せる海をしぶきを蹴りながら。ちぎれた腕をかばうようにして、不自然に曲がった足を引きずりながら。

「ころころ、ときめいて……ときめいて、くる……」

少年は、ひとりの少女に、恋をしていた。

その娘が折に触れて、抑揚なく歌っていたのが、この歌詞だった。その由来を知るべくもないが、少年にはまるでそれが、彼女の止まってしまった鼓動や、時間の代わりのように思えた。

——自分はまだ、生きていると、生きていたいという、訴えではなかったかと。

あるいはそれは、自分の都合の良い解釈だったのかもしれない。

自分が生きていたいから、人間であることにしがみついていたかったから、彼女を言い訳に使っていたのか。

それでも彼女は、最後には笑ってくれた。

楽しいと、言ってくれた。

すべての元凶が自分であると、憎むことだっただけでできたはずなのに。それだけで十分だった。報われたと思った。

彼女が先に待ってくれているから、生きていたいと思う一方で、死ぬことも覚悟できた。

——でも、これは？

今自分の影を追いつつある二度目の死に対し、何を救いとすれば良い？

少年の足は、膝から完全に折れた。砂浜に顔を打ち付け、左腕の力だけを頼りに、廃棄されたとおぼしき電柱に寄りかかる。

地獄のごとき戦場から離脱はできたが、もはや歩くこともかなわない。そもそも、歩けたところで残り少ない命数を使って、見知らぬ世界のどこへ行けというのか。

機械の身体だからか、どうしようもないほど消耗しているはずなのに、食欲はなかった。

食人衝動だつてない。だからもう、人間を襲う必要はない。

機械の身体は、溶原性細胞という負の遺産を持ち越してはいなかった。

人間と、共存できるはずだった。

音楽や服の趣味を語り合い、ピザの食べ方が汚いと笑い合ったり、触れ合ったり、手を握ったりだつて、できたはずだ。

(それでも、俺は……ッ！ 生きてちや、だめなのか……!?)

世界の理不尽な残酷さに憤る。その運命に抗うだけの力もない己を悲嘆する。

そして、静かに停止しつつある肉体を自覚する。

一度目は、現れたふたりの死神に抗おうと懸命に抗い、生存本能をむき出しに、高揚の中で生き切った。

苦痛も恐怖も、感じる暇さえないほどの。

でも、これは違う。

静かに、波のように、暗い冷たさが自分の中に染みこんでくる。

いや、これがおそらくは、本当の死なのだ。

皆誰もが、抗いようのないこの冷たさの中で、みずからの人生と向き合いながらその命に終止符を打つのだ。

けど嫌だ。

心の中の、孤独な獣が啼いている。

自分は人生と呼べるほどの時を、生きてはいない。ただ辛いばかりの刹那の中で、何の答えも得てはいない。

(誰か……ッ、俺を……!)

救ってほしいのか。あるいは殺してほしいのか。

その答えさえ見いだせないままに、青い獣がか細く吼えた。

砂地を噛む、靴音がする。

先ほどまでの危機から避難をしてきたのか、それとも元よりの根無し草なのか。

少年は、かろうじて動く顔を上げて、見返した。

全容は角度の具合で見えないが、歳は四十そこそこだろうか。かんなな旅行カバンをたずさえたその女性は、オーガニックな装いとともに、少年の枕もとに立った。

明らかに人のものではない導線をむき出しにした自分におびえる気配を見せず、旅荷を置き、ロングスカートの裾を折って少年の頭のあたりに膝をつけた。

「あなた、死ぬの？」

あどけない少女のような口ぶりで、なんの前置きもなくそう尋ねる。

たぶん。かすれた声で、やっとのことそれだけ答えた。

「そう」

感慨深く、あるいは無感動に。

彼女はどちらともとれるフラットな、だが決して軽はずみなものではない調子で頷いた。

「痛い？」

少年の真上から、青空と太陽を背に彼女は顔を覗きこんだ。

その彼女自身の顔が、目元が見えた瞬間、少年の偽りの肉体は精神の衝撃に感応して大きく揺さぶられた。

——まさか。そんな。

そんなことはありえない。そんな偶然が、奇跡が、自分にあつていはずがない。

これは幻だ。死にゆく自分が見る、都合のよい夢だ。そう思い込もうとした。

だけど、いくら必死に否定しようとしても。

——匂いだけは、どうしようもない。

懐かしい草木の薫り。やわらかで、甘やかな匂い。それが、少年の記憶回路を刺激する。



もう少年は、彼女の顔を見ることがかなわなかった。

視覚機能が低下していた。それ以上に、理屈抜きにあふれ出す涙が留めようもなく視界を覆っていた。

「痛くないよ……っ」

震える唇は、ダメージの蓄積による肉体のエラーによるものか。歓喜か、悲しみか。

少年は潮の味を噛みしめて、彼女を呼びたくなるのをぐっところえらた。

知っている。今日の前にいるのが現実だとしても、自分の知っているひとではない。この人も、自分のことを知らないはずだ。

この世界の彼女。

自分が生まれてきてしまったがためにすべてを狂わされた彼女ではなく、まっとうに人生を送って歳をとった彼女。

それでも、彼女は……

「けど怖いよ。どうしようもないぐらい、怖い」

様々な理と因果と感情が入り混じり、荒れ狂い、ぐちゃぐちゃになった頭の中で、その訴えが少年にできる、精一杯の甘えだった。

「辛いね」

対する彼女の対応は変わらない。自分の知るあの人と同じように、感情をストレートに出すことが苦手らしかった。

だが憐憫の韻が、相槌の中にかすかに含まれていた。

「あなた、名前は？」

「ちひろ……！ 千に翼って書いて……っ、千翼ちひろ」

せめて記憶の片隅にも留めてもらいたくて、食ってかかるように名乗る。

自分たちの名前にちなんで、あなたが……母さんがくれた名前。

「そう、面白い名前」

彼女は、目を細め、それ以上は言及することはしなかった。

ただ少年の、千翼の頭を硬い鉄柱から自分の膝の上へと移す。

「千翼」

名を、呼ぶ。

その名を、母の口で、ふたたび、呼ばれた。

「だいじょうぶ。だいじょうぶだから」

腕を彼の胸の前に回し、子どもをあやすようにくり返す。

それがまた、懐かしくて、やわらかくて、優しくて……千翼は堪えきれずに感情を決壊させた。

「なんで……？」

見ず知らずのはずの自分に、そこまでしてくれるのか。

嗚咽を漏らしながら問うた千翼を抱きすくめたまま、彼女は言った。

「昔、泣いてるわたしの傍に、ずっといてくれる人がいたの。貴方、その人によく似てるから」

知っている。その人のことも、自分は知っている。

母さんの元に送ってやると、すべての業を一身に背負って宣言したそのひとは、奇しくもその約束を果たしてくれた。

心の痛みが波のように引いていく。恐怖が、霧がかかるように薄れていく。

今までにない安らかな想いを抱いて、瞼を閉じる。

そして、

まどろむように、

すべては……

母さん

父さん

裕樹

イユ

そらが

きれいだ

潮騒が、女性の足下を満たしている。

海浜には、彼女以外いない。深い青を帯びた海の傍を、彼女はふた

たび自分だけで歩き始めた。

その足下に、打ち捨てられた黄色いゴムボールが流れ着いた。所在なくたゆたうそれをすくい上げて、彼女は砂地へと持っていく。

もう二度と、理不尽な波にさらわれないように。

空を見上げた。

真っ白な海鳥の羽が、透き通った青さの上を、潮風に乗って舞っていく。

流れていくその先は、どこまでもつながっていける。そんな気がした。

## エピローグ：re-ray（3）

青年たちの眼前には、ガスによって赤く染まった空と、高くそびえる壁が立ちはだかつていた。

マシンビルダーを駆ってファウスト暗躍の現場に向かう桐生戦兎は、過労で頭をぐらつかせた。危うく転倒事故を起こしそうになってようやくく伶俐な頭脳を取り戻し、とっさの判断力で持ち直す。

「あつぶねえな！」

後部座席にまたがる龍我が、ヘルメット越しに後頭部をべしんとはたいた。

「疲れてんだよ……」

「あの程度でなっさけねえな。やっぱ歳か、トシ！」

「うるっさいよ！ こっちは倍働いてんだぞ、倍！」

「ああ？ なんのこったよ」

「微分積分もできなさそうな筋肉ザルには、無縁の話だよ」

「バカにすんな！ ビブンセキブンぐらい……なんだその、ビブンセキブンっての？」

戦兎は大仰にため息ついた。頭痛は、遅れてやってきた。

二十年後はいざ知らず、自分たちはこの後もずっとこんな不毛なやりとりを繰り返していくのだろうか。そう考えると、気が重くなる。

しかし、と同時に思う。

（あれは本当に、『あちら側』の二十年後だったのか？）

今のビルドの性能では到底太刀打ちできなさそうな、あのゴージャスなライダー。

ガトリング、ドラゴン……

（なぜ、フルボトルの力をヤツが持っていた？）

遠目から仰ぎ見ただけだったが、自分たちの力であるような、気がした。

今後、またスカイウォールのある世界と、あの世界は交わることがあるということなのか。その時にはまた、自分たちはこの世界に関

わっていくのだろうか。

その時には、自分の記憶も甦って、何者か知れているのだろうか……？

そのことを聞く前に送り返された。

いや、尋ねるチャンスはいくらでもあった。あえて聞かないかったのは、戦兔自身だ。

過程を飛ばして未来や真実を知ることが、決して良いこととは限らない、と。

未来とは断続する現在の積み重ねだ。集積された過去から現段階における精密なシミュレーションの結果に過ぎない。

少しでも脇道へと逸れれば、きつと自分が見た未来とはまったく別物となる可能性が高い。そしてそれは必ずしも改善された未来であるとは言い切れない、

「……ま、今を頑張るしかないってことだな」

戦兔はひとりごちる。

——そう、彼は知らない。

この直後に起こる戦争も、自分自身の正体や罪も。

それにまつわる人々との出会いも、再会も、裏切りも、死別も。

世界の崩壊も、再生も。

いかに天才物理学者と言っても、その全てを予測することは不可能だった。

「お前どうしたんだ？　なんか変なモンでも食ったのか」

龍我が思い切りズレた気遣いをしてくる。戦兔は苦笑し、肩の力を抜いた。

どうしようもないバカ。すぐに熱くなって突っかかってくるし、軽率な行動には出るし、どれだけ理路整然と言いつても暴走する。未だライダーとしての意義を見つかられず、こみ上げる衝動が、いつか自分の正義に変わると信じて戦う男。

そして、自分にはないものを数多く持っている男。

一方の自分は中身も背景もないから、空疎な綺麗事だとしても、愛と平和を信じて戦うしかない。

だがそんなふたりであるからこそ、いつか中身もない正義も、正義になり切れない力や感情も、互いに補い合える時が来る。

——そう、彼らは知っている。信じている。

たとえば今は未熟でも、ガムシヤラに戦い、真っ直ぐに進み、そうやって守ってきた今日が明日の空を創るのだと。

「……なに笑ってんだよ。気持ち悪い」

怪訝そうな龍我の悪態に、礼は言わない。時折抱く感謝の念は伝えない。

どうせ今みたいに、この低脳ザルに空気も読めずに気持ち悪がられるのが関の山だ。

「別に？　ただ現場着くまでにチャックは上げとけよー。みつともねえから」

「なアツ!?!」

指摘されて、ようやく気が付いたようだった。

羞恥とともに後ろでもぞもぞと直してから、戦兔に吠えかかる。

「いつから気づいてたんだよ!?!」

「ここに来る前から。てかどんだけ緩いんだよお前のズボン」

「だから早く言えよそういうことは!」

「あつぶね！　やめろ盛るなバカ!」

からかう戦兔を、龍我は羽交い絞めにする。

コントロールをうしなつたバイクは、車道を右往左往しながら前へと進む。

危なっかしい走行でありながらもタンデムは、奇妙なまでに息の合ったコンビネーションによって、自分たちの進むべき方向へと突き進む。

——たとえ時間が、壁が、世界が隔たっていたとしても、空はつながっている。

空には、磁気嵐が吹き荒れていた。

ギルガメッシュたちと仮面ライダーたちが世界の運命を決める戦いを繰り広げていた遊園地の跡地が買い手がついたのは、それから間

もない頃だった。

広大な敷地で立地も良かったものの、いわくつきの土地であったため、競売にさえならず、ひとりの男が独占することになった。

彼はかつて天才と称され、地位も名誉もあった人物だったがその実は裏で表で、罪を罪とも思わぬ所業を繰り広げてきた悪人でもあった。

——いや、その男に悪を為しているという意識はなかったが、それでも世間一般ではそれらは立派な犯罪歴であった。

そんな奇人が私財を投げ打ってそんな土地を手に入れた時、『黄金仮面』のまばゆさに目を奪われて、彼の存在を忘れていた人々はその無謀を嗤った。

彼を知る人もまた、だいたいは似た感想を抱いたが、ひとつ違っていたのは、その天才がどんな不可能さえひっくり返してしまえるだけのものだと思っていたことだった。

そして思った。

「あいつ、また何かしでかす気だ」と。

その予想は、外しようもなく的中した。

もつとも外野がどれほどあることないことを取り沙汰しようとも説得しようとも、男にとつては小鳥のさえぎりにも等しい。

戦いから数か月後、無人の廃墟は、彼の才腕によって楽園<sup>オアシス</sup>へと変貌していた。

ファンタジーチックな城、竜の住まう火山、お菓子の家やファンシーな動物たち。

満点の星空の下には宇宙船が鯨のようにうなりをあげて遊泳し……いや、実際空飛ぶ白鯨もそこに並走するようにして風を切っていた。

実面積以上に拡大したゲーム世界にはもはや、ないものを探す方が難しかった。

「ギルガメッシュに私に無断でガシャットを生み出されたのは忌々しいが、この土地とインスピレーションを献じた功績を認め、寛大な慈

悲の心で赦してやろう」

その中心に咲く大輪の蓮の華で、データ化され、全盛の姿を保ち続ける男は穏やかな心で座禅を組んでいた。施無畏印と与願印をそれぞれの手で結び、静かに目を閉じている。

彼は今、成し遂げたという達成感によって、満たされていた。

かつて、外資系ゲーム企業『マキナビジョン』は仮想現実の世界に人々を引きずり込もうとした。

生命の限界を超越した未来。

肉体的なハンデを負った者に、現実ではできないことを叶えさせる世界。

基本的なコンセプトは、この男の思想や、このバーチャルの領域にも相通ずるところがある。

だが、彼は常にその上を行く。行かなくてはならない。

かつての南雲影成なぐもかげなりのように、強いて人々をその世界に引きずり込む必要はなかった。

自分の創世したこのリアルとバーチャルが融合を果たした『ゴッドマイティ・オアシス』は、ギルガメッシュの宣告どおりに衰退した世界を超越している。

現実では困難なことを叶えるのはもちろんのこと、学校、交通などの社会システムを構築し、その中でデータ化された人々が現実世界と大差なく生活を送れるようになっていく。飢えも、疲れも知らず、死さえもなく、容姿さえ自分の望むかたちに変えて。

散歩感覚で冒険の旅に出られ、高度なAIやバグスターのデータを基幹とした情緒豊かなNPCたちをパートナーとして、愛や友情をはぐくむことができる。

自然環境や近所づきあいに配慮することなくどれだけでも広大な土地やありえない形の家や城を手に入れられる。

「——これを公表すれば、人々はこちらの世界に入り浸るようになる。ゲーム内で使われる通貨は現実のそれより価値を上回り、宝石や貴金属を棄て、アイテムや装備が高値で流通することとなる。そしてこの世界こそが、現実を凌駕し、新たなリアルとなるのだ」



そして男、檀黎斗は立ち上がった。

この聖域に無粋に踏み込む何者かの気配を感じ、その何者かの正体を肌で悟る。

さながら隔離病棟のフィルターを払うようにして、外の世界から侵入した彼を、ゆっくりと顧みる。

かつてのように、感情を荒ぶらせたり、声を荒げたり、大仰な身振り手振りはしない。

ただ彼は、寛大な慈心でもって、待てば良かった。

人々が自分の考えに同調し、老いも死も病も忘れられるこの場所を、新世界だと認識することを。

やるべきことは、ただひとつ。

超えるべきは、ただひとり。

そして白衣をまとったファーストプレイヤーは、彼の眼下に立った。

「……………宝条永夢ウ!!」

——黎斗は感情を荒ぶらせ、声を荒げ、大仰な身振り手振りで運命の宿敵を出迎えた。

「……………久しぶりでですけど、相変わらずなんですな。黎斗さん」

男、宝条永夢は苦笑を漏らした。

その応じ方はすでに慣れたものだった。

神の才能を持つ自分に唯一、才能において敗北感を味わわせた少年。

その後幾度となく自分に泥をつけた男。

そして命の定義について、自分と決して相容れない価値観を持つ相手。

だが奇妙なことに、彼らは互いの存在があつたればこそ、より強く輝けた。

宝条永夢への対抗意識がなければ、黎斗は才能を持て余して父親にいいように利用され、飼い殺しにされていただろう。

少年期、嫉妬した檀黎斗にウイルスを感染させられていなければ、永夢は父親に見捨てられたまま恩師とも出会えず、自分の命に意義を見出せていなかったかもしれない。

互いへの奇妙な感傷をあらためて噛み締めながら、ふたりは長い月日を超えて相對した。

だが、そこに旧懐の感情はない。永夢は一転して戦士のような険しい表情に変わり、黎斗はそんな彼に冷やかな嘲笑を浮かべている。「あなたがゲームに対しても、そしてあなたなりに命に対しても真剣だつてことはわかります。けどそれでも、人類をデー々化なんてさせない。人の命は、ゲームの先にあつていいものじゃない」

「医療技術は、あの頃とに格段に発達した。君たちドクターのがんばりを、まあ認めてやつてもいい。……だがッ！　う私の神の才能はそれさえも凌駕するッ！　そしてさらに飛躍していくッ！」

互いにその価値観は認めている。

それでも永夢は、医療や世界に対して抱いた失望から黎斗の心を癒すべくここに立っている。

「永夢！　君の輝きを乗り越えた先に、究極の救済があるッ！」

そして黎斗は、自分の才腕が現在の医療よりもはるかに上回るものだと、唯一無二、人々の命や心を救う道だと永夢へ証明するために、あえてこの場に招待した。

そんなものは幻の夢で終わらせるべきだと説得するため、永夢はガシヤットを取り出した。

それこそ見果てぬ永遠の夢だと嗤うため、幻夢のガシヤットを指から提げる。

バージョンの異なる同じガシヤット、同じゲームドライバーを巻いた彼らは、互いに距離を詰めて、同じ姿へと変身した。

2Dキャラのような彼らは、取っ組み合いながら、テクスチャによつてコーティングされた水面の上を滑る。

レベルアップとともにまっとうな人型になった仮面ライダー……エグゼイドとゲムムは、ピクセルで構成された山をのぼり空を駆け、溶岩流を避けてそして破壊されたオブジェから飛び散ったビットは、

細かく砕けて渦を巻く。

彼らは拳を打ち合った。

たとえ互いの主義主張を賭けた戦いだとしても、湧き上がる高揚は、楽しさは、理屈で推し量れるものではなかった。

永夢と黎斗のGAMEは終わらない。

彼らが宝条永夢と、檀黎斗である限り。

だがその終わらない時間をこそ、今は愛おしみたいと彼らは思った。

「さあこのゲーム……君はどう攻略するのかな？」

「もちろん、ノーコンテニューで、クリアしてやるぜっ！」

電子の空に、星はまたたく。

命の輝きにも似たそれらに見出した意味は違っている、天才ゲーマーと天才クリエイターの上で、その空はつながっていた。

## エピローグ：re-ray（4）

夏の最後盛大に見送るような分厚い入道雲の下、大天空寺の前で天空寺アユムは荷造りの最終チェックを終えた。

緊急時に支障にならない程度の食料品、生活用品を詰め込んだバックの口を閉じ、その背に負った。

まるで遍歴を始めんとする修験者の様相には、当然家族と、家族同然に見守ってきた人々の不安げな眼差しがあつたし、それに反して本人からは強い覚悟を感じさせた。

今から少年は、まさしく旅に出ようとしていた。

アテはない。いや、目的はあるのだが、そこに到る道のりはまるで分かつてはいなかった。

ただ、心の信じるまで突き進んだ先に、その『世界』はあると信じている。

改変前の『アユム』の世界は、まだ生きている。

そう仮説を立てたのは、天空寺親子二代に渡つての家庭教師、アカリだった。

もつとも彼女もその分野に関しては専門外であるので、実証できたわけではないが、今回の一件の顛末を聴いたあとにある一説を唱えた。

時間軸というものは、あくまで分岐するものである。その特異点において何らかの変動があつたにせよ、それは別の分岐が生じ、それぞれの存在が多重に分かれるだけのことである、と。

「学会でそういう説があつたっただけ。つまり又聞き」

彼女は冗談めかしく前置きをした後で、さらに続けた。

そして『天空寺アユム』は、なまじ過去へと渡る力があるがゆえにそれが逆に作用し、本来自分が在るべき時間軸から弾かれてしまったのではないかと。

だからどこかにきつと、『アユム』の帰りを待つ故郷がある。

もしかしたら、生きていて助けを待つ別の『タケル』もいるかもしれない。

それこそ、雲を掴むような途方もない話だとは思う。仮説の上に仮説を重ねた、不毛な可能性だとも思う。

たどり着いたとしても、待っているのはグレートデミアに支配された、悪夢のような世界だろう。

だが、それでも行かなければという焦燥感がある。行きたいと、心が叫んでいる。

(きつと、まだあの可能性の世界は切り落とされていないはずだ。だからぼくが……『アユム』の分も『あの人』の命をつなぐ)それがどちらの感情なのかはわからない。

だが、かつてふらりと顔を見せた伯父に言われた言葉を、思い出す。「我ら思う、故に我らあり」

それが長い贖罪の旅路のなかで、彼が見出した理のひとつだった。人は思考する生き物である。思い悩み、時に過ちを犯す。

だがその思いがあるからこそ自分は自分たりえる。

そして、そうやって思い悩んでいるのはひとりではない。

皆、それぞれの価値観で思い悩み、苦しんだり、その先で笑っていたりしている。

だからたとえ遠く離れていても、孤独に苦しんでいたとしても、それは決して『我』<sup>ひとり</sup>ではない。

そしてもうひとりの伯父は、こう言って背を押すはずだ。

「心の声を聞け」と。

だから自分も今は何者なのかは考えない。きつとまだ、何者でもない。

自分のすべきことを、まだ何も始めてさえいないのだから。

「夏休みも終わったのに休学とは……今からすでに受験の準備は始まっているというのに！」

などとピントの外れた、「本当に異世界人か」と言い返したくなるような現実的な理由から反対していたジャベルをなんとか「毎日アプリのドリルをやり続ける」という条件つきで説得して、ようやく旅立ちの段になり、そして今に至る。

「ちゃんとハンカチとティッシュは持ちましたか？　いくら食い意地が張ってるからといって、拾い食いや生水を口に入れたりしてはなりませんぞ」

「大丈夫だつて、心配性だなあ」

あれやこれやと気を揉む御成を、アユムは苦笑とともに受け流した。

「それにしても、ちょっと見ないうちに立派になっちゃつて」

シブヤが感慨深げにそう呟くと、その相方たるナリタもうんうんと頷いて言った。

「これで、ここにあのヒトもいれば」

言いかけて、口をつぐむ。門出の日にも関わらず、重苦しい空気が流れた。

名を出さずとも、それが誰を指しているのか、その場にいた誰にとつても明らかだった。それほど強烈な印象を残した人物でもあり、今回の一件のそもそもの元凶でもある。

「あー、ごめんね。なんか湿っぽくなっちゃつて」

意図してのことではなかったろうが、ナリタは申し訳なきように頭を下げた。

「まったくじゃ！　空気を読まんかっ」

仙人はそう喝を飛ばし、ステツキでナリタの頭を叩いた。

「……ん？」

今、何かがおかしかった。

言っていることと視覚情報とで、とんでもない矛盾があったような。

「いった!?　何も本気で叩くことないだらろシブヤ!」

「えッ、違うよ!」

「じゃあジャベル……さんじゃないですよね……ハイ」

他愛ないやりとりをする仲間たちは、その隙間をすり抜けていく豪華な服の裾に、目を留めていなかった。

誰よりも目立つ、覚えのある姿のはずなのに。

アユムはその老人と目が合った。

彼が茶目つけたっぷりにウインクした後、その輪郭が薄らいでいく。やがて後に残ったのは、一個の眼魂。それが天高く舞い上がると、瞬く間に影も形も残さずに消えた。

「……」

アユムはしばし呆然と立ち尽くしていた。

果たしてそれは現実のことだったのか。それとも自分が見た都合のいい幻だったのか。

そして、父もまた同じものを見ていたのか。

タケルは苦笑しながら、肩をすくめた。

そして、混乱覚めやらぬうちに、我が子のほうへと歩み寄った。

「それじゃ、俺からはこれを」

アユムの手を取り、餞別を握らせる。

だがそれは、アユムの予想だにしないものだった。

一個のゴースト眼魂。白い、オレ眼魂。

タケルの手には、直前まで何もなかったはずだった。

血色も、もう少し良かったはずだった。

そして何より、自分の肌に、内側に、馴染む力。

「……っ！ お父さん、これは!?!」

「ロボセンだけじゃ、心許ないだろ?」

ロボセンというのは、『アユム』が使役していた、かつてのユルセンの姿形や自我を模倣したサポートロボットだ。グレートデミア戦で大破したのを彼が修復した。

その『アユム』と統合したことでユーザー権限は今のアユムにも移っていたが、アドバイザーとしてはともかく戦力としては不足なのは否めない。

変身能力なくして踏破できる旅路でないことは知っているが、だがしかしこれは、アユムの力ではあっても、元は父から削られた生命だ。「受け取れないよ! だってこれは」

「うん。だから……『俺』に返して」

当惑するような矛盾したことを、父は言った。

「お前が言ったんじゃないか、アユム。誰かに託した想いは、巡り巡っ

てつながっていく。世界を広げていく。だからきつと、あつちの『俺』のところへこの力が導いてくれる。『俺』も、絶対お前と出逢えるのを待ってる」

そして別れ際にあらためて、肩に手を置いてタケルは微笑みかけた。

「忘れないで、アユム。この『眼』がある限り、俺もお前と同じ世界を視ている。そばに居る」

そばに居る。

力強い誓いの言葉を、幼い頃にも聞いた気がする。

あの時は屈んで目線を合わせてくれた。けれどもあの時とは違う。今は背も伸びて、すっかり自分の方から、父と視線を交わすことができる。言葉を交わし、心を交わすことができる。

「行ってきます、父さん」

「行ってらっしゃい、アユム」

人々の魂が煌めき続ける限り、空は無限につながっている。

……

……………

——私の記憶を巡る旅の終わりと共に、地球からの旅立ちが迫っている。

その後の彼らのことを少し話そう。



## エピローグ：re-rray (5)

世界規模の混乱の際にも、地方都市沢芽市さわめは大きな混乱は訪れず、数日後には完全に平穏を取り戻していたという。

同種の植物の増殖、異星人の襲来、カルト教団の跋扈などかつて多くの危難に曝されてきたために耐性を得ていたのか。あるいはその苦難を乗り越えた指導者が、断固とした決断力と判断力でもって今回も苦境を脱したのか。

おそらく後者だろう、とオーバーロード葛葉紘汰は信じていた。

街の様子を一望できる大樹。その枝に青年の姿で腰かけ、目を細めて政庁のある方角を見遣った。

(頑張れよ、ミッチ、貴虎。誰を切り捨てて誰を残すかじゃない。お前らならきつと、全部を包めるもつと大きな箱舟になれるから)

どれほどの光年先でも信じられるたしかな絆。それをあらためて噛み締めながら、枝の上で立ち上がる。

背後で、葉が擦れる音がした。

自分と同じように、誰かの足が、枝を踏み鳴らした。

「ギルガメッシュ……奴も結局真のの勝者たりえなかった。過去に固執し、力の使い方を見誤った」

掠れて荒涼とした、だが人を惹きつける力強さを含んだ声調をもって、誰よりも強く、厳しい男は続けた。

「こうして世界はまた強さから遠ざかっていく。弱さに甘えるようになっていく。これが貴様の望んだ世界の姿か？ 葛葉」

神社の跡地にいつのまにか生えていた、街の人々が崇めるところの『御神木』。

樹齢不相応に成熟したその枝葉が、囓うように、あるいは泣き叫ぶように、風の流れに揺られて互いにぶつかり合いながら共鳴していた。

風が、彼らの間を吹き抜けていた。

その一吹きが、宙に踊る電子新聞紙ペーパーを紘汰の足下に届けた。

拾い上げる。そのログに残る文字がスクロールし、写真がそのまま

動画となって当時の様子、そこに映る人々の晴れやかな表情を克明に再現していた。

「……日本時間きのう未明、トルキア共和国と周辺諸国における和平協定が実現した。その裏には外務官のアイム氏のた根強い外交努力があつたことを忘れてはならない。同国は長年貧困と紛争に苦しんできた歴史があり、氏は多感な少年時代を地獄のような環境の中で暮らした。氏は記者団に対し『長年の苦勞が報われた。ここまでに散つていった仲間たち、その死を乗り越えて苦樂をともにしてきた同胞たちに、そして遠い国の友にあらためて感謝の言葉を贈りたい』とコメントした……」

自分とどことなく似た面影を残す異邦人の晴れやかな表情に、宇宙の神は微笑み返した。

「――俺は、そうは思わない」

背にたしかににいる男に向けて、紘汰は指で新聞紙を風に流しながら応えた。

「人はちよつとずつ前に進んでいつている。少しずつだけ強く、ほんのわずかだけ優しく。そうしてひとりひとりがどんなことでも変身していけるなら、世界だって変えられるって、俺は今でも信じてる」

今後も覆ることのないであろう力強い断言とともに、だが柔らかなく微笑んで、紘汰は初めて振り返った。

「お前だって、ほんとはそう信じてるからいつまでも見守ってくれんだろ？ ……戒斗<sup>かいと</sup>」

答えはない。誰よりも強く、だが皆を想うがゆえに自分にさえ厳しい男の姿はない。

ただ気まぐれな風の中で、葉擦れの音がさわさわと鳴っただけだった。

まるで、鼻で嗤うように、そうやって自分の甘さをごまかすように。異星の王もまた、素直じゃない守り神に肩をすくめて別れを告げた。

そして、足下へクラックを開き、その中へとためらわずに飛び込んだ。

だ。

救いを求める、新たなる戦場へと向けて。

——大丈夫。

どれほど離れた場所にいても、自分はいつまでも見守っている。力を振り絞って声をあげれば、絶対に駆け付ける。

どんな壁があつたとしても、必ず自分が、この空をつなげてみせる。

都心部にオープンした商業モール。

休日平日問わず、買い物客でごった返す。だがその一角が、他のブースとは違う妙な浮つきに包まれていた。

その密かなささやきやざわめきは主に若い男性陣が中核を担っており、彼らが時折思い出したように向ける視線の先には、同じ年頃の娘がいた。

同世代の中では群を抜くであろう美少女で、要するに彼らは強い興味を惹かれると同時に、あわよくば一声かけてみたいという魂胆なのだつた。

だがそれをためらうのは、彼女が容姿に恵まれている上に、独特の、清澄で神秘的な雰囲気を持っているからだろう。

「おまたせ」

しかしそんな彼女に、『事件』の後処理を終えてやってきた男は、はばかりことなく手を挙げ、気安く声をかけた。

少女とはだいぶ歳の離れた彼だったが、彼女は周囲に目など気にしていないようだった。

「遅い」

娘はそう言つて唇を尖らせた。だが本気で咎めている様子はなく、現れた男に対する親しみと慣れ、そして甘えを感じさせた。

周りにいた青年たちは、仲睦まじさをその短いやりとりの中で見て取つて、落胆したようにその場から離れていった。

その露骨さに、男はなんだか申し訳なくて苦笑してみせた。

「なにっ？」

自分に向けられていた興味などまるで気づいてなかったのだろう。

少女は不思議そうに小首を傾げた。あどけない仕草は、アンティークドールを思い起こさせた。

「いや、べつに。それよりほんとに悪かったな。お詫びになんかひとつ、好きなもん買ってやるよ」

「良いわよ、そんな」

「じゃ、ひとつと言わず何個でも」

彼女としては、ねだるつもりで不平をこぼしたわけではなかったのだろう。だが謙遜すれば、彼はますます自分への施しを上乗せしていくことだろう。

妥当な手の打ちどころとして、彼女は密かに今日買おうとしていたものを、ひとつだけ伝えてみることにした。

「それじゃあ……帽子」

男は軽く言葉を詰まらせた。

「——帽子？」

「だめ？」

もともと全て奢りかねない勢いだった彼が、今さら金銭を理由に気後れする理由はない。

だが、帽子は、彼女が帽子を欲しがるということは、彼の中では特別な意味と思い入れがあった。

数秒の沈黙と無表情の中に、言葉に尽くせない感情と、ここにいたるまでの日々の記憶が、どれほど詰め込まれていたことか。

少女は、じつと見上げて彼の反応を待っていた。

それでも、彼はすぐに笑い返した。

あの時と、同じように。

「その程度のお願ひ、魔法使いにはお手の物だよ。……お姫様」  
などとおどけて一礼を捧げてみたりする。娘は、はにかんで頬に朱をのぼらせた。

おずおずと、小さくほつそりとした手を差し出す彼女の手を、魔法使いはうやうやしく握りし返した。

「それじゃ行くかうか……」コヨミ」  
「ええ、晴人」おとうさん

魔法使いは、再び、いや新しく掴んだ希望をもう二度と手離さないように、指を絡ませた。

彼女もそれに応えて、共に希望の未来へと歩き出した。

——たとえ絶望と言う名の暗闇が太陽を覆ったとしても。

一度は引き裂かれた空であったとしても。

自分自身の希望を諦めなければ、いつかはつながる。

## エピソード：re-ray (6)

「んじゃ、ちょっと宇宙まで見送りに行つてくるぜ！」

鶴ならぬ宇宙規模のバカの一言が始まりだった。

宇宙工学の天才。幾度とない有人飛行を成功させた宇宙飛行士。最新のファッションから都市伝説などまで手広く扱う情報誌の編集長。アメフトの現役スタープレイヤー。モデルから大物女優へと華麗なる転向を果たした芸能界のクイーン。ホラーから重層なファンタジーやSFまで幅広いジャンルのエッセイや小説を書く大物女流作家。果てはインターポールのエージェントまで。

なんてことのない日常の日、なんの変哲もない野原に、各界で活躍する面々が一同に会していた。

愛機マシンマツシグラーにまたがった仮面ライダーフォーゼこと、如月弦太郎は、旧友たちに見守られ、ちよつとした同窓会の気分で打ち上げの瞬間を愉しんでいた。

「——しかし、ツバサがちゃんと旅立てるかの護衛と確認のためとはいえ」

そのひとりである流星が怪訝そうに顔をしかめた。

「ゴズミックでワープホールを開けばいいだろう。なにもこんな大がかりなことをしなくたって」

「もうっ！ 相変わらずロマンつてものをわかってないなあ流星くん！」

そう言つて、歌星<sup>うたほし</sup>ユウキは無遠慮に肩を叩いた。

(そういう君は、相変わらず容赦がないな)

流星は、肩を襲った痛みにひっそりと顔をしかめた、心の中で苦笑した。

「ロマンはともかく、これはひとつのステップアップでもある」

歌星<sup>けんご</sup>賢吾が夫人の言葉を継いだ。

彼が操作するタッチパッドは、バージョンアップしたパワーダイザーと連動したものだつた。ついには単独発射で大気圏を突破するまでにいたつたそれが、遠隔操作によってタワーモードに移行してい

く。

「ゴズミックを使えば宇宙に行くのは簡単だ。だが選ばれた人間……優れた資質や経済力のある特定の誰かだけが宇宙の真理に触れられるなんて考え方は、それこそかつての我望<sup>がもう</sup>理事長と変わらない」

旧敵の名前を出して、流星の考えに釘を刺しながら彼は付け加えた。

「宇宙はもつと自由な場所であるべきだ。それこそ、バイク一台で『ちよつと行つてくる』ぐらいには、近くあつて欲しいと俺は思っている。これはそのためのデータ収集だ」

そう言い終えて、天を見上げる。自身の生まれ故郷である、遠き星空の果てへと想いを馳せるように。

ロマンはともかく、と彼は言つたが、宇宙のことになればその方面の第一人者も、少年のような輝きを双眸にたたえていた。

「そういう流星くんは、別の見送りがあるんじゃないかしら？　ホラ、例の彼女」

大文字美羽<sup>だいまんじみう</sup>は、流星がそう言つたのは「その彼女のことが気になっているんじゃないか」と邪推したようだった。

「……彼女？」

友子がそれに反応した。ゴシックな化粧はもうしなくてはなり、言葉数も増えたが、ことごとくいう場面に際しては寡黙で不気味なオーラを放つ『魔女』に戻る。

一般的なイメージとは違うものの、ある意味では『恐妻』と呼ばれる類の女性なのだろう。

「いや……あいつは謹慎中の身ですから、しばらくは故郷にいるみたいです。見送りはふさわしい人間に任せてありますよ」

意地の悪い視線と、居心地の悪い視線に挟まれた流星は、たじろぎながら咳払いした。

「ま、まあ一つつても？　ウチらもたいがい特殊な人間っすけどね。特にほら、そのヒトなんか」

JKが流星の苦境に助け舟を出した。話題を転じて、目の前でダイザーに乗せられ、射出準備を終えたライダーに、自分たちの青春の象

徴に、視線を戻す。

〈それじゃあ行くぞ。キックオフの準備はいいか?〉

ダイザー内部にて手動で準備を終えた大文字隼しゅんは、そう通信越しに賢吾と声をかけた。

「ああ」

「おうっ！ 来年には、みんなで月に修学旅行だ！」

賢吾は短く答え、本気か冗談かわからない調子で弦太郎も同調する。

「3！」

「2！」

「1！」

フォーゼの身体がバイクごと直角に向かっていく。

それに合わせて、ダイザーが時を刻む。仲間たちも、かつての少年時代のようにはしやぎながら、カウントダウンを唱和した。

〈BLAST OFF〉

ダイザーがフォーゼを空へと打ち出した。

「イヤッツホー!!」

白煙を伸ばし、弦太郎の歓喜の声が尾を引いて、マシンマツシグラーは天へと昇る。

フォーゼの姿は瞬く間に小さくなっていった。やがて見えなくなつた。

だがそれを見届けたかつての仮面ライダー部の顔に、不安はない。

この広い宇宙は、どこまで突き抜けようとも、友情で繋がっている。

戦争はなくならない。

科学技術の発展は人々の生活を豊かにし、信じられてきた神や奇跡のトリックを暴き、その存在を否定した。

だが、宗教やイデオロギーの対立は収まるところを知らず、進歩の恩恵に、元々持たざる者たちが預かることはなく、むしろある地方においては激化の一途をたどっていった。

かつて『強欲』の名を冠した怪物たちが嗤ったように、人間の欲望



は時代によつて変質していく。

あるものは純粹に肥大化し、あるものはより複雑に。それこそ善悪の定義さえ容易に断ずることができないほどに、想念は渦巻いていた。

これは、そんな欲望の渦中にある、一国の話。

対立する二ヶ国の要衝に位置する小国の一都市で、少女が泣いていた。

ちぎれた人形をぎゅつと握りしめて、声を枯らして。

流す涙は絶え間なく吹き荒れる爆風で乾き、煤汚れが頬に貼り付き、ただ黒い痕跡を残すばかりである。

ほぼ遭遇戦に近い形で衝突し、少女を挟んで撃ち合う兵士たちとて、少女に恨みがあるわけではなかった。ただ、敵への射線上のあたりに、はぐれて逃げ遅れた彼女がいるだけだった。

そも、自分たちが何故互いに憎み合い、殺し合っているのかさえ本当のところは分からなかった。ただ父祖から相手が敵だ、悪人だと、散々に言い聞かされたからこそ戦場に立っている。

派遣されてきたPKOはこの争いを收拾できずにいる。戦場に介入することは、どちらの国家に対しても『妨害行為』を意味していた。後日、彼らの所属する団体や国が公平さを非難されることにもなりかねなかった。

……というのは建前で、誰も飛び交う銃弾の嵐に飛び込む勇氣などなかったからだ。

それでも。

兵士たちは陣地にこもり銃を握り、引き金から指を離さなくても。傍観者たちは介入もできず足を竦ませていても。

都合が良いのを承知の上で。

彼らは、同時に願っていた。

あの娘を、誰か助けてくれ、と。

髪や肌の色に関係なく、動けない少女の生命が助かることを、それぞれの奉ずる神へと祈った。

だが、みずからは何もしない彼らを罰するかのよう、現実には冷淡

だった。

ロケットランチャーが、火を吹いた。

一昔前の自動識別システムは、いくつもあがる熱源と、巻き上がる粉塵によって認識を誤った。輪郭で判断して、胴と腕のみとなったぬいぐるみの残骸そ手にした少女を、銃器を持った敵と見なした。

不自然な軌道を描いて折れ曲がり、ロケット弾は少女の方向へと転じた。

少女は動けない。涙と爆音は少女の五感を塗りつぶし、自身に迫る危機に未だに気づけずに、その場に留まっていた。

誰もが、少女の惨い死を覚悟した。

その瞬間に、紅い奇跡は舞い降りた。

少女を守るように現れた炎の渦は、誘爆することなく接近してきた弾頭を飲み込み溶かし、その中心で広げられたクジヤクの羽根が射出され、兵士たちに傷ひとつつけることなく、彼らの手にする小銃を貫いて弾き飛ばした。

「天使さま……う？」

赤い複翼でみずからを守る鎧の戦士を、少女は呆然とした様子で仰ぎ見た。両親に寝物語に聞かされてきた神話になぞらえて、そう呼称した。

彼はそうだと自惚れるような肯定も、少女の夢を壊すような否定もしなかった。ただ対等の友人のように

「もう大丈夫」

と優しく声をかける。

そして旋風を巻き起こして翼を打った彼は、少女を抱えて舞う。

両陣営の小隊長が、突如現れた正体不明の存在を少女もろとも撃つよう叱咤する。だが、兵士たちは銃を取り落としたまま、呆然と見上げていただけだった。

翼の騎士は、物陰に隠れていたPKOの下へ降り立った。

引きつった悲鳴をあげる彼らが逃げるよりも速く、

「この子を、安全な場所へ」

と、彼らの母国語で、単純な文脈を用いてゆっくり話しかけて、少

女をその腕に渡した。

「俺が助けるなら、良いんですよね？」

と言いついて。

たしかに、この彼を介して少女が救出されれば、自分たちが干渉したことにはならない。もし後日追及されても、謎の怪人に無理やり押し付けられたという言い訳ができる。

そして仮面の騎士……おそらくは近ごろこの一帯の紛争地域で噂となっている『仮面ライダー』は、そこまで考えているかのようだった。

「あ、ああ……その、ありがとう」

バイザー越しに自分たちの保身や打算が見透かされているようで、彼らは恥じて顔を伏せた。それでも腕ではしっかりと少女の身体を抱きとめ、心の底より感謝を述べた。

仮面ライダーは咎めない。ただ領き返す。その奇妙なベルトのバックルにはめ込まれたメダル一枚を、撫でるようになぞり、誰にともなく呟いた。

「——ああ、分かっている。こんな戦い、さっさと終わらせる」

三枚の赤いメダルのうち、右側。

タカが空を想い翼を広げるデザインが施されたそれには、他とは違い大きな亀裂が奔っていた。

それこそ、一度は真つ二つに割れたかのような……

「……行こう。お前へ伸ばす腕はきつと、別の誰かともつながっているから……！」

『天使』は最後に親しげに何者かの名を呼びかけると、メダルの図柄に合わせるように、ふたたび大空へと飛翔した。

誰かに、手を伸ばし続けるために。

いつかの明日へ、空の青さをつなぐために。

## エピローグ：re-ray（7）

一世代前のホンダNSXが路肩に停まると、中から一組の男女が外に出た。

「本当にここまでで良いの？ まだ結構距離あるけど」

そう尋ねる青年、泊英志に、照井春奈はわずかに顔を曇らせながら首を振った。

「いや、遠慮しよう。……運転が下手過ぎてこれ以上は吐き気がしてきそうだ」

「父さんの車だからだよっ！ ていうかそこはもっとオブラート包もう!？」

思わず英志は声を張り上げた。

だがその反面、表情は寂寥でほろ苦く笑っていた。

訝る春奈に、英志は自分の奇妙な心情の由来を語った。

「なんか久々かも。照井さんに酷いこと言われるのって」

解体されつつある風車が見える風都市の玄関口。そこに立った春菜は得心がいったように「ああ」と小さく声を発した。

次の瞬間には不敵な笑みを浮かべて、

「これからは耳障りな悪態に煩わされることもないわけだ」

挑発的な、物言いをする。

「いいや、寂しくなるよ」

英志は正直な気持ち传达了。

それを社交辞令と捉えたか、それとも真っ直ぐに受け止めたのか。それこそ英志には汲み取るすべはない。

ただ目元を和らげて

「また、会うこともあるだろう」

風吹かすように、さらりと答えた。

「そうだね」

自身の湿っぽさを振り切るように、英志は明るく返した。

「しばらくは日本にいるんでしょ？」

「破壊したメモリとドライバーは、私の私物ではないからな。その科

で絶賛謹慎中だ」

しかし世界を救うという使命と重責、そして暫時の公務から解放された彼女は、いつになく晴れやかな面持ちだった。

何より、男物に近いジャケットやパンツではなく、スカートにブラウスという、女性らしい出で立ちで、薄く化粧や香水も施されている。努めてそれらを意識しないように自分を戒めながら、英志は手を差し出した。

「それじゃ、また」

「どうせ再会はまたロクでもない場面だろうがながな」

「また一言多い……こういう時ぐらいはさあ、せめて」

グイ、と腕を引かれる。

瞠目する周囲と英志自身よそに、彼女たちの影がひとつに重なった。

しばらく、のようだったと思う。固まった英志の体感時間では、かなりの間、そうしていたように感じた。

その離れぎわ、彼女の感触と熱が消えるよりも早く、その唇が何かを耳元で、呼気ともに囁いた。

反応らしい反応もできず立ち尽くす英志に、手を振りながら彼女は歩き去って行った。

ただし、彼女自身の耳やうなじも、若干ながら朱色に染めて。

「……………」

泊英志の時間は、静止したままだった。

一瞬はぎよつとして立ち止まった群衆も、若者たちの青春の一ページだとそのイベントを定義して、やがて何も見なかったかのように再び歩き始めていたが、英志だけは、生理的に熱を持った頬や、首筋や耳に残る感触を尊べば良いのか喜べばいいのか分からず、しきりに撫でまくるだけだった。

「なんかいい雰囲気じゃん」

英志が再起動したのは、含み笑いとともにからかうような声がかかったからだった。

慌てて振り返れば、ひとりの少年が車のルーフに頬杖を突いて、澄

んだ目を細めて英志見つめていた。

「な、なんだよ君は!？」

荒ぶる動悸は、羞恥のためか、それとも突然現れた少年への衝撃のためか。

判然としないままに、英志の前にその身を移したその少年は、魔性めいた笑みを浮かべ、上目遣いに覗き込む。

だがしばらく見つめた後に、

「……ま、いつか」

と独り合点。軽やかな足取りで英志から離れていった。

「それじゃ、俺からもこう言わせてもらう。……またいつかの時間で、泊英志」

と、謎めいた言葉を言い残して。

立て続けに混乱を呼び込まれて、英志の頭の中でぐるぐると、様々な言葉や感情が渦巻いて、処理落ちしていた。

ただその中で、謎の少年が残した言葉……『時間』というキーワードが、頭の中でこびりついていた。

時間、時間、時間……

「っああああああ! そうだ時間!」

英志は端末の時計を見て、自分の予定より多く時を費やしたことを察した。あわてて身体を弾けさせたものだから、ポールに蹴つまずきそうになったり、足を側溝にずり落ちそうになりながら、車の運転席に我が身を滑り込ませた。

何のために、母も許可を得てまでこんなクラシックカーを操縦しているのか、思い出した。

今日は春奈の見送りの日であると同時に、父の退院日でもあった。

「良いのかい? 我が魔王」

当該人物への接触を果たしながら何も言わずに帰ってきた自分の主人に、従者は季節感に乏しいマフラーをなびかせながら不安と疑念を示し、諫言した。

「あのアナザーワールドから来たパラドックスロイミュードの『落し

物』は、時空を超えて2055年のある青年の手に渡った。変質したウオッチを手にした彼はおそらくこの時代に干渉し、我々の時間軸にも影響を及ぼす可能性はある。そうさせないための抑止力に任ずるために、彼にそれを託すという予定だったはずでは」

そんな指摘を受けた若き王は、それと示唆された丸いデバイスを自分の手の中で弾ませた。まるでさほど興味もない玩具を、手持ち無沙汰というだけで弄ぶように。

そこには、ダークドライブの顔が描かれていた。あの泊英志と異なる歴史と同じ力が、そこには刻まれていた。

「うーん、それなんだけど、さ……なんか違う気がするんだよね」と、彼は気まずげに言った。

この時代、自分たちとは異なる世界線に転移してまで今更、という後ろめたさもあつたが、あのアナザーウオッチの残骸が時空を超えたのは、間違いなく自分の激情と力が原因だ。

だが、彼は直感していた。

「やっぱりそれでも、これが彼らの運命で、歴史だと思う。どんな力を手に入れたとしても、ぶつかる必要があるなら、俺に止める資格はないよ。それにさ。必要ならきつと、この力は英志のもとに戻る。そんな気がする」

いつもながら、漠然とした予感。

だがそれが、彼の王たる資質によるものだど青年は知っていた。それが今までも、物事を正しく導いてきたことも。

もつとも、確たる理屈もなくそれに振り回される側としてはたまつたものではないが。

「それじゃ帰ろうか……ウオズ。俺たちの時間に」

王命下す少年の前に、二輪にも似たメカが飛来した。

そのコクピットに、まるでプライベートジェットに乗り込むセレブのような足取りで入っていく。

ウオズと呼ばれた臣は一度足を止めて思考する。

時間とは彼が楽観的に語るような単純なものではない。もつと複雑に入り組んで、絡み合う無数の糸だ。

自分たちとて、正史歩んでいるとは限らない。どこかから分岐した、ひとつの在り得た可能性のひとつに過ぎないのかもしれない。

それでも彼は、楽しみに、それでいてふてぶてしく笑いながら王に臣従の礼をとった。

「仰せのままに、我が魔王」

王は、語る。

自分たちが今を全力駆け抜ければ、きつと最高最善の時空へとつながっている。

春奈が久しぶり……でもなく故郷の地を踏むと、そこには父が待っていた。

「戻ったのか」

奇妙な挨拶だった。

この日戻るとは、前もって伝えていた。というか知っていなければ、そもそも待ち受けてはいない。

そのどことなく浮ついて、よそよそしい挨拶は、照井竜なりの照れ隠しだったのだろう。

「ええ、戻りました」

そしてそれに乗る形で、自分もまたよそよそしい物言いとなってしまう。

「何か良いことでもあったのか」

……そのくせ、妙に踏み込んだことをピンポイントで聞いてくる。

私に質問するな、と拒むことは簡単だった。

「まあ……少し」

だが彼女の返事は、妙な含みを持たせたものだった。

表情にあからさまに出さないが、狼狽の気配を見せる父が見物だった。

そのことを楽しむ余裕が持てるだけでも、父はともかく自分は成長したように思える。

帰途に着こうとする春奈を、竜が呼び止めた。

「どうだ？ しばらく母さんとも会ってなかっただろう。家族みんな



で食事にでも」

「良いですね」

春奈はその提案を素直に受け入れた。

微笑み、携帯を取り出して、それから慣れた操作手順で母の番号にかけた。

3コールも必要とせず、相手が出た。

春奈は大きく息を吸ってそして……

「あ、お母ちゃん！」

英志にも竜にも見せたことのないような、満面の笑みを、華咲かせた。

「帰ってきたでー！ え、そうそう。帰ってきたけど色々忙しかってん。ちゆうてもつい最近遊びに来たばっかやんか！」

え、と固まる竜をよそに、互いに早口になった母娘の会話はたくみにぶつかり合いを避けながら進んでいく。

「あーそんでな、なんかご飯食べにくって話になつてん。え？ もうっ、そのタコ焼き屋は前行ったばっかやんか！ 向かいに出来たお好み焼き屋で良え？ せやったら……わかった！ なら予約とつとくわ、ほなまた！」

どちらが先ということもなく通話は切れた。

だが、意思疎通はしつかりとできていたので、不安はない。母と話すときはこの調子なのだ、いつも。

「ちよつと待ってくれ」

ハードボイルドの体現者にふさわしい、硬い声質でもって竜は横から口をはさんだ。

慣れない愛想笑いを、張り付かせたまま。

「なんだか、ずいぶん慣れた様子だったんだが」

「そりやそうでしょう。いつもこんな感じなんだから」

「いつもお？」

「父さんにはずつと顔を見せなかつただけで、割と帰ってきてたから……訂正。ハードボイルドな様子は、三秒と持たなかつた。声質

は、すぐに情けない声に切り替わった。

自分がいない間にもだいぶ、探偵事務所の空気に毒されていると思える。

「絶望が俺のゴールだ……」

力なく膝をつかんとする父を促して、自分は軽やかに一步を踏み出した。

たまには、ゆつくりと歩こうと思う。

肩の力を抜いて、年頃の女の子らしくスカートやパンプスを履いて、空を見上げ、風を感じて。

その間、しばし、正義の仮面も荷物も外して。

——なに、当分不安はないだろう。

この街には、今も昔も、ヒーローがいるのだから。

もし彼らが何かをしくじったとしても、笑って受け入れてあげようと思う。

そしてその時こそ、今度こそ、ちゃんとした形で肩を並べられるはずだから。

ここは風都。文字通りの、風が吹く都。

そしてこの街を愛するヒーローの名は……

〈HEAT! MAXIMUMDRIVE!〉

「メタルブランディング!」

河川敷をつなぐ橋の上、炎渦巻く一閃が、ドーパントの肉体を強打した。

高密度のエネルギーの洗礼を浴びたガイアメモリはブレイクし、四散した怪物の肉体から、その正体たる犯人の身体が吐き出された。

「う、ううう……」

うめき声を絞り出す華奢な青年の胸倉をつかみ上げ、サイクロンジョーカーへと戻った仮面ライダーはあらためて詰問した。

「さあて聞かせてもらおうか。なんで新風都タワーの予定地を爆破しようとした?」

メモリの副作用で衰弱しきったその犯人だったが、その手はモゾモ

ゾと、ズボンのポケットから紙きれを取り出した。

新風都タワーの完成予想図が書き記されたポスターを、彼らの眼前へと突きつける。

「街のヒーローのあんたらならわかるだろう？　こんなもの、風都タワーなんかじゃない！　風都タワーっていうのはもつとノスタルジックで、ミステリアスでそれでいて色あせない不朽のフォルムで……ぎゃっ!？」

爆弾魔は昏倒した。Wの弾いた指が、その額を痛打したからだっ  
た。

「うっせ！　この古参ぶつたにわかがあッ！」

左翔太郎はそう叱責し、だらりと脱力した肉体を振り落とした。

↑——翔太郎↓

だがWの『右』の目は、別の異変を察知し、点滅していた。

あん？　と姿勢を戻す彼らの正面。そこにはずらりと居並ぶドーパントの群体がいて、進路も、そして回り込んで彼らの後背も封鎖していた。

「あく、こりや罨だったってことか？」

↑だろうね。おそらく彼は、ぼくらを吊りだす餌の役割だ↓

久しく見ていない数と種類の怪人たちだった。

中には、ひとときわ異彩を放つ特異個体……いわゆるハイドープと呼ばれる上位種らしき姿も確認できた。

↑ギルガメッシュの負の遺産といったところか。彼らが財団と組んでバラまいたメモリは、ふたたびこの街に引き寄せられた↓

だが彼らは危機的状况にも怯まない。

自分たちの長年の努力が水泡に帰したとは嘆かない。

↑どうだい翔太郎？　これを機にそろそろ後進に譲ることを……考え  
ないよね、君は↓

「つたりめーだ。こちとら生涯最前線だ」

たとえ街の象徴が入れ替わったとしても、かつての姿も未来のかたちもすべて受け入れて、背中を見守り、追う誰かのためにこの街への愛と正義を示し続ける。

それこそが今なお続く、自分たちの贖罪の戦いだ。

決して消えることのない罪と責任を背負い、彼らは同じく罪を犯そうとしている街の人間を指弾する。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

——今この瞬間も吹き続ける風は自分たちの想いや信念を載せて、未来の風都の空へと流れ、そしてつながっていく。

## エピローグ：re-ray（終）

懸念されていたガイアメモリ攻撃による後遺症もなく、むしろ奇跡的な速度で回復した泊進ノ介は、知人の医者へと挨拶と礼を交わした後、霧子に付き添われて退院した。

病室も十分に日当たりは良かったし、足の自由が利くようになってからは屋上に空気を吸いに行き、眼下に見える通行車の車種を言い当てるクイズをやっていたこともあった。

だが、太陽や青空というものを、久々に見た気がした。

そしてロータリーに車を停める我が子の姿もまた。

「……よお」

「どうも……」

共闘のうえで解消した親子の確執ではあったものの、やはり現実で直接顔を付き合わせると、勝手は違ってくる。互いになんと声をかければ良いのか、そのきっかけを掴めず、挨拶は上滑りしていく。

不安げに両者の横顔を見遣っていた霧子だったが、

「ほら、さっさと乗りましょうっ！」

とことさらに明るく言って、ふたりを前の座席へと押し込むように、それぞれの背を叩く。

（こりや、気まずいドライブになりそうだな）

進ノ介は心の中でひっそりと嘆息した。

……という進ノ介の憂鬱は、当然英志も少なからず抱えていたわけだが、それが杞憂であったことを、というよりもまだ可愛らしい悩みであったことを、両者は同時に思い知ることになった。

「あ、あつ！　なんでそこでクラッチを切る!?　エンストさせる気かつ！　お前ホントに免許取ったんだらうな!?!」

「うるさいな！　気が散る!!」

「もういい代われ！　お前みたいなド素人に俺の車を壊されてたまるかッ」

「危ないから！　怪我人は下がってなって！」

出発の前後までの沈痛な空気はどこへやら。

狭い車内、悪路と争いでガタゴト揺れる。ハンドルの操縦を巡って奪い合いを始めた親子を冷ややかに後部座席より見ながら、霧子はため息をついた。両手を伸ばし、夫と息子の耳を片方ずつ引っ張った。

「喧嘩しない！　また病院に引き返すつもり？」

「いてててて！　と父子は似たような調子の悲鳴を上ずらせて悶絶する。」

そのうえでの、泊家のヒエラルキーの頂点に立つ人物からの苦言である。否が応でも中断せざるをえなかった。

程度の低い親子喧嘩は多少のしこりを残しつつも沈静化し、やりきれない苛立ちによる刺々しい雰囲気、親子の間に流れていた。

「ダツシュボード」

そんな空気の中で、英志はポツリと言った。

あ？　と首を振り向ける進ノ介にまさしく向けた言葉であり、英志はもう一度踏み込んで、声を強張らせて伝えた。

「ダツシュボードに、ひとやすミルクが入ってるんだけど、取ってくれない」

「はあっ？　なんで俺が……あとダツシュボードじゃないグローブボックス！」

指摘とともに文句を言う進ノ介だったが、事情を知る霧子が助け舟を出した。

「良いから、取ってあげて？」

妻に微笑みながら、曰くありげに頼まれれば、拒絶するわけにもいかない。

「親をアゴで使うなんて、良い度胸だな」などとぼやきながらも、手前のダツシュボードへと手をかける。

だが、開けて中に入っていたのは、キャンディのボックスではなく、シツクにパッケージングされた長方形の箱だった。

巻かれたリボンの隙間に挟まれたカードには、

『Dear my farther』

と記されていた。

「これは……」

進ノ介は妻を見た。細められた目に促されて、包みを開けた。

現れたのは、一本のネクタイだった。

進ノ介好みの、炎のような真っ赤な色味。その鮮やかさの邪魔にならない程度に、子供じみた感じの主張をしないようにコントラストを抑えた、轍のようなストライプが入っていた。

進ノ介は、隣の我が子を開いたその目のままに視た。

「ほら、まあ……なに？　いろいろと迷惑かけちゃったし、助けてもらったし、ネクタイも台無しにしちゃったし？　だからその、お詫びっていうか、お礼っていうか、埋め合わせっていうか？」

目を泳がせつつ声を軽く裏返らせて、言葉を濁し、そして英志ははにかんだ。

進ノ介の脳裏に浮かんだのは、雷雲を超えて晴れた青空。遅咲きの八重桜。生い茂る緑。そして今と同じように、その手につかんだ赤いネクタイ。

「いつか必ず出会うという、誓い。」

「――つながった」

言葉にし尽せない万感の想いを込めて、進ノ介は呟いた。

自分が守り抜いた今は、あの時描いた未来へと。

最悪の未来でたとえ死すとも、確かに受け継がれた自分の意思は、あの時エイジへと託された。

斃れた彼の遺志は、時空をさかのぼって進ノ介の力となり、苦難を乗り越える力となった。

進ノ介の正義と信念を、彼なりに受け継いだ泊英志もまた、その一本を引き結び、戦い切った。

そして今また、彼もまた、自分にこのネクタイを贈ってくれた。

たとえ擦り切れようとも、一新されようとも、その一本を意志のバトンとして廻っていく。

交差点で信号を待つ間、英志は父の感慨深げな様子を見守っていた。

そこからすべてを汲み取れるほど自分はまだ時間も経験も足りないが、それでも父が喜んでくれることはわかる。安堵し、そして隠しきれない喜びのまま、そこへ託した想いを、今の彼なりに伝えた。「しばらくはそれ結んで、僕の前を進んでいてよ。今は無理でも、いつか追いつくから」

進ノ介は歯を見せて笑った。

「ばーか。二十年早えよ」

スタジアム沿いのその道は、まっすぐ地平線まで伸びている。

信号が赤から変わる直前、英志はあらためて自身の運転免許を手に取り見つめた。

とりあえず自身が何者かを証明するために取得した一枚のカード。だがそこにある自分の顔写真は目的を見失っていて茫洋としているようだった。

苦笑する。

そしてゴールが見えてこないのは今も変わらない。

神にも等しい巨悪と倒したところで、きつとその先でつまづくこともあるだろう。立ち止まり、来た道を振り返ることもあるだろう。

それでもきつと、少なくとも自分にとっては、目の前のように進むべき道はただ一筋しかないと思う。

だから、今この瞬間を全速で駆け抜ける。

今を走り抜いた意思は、希望の未来へと続いているはずだから。

——空は、つながっている。

信号が青く切り替わる。

英志は自分の足で、強くアクセルを踏みしめた。



## 後日談

記念すべきこの日、久留間ドライビングスクールの地下には懐かしい顔ぶれが揃っていた。

「ありやー、小吉ですって」

その中であって、老人は 軽い嘆きを放った。

もはや骨董品とも言っても良いガラケー。古くからある古いサイトを見せびらかしながら、困ったように眉を下げる。

現代では考えられないような小さなディスプレイと画素数で結果が表示されている。たしかに彼の言うように、運勢は微妙。ラッキーカラーは緑、ラッキーアイテムはハンカチだった。

「どうします？ 延期しちやいましょうか？」

「いやいやいや、今さらそれはないでしょ……本願寺さん」

剛は苦笑しながら答えた。

本願寺純。『困った時の本願寺参り』とも称された切れ者の彼も、いくつもの顕職を歴任した後に現職を退いて、とうに楽隠居の身であった。

だがその時のキャリアやコネクションが死んだわけではなく、今なお多方面に発言力を持っている。

今日という記念すべき日、そのきっかけを作ったのも、彼の好意と行動によるところが大きかった。

「ようやく、お前を復活させられるってんだから、なあ？」

何箇所かの修復が施された鋼鉄のボディが、機材に固定されながら二足で立っている。銀色に輝く外装をそつと撫でながら、剛は目を細めて語りかける。

そんな彼を、後ろから特状課の面々が見守っていた。

ここに欠けた男、チェイスを復活させる。

長い年月をその一点に捧げた彼の、努力と苦心を想いながら。

その願いが、ようやく叶う日が訪れたのだ。

「でも良いんスカ？ お偉方を説得するために、また無理したんでしょ？」

追田現八郎の危惧を、「いやいや」と笑って本願寺は受け流す。

「チェイス君だって、大切な仲間なんですから。チャンスが来れば一肌だって二肌だって脱いじゃいますよ〜」

老人の首が、視線が、足が、そこに招かれたひとりの青年に向けられた。

「もちろん、君だって今は大切なメンバーですよ。……英志君」

そう優しいに呼びかけて、当時を知らないアウエーな空気の中でどこか居心地が悪そうにしていた彼を安堵させる。

「君この間、郷原って議員を助けたでしよう。彼に上手いこと話をつけられたから、ようやく今回の許可までこぎつけられたんです。自分のやった中でいろいろと思ひ苦しむこともあるでしょうけど、彼を含めて多くの人間を助けられた。そのことだけでも、誇って良いと思います」

いくらか引き締つていながらも、理知を温和さで包ませた賛辞。英志は軽く緊張を解いて、祖父代わりとも言っても良い彼に、

「はい」

まっすぐに、答えた。

英志は進み出て、自身が回収したプロトゼロのボディにベルトとシフトブレスを取り付けた。いや、返却した。これは元々、彼から借り受けていたものだ。

「良いのか？」

進ノ介が息子の背に問いかける。

力を失つて、仮面ライダーでなくなつて。

言外にそう問いかける父に振り返つて、未練なくさっぱりと英志は笑つてみせた。

「ベルトがなくなつて、もう僕は仮面ライダーだから」

彼はそう言い切つた。

父もかつて、そして今も、この結論に至つたのだろうか。

いや、彼の場合は、心ある友人との別離でもあった。その決断は、今の英志の比ではないはずだった。

それでも進ノ介は、「そうか」とわずかに歯を見せただけだった。自

分の想いが一部だけでも、我が子に継承されたことを、嬉しむように。「だいじょうぶっ！凍結されてたもう一方の計画も、再開するからっ！このまま引退なんてさせないわよーっ」

りんながそう言っつて英志の背後から飛びついた。その手には、『NERO CORE—DRIVERS for KAMEN RIDER』という文字が記された、古い紙質のファイルが握られていた。泊親子は苦笑を見合わせた。

「でもまずは、彼の復活を」

りんながそう言いかけた時、室内に呼気が響いた。

さながら鍾乳洞に迷い込んだ風のような荒い寝息は、機材に頭を預けたままに沈む剛のものだった。

「ちよつと、剛?」

眉をひそめた霧子が呼びかけると、本格的な眠りに没入する前に彼は覚醒した。

「ね、寝てない……寝てないよ!?!」

あわてて否定する。だがその目の下に色濃く残るクマは、積もりにも積もった苦労を察することができた。

「まさか徹夜したの!?! もうっ、若くないんだから無理しないで」

「だいじょうぶだし……まだ全っ然若いし!」

そんな風に姉に強がっていたが、彼自身を支える両脚はフラついていた。

「何しろ急ピッチだったからね。でも、おかげで集積の精度は上がったと思うよ」

西城究がマーマーマンションのぬいぐるみを代弁させるように前後に揺らしながら、口をはさんだ。

「今回はどんなアプローチでチェイスを復活させようとしてるんです?」

その人形をかがんでのぞき込んで、霧子は尋ねた。

「ギルガメッシュの本拠地を探り当てた時のプログラムを一部流用したの。やり方としては、一〇八体プラスチックアルファにあるロイミュードの中からあえて特定のナンバーを探るんじゃないかって、ドライブシステム

とロイミユード、両方の特性を持つデータをあらかじめ絞ってサルベージする。そうすれば、いくつかのプロトコルを省略できるし、確実性も増す」

「でもそれって、結局チエイイス以外も結構当てはまらないか？ ハートならまだしも……それこそギルガメッシュがよみがえる可能性だって」

「ギルガメッシュの基となっていたのは、あくまでゴーストドライバーのテクノロジー。ハートはあなたの、ドライブのデータと彼ら自身のコアそのものが基になっている。それらの条件を除外するようには、もちろんセットしてある」

進ノ介の危惧するところは、すでにりんな達によって検証済みだったのだろう。

すらりと出た答えに対し、進ノ介は肩をすくめてみせた。

「それじゃ早速うー！ 起動っ！」

酩酊したような呂律の回ってなきで勇むや、誰の準備も待たずに装置の起動ボタンを押した。

「ああっ！ そんないきなり〜！」

苦言を呈するりんなだったが、彼女もすでに整備は万端であったという自負はあるのだろう。制止の言葉に焦りはない。

……その、はずだったのだろうか、設備から過剰なまでのスモークが吹き上がった。

どひゃー！ と本願寺が飛び上がり、ほかのメンバーも大小の狼狽を見せる。

冷却装置が過剰に働いただけだとりんなが説明し、ようやく収束を迎え、面々はあらためて煙幕の中へ目を凝らした。

薄れゆく白煙の向こう側で、紫のジャケットを着込んだ、男のシルエットが輪郭を作りつつあった。

ギルガメッシュの、少年然とした華奢な影ではなかった。

ハートの王者たりうる堂々たる体軀でもなかった。

細身の、青年の影だった。

確信とも言って良い期待や、歓びとともに、細い脚から徐々に視線

を持ち上げていく。

「チエイ……ッ！」

眠気も一瞬で忘れたように、剛が表情を華やかせた。

「……なぜ……」

戸惑いながらも、明確に理性を持った声が聞こえてくる。

そして最後の霧が晴れた。

メガネ、ハンカチ、そしてマツシユルムカット。

「なんで私がここにいるんですかア〜!？」

肉体を得たそのロイミュードは、情けない悲鳴をあげた。

その日、世界は、静止した。

「まーた貴方たちですか……令和にもなつて何をやってるんだか……ってなんだかめつきり老けてませんか？」

動いているのは、そのロイミュード003……個体名ブレンだけだった。

「は、ハハハハ……まあ二度あることは三度あるってーかなんてーか……?」

再会すべき友人に今にも抱きつこうとしていた剛は、薄笑いを浮かべたままに白目を剥いた。そのまま仰向けに倒れた。

その衝撃音によって、堰き止められていた時間が一斉に動き始めた。

「ちよつと剛、剛!？」

「息してない! 剛君息してないよ!？」

「ふぎっけんな! なんでよりにもよってお前なんだよ!？」

「なんですすかいきなり!? 相変わらず理不尽で身勝手に意味不明な人たちだ」

「テメエそもそも仮面ライダーじゃねえだろ!」

「だーかーらー! 私も仮面ライダーになったんですってば!」

「ほら、返せ! 身体から離れろ!」

「冗談じゃない! こっちは合計でも数分程度しか活躍してないんだ

から！　せめて四十五分は……あ、剥がれた」

「あーあ……まだまだ先は長いわねえ」

「やっぱり小吉でしたねえ。いや私もね？　妻や娘たちと久々に温泉旅行行っただんですけどその時やっぱり小吉が出たんですけど」

「とまりーん！　事件だよー！」

「え!?　誰!?」

「僕だよ正夫だよ！　この間いつしよに戦ったんじゃない！」

「その英志に言ってもしょうがないだろ！　まあ詳しいことは言えん！　とにかく未来に來い！　ネオズンボガンボロイミュードに対抗できるのはお前だけなんだ！」

「ズンボガンボ!？」

「そう、ズンボでガンボでタイヘンなんだよ!？」

「ズンボでガンボ！」

誰かに、呼ばれた気がした。

ふと懐かしい、夢を見た。

夢の中で出会った彼らは相変わらず騒がしく、何を揉めているのかは分からないが、新しい顔も見受けられたがその明るさは変わらない。いい。

ひとまず彼はそのことに安堵した。これがメモリーの反芻現象が引き起こした幻であれ、正真正銘の現実であれ、彼が愛した人が、守ろうとした人々が、あの頃と同じ日々を送っている。そのことを、噛み締める。

そしてふたたび、まどろみに沈む。

だが、陽は明るい。その眠りは、浅いものとなるだろう。

目覚めの朝は、きつとすぐ……

仮面ライダー　NEXTジェネレーションズ

完

## あとがき

自分の考えをまとめるのが苦手という物書きにあるまじき欠点のために、あまりあとがきというものを書かない私ですが、流石に二年以上かかった作品に何かを書き残さないのもどうかと思い、最後の筆を執ります。

本作を書こうと思い始めたのは二年以上も前、エグゼイドの放送が始まったばかりでした。それこそジオウも令和も、欠片さえありませんでした。というかその前に書き終えるつもりで、最終決戦においても引っ張って来られてくるのは戦兎ではなくゴライダー時空からの永夢の予定でした。

きっかけとしては「プライベートで色々あつて「あ、俺もう物書きとして大成できねーわ」と悟ってしまったって、ならもういつそ好き放題書こうと思いました。そして、同様にトラウマから身を遠ざけていた二次創作もこれを機にやってみようと思った次第です。つまり、半ばヤケクソな状態から始まったわけですね。

とは言え中途半端に真面目だったために堅実な作品にしようと考えました。終わりを見越して構想を練りました。ドライブをメインに据えたのは、小説版もVシネマも出揃い、平成ジェネレーションズへの共闘も終わり、泊進ノ介役の竹内さんもブレイクして多忙になったしこれ以上の展開はないと考えたためでした。

……いやー、まさか今時分になって新展開が来たり現行作品でめちやくちや扱いがデカくなるとも思いませんでした……

ともあれ、ポツポツと書き始めたわけですが、予想以上に読んでくださった方が多く、反響もたくさん頂けたことでした。ふだんの自分からは考えられないぐらいレスポンスを貰えたことが、二年以上も続けられた活力となったことは疑いもありません。

もちろん、構成書いている最中もすべてが予定通りに運んでいたわけではありませんでした。

前述のとおりライブ感による加筆修正に加え、音声や設定のミス。多くの指摘を受けて、自分の甘さを痛感させられました。特撮番組と

いえど、二次創作といえど、侮つてはいけなかったのです。

だから多くの設定集やDVDを購入し、Amazonプライムなどで映像を何度も見直して勉強し直しました。

一昔前のやさぐれていた私はそれこそ当時の仮面ライダーの脚本に見当はずれも甚だしい苦言を呈することもありましたが、それは誤りだったと後悔しています。

他からの都合やアクシデントによって何度も手直しさせられ、二十年以上にわたる長い歴史を読み込まねばならず、その設定にしても何度も変わって矛盾だらけ。

それでも一週たりとも欠かさず、長年放映を続けていた製作陣の凄さの一端を思い知らされました。

まさしく瞬瞬必生の心意気。

今年の夏映画は、清濁併せ呑んで製作陣が溜め込んでいた感情を出し切った結果だと思えます。

まあそんな具合で苦労はありましたが、辞めたいと思ったことは一度もありませんでした。それは読者の皆様より常に暖かいお言葉を絶えず頂いていたおかげだと思えます。

二次創作に限らずそういう空気の中で執筆することは中々できないので、その一点に関してだけ言っても、私は恵まれていたと思えます。

しばらくはオリジナルの創作をメインにのんびんだらりと活動をしていく予定ですが、気が向いたらまた二次創作もしたいと思っております。

また、書いてる最中にそういう打診を頂きましたが、二次創作に關しましてあらためてリクエストやネタ提供等あれば、お気軽にご連絡くださいませ。

すべての期待にお応えすることは難しいかと思いますが、可能なかぎり応じさせていただきます。

それでは、また機会があればお会いしましょう。

あらためて、ここまでお付き合いいただきましたこと、深く御礼申し上げます。



本来飽き性な私が数年がかりで続けられたのは、皆さまのご声援あればこそです。

本当に、ありがとうございました。

大島海峡こと瀬戸内弁慶